KAIZO

改造

六月號

1930



改造六月號目次



改造六月號目次

暗黑なる議會の光景を前にして

ああ何と云ふ議會だらふ。喧噪以外に何の足跡も殘さないやうにしてとかく臨時議會はすんだ。そして豫算も議了され、義務教育費も政府の思惑通り增額された。ただ統帥權問題のみが政界の謎として殘された。財部海相の歸朝と共にこの問題で濱口內閣は一の脅威を受けやうと思ふが、しかしこうした問題を捉へて政權の移動を策するのは立憲政治の將來に對し、政黨政治の前途に對し面白くないことだ。失業對策とか、その他國民の眞の利害に卽して爭ふのならよいがこうした問題で政黨と軍部とが相策動するやうでは多數民衆は却つて反抗的に出づるであらふことを思はねばならぬ。

總體的に今の議會はバラック式議論のみだ。否な議會人の風格においてもそうである。我々は兩黨の元老とか、閣僚とかに經綸の閃きが乏しいから何れは少壯者の天下が近づくを思ふていた。ところがその少壯者なるものは功名に急なるが故に磨きがかからず、底力も威力も共に發揮されず。そして低調の野次に組するもの多かりしは議會政治の前途に一大暗影を投ずるものであつた。勿論濱口君の施政演說が內容空疎であり、そして失業對策の眞諦に何等觸れていなかつたのには失望惜く能はなかつた。而して犬養君と鳩山君の演說も何等の權威もなく、內容も空零で今更軍部の提灯持ちをして議會政治家として自殺したのは悲慘であつた。我々は政友會が軍閥政治への降伏を弔ふ前に濱口內閣は此際を期して飽くまで軍部大臣文官制へ突き進むべきであらふことを勸告する。しかしそれも望み得られぬことだ。かくして既成政黨は果して何處に行く。また現內閣の失業對策は今後いかに展開して行く。議會においての閣僚の應酬から推して何等まとまつた計畫があらふとは思はれぬのみならず、その答辯もただ單に反對黨の攻擊をきりぬけんがためとのみ見られた。我々は議會の答辯は眞に國民にもの言ふつもりで眞摯と懇切でなければならないと思ふ。そして哀れな失業者に對する心持の表徵でなければならぬことを思ふ。我々の見たる議會には「偉」を以つて形容する姿もなく、「純誠」の現れもなく、「淸鮮木强」の發露もない。そして野黨には經綸の見るべきなく、奇矯、低劣、自己の廣告以外の何者もない狀態である。かくして議會政治の信望を失墜し、民衆よりの信賴は地を拂ふに至るのだ。兩者の無責任、なすり合ひ、無能裡に失業群はいよ〳〵倍加して救ふべからざる深間に這入り、不景氣は募るばかりで遂に二進も三進も追ひつかぬ闇路に陷るのだ。民衆はこの暗黑なる議會の光景を前にして何處に光を求めんとする。



沒落への轉向期に立つ日本資本主義

猪俣津南雄

一、戰後金輸出禁止中の發展の諸特質

(1)「安定」の型の特殊性

世界戰爭後の日本資本主義經濟は、大正九年の恐慌と震災とにも拘らず、十一年から十五年にかけてその生產及び貿易の增加を續けて遂に戰時の最高水準を拔き、緩漫ながらもたしかに上昇的な發展の線をゑがいてゐた。だが、その發展のうちにすでに昭和二年の金融恐慌は胎まれてゐたのである。「未曾有の大恐慌」の衝擊は、上昇運動をうち挫いた。その後の三年間において生產及び貿易が再び上昇的傾向を現はすに至るや否や、日本資本主義經濟はまたもや「解禁」恐慌の混亂に陷つたのである。

一九二四年（大正十三年）以來の世界資本主義は、戰爭直後の極度の動搖と混亂とからの一應の恢復を意味するところの諸徴候を現はしてきた。この現象を吾々は「相對的安定」と呼んだ。全體としての資

本主義の相對的一時的な安定化の過程は、諸國の資本主義をして種々なる安定の型をとらしめた。

資本主義日本は、戰爭による直接の破壞を免がれたばかりでなく、却つて戰時需要に對する獨占的供給者の一としてその生產力を異常に增大させた。戰爭直後の恐慌期には他國の如き激甚な震撼をうけず、その後においても、貿易關係の最も緊密な米國、支那、印度、及び南洋諸國が戰禍の外に立つて多かれ少なかれ購買力を增大してゐたのに加へて、從來日本資本の競爭者たりし英獨その他の資本がその競爭力を減じてゐたために、貿易及び生產の恢復は比較的急速に行はれ、歐洲諸國のそれらが漸く戰前の水準に達した時に、早くも戰時の最高水準を取戾したのであつた。——かゝる一面をさして吾々は、日本資本主義の「安定」の型の積極面と呼んだのである。（拙著「現代日本研究」第一章）

しかしながら、かくの如き上昇運動は、特殊の諸矛盾とその加速度的な深大化とを伴はずして進行し得たのではない。吾々は、そこに、安定の型の消極面をはつきりと認識したのであつた。

戰時日本の「繁榮」の源泉であつた尨大な戰時需要——社會的には全く虛僞の市場——が、「平和」到來の日に突如として消え失せるや否や、戰時における急激な蓄積の結果異常に膨脹した日本資本の巨大なる一部分は忽ち過剩資本と化した。過剩資本とは、立派な生產手段——生產設備——でありながら資本家的「採算點」においてはもはや運用され得なくなつた部分の資本のことである。大正九年の恐慌は、戰後市場の急激なる收縮によつて生じたところの、生產設備と市場との間の巨大矛盾をば、暴力的に解決せんとしたものである。言ふまでもなく、生產設備——過剩資本——そのものを破滅せしめることによつて。

ブルヂョアジーは、大衆の消費力を增大せしめることによつて市場を再建することは出來ない。それによつて、既成生產手段・生產設備を活かし、過剩資本の「過剩」性を無くすることは出來ない。そこで彼等はどうしても資本そのものを切り捨てねばならなかつた。彼等はどうしても急速に資本を「整理」しなければならなかつたのである。

しかるに、資本の急速な整理を敢行することもまた日本ブルヂョアジーにとつては不可能であつた。どうしてか？

（一）戰時における飛躍的發展の結果、日本工業の生存と繁榮とは、主として輸出の增大によつて確保されねばならなくなつてきた。從つてブルヂョアジーは、戰後世界市場の大收縮にも拘らず、輸出能力を維持し擴大するために有らゆる努力を捧げねばならなかつた。そこで彼等の資本家的意識においては、過剩資本の「整理」によるよりはむ

しろ海外の既得市場の維持と新市場の征服とによつて矛盾を克服し得るかのやうに思はれたのである。

(二)加ふるに、戰後における帝國主義の新しき對立關係は、帝國主義日本の兵器・軍艦・戰需品の自給自足——一口に言へば工業の「軍事的獨立」——を必要ならしめた。從つて帝國主義ブルヂョアジーは、軍事的諸工業の生産能力は理が非でも維持しなければならないと考へた。

もちろん、輸出能力、及び軍事的諸工業の生産能力の維持・擴大は、必ずしも資本の「整理」と矛盾するものではなく、「整理」によつて却つて促進されることさへあり得るのだが、しかし當時における急速なる整理とは明らかに矛盾したのである。何故といふに、

(三)戰時における資本蓄積は、一般に固定資本を急激に增大せしめ、殊に、固定資本の大なる鐵鋼業、造船業、機械工業、化學工業、軍用工業を急激に膨脹せしめたが、固定資本の割合が增大しただけそれだけ、生産手段——特に生産設備——を縮少して市場の收縮に適應せしめることは至難となつたからである。

(四)最後に——最も重要なことだが——固定資本の增大と直接に關聯して、銀行資本と産業資本の融合——即ち資本の金融資本化が、極めて急激に、そしてそれだけ一層無政府的に行はれた。しかも戰時における此の發展の過程は、かの豫想された利得の資本化によつて生ずる擬制資本の驚くべき膨脹——あの狂熱景氣時代の會社の株や「資産」や株券類似の有價證券や地主の土地財産などの大なる部分のやうな一切の紙上の富の大膨脹——と結びついてゐた。そしてその紙上の富の基礎のうへに、銀行信用一般の膨脹のみならず、特に尨大な「固定貸附」がつくり出されてゐたのである。戰時において急激に蓄積された資本——わけても固定資本の巨大なる部分が、一朝にして過剩資本と化した時、その急速な切り捨てや「整理」は如何なる結果を生むであらうか？ それは、擬制資本並びに信用一般の急激な大收縮によるカタストロフ以外のものではあり得ない。たとひそのカタストロフを經濟恐慌の範圍に喰ひ止め得たとしても、金融資本は尨大な「固定貸附」を喪失したであらう。そしてそれは無準備の金融資本の堪へ得るところではなかつたのである。

これらすべての理由によつて、過剩資本は存續せしめられねばならなかつた。大正九年の恐慌は、過剩商品はこれを暴力的に處分したが、恐慌過程がヨリ深く進んで過剩資本の暴力的處分に及ばんとするや、ブルヂョアジーは有らゆる阻止的手段によつてそれを喰ひ止めた。破産に瀕した多數の銀行・會社は「救濟」された。輸出能力を失つた諸事業は種々なる名目の下に輸出奬勵金が與へられた。就中、金輸出禁

止が繼續されたのであつた。

　だが、かくして過剰資本を持ち越したことは、何を意味したであらうか？ それは先づ異常增大したまゝの生產設備と、甚しく收縮した市場との間の深大矛盾――一層根本的には生產力と消費力との間の深大矛盾を、持ち越すことを意味したのであつた。卽ち、恐慌の實體そのものを持ち越すことを意味したのであつた！

　この基本的な矛盾と共に更に二重の矛盾が持ち越された。利得能力を喪失した資本――過剰資本――と、利得能力の豫想に基づいて膨脹したまゝの擬制資本との間の深大矛盾、並びに、この擬制資本の基礎の上に膨脹したまゝの信用・「固定貸附」との間の深大矛盾が卽ちそれである。そして此の矛盾を持ち越したことは、とりも直さず金融恐慌の實體そのものを持ち越したことではないか?!

　大正九年以來の日本ブルヂョアジーは、天來的な「景氣の再現」を夢見つゝ、これらの矛盾を辻褄を合はさうといふ不可能事に向つて有らゆるブルヂョア的努力を集中したのであつた。彼等の目指すところは恐慌の克服にあつた。だが、彼等の一切の努力の下に、彼等による「恐慌克服の過程」において生じたところの、大正十年――十五年の日本資本主義經濟の緩漫なる上昇運動は、まさにそれらの既成の深大矛盾をばます／＼激化せしめて遂に爆發に導く過程に外ならなかつたのである。

(2) インフレーション政策の破綻と金融恐慌

　恐慌への爆發を抑止せんとする努力において、日本ブルヂョアジーのとれる諸々の手段・方法――(一)輸出獎勵金、(二)保護關税の引上げや「國產獎勵」、(三)資本家本位の減税や免税、(四)大規模の土木事業や鐵道建設、(五)わけても金輸出禁止の繼續、並びに(六)郵便貯金の流用や政府及び中央銀行の保證や公債政策やその他有らゆる手段による資本家「救濟」、――これらのすべては、デフレーションを阻止し、インフレーションを助成して、社會的基礎なき架空の景氣をつくり出した。（震災さへが、過剰資本の所有者を――「震災手形」の名の下に――救濟する機會に利用された！）。

　社會の消費ではなく、自己の利潤を目的とする資本家階級は、爭つて政黨・××を利用し、動かした。買收、收賄、瀆職、等、等、一聯の政治疑獄の如きは、たゞ、そのことの表層的・法律的な現はれにすぎない。

　かくて、インフレーション政策による物價の高位と架空の景氣の刺戟の下に、資本は新投され、生產の規模は增大し、過剰資本に過剰資本が累加されていつたのである。そして其の基礎の上に擬制資本は膨

脹し、それと共に信用もまた膨脹の勢をつゞけたのである。全國會社の拂込資本金は、大正八年の六十億圓から、七年間に二倍して、大正十五年に百二十億圓となり、東京取引所の株式賣買高は、大正十年の三十四億圓から、大正十五年の四十六億圓に增加した。全國普通銀行の貸出高は、大正十年の六十億圓から、大正十五年の九十億圓に增大した。東京諸銀行の貸出高は、二十三億から二十九億に增加したが、同時に貸出に對する預金の割合は九五%から七九%に低下した。

同時に一方、夙に利得能力を喪失して「整理」さるべき多數の資本家諸企業は、負債の上に新らたなる負債を積み重ねて餘命を長らへた。それと共に銀行の「固定貸附」は、絕對的にも相對的にも增大したが、この種の貸附の多大なる部分は、インフレーション政策の不可避的な行詰りと共に、そしてその必然の結果たる「不良」諸會社の破綻と共に、きれいに「氷結」すべき運命にあつたのである。

が、かゝる間にも、生產及び資本の集積・集中と、カルテル化と、全面的な獨占化の運動とは、字の如く急速に進展した。また、强力な產業資本及び巨大金融資本は、自己所屬の諸企業の「合理化」をいち早く遂行しつゝあつた。

所詮すべての過剩資本の存續することは不可能事だとすれば、他を倒し、他を滅ぼして自己を發展せしめんとする資本家相互の鬪爭は、今や最も激烈でなければならぬ。だが、此鬪爭における「黃金色に輝ける」勝利の榮冠は、コンツェルン型の巨大金融資本に歸せずにはゐなかつたのである。彼等は、その掌中にある一切の勢力を動員し、或は引受社債や持株の壓力により、或は買收や併合により、或は割引拒否や貸出打切りやコール引上げの威嚇により、或はその獨占的「商權」によるボイコットや閉め出しや「にらみ」により、或は自己所屬の產業諸企業のいち早き「合理化」により、――その他一切の經濟上及び經濟外の壓迫と妨害と誘惑とによつて、着々としてその支配權を全企業の上に押し擴げていつた。架空なインフレーション景氣の利得は、資本家階級の多數にとつてさへ、架空に近かつた。なぜなら、その利得の大半は、巨大コンツェルンの銀行部門の活動と、商業部門の活躍と、どの部門かがやる株界の操縱とを通じて、きれいに金融資本に占められたからである。そして、「事業家」達が「銀行屋さん」を蔑んでゐるうちに、巨大金融資本は容赦なく××との融合を深めて行き、すべての××政策の決定權を握つてしまつた。

けれども、資本家保護・救濟の諸政策によるインフレーション景氣の下に、一方には集中・獨占化と、强大資本による合理化と、金融資本による制覇の過程とが進みつゝも、他方には過剩資本に過剩資本が累加されて行けば行くほど、縮少した市場と膨脹する生產力との間の矛盾

はます／＼激化せざるを得なかつた。

大衆の消費力はおとろへた。

強大資本による企業の集中化や合理化が進めば進むほど、中小資本家は倒產し、小生產者達は大量的に沒落し、勞働者の失業は增大した。勞働者農民大衆の犧牲において遂行される「恐慌克服」の企圖、——その必然的な現はれとしての「資本攻勢」は、勞働者階級が好景氣時代において辛うじて戰ひ取つた僅かなものを悉く奪ひ去り、勞働條件や賃銀を再び半植民地的な水準に引下げた。資本家的輸出能力の維持・擴大と、帝國主義的軍事工業の維持・擴大と、過剩資本を擁する資本家の保護・救濟とのための、一切の費用は、たゞさへ尨大な帝國主義の負擔を擔つて全租稅・官業收入の七割を拂ふところの大衆の肩に加重されてきた。そして關稅の引上げと、獨占價格と、インフレーション物價と、肥料その他の農民の生產手段の價格を高かめ、一般大衆の生活必需品の價格を釣り上げた。さらぬだに窮乏の大衆は、かくして全く搾りつくされんとし、多數の——日本において特に多數の——小利子衣食者層もまた、好景氣時代に貯め込んだものを失ひ始めたのであつた。

國內市場の涸渇化にかてゝ加へて、海外市場の困難が增大した。世界資本主義の相對的安定化につれて、英國及び獨逸の資本は、日本資本に對する競爭力を回復したし、米國もまた力強く輸出貿易に進出した。競爭の激化に加へて、日本商品の最大市場の一たる支那においては澎湃たる打倒帝國主義の革命運動が進展し、「日貨排斥」の旗幟は高々とかかげられた。その他、印度、エジプトの動亂、カナダ、濠洲の不況、等、等、等。

しかるにまた、金輸出禁止の政策そのものが、必然的に貿易に及ぼす「弊害」は着々として現はれて來た。爲替の變動、圓の下落、輸出の利益減少、際限もなき入超の連續、在外正貨の減少と國際的信用の低下！

爲替相場は、震災及び次年の著しき入超のため、釣瓶落しに四十弗以下に墜落し、以來甚しき變動を續けて大正十五年に及び、一時は三十七弗半にまで落ちた。圓價の下落による莫大な貿易上の損失は、大部分、種々なる手續きによつて結局××の××に轉化され、その購買力を弱めるのだが、すくなくとも一應は資本家の利潤をも減ずることは爭へぬ。爲替相場の逆調は、輸出を促進したとはいへ、日本紡績業の如く原綿を輸入するものにとつては、「原料が高いものにつく」のをどうすることも出來ず、結局利益率の減少となる。だが、これらにも劣らぬ「弊害」は、爲替相場の變動常なきことにあつた。そのために、貿易上の直接取引はもちろん貿易關係の國內取引までが、「安定」を缺

き、萎縮することにあつた。かゝる現象は、就中、重要商品の輸出入の六割を獨占するところの、金融資本コンツェルンの貿易商業部門――三井物産、三菱商事、等――の大きな算盤に大きく響いたことは言ふまでもない。

金輸出の禁止は、圓價の下落、爲替相場の變動を激甚ならしめたのみでなく、多額の正貨の國內保有により、日本物價を國際的平準よりも遙か高位に維持して入超を助成した。例外的な入超を惹起した震災年度及び次年度を除外するも、毎年平均三億二千萬圓の入超は大正九年以來繼續して大正十五年に及び、右の二ヶ年分をも加へれば累計二十七億七千萬圓に達した。從つて、貿易外の收支をも含めた國際貸借上の總收支もまた、年々支拂超過を續け、大正九年より十五年までの支拂超過累計は實に二十億圓以上に達した。そこでまた、有名な「在外正貨」も、外債募集による補充にも拘らず、內地への正貨現送と相俟つて年々著しく減少し、大正十五年には――大正八年の十三億圓餘に對して――僅か二億圓に過ぎなくなつた。國際的信用の保證だと言はれたものが、今や不信用の表象と成り果てたのである。

かやうにして、過剩資本に過剩資本を累加せしめるインフレーション政策の下に、國內市場はいよく搾りつくされんとし、貿易上の諸困難もますく增加して遂に海外新市場征服による輸出能力の維持・擴大の夢想が裏切られてくるにつれ、生產と市場との矛盾――即ち生產過剩それ自體は、加速度的に增大し、さきに潛在的なものと化して持ち越して來たところのそれは、今や却つて擴大されて現實的なものに再轉化せんとするに至つた。かやうに現實化せんとするまでに增大したる基本的矛盾の捉へるところとなつた資本主義的生產に對しては、インフレーション的な諸刺戟はもはや効なきものとなつてきた。かくて、爲替相場の回復し始めた大正十四年はすでに、通貨及び信用の膨脹傾向の繼續にも拘らず、遂に決定的な物價下落の開始を見るに至つたのであつた。

第一表　日銀物價指數（毎年平均を示す）

		對前年增減率
大正十三年	二一七・三	三・七%（增）
大正十四年	二一二・二	二・三%（減）
大正十五年	一八八・二	一一・三%（減）

大正十四年から十五年にかけて生じたところの、一一・三%といふかなりの物價下落は、資本家諸企業の利益率をもかなりにひどく引下げずにはおかなかつた。全國事業會社全體の平均利益率は、八・五%から七・九%に減少し、工業會社のそれは、一六・七%から一一・六%に減少し、わけても紡織工業や飲食物工業のそれの如きは、次のやうな激

減を來たしたのであつた。

第二表　全國會社の利益率（各部門の平均を示す）

	纖維工業	綿絲紡績業	飲食物工業	工業會社全體	事業會社全體
大正十四年	二・六六割	三・三五割	二・四一割	一・六七割	〇・八五割
大正十五年	〇・九六	二・三一	〇・九〇	一・一六	〇・七九

備考、「事業會社全體」の數字の外は、いづれも十四年は上半期、十五年は下半期の數字を示す。

引續いての通貨及び信用膨脹がある際に、工業資本の利益率は生產過剩のためにすでにかなりの減少を來たしたとすれば、資金需要の減退を通じて信用は收縮し、金利は低下し、且つ銀行利益率もまた減少すべき筈であつた。然るにインフレーション政策は尙ほ最後に演ずべき曲藝を持つてゐた。物質的生產に對してはすでに刺戟力を失つてゐたインフレーションは、今や何事をしでかさうとしたか？　產業資本部面よりの資金需要の減退によつて助成された金融緩漫化と幾らかの金利安とは、「片岡藏相の積極政策」と共に、投機を刺戟して「證券景氣」をつくり出したのである!!　そこで、大正十一年以來、每年二億圓程度の稍々緩漫な增加を續けてゐた普通銀行の貸出は、十四年には五億四千萬圓を增加し、十五年には更に四億圓を增加して、花々しくも膨脹の最後を飾りつゝ、銀行收益率の增加をすらも實現した。

株式取引所のすばらしい景氣と銀行資本の活躍とにも拘らず、物價は落勢をつゞけ、商品市場は崩れて行つた。「事業」資本の利益率は低落したが、その低落に比較して金利の低落は微少であつた。利子の負擔が相對的に重くなつただけそれだけ、過剩な「事業」資本の利得能力は更に一層減殺されて來た。かうした利得能力の減退や喪失が、まさに最廣汎な範圍に及ばんとした恰度その時に、本來はその減退や喪失に比例して縮少する筈の擬制資本と銀行信用は却つて最後的な膨脹を遂げ、多大の「固定」を含む貸出の總額は預金の總額を超過すること實に二五％にも及んでゐたのである。全資本主義經濟の土臺を形づくる生產資本層の、破產に瀕した一角が倒れるや否や、膨脹し切つた金融の上部構造は爆音高く崩壞するであらう。矛盾は、爆發點に近づいた、――そしてインフレーション政策そのものをさへ「暴力的」に埋葬すべく、たゞ何等かの導火線を待つてゐた。

しかるにまた、悉く××の××において遂行されたインフレーション政策の下に資本家的利得の大半をさへ吸ひ取つてゐた支配的金融資本は此の時までにすでに經濟の各部面における自己の繩張をしつかりと固め、恐慌の衝擊に堪へ得るだけの準備を遂げてゐたのである。從つて彼等は今や、自己の競爭者等の側にある總べての過剩資本の掃蕩を強行すべく、たゞ然るべき機會の到來を待つのみであつた。さきには自分自身の防衞と利得と發展とに役立つたインフレーション政策の

諸武器は、もはや彼等にとつて無用のものとなつたばかりでなく、今はたゞ彼等の競爭者の防衛に役立つのみで、自己の發展にとつては最大の桎梏と化したが故に排斥すべきものとなつてしまつた。かくして金融資本は、「緊縮！」のスローガンを投げた。「徹底的整理！」のスローガンを投げた。「金解禁！」のスローガンを投げた。デフレーション政策への意識的轉向は遂に來た。

だが、かゝる場合に、資本主義そのものの×××性がヨリ强力に發動せずにゐる筈はない、激發せずにゐる筈はない。

一面においては金融資本のスローガンに唱和して「財政政策における緊縮主義」を聲明しながらも、「空前の大膨脹」をなせる豫算案をつくつて「證劵景氣」を煽つた若槻内閣の片岡藏相は、一方では正貨現送を開始して金解禁準備を進めながら、他方では金利の引下げ（！）を劃策した。資本主義の×××性の發展としてすでに爆發點に近づいてきた深大矛盾の中を右往左往してゐた片岡藏相等は、まさに混亂の八方美人主義に陷つてゐたのである。彼等もまた金解禁を意圖し、「整理」を企圖したにはしたが、政黨政治家としての彼等の企圖した「整理」は、支配的金融資本の意圖した整理とは少しばかり違つてゐた。彼等が企てたのは、彼等の救濟せんと欲する者を救濟してからの「整理」であり、景氣を出してをいての金解禁であつた。大正十五年十月、若槻内閣は遂に日銀の利下げを敢行した。しかし、「市中銀行」を追隨せしめることは出來なかつた。此の時にすでに若槻内閣及び日銀は、一つの意味において「統制力を喪失」してゐたのである。

金融恐慌の導火線は與へられた。昭和二年二月の四國地方の銀行の取付を端緒として、三月の東京四銀行の破綻休業から京濱諸銀行の一齊取付狀態となり、鈴木コンツェルンに對する臺銀の新規貸出中止は、取引所ガラを惹起した。

支配的金融資本の意思に反して低金利政策をとり、彼等の意思に從つて鈴木＝臺銀の「整理」を敢行し得なかつた若槻内閣は、倒れねばならなかつた。十五銀行の休業、——パニック!!

昭和二年金融恐慌は、かの、大正九年以來持越されてインフレーション政策の下に擴大再生産されたところの二重の矛盾、特に利得能力を失つた生産資本と利得を要求する擬制資本＝貨幣資本との間の特殊の矛盾の不可避的な爆發であり、ブルジョアジーによる恐慌克服の一切の努力の强制的淸算であり、その意味においてインフレーション政策の「暴力的」な埋葬であり、更にまた、支配力ブルヂョアジーによる、デフレーション政策への意識的轉向の企圖の美事な失敗を意味した點においても、資本主義の×××性の完全なる勝利に外ならなかつたのである。支配的金融資本すらが、全國的取付のまへに戰慄したではないか。

(3) デフレーション政策への轉換——金解禁

國内の消費力が尙ほ好景氣時代の餘勢を持ち、海外市場の諸困難もそれほどでなかつたあひだは、インフレーション主義は——それ自身いかに矛盾に充ちたものでも——「恐慌克服」を夢みる日本ブルジョアジーの政策となり得たが、此の政策の大團圓として金融恐慌が荒れ狂つてから後は、インフレーションはたゞ「必然惡」として、うち克ち難き災害としてのみ、支配的ブルジョアジーの前に現はれた。彼等がそれを利用して幾らかでも儲けたとすれば、それは彼等が轉ろんでも只起きまいとしただけのことである。また、言ふまでもなく、恐慌それ自體から生じた莫大な損失と、その「余燼」としてのインフレーションから生じた劣らず莫大な社會的損失とは、悉くこれを勞務者大衆と弱小資本家とに轉嫁することをも、彼等は決して怠らなかつたのである。恐慌の火の手の消防と、類燒銀行の「救濟」とのためにバラ撒かれた七億圓の「特融」が、何人の負擔においてなされたかは、余りにもよく知れわたつてゐる。吾々の分析は、此の「特融」と關聯して生じたところの預金の大銀行集中化と、「變態性金融緩慢」とに卽して進むであらう。

昭和二年八月の「エコノミスト」は書いてゐる、——『恐慌以來、重要都市における銀行別貸金勘定が絕對秘密に附せられてゐるため、右の動靜を詳にするを得ないが、三菱、三井、住友、第一、安田の如きが非常の預金增加を來せること明らかであつて、これ等は時には一日一行一千萬圓を增加したと傳へられ、三菱の約一億四五千萬圓、住友の約九千萬圓、三井の約七千萬圓、合計三億圓で、これに第一の六千餘萬圓（東海銀行合併による預金增を除く）、安田の六千五百萬圓等を加算すれば、大凡四億三千萬圓といふ莫大な預金が、恐慌後の三ヶ月間に集中されたと傳へられてゐる。』

事實において昭和二年末の五大銀行の預金は、——全國普通銀行の預金總額が一億圓の減少を見たにも拘らず——約六億圓の激增をきたして二十八億二千萬圓となつた。これにともなつて、總預金中に五大銀行預金の占める割合は、前年末の二四・七%から、三一・六%に增大したのであつた。かくの如き預金の大銀行集中化の運動は恐慌後引きつゞいて昭和三年から四年に及んだ。

第三表　五大銀行の預金增加

	全國普銀	五大銀行	五大銀行の占める割合
	百万圓	百万圓	%
大正十五年末	九、〇三一	二、二三二	二四・七
昭和二年末	八、九〇六	二、八一七	三一・六
昭和三年末	九、二一五	三、一二九	三四・〇

昭和四年末	九、二一三	三、二〇九	三四・七
大正十五年末に比較した增加	一八二	九七七	四一・七

同樣の傾向は、五大銀行に次ぐ二三流の大銀行についても見られるのだが、かゝる運動はもちろん弱少銀行の犧牲において行はれたものである。その結果は次の如く、手形交換所に加盟を許されぬ大多數の小資本銀行の預金の著しき減少となつた。

第四表　交換所に加盟せざる銀行の預金の減少

	全國普銀	交換所に加盟せざるもの
昭和二年末	八、九〇六（百万円）	四、一四三（百万円）
三年末	九、二一五	三、八五四
四年末	九、二一三	三、七八七
二年末に比較した增減	（增）三〇七	（減）三五六

かやうに、資本主義社會においては、戰爭が成金をつくるやうに恐慌も成金をつくるのだが、恐慌成金としての大銀行は更にその激增した勢力をもつて、買收・合併・統制の集中化運動を優勝的に推し進めた。（一）金融恐慌後著しい開きを生じた力關係の下においては、大銀行の系統銀行とならずに孤立してゐることをますく不利ならしめたが故に、（二）恐慌後特に金融資本のために制定された「新銀行法」は、銀行資本金の最低限度を法定して事實上小銀行の合同又は解散を強制する基礎を與へたが故に、（三）そして休業諸銀行は端的に合併を強要され、「特融」を受けた銀行の多くは整理・合併を條件とされたが故に、——金融資本による支配の擴大・強化の運動は異常な高速度をもつて進展したのであつた。そして此の運動の進むところ、銀行の債務者たる諸々の事業會社をもまた、整理・合併・集中化の嵐の中に捲き込まずにはゐなかつたのである。金融恐慌は、或る程度まで產業恐慌の役割をも果した。

「恐慌對策」としてのモラトリアムや「特融」が、金融資本のために如何なる働きをしたか見よ。「特融」のうち、實際に預金者に支拂はれた部分は、少額で、遙か多くのものは、弱小銀行の強大銀行に對する債務の返濟にあてられ、忽ち大銀行の預金に早替りした。「特融」は、大銀行の手にあつた危險率大なる貸附金を、日銀の貸附金に振りかへて、危險と損失とを、大銀行の負擔から政府の負擔に——即ち稅金を拂ふ大衆の負擔に——置きかへたのだ！「特融」の働きは大銀行の手に預金を集中させ、強大銀行による弱小銀行の整理を強行せしめ、強大銀行の不良債權の損失を民衆に轉嫁して、強大銀行の地位と基礎とを更に強めてやつたのだ。先づ強大銀行を安全地帶に置いてやつたのだ。

が、それと共に、日本銀行は、市中銀行に對する『統制力を喪失』した。「エコノミスト」は、『今日の日銀は、一方に於いて不良銀行の整理機關であり、他方市中大銀行の預金保管所と化し、通貨管理の重責を行ふ中央銀行としての存在ではない』と書いたが、これは、本質的にはとくに支配的金融資本の一機關と化してゐた日本銀行が、たまく恐慌の非常時に「中央銀行」といふ假面を脫がねばならなくなつたものに過ぎない。大銀行は、それで滿足することは出來なかつた。彼等は、手に入れた莫大な預金を利殖するために、更に日銀に二億圓の手持公債を賣り出させたのみならず、政府に三億五千萬圓の公債を發行させた。そして傳統的なインフレーショニストたる政友會の政府は、喜んで御用を勤めたのであつた。彼等は更にまた、今こそ諸會社は高利の負債を低利の社債に借りかへる絶好の時機だと宣傳した。そこで諸會社は盛に社債を起こし、大銀行と信託は爭つてこれを引き受けた。大阪市電氣事業債の七千三百萬圓の如きは、三井銀行一手引き受けで、二圓餘のプレミアムまでついた。かくて、昭和二年下半期の債券發行高は、前年同期のそれに比して次の如く激增し、發行高の新記錄をつくつた。

第五表　昭和二年下期債券發行高の激增（單位百萬圓）

	大正十五年下期	昭和二年下期	比較增
國債	一二八	三四八	二二〇
地方債	一〇一	一九〇	八三
銀行債	一〇四	一七七	七三
會社債	一九四	三〇二	一〇八
合計	五二七	一、〇一七	四九〇

かくして、昭和二年末の銀行——東京交換所全國組合銀行——の所有する有價證券は、恐慌前の二月末に比して三億二千四百萬圓を增して二十三億六千餘萬圓となつたが、この總額の六一%は十二大銀行の所有に屬し、うち四二%は五大銀行に占められたのである。大銀行所有の有價證券は、更に、昭和二年以後も次の如く增加して昭和四年に及んでゐる。

第六表　銀行手持有價證券の增加（單位百萬圓）

	交換所組合銀行（全國）	十二大銀行	その占める割合	五大銀行	その占める割合
大正十五年	二、〇二五	一、〇二七	五〇・七%	六四一	三一・七%
昭和二年	二、三六八	一、四四六	六一・一	九九七	四二・一
昭和三年	三、〇七七	一、八九〇	六一・四	一、三一四	四二・七
昭和四年	三、二四三	一、九八六	六一・二	一、三五九	四一・九

しかしながら、如何に巨額の公債・社債の發行をもつてしても、預金の洪水をどうすることも出來なかつた。大銀行の手に集中された尨大な預金は、一の潜勢力として大銀行を强めたにしても、同時に利子の負擔をひどく增大した。彼等は、巨大な預金を持てば持つほど、その捌口として安全・有利な貸出をます〱增加させねばならぬ。然るに、恐慌は、舊貸附の整理・回收を强行させたばかりでなく、新規貸の有らゆる危險を尖銳化し、且つ商品取引を極度に萎縮せしめて割引手形類を激減させたそのうへに、臺銀そのものと共にコール市場を甚しく收縮させたから、銀行の貸出は、增加どころか、必然的に却つて激減しなければならなかつた。即ち、全國交換所組合銀行の貸出總高は大正十五年末の六十一億七千萬圓から、恐慌後の昭和二年八月には五十億に激減した。此の十一億七千萬圓の減少のうち、六億圓は割引手形の、約三億圓は手形貸の減少である。

五大銀行は、他のすべての銀行の犠牲において、貸出すらの絶對的增加をかち得たが、しかし、その相對的減少はひどかつた。

第七表　五大銀行の貸出の相對的減少

	A 貸出	B 手持有價證券	C 現金及預ケ金	D 預金	ABC合計中にAの占める割合	Dに對するAの割合
大正十五年	百萬圓 一、八七八	六四二	三〇六	二、二三一	六九%	八四%
昭和二年	二、〇三三	九九八	三八〇	二、八二七	五九%	七一%

即ち預金に對する貸出の割合は八四%から七一%に減少し、全資金のうち貸出に運用される部分——即ち最も利益多き部分——の割合は、六九%から五九%に減少した。

預金の激少と同時に生じた貸出の減少!!この大きな矛盾は、金融恐慌とそのブルヂョア的克服たる「特融」とがつくり出されたところの、新しき矛盾である。

金融恐慌は、擬制資本=銀行信用の膨脹を『暴力的』に收縮せしめ、それによつて、此の膨脹と、利得能力なき生産資本との間の矛盾を解決せんとした。此の恐慌過程の進行を、自分本位の「特融」によつて阻止せんと企てた支配的金融資本は、まさにその企ての故に生じた新しき矛盾——彼等の謂ゆる「變態性金融緩漫」——に惱む自己を見出した。「變態性金融緩漫」——それこそ、端的に、銀行そのものゝ利益率の減少を意味したのであつた。彼等は、此の矛盾、此の金融緩漫の克服に向つて有らゆる努力を傾注した。わけても貸出の增加を目指す彼等の競爭は激烈を極めた。が、それが激烈であればあるほど、彼等の金利は低落した。彼等は、預金利子の引下げによつてこれに應へはしたが、預金の累增にも拘らず貸出は減少乃至停滯し、利益はますま

す減少するのをどうすることも出來なかつた。

第八表　五大銀行の貸出

昭和二年末	2,021 百萬圓
三年末	2,012
四年末	2,080

第九表　五大銀行の純益金の減少

三年上	24,501 千圓
三年下	22,202
四年上	21,320

だが、「變態性金融緩漫」の矛盾は、強大銀行と弱小銀行との關係において最も尖鋭にあらはれた。

弱小銀行は、預金の喪失がひどかつたのみでなく、貸出の減少は更に激烈で、強大銀行の場合とは比較にならぬ。交換所々屬外の銀行の貸出は、昭和二年末から昭和四年末の二ヶ年間に八億圓、──二〇%──を減じた。此のことの最重大な意義は、言ふまでもなく、廣汎な中小商工業者層がにはかに金融の道を斷たれ、極端な資金の涸渇に突落されたことにある。しかもそれが、強大銀行界における極度の金融緩漫・金利低下と並んで生じたことにある。一方には貸附資本に對する飢餓、他方には貸附資本そのものの過剩、──此の驚くべき矛盾は、實はたゞ、一方には大衆的飢餓を、他方には生産過剩をつくり出すところの資本主義的發展の根本法則が、たま〳〵さうした形態をとつて最尖鋭に現はれたものに過ぎぬとはいへ、金融恐慌によつて激成された此の矛盾は、銀行資本の利益率の減少と、廣汎な小ブルヂョア層の沒落といふ二重の新しき要因の作用を通じて、デフレーション政策への轉換を字の如く不可避ならしめた。大正十四五年にすでに始まりかけてゐた小生産者等の大量的沒落は、今や、恐しいテンポで進行し始めたのである。

だが、デフレーション政策への轉向がます〳〵必要となつて來た恰度その時に、「特融」主義によるインフレーションは却つて發展した。「特融」を締切る昭和三年五月に近づくや、特別融通の要求は激增し、『變態性金融緩漫』は一層甚しくなつた。危險率の最大なる中小商工業者金融を政府で引受けて、銀行が負ふべき危險と損失とを民衆に轉嫁せんとするところの、預金部低利資金の活動は、更に金融緩漫を助長した。しかるに一方、公債・社債の發行は次第に限度に近づいてきた。そこで、銀行は、放資の方向を株式に轉じた。金融景氣は、「公・社債界」から「株界」へと移行してそこに賑かに發展した。かくして、昭和二年末から三年にかけて起つた取引所景氣は、──三年七月のガラで終熄したとはいへ、──恐慌以來の爲替相場の下落と相俟つて、多かれ少なかれ內地物價の落勢を阻止したことは爭へぬ。そして物價の保合ひ乃至は一時的な上向きは、商品市場を刺戟し、生産事業

の擴張や新設やを促してます／＼生産過剰を大ならしめたことは爭へぬ。それと共にまた、整理を妨げたことは爭へぬ。巨大銀行の一重役は、昭和三年五月の一論説において『銀行の整理は八、九分通り具體化し、大體斯界は安定を得たものと見るを得る』と書いてゐるが、玆に八、九分通り具體化したとあるのは、巨大銀行の不良債權を中心として見た「整理」のことに過ぎない。事業會社の整理は決して進まなかつた。そして、この不整理が存在する限り、『銀行界の安定』は絶對に不可能である。しかるに、昭和二年・三年の「事業界」は、整理どころか、事業計畫資本の額において大正十年以來の最高を示し、たゞ昭和四年に至つて始めて事業計畫資本の激減を見たのである。かくて「特融」インフレーションは、またもや過剰資本に過剰資本を累加した。金融恐慌によつて、信用膨脹の矛盾の方は緩和されたが、擬制資本膨脹の矛盾の方は、ヨリ深大化して持ち越された!!

中小商業者の大量的沒落は、それ自身としても、また失業の激増及び賃銀切下げを通じても、大衆の消費力を格段におとろへさせた。恐慌前のインフレーション時代も、むろん失業者は多數出したが、しかし工場勞働者總數の絶對的減少をきたすやうなことはなかつた。然るに、恐慌後は、職工四五十人以上の工場のみを調査する日銀の統計においてさへも、勞働人員總數の絶對的減少が見られ、大正十五年に比較して昭和二年下期は七・二%を減じ、三年下期は一〇・〇%を減じた。いはんや、四五十人以下の、壓倒的多數の小工場においておや!

では、大衆の消費力の格段のおとろへは、如何に作用したか?

今や大衆の消費力のおとろへと購買力の萎縮とが、他のすべての要因をうち負かして、物價の方向を決定するに至つた。金融恐慌以來の物價は、「特融」インフレーションと金融景氣とにも拘らず、また爲替相場の再低落にも拘らず、もはや上昇線をえがくことなく、僅かに一時的な上向を見せたのみで、全體としては下向的な、保合ひ狀態を呈して昭和三年末に及んだ。減退した購買力が物價を引き下げる力の方が勝つたからである。

昭和二年も終りに近づいて、「財界」は恐慌の混亂から一と先づ回復し、物價の落勢が停滯しかけた際に、『物價はもはや底を入れた』との見地から、景氣の立直りを豫言する諸論説が現はれたが、吾々はその時、『經濟危機は克服されたか』といふ根本的な問題を提起して、斷じて否な、と答へておいた(拙著「現代日本研究」第二章)。吾々の見解は正しかつたのである。經濟危機の克服の能否は、金解禁後の發展にかゝつてゐた。

恐慌後の、事業會社の利益率は、物價の下落よりも餘程大きな割合をもつて低下した。即ち、全國事業會社の平均利益率は、大正十五年

の〇・七九%から〇・六八%に激減し、昭和三年には稍々見直したけれども、尙ほ〇・六七%にすぎなかつた。これは、――恐慌後金利の負擔は稍々緩和され、また物價の激落はなかつたにも拘らず、消費力のおとろへによる市場の收縮に基づくものである。そこで事業の擴張や新設による僅かの生產增加でもが激しい生產過剩をひきおこすやうになつてきた。代表的な工業諸部門の諸企業のカルテルは、むろん生產制限をもつて對抗するにはしたが、今や比較的僅かな制限さへが、生產制限の「合理的」限界を直ぐに超えるやうになつてきた。また、超えないまでも、生產制限による價格の「人爲的」な釣上げは、他の同樣な「人爲的」諸要因と共に、――例へば昭和元年の關稅引上げなどと共に、――却つて市場を萎縮せしめるのみとなつた。根本的の力たる大衆の消費力がおとろへたのだからである。

これは何を意味したか？　金融恐慌とそのブルヂョア的對策とは、新しき矛盾をつくり出したのみでなく、その作用を通じて更に古き矛盾を擴大再生產したことを意味した。即ち、生產力對消費力、生產設備對市場の矛盾――。

事業會社の收益率の減少は、もちろん銀行利潤にも影響した。銀行はもはや、金融恐慌前のインフレーション時代の如く、產業資本の利潤を犧牲にして自己の利益率を高位に維持することは出來なくなつた。インフレーション政策そのものゝ矛盾の展開が、それを不可能ならしめたのである。吾々はすでに五大銀行の純益金が如何に減少したかを見たが、全國普通銀行の純益金もまた當然に次の如く減少せずにはゐなかつた。

大正十五年	三九二百萬圓
昭和二年	二三〇百萬圓
昭和三年	三〇五百萬圓

インフレーション政策の破綻は今や完結した。その破綻が大正十四年から十五年にかけて現はれ始めたことが、金融資本ブルヂョアジーに、金解禁の不可避性を認識せしめたとすれば、金解禁の必要は今や命令的となつたのである。

恐慌後再び爲替相場は甚しく低落し、激烈に變動した。

在外正貨は更に減少して遂に日露戰爭以來の最低記錄なる一億圓以下にさへ下つたのに、入超の大勢はあらたまる模樣なく、從つて外債による正貨補充は全く焦眉の急となつてきた。滿鐵、電氣、自動車等の資本家企業もまた外債を欲し、ブルヂョア政府も、稅源の涸渇したために、また「特融」以來公債濫發によつて內地の起債市場の受容能力を全く失はせたために、外債募集の必要を感じたのであつた。しかるに米國金融資本は、日本債引受けの條件として金解禁を要求する。

かくして昭和三年十月、金融資本ブルヂョアジーは東京大阪手形交換所總會の名において金解禁卽行を決議した。

彼等による、金解禁への決意と宣傳とは、一面に於いて、彼等本位の銀行整理が『八、九分通り具體化し』、來たるべき「解禁」恐慌に對する抵抗力と準備とが更に一層强められたことによることは言ふまでもない。が、しかし、無準備・無抵抗の弱小資本家や小ブルヂョア層は、解禁の打擊に對して異常の脅威を感じ、諸市場の亂高下と不安と萎縮とは却つて甚しくなつてきた。金融資本ブルヂョアジーにとつては、すべてをこの不安狀態のまゝに放任して第二のパニックに見舞はれんよりは、むしろ意識的、計畫的な準備の下に能ふかぎり急速に金解禁を遂行し、そこに發展しいづる恐慌過程をコントロールするを可しとする。

金解禁は、デフレーションに始まらねばならぬ。デフレーション政策の徹底的遂行は、金解禁を前提とする。

昭和二年の若槻內閣の場合と同樣に、金解禁に對して中途半端な態度をとり、「緊縮」豫算を編むことが出來ず、おまけに支那で帝國主義外交を行き詰らせた田中內閣は、倒れねばならなかつた。昭和四年十月新たに政權を握つた民政黨の政務調査會は、金解禁卽進を決議した。緊縮豫算は實現され、米國財界に好感を與へた。官吏減俸案かもち出され、引込められた。民衆の貯蓄の流用と、巨額の損失とをもつて圓爲替は買ひ煽られ、正貨現送も始まつた。金融緩漫にも拘らず、金融はすでに人工的に引き締められてゐた。株の崩落、物價の崩落、米國の恐慌、製糸工女の賃銀の不拂、銀價の崩落、等、等、等。

デフレーションは遂に全面的にやつてきたのである。(次號完結)

我が國法に於ける軍部と政府との關係

美濃部達吉

一

日本の國法上軍部と政府との關係は、頗る明白を缺いで居る。軍部は多年の傳統に依つて政府に對して殆ど獨立の地位を有し、しかも軍部が屢々政權の範圍にまで立ち入らむとするために、やゝもすれば政令二途に出で、二重政府の非難を生じ、時としてはそれがために內閣の運命をまで左右するに至ることが有る。

今回のロンドン海軍條約についての紛爭も、亦軍部と政府との關係の不明確なことに、その原因を有するもので、若し政府が率直にその所信を公言すれば、直に軍部と政府との衝突となり、しかして軍部との衝突の結果は當然內閣の運命を危ふくすることを免れない。衆議院の絕對多數の支持を受けて居ようとも、國民の一般の輿望が內閣に歸して居ようとも、それ等は軍部に對抗するだけの力あるものではなく、陸軍にせよ、海軍にせよ、若し軍部が內閣に對して反對の態度を取り、陸軍又は海軍の大臣が辭職して、誰もその後任となることを承諾するものが無ければ、內閣は如何に議會および國民の絕對の支持を受けて居るとしても、崩壞するの外は無い。現內閣が軍部と政府との關係についての、議員の執拗な質問に對し、出來るだけ答辯を回避して居るのも、恐くはこの理由に基づいて居るもので、われ〳〵から見れば、「明るい政治」の主張を裏切るものとして、甚だ不甲斐ない感じが有るけれども、內閣の立場から見れば、萬已むを得ないところと言はねばならぬであらう。

問題の起りは、一般に周知せられて居る通り、內閣が全權からの請訓に對し、海軍軍令部の意見に反して、アメリカとの妥協案に同意すべきことの訓令を與へ、その結果ロンドン條約の成立を見るに至つたけれども、海軍軍令部は條約の內容に不同意であつて、內閣が全權に

對する回訓を發した後、直に海軍軍令部長からこれを以ては國防の安全を確保し得ない旨の帷幄上奏を爲したと傳へられて居ることに在る。軍部の側の主張としては、國防についての責任は軍部がこれを負擔するのであつて、責任者たる軍部の同意を得ず、内閣だけの意向を以て國防の事を決定して御裁可を仰ぐことは、軍部の獨立を侵し、統帥權を干犯するものであるといふに在る。

此の如き議論の生ずるのは、一に我が國法上統帥權の獨立といふことが、憲法の明文に基づかず、單に歷史的の慣行に依つて成立して居る原則であり、隨つて統帥權の範圍如何が甚だ明確を缺いて居ることに、その原因を有するものである。

今日の我が國法に於いて、果して統帥權の獨立といふやうな原則が、憲法上正當に認められて居るものであるや否や、若しそれが認められて居るとすれば、その範圍は如何なる點にまで及ぶべきものであるか、陸軍大臣又は海軍大臣は統帥權に對して如何なる關係に立つものであるか、海軍軍令部の同意なくしてロンドン海軍條約に調印したことは、果して統帥權の獨立を侵犯したものであるや、此等の問題に付いての自分の卑見は、既に他の機會に述べた所（五月二日乃至五月五日發行東京朝日新聞）であるが、改造社の强つての需めに依り、成るべく重複を避けて、簡單に卑見の大要を述べようと思ふ。

二

統帥權の獨立とは、陸海軍の統帥に付いての大權が内閣の責任の外に置かれ、内閣は全然これに關與することを得ず、隨つて又議會もこれを批判し論議し得ないことを謂ふのである。

此の如き原則は、立憲政治の普通の原則としては一般に認めらるるところではない。立憲政治は責任政治であり、國の總ての政治に付いては國民に對し殊に議會に對して責任を執るものあることを要求する。而して議會に對して責任を執る者は一に内閣であるから、國の一切の政治は、司法權の如き性質上特に獨立を必要とするものを除くの外は、凡て内閣の主管に屬し、議會は内閣に對して其の責を問ふことが出來るものとすることを、立憲政治の當然の原則とする。その結果として陸海軍も亦内閣大臣の統轄の下に立ち、陸海軍の行動に付いても、内閣がその終局の責任を負擔するものとせらるることが、各立憲國の普通の原則である。獨り戰爭に至るまでのドイツ及びオーストリアに於いてのみは、陸海軍の統帥を他の一般の國務と區別し、統帥權の作用だけは、皇帝の自由たる大權に屬し、それに付いての命令には國務大臣の副署を要せず、何人もそれに付いて責を負ふ者なく、議會はこれを批判し論議し得ないものとする原則が認められて居た。即ち所謂統帥權獨立の原則は主としてドイツに於いて發達した制度であつて、それがドイツをして軍國主義の國家としての非難を受けしむるに至つた主たる原因を爲せるものである。しかし此のドイツの制度がドイツ自身に於いても如何に國民の不滿を招いて居たかは、ドイツの敗

戰の勢やうやく明ならむとするに至つた一九一八年の秋、皇帝の在位中に、その前年四月の勅諭に依る約束に基づき、十月二十八日の帝國法律を以て、統帥權をも國務大臣の責任に屬せしめ、隨つて議會の監督の下に立たしめたことに依つても明瞭である。革命後のドイツの新憲法に於いては、固より統帥權の獨立を認めず、軍の統帥に付いての大統領の命令に付いても、等しく國務大臣の副署を要し、大臣がその責任を負擔するものとして居ることは言ふまでもない（同憲法第五十條）。オーストリアに於いても同樣である。即ち今日に於いては、統帥權の獨立といふやうな原則は、日本を除くの外は、世界の何れの立憲國に於いても、認めないところとなつたと謂ふことが出來る。

日本の憲法に於いても、憲法の明文上は此の如き原則を認むる如何なる規定も無い。却つて反對にその第五十五條には國務大臣が天皇を輔弼しその責に任ずることを明言して居るのであるから、憲法の條文上の解釋としては、統帥大權に付いても、等しく國務大臣がこれを輔弼し、その責に任ずるを要するものと解するのが、一應は當然としなければならぬ。

しかし、憲法の條文は唯簡潔の文字を以て國家組織の基礎原則を示して居るだけで、それだけを以て日本の現實の國法を知ることは不可能である。若し憲法の條文の文字だけを根據として言へば、內閣制度も、地方自治制度も、陪審制度も、植民地制度も、憲法には全く規定せられて居らぬもので、それ等は凡て憲法違反であるといふ議論も成り立ち得るのである。日本が現實に如何なる國法を有するかを知るためには、憲法の條文だけを根據と爲さず、憲法以前から傳はつて居る歷史、憲法の下に憲法を補充するために定められて居る各種の法令、多年平穩に行はれた政治慣習、立憲政治の一般的條理等を以て、文字の足らざる所を補足せねばならぬ。形は伊藤公の私著ではあるが實は半ば政府の公定解釋とも見るべき憲法義解の所說も亦重要なる參考材料となるものである。

此等の材料の中で、立憲政治の一般的條理から言へば、統帥權の獨立といふやうな原則は、全く認むべきものでないことは、前に述べた通りで、此の點から言へば此の原則は否定せねばならぬやうである。

しかし憲法以前から傳はつて居る歷史的の傳統から言へば、日本の陸軍は主として軍國主義の勢の最も旺盛であつたビスマルク時代のドイツの軍制に倣つて作られたもので、ドイツの制度がそのまゝわが國にも傳はり、隨つて統帥權は早くから一般の政務から分離せられて、政府に對し或る程度に獨立の地位を有つて居た。明治十一年十二月に參謀本部が設置せられたのは、此の獨立の地位を確定したものであり、明治十五年の軍人に對する詔勅には、兵馬の大權は大元帥としての至尊の親しく統率したまふところなることが宣示せられ、明治十八年十二月に太政官が廢止せられて新に內閣制度が設けられた際にも、內閣の職制を定めた中に參謀本部長の帷幄上奏の權を認めて居り、更に明治二十二年十二月に新に內閣官制が發布せられたときには、その

第七條に於いて

事ノ軍機軍令ニ係リ奏上スルモノハ天皇ノ旨ニ依リ之ヲ內閣ニ下附セラルルノ件ヲ除ク外陸軍大臣海軍大臣ヨリ內閣總理大臣ニ報告スヘシ

と明言し、以て帷幄上奏の制を公認して居る。此等は何れも憲法實施の以前からわが國法上統帥權獨立の原則が確立せられて居り、天皇の政府と天皇の帷幄とが分離せられて、統帥權の作用は帷幄の掌るところに屬し、政府は之に與らないことの主義が認められて居たことを示すものである。

此の憲法實施前に既に確立して居た原則は、憲法實施の後に於いても覆へされたものと見るべき根據は無い。殊に明治二十二年の內閣官制に於いて帷幄上奏の制を公認したのは、憲法の實施前ではあるが、その制定發布の後であつて、それだけでも、當時の政府が帷幄上奏を以て憲法に違反するものに非ずと認めて居たことを證明するものである。憲法義解に憲法第十一條の「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」とある規定に註して「本條ハ兵馬ノ統一ハ至尊ノ大權ニシテ專ラ帷幄ノ大令ニ屬スルコトヲ示スナリ」と曰つて居るのも、亦此の解釋を是認して居るものである。

それのみならず、軍事參議院、參謀總長、海軍軍令部長、教育總監、師團長、鎭守府司令長官、その他陸軍又は海軍の各司令官等統帥の大權に參畫し若くはその一部の御委任を受けて居る多くの機關が、國務大臣の監督を受けず、天皇に直隷するものとせられて居ることも、わが現時の國法上統帥權の作用が一般の政務と區別せられて、國務大臣の職責の外に在ることを證明するものである。何となれば若し統帥權の作用に付いても國務大臣が責に任ずるものとせば、統帥權の機關も亦總ての行政機關と同様に、必ず國務大臣の監督の下に立たねばならぬもので、國務大臣が自ら監督しないものの行爲に付いて責任を負擔することは性質上不可能であるからである。

それであるから、統帥權獨立の原則は、立憲政治の精神から見てそれが適當であるや否やは、暫く別問題とし、少くとも我が現實の國法としては、多年認められ來つた原則であり、現在まで行はれて居るものであることは、更に疑を容れないところである。

詳しく言へば、憲法第十一條に依る陸海軍統帥の大權は、我が現在の國法としては、憲法義解の所謂「帷幄の大令」に屬するもので、國務大臣はその責に任じないものであり、隨つて議會の監督の外に置かれて居るものである。統帥大權に付いて天皇を輔佐するものは、國務大臣ではなくして、帷幄の下に屬する機關であり、一般の國務に關する樞密院の地位に當るべき機關としては、軍事參議院が有つて統帥權に付いての至尊の諮詢に應ふるの任を有して居る。是が統帥權に付いての我が現在の制度の要領である。

三

統帥權の獨立は、斯く我が現在の國法上の原則として認めねばならぬものであるが、唯統帥權の限界如何、言ひ換ふれば內閣の輔弼に依らず、帷幄上奏に依つて決定することを得べき範圍の限界如何は、可なり疑はしい問題であつて、それが海軍條約に付いての今回の論爭に付いての主たる原因を爲して居る。

參謀本部條例に依れば、參謀總長は帷幄の軍務に參畫し國防及用兵に關する計畫を掌るとあり、海軍軍令部條例にも、軍令部長は帷幄の機務に參し國防用兵に關することを參畫すとある。更に軍事參議院條例に於いても、軍事參議院は帷幄の下に在り國防用兵に付き諮詢に應ふべきものとせられて居る。

此等の規定に基づき、從來の實例としては、國防計畫殊に國の兵力の分量を如何に定むるかに付いては、參謀總長又は海軍軍令部長からの帷幄上奏に依り親裁を仰ぎ、時としては更に軍事參議院に諮詢せられ、而してその親裁の結果は陸軍大臣又は海軍大臣から、之を內閣總理大臣に報告する例である。

此の慣例に因り、軍部側の主張としては、國防計畫を定むることをも帷幄の大權に屬するものと爲し、帷幄の機關は啻に統帥權のみならず、憲法第十二條に依る陸海軍編制の大權にも參與するものであるとして居る。勿論、その計畫を實現する爲には經費を要し、而して經費に付いては議會の協贊を經ねばならぬのであるから、その計畫の實行には內閣の同意を要し、閣議を經て、更に御裁可を得ねばならぬことは當然であるが、少くとも內閣は帷幄上奏の結果を無視した決定を爲すことを得ない。若し帷幄上奏に依つて決せられた計畫を變更せんとする場合には、必ず軍部の同意を得ねばならぬ。言ひ換へれば軍の編制を定むること殊に兵力量を定むることは、政府と帷幄との交渉事項であつて、雙方の同意に依つてのみ行はれ得るものであるといふのが、軍部側の主張である。

實際問題としては、內閣の一員としての陸軍大臣及び海軍大臣は、同時に軍部の一員であり、隨つて陸軍大臣又は海軍大臣が、軍部の意見に反して、內閣の意見に贊成することは、通常は想像し得られないところである。而して若し陸軍大臣又は海軍大臣が一人でも不贊成であれば、閣議の決定は成立たないのであるから、實際上內閣が軍部の同意を得ずして、軍部の立てた國防計畫に反對する決定を爲すことは、不可能であり、隨つて帷幄上奏に依つて定まつた國防計畫は、事實に於いては殆ど內閣を拘束する力を有し、內閣はこれに從ふことを餘儀なくせらるるのが、從來の實際の狀態であつた。

偶々內閣が已むを得ざる政治上の必要から、軍部の立てた計畫に反する決定を爲した場合には、內閣の危機を生ずるを免れない。嘗て西園寺內閣が陸軍の立てた二箇師團增設の計畫を否定した爲に、軍部の反抗を招き、衆議院の絕對多數を擁しながら、忽にして倒壞するを免れなかつたことは、尙吾々の記憶に新なるところである。

今回の海軍條約も亦海軍大臣が海軍軍令部の意向に反して、國防計

畫の變更に同意した稀有な事例であつて、是が軍部と政府との間の紛爭を生ずるに至つた原因である。若し海軍大臣が同意を拒んだならば、條約は固より成立を見ることを得なかつたのである。然るに海軍大臣は自ら全權の一員として之に同意を與へ、しかも海軍軍令部長は之が同意を拒んだ爲に、玆に問題を生ずるに至つたのである。

問題は、帷幄上奏に依つて決せられた國防計畫は、果して法律上に內閣を拘束する力を有するや否や、內閣は軍令部の同意を得ずしてこれと異つた計畫を定め、その勅裁を仰ぐことを得べきや否や、國防計畫殊に國の兵力の分量を定むることは、專ら政府の權能に屬するや又は政府と帷幄との協定を要する事項であるやに在る。

此の問題は、決して單に從來の實際の慣例に於いて、政府が嘗て帷幄の意向に反對した決定を爲したことの無かつた事實のみに依つて、之を決することを得ない。從來實際に嘗て政府だけの意向を以て、軍部の計畫に反した決定を爲したことが無かつたとしても、それは前にも言ふ通り、內閣の一員たる陸軍大臣海軍大臣が同時に軍部の一員であることから生じた結果であつて、それを以て帷幄の決定が法律上に政府を拘束する力あるものと斷ずべき理由と爲すには足らぬ。

參謀本部條例、海軍軍令部條例等に、參謀總長、海軍軍令部長等が國防用兵の事を參畫する旨の規定の有るのも、敢て國防に付いての大權輔弼の任を此等の機關に屬せしめたものと解すべき根據と爲すことを得ない。參謀總長や軍令部長は帷幄の下に在る機關であつて、專ら大元帥としての至尊を輔佐するの任に在るに止まり、國務に關して輔弼の責に任ずる機關ではない。且つ參謀本部條例も海軍軍令部條例も共に軍令を以て定められて居る規定である。軍令は明治四十年軍令第一號の自ら明言して居る如く陸海軍の統帥に關する規定である。統帥に關する規定を以て統帥に關する以外の事を定め得べき理由は無い。軍令たる參謀本部條例海軍軍令部條例に於いて、參謀總長海軍軍令部長が、國防の事を參畫する旨を定めたとしても、その國防計畫は單に統帥權の範圍に於いてのみ效力を有するに止まり、その以外に效力を及ぼし得べきものでないことは言ふまでもない。

帷幄上奏の法律上の效力を決する爲には、帷幄上奏が大元帥としての至尊に對する上奏であることを前提とせねばならぬ。大元帥としての天皇は陸海軍の首長たる地位に在ますのであつて、國の元首としての天皇とは全然その御地位を異にし、權能を異にしたまふのである。わが國法上天皇は國の元首たる地位に在ますと共に、皇室の首長たり又陸海軍の首長たる地位に在ますのであつて、それ〴〵その輔弼の機關を異にし、大權の範圍を異にして居る。等しく天皇の御親裁を經た事項であつても、宮內大臣の輔弼に依り皇室の首長としての天皇の御裁可を經た事項と國務大臣の輔弼に依り國の元首としての天皇の御裁可を經た事項とが全くその效力を異にすると同樣に、帷幄上奏に依つて親裁を經たとしても、それは唯軍の大元帥としての御意思が決せられたに止まり、國の元首としての御意思が決せられたのではない。そ

れは單純な軍の意思であつて、軍以外に對しては法律上には何等の拘束力を有し得ないものである。

それであるから、國防計畫に付いて、帷幄上奏に依り御親裁を經たとしても、それは法律上から言へば、唯軍の希望であり、設計であるに止まるものであつて、內閣に對しては何等法律上に拘束力あるものではあり得ない。陸軍大臣又は海軍大臣から之を內閣總理大臣に報告するのは、唯政府に對する軍の希望を表示するに止まるものである。內閣は獨立の見地からその採否を決定し得ることは、當然でなければならぬ。

蓋し陸海軍編制の大權は、明に陸海軍統帥の大權と區別せねばならぬもので、統帥權は一般の政務から分離せられて、政府の職掌の外に置かれるにしても、編制權はその性質上必然に政務の一部として國務大臣の責任に屬せねばならぬものである。何となれば、軍の編制とは軍を施設することであつて、國家が幾ばくの兵力を備ふべきかを決する行爲であるからである。國家に依つて編制せられた軍の活動は、軍自身の統帥に任かされ、外間の關與を受けないものとすることが適當であるにしても、軍を編制することは、軍自身の活動に任かされ得べき事柄ではない。憲法が軍の統帥と軍の編制とを別個の條文に規定して居るのも、此の二つが別箇の性質を有する作用であるからであつて、憲法義解にも、軍の統帥に付いては「專ラ帷幄ノ大令ニ屬ス」と曰つて居るのに反して、軍の編制に付いては「是レ固ヨリ責任大臣ノ輔翼ニ依ル」と曰つて居る。わが現在の國法上統帥權の獨立が認められて居るといふのは、唯軍の活動を指揮統率することが政府から獨立して居ることを意味するだけであつて、軍の編制を爲すの權は全然その範圍に包含せらるるものではない。軍の編制に關して大權の輔弼するの任は專ら內閣にのみ屬するのである。

統帥權獨立の原則は尙之を司法權獨立の原則に比較することが出來る。司法權の獨立は憲法が自ら明文を以て保障して居るものであつて、統帥權の獨立の如く、單に憲法以外の法令と慣習とに依つて成立して居るものと異なつて居り、憲法上一層尊重せらるべき原則であることは、言ふまでもない。統帥權の獨立は憲法の改正に依らずして之を全廢することが出來るけれども、司法權の獨立は憲法を改正せざる限り、之を侵すことの出來ないものである。しかも司法權の獨立とは唯裁判所の活動殊にその裁判行爲が、政府から獨立であり、政府の支配を受けないといふに止まり、決して裁判所の構成を定むることが、司法部自身の行動に任かされて居ることを意味するものではない。裁判所の構成を定むることは、決して司法權の行爲ではなく、一般の立法權の作用に屬するものである。軍の編制を定むることは、恰も裁判所の構成を定むる行爲に匹敵すべきもので、それが統帥權の範圍に含まるるものでないことは、恰も裁判所の構成を定むることが、司法權の範圍に含まれないのと同樣でなければならぬ。

且つ一國の兵力量を定むべき標準となるものは、軍事の專門の技術

ではなくして、主としては、國際關係であり、國民の經濟力であり、國家の財政力である。經濟力、財政力は暫く別問題としても、國の兵力量は戰爭の危險を豫想し、假想敵國を想定して始めて定め得べきものである。しかも宣戰講和の大權は言ふまでもなく國務上の大權であつて、國務大臣のみがその輔弼の任に當るものである。戰爭を爲すと爲さゞるとが、國務大臣の輔弼に依るものであれば、戰爭の爲の手段である兵力量も亦專ら內閣の輔弼する所でなければならぬことは當然である。

要するに統帥權の限界を正確に限定することは困難であるにしても、少くとも軍の編制殊に兵力量を定むることは、統帥權の範圍外に在り、內閣のみがその責任を負擔するものであり、議會が之を監督し得べきものであることは、更に疑を容れないところである。

四

以上述ぶる如く、軍の編制が軍の大元帥としてではなく、國の元首としての天皇の大權に屬するもので、內閣が專ら輔弼の責に任ずることが、疑を容れないとしても、それだけでは、未だ軍部と政府との關係に付いての困難を排するには足らぬ。

その外に尙重大なる難關の存するものが有る。それは言ふまでもなく陸海軍大臣が陸海軍の武官たることを必要として居る制度是である。

軍部大臣の武官制が維持せられて居る以上は、假令理論上は政府が軍部の意向に反して軍の編制を定むることが出來るとしても、內閣の議を纏めるためには、軍部大臣の同意を得ることを要し、而して自ら軍部の一員たる陸海軍大臣が軍部の意向に反する決議に贊成することは容易に期待し得ないのであるから、實際上は內閣が軍部の意見に反する決議を纏めることが、殆ど不可能であることは、今日までの實例に依つても知り得るところで、今回の如き海軍大臣と軍令部長との意見が相背馳するのは、極めて稀にしか起り得ない例と言はねばならぬ。

政府をして眞に獨立の政治上の見地から、軍部の意見に拘らず兵力量を定め得べしむるには、軍部大臣の武官制を撤廢するより外途は無い。

軍部に付いて文官大臣の制を取ることは、固より一長一短を免れぬところであるが、しかし現在の如き武官制を維持することは、第一には、內閣の最も重要なる性質である統一性を妨げ、內閣の中に更に內閣を作るの患あるものであり、第二には、現役將官が長く政黨內閣の一員としてその中に列することは、政黨の勢力を軍隊の內部に波及せしむる弊あるもので、田中義一大將が長く政友會內閣の陸軍大臣たり遂に自ら政友會の總裁たるに至つたが如きは實に此の弊の著しき現はれであり、更に第三には、國家をして軍國主義の弊に陷いらしむる虞あるものである。軍國主義は嘗ては國家の重要な政策であつた時代が有つたにしても、今はその時期既に去つたものである。

此等の諸點は軍部大臣の文官制を必要ならしむる主たる理由であつて、而して文官制の採用に依つて、始めて軍部と政府との關係を明白且つ圓滑ならしむることが出來るであらう。(五月八日夜稿)

ブルジョア議會の最初の印象

——同志並に大衆への一つの報告——

大山郁夫

一

過去幾年間、我々は無産階級解放運動の戰野に於て、資本家・地主の政府および政黨とは、濠々たる彈壓の砲火を超えてのみ、遥に相望んでゐたのであります。ところが私は、去る二月の總選擧に於て勞働者諸君・農民諸君・無産市民諸君の階級的支持により、大衆鬪爭の一尖端としてブルジョア議會に送り込まれ、そして第五十八議會の開會と共に、政府とその與黨ならびに野黨の人々とは、一堂に於て咫尺の間に顔を突き合はせるやうになりました。考へて見れば、僅かの間に時勢は著しく變轉したものであります。しかもかゝる時勢の變轉は、偏へに大衆の意識の成長とその勢力の增進の度合ひを印づけてゐるものに外ならないのであります。それで私は今、私の議會進出の跡を顧みるとき、そゞろに背後から私を驅り立てた大衆の力の潮に乘つて敵陣に乘り込んだといつたやうな感じを、心の底深く懷かないで居られないのであります。

かういふ譯で、議會内に於ける私の任務はたゞ、議會外の大衆鬪爭との緊密なる聯關に於て、勞働者・農民・無産市民・植民地民衆・その他一切の被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得のために全力的に鬪爭すること以外には絶對にないのであります。それが、わが黨が——およびわが黨を支持する大衆がわが黨を通じて——勞農黨選出議員としての私の肩上に課した使命の全部であります。無論かゝる使命は、私の微力に比べて見るとき、餘りにも無限の重大性を帶びてゐるものであつて、私自身はそれに直面しただけでも、すでに息詰るやうな、一種の促迫感を感じないで居られない位であります。だが、私は一旦それを引き受けた以上は、命にかけてもそれが遂行に當らなければならないのだ。——私はかく決心して、それさへなければ何等の牽引力をも私には持たないブルジョア議會に入り込んだのであります。

工場に於て傭主と鬪爭する勞働者。農村に於て地主と鬪爭する農民。街頭に於て『仕事と食を與へよ』との痛烈なる叫びを擧げる失業者。一切の惡税重税・高い家賃・高いガス・電燈料金に對して抗爭する無産市民。刻々剝奪され行く政治的自由の奪還のために支配階級に對して絶體絶命の鬪爭を展開する全被壓迫民衆。かゝる大衆の抑へがたき不幸・不滿・要求を壇上に爆發せしめ、それらの大衆を背後の支持力として假借なき暴露戰を敢行すること。――かうした考へのみが、餘りにも當然に、私が始めて議場の一隅にある私の議席を占めた瞬間から、絶え間なく私の意識を占領しつゞけたのであります。それ故に、四月二十七日、私が始めて登壇の機會を得るや否や、私は資本家・地主の利益の擁護者たちによつて滿たされた全議場を睨め廻はして、故らに厲聲一番、私が『全國の勞働者・農民・無産市民・その他一切の被壓迫民衆の立場から一場の質問戰を展開しようとしてゐる』ものであることを、高らかに宣言しました。私は今でも、その階級的支持によつて私を議會に送られた大衆諸君を始めとし、わが勞農黨を熱烈に聲援する全國の無數の大衆諸君が、私のその言葉を、一個不遜の表現としてゞなく、徹頭徹尾私の心の底から迸ばしり出た眞率なる叫びとして、無條件に寛容されるであらうことを確信するものであります。

しかし私は、本文に於て私自身の議會内に於ける態度・行動を報告するよりは、寧ろ私が第五十八議會から得た最初の印象記を書き附けようとしてゐるものであります。それは二重の意味に於て私の最初の印象記であります。第一にそれは、生れて始めて議會に足を踏み入れた私の議會觀である、といふ意味に於てゞす。第二にそれは、今期議會の最初の數日間に於ける私の印象を述べたまでのものだ、といふ意味に於てゞす。第五十八議會の總決算といふやうなことは、その會期がまだ進行中の今日に於てやるべきことでありませんから、何づれそれが終了してから諸君と共同討議の上ですることにしませう。で、私は今はたゞ今期議會に對する、まだ新らしい私の印象をスケッチするだけに止めようと思ひます。

二

私が初めて議場に入つて先づ最も痛切に感じたことは、如何にもそこに潑剌たる生氣が缺けてゐるといふことでした。これは、私が從來參列して來た會議といふ會議が、殆んど例外なく、武裝官憲の異常な嚴戒裡に進行するのを常とする戰鬪的勞働者農民またはその代表者たちの各種の會議であつたためかも知れません。さうした會議で常に見られる、あの一脉凄愴の氣を漂はした空氣、殊に屢々轟然として爆發する炎々たる熱火の如き意氣は、議會に於ては、どこを搜しても求められないやうであります。如何にも、議會の名物と謳はれ、傍聽者たちの興味の中心となつてゐる彌次、喧噪、小競り合ひ、演壇への驅け上がり、等々は時々刻々演ぜられますが、さうしたものは結局議場の掛け引きにすぎないものであり、筋書の決まつた茶番劇のやうなもの

でありますから、それに參加しない連中は呑氣に笑ひながら見物できる程度のもので、誰れにもハラ〳〵させるやうなものでは決してないのです。

私はさうした空氣の中で、正直に言ふと、一種の侮蔑感以外の何物をも感じることが出來ませんでした。何時だつたか私は、――若しも私の記憶が違でなければですが、――或る新聞紙上で、當時社民黨選出の一議員であつた鈴木文治君が、『議場に入ると何だか威壓されたやうに感じる』といふやうなことを述べられたと書いてあつたのを讀みましたが、私は自分の經驗から推して、鈴木君がどうしてさういふ心持になられたかを理解するに苦しむものであります。

私は緊張味のない――變な表現ですが――活ける屍のやうな全議場を見渡しながら、何時とはなしに、我々が過去に於て幾度となく經て來た彈壓の場面を髣髴として眼前に描いてゐるのに氣附いたことが、たゞ一再には止りませんでした。そこでは、彈壓を與へるものも、彈壓を受けるものも、共に眞劍そのものゝ具現のやうに見えます。まさに生死の戰ひがそこに展開されます。それは無論、階級と階級との對立が、よしどれほど小規模にもせよ、そこに生々しき現實となつて現はれてゐるからであるに相違ありません。とにかくさうした光景に比べると、ブルジョア議會內に於ける與黨と野黨との間の刻々の衝突は、餘興以上の何物にも見えません。それは詰まり、同じ階級に於ける內部的抗爭は、表面上どれほど深刻なものに見えても、その解決の捌け口が制度そのものゝ中に豫じめチヤンと用意されてあるからでせう。もつとも、議會外の大衆運動の壓力が議會の門前に現實に迫つてゐることがブルジョア議員たちに鋭敏に感じられるやうになれば、彼等も幾分かは心の底から緊張するやうになるでせうが、しかし彼等がそれを鋭敏に感じるやうになるのは、中々容易のことではないやうです。かういふことを見てゐると、私は今更らのやうに、『すべての政治鬪爭は階級鬪爭である』と喝破したマルクスの眞理が、ヒシ〳〵と身に迫つて來るのを覺えるばかりです。

三

言ふまでもないことでありますが、ブルジョア議會も、歷史的に見れば、輝かしき過去を持つてゐます。近世紀の初頭の西ヨーロッパ諸國では、議會が新興ブルジョアジーの前衞として、封建的專制政治の打倒・民主主義革命完成のために力鬪して、双ぶものなき史上の大壯觀を展開した時代もあります。かの神權說に裝はれた絕對主義を振りかざして傲然永久に全民衆に君臨しようとしたチヤールス一世の專制的支配に痛快に止めを刺した一六四九年のイギリスのパーラメント。――積年の間に築きあげられた貴族・僧侶の傳統的權勢の大伽藍を根柢から顚覆して、來るべき世紀と全人類とに向つて、光彩陸離たる『人權宣言』を高らかに讀みあげた一七八九年のフランスの國民議會。等々々。

なるほど、日本の議會は、かつてさうした花々しい鬪爭歷史を持つたことはない。それは日本のブルジョアジーが、かつて民主主義革命の完成のために封建的殘存勢力と決定的に戰つたことがないといふ事實から來てゐるのは無論です。日本のブルジョアジーは、かくてその發達の歷史的特殊性の故に、その或る段階に於ては寧ろ封建的殘存勢力の庇護の下に、また或る他の段階に於ては封建的殘存勢力との反目・親善の綯ひ交ぜと言つたやうな煮え切らない關係の下に、じりじりと今日の支配的地位にまで登りつめて來たのであります。從つて、かゝる關係を政治上に反映し來つた日本の議會は、未だ曾て新時代を導き入れると言つたやうな創造的活動を展開したことはない、といふのは事實であります。それにしたところで、日本の議會も、その四十年の短き歷史の或る期間には、或る程度に重要な政治的役割を演じたことが全然ない譯ではありません。それは少くとも、時代の潮流の尖端に立つ水先案內として動いてゐたやうに見えたこともあります。かの藩閥打破、官僚軍閥反對の鬪爭とか、憲政擁護運動とかの行はれた期間には、日本の議會も多少は颯爽として風雲の氣を呼ぶやうな趣きを示したのであります。しかし、さうしたことも、つまりは眞夏の夜の夢のやうに、瞬間的に行く方も知らず果敢なく消え去つてしまひました殊に金融資本が段々と支配的地位を確立するやうになつてからは、議會は最早宿昔の議會ではなくなつて了ひました。それは依然として立法部といふ名稱を僭しながら、百パーセント執行部の附屬物となり下がりました。執行部の立法部に對する無限の優越。——それは我々の記憶の上にまだ新らしい、あの數年前に若槻內閣の下に所謂三黨首妥協の政治的喜劇の一幕が開演された時からこの方、特に顯著に眼立つて來ました。かくして議會は刻一刻、益々だらしないものになつて行きつゝあります。私が今度初めて、まのあたりにまざまざと見るやうになつたものは、そのだらしのない議會なのです。私が議場へ入るとすぐに、『何と生氣のない議會よ！』と心のうちに囁かざるを得なかつたのは、一の歷史的必然だと、言はゞ言へることでありませう。

四

執行部の立法部に對する無限の優越。——議會の空氣が極度に沈滯してゐるものとして我々の眼に映ずるのは、決して單にそれが小川前鐵相事件、小橋前文相事件、天岡前賞勳局總裁事件、等々その他幾多の疑獄事件の溫床となり來つたといふやうな外的事實のためのみではない。それはまづ第一次的に、もつと根本的な內的事實に基因してゐるのである。即ちそれは、立法部としての議會そのものが今や完全に執行部に隷屬するものとなり、執行部の專權を牽制する具として働いてゐるどころか、寧ろその下に着々と進められてゐる金融獨裁の合理化のための機關として作用してゐるといふ事實——つまりそれに基因してゐるのです。現在我々が見てゐる第五十八議會の上に現はれて來る樣々の具體的事實は、一つとしてその根本的事實の說明として見ら

れないものはありません。かくしてブルジョア議會は、その本來の歴史的使命を基點としていへば、今やその中心から腐朽しかゝつてゐるのであります。だから、多種多様の政治的罪悪の黴菌がその上に簇生しだしたのは、不思議でも何でもありません。すべてが金融寡頭政治下の特徴的事相と見られるものばかりであります。

かくの如く、我々は今、完全に去勢されたる議會を眼前に見てゐます。與黨が何でもかんでも、政府が言つたことだといふと、それに絶對服從するを恥としない有様は、まるで××の姿態の活き寫しです。最近統帥權の問題で、與黨内の一部に多少政府の態度に對して反抗の氣勢をあげかけてゐたものがあつたやうですが、それもどうやら泣き寢入りになりかゝつてゐます。だが、與黨も與黨ですが、野黨の野黨甲斐のなさも呆れさせます。西園寺公の鎭坐する興津の何とか莊が、與黨・野黨の共同のメッカとなつてゐるといつたやうな事實の如きも、議會を一ト目見た眼には、直ぐに『なるほど』と肯かれます。

今期議會に於ける犬養政友會總裁の演説は、野黨の攻撃力喪失の絶好の見本でありました。いかにも犬養翁は老人だからでもありませうが、その演説を聞いてゐると、何だか斯う、諸行無常・寂滅爲樂の境地に誘ひ込まれさうな心細さを感じさせられます。しかしそれは唯その演説の外形からだけではありません。その内容を速記録で讀んで見ても——といふのは、翁の聲の微弱さのために、その演説が私の議席からはよく聽き取れなかつたからです——矢張り同じ感じを受けます。たとへば、翁はロンドン軍縮會議の問題を中心として頻りに政府を糾彈してゐるやうな調子で話してゐましたが、しかし軍擴を主張してゐるのか、軍縮を主張してゐるのか、結局どちらつかずの結論に陥つてゐます。恰度春霞の中から遙かに落ちて來る雲雀の聲を聞く感じです。それは決して翁の年齢だけから來た現象ではなく、つまりは政友會も帝國主義政策支持の點に於て民政黨と一つ穴の貉であるといふ事實から來た當然の歸結であります。

五

與黨の絶對服從の態度、野黨の攻撃力の喪失。——かういへば、政府が獨り敢然として無人の野を行く概があるやうに見えますが、實は中々さうではありません。なるほど政府は、金融資本の支配の確立のために、勞働者・農民・無産市民・植民地民衆・等の一切の利益と自由を犠牲にして顧みないやうな様々の政策を盲滅法に强行して、それらの被壓迫民衆の怨嗟と××の聲を毫も顧みないやうなところを見ると、少くとも多分の猪勇を持ち合はせてゐるやうに見えますが、しかしそれも皆金融資本家の指金から出て來てゐるものであることを考へると、政府もまた結局は議會と同様に、一種の硬化した土偶的存在を持續してゐるにすぎないものであることが解かります。

金融資本の優越的地位の獲得と共に、政府が段々とその××となり了るやうになつたのは、決して一朝一夕の事ではないが、殊に昭和二

年の金融恐慌以來、それが餘りにも露骨に表面に浮び出るやうになつたことは、改めていふまでもありません。あの頃十億圓近くの國庫負擔を伴ふ各種の補償法が、たゞ資本家だけの利益のために制定されて、無産大衆をして髮を逆立てしめました。それ以來、內閣は更代しても、金融資本家本位の政策は益々強硬に進められる一方です。で、今期議會に於ては、濱口內閣の緊縮政策とか、金解禁問題とか、産業合理化問題とかゞ呼び物となり、論議の中心目標にされました。だが他方、それと相表裏する關係をなす失業對策問題などは、たゞ掛聲が大きかつただけで、政府も與黨も野黨も共にその前に茫然自失してゐる體たらくで、何等の解決策をも、否、その端緒をさへも、絕對に示すことが出來なかつたのです。それは、今日の失業問題の根本的解決が資本家・地主の政府の手によつては決して望み得られないといふ根本的事實の證明以外の何物でもありません。私は私の質問演說中に、わが勞農黨が失業問題解決の應急策として建てた『失業者生活保證法案』を持ち出して、それに對する政府の見解を訊いてみましたところ、それが五億圓の支出を伴ふものであるといふ點が緊縮宗の本尊を驚倒せしめたものか、濱口首相はそれに對して、こんな答辯をしました。――『大山君の質問の要點は數億圓の失業手當を出す意志はないかと云ふ――ありませぬ、斷じてない。』そして首相は、その施政方針演說の中にもあつたやうに、いはゆる『失業救濟事業補助費』として、大枚六十一萬九千なにがしといふ額を追加豫算に計上したことだけで充分滿足してゐるやうです。これが意氣揚々としていはゆる『失業救濟』の根本策とか應急策とかを說いた大宰相の大經綸（！）であります。

かういふ風に、政府は徹頭徹尾金融資本家の頤使のまゝに動いてゐる內的事實を、今は公然と外的に晒らけ出さずにゐられないやうになつて來てゐます。だが政府の頭があがらないのは、單に金融資本家の前だけではありません。軍閥に對しても多分に同樣の傾向を示してゐます。今期議會に於て他の重大問題の一つとなつた統帥權問題の推移が、明白にそれを證明してゐます。それの論議に際して、濱口首相が終始一貫たゞ戰々兢々として、問題の核心に觸れることを避けるのに沒頭して居たのは、傍たの見る眼も憐れなほどでした。野黨にしてもさうです。その管々しい攻擊的質問も、結局は軍閥に反對してゐるのか、但しはそれに迎合してゐるのか、少しも解らない處に落ち着いてゐます。何がじれッたいと言つても、それ程のことは外に滅多に例が見られない。かくして、帷幄上奏の始末とか、軍部大臣文官制とかの如きも、今日では、資本家・地主の政府・政黨の手によつて解決されさうもない永久の問題となつた觀があります。これといふのも畢竟、日本の議會が未だ曾て民主主義革命の完成のために戰つて見たことすらないうちに、すでに早くも金融資本の支配の確立の下に帝國主義時代に辿り込んだからであります。

濱口首相の演說は、さうした煮え切らない關係の下におかれてゐる政府および議會の美事な象徵のやうに、少くとも私の眼には映じまし

た。濱口首相の風貌は新聞紙上ではライオンに見立てられてゐますが、私はよしそれを肯定するにしても、失禮ながら剝製のそれ以上に見積もることが出來ない。それほども、それに潑剌たる生氣が缺けてゐるやうに、私には思へるのです。また濱口首相の聲を聞いてゐると、なるほど例の『莊重な語調』といふのはこれだな、と思はせられるやうな節もないではありませんが、しかし全體の上からいふと、私には中がガラン洞の、圓味を帶びた含み聲のやうに聞えて、威壓されるやうに感じるどころでなく、たとへば名寺の寶物とか由緒ある骨董品とかを見た時によく起つて來る、あの時代錯誤が惹き起す淡き滑稽感――といつたやうものが私の胸にこみ上がつて來るのを、私はどうすることも出來ないのです。

　私は、この上かういふことを長々と書きつゞける時間を持ちませんから、これで一と先づ擱筆します。たゞ最後に次の一言を附け足しておきたい。私は、今日最早全然政治上の創造力の痕跡をさへも失つて活ける屍の如き存在を續けてゐるにすぎないブルジョア議會に向つて、今や猛然として擡頭する新興勢力としてのプロレタリアートの建設的意志に燃え立つた闘爭的氣魄をたゝきつけたいといふことを私の小さき希望の一つとしつゝ議會に入つたのです。とにかく私は、議會外の大衆にのみ信賴して、あくまで全力的に私の議會闘爭をつゞけて行く覺悟でゐます。私は私の一身を大衆のものとして活かすこと以外には、何の望みをも持つてゐないものであります。私の議會に於ける行動にしたところで、單にそのものとして見れば、何の生命も價値もないものであるには決まつてゐますが、しかしそれが議會外の大衆闘爭と相互ひに脉を打つて進む時にのみ、その本質以上の働きをすることが期待され得るものと思ひます。この意味に於て私は、益々固く大衆諸君と腕を結んで、わが勞農黨の旗の下に、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張と、その政治的自由の獲得のために、かつて亡き同志山宣が歩んだ道を追うて、生死を超越して階級的な正しき前進をつゞけたいと願つてゐます。

無産政黨合同の可能と不可能

山川均

(一)

私は本誌の四月號において、總選擧における無産政黨の戰績を考察し、この時再び動きかけてゐた『合同機運』に言及した。私はこの機運が、戰線統一への一般的な要望に根ざしてゐる點では、すべての無産政黨の合同の方向を指してゐるにもかゝはらず、具體的には、そしてこの瞬間においては、種々なる方向からの制限を受け、限界をおかれてゐることを指摘した。卽ち右からは社民黨指導者の社會民主々義によつて、左からは——或は右翼的本質を持つた左翼からは——勞農黨指導者の謂ゆる『戰鬪的統一戰術』によつて、直ちに實現の可能な合同の範圍に境界線を引かれてゐたばかりでなく、地方的無産政黨の或る部分にさへも、同一の方向に働いてゐる作用のあることを指摘した。(この最後の點については、東京無産黨の當事者から、私の觀察に對する抗議の形において、否定的な訂正があつた。私は、合同の範圍に加へられたこの方面からの制限が、これによつて撤廢せられたことを喜ぶものである)。そこで合同への一般的な機運と戰線統一に對する黨大衆の要求が一そう高まつて、これらの境界線を突破せぬ限り、現在の瞬間における合同運動は、よしそれが全無産政黨の合同といふ旗印の下に推し進められようとも、實際にこの『合同機運』のうちから實現せられるものは、或は最小範圍の部分的合同——大衆=全民兩黨の合同——であり、幸ひに合同範圍を擴大しようとする努力が成功した場合にも、その可能な限度は、大衆=全民=地方無産黨の全部または一部分以上に出ることのできない情勢におかれてゐることについて、注意を喚起した。

專ら大衆=全民兩黨の謂ゆる單獨合同の實現のために盡瘁せられてゐる森戸辰男氏は、本誌の前號において、同じく合同問題に對する諸方面の情勢といきさつとに就いての、詳細な觀察を發表された。そして森戸氏がこの觀察によりて到達せられた『見透』は、すべての無産政黨の合同の不可能なことゝ、從つて唯一の可能な合同は部分的な合同だといふことであつた。

但しこの場合、『部分的合同』とは大衆＝全民兩黨だけの謂ゆる『單獨合同』と同意語であつて、森戸氏の場合にあつては、實現せらるべき合同が地方無產政黨を包容し得るか包容し得ないかによつては、合同の性質には何らの變化も生じない。なぜならば森戸氏にあつては、地方無產政黨は全然無視してよい性質であるばかりでなく、無視してよい分量だから。

全體として見た無產政黨に對する評價においては、森戸氏と私との間には、著しい差異がある。森戸氏にあつては、地方政黨は全國政黨に對する强い嫉妬と反感と、ふりかゝる自滅の運命に對する共通の恐怖とにおいてのみ一致するところの厄介者、無產政黨運動のいはゞ殘滓物にすぎないが、私に取つては、それは單一政黨——またはその基礎となるべき確乎たる主要勢力——の建設が、今日までは失敗に歸してゐる必然の結果として生み出されたものであり、現存の全國政黨の補足物を意味してゐる。卽ち現存の多數の地方無產政黨は、單一政黨の云はゞ破片であり、他日全國的な單一政黨が形成せられるとしたならば、當然にその構成部分となるべき材料である。地方無產政黨の勢力の分量上の意味についても、同樣である。森戸氏にあつては、最近の合同機運の直接の刺戟となつた總選擧の敗績は、社民黨を除けば『主として地方政黨の側』にあつた。けれどもこの點では、數字が別樣のことを物語つてゐることは、私が前論（本誌四月號）に指摘した通りである。得票十六萬の大衆黨と得票一萬九千の全民黨との合同とを眼中におく時に、得票七萬七千の地方無產黨を、無視してよい分量だと云ふことは、とうてい許されない。ことに森戸氏を顧問とする全民黨は、事實上においては、大阪と東京との地方的政黨にほかならぬ。これに反して、全體としての地方無產政黨は——若しくは地方政黨協議會に全國政黨の看板をかけ替へたなら——そしてこれは無產政黨運動の在來の慣行では、易々たることである——遙かに全國的政黨の實質を備へたものとなる。けれども私は、それ故に合同問題を考へるに當つて、全民黨を無視してよい勢力だとは決して考へない。

いづれにせよ、森戸氏に取つては、地方無產政黨は無視してよい分量であり、若しくは無視しておきたい性質である。そこで森戸氏は當然にも、すべての無產政黨の合同の不可能から、直ちに大衆＝全民兩黨だけの謂ゆる單獨合同に跳躍される。森戸氏にあつては、全合同の『最善』の次には、兩黨合同の『次善』がある。これに反して私の場合には、最善の次には、當然に、全體としての地方政黨をも含むより廣汎な次善の合同である。そしてこの『次善』の合同の不可能が立證せられた時に、初めて兩黨の單獨合同といふ、次善の次ぎの次善が問題となる。

このことは、無產政黨の合同を繩張の設定や擴大のために『思惑』するのでなく、この問題を、無產階級運動にとつての致命的に重要な問題として、單一政黨の建設といふ一定の見地から取扱ふものに取つては、當然自明のことであるが、さて以上の如き相異を留保したら

ば、當面の情勢の觀測において、森戸氏と私とは、極めて接近した結果に達してゐると云ふことができる。

（二）

しかしながら形勢の觀察における一致は、かゝる形勢を如何に理解するかといふ點について、從つてまた、かゝる形勢のうちに、吾々はどのやうな方向に努力を向けるかといふ點について、必ずしも一致のあることを意味しない。また實際にも、森戸氏の見解と私自身――もしくは一般に單一無産政黨の主張者――の見解との間には、多くの相異がある。もちろん森戸氏の論文に現はれてゐるこれらの見解は、吾々の見解に對する批判として現はれてゐるものではない。從つて私は、森戸氏の見解を反駁しようとするものではない。たゞ森戸氏の見解を境として、吾々の見解をこれに照し合せて見ることは、私自身の見解、もしくは單一無産政黨論者一般の主張を一そう明瞭にするために、極めて有益だと思はれる。單一政黨の主張ないしは全合同の要求は、決して現在の『合同機運』にのみ關係したものではなく、この機運が過ぎ去つた後、またはこの機運のうちから幸ひに部分的な合同が達成せられた後においても、いなその以後においてこそ、一そう廣く、そして一そう明瞭に、大衆の理解に訴へる必要のあるものだから。

まづ第一に、森戸氏の主要努力は、すべての無産政黨の合同を要求する謂ゆる『全合同』論の素性を洗ふことにあつた。『全合同』の主張は、森戸氏によれば、第一にはブルジョア新聞記者や、社會評論家や、その他の無産黨ファンの如き、無産政黨運動の『局外者』を『背景』として起つた『鳴物入りの宣傳』であり、第二には、主として『黨生活の淺い青年』の『生眞面目ではあるが極めて粗朴な氣分』の現はれであり、第三には、『あわよくば現幹部に取つて代らんとする意圖を有する』黨内反幹部派の仕業でなければ、『合法政黨の陣營を撹亂させ』ようとする『極左フラクションの策動』によつて揚げられた聲である。けれども――と森戸氏は云はれんとするものゝ如くに見える――就中、全合同の主張は、『自壞又は併合の運命』に脅やかされてゐる地方無産政黨が、あわよくば『新黨において一株持てゝ割込の宿望が達せられる』といふ理由のために、『みつともない割込運動』よりはましだといふ損德勘定から、喚めき立てられてゐる叫びである。要するに『全合同』の主張なるものは、森戸氏によれば、萬が一にも當れば儲かるし、出來なくても失ふところのない『彼らに取つては最も利益の多い』『思惑』であり、投機であり、賭博である。

獅子が兎を撃つために全力を惜まぬやうに、森戸氏は、既に自滅に瀕してゐる筈だつた地方無産政黨を蹂躪するために、滿身の力をこめられてゐる。たゞこゝに興味のあることは、森戸氏が射撃を集中せられてゐる標的――地方無産政黨――こそ、社民＝勞農兩黨の態度によつて合同の範圍に境界がおかれた今日は、合同の範圍を擴大すること

のできる唯一の殘された領域だといふ事實である。合同が擴大せられる可能のある——ないしは恐れのある——唯一の部面に向つて、森戸氏の義憤が集中せられてゐるといふこと、これは勿論、偶然の一致に違ひないが、不幸な一致であつたと云はなければならぬ。

かように森戸氏にあつては、『全合同』の主張は、素朴な願望、淺薄な煽動、陋劣な策動、投機と思惑以外の何ものでもないが、これに反して單一無產政黨の形成をもつて、無產階級運動の努力の方向でなければならぬと考へる者は、『全合同』の要求の底にある、もつと重要な意義を見落すことはできぬ。『全合同』の要求は、幾度びか失望をもつて酬ひられたるにもかゝはらず、機會のあるごとに、幾度でも幾度でもわが國の無產者運動のうちに、嘗ても甦へつたし、恐らくは今日以後も現はれるであらうと思ふ。この事實は、わが國の無產階級運動が、たゞ單に、策動と思惑とのために翻弄せられてゐる光景と見るべきであらうか？　それともまた、無產階級が獨立した政治勢力として結成する過程のうちに嘗めつゝある、云ふべからざる苦惱の現はれと見るべきであらうか？　私は必ずしも森戸氏の見解に反對して、『合同機運』のうちには、かういふ淺薄または陋劣な動機が微塵も含まれてゐなかつたと保證しようとしてゐるものではない。合同を大衆＝全民の兩黨に限定しようとする人々の間にも、森戸氏のように、形勢の明瞭な『見透』からそれに盡瘁せられる人々以外にも、淺薄または陋劣な動機からそうする人があるかも知れないのと同じ意味において、『全合同』の主張者のうちにも、そういふ動機に支配せられた人々があつたかも知らぬ。けれども問題の核心は、この事實について爭ふことではなくて、假りに『全合同』の主張を百パーセントに策動と思惑以外の何ものでもなかつたとしたならば、この見え透いた策動と思惑とに對して、先づ第一に全民黨は何故に——よし森戸氏の云はれるように、たゞ名目上だけでも——讓歩しなければならなかつたのか？　大衆黨は何故に、これに讓歩しなければならなかつたのか？　そして勞農黨は、よしそれが白々しいマヌーヴァーに過ぎないにしても、その主要勢力たる大阪および京都の脱退を忍んでまでも、合同に對する態度を一變しなければならなかつたのか？　この疑問に對する答は明瞭である。『全合同の機運』は『複雜な利害で動きつゝある諸勢力が各々の匿されたる意圖を以て……造り上げられたもの』に過ぎないとされる森戸氏さへも、『全合同への大衆の欲求はそれ自身としては疑もなく正しい』ことを認められ、そしてこの『それ自身としてはあくまで正當な大衆の衝動的欲求』は、何ら鳴物入りの宣傳や、策動や思惑を待つまでもなく、『客觀的條件から必然に生成する』ものだといふことを認められてゐることが、既にこの疑問の一半に答へてゐる。しかるに現在の四分五裂した無產政黨の分野は、何ら左樣な社會的客觀的條件によつて直接に裏づけられてゐない、從つてまた、固定化せられてゐない、從つてまた不安定的である、從つてまた、『全合同』の『策動』と『思惑』との前にさへ動搖する、從つてまた、確乎たる指導理論——

社會民主主義――の上に立つて、その構成要素が最も異質的でないことを誇りとしてゐた社民黨さへも、わけなく分裂して、その中からは、森戸氏が未來の全合同への發展性を持つ中間合同の『核力』として囑目せられる全民黨が生まれることができた……等々。

（三）

この『全合同』の要求は、策動と思惑から生れた不可能な幻影であるばかりでなく、森戸氏にあつては、なほその上に、可能な合同――部分的合同――の對立物である。卽ち『現下の合同問題の本質は……全合同その者に對する贊否、もしくは之を追求することの熱意の存否にあるのではない……全戰線の統一は……無產諸政黨が卽時無條件の全合同をなすことによつてのみ到達されるとなす見解と……將來全合同もしくは大合同への一楔機たるべき堅實なる部分合同であるとなす見解との對立なのである』

最近の合同運動の過程のうちには、森戸氏の觀察せられるような光景を呈した部面があつたかも知れぬ。それにもかゝはらず、單一政黨の主張者は、當然に、合同問題の本質を、全合同と部分的合同との對立として理解するものではない。單一政黨論者の見る合同問題の本質は、たゞに現下の合同問題ばかりでなく、今日以前の合同問題の本質も今日以後の合同問題の本質も、一方においては戰線統一の要求と、他方においては、分裂した無產政黨の現在の分野をもつて、異つた指導精神の上に築づき上げられた固定した境界と見る見解、もしくは無產政黨の現在の分野を、そのまゝ異つた指導精神の下に固定化しようとする努力との對立なのである。

戰線統一の要求は、何時でも、それが組織の上で完成せられた形、卽ちすべての無產政黨の合同による單一な政黨の形成といふ代表的な要求となつて現はれる。けれども單一政黨の實現といふことは、勞働者と農民とその他の一切の無產者的要素が、組織の上で、獨立した一つの政治勢力に結成される過程といふことと同一意義であつて、何人といへども、無產階級政治勢力の結成が、たゞ一回の協議會によつて完成せられる過程であると考へてゐるものはない。反對に、それは多かれ少なかれ、同一方向への持續した努力を伴ふてのみ、初めて實現せられる過程である。云ふまでもなく、現在の無產諸政黨が、たゞ一回の合同協議によつて、卽時に無條件に合同することは、たゞに森戸氏に取つてばかりでなく、單一政黨論者に取つても、『これほど望ましいことが他にあり得よう』筈はない。けれども單一政黨論者は、その實現が容易だからこれを主張してゐるものではない。また全合同が卽時に實現できる時だけ全合同論者なのではない。實際においても、單一政黨の主張者は、合同の展望が『バラ色』の時ばかりでなく、最も『灰色』の時期においても、全合同の主張者であつた。

かように單一政黨論者は、卽時無條件にたゞ一回の作業によつて完成せられる『全合同』にのみ、一切の論據と希望をおくものではない。

從つて單一政黨の實現は、かゝる即時の『全合同』の可能と不可能とによつて、或は可能なことゝなり、或は不可能な『空想』に性質を變ずるものでもない。政治戰線の統一が實現される過程、言葉を換へて云へば、無產階級政治勢力の結成、單一政黨實現の過程は、『黨と黨との合同から、分裂主義指導者を排除した大衆と大衆との直接の結合までを含み得る彈力性のある過程である。』

かやうな見解を取る單一政黨論者が、部分的な合同に對して取るべき態度もまた自明であつて、私は曾て、この點を次の如く說明した。

『……努力の目標は全無產政黨の合同であつて、社民黨から勞農黨にいたるまで、地方政黨をも含めた全ての無產黨の參加に完全に道を開くばかりでなく、その參加を得るために誠意ある努力をすることであるが、不幸にして、なほ或る政黨が參加を拒否する場合には　殘餘の諸政黨によつて即時の合同を實行し、合同しない政黨との間には、共同委員會の如き共同鬪爭の常設機關を設けることが、最も正當であると思ふ。

『これは畢竟、「可能な範圍」における合同といふことに歸着する。合同は如何なる場合にも、可能な範圍で實現せられるほかないことは自明である。けれども或る人々は、この「可能な範圍」を偏見的に豫定し、合同をこの範圍に押込めようとするに反して、吾々は實際の合同計畫においても、理論的原則的には現在のすべての無產政黨の合同が可能である（一部指導者の偏執がそれを妨げてゐるにも拘らず）といふことから出發し、ただ實際の合同計畫の進行上の事實をして、可能な範圍を決定せしめようとする。

『かうして偏見によつてではなく事實によつて定められた「可能な範圍」における合同に對しては、よしそれが部分的な合同とならうとも、反對すべき理由がない。從つて現在の合同の機運を、例へば大衆＝全民兩黨のみの合同といふやうな、一定の限界內に喰ひ止めようとすることは不當であるが、これに反して、假りに兩黨以外のすべての無產黨が、事實上合同への參加（云ふまでもなく、指導精神に關する限り無條件的な合同への參加である）を拒否すると假定したならば、結局大衆＝全民兩黨のみによつて部分的な合同の行はれることは當然であつて、何人もこれに反對する權利はない。

『それ故に、私は現在の事情の下においては、全無產政黨の合同か、然らざればその他の一切の部分的な合同に反對するといふ立場を取るものではない。言葉を換へて云へば、最大な可能範圍においての部分的合同をも是認するものである。これに反して、全無產政黨の合同を唱へつゝ、またそれを欲しつゝ、しかも結果においては合同の可能範圍を局限するやうな方針を取るならば、それが最も拙劣な戰術であらうと思ふ』。（『文藝戰線』四月號、『合同機運の展望』）。

この拔萃によつて、單一政黨論者は當然にも、合同問題の本質を、全合同と部分的合同との對立として理解せぬことが明らかであると同時に、部分的な合同は、如何なる場合に全合同への傾向と對立する

か？　といふことも、おのづから明らかになつたと思ふ。部分的合同は、それが全合同への傾向に對する抵抗力を擴大强化するために『思惑』される瞬間に、また合同の機運を、階級のためではなくて個人または個人の集團の利害のために偏見的に定めた一定の範圍內に局限するための『策動』となつた瞬間から、それは全合同への傾向と決定的に對立するものとなる。かように、全合同への傾向と對立するものとして理解せられた部分的合同は、そのこと自體によつて、その性質を告白してゐるものだと云ふことができる。

　しかしながら、單一政黨論者が即時の全合同の不可能を承認して、部分的合同をも――ことに單一政黨の基礎的勢力を形成するが如き性質の部分的合同の場合においては、特に――を支持するといふ事實は、黨大衆が絶えず即時の全合同を要求することには、『空望と幻滅とを繰返す』以外の何らの意識もないものだといふことを意味するものではない。かゝる大衆の要求は、全合同を今日直ちに可能とせぬまでも、少くとも合同の不可能な領域を、合同の可能な領域に變化する力である。

　しかし――と或る人々は云ふだらう――その要求は、『現在の情勢のもとでは、到底充たしがたき欲求』ではないか？『全合同不能の見透を持ちながら……全合同論を呼號する』ことは、『大衆に阿附し、大衆を弄び、大衆を欺瞞し、大衆を愚にするもの』ではないか？

　私自身もまた、森戸氏に劣らぬ大膽と自信とを以つて、今日は全合同を不可能ならしめるような『情勢』のあることを明言するに躊躇せぬ。けれども吾々が、この『情勢』として羅列し得るものは何だらうか？　某黨の幹部はかう考へてゐる、某黨の指導者はかういふ態度を取つてゐる、某黨の機關はかういふ決定をした、某黨の某々が、かく〳〵の目的でこれ〳〵の策動を試みてゐる……等々々ではないか。これらの事實には、一定の瞬間には合同を不可能にする力のあることは、爭ふことができぬ。けれども合同を不可能たらしめる『情勢』を構成してゐるこれらの羅列せられた條件中のたゞの一項目といへども、動かすことのできない社會的客觀的な根據と直接に結合してゐることに說明せられたものがあつたらうか？　云ふまでもなく、人々の意識もまた客觀的な事實であるといふ意味では、合同を不可能にする客觀的の條件が存在すると云ふことができる。いかなる意識も究極は社會的條件によつて決定せられてゐるといふ意味では、合同を不可能にしてゐる意識上の條件も、必然的な條件だといふことができる。けれどもそれ故に大衆は、全合同の要求を斷念しなければならぬと敎へることは、たゞ徹底した宿命論者のみが爲し得るだらう。これに反して、私が現在の情勢の下においては、全合同の實現は不可能であると云ふ場合には、それはたゞ、大衆の要求の相對的の力が、動かし得べき條件を動かすに足りないといふことを意味するに過ぎぬ。

(四)

けれども、指導精神の相異には、社會的根據があるではないか？そして合同を不可能たらしめてゐる一切の『情勢』を取り去つても、なほ指導精神の相異が殘るではないか？

私はこゝで、指導精神とは何か？　といふ問題を、詳細に検討してゐる暇はない。けれども、すべての精神または靈魂が甚だ捕捉し易からざるものであるやうに、この指導精神なるものも、その正體が極めて明確を缺くことを認めざるを得ぬ。少くとも、指導精神といふ用語が極めて不正確に曖昧に慣用せられてあることは、爭ふべからざる事實であつて、この不明確が與へる便利のためにこそ、この言葉は盛んに愛用され、盛んに振り廻されてゐるとも解することができる。

指導精神といふ言葉は、或る場合には、政友會や民政黨が『立黨の精神』と名づけてゐるものと、殆んど同意味に用ひられてゐる。また他の場合には、主として黨指導者の漠然たる氣分や偏向を表はしてゐる場合もある。かういふ意味での指導精神の相異も、一定の瞬間には合同を妨げるものではあるが、合同を原理的に決定的に不可能にするものではない。いま私が問題にしようとしてゐる指導精神は、云ふまでもなく、一そう限定せられた意味において指導精神である。

森戸氏は、『對立的指導精神が歴史的事實として世界的に存在しつゝある』ことを指摘せられてゐる。そしてかような『世界的範圍において對立抗爭しつゝその存在を續けてゐるところの、云はゞ客觀的な社會精神』――ないしは社會的客觀的な根據の上に立つてゐる二つの原理的な方向こそ、私がいま問題とする指導精神である。

私は森戸氏と共に、かような意味での指導精神の對立が、世界的に存在することを認めるものである。それと同時に、かういふ意味における指導精神の相異とは、究極においては、資本主義社會が新たな社會形態に發展し變形する法則または過程についての一定の見解、從つてまた、それに根據した無產階級運動の基本戰略についての見解の相異を意味するものにほかならぬ。では、現に世界的範圍において對立抗爭しつゝある、かういふ意味においての指導精神とは何だらうか？私は卒直に、それは社會民主主義と共產主義であると答へるに躊躇せぬ。

こゝまでは、私の信ずるところでは、森戸氏と單一政黨論者との間には、恐らく完全な見解の一致がある。では現在のわが國における對立した無產政黨の分野は、かういふ意味での指導精神の相異と對立とを精密に代表し、もしくはそれに照應したものであらうか？　森戸氏が、『……これらの兩黨の態度ならびにそれの基底をなしつゝある指導精神』と云ひ、『黨の態度および指導精神はしかく簡單には淸算されえない』と云はれ、『指導精神の對立と相互の不信とが存在する諸黨派』と云はれ、そして『指導精神の對立はまた多くの場合政黨の對立をやむなくする』と云はれる時、森戸氏が前掲の問に對して肯定的の答を與へられてゐることは明らかであつて、森戸氏は現在の無產諸黨の對立が指導精神の對立であることを、寧ろ自明のことゝして承認せられ

てゐるもの丶如くに見える。

では、かういふ意味においての指導精神を異にする政黨の『全合同』は、『現下の情勢においては勿論不可能だが、今日はともかくとして、それは畢竟、原理的には可能なのであるか不可能なのであるか？森戸氏は、少くとも今日は、『全合同について思惑する勇氣を持たない』ことを告白せられてゐる。けれども、原理的には、必ずしもそれを不可能とされるものではない。否、反對に、森戸氏はそれを可能とする前提の上に立たれてゐるらしい。森戸氏が大衆＝全民兩黨の合同を、『次に可能なるべき大合同への一階梯』として推奨せられ、全合同に對する『大衆の衝動的欲求』の『全的實現への當座の段階として：……全的實現（卽ち全合同）への階梯であるところの部分的實現（卽ち部分的合同）に向つて全力を致すこと』を勸告せられてゐることが、これを證據だてゝゐる。卽ち森戸氏は、一方においては、現在の政黨の對立が異つた指導精神の對立であることを認められ、同時に他方においては、指導精神の異るこれらの諸政黨も、他日は合同の可能性ある（云ふまでもなく、大衆＝全民兩黨の謂ゆる中間的合同の階梯を踏んで）ことを認められてゐるもの丶如くに見える。

この最後の二つの點については、單一政黨論者は、まさに正反對の見解を取つてゐる。この點を明かにすることは、單一政黨論に對する若干の誤解を一掃するために、極めて必要なことだと思ふ。

第一には、今日世界的に對立してゐるような、儼然たる社會的客觀的根據に基づく異つた指導精神によつて結合してゐる黨と黨との間には、單一政黨論者の見解によれば、合同は不可能だといふことである。從つて單一政黨の主張者は、森戸氏とは反對に、異つた指導精神の上に固定した黨と黨との合同を思惑する勇氣を有しない。從つて單一政黨論者の見解によれば、社會民主主義黨と共產黨との合同は、『たゞに現下の情勢』がそれを不可能としてゐるのではなくて、それは原理的に不可能なことである。その如く、共產主義または社會民主主義を指導原理とする政黨は、單一政黨のうちに解消することはできぬ。言葉を換へて云へば、それは單一政黨の外に獨立した別個の存在を持つべき、社會的客觀的な根據を有してゐる。

第二には、わが國における無產諸政黨の現在の分野は、單一政黨論者の見るところでは、必ずしもかような意味での、異つた指導精神——從つてまた、異つた指導精神を通じて社會的客觀的な事實——を精密に代表するものではないといふことである。

これに反して、現在の政黨分野は、指導精神の相異に照應するといふ見解を取るならば、當然の推論として、『合同すべき諸黨派の間には、指導精神の同一又は近似……の存在が絕對的に必要』であり、この同一又は近似は、森戸氏に從へば唯だ大衆＝全民兩黨の間に存してをり、社民黨指導部の意見によれば、社民黨と大衆との間にのみ存するといふことになる。

またかういふ見解から出發するならば、これらの指導精神の同一又

は近似の存在する政黨間の部分的合同のみが、唯一の可能な最終的な合同であつて、この部分的合同の先きに、それが階梯となり當座の段階となるところの、バラ色をした全合同（大衆の欲求の全的實現）があるかの如き思はせぶりをすることこそ、原理的決定的に實現不可能なことを可能であるかの如く裝ふことであつて、『大衆に阿附し、大衆を弄び、大衆を欺瞞し、大衆を愚にする』ことの最も甚しいものだといふことになる。

　云ふまでもないが、現在の政黨分野は、指導精神の相異を――指導精神の相異を通じて一定の社會的客觀的條件を――精密に代表したものではないといふことは、決して、わが國にはかういふ指導精神の對立が存しないとか、またはかういふ異つた指導精神の生まれる社會的客觀的な條件が存しないといふ意味ではない。現にわが國においても、かういふ指導精神の對立がある。たゞ吾々の云はんとしてゐることは、現在では、これらの二つの事實――指導精神の對立と政黨分野の對立――とは、決して一致してゐないといふことである。例へばわが國には、社會民主主義の發生すべき社會的客觀的の條件がある。また現に社會民主主義者がある。そして社會民衆黨の或る指導者は、自ら社會民主主義者と名乘り、その政黨を社會民主主義の政黨だと云つてゐる。けれどもそれにも拘らず、現在の社會民衆黨をもつて、わが國における社會民主主義の政治勢力を代表する黨とは認めることができぬ――言葉を換へて云へば、社會民衆黨は、社會民主主義黨として固定してゐない――といふことである。

　これに反して、現在の政黨分野は、大部分、過去における組合運動のいきさつや、無産政黨樹立運動の過程における偶然（そのうちには、生硬な左翼分子の誤つた方針の結果が一大部分を占めてゐる）によつて決定せられた分野であることは、爭ふことができぬ。何人が、社民黨の支持團體たる勞働總同盟と大衆黨の支持團體たる組合同盟との勞働大衆が、社會的××と無産階級の根本××とについての異つた原理によつて分かれてゐると云ふだらうか。如何に熱心に、大衆＝全民兩黨のみが『指導精神の同一又は近似』を有する――從つて合同の可能な――唯だ二つの黨であることを說得しようとする人々でも、社會民衆黨から分離する前後において、現在の全民黨を形成する人々が、社會的××の過程と無産階級の根本××とについて、社民黨のそれとは絶對に相容れない別個の原理――指導精神――を築づき上げたと主張する勇氣があるだらうか。

　もちろん、社會民主主義を奉ずる社民黨の一部の指導者は、かうして偶然的に（直接に、社會的客觀的な根據に基づいてゐないといふ意味で偶然的に）定まつた社民黨の分野を、そのまゝ社會民主主義黨の分野として固定化することに努めてゐる。そして一般に現在の政黨分野を指導精神の對立の分野として取り扱ふ見解、特別には生硬な極左分子のさうした見解は、この固定化に無意識的な協力を與へてゐる。けれども大衆には、かゝる勢力に屈服する義務はない。たゞに社

民黨ばかりでなく、いづれの政黨の場合にも、現在の政黨の分野を指導精神の對立として固定化しようとする一切の努力に對しては、大衆は『即時全合同』の要求をもつて對抗する權利がある。

單一政黨の主張は、指導精神（前述のような意味での）の異つた諸政黨を、一つにすることだと解してゐる人々がある。かういふ理解の上に立つならば、わが國における無產政黨の合同問題は、一九二二年の第二インタナショナルと第三インタナショナルとの合同問題と全く同じ範疇に屬する問題になつて來る。勞農黨と全國民衆黨とを、第三インタナショナルと第二インタナショナルとに見立てることは（遺憾ながらその他の政黨に割當てるべき第五、第六のインタナショナルが無い！）合同が原理的決定的に不可能なことを納得せしめるためには役立つかも知れないが、何ら合同の道を淸めるような教訓を與へるものではない。合同を原理的に不可能にするような見地に立ちつゝ、合同の空を眺めて嗟歎することは、最も善意な場合にも、純然たるセンチメンタリズムに過ぎぬ。單一政黨の主張者は、最も純眞なセンチメンタリズムにさへも興味を有しないように、指導精神（前述のような意味での）の異つた政黨の合同といふような投機と思惑にも興味がない。

これに反して單一政黨論者にとつては、現在の政黨分野は、決して異つた指導精神（前述のような意味での）の分野に照應したものではない。また現在の無產諸政黨は、これらの指導精神の上に固定したものでもない。そこで初めて、これらの政黨の合同が問題となつて來る。

では、社會民主主義黨はどうなるのか？『全合同』と戰線統一とはどうなるのか？

既に與へられた紙數を超へたから、私はこの重要な問題についても、簡單な說明にとゞめておく。

（五）

『「全合同」は……明かに無政府主義者やサンヂカリストを除外してゐるのだから、全無產階級戰線の統一ではむろんない。それは政治戰線の統一であるにすぎない。然もこの政治圈内においても×××××を包含しようといふ意圖は殆んどどこにも存在しないやうだから、全合同は全合法的無產政黨の合同を意味する。從つて若し之を全無產階級戰線の統一でもあるかの如く大衆に宣傳したならば、それは明かに大衆を欺瞞することになる。……』

この饅頭の中には餡と共に小判を包含すると云つて賣つたなら、明らかに大衆の欺瞞である。私はこの命題に完全に一致するように、こゝに拔萃した森戸氏の立言に對しても、全心的な一致を表明するの光榮を有してゐる。けれどもそれと同時に、無產政黨の合同に、無政府主義者やサンヂカリストの非政治團體やないしは反政治團體、麻雀クラブや大師講等々を包含せぬことが暴露せられたゝめに、『全合同』の

信用が幾らかでも失墜したとは考へない。

合法政黨の合同に、地下的政治團體が包容されないといふことも、自明である。たゞプロレタリア前衞黨の場合には、それが合法的な政黨として存在する場合といへども——單一政黨論者の見解によれば——その特殊な任務と組織とは、斷じて共同戰線黨のうちに解消せらるべきものではない。從つて兩者の間には、おの〳〵獨立した組織と組織との間の限定された部分的な共同戰線（卽ち、本來の意味での共同戰線）を形成することはできるが、組織の上の合同によつて、共同戰線黨を形成することは、固より問題となり得ない。

單一政黨は社會民主主義黨を包含し得るかといふ問に對しては、私は固より、否定的な答を與へる。勿論この場合、社會民主主義黨とは、社民黨を指すものではない。社會民衆黨の場合には、一部の指導者の意圖がどうあらうとも、今日はなほ、社會民主主義黨として固定したものではない。そこで、社民黨の指導者がその見解を變へ（または黨大衆が社會民主主義的指導者から分離して）その他の諸黨と共に單一政黨に合同する場合があるかも知れぬ。この合同によつて、一部の指導者が社會民主主義黨と名づけてゐた政黨は、消滅する。しかしこの場合にも、單一政黨が、社會民主主義黨を包容し得たわけではない。わが國の社會的條件のうちに、社會民主主義を發生する根據のある限りは、ブルジョア第三黨といふ意味での社會民主主義黨は、何らかの形において、何處かに現はれるにちがひない。小ブルジョア急進黨の發達してゐないわが國では、今日この發生を促がす誘引は相當に強いと云ふことができる。そこで單一政黨が形成されると否とに拘らず、また現在の社民黨が、社會民主主義黨として固定すると否とに拘らず、どの道、社會民主主義黨は出來るだらう。單一政黨の成立は、必ずしも社會民主主義黨の發生を防止することが出來ぬとしたならば、それは社會民主主義黨を包容することができぬといふことである。けれども單一無產黨が、本質においてブルジョアジーの協力者たる黨を包含し得ないにしても、決してその信用を傷つけるものではない。

しかしながら、單一政黨がプロレタリヤ前衞黨や社會民主主義黨を包容し、もしくはその作用を代行することができぬといふことは、決して、その構成要素として、社會民主主義者や共產主義者を包容し得ないといふことを意味するものではない。たゞに社會民主主義者と共產主義者ばかりでなく、無政府主義者といへども、サンヂカリストといへども、黨の綱領と統制とを承認する限りにおいては——言葉を換へて云へば、その人が如何なる指導原理を抱いてゐようとも、そして如何なる指導原理によつてそれを肯定するのであらうとも、卽ち指導原理に關する限りは無條件的に——この黨の任務とする鬪爭の必要を承認する限りは、この政黨から排除せられるべき理由はない。

かういふ意味において、單一政黨は、あらゆる無產階級分子の共同戰線の黨であり、またかういふ意味において、共同戰線黨は、指導精

神に關する限り無條件的な合同によつて實現することができる。

『對立的指導精神が歴史的事實として世界的に存在しつゝある今日の事情のもとには、指導精神に係りなき無條件的合同を言ふのは恐らく一箇の空想に近い。』──社民、大衆、全民、勞農、十ケの地方政黨合計一ダース有餘の無産政黨によつて代表せられる一ダース有餘の指導精神が、いま世界的に對立抗爭しつゝあるとしたならば、森戸氏の言葉は、完全に正しいといふことができる。これに反して、合同によつて成立する新政黨を、一定の指導精神──それは歴史的事實として世界的に存在し、世界的に對立抗爭してゐる二つの指導精神の一つ──によつて條件づけ、それでなほ成立するバラ色の希望のある合同があるだらうか？ 森戸氏の支持せられる大衆＝全民兩黨の合同にしても。幸ひにそれが成立するとしたならば、恐らくは新政黨を社會民主主義の黨とし、または共産主義の黨とするといふ條件の下に成立するのではなくて、指導精神に關する限り無條件的であるといふ條件の下においてのみ成立するのではあるまいか。(五月九日)

第二貧乏物語

河上肇

第十一回

A　前回に約束した通り、この『物語』も今日かぎりで打ち切ることにするよ。

C　打ち切ると云へば名殘り惜しくも思はれる。いづれにせよ話はそれで纏まるか？

A　實は豫期したやうな纏まりは附かないのだ。僕はこの『物語』の第四回目で、次ぎのやうに述べた。『社會全體の（社會そのものの）滅亡は、當該社會の生產諸力の萎靡減退に基づくが、これに反し、社會形態の××（すなはち一定の社會が一の組織形態を脫ぎ棄てゝ新たなる他の組織形態へ移行すること）は、當該社會の生產諸力の發展增大の結果である。このことを理解しおくことは、吾々が現にそのもとに住みつゝある現代の資本主義的社會が、正に××××××××××××××××、眼前の諸現象を正當に理解するため、特に必要である。このことをさへ明確に理解してをれば、現代社會の諸矛盾を生產諸力の發展によつて解決せんとする一切の政策の窮極的無力は直ちに看取されうる。』かゝる考がこの『物語』にとつての中心的思想なのだが、それを少し述べかけた所で、僕は故障にぶつかつた。すなはち第四回目の終りの部分は三頁だけ削除され、更にその第五回分に至つては、前後を通じて殆んど千字內外の削除を受けた。そんなことで、一時僕はこの『物語』を中斷してしまはふかと思つたのだが、ともかく今日まで續けて來た。しかしどうせ最初に豫期したやうな纏め方をするわけには行かない。可能なかぎりのことを試みて、一應話を打ち切るより仕方がないのだ。

C　それも可からう。そのつもりで話を聽くよ。

十六　資本主義社會の行き詰り——その必然的××

A　前回に述べたやうに、資本家は勞働者から出來るだけ多くの剩餘勞働を絞り取るために、勞働時間の出來うるかぎりの延長、賃銀の出來うるかぎりの値下げ、勞働能率の出來うるかぎりの增進を企てる。これら三つのものは、資本家が勞働者から出來るだけ多くの剩餘勞働を絞り取ることを意識的な目的としてゐるところの、基本的な戰術と云つても可い。ところで資本家はたゞに勞働者に對して戰ふことを餘儀なくされてゐるばかりでなく、資本家同志がまた互に相戰ふことを餘儀なくされてゐるのだ。

C　ちよつと待つてくれ。君は『資本家は勞働者に對して戰ふことを餘儀なくされてゐる』といふが、勞資協調主義とか溫情主義とかいふ奴で行けば、そんな必要はないだらう？

A　馬鹿なことを言つては困るぜ。勞資協調主義とか溫情主義とかいふ奴は、なるべく敵の鬪爭心を緩和させその銳鋒を挫くための巧妙な一戰術なのだ。資本家は出來るだけ勞働時間を長くし、出來るだけ賃銀を安くしようとしてゐるが、勞働者から云へば、勞働時間は短いほど樂だし、賃銀は多いほど得だ。利害は正に相對立してゐる。そこにどうして利害の調和があらう。鬪爭は必然だ。しかし戰術としては、敵の鬪爭心をそゝり立てるやうな正攻法を避けて、相手に阿片を飮ませて眠り込ませるやうな遣方もある。資本家たちが協調主義だの溫情主義だの云つてゐるのは、つまりそれだ。見たまへ、溫情主義の典型ともいふべき鐘紡が今何を企てゝゐるかを。今後會社の儲けが減りさうだと云ふので、假に職工の賃銀を二割も三割も減さうとしてゐるのだ。『會社は親だ、工人諸君は子だ、この親子が一體となつて行くのが溫情主義で、これは絕對に他社の追從を許さない我社の美點だ』と唱へ來つた鐘紡が、愈々賃銀の値下げを斷行すると云ふのは、よく〳〵會社の經濟が行き詰つたのだらうと思ふ人もあらうが、實際を云へば次ぎの通りだ。鐘紡の拂込資本は昭和四年末日現在が二千八百餘萬圓にすぎない。しかるに、僅かこれだけの資本で、大正三年上半期から昭和四年下半期に到る僅々十六年間に擧げた利益金は、實に二億四千三十七萬四千圓に上ぼつてゐる。そのうち株主へ配當されたものは一億四千三百三十七萬八千圓で、前記拂込資本金の約五倍に相當してゐる。すなはち資本家どもは夙くの昔にその元本を回收してゐるので、ずつと以前からたゞで儲けてゐるやうなものだ。なほ一握りの重役は、大株主として前記の如き配當を得てゐる上に、法外なる種々の利益を得てゐる。賞與金の名の下に彼等が公然そのポケットに入れた

ものだけでも、前記の十六年間に七百四十五萬圓に達してゐる。近頃武藤氏が社長をやめた際に退職金として得た三百萬圓を加算すれば、合計千四十五萬圓になる。斯樣な莫大な利潤を僅かな期間內に得てゐる鐘紡、前期にも三割五分の配當をなしえた鐘紡、しかも平生から溫情主義家族主義を看板してゐる鐘紡、それが少し景氣が面白くなささうだと云ふので、早速賃銀の値下げをしようとするのだ。資本家のいふ『溫情』とは、こんなに溫(あたたか)いものなのだ。僕はマルクスの次ぎの言葉を思ひ出さずにはゐられない。『市場價格下落の時期と恐慌および停滯の時期とを通じ、勞働者がもし全然業を失ふに至らなければ、彼等の賃銀が引下げられることは確實だ。だが、騙(だま)されて濟ますつもりでなければ、此の如き市場價格下落の際においても、勞働者は資本家に對し、如何なる割合において賃銀の引下げが必要となつたかを爭はなければならぬ。もしも超過利潤の得られる好景氣の時期に、勞働者が賃銀の値上げのために戰つてゐなかつたならば、產業上の一循環期を平均して見て、彼れは彼れの平均賃銀すなはち彼れの勞働力の價値さへも受取らぬことになるであらう。周期中の不景氣時代には彼れの賃銀が當然に引下げられるに、周期中の好景氣時代に補償を求めないやうにしなければならぬと要求するが如きは、愚の骨頂である。』(拙譯『勞賃、價格および利潤』、大正十五年版、六九頁。)溫情主義の假面にだまされ、平素から組合といふ城塞を築いて戰備を嚴重にすることを怠つてゐた鐘紡の勞働者諸君は、いま資本家側のだまし打ちに會つて、起つにも起たれず、散々な目に逢つてゐる。資本家のいふ溫情主義は、勞働者に油斷させて鬪爭組織を有たせないための巧妙な一つの戰術だといふことは、この一例でも分からう。

C　なるほど君の言ふ通りだ。それでは話の本筋を進めてくれ。

A　先程も云うた通り、資本家はたゞに勞働者に對して戰ふことを餘儀なくされてゐるばかりでなく、資本家同志がまた互に相戰ふことを餘儀なくされてゐるのだ。それはどういふ譯かといへば、元來資本主義の社會は自由競爭の基礎の上に立つてゐる社會だ。それで自分が相手を克服しなければ、自分が相手に克服されてしまふ。さういふ關係に資本家同志が置かれてゐるのだ。

C　資本家といふものも氣の休まる暇はないものだね。

A　それはさうだ。そして彼等は、自分たちは斯くまで氣骨を折つてゐるのだから、莫大な報酬を得るのも當り前だといふ風に考へてゐるのだ。それは兎も角もとして、資本家が相手を克服するための唯一の方法は、自分の商品を安く供給することだ。ところで、自ら破產することなくして商品を安く賣るためには、これを安く生產せねばならぬ。**生產費の減少といふことが、そこで、資本家の主要眼目の一つと**

なるのだ。

Ｏ　出來うるかぎり勞働時間を長くしたり賃銀を値下げしたりするのは、つまりそのためではないか？

Ａ　それはそれに違ひないが、それ以外に今一つ有力な方法がある。生産技術の改良がそれだ。そして分業および機械の應用はその主なるものだ。これによつて勞働の生産力が著しく増加する。

Ｏ　勞働の生産力とは何のことだ？

Ａ　勞働が物を造り出す力のことだ。この力の大小は、一定分量の勞働によつて生産される物の分量の多少によつて測られる。もし勞働能率（すなはち勞働の強度または密度、詳しく云へば一定の時間内に支出される勞働の分量）が一定してゐるとすれば、勞働の分量はまた勞働時間によつて測られる。だから、もし勞働の生産力が増加したならば、一定分量の勞働で（または一定の勞働時間で）生産される生産物の分量が増加する。そのことはつまり、一定分量の生産物が以前よりも少量の勞働で生産されるやうになつた、と云ふことを意味する。

Ｏ　さうなれば、その物の價値は減少するね。

Ａ　君の云ふ通りだ。しかし玆に注意せねばならぬことは、生産技術の改良は總ての資本家を通じて一齊に行はれるのではない、といふことだ。例へば或る紡績業者が同業者を征服せんがために、それらの同業者を出し抜いて、先づ自分だけが新たな紡績機械を採用したとするならば、勞働の生産力の増加といふことは、彼れの使用してゐる勞働者だけについて起る。從つて一定量の綿絲を生産するために以前よりも少い分量の勞働しか要らなくなつたと云ふことは、たゞ彼れの製品についてのみ云へることだ。世間一般の綿絲は、それを生産するために、依然として以前と同じ分量の勞働を必要としてゐる。しかるに一定の商品の市場價値はそれを生産するため社會的に必要とされる勞働の平均量によつて決定されるのだから、右に述べたやうな場合には、綿絲の市場價値には變化が起らない。たゞ他に先んじて生産技術の改良を行つた資本家のみが、他よりも少い生産費でこれを生産しうることのために、エキストラの利潤（普通の利潤率以上の利潤）を得る。そしてこのことが彼れを驅つて絶えず生産技術の改良に努力せしめるゆゑんであるが、しかしたとひ彼れが他に率先して一定の技術的改良を行つたとしても、彼れは長くそれを獨占することが出來ない。間もなく他の資本家たちもそれを模倣することになる。ところで、さうなつてしまへば、問題の商品を生産するため社會的に必要とされる勞働の平均量が減少するから、商品の市場價値そのものが減少する。從つてまた、前に述べた特定の資本家のエキストラの利潤も消滅する。しかし再び何人かが新たなる技術上の改良をする。前に述べたと

同じやうな經過が再び繰り返へされる。かくして進むうちに、絕えず生產技術上の改良が行はれ、勞働の生產力は增加し、諸商品の價値は減少する。

C なるほどさう考へてくると、色々な商品の價値は次第に減少する筈だが、しかし實際を見ると、物價は益々騰貴するやうに思はれるがどうか？

A 價値とは値打のことだ。物價とは一般物價のことで、種々なる商品の價格すなはち値段のことだ。今日では物の値打を言ひ現はすために、金の一定分量をもつてする。いつかも話したやうに、金一圓といふのは純金二分のことだ。その純金二分を物差にして、色々な商品の値打を金何圓何十圓といふやうに言ひ現はす、それがそれらの商品の値段だ。だから諸商品の値打は減少してゐても、その値打を言ひ現はすべき物差の値打がもつと減少してゐるなら、商品の値段の方は却て騰貴するといふことになる。

C それは分かつた。ところで諸商品の價値が減少すれば、どうなると云ふのか？

A それが重大問題なのだ。――諸商品の價値が減少するにつれて、勞働力といふ商品の價値もまた減少するのだ。勞働力といふ商品の價値がどうして決まるかと云ふことは、この『物語』の『十六、商品としての勞働力』といふ所で說明した。『賃銀といふのは、つまり商品としての勞働力の代價だ。ところで總ての商品と同じやうに、この勞働力といふ商品の價値は、これが生產のため必要とされる勞働の分量によつて決まる。そこでつまり一日分の勞働力の價値は、勞働者自身および彼れの家族の一日分の生活資料の價値と同じことになる。』だから、もしこれら生活資料の價値が、前に述べたやうに、生產技術の改良、勞働生產力の增加のために、次第々々に減少してくるならば、それにつれて勞働力の價値もまた次第に減少するのだ。

C 勞働力の價値そのものが減少するなら、俺たち勞働者はたとひ資本家を強制して俺たちの勞働力をその價値通りに買ひ取らすことにしても、全生產物に對する俺たちの割前は次第に減少してくるな。

A 全くその通り。そしてそれが吾々にとつての大問題なのだ。この前、僕は賃銀の値下げについて、次ぎのやうに述べた。『資本家はできるだけ賃銀を勞働力の價値以下に切り下げようとする。例へば一日三圓の値打はあつても、これを二圓で買ひ取らうとするのだ。それは、さうすることによつて、一日の勞働時間のうち必要勞働時間を占める部分を少くすることができ、それにつれて剩餘勞働時間を多くすることが出來るからだ。』賃銀を勞働力の價値以下に切り下げることは、斯樣な意味をもつてゐる。ところが今、勞働者はたとひ資本家を

强制して自分たちの勞働力をその價値通りに買ひ取らすやうにしても、もし勞働力そのものの價値が絶えず減少するなら、一日の勞働時間のうち必要勞働時間の占める部分は段々少くなる。このことは、一日の勞働時間にして變化なきかぎり、剩餘勞働時間が――從つてまた、勞働者が資本家に向つて提供する剩餘勞働の分量が――益々増大することを意味する。そこで君の言ふ通り、社會の全生産物のうち、資本家階級に歸屬する部分の割合は益々多くなり、勞働者階級に歸屬する部分の割合は益々少くなる。

C　君は先きに、勞働時間の延長、賃銀の値下げ、勞働能率の増進、この三つをもつて、資本家が勞働者から出來るだけ多くの剩餘勞働を絞り取ることを意識的な目的としてゐるところの、基本的な戰術だと言つた。ところが、吾々が今論じつめて來たところによると、以上三つの戰術の外に、生産技術の改良に基づく勞働の生産力の増進といふことが、やはり資本家の搾取する剩餘勞働を増加するための有力な戰術になるではないか?

A　全體の結果からいへば、勞働の生産力の増加は、たしかに資本家階級に歸屬する剩餘勞働の分量を増加する。しかし個々の資本家が自分の工場で生産技術の改良に努力してゐるのは、先きにも述べた通り、他の資本家との競爭において勝たんがためである。この場合、個々の資本家の頭腦に宿つてゐる意識的な目的は、勞働者から出來るだけ多くの剩餘勞働を絞り取らうとすることに存在してゐるのではない。個々の資本家は、諸商品の價値を減少せしめ、引いて勞働力の價値をも減少せしめようといふやうなことを、その目的として意識してゐるのでは全くない。だから勞働力の價値の減少に伴ふ剩餘價値の増大は、資本家の意識的な戰術として數ふべき性質のものではない。

C　それはつまり何人の意圖からも獨立した結果なのだね。

A　その通り。ところで、資本家が物を造るのは、自分で消費せんがためではなく、これを賣つて儲けんがためである。しかるにもし、資本家階級と勞働者階級と、この二つの階級のうち、後者の所得が全體の割合から云つて段々に減つて來るとするならば、それは取りも直さず資本家の生産する商品に對する勞働者側からの需要が、次第にその供給と均衡を失ふに至ることを意味する。こゝに資本主義の根本的矛盾の一つの現はれがある。資本家は出來るだけ儲けなければならぬ、そのためには勞働者から出來るだけ多く搾取しなければならぬ、しかしさうするならば勞働者の購買力は充分に増加しない、從つて資本家の生産する商品は思ふやうに賣れない、しかもそれらの商品が賣れなければ資本家は儲けてゆくことが出來ない。此の如くにして資本主義はそれ自身のうちに一の解決すべからざる矛盾を含んでゐるのだ。こゝ

九二八年九月一日××××における××××××で採用された××××××の××に

『利潤に對する追求は、ブルジョアジーをして、益々成長しゆく規模において生産諸力を發展せしめ、資本主義的生産諸關係の支配を强化し擴張すべく餘儀なくした。それによつて資本主義の發達は、資本主義體系のあらゆる內的諸矛盾を、なかんづく勞働の社會的性質と占有の私的性質との間の・生産諸力の成長と資本主義の所有諸關係との間の・根本矛盾を、絕えずより高き段階において再生産した。生産手段に對する私有財産の支配、この生産の無政府的自然成長的過程は、生産の無制限な擴張の傾向とプロレタリア大衆の制限ある需要との間の矛盾(一般的生産過剩)の發展と關聯しての、各種生産部門間の經濟的均衡の破壞へと導き、それはまた週期的に繰り返へされる破綻的な恐慌とプロレタリアートの大衆的失業を齎らした。』

といふ一節があるが、その中で『生産の無制限的な擴張の傾向とプロレタリア大衆の制限ある需要との間の矛盾(一般的生産過剩)』と言つてあるのが、僕の今述べ來つたところに當て嵌まるのだ。

O　それがどうして『生産諸力の成長と資本主義の所有諸關係との間の根本矛盾』の現はれと言へるのだ?

A　資本家が相競うて實現するところの生産技術の改良——分業および機械の應用の絕えざる發展——は、取りも直さず生産諸力の發展を意味する。生産諸力とは、いつかも述べたやうに、富の生産に役立つものとして人間社會に歸屬してゐる諸々の力のことだ。これらの力が增加するために、その結果として、勞働の生産力が高まる。ところで、この勞働の生産力が高まつて來れば、既に述べたやうに、諸商品の價値の減少——商品としての勞働力の價値の減少——プロレタリア大衆の購買力の減少等々、一系列の現象が起り、そのために、種々なる生産物が資本家の利潤を目的として生産されるかぎり、そこに解決しがたき矛盾が起る。しかも種々なる生産物が資本家の利潤を目的として生産されると云ふこと、すなはち資本主義的生産は、生産手段に對する資本家の所有權を前提としてゐる。彼等はこれらの生産手段を私有するがゆゑに、生産を自己の權內に收めることが出來、また生産された生産物は盡くこれを自己の私有物とすることが出來る。かういふのが即ち『資本主義の所有諸關係』なるものだ。生産諸力の發展、勞働の生産力の增加に伴うて問題が起るのは、生産手段や生産物に對する所有關係が右の如くなつてゐるためだ。だからそれは、簡單にいへば、生産諸力と生産諸關係(法律的には所有諸關係)との間における矛盾の現はれだ。

Ｃ『各種生產部門間の經濟的均衡の破壞』といふのは、どういふことなのだ？

Ａ 例へば織物について考へて見よう。織物が生產されるためには、先づ織物の生產部門がある。次ぎにはその原料たる絲を供給するために、紡績の生產部門がある。更に織物機械および紡績機械等を生產するために、機械の生產部門がある。そしてこれら種々なる生產部門が一定の均衡を保つてゐなければならぬと云ふことは、說明するまでもなからう。一定分量の織物を造るために必要な絲の分量は決まつてゐる。また一定分量の絲と一定分量の織物とを生產するために必要な紡績機械や織物機械の分量も決まつてゐる。これらの物の間には動かすことのできなき分量上の比例がある。紡績機械や織物機械をドン／＼造りながら、紡績や織物の生產は控えておくと云ふわけに行くものではない。しかし前に言つたやうに、資本家の生產する商品を需要するプロレタリア大衆の購買力は、全生產物が增加すると同じ速度をもつて增加するものではない。加はりゆく機械の應用、技術の絕間なき改良のために、勞働の生產力は絕えず增加し、それにつれて勞働力の價値は絕えず減少し、從つて全生產物に對する勞働者の分前は益々減少する。だから資本家の側から云へば、折角造つた物が賣れないと云ふことになる。プロレタリア大衆を出來るだけ絞らなければ資本家は儲からぬし、それかと云つて、プロレタリア大衆を絞り上げてしまへば、資本家の生產した製品に對する充分の買手がなくなる。こういふ矛盾のために『各種生產部門間の經濟的均衡の破壞』が生じ、それは必然的に『週期的に繰り返へされる破綻的恐慌』を齎らさざるをえないのだ。

Ｃ 以上のことがどうして他方では『プロレタリアートの大衆的失業』を齎らすことになるのだ？

Ａ 技術の絕間なき改良、加はりゆく機械の應用、その結果はどうなるかと云へば、資本家の支配に屬する資本のうち、不變資本部分の占める割合が益々大きくなり、可變資本部分の占める割合が益々小さくなると云ふことだ。不變資本および可變資本の意味はすでに前回に述べた。（『二十七、商品としての勞働力』參照。）簡單にいへば、生產手段（原料、機械、等々）に放下された部分の資本が謂はゆる不變資本で、勞働力の購買（賃銀の支拂）に充てられた部分の資本が謂はゆる可變資本だ。技術が改良され、機械の應用が盛んになればなるほど、全體の資本のうちで、割合から云へば、賃銀の支拂のために充てられる部分は少くなり、機械その他の生產手段のために放下される部分が多くなる。だから、人口の自然的成長による新たな就職希望者を益く吸收しようと思へば、資本總額の增加速度が人口の增加速度と同じ

歩調で進んだのでは駄目だ。前者の速度は後者の速度よりも、ずつと早くなければならぬ。それのみか、技術の改良、機械の應用が行はれれば行はれるだけ、資本總額の增加速度は益々その步調を早めなければならぬ。例へば、最初は人口が一割增加すると資本總額は二倍だけ增加すれば足りたが、次ぎの時代には人口が五分增加しても資本總額は十倍に增加する必要があり、更に次ぎの時代には人口が二分增加しただけで資本總額は二十倍に增加する必要がある、といふやうな調子になつてくるのだ。しかし一國の資本總額がそんな風に際限なき加速度的な勢ひで增加し續けるといふことは、到底不可能だから、いつかは資本の需要に比較して人口の方がはみ出るやうになり、しかもそれは、技術の改良、機械の應用が盛んになればなるほど、すなはち資本主義が發展すればするほど、それにつれて益々甚しくなる。『プロレタリアートの大衆的失業』ならびに斯かる失業軍の加速度的な增大といふことは、かくして必然的なものとなる。

C　近頃日本で失業者救濟の名のもとに市債や縣債を起す場合に、全體の經費の何割かが賃銀の支拂に充てられることを條件として、政府がその起債を許すことになつてゐるのは、つまり人爲的に可變資本の割合を多くすることになるな。

A　君の言ふ通りだ。それで、燒石に水ほどの效果しかないにしても、ともかくそれが何程か失業の救濟になるのだ。しかし資本主義社會のあちらこちらの隅で少しばかりそんな事をして見たところで、大勢はどうなるものでもないさ。

C　それはさうだらうな。ところで、以上吾々が見て來たやうな資本主義體系に含まれてゐる內的矛盾は、資本主義國の間における××と何等かの關係があるのか？

A　もちろんだ。そこには必然的な關聯がある。一定の資本主義國はその內的矛盾の解決を國外に求める。しかしそこは決して無人の境ではない。他の資本主義諸國もまた各々その內的矛盾の解決を自國の領土外に求めようとする。そこで當然そこに衝突軋轢が生じるのだ。

C　それをもつと立ち入つて話してくれ。

A　すでに述べたやうに、資本家たちが搾取しつゝある國內のプロレタリア大衆は、正に斯かる搾取それ自身のため、或る限度以上の購買力はもちえない。從つて資本家たちがプロレタリア大衆を酷役することによつて作り出した商品は、或る限度以上、國內だけではどうしても賣り捌かれぬことになる。しかも資本家たちは、その生產した商品を販賣し了へなければ、彼等の目的とする利潤を實現することが出來ない。そこで彼等にとつては、海外に市場を求めること、殊に外國へ資本そのものを持ち出すことが、絕對に必要となつてくるのだ。と

ころで、どこの資本家もみな之と同じ事情に迫られてゐるのだから、そこで、他國の資本家を排斥するために、一定の領土を自國の勢力範圍に取り入れ、その領域における『利權』を獨占する必要が起つてくる。さういふことから、列强の間における世界の分割といふことが段々に行はれて來たのであり、遂に二十世紀にはいつてからは、どこかの勢力範圍に屬しない地域は、世界中どこにもないと云ふほどに、殘る隈なく世界の分割が完成したのだ。かういふのが、二十世紀に入つてこのかたの世界の形勢だが、事情がすでに斯うなつてくると、世界××は――今の資本主義的組織を維持してゆくかぎり――どうしても避くべからざるものとなる。何故といふに、世界列强のうちには、老いた(すなはち發展のテンポの鈍つた)資本主義國があり、比較的に若々しい(從つて發展の速度の比較的に急速な)資本主義國があり、その他の諸事情も悉く相違してゐるために、一定の時日が經つと、舊勢力關係に合はせて行はれた世界の分割は、新たに變化した勢力關係に適應するやうに、どうしても分割の仕直しをしなければならなくなる。しかし今日の帝國主義列强の間における斯かる再分割は、×力に訴えて行はれる外に道はない。『資本家たちが世界を分割するのは、何も特殊な惡意からではなくて、到達された資本集中の段階によつて、とにかく利潤を獲得しうるためには、かゝる途を取ることを餘儀なくされてゐるためだ。そして世界の分割は、資本に應じて、實力に應じて行はれる。これ以外の分割方法は、今日の商品生産および資本主義といふ制度の下では、存在しえないのだ。しかし斯かる實力は、經濟的および政治的發展につれて變動する。』(レーニン) 從つてまた、今日の諸事情のもとでは、一定の期間を隔てる毎に、×力による世界の分割の仕直しが行はれざるをえない。さういふ事情のために、世界列强間の勢力の均衡が失はれてくると、世界の何處かの隅で起つた小さな事件をキッカケにして、若干の國々の間における××が起るのであり、しかも世界が殘る隈なく分割され了つてゐる今日では、××が既にどこかで始まつたとなると、列强は否でも應でも、その××の渦中に卷き込まれなければならなくなるのだ。××××××の××の『産業資本時代』といふ所には、『私有財産の支配は、個々の資本主義諸國の内部における競爭ならびに絶えず成長しゆく世界市場における競爭において、その表現を見出した。資本家たちの間における敵對の後者の形態は、その結果として、資本主義の發展と不可分的な隨伴現象としての一系列の××を齎らした』と言つてあるが、その××が、現在の如き帝國主義の階段では、必然的に『その廣さとその技術の破壞的作用とにおいて世界史にその比を見ざる×××××』となつて爆發するのだ。

○ 資本家同志の競爭から、生產技術の絶間なき改良、勞働の生產力の增加、勞働力の價値の減少とプロレタリア大衆の限られたる購買力、各種生產部門の間における均衡の破壞、恐慌、プロレタリアの大衆的失業、××、等々一聯の現象が必然的に發生するといふことは、以上で大體納得できたが、他方において、自分ら同志が互に競爭してゐる資本家の仲間は一體どうなるのだ？

A それについては、×××××の××に、次ぎの如く述べてある。『他方において、大生產の技術的および經濟的優越は、競爭鬪爭において前資本主義的經濟諸形態の追放と破綻とを招き、益々高まりゆく資本の集積と集中とを齎らした。工業の領域においては、この集積と集中の法則は、なかんづく小生產の直接的滅亡と部分的には大企業の補助的器官の役割へのその低下の中に、その表現を見出す。土地に對する獨占および絶對的地代の存在のゆゑに、發展の一般的速度から必然に後れた農業の領域においては、件の法則は、たゞに農民の分化および廣汎なるその諸層のプロレタリア化にのみならず、なかんづくまた、小農民經濟の大資本の支配への從屬の・しかも小經濟が極度の勞働の緊張と系統的な節約とによつてのみその獨立の外見を保持しうるやうな從屬の・公然たる或ひは隱然たる形態のうちに、その表現を見出した。』

○ 表現がむつかしくて何のことだか分からないよ。

A 一々說明してゐたら際限がないから、極く大體のことだけを述べておかう。前に言つた通り、資本家はたゞに勞働者に對して戰ふことを餘儀なくされてゐるばかりでなく、資本家同志が互に戰ふことを餘儀なくされてゐる。そこでその結果はどうなるかと云ふことが問題なのだが、それは簡單にいへば、『大生產の技術的および經濟的優越のために、『益々高まりゆく資本の集積と集中』が齎らされることになる。資本家同志の競爭においては、資本の大きなものが小さなものに勝つ。それで最初のうちはドングリの背比べであつても、時代を經過するうちに、大きなものは次第々々に大きくなる。そして大きくなるに從つて競爭力が強くなるから、おしまひになればなるほど、大資本による小資本の壓倒が益々力強く、益々加速度的に行はれるやうになる。かくて社會の一端には、驚くべき大きな・しかし極めて少數の大資本家が現はれ、何人もそれに對抗することが出來なくなると同時に、社會の他の一端には、尨大なプロレタリア大衆の形成が行はれる。二つの陣營への社會の分裂、それが益々はつきりしてくる。

○ さうすると、自由競爭といふものは無くなるのか？

A さうだ。『強力なる獨占的統一（カルテル、シンヂケート、トラスト）の形成、銀行によつて一つに結ばれたところの巨大なる聯合的

諸企業の新たな形態』が生まれ、產業資本の時代が金融資本の時代に轉化するのだ。そこで最初の出發點は、封建的獨占の否定を意味する自由競爭であつたが、今や否定の否定が行はれて、金融資本の獨占が成立したのだ。しかし獨占と言つたところで、資本主義的な獨占に過ぎないのだから、それは『自分がそれから生まれ出たところの自由競爭を排除するものではなく、むしろその上に且つそれに沿うて存在する。』巨大なる資本家同志は依然として競爭を續ける。大なる資本は小なる資本を壓倒するといふ原則の上に立つてゐる以上、資本はどこまでも油斷なく自分自身を大きくすることに努力せねばならぬ。十億の上には二十億がある。二十億の上には三十億がある。やがて百億になつても、その上にはまた二百億がある。數字に限りなき以上、資本の增殖慾にも限りがない。どんなに大きくなり、どんなに儲けが多くならうと、相手の競爭に負けないために、飽くまで勞働者の搾取を強めて、益々自分を大きくすることに努力せねばならぬ。だから獨占といつても、自由競爭の基礎の上に立つた獨占だ。それは『時に重大にして深刻なる諸々の矛盾・軋轢・および衝突の一系列』を生み出だす。

C　それでは問題は少しも解決されはしないね。

A　もちろんのことだ。今世論の中心になつてゐる失業問題にしたところで、同じことだ。すでに述べたやうに、資本主義の發展の一般的法則の上から見て、失業軍の發生は資本主義の發展に伴ふ不可避的な現象だといふことが分かるが、近年謂はゆる產業合理化が行はれるやうになつて、それは特に激しくなつた。すでに前回に述べたやうに、產業合理化の中心目標は勞働能率の增進であり、そして勞働能率の增進とは一定の時間内に發揮される勞働の分量を多くすることだ。これは前に述べた勞働の生產力の增加と全く異なる。勞働の生產力が增加した場合には、一定分量の勞働で生產される生產物の分量が增加するために、一定分量の生產物は以前よりも僅かな勞働時間で生產されるやうになるのだが、勞働能率の增進の場合には、一定の時間内に支出される勞働の分量が增加するために、同じ生產物が以前よりも僅かな勞働時間で生產されるやうになるのだ。例へば、模範的な合理化を行つたものとして有名なフォード會社では、その合理化のために、一臺の車臺(シャフシー)を組み立てるに要する勞働時間を十二時間八分から一時間三十三分に短縮したが、これは主として(全部とは云へないが)勞働能率の增進により、一定の勞働を僅かな時間のうちへ壓縮したために生じた結果である。いづれにせよ、さういふやうな勞働の壓搾が急速に行はれて來るのだから、さらでだに增大する傾向にある失業軍が益々急速に增加するのは當然のことだ。

C　それでも濱口首相は過日議會での答辯の中で、『產業が振興致し

ますれば、失業問題が自ら解決さるゝことは明瞭であります。……否々の考では、産業合理化の結果は、即ち産業の振興となつて、同時に失業者の救濟に資する所が多からうと存じます』と言つてゐるが何うだね。

A　資本主義國では決してさうはならないよ。理論的に考へてもさうだが、眼前の事實を見てもさうだよ。資本主義國の中で最も景氣の好い米國ですら、一九一九―二七年の八年間に、工業勞働者の數は約六十四萬人減少してゐる。工業生産額は一年平均四パアセントの割合で增加してゐるのに、從業勞働者の數は此の如く絶對的に減少してゐるのだ。これでは失業者が段々增加して來るのも當然だらう。殊に最近では恐慌期にはいつたために、失業者は急速に增大した。現に昨年十月から今年一月に至るまでの被解雇者數は七十五萬乃至百萬人で、現在の失業者總數は七百萬人に達してゐると稱せられる。どうだ、産業の振興、産業の合理化、その一番善いお手本は米國だ。そしてその米國が正にこの通りなのだ。資本主義國でいふ産業の振興とは、資本主義的産業の發展のことであり、また資本主義國でいふ産業合理化とは、資本主義的な・すなはち資本家本位の・産業の組織替へのことだ。それがどうして失業問題の解決になるものか。事態は正に逆で、失業問題はそのためにこそ發生してゐるのだ。

C　どうも困つたことになつたものだね。

A　全くだ。資本主義は正に解決すべからざる矛盾に出喰はしてゐるのだ。そしてその矛盾のために、それは××××××××××にあるのだ。話がこゝまで來ると、禪坊主ではないが、後は以心傳心だ。――しかし何にしても、『物語』のずつと最初に立ち歸つて、矛盾は運動（すなはち變化）の母であるといふ辯證法を思ひ出して貰はねばならぬ。

C　その點は今ピタリ思ひ當る所があつて甚だ愉快だ。俺は辯證法にいふ『自己運動』を思ひ出したよ。つまり資本主義社會でも、それは外部からの力によつて××するのではなく、それ自身に內包する矛盾によつて××するのだな。

A　その通り〳〵。そこの道理をハッキリ飲み込んでゐないと、×××の外見的强大さの前に、プロレタリア××の××のに對する××を失つてしまふのだ。資本主義社會はそれ自身のうちに自らを××に導くべき××をもつてゐる。だからこそ××は××××するの××だ。

C　しかし人間の歴史は人間が造るのだらう。

A　それは勿論だ。資本主義社會が發展するにつれて、そこには『資本主義的生産それ自身の機構によつて訓練され統一されるプロレ

タリアートの不斷の成長』がある。かゝるプロレタリアートの×××××から成る××××××こそは、正に歴史の××を×××××となるものなのだ。

C　その××××××××によつて××が成就した後は何うなるのだ？

A　始めて矛盾が――根本的には生產諸力と生產關係との間における矛盾が――解決されるのだ。マルクスの言つてゐる通り、人間はたゞ解決しうる問題をのみ問題とするのだ。今解決すべからざるが如くに見えてゐる失業問題も、現に××××××が××を××××××では、着々と解決の方向に向つてゐる。

C　それを序に少しばかり話しないか。

A　濱口首相の說によると、『產業が振興致しますれば、失業問題は自ら解決さるゝことは明瞭であります』とのことだ。今の世界に果してそんな事實があるかと、試に五大洲を見渡して見ると、なるほど首相の說が完全に當てはまつてゐる領域が、地球の面積の六分の一ほどある。既に述べたやうに、資本主義國では米國が最も景氣が好いのだが、そこでの工業年產額の增加率は四パアセントに過ぎない。しかるに今僕が問題としてゐる領域では、その增加速度が米國の四倍乃至五倍に相當してゐる。それは正に世界一だ。なほ特に大工業について昨一九二七年十月から今一九三〇年一月までの成績を見るに、その生產額は前年同期に比して二七パアセントの增加をしてゐる。これは素晴らしい發展だが、殊に吾々の注意すべきことは、かゝる生產增加率が年々高まる一方だといふことだ。すなはち一九二八年十月から一九二九年一月までの成績は、その前年同期に比し二一パアセントの增加を示してをり、更に一九二七年十月から一九二八年一月までの成績は、その前年同期に比し一八パアセントの增加を示してゐる。一八パアセントから二一パアセントへ、二一パアセントから二七パアセントへ、斯樣に生產增加率は累進的に高まつてゐるのだ。これこそ謂はゆる『產業振興』の理想的なものであらう。ところで此の國では、他方において勞働時間の急速なる減少が行はれてゐる。この國の勞働時間は、戰前には都會の中心地で十時間、地方へゆくと十二時間以上の所もあつた。しかるに一九一七年には全國平均の勞働時間が八時間五十四分にまで短縮され、更に一九二七年には七時間二十九分にまで短縮された。そして只今進行中の五年計畫なるものが一九三三年の九月末に完成された曉には、全國平均の勞働時間が約六時間半に短縮される筈だ。それは十六年間に殆んど二時間の減少を意味し、戰前に比すれば殆んど半減を意味する。しかも賃銀は、物價の變動を計算に入れての實質賃銀が、一九一三年を一〇〇とすれば、一九三三年には二〇九・二

になる豫定だ。すなはち二十年間に二倍以上の增加だ。

C 勞働時間はドン〳〵短縮される、おまけに賃銀は殖える、さすがに×××が××を×××××だけあつて、素晴らしいものだね。

A 何にしても勞働時間の短縮といふことが根本的な重要さを有つてゐるのだ。だからこそ『產業の振興』につれて、他方には賃勞働者の著しき增加がある。その數、一九二三年には六百八十萬人、一九二八年には千百三十萬人、すなはち僅か五年間に四百五十萬人の增加だ。それが一九三三年になれば、更に千五百七十二萬四千人に增加する豫定で、さうなればこゝ十年間に八百九十二萬人の增加だ。生產額は殖えながら從業勞働者數の減少する米國とは正に逆だ。

C そういふことになつてゐれば、失業者はどうしても減少するだらうな?

A 勿論さ。試みに全國二百八十一個所の勞働紹介所に登錄されてゐる失業者數を見るに、昨一九二九年一月には百六十一萬六千二百人であつたものが、今一九三〇年一月には百三十一萬八百人に減少してゐる。すなはち一ヶ年間に一割九分減少してゐる。それが五年計畫完成の一九三三年には、五十萬人に——すなはち昨年に比して三分の一以下の數に——減少する筈だ。一億何千萬の人口を有する大國とは云へ、失業登錄者の數が現在百何十萬人に達してゐるといふことは、たいしたことに相違ない。しかし吾々にとつての問題は、此の如き現在における絕對數にあるのではない。それが增加の傾向にあるか、それとも減少の傾向にあるか、かゝる傾向こそが根本的な問題だ。そしてそれが年々減少の傾向にあるかぎり、失業問題は始めて根本的に解決される見込がついてゐると云はるべきだ。しかしそういふことは資本主義國では絕對に行はれえない。資本主義國では產業の經營が、資本家のための利潤の增大、勞働者の出來うるかぎりの搾取を根本目標としてゐるから、勞働時間の僅かばかりの短縮でも容易には實現されない。そのために從業中の勞働者は、長時間にわたる勞働の强度化のために生命をすり減らされ、殘りの勞働者は、仕事がないために餓死線に沿うて怠惰を强制されてゐる。そこには永久の貧乏があるのみだ。

C 話はよく分つた。ともかく俺たちの住む世界と××××があることを知つて、現在では失業苦に喘いでゐる俺でも、×は××××へてゐるよ。

A さうだな。もちろん『かの白雲に乘じて帝鄕に至る』といふ調子には行かぬが、しかし帝鄕遠からずだ。『勞働は單に生活のための手段でなくなり、むしろ勞働それ自身が第一位の生活要求となるに至つた時、個人の全面的發展と共に生產諸力もまた增大し、そして共同社會の富の一切の泉源が十二分に流れ出して來た時、』——かゝる時期の

到來は、××××××の第一段階の彼方に横たはるとは云へ、——『その時はじめて、社會はその×の上に「各人は彼れの能力に應じて××、各人はまた彼れの欲望に應じて××せよ」と書くことが出來る。』その時『貧乏』といふ文字は、永久に人間社會にとつて無用となるであらう。

語つて盡きざる所が極めて多いが、かねての約束だ、これでこの『物語』も終りとしよう。

C　終りとなれば急に名殘り惜しくも思はれるが、さうばかり言つても居られない。それでは左樣なら。

A　左樣なら。古詩にいふ、『燕趙悲歌の士、相逢ふ劇孟の家、寸志言盡きず、前路日將に斜ならんとす』。僕は今この詩を思ひ出す。これで君とも別れるが、今後たとひ東西地を異にしてゐようとも、お互に××の×××××に對して事情の許すかぎり最善の××××をしようぞ。別れに臨んで君の健鬪を祈る。しつかりやつてくれ。僕も出來うるかぎりのことをするぞ。

十大新聞經濟部長の見たる

濱口內閣と經濟不安・失業の深刻化

不誠意極まる現內閣の社會政策

東京日日新聞　杉山　幹

金解禁の後こゝに六ヶ月、わが財界の不況は、日に日に深刻となり、殆んど底知れぬ現狀である。金解禁を實施すれば、國家は暫く不景氣の痛苦を忍ばねばならぬといふことは、識者のつとに高唱したところである。けれども、かくも痛烈なる不景氣に陷るべしとは、一般の夢想だもせなかつたところ、殊に現內閣の諸公にとつては、今日の財界の窮狀は、實に意想外のことであらうと思ふ。

濱口首相は、昨年十一月廿一日、金解禁の實行期を公表するに當つて、「內外諸般の準備全くなり、今や金の解禁を行ふも、經濟上何等憂ふべき事態の發生せざるべき確信を得たるを以て……」本年一月十一日を期し、金解禁を斷行すべき旨を聲明してゐる程である。また井上藏相は本年一月の議會において「金解禁を決行するも、財界一般に對し、急激なる影響なきことの確信を得……將來に對して何等危惧すべき事柄が存しないと申すことの出來ることは、私の最も愉快とするところである」と財界の前途を頗る樂觀して憚らなかつた程であるが、遺憾ながら事實は全く政府の豫想に反した。

かくも、わが財界の不景氣が、本年に入つて甚だしく深刻化した源因の內には、政府のいふが如く、豫測し難い海外の突發事件も大影響を及ぼしてゐる。例へば銀塊相場の暴落によるわが對東洋貿易の不振、印度の綿布關税引上による對印輸出の減退、米國の景氣變動による對米輸出の不振等、わが國の金解禁後に突發したるか、または、その打撃の俄かに著しくなつた爲めに、わが財界の不況を一

層甚だしからしめてゐるものも多々あるのであるから、われ等は今日の不景氣をもつて、現内閣の金解禁の結果とのみ見做すことには必ずしも贊同は致さぬ。また、政府は金の解禁後の財界の變動、例へば正貨流出、生糸相場の動搖等につき、觀測を誤まりたるの事實歴然たるものあるも、財界のことは容易に前途をトし難いものでもあり、また過去をせめても現在の急を救ふに効がないからせぬ。けれども、現内閣は從來の行きがかりや、政黨のかけ引に捕はれて、金解禁後わが財界に生じつゝある大變動に應ずるの策を講ぜず、窮乏の極に沈淪しつゝある國民を、見殺にするの態度をとりつゝあるは、實に許すべからざるところである。

一

前期（第五十七）議會に提出された本年度豫算案、並に各國務大臣の施政方針の演說は、今日の財界變動を豫想せざるものであるといへばそれまでゞある、けれども、今回の特別議會においては、政府は速に今日の國情に應ずるの政策と豫算とを立てゝ臨まねばならぬ。殊に現内閣は例へ不當の多數であるとしても、既に過日の總選擧において絕對多數の與黨を得たのであるから、正道を行はんとすれば自由無碍になし得べき筈である。にもかゝはらず、政府の組替えたる本年度實行豫算、並に今後議會に提出したる追加豫算案には、殆んど今日の國民の急に應ずるの用意なきのみならず、當局の議會における態度は、國民の窮狀を默過するが如き有樣である。たま〳〵政府が目下の非常應急の策として行ふところを見れば、二階から目藥的の姑息極まるものに非ざれば、糸價補償法の發動の如き見當違ひにして、且つ不公正なる救濟策なるは、實に言語道斷である。

現内閣が、金解禁の準備、並に經濟國難打開の策として、公私經濟の緊縮整理を稱道なしたることは、機宜の主張としてわれ等はこれを歡迎した。しかして、そのこれに贊同したる所以は、財行政の緊縮整理によつて得たる財源をもつて、國民負擔殊に現在過重なる庶民階級の負擔の輕減に振向け、その生活の安定を期すると同時に、生產費の低減を計らむとするが爲めであつた。しかるに、現内閣は鐵道運賃の一部に僅少の引下げを行つた外は、何等右の趣意に叶ふ政策を行はず、たま〳〵これに類するものを見れば、總選擧に備ふるため無理算段した問題の義務教育費國庫負擔額一千萬圓の增加である。國庫が一千萬圓の教育費負擔を增加し、それだけ地方稅を輕減せしむるといえば、一見國民負擔の輕減になる樣に思はるゝけれども、それが實行されたとしても、地方財政は忽ち元の儘に歸り、結局國庫負擔額を增加しただけ、國民負擔を增加する結果に終るの惧れがあるばかりでない、今日いはゆる貧弱町村として、國庫より教育費補助を受けてゐるものは、殆んど飽和點に迄近づいて居るから、今度の增額の恩惠を受けることは極めて少いと同時に、各市町村において地方稅を多く負擔する者、即ち富者にその恩惠が重く、地方稅を負擔し居

らぬ貧者は、全然その恩惠に浴されぬことになる。われ等は決して主義として義務敎育費國庫負擔に反對するのでない。只右のことあるがために、今日國民負擔の輕減を計るには、まづ現在庶民階級に、過重の負擔を課しつゝある、消費稅の減廢を初めとし、稅制の社會政策的整理を先とするの緊要なるを主張するのである。

二

濱口首相は「政府は金解禁後の財界善後策として、まづ產業合理化運動を一層徹底せしむるの必要を認め、商工省內にこれが實行機關を設くる計畫を立てた」と稱し、その經費として追加豫算に四十萬圓を計上して居る。產業の經營を合理化することそれ自體には、恐らくは勞働階級といへども反對ではあるまい。われ等をもつて見れば、わが國の現狀では、啻に產業のみならず、國民生活の全般に亘つて合理化することが急務だと思ふ。けれども、合理化は口先の世話だけではだめだ。要所の不便を痛感し、その合理化を思ひ立つてすら、資金がなければ實行が出來ぬといふのは今日の狀態である。產業の合理化を徹底せしむるには、まづ合理化資金の用意が大事である。僅かに四五十萬圓の追加豫算をもつてしては、產業の合理化は政府に多くを期待することは出來ぬ。ばかりでない、產業合理化に必然的に伴ふところの、失業群の處置について、政府は果して如何なる成案を有するか。

三

合理化運動の未だ進行されぬ今日において、わが國の失業者は恐るべき勢をもつて增加しつゝある。內務省調査によるも、全國の失業者は昨年九月二十六萬八千餘人なりしもの、本年二月には八萬餘人を激增して、實に三十五萬餘人に達してゐる。一般の觀測するところによれば、實際の失業者は恐らくこの三倍、即ち百萬餘人を越ゆるだらうと云はれてゐる。これ等はいづれも、働かんことを欲し且つ働くことの出來るものなるに拘はらず、いはゆる資本主義經濟組織の犧牲として、不景氣のために職を失ひ、生存權は脅威されつゝある。「われに職を與へよ、然らずんば糧を與えよ」といふ悲愴なる叫びは、今や全土に高まりつゝある。これに對する現內閣の態度は實に悠々閑々たるものがある。臨時議會における濱口首相の施設方針に關する演說中に、

各種社會政策の樹立は、現內閣の最も意を用ひて居るところで、特に失業問題の解決に就ては、その根本策として產業の振興を圖ると共に、その應急策として職業紹介に關する事業を擴張し、外に失業の救濟又は防止の爲め地方公共團體に對して、公營事業の起興を慫慂し、之が財源に關しては起債認可に關する從來の方針を緩和すると共に、經費の一部を國庫より補助するの途を講じて、之を追加豫算に計上した

といひ、政府はこれをもつて根本的失業對策も、應急的對策も完全してゐるといふが如き

態度である。いふところの根本策は、今後政府の行ふ産業振興策が、如何なる効果を現はすか、これは後日に徴するの外はない。けれども、應急策として政府のなしつゝある、職業紹介機關の擴張の如きは、目下の失業群の救濟上、殆んど九牛の一毛にも値せぬことはいふに及ばず、現政府の主要應急失業對策ともいふべき公營事業の起興による失業者の收容に至つても亦、その聲の大なる割合に未だその成績は極めて微々たるものである。

四

本年一月以來明年三月末迄に、政府の失業救濟のために、公營事業起興に使はうとする金額合計二千二百萬圓であつて、その內勞力費に該當するものは約三割卽ち六百五十萬圓であらう。しかしながら、この內失業者以外の熟練職工なども雇傭さるゝだらうから、假りにこれを六十萬圓と見れば、純粹の失業勞働者に授職する費用は六百萬圓位である。勞働者一日の賃銀を一圓五十錢とせば、これによつて職を與へらるる延人員は四百萬人であつて、假りに一人一年の勞働日數を三百日とすれば、この政府の計畫によつて救はるゝものは、現在百萬の失業者中僅かに一日一萬三千三百人に止まるわけである。しかも、これすら政府の計畫であつて、未だ殆んど實行されて居らぬ。されば各都會は失業群のために悲慘の觀を呈し、彼等は今や都會の親戚知友の厚意を食ひ盡して、止むなく地方農村に歸臥しつゝあるのである。內務省の調査によれば、昨年中の工場勞働者の解雇されたるもの六十七萬餘人、うち廿六萬人は農村に歸つたといふことである。今日の農村において、これ等都會の失業者を收容するの職を有せざるは明かなるところなるにかゝはらず、內務省の調査にては、これ等歸農者をもつて失業者と見做さず、職にありつきゐるものとなし、全然いはゆる家族制度の救濟に委するの態度である。

五

政府は今日の不景氣は世界的現象であつて、各國とも失業の族出に苦しんで居るといふて居る。近來の産業合理化運動の本家ともいふべき獨逸においては、昨年末に三百餘萬人の失業者を有したとのことである。けれども、獨逸政府は、現在六億マークの資金を出して、これが救濟に任じてゐる。英國は百六十萬(本年四月)の失業者に對し、年約五億圓の失業救濟資金を支出しつゝあるの外に、約六億圓の巨資を投じて、失業救濟のための事業を興してゐる。米國においては、三月十六日勞働卿のいふところによれば三百萬の失業者を有すといふも、大統領フーバー氏は、これ等の大部分は、一ケ月乃至三ケ月以內に、職につかせる計畫であると公言してゐる。かくの如く、各國の失業に對する態度は、殆んど失業對策をもつて、政府の主要政策として全力を傾倒して尚ほ足らずとなすの風あるにかゝはらず、吾政府の態度は、前記の如く實に悠々閑々たるものあるは、時勢を解せざる甚しきものといふべきである。(五、五、六)

不景氣の本質と其動向

讀賣新聞　山崎靖純

一

特別議會に於ける濱口首相並に井上藏相の、わが國現在の不景氣に關する説明を見ると、大體に於て、金解禁の影響と云ふよりも寧ろ世界的不景氣の影響と見做し、從つて今後は金解禁による財界建直しと世界的景氣の恢復とを俟つて、日本の景氣も徐々に恢復するものと考へて居るやうである。然しこれに對して私には幾多の疑問が起らざるを得ない。その主要なるものを擧げるとかうである。

第一　現在のわが不景氣に金解禁の影響が餘り多く混入して居ないと見ることに對する疑問、

第二　金解禁（舊平價）による所謂『財界の建直し』なるものが、大多數國民にとつての景氣の恢復を意味すると見ることに對する疑問

第三　現在の世界的不景氣を以て非常に特異なるモーメントであると見ることに對する疑問

第四　假に近く世界的景氣が恢復するものとしても、それによつてわが景氣が眞に恢復すると斷定せることに對する疑問

二

さて現在の不景氣に對して金解禁の影響せる部分が少いと云ふことは、流石の井上藏相も恐らく腹の中では考へて居るまいと私は考へる。藏相が他方に於て金解禁を以て『財界の建直し』と稱して居ることそれ自體が、『非常な影響がある』と裏書して居るのも同樣であつて、でなければ所謂『建直し』すらも考へられないのである。試みに海外の事情と比較して見る。例へば株式相場は昨秋以來世界的に下落し、一時はニューヨーク市場の下落は日本のそれよりも甚しく、第一位に立つたこともあるが、然し乍ら彼の場合は大暴騰後の暴落であるに對し、我の場合は逐年漸落後の暴落であり、然もその大部分が拂込額を割る状態であるから、打撃の程度は到底比較にならぬのである。また例へば物價にしても、昨年七月と本年三月との總平均指數の比較に於て、ロンドンの七分、パリの八分、ニユーヨークの一割の下落に對して東京は一割二分の下落を示し、その上、日本の場合に於ては、その下落せる物價が農家や中小工業家や時には大工業にとつて、耐えられない程度が甚しいのである。然るに例へば生絲にとつて見るに、去る四月上旬に於て、わが横濱の生絲は昨年の高値に比し略三割の下落を來して、多くの製絲家は今や存亡の危機に立つて居るにも拘らず、ニューヨーク市場に於ては

僅に一割九分六厘の下落にしか當らず、他の重要商品の下落率に比して寧ろ過小なる觀があるのである。即ち左の如くである。

商品名	昨年の最高	本年四月上旬	下落率
小麥	一弗六九仙	一弗二九仙	二三、四%
棉花	二一仙六五	一六仙一〇	二五、六%
コーヒー	一八仙五	一〇仙〇〇	四六、〇%
ココア	一二仙〇〇	八仙七五	二〇、〇%
バター	五二仙〇〇	三七仙〇〇	二七、五%
ゴム	二六仙五	一五仙五	四一、五%
鉛	八仙五	五仙六	三〇、〇%
銀	二七仙	一九仙半	二七、〇%
砂糖	二仙四一	一仙五九	三四、〇%
日本生絲	五弗三五仙	四弗三五仙	一九、六%
歐洲生絲	五弗五五仙	四弗〇〇仙	二八、〇%
廣東絲	四弗一〇仙	二弗三五仙	四五、〇%

ニューヨークに於ける日本絲の下落率が、横濱に於けるそれに比して非常に低率なることは、明白に日本爲替相場急騰の影響を受けて居ることが觀取されるのである。更に例へば本年一月から三月に至る四半期の日、英、米、獨の輸出入貿易額を、それ〴〵前年同期のそれと比較するに(單位日本千圓、英國千ポンド、米國百萬ドル、獨逸百萬マーク)

	本年	昨年同期	減少率
日本	九二五、九八六	一、一八五、九一七	二三%
英國	四七三、〇七七	五一七、七五四	九%
米國	二、〇三五	二、五四一	二〇%
獨逸	六、三九三	六、四〇八	殆んど不變

右の如く日本の減少率が一番甚だしく、それに次ぐものはアメリカである。然るにアメリカの場合は昨年頃まで毎年激增せる後の減少であるに對し、日本の場合は大體に於て逐年減少せる後の大減少である。

以上の如く、日本に到來せる不景氣現象は諸外國のそれに比して最も急角度を爲して居ることは明白に世界的不景氣の影響の外に金解禁の影響を深刻に受けて居ることを證明するものである。然も現在のわが物價が依然として諸外國のそれより相當割高にある點と、わが財界の調整の破壞が少しも匡正されて居らぬ點から推すれば、金解禁の影響は今猶進行過程にあつて、今後も益々深刻化する外はないと考へられるのである。

三

資本主義經濟は、云ふ迄もなく價格體系であり、それ故にまた均衡體系である。だからこゝにわが國際的商品の多くが下落するの止むなきに至つた場合に、それと比例して國內的商品の價格も、地代も、家賃も、勞銀も、運賃も、動力代も、租稅も悉く低落し、そして同時にいつも財界の他の半面を成す所の貨幣債權額もまた同じ割合で減額され得るならばわが財界には殆ど影響がないわけである。然るに井上藏相によつて實行されたる所の舊平價金解禁はその大部分の直接的影響を國際的商品製造事業に與へる方法であつた。尤も消費節約の宣傳と云ひ、財政の緊縮と云ふ類のものは、それ等の趣旨は國內的諸要素に影響を及ぼして、國際的商品製造業の打擊を緩和せんとする目的であつたことは觀取されるが、何れも不徹底微弱極まるもので直接効果は頗る薄弱なる上に、さうでなくとも、多くの產業にとつては、破綻せぬ限りは貨幣債務の桎梏から免れることは絕對に不可能であり、また地代、家賃、勞銀、運賃、動力代、

租税等も夫々の意味に於て低下困難にして且つ遲々たるものである。こゝに於て國際的商品製造事業が第一に甚だしい苦境に當面するのである。假に或る一つの事業に於て三割の操業短縮を行ひ、製品の市價は二割を下落せるものとすれば、その事業の製造能力は金額に於て（0.7×0.8＝0.56）從來の五割六分に激減する譯であるが、かゝる激減に對して半面にその負擔が同じ比例を以て激減し得るものとは到底考へられないのである。こゝにその事業の危機が到來する。

濱口内閣の經濟政策下に於ては、かゝる危機から大別して三方面の展開が豫想される。第一は幾多の商工業の破綻である。殊に負債の多い事業、若くは借金能力の弱い事業ほど負擔加重の難局時代切拔けは困難であり、この意味に於て借金で首の廻らぬ問題の會社や幾多の中小商工業の破綻は今後益々増加するであらう。又舊式設備を擁して低落せる物價に到底適當出來ない事業も破綻は免れない。而してかゝる舊平價解禁の負擔加重に堪え切れないものが破綻する狀態に對して、濱口内閣は恐らく『財界整理』若くは『灰汁拔け』と云ふ美名を與へるのであらう。それは恰も流行性感冒を故意に傳染させて、その發熱の爲にこの世から心臟の弱い者が驅逐されて行く狀態に對して、人類が健康になつたと讚美するが如きものである。所が一方に於てかゝる現象の爲に事業が破綻し、生産力が衰へ、銀行が莫大な損を負ふにも拘らず、他方に於て銀行預金者の債權は一向に傷けられないとすれば、富と生産力との間に甚しい空隙が出來ることとなる。其處に他日斷層地震が起らずして濟むであらうか。

第二は所謂『産業の合理化』である。濱口内閣の合理化運動は恰も無力の代名詞の如くであるが、その實、舊平價金解禁を行つたことそれ自體が、如何に彼等が無力でも、わが産業を驅つて大なり小なり合理化に赴かしめねばやまないのである。卽ち比較的借金の少い事業、若くは金融力の旺盛なる事業は、これから次第に組織化と機械化との二方面から、舊平價解禁による負擔増加に堪へ得る狀態に漕ぎつけるであらう。而してそれは他の薄弱なる商工業の驅逐を促進することにもなる。

第三は加重負擔の他への轉嫁である。産業の合理化それ自體はマルクスの所謂『不變資本』部分の増加によつて『可變資本』部分（勞銀其他）を驅逐することになり、こゝに失業群を増大せしめることになるが、この事實と他方に於ける財界整理による不景氣の拖延とを俟つて、各産業は何れも、殘る從業者の勞銀の引下を要求し、電力會社へ電力の引下を交渉する等の擧に出るのである。而してそれは一般的不景氣を助長し、中小商工業者、農家、乃至その他の國内的意義を持つ諸方面へ打撃を波及させることになるのである。

かくて合理化の運動と負擔轉嫁運動とが進行するにつれて、貧富の懸隔は次第に嶮峻となり、中層以下の諸部分は益々浮ばれぬ狀態になつて來るが、これに對してこの難境に堪へ得た事業と、確實な公社債に投資若くは確

實な銀行に預金をした人々のみが漸くホッと一息することになるのである。この狀態を井上藏相式に云ふと、『財界の建直し』若くは『眞の好景氣』と云ふのである。

四

然し乍ら、この井上式の『眞の好景氣』すらが實はそう容易にやつて來さうにもないのである。それはわが國內の諸產業が未だ彌縫時代に屬し、銀行は自分の破綻が恐ろしさにそれに引づられ、政府も恐慌が恐ろしさに表裏の救濟を行ひ、かくて合理化運動は頗る遲々で、唯僅に負擔の勞働者への轉嫁のみがやゝ迅速に進行して居るに過ぎないと云ふ狀態からも云ひ得るが、同時に現在の世界的不景氣を以てある特異なる時代と見るのが間違ひで、寧ろこの狀態が世界財界の持つ本質的缺陷を赤裸々に暴露したものに過ぎないと考へられるからである。一口に云ふと、今日の世界的不景氣は、各國を通じて貧富の階級的懸隔が擴大して來たことゝ、國際的に貧富が隔絕して來たことゝ、各國に同種產業が普遍化して來たことゝの三つの原因の綜合的結果であると云ひ得るのである。この世界經濟界の缺陷が偶々千九百二十九年の後半から急激に目立つて來た譯は、千九百二十四年頃からアメリカの對外貸付が急速に進んで、その購買力によつて諸國の復興復舊事業を助け、同時にアメリカも亦大に榮えた結果、千九百二十八九年の株式大暴騰となり、それが今度は金利高を誘導して對外貸付を衰微せしめた爲に、こゝに始めて世界經濟界の本來のベースの上に起り得る推移を實驗した譯である。だからこの世界的不景氣や印度其他の關稅引上などを例外的現象と見、それ故に軈て近くこの不景氣が恢復するものと考へて、これを金解禁實行に當つての一つの條件に取り入れなかつた井上藏相こそ實に短見の至りと云はねばならぬ。

尤も不景氣は再び米英の金利低下を來し、それから又或る程度までの外債應募進捗が豫想されるが、やがてそれに次で來るものは世界的な產業合理化の進行であつて、それは益々勞働者を排除して購買力衰微を招くと共に、物價は大勢的には益々下落し、そして關稅引上とダンピングの戰ひが更に激化する時代が到來すべきことをも想像し得るのである。かゝる世界經濟の矛盾と舊平價解禁と解禁善後處置失當との三重的影響を受けたならば、わが財界の前途、大局的には到底樂觀ところの騷ぎではあるまい。

商工大臣無策

都新聞　稻見泰治

一、內閣の陣容を建直す事
二、施政方針の變更

今日の經濟難、失業難は現內閣施政の產物であるから、此の方針を變更せざる限り如何にしても切拔けることは出來ない。從て濱口內閣は前田中內閣の如く、前々若槻內閣の如く絕對多數の與黨を有しながら、早晚野垂死する外ないであらう。何となれば濱口內閣はこれ亦田中前內閣、若槻前々內閣同樣自力で政權をとつたのではない。即ち田中內閣が所謂滿洲某重大事件に躓いて不時の頓死をした——後日田中首相自身が急死したと全く同樣に——其の結果思はざる拾ひ物をしたのであつて、そこに殆ど何等の準備もなければ努力もなかつたのである。準備も努力もなくして偶然僥倖に政權を得たのであるから、大命を拜した時はまるで狂氣と狼狽との交錯であつて、そこに「待つてました」とでも言ふべき落着いた緊張振は微塵も見えなかつた。取るべくして取つたのではなく、日頃憧れの政權がひとりでに轉げ込んで來たのであるからさもあらう、無理もないと言へばそれまでだが、物を得るには得るだけの努力と苦心がなければならぬのに、それなくして得たのであるから所詮大した期待は出來ない。併しこれは獨り濱口內閣にのみ限つたことではなく、田中前內閣然り、若槻前々內閣然りで、孰れも自己の力でなく、幸運にして政權を贏(かち)得たものは何等治績の見るべきものがなかつた。田中內閣は若槻內閣が樞密院に引懸つて倒れた後を承け、若槻內閣は加藤總理の病死に依て大命を相續した。言はゞ棚から牡丹餠の落ちて來たのを拾へと言はれて拾つたに過ぎぬ。名家の二代目と同じことで、そこの世帶を切つて廻すだけの伎倆(ぎりやう)を有たぬのである。治績の見るべきものゝないのも寧ろ當然と言はねばならぬ。是に比すると加藤內閣や原內閣は全く自己の力で、大なる苦心と大なる努力とを拂つて、やうやくの思ひで、政權を獲得したのであるから何をするにも強い力を所持してゐた。加藤內閣は政憲聯合の中心人物であつた法相橫田千之助氏が早世し、その陣容に狂ひが生じた上に加藤總理自身がまた間もなく病死して終つたのであるから、特筆大書すべき程の功績を遺し得なかつたが、姑く假すに壽命を以てしたならば必ずや相當の事を爲したであらうと今でも猶惜しいやうな氣がする。若し夫れ原內閣に至つては官僚軍閥の巨頭であつた寺內伯の手から腕力で政權を掠(もぎ)取つたものであるだけに其の底力の強大であつたこと、原首相が凶刃に倒れることなかつたならば定めし偉大なる功績を遺したであらうと信ぜられる。然るに濱口內閣は前段述べた通り、政權を得るに當つて自らの力と云ふものを殆んど用ひてゐない。苦心も努力もなくして偶然僥倖に之を得たのであるから、組閣に對して何等の準備を持たなかつた。況や組閣後に於ける對策をやだ。玆に於てか、出來上がつた內閣は臨時應急のバラック內閣である。基礎工事からキチンと叩き上げた本建築では斷じてあり得ない。試みに內閣の柱とも稱すべき閣僚の顏觸から見るもよい。そちこちの勢力關係、個人的情實、それ以外に

何があるであらう。適材を適所に配して、我が民政黨日頃の抱負經綸を大に實行するのだと云ふ意氣込は何處にも見えぬではないか。仕事をするには何を措いても先づ第一に人を得なければならぬ。その人を得ずして事を行はんとするが如きは木に緣つて魚を求むる以上の難事である。井上準之助君を拉し來たつたことを以て非常な成功でもあつたかの如く言ふものもあるが、黨內人なきことを暴露した以外の何ものでもあり得ない。見よ、財界各方面からの評判の惡いことを！ これは何としても本建築に引直さねばならぬ。少くとも半永久的のバラック位の程度には是非修理しなければならぬ。それには大藏大臣もだが、先づ以て商工大臣を取變へることだ。金解禁後の大事な場合を控えた我國としては商工大臣の任務は極めて重大である。俵君個人には氣の毒だが、先生の長所はかう云うところにはない。現狀のやうでは俵君自身も蓋し不愉快であらう。此の意味に於て、其の他にもまだ幾らも變更を要する箇所は多々あるが商工省だけは絕對最少限度に於て修繕の必要がある。民間當業者連中が救濟運動を起すに當つて商工大臣を相手にして居らぬ實情は何を物語るであらう。特に甚しいのは取引所關係者だ。何しろ株式は金解禁に依る打擊を最も痛烈深刻に受けてる第一等の受難者である。これが爲め取引所關係者は悲鳴どころか、膏汗を流し、血塗(ちみどろ)になつてゐるのである。從て運動も陳情も必死であり、眞劍を極めてゐる。此の場合此の連中が眞先きに縋りつくところは主務官廳たる商工大臣でなければならぬ。果然彼等は最初商工大臣のところへ押しかけたのである。然るに俵商工大臣はこれに對して何等施すべき策あるを知らず「諸君のお話はよく判りました、一つ井上君によく話して呉れ給へ……」と云ふ返答をしたさうである。これに依ると俵君は正に總理級だ。併し本物の總理大臣ならば株式市場關係の事柄に對して、所管外の大藏大臣のところへ持つて行けなどと見當違ひなことは言はぬ。そこが本物であり得ない所以である。爾來取引所の連中は立會の停止から賣買取組玉の解合に至るまで、總て商工大臣へは法規上已むを得ざる形式的報告を爲すに止まり、中味は皆大藏大臣のところへ持込んでゐる。藏相は又いゝ氣持で之に應接してゐる。そればかりではない。最近閣議の內容として新聞紙上報ずるところに依ると、物價問題まで大藏大臣が取扱つてゐるではないか。而して主務大臣たる俵商相は——餘り聰明でない女房が客と對座する主人の側から入らぬ口出しをして自己の存在を認識させんとするが如く——あとから追從的に言葉を副へて、僅にお茶を濁してゐるに過ぎぬ。曾て加藤友三郎內閣の當時だ。その時は今のやうに物價が下げ足りないなどと云ふのではなく、騰貴に次ぐに騰貴を以てした爲めであつたが、物價問題が矢ケ間しくなり、政府は物價調節委員會を組織したことがある。其の中心は無論商工大臣即ち當時の農商務大臣で大藏省や、鐵道省、日本銀行等の援助を求め、其の目的達成に向つて努力したのであつて、農商務大臣が其の活動の

主力であつた。又寺內內閣の際は時の農相仲小路廉氏が暴利取締令を制定公布して、岡半や增買をふん縛つたことは餘りにも有名な話である。斯の如く物價問題等に就ては歷代の內閣、皆商工省が中心となつて働いてゐるのであつて、今度のやうに大藏大臣が閣議の席上公然と之を論議し、主務官廳たる商工大臣は「何うも物價問題はむづかしくて……」など﹅呑氣千萬なことを臆面もなく述べ立てて、平然として其の地位に踏止まつて居る例は全くない。今は無理な金解禁を實行した結果、正に經濟國難に遭遇してゐる大事な場合である。一つ田中內閣下に於ける高橋達磨翁の如く、此際長老山本達雄男にでも出て貰らふか、或は江木鐵欄なり田中文相邊りと入替はるも宜からう。其の他民政黨代議士二百七十有餘の頭顱中には少壯無名の適材も幾多居らうではないか。今頃になつてから、眞に今頃になつてから、泥棒の逃げ去つた後でなうべき繩の撰擇をしてるやうな、產業合理化を唱へて見たり、國產獎勵を叫んで見たりしたところで、此の深刻化した不況を何う出來るものでもない。況や產業合理化が失業者の製造機械であることは獨逸の實例に見ても明瞭である。それにしても所管大臣が問題をよく理解してでも居るなら未だしも、「產業の合理化とは產業を合理化することであります」程度で全くの無爲無能、既に閣の內外から信を失つてゐる以上一日もなく更迭さするが宜しい。同時に政務官の方も今日の場合商工行政の重要性に鑑み宜しく適材を擧ぐべきである。これが現內閣として不況切拔の緊急缺くべからざる第一要件である。次は第二として施政方針を變更することである。かう言うと何等か變更すべき方針がこれまであつたかのやに聞えるが、濱口內閣は金の輸出禁止を解いた以外は一切何もしないのである。緊縮方針などと言うと人聞きは宜いが其の實無能無爲無策無方針なのだ。由來民政黨は消極方針を以て黨是として居る政黨であるのだからこれに向つて積極政策を採れと望むことは無理であらうが、今少しく中庸を得た政策が採れさうなものである。卽ち緊縮の緩和だ。尤も無爲を以て緊縮方針と稱するならば、緩和は働くことを意味するから困難かも知れぬが、現內閣の極端なる緊縮方針が財界惡化を激成し、失業者の續出を激發さしてるのであるから、失業難の救濟には財界の好轉を前提とし、財界の好轉には政府の方針變更を前提とする。此頃政府も此の猛烈なる失業難には怖氣を催し、失業救濟の一助として地方起債の制限を緩和するとか傳へられてゐるが、此の程度で救はれる失業者は僅に筋肉勞働者の一部で、熟練職工以上並に精神勞働者は全然救はれない。犬養總裁の言草ではないが、働き得る能力を有するものを遊ばして置くことは國家的に觀ても不經濟である。一家にたとへても、費用を惜しんで無爲徒食したならば支出は減じ得べきも更にヨリ大なる收入減の爲めに結局は喰ひ詰めるより外なくなるであらう。無論如何なる場合と雖も奢侈贅澤、不必要の經費を濫用することは固く禁止せねばならぬが、働く爲めの費用は已むを得ない。此

の見易い原理が判らぬとすればやがて國家は潰れるより外はない。それには何としても無爲無策を有爲有策に變じ、先づ財界の氣運を轉換して產業の興起を計らねばならぬ。產業さへ興起すれば勞働者の需要は自ら澎湃として生じて來る。失業者の救濟亦易々たるのみではないか。其の他失業難と言ふよりも就職難問題に就ては學校敎育の方針を改めることである。學校卒業者をして就職し能はざれば自ら開業し得る如く實際敎育を施してあるならば就職難問題は半減若くは全滅する。今日に於ても醫者の如きには殆と就職難がない。學校は卒業したがさて何處かで雇傭して貰はなければ自活が出來ぬと言ふ如きは正に學校敎育の缺陷である。見よ、學校に行かずに丁稚奉公に行つた小僧は年期が明けても決して就職難を感じて居らぬではないか。これは將來根本問題として考究の必要があらう。併し刻下の失業問題は一面に於て此の源を絶ち、他面に於て需要を喚起する。これ以外に解決策はあり得ぬのであるから、雇傭者側をして雇傭を必要とするやうな時勢の到來を促進するの一途あるのみ。職業紹介所の增設なんと言ふことは末の末である。然るに濱口內閣は依然として緊縮方針は猶之を持續する、消費節約は奬勵すると言つて居るのであるから、財界の不況は愈々以て募るばかり、失業者は加速度的に增加するばかりである。況や產業の合理化は當然の歸結として勞働人員の減少を意味する。勞働人員の減少は取も直さず失業者の增產である。俵商相は產業の合理化に依て失業者の增加を豫想するのは誤解であると議會で答辯してるが、勞働人員の減少を來さぬ產業合理化は我が俵商相獨特の新發明であつて正しく專賣特許に値する。俵商相は宜しく世界的にパテントを取つたがよい。一萬圓どころの利益ではないであらう。思ふに是亦俵商相一流の解釋であつて事實は必ずや俵商相の見解に背反するであらうこと請合である。斯の如くして政府が其の無定見、無方針を暴露する結果は、直に株式市場に最も鋭敏且つ露骨に響き、此間各種の惡喧傳は行はれ、流言蜚語は飛出し、人心恟々たるところへ、更に加ふるに賣屋と稱する一團の組織的に爲す惡辣なる賣崩しに依て株式市價は、會社の內容如何を問はず、株主配當から觀た利廻り採算を無視して暴落又暴落、此の又暴落に依て人心は更に又新たなる不安に襲はれてゐるのである。政府はかうしたことに對して嚴重取締まつてゐると言ふかも知れぬが、凡そ物事は有効適切でなければ如何に骨折つても何の役にも立たぬ。これが爲め人心は極度の神經過敏となり、水鳥の羽音にも脅されるのである。恰も震災當時、日頃は二言目には大和魂を誇る日本人が×××の襲來に周章狼狽したと同工異曲であるのだ。されば政府は犯人の檢擧と云ふやうなことばかりでなく、政府の決心を示して程度以上に行過ぎぬやう人心安定策を講ずる必要があるのだが無能な政府にはこれすらも出來ぬ。勿論震災當時の朝鮮人騒ぎとは同じ恐怖の性質が違ふから、軍隊の力を以て何うすると云ふことは出來ぬが、對症療法が何なりとありさうなものでは

ないか。現に政府が何かやりさうだとなると、單なる噂だけでも、人心は幾分落つき、株價は反騰の氣勢を示すのである。井上藏相は日銀で育ち、後長く正金銀行に居り、續いてまた二度も日銀總裁を稼いだのだから此の方面のことは相當詳しくもあらう。緊縮を説き、節約を唱へる裏面に於てひそかに預金部資金を費消して爲替相場の釣上げを行つた手際の如きは慥に巧妙であつたと言ひ得る。只併しながら、自己の畑だけで、惜しい哉、一般經濟界の事情には精通されてぬと見えて、爲替相場の釣上げだけは見事に行つたが、財界全體としては甚だ均衡を失つた。例へて見ると、恰も藪醫者が病人の熱の高きを診て、高熱の原因を究めず、徒らに解熱劑を用ひたと同樣で、我が財界をして、熱は下がつたが病狀は却つて惡化し、患者は之が爲めに一層衰弱を招き、家人は一段と不安を來たした、と云ふの髣髴たる狀態に陥れたのである。即ち金解禁に依て外國爲替は平準相場に復した――政府は平準相場に復したから解禁をしたのだと言うてるが、何等の手段を講じなくも、解禁をするとなれば漸次に解禁相場が出て來るから同じことだ――が財界は却つて惡化し、不景氣は之が爲めに一層深刻となり、國民は生活難に苦惱してるのである。此の場合主治醫は篤と患者の訴へに聽從し、適當なる方策を講じて萬全を期すべきであるに拘らず、頑迷にして之を悟らぬか、悟つても猶無能にして加療法を心得ぬとするならば、患者は死を免れんが爲めにも斷然主治醫の變更を行はねばならぬ。國民亦然り、二百七十餘名の政府與黨絶對多數を當選せしめて、滿腹の信賴を捧げたに拘らず、何事をも爲し得ず、偶々爲せば却つて財界を惡化させるやうなことばかりをして、國民の希望に副はず、全くの無爲無能、國民の餓死を傍觀し、國家を滅亡に導かんとするならば國民は斷乎として內閣の更迭を要望するに至るであらう。幸に國民は未だ意識甚だ明瞭であり而も呪ひの聲は既に擧がつてゐる。與黨の多數を失はざる限り、內閣の壽命が安全であるならば田中內閣は倒れはせぬ。若槻內閣も潰れはせぬ。筆者は濱口內閣の生誕振に鑑み、其の陣容、其の手腕力量等に見て、到底筆者の冒頭に掲げた一の陣容建直しは固より二の施政方針の變更も二つながら倶に出來ず、直接の原因は軍縮か、統帥權問題か知らねど、結局金解禁に伴ふ後始末がつかず、經濟難、失業難の爲めに野倒外するに至るであらうと信ずるのである

(五、五、六)

金解禁の實質的解決

東京時事新報　森田久

濱口內閣は現在の經濟的難局を切拔け得るか、この間に對し確信を以てイエスと答ふるには、餘りに行詰りの內容が深刻であり、之に處しつゝある肝腎の濱口內閣の態度そのものにも確信がなさすぎるやうだ、もと〳〵不景氣と失業問題の解決に適確有効な對策を求むることは難中の難事である、戰後に典型的な不景氣と失業に惱み拔いた英國は、保守黨內閣四年半の努力も甲斐なく昨年五月の總選擧で勞働黨に政權を讓らざるを得なくなつたのであるが、その勞働黨內閣も組閣當時の失業對策と不景氣打開策の觸れ出しが物々しかつたに似ず、組閣後約一年に及ぶ今日に於ても、依然として好景氣は來らず、失業者は季節的變動はあつても百二三十萬人を下つて居ない、卽ち不景氣と失業の代表國である英國の不景氣が由來するところ深く、之が解決が容易でないと同樣に、我國が現在當面してゐる難局も、英國の夫れに優るとも劣りはしない、從つてこれが解決策も簡單に行かず、濱口內閣が果してこれを乘り切り得るや否やも、英國の例に顧みて甚だ覺束なく思ふ所であるが、然らば現內閣に代る如何なる內閣の出現によりて、この難局打開を期待し得るかの段になると、これ亦一層心細くなる。現內閣に好意を持たぬ人に云はしたら反對黨に明け渡せと主張するだらうが、それでは金解禁後の善後策を現內閣に委託した國民總意の反映たる總選擧の結果を蹂躪することになるし、擧國一致內閣の如きは云ふべくして行はれ難い、とすれば甚だ心細い話ではあるが、矢張り現內閣を鞭韃し、國民の協力によつて乘り切り得るやうに仕向けて行く外はない、これが現在の財界の狀勢を基礎として、政治的に將又常識的に導き出される結論である。

しかし右は現在の財界が、或る期間は一層深刻化し行く不景氣に堪へ、國民の努力によつて一陽來復の彼岸に到達し得ると假定しての議論であつて、若し財界惡化の程度が更に甚しく、遂に收拾すべからざる混亂を呈するやうなことになれば、それは現內閣の金解禁政策の破綻に外ならないのであるから、如何に議會に多數を擁してゐても、政策を生命とする政黨として、當然退却せねばならぬことになる。要するに金解禁後の不景氣深刻化は當然のプロセスに過ぎないのであるから、これだけにては現內閣の鼎の輕重を問ふ譯には行かない、問題は不景氣が極度に達し、現在國民生活を蔽ふて居る社會不安が、不景氣後の一陽來復を待ち切れずして爆發し、財界の機構に大破綻を來すことなきや否やの點である。故に現內閣が今日の難局を切り拔け得るや否やは、この不景氣と社會不安を、好景氣來への一過程として、之を破綻に至らしめずして、果して善處し得るか、どうかの問題となるのである。

現內閣が金解禁方針を決定した當時に、豫想した以上の難局に直面するに至つたのは、そも何故であるか、私は之に對し、現內閣は最初から財界に對する見方を誤つて居り、現在も依然として、その誤りを續けて居るからだと答へたい、云ふまでもなく金解禁の解決には二つの見方があると思ふ。

（一）は大正六年九月に發布した金輸出禁止令を、再び大藏省令を以て解除する形式的の解決で、（二）は約十二ヶ年に亘り金の輸出禁止下にあつた財界を金解禁――卽ち金の輸出入を自由にすることによつて、國際的にアヂアストする實質的解決である、故に（一）の形式的解決ならば、單に一片の省令を公布すれば足りるのであるから、事は極めて簡單である、しかし實質的解決になると、爲替關係よりする一種の保護政策の撤廢であるから、物價關係より內地財界の一大收縮作用が起り、過渡的に大打擊を蒙ることを免れない。これ金解禁前に新平價解禁論の提唱が行はれた所以であるが、現內閣は形式的に金解禁令公布を急ぐの餘り、實質的解決に對する準備が甚だ拙速に失した、云ひ換へれば解禁の影響に對する觀測を誤つて居た、卽ち解禁前後に對する財界の抵抗力を餘りに樂觀し過ぎて居た誤りが、今日の財界の恐慌によつて實證されたことになるのである。

現內閣が財界に對する見方を誤つて居たことは、各方面から立證される、その第一は現內閣成立以來の爲替の騰勢が、我國の經濟力と對外信用に比例するものと誤信したことである。現內閣成立當時に對米四十三弗臺に低迷して居た爲替は、昨年十一月に金解禁を決定した當時に四十八弗まで騰貴した、しかし右は現內閣により近き將來に金解禁が斷行さるべしとの見込からの騰貴に過ぎない、何となれば金解禁になれば財界の實勢がどうあらうと、爲替が正貨現送點まで騰貴するのは當然である、殊に我國には當時正貨保有高が十億圓を越へて居たのであるから、二年三年の將來は兎も角として、爲替の先物取引が行はれる範圍に於ては、これ位有力な騰貴に對する保證はない、一方爲替が金解禁を目標に、投機的に騰勢に向へば、貿易業者は採算上より輸出を急ぎ、輸入を手控へることも亦當然であつて、この爲替取引の關係からも、更に爲替騰貴が助長されるのである。然るに井上藏相の如きは、自ら金融と爲替方面のエキスパートを以て任じて居ながら、爲替の騰貴は卽ち對外信用力の向上なるかの如くに宣傳し、最近の特別議會に於ても、性懲りもなく此點を力說して居るのは、國民を愚にするも甚しいものであるのみならず、この誤つた思想が財界を今日に行詰らしめた一因をなすものである。

第二は貿易に對する見方の誤りである。現內閣は昨年の貿易尻が入超六千七百萬圓に減じたことを以て、貿易の實體と國際貸借の改善が達成されたかの如く宣傳し、金解禁の影響懼るるに足らずと國民を欺いたのであるが、その貿易の好轉なるものは、前述の如く爲替關係から輸入を手控へ、輸出を急いだ過渡的現象で、續いて現はれるものが輸出の萎縮であることは、少しく經濟理法を心得るものなら何人も考へ及ぶことである。現に本年一月以降四月までの貿易に見るも輸出は一億五千五百萬圓を減じて居り、輸入も亦二億二千八百萬圓の減退となり、輸出が金解禁見越して商賣を急いだ跡の不振と、輸入の手控へが依然として行はれてゐることを示して居る

のである。即ち入超額に於ては昨年より七千三百萬圓の減少となり居るも、輸入の手控へから見ると、本年下半期に於る輸出轉換が遲れることは當然豫想される所であつて、現內閣が如何に貿易好轉を宣傳するも、入超の壓迫と正貨流出の不安は依然として下半期に持越されるのである。

第三は物價に對する觀測違いである。現內閣――殊に井上藏相は米國の金利高が昨年秋の株界恐慌で一頓挫したことを以て先見の明を誇つたが、この先見の明も金利安に續く物價下落を看落した。この結果として昨年七月頃には米國の物價の開きを約一割と見て、我國が消費節約で低物價策を執れば、遠からず日米物價のバランスを取り得るものと考へたが、生憎なことには肝腎の目安にしてゐた米國物價が日本の物價に先走つて更に一割方も下落し、その開きが二割となつたので、一割低落を目安にした我國の低物價策は、こゝに大きな喰違いが出來た、これ現內閣成立以來、我國の物價が約一割の低落となり、之が爲めに不景氣の深刻化、失業者の續出で産業界の一大不安を招來してゐるにかゝわらず、尙ほ前途に對し何等恢復への光明を見出し得ざる所以である。

第四は消費節約宣傳の大惡政である。我國の財界に對し、經濟事情を異にする米國の繁榮經濟政策――即ち多量生産、高賃銀、消費増加の循環的の繁榮經濟政策を望むことは不可能であらうが、眞理はどこにも通用出來る原理である。然るに現內閣は道學者流の經濟思想を以て消費節約を國民に強要し、之によつて國際貸借を改善し、金解禁を容易にし得るとなしたがその結果として消費減退が生産の委縮となることを看却し、米國の繁榮經濟の逆を行つたが爲めに、さらぬだに疲弊せる國民の經濟力を一層委縮せしめることになつたのである。

第五は緊縮政策の履き違ひである。凡そ財政上の緊縮政策は、政府自らその臺所――即ち政費を緊縮し、その餘裕を減税に振向けて、民間の生産資本を豐にすることを意味する、然るに政府は國民に緊縮と消費節約を強要し、その生産力を阻喪せしめながら、一文の減税もやらない、一方に生産力を委縮せしめ、一方に重税の誅求を續けて、民間に復活更生を望むは無理な註文である、現在の不景氣深刻化は政府の誤つた緊縮政策もその一因である。

要するに現內閣は、金解禁の前後に對する財界の見方を誤つた、この第一の誤りは第二の誤りとなつて、金解禁の善後政策を誤り、現にその誤りを續けて居るのである。

金解禁斷行に先ち、新平價解禁論が一部に唱られたに對し、私は新平價解禁は事實行はれ難いにしても、新平價論の論據そのものには、舊平價解禁を斷行する前に、充分聽從する必要あることを主張した、即ち財界の現勢と將來に對し充分の檢討を加へ、所謂準備の萬全を期したる上に、斷行すべしと說いたのであるが、現內閣は財界に對する根本的の見方を誤つて居たことゝ、他方政治的理由により解禁を急いだが爲めに、解禁に對する事務

上の準備たる在外正貨の補充、爲替相場の人爲的吊上にのみ依賴して解禁を斷行し、遂ひに今日の事態を招徠するに至つたのである。而して財界に對する見方を誤つたことは、現内閣の主腦たる濱口首相と、財政經濟政策の中樞を握る井上藏相の無定見を語るものである。濱口氏は政府の財政切盛りに對する智識經驗は豐富かも知れないが、その頭腦は、現代の文化國家を贅澤品の輸入制限と消費節約で支配して行かうと云ふ程に、道學者的に固定してゐる人である。文化が進み、國民の趣味や嗜好か複雜化し、消費慾か增大することと、國家の產業發達が如何なる關係にあるかに就て、全然理論のない人である。井上藏相は爲替や金融に關するエキスパートであり、頭腦の働きは濱口首相より鋭敏であるかも知れないが、國家の產業に對する理解を缺く點に於て、濱口首相と同一である。私は昨年七月に井上氏が現内閣の藏相に起用された當時に、これが現内閣にとり成功とは云へないと考へてゐたが、今日までのお手際を拜見して居ると、金解禁の形式的解決を成功にやつてのけたと云ふだけで、實質的解決の方は、これと反比例的に失敗となつて現はれ、今日の財界不安の種を蒔いたのである。井上藏相が現内閣の經濟財政策の中心人物で、一人で切り廻してゐる現狀から見ると、今日の財界不安は井上藏相の責任だとも云へる。

然らば財界不安は、今後どう落ちついて行くであらうか。これが當面の問題となるが、先づ物價の關係から見ると、前に述べた如く英米の物價は低金利と不景氣で、現内閣が考へたよりも更に一割方餘計に下落したのであるから、此點に於て我國も物價下落と貿易不振から來る不景氣は一層深刻となり、一方政府の消費節約宣傳で國民の企業心と生產力は極度に萎縮してゐるから、此方面から失業者が更に增加し、社會不安を險惡にすることになる。打續く不景氣で民間の企業者は相當に經營の合理化を實行し、將來の發展に對する基礎工事として、財界の實體に多少の希望が繋がれないでもないが、それも政府が現在の萎縮退嬰の緊迫政策を改めない限り、光明の彼岸に到達するまで支へ切れず、玉石混淆の總倒れとなる危險に陷らざるを得ないのである。かくてこの調子で進んで行つて、果して現内閣の手で、この危險を乘り切り得るや否や大いに疑問だと云ふことになる。

故に現内閣でこの難局を打開しようとするならば、先づ以て前に述べた如き誤れる政策の大轉換を行はなければならぬ、それも消極政策より政友會式の積極政策へと云ふやうな、反動的なヘマな轉換でなく、緊縮政策の眞髓に徹して民間の生產力を培養することを目標とする所謂政策の大修正が行はれなければならぬと思ふ。

世界資源の分布を修正せよ

中外商業新報　小汀利得

一

われ/\はいま深刻なる不景氣に苦しめられつゝある、而もこの不景氣なる現象は啻に日本丈に止まらずして、廣く世界的である丈に、如何にして之れを突破するかの問題は、特に重要なる意義をもつのである。

然らば如何にしてこの世界的不景氣は起つたか? 突破の方策を考へる前に、一應その由つて來るところを詮索する必要がある。

世界の經濟が昨年のニユーヨーク株式市場の崩壊を動機として、不況狀態に入つたことは、何人も知る通りであるが、いまの不景氣そのものは、世界中の多くの人々が、漫然と考へて居る如く、ニユーヨーク株式恐慌によつて齎らされたものでもなければ、またフーバー大統領が、議會に送つた教書に於いて世界に向つて宣言して居る如く、ニユーヨークの株式市場に使はれて居た、巨額の資本が市場から解放されて、產業に利用されそれによつて世界の產業が復活するものでもない。若しフーバー氏のいふことが正しかつたとしたならば、株式市場崩壊後半年以上を經過した今日、世界が日に日に不況の淵に沈み行きつゝある筈がないのである。

二

實は今日の世界的不況は、歐洲大戰以來のそれの連續なのである。過去數年間世界的不況が緩和されて見えたのは、アメリカの永き低金利政策と、歐洲、南北米および日本その他に對する同國の投資によつて大戰以來の不景氣が中間的に緩和され、若くはカムフラージユされて居たに過ぎないのであつた。換言すれば一種の中間景氣であつたのである。現在の世界的不況は第一には世界に於ける帝國主義の行詰まりから來て居る、この問題は日本人には最も理解に容易なる問題であるか、日本の人口の密度は、大正十四年十月の國勢調査の結果によつて見ても本土一平方哩當り四百四人、臺灣二百八十七人、朝鮮二百二十九人、樺太十四人六分と云ふ稠密さであるが、濠洲の如きは日本の本土の二十倍といふ廣大なる土地の上に、一九二四年の同聯邦國勢調査の結果によれば、五百八十七萬三千五百三人の人口を有するに過ぎず、一平方哩當りの密度は二人に充たない有樣である。

從つて天然資源の國民一人當りの割合を見ても日本の石炭埋藏量は一人百二十六トンに過ぎないのに對して、濠洲のそれは二萬八千トン、キヤナダは七萬一千五十トン、アメリカでも二萬二千七百九十六トンであり、鐵は日本の一トン四分に對して濠洲は百六十四ト

ン、キャナダは四百五十八トン、南阿聯邦は四百五十トンであり、耕地も日本は陸地面積の一五・五パーセントを開拓して居るに拘らず、一人當り僅かに、四九エーカーと半エーカーに充たず、之れに對して濠洲は陸地に對する耕地割合一・二パーセントでありながら、一人當りは三・九二エーカーと日本の八倍に當つて居る。

右は一二の例に過ぎないが、これで見ても判るやうに、現在世界人口の分布は甚だしく不公平なるものである。そして之れが爲めに、日本の如き人口多く天然資源貧弱なる國が困つて居ると同時に、他方では人口少き爲め、折角の天然資源の開發も出來ないで、同じやうに極度の不景氣に苦しめられて居る濠洲やキャナダのやうな國もある。

三

世界的不景氣の原因は右の外人口分布の不公平に伴つて起つた、國際的富の分配の不均衡や、資本主義に伴ふ國内間の分配の不公平、大戰中に起つた工業農業上の變化及び金の分布の不自然等々の原因に歸することが出來るが。就中最も重大なるものは、最初に擧げた人口の分布の不公平、之れを別な方面から見れば、土地その他の天然資源の分配均衡に在ること云ふまでもない。

いま世界中で最も多くの土地を占有して居るものは白人種であるが、彼等はその本國たる英、佛、獨、伊の諸國を初め、植民地に於いても、彼等の人口の増加は止まつたか、然らずとするも、その自然増加率は著しく低下しつゝあつて、現在の勢ひが急變せざる限り、歐洲系の子孫によつて占有されて居る、地球上の土地の大部分が、彼等の子孫によつて開發されることは想像し得ない。從つて世界的不景氣の根本的打開策は、この偏頗なる人口と天然資源の分布を修正することの外に無い。

しかるに實際に於いてはどうであるか？各國は國内に於いてブルヂョアとプロレタリアとが相爭ひつゝある如く、國際的にもブルヂョアとプロレタリアとは相對峙して居つて、開發の望みなき天然資源をば、寶の持ち腐れのまゝ、かたく把持して離さない、否なそれどころか、現在の不景氣打破に直接最も効果ある、アメリカの歐洲に對する戰時債權すらも棒引きにすることを肯じないのである。

從つてまた英佛等も、その對獨賠償金の取立てに、血眼となつて居る現狀であるから、今後アメリカが、その國内農工業の不況に堪え切れずして、再び全世界に向つて資金の貸付けを行ふことありとするも、到底眞の好景氣を招來することは期待し得ないであらう。

況んや現在物質文明の最高峯に居るアメリカの經濟界は、いまやその獨特の國民購買力作製および之が利用に於いて行詰まり、同國の經濟界が從來通り、國内市場を主として、新たなる發展を示さんとする以上、從來の如く自動車やラヂオや、シネマでなく、それ以上の高度の享樂物を、國民の大多數が需要するに非れば、到底新たなる發展は望まれないに於いておやである。

蓋しアメリカに於いては、ラヂオも、シネ

汽車も自動車もすでにほゞ行き渡り、少くとも新規の需要を大いに期待することは出來なくなつて、今日に於いては一種の夢に過ぎないやうな、高度の消費が刺戟せられない以上、同國産業界は今日までの積極主義を捨て、漸やく保守的とならざるを得ない狀態に置かれて居る。

四

現在の不景氣が上述する如く、政治、經濟上現存の制度の行詰まりに基づく根本的なものである以上、日本の經濟界不況突破の對策も之れに順應する、雄大なるものでは無くてはならない。

この見地から日本は須らく世界に向つて、天然資源と人口との、公平にして且均衡を得たる分配を要求すべきである。國際的プロレタリヤたる日本は、世界のブルジョアに對して極めて平和裡に、より多くの未開發天然資源の供與を要求する權利がある。

かゝる根本的なる對策を講ずるに非るよりは、日本の不景氣は素より、世界の不景氣をも根本的に打破することは出來ない。

もちろん之れを行ふに當つては、相當の順序と、適當なる時機を擇ばなければならないから、今直ちに此の全世界の人類を幸福に導く手段を採ることは出來ないが、常に此根本問題を考慮の中に置いて、其他のすべての對策は決すべきである。

その斷に於いて、現内閣の採り來つた政策は、大體に於いて誤つて居ると評さゞるを得ない。すなはち世界的不況の眞唯中に於いて、金の平價解禁を行ひ、爲めに我國民經濟を世界的不況の渦中に投じたので、不景氣突破の方策は、恐らく何等の形ちに於いても見出し得ないであらう。

五

我國の失業問題が失業保險等を有する、歐米産業先進國のそれに比して、甚だしくその重要性を異にするは云ふまでもないが、技術的、專問的に見たる失業の外、學校卒業者の就職難が所謂家族制度によつて、カムフラージユされて居る間は兎も角、最近の如く中小農工商階級の中に著しき「失業」者を出しつゝある時に當つて、現内閣の失業對策の如く、産業合理化によつて、産業の立直りを見、それによつて自然に失業問題の解決するを待つと云ふ消極的なるものでは、今日若くは今日以後の深刻なる失業を緩和することは到底不可能である。

蓋し産業合理化は必然的に失業者を生むものであつて、この失業が合理化によつて緩和せらるゝのは、新たなる勞働の需要が、次ぎから次ぎと起つて來る時に於いてのみ、考へ得る事實であるからである。之れを要するに現在の不景氣を突破し、失業問題を解決すべく、現内閣の諸施設は餘りにオーソドクスであり、單純に過ぎることを遺憾とする。

政府は景氣を左右し得るか

國民新聞　中津海知方

一

俗説に從へば、我が國現在の不景氣は金解禁の結果であるといふことになるらしい。若しそうであるならば、金解禁をやらなかつたならばこの不景氣は襲來しなかつたらうし、又金解禁を最近やつたのではない諸國は不景氣にはならない筈だといふことにならなければならない。然し乍らどうも事實はこれに反するのではあるまいか。先づ列國の狀態をみるに、金解禁をやつたとやらないとに變りなく、總て不景氣だ。即ち世界的不景氣と呼ばれる所以に外ならない。更らに我が國についてみるに、假りに金解禁をやらなかつたとしても、アメリカが不景氣で生絲を買はず、銀塊相場が今日の如く低落して支那方面の購買力が減り、更らに印度の綿布關税引上の如きことがあつたとすれば、不景氣にならざるを得なかつたらうと推論されるではないか。ただ斯ういふことだけはいへるやうだ。金解禁をしてゐなかつたならば、圓價を漸次低落せしむることによつて、我が生産品の國際的市價を漸落せしめ、輸出の增進を圖り、國内的には好景氣を招來せしむることが出來たと。然し乍らこの事が如何に危險なことであるかは今更ら論ずる必要はあるまい。尤も新平價論者はいふかも知れない。今日の不景氣は金解禁のためといふのではなく、舊平價解禁のためなのだ。だから新平價で解禁してゐたらこの不景氣はなかつた筈だと。これが一番尤もらしく聽える議論である。然るに現内閣が成立して、金解禁を聲明した當時の爲替相場は、紐育宛電信賣が四十五弗内外であつたが故に、今日までの爲替の回復、言ひ換へれば急騰は一割程度のものに過ぎない。之に反して證券市價や重要商品市價の低落は一割や二割ではないのである。一二の例をみるに、東株が百四五十圓してゐたのに、今日では辛うじて百圓であり、鐘紡が二百五六十圓してゐたのに、今では百七八十圓に過ぎない。その他の有力株何れも同樣である。更に商品市價についてみれば、横濱生糸現物相場は千三百圓位してゐたのが今日九百八九十圓に低落して居り、綿糸も左撚二十手現物で二百二三十圓だつたものが百五六十圓になつてゐる。斯くの如き狀態であるのに、國際的に無關係な、全然國内的商品であるといつていい米のみが、丁度一割程度の低落を示して居り、定期先物で三十圓摑みであつたものが今二十六七圓を示して居り、正米相場も内地米平均三十圓内外だつたのが、やつぱり二十六七圓所である。この事實を基礎として考へて見れば、

若し世界的不景氣の影響を蒙ることがなかつたならば、證劵並に重要商品の市價の低落の割合は圓價の昂騰の割合と同程度であつたらうといふことがいひ得ると信ずるのである。斯くの如く觀る時は今日の深刻なる不景氣は必ずしも、舊平價、新平價の如何に依つて甚しき差違が生じてゐるとは思はれない。つまり金解禁の如何よりも、世界的不景氣に影響されてゐることの方が遙かに大であると觀なければならないのだ。

二

果して然りとするならば、不景氣對策も、如何にこの世界的不景氣に處するかといふことに出發點を置かなければならない。そのためには世界的不景氣の實相を知る必要が起る。茲に於て吾々は歐洲戰前の狀態を顧みなければならない。其處には今日同樣の世界的不景氣が在つたのだ。而して今日の世界的不景氣はこの戰前の不景氣の繼續に過ぎない。資本主義經濟組織の發展に伴ひ、機械生產が或る程度の發達を遂げた時に、そこに必然的に惹起さるる生產過剩が今日の不景氣を生んでゐるものに外ならないのだ。故にこそ到る處に生產制限の聲を聞くに至つてゐるのである。從つて若し完全に、國際的な生產制限が、失業群を大ならしむることなく、勞働時間を短縮することに依つて遂行され、利潤を遞減——或はその極絕無となるかも知れない——して行くことに資本家が滿足するならば、不景氣を完全に排除し得るかも知れない。然し乍ら斯くの如きことが、今日の實際問題として行はれ得ざる限り、この不景氣は到底消し去ることの出來ないものであり、寧ろ不景氣が常態だといつていい位である。大戰中の好景氣の如きは、戰爭といふ異常の出來事に依つて、平時に於ける經濟觀念を忘却せしむる程の興奮狀態に民衆を驅り立てたために、一時的に不景氣を中斷せしめたに過ぎないのであつて、戰爭が終り、興奮から醒めて、以前の冷靜さに歸ると、そこに馴染深い不景氣が待つてゐたのが今日の狀態ではあるまいか。從つてこの不景氣を打開するといふことは、到底人爲を以てしては成し難い所であり、獨り現內閣のみならず、何人にも出來ないことであらう。

三

然し乍ら、ただ、地方的に且つ一時的にこの不景氣の流れを歪ませることは可能である。それに二つある。一つは所謂積極政策と我が國に於て呼ばるる言葉の一般的解釋內容がそれである。公債を發行して事業を起すとか、補助金を豐富に出すとかの財政政策に依つて、一時的にせよ何にせよ、產業を起さんとするもので、圓價の低落に依つて貿易を振興せしめんとすると同樣、危險なること言ふまでもない。而して他は地方的に生產方法の改善を行ふことであつて、產業合理化運動が即ちこれである。然しこれとて決して永久的のものではないのだ。例へばドイツが各國に先んじて合理化運動が徹底し、生產費の遞減に成功して、國際市場に於て優秀の地位を得るに至り、繁榮を招來することが出來たとすれば、他の地方に於ても、ドイツの壓迫に甘

んずる筈がなく、之を模倣し、或は一層改善して、ドイツ同様乃至より以上の生産費遞減を策することは明かである。最近のイギリス等にこの例を見出すことが出來る。而してその結果は合理化前以上の過剩生産に陷ることは當然である。然しながら他に一歩先んじて合理化運動が成功したとすれば、他が追隨するまでは優秀的地位を確保することが可能であるが故に、所謂積極政策と呼ばるる方法よりは、幾分永續性があることは事實である。然し一方積極政策と呼ばるる方法程端的に効果を擧げ得ない難がないではない。それでも少くとも危險を伴ふことが、資本家的にみて少い——産業合理化に伴ひ失業者の增加することは周知の事實であり、いはゆる權威者達は之を過渡的失業と呼んでゐる。獨り我國のみならず、世界の權威者達がそうである。然しこの點に關しては自分には異論があるが、今は論じないことにする。而も失業者の增加といふことは資本家側からいへば、必然の惡に過ぎないやうだ——といふことは、資本家的立場に立つものからいへば有難いことであるに違ひない。茲に於てか、餘りにも聰明にして、山本悌二郎君の如く熱情家でない井上藏相が、いはゆる積極政策に向はず、合理化運動に進まんとするのは當然であらねばならないし、又合理化運動の奏効といふことが、その結果の繁榮は幾分永續性は之を有するも端的即時的でないがために、無爲無策なりとされる所以でもあらう。殊に國民性として性急なる我が國に於て殊に然りである。然し結局は産業の合理化といつても、前にいつたやうに、決して恒久的なものではないのだ。いつかは各國が之を模倣し、之に追隨することを豫想しなければならない。それでも、世に言ふ實際問題の程度に於ては有効であるといふことを、自分も認めないのではない。ただ産業合理化運動が効を奏するために、殊に我國に於て一つの障碍たるものは、銀行制度にあるといはなければならない。言ふまでもなく我國の銀行制度は預金銀行主義に徹してゐる。從つて同産業部門に屬する數個の企業が相倚つて、カルテルなりトラストなりを組織せんとする場合に必要な資金を得ることが容易でない。この點は産業合理化運動者の特に注意を要する點であつて、ドイツに於ける合理化運動が着々として進捗するに對し、イギリスの夫れが比較的遲々たるものがあるのも、一は國民性にも因るであらうが、銀行制度の相違が與つて力あるものではないかと自分は推測してゐるのである。過般の銀行法制定に際しても、自分は餘りに預金銀行主義に墮するの非を主張し、寧ろ企業銀行主義を採用することが將來のため得策なることを提唱したのであるが、目前にかの大恐慌を見せつけられては、オツポチユニストの充滿する當局方面では、事業といふものは總て銀行にとつては危險なるものなりとの觀念に支配せられて終ひ、遂に今日の合理化運動に對する企融難を示現するに至つて終つてゐる。この點は井上藏相も勿論認められてゐる筈である。

四

而も我が財界現下の不景氣に對する對策と

して、何等かの方法が存しないかといふことがいはれてゐるのは、自分の解する限りに於ては、稍や永續性はあるが、今日只今の不景氣の緩和には效果少い合理化の如きものではなく、更に更に適確に現在の痛痒を去る頓服を求めてゐるやうである。而もそれが將來に禍根を殘すなどといふことは問ふ暇がないと叫びつつあるやうだ。茲に於てかいはゆる積極政策が却つて歡迎されはしないかと思はるるのである。然しながら政策そのものに甚しく危險を包含する積極政策は到底吾々の贊同し難き所であり、現當局者も亦然りであることと信ずるのであるが、何等禍根を殘さない應急方法が存在するならば、之を施すことは何の不都合もない筈であり、それは日銀並に郵便貯金の利下に外ならない。

　中央銀行の利下げに伴ひ、當然想像されることは正貨の流出を招かないかといふことである。然し今日の金利の狀態を見れば決して左樣のことはないことが直ちに諒解される筈だ。即ち日銀の割引歩合が一錢六厘であるに對し市中金利はコールの如き一錢以下であり、個人貸と雖も一錢二三厘といふものさへある狀態である。從つて今日の正貨現送點は日銀の割引日歩とは何等關係なく決定されてゐるのであるが故に、日銀の利下が直ちに正貨の流出を誘致するやうなことは有り得ない。同時に市中金利に影響することもなく、ただ特別融通を受けてゐる銀行（年三分の分を省く）の經營が樂になるといふことの外は、財界に對しての實質的影響は全くない。それでも人氣の轉換には相當效果がないではないのである。而も今日の不景氣といふも、實體以上に不安と焦燥とを各人が懷いてゐることも、確かに有力なる素因をなしてゐるのであるが故に、之を除去することも必要でないことはないのである。而して郵便貯金の利下を合せ行ひ、不生産的な而も莫大なる郵便貯金を生産的な銀行預金に振り向けることも決して效果なくない。この兩者は今日死藏されてゐる資金を活用することと今日漸く普遍化せんとしてゐる不安と焦燥とを除去するといふに過ぎず、實質的な影響を財界に何等與ふるものでなく、而も或は一時的にもせよ人心を安定せしむるの效果があるが故に、先づこの利下を行つて、人心の安定を圖り、その間に産業合理化の徹底を期したならば、幾分永續的な安定を得ることが可能ではあるまいか。而して井上藏相等の考慮もこの邊を彷徊してゐるのではないかと自分は信ずるのである。然しながら、それは遂に根本的な不景氣建て直しでは決してなく、根本的な不景氣打開は、今日の資本家的政治家には何人にも不可能であることは、本稿の冒頭に說いた通りである。同時に根本的建て直し以外の稍や永續性ある不景氣の歪みを作ることは、之亦現內閣に限らず、何人にも可能であることも既に明白になつた筈である。ただ我々は一時的眩暈を畫するに過ぎず且つ却つて潜行的に不景氣の進行を早めるであらう所の所謂積極政策を好まないのみである。（四月二十七日稿）

深刻化せる財界難の眞因と其打開策

東洋經濟新報　石橋湛山

　先日或雜誌から「恐慌は來るか」との質問を受けた。私は、それに對して「恐慌は來るか」ではない、もう來てゐる。今の我經濟界は、正に其恐慌の眞最中であると答へたのである。昨年六月末を基準にして、本年四月末には、株式相場は平均約二割六分、卽ち四分の一餘の下落をした。物價は、まだ内地消費品に於て下落のおくれてゐる物があるので、日本銀行の物價指數などで見ると、割合下りは少いやうだが、併し生絲、綿絲、鐵、セメントと云ふた種類の重要商品は三割、四割の暴落をした。而して經濟界は、前途の不安に戰々兢々として、全く仕事に手がつかない。之が恐慌でなくして何であらう。銀行に閉店さへ起らねば（それとて地方にはぽつ〳〵ある）恐慌でないと思ふのは、棟まで燃え拔けねば火事に氣付かぬ迂闊者だ。

　ところが驚く事には、世の中には斯樣の迂闊者が案外に多い。又中には、經濟界の現況の甚だ憂ふべき狀態に在ることだけは認めても、其由つて來つた原因は、主として世界的不景氣の反映で、舊平價金解禁の爲めではないとする色盲者が少なくない。私は近頃或人の論文を見たが、其云ふ所に依ると、例へば日本銀行の卸賣物價指數は昨年六月から本年四月の間に一割三分ほどしか下つてゐない、然るに此間米國の物價指數も一割二分餘下つてゐる、舊平價金解禁の爲め我國の爲替相場の騰貴した影響は殆ど物價の上には現れてゐない、知るべし、今日の我財界の不況は、外國の不景氣の影響で、金解禁の爲めではないのをと。まあ斯う云ふた調子である。濱口首相や井上藏相は、まさか之ほどの色盲でもあるまいと私は考へるが、併し之は又前からの行懸り——自ら舊平價金解禁を強行したと云ふ行懸りから、今日の不景氣が金解禁の爲めだとは認めたくない。そこで今度の議會では、矢張頻りに海外の不景氣說を振り廻はし、責任回避に之力めた。

　併し思ふても見るが好い。若し單に外國の經濟界が不景氣になつたと云ふ事だけならば、何の爲めに二億何萬圓の金が我國から流出したか。此金の流出（其外に在外正貨の減少もある）の爲めに、我國内の通貨は、日銀兌換券だけで、明白に一億四、五千萬圓を收縮し、其外に日銀民間預金を加ふれば二億七、八千萬圓を減少した。それが僅かに一月

の半ばから三月ほどの間に起つたのである。實に非常の事ではないか。大正九年の世界戰後の恐慌は、我近年の恐慌中、最も強烈なものであつた（昭和二年の恐慌は、銀行の取付が起つたので、表面的に騷ぎは大きかつたが、實質に於ては輕かつた、そも特別融通法の施行がなかつた、事情は大分違つたであらうが）。併し其折にも、政府及日本銀行所有の內外所在正貨の減少は、大正八年十二月末から九年四月末までに一億九千七百萬圓に止つた。今度の場合は在外正貨の減少を加ふれば、多分四億圓を超ゆるであらう。日本銀行の兌換券から見ても大正九年の場合は、救濟資金の放出もあつたからではあるが、今度の如き急縮は現れなかつた。斯んな事が、何うして外國の物價が下つた位ゐの事で起り得よう。それも日本の經濟界が、金解禁前に於て、米國の株界の熱狂と步調を合せて、大に好景氣でゝもあつたならばであるが、事實は誰れも知る通り、我國の經濟界は好景氣どころか、數年來引續いて不景氣に呻吟した。

又物價の事も、前に述べた如く、日本銀行の指數は、特に國內消費品を多く含む關係から下り方がおそい。が、それ故に舊平價金解禁は物價に影響を來さぬなどと說く者は、全く統計の見方を知らず、又經濟界の實狀に通ぜぬ者と評せざるを得ない。爲替の相場の騰貴に依つて直ちに影響を受くる商品は、貿易關係品である。貿易關係品以外の物は、爲替相場が上つたからとて、必ずしも即坐に下るわけがない。其等は貿易關係品の下落が引起す財界不況、消費の減小が波及して、そこに餘儀なく下落するのである。故に物價が、貿易關係品に於ても、又其他の商品に於ても、總て平均して下り切るには、相當時間を要する。之は少しく經濟統計を取扱つたものならば、誰れでも知つてゐねばならぬ事柄である。のみならず物價が斯樣に總て步調を揃へて下落せぬことは、實は今日の經濟組織の最も大なる惱みの一だ。總てが一處に下つて吳れる（或は上る場合でも同樣だ）、即ち經濟界のアヂャストメンドが常に即坐に行はれ得るものなら、金解禁だらうが何だらうが問題は起さない。ところが事實は生絲の場合は下つたが、繭の値は下らない、或は繭の値も下つたが勞賃は下らない、勞賃は下つたが米の價が下らない、無論銀行は過去の借金の元利拂を減じては吳れない。斯うしたチグハグが生ずるので、財界變動は困るのだ。然るに不思議と世人は、此見易き道理を見落してゐる。井上藏相の如きも其一人で、彼は先日の臨時議會の財政演說で、「物價が適當に下落すれば、之に依つて輸入は當然減ります、又物價が下落すれば、生產費が低下致します。生產費が下れば輸出を增進することが出來るのであります。斯くするより外には、我國財界の根本的立直しの途はないのであります。」と洒々として述べてをる。物價が下落し生產費を低下する過程が如何に容易ならぬものであるかは、舊平價金解禁後本年四月で恰度滿五年になる英國の苦惱を見ても、明々白々の事實であるのに、彼はそれさへ知らぬのであらうか。

以上の如く、我國には、經濟界の現存の難局を正當に理解し得ぬ者があり、又之を相當理解しても、其原因に就て、誤つた見方をしてゐる者が少なくない。而して其誤つてゐる者、或は少くも誤つた眞似をしてをる者の中に、首相や藏相がをるのだから、此難局打開策乃至失業救濟策の樹てられようわけがない。濱口首相は五月三日の貴族院で、「私は大體に於て今日の不景氣の原因の大部分は之を國際的の原因であると存じます。外部から參ります所の不景氣に付ては、我々の支配する範圍外であります。力は及ばぬのであります。」と述べてをる。又同じ場所で「御承知の通り失業問題は不景氣の問題と同樣に、世界の文明各國を共通に惱まして居る頗る困難なる問題であります。……而して失業問題の解決には、之を完全にやらうとするならば、事財政に關する、非常に巨額の金を準備せなければ出來ぬ仕事が多いのであります。又獨り金を要するのみならず……方法の如何に依つては國庫の負擔は益々多く、而して動もすれば惰民を作ると云ふ結果になる虞れがないでもないと思ふ。」と云ふてをる。之が今日の我政府の態度だ。不景氣も失業も世界的事實だ。日本だけで何うにもならぬ。何と素晴しい卓見ではないか。之では如何に無產黨の諸君が失業對策共同運動を起した所が、無益である。

然るに首相の此辯明なるものは、一寸素人だましには役立つかも知れぬ、が、事實は氣の毒ながら又少しも辯明になつてゐないのである。其わけは、總ての財界變動は、國內に其原因の存する場合は、之を防ぎ難いけれども、國外からの波及ならば、其影響を最少限に緩和し乃至防止し得ると云ふのが、經濟理論の正しく敎ゆる所であるからだ。卑近の例を以て說けば、自分に病氣の種のある場合は發病を免れないが、他から流行病が起つたのなら、自分の身體の健康なる限り、之を防ぐ途は十分あるのと同樣だ。米國の經濟界が恐慌に陷つた。爲めに生絲が暴落の危險に瀕した。斯う云ふ場合なら絲價融資補償法も役に立つ。一時、然うして絲價を保持する。其內に米國の財界が安定する。或はそれでも結局絲價の或程度の下落を必要とするに至るかも知れぬが、當方の財界は根柢に於て健康なのだから、十分之に對抗して、困難なくアヂヤストすることが出來る。一般的に云うて、斯かる場合には、如何に外國に通貨縮少が起らうとも、當方は等しく通貨を縮少する必要なく、寧ろ一時は之を膨脹せしめて善いのである。故に若し我國の今日の財界難が、眞實政府の辯解する如く、外國からの影響が大部分であるならば、之を緩和し救濟する政策が樹たぬと云ふは嘘である。失業者なども少しも生ぜずに濟む筈である。

が眞當の話しは、前に述べた如く、今日の我國の不況は、國內に其原因が存するのだ。舊平價金解禁に依り通貨の國際價値を高めた。こゝに病源が存在する。米國の株式恐慌の餘波とか、銀價の下落とか、印度の綿布關稅改正とかけ、唯だ此國內の病氣に付け加へられた餘病の如きものだ。根本が大病なのだ

から、平常ならば輕い風引位ゐで濟む餘病が又強く病勢を悪化した。ところが此根本の病氣たる舊平價金解禁は、其當然の經過として、何うしても通貨の縮少を必要とする。物價の低下を必要とする。株式の下落を必要とする。無論動産不動産、あらゆる資産の評價減を必要とする。勞賃の低下を必要とする。之を中途で喰ひ止めることは出來難い。止めたら病氣は漫性となり、金の流出は、いつまでもダラダラと續く。或期間は或は外資輸入の注射で、金流出の影響を緩和することも出來ようが、結局は却つて破綻を大にするに止まる。不景氣對策乃至失業救濟策の建て難いは、こゝに眞因が存するのである。

併し私は、こゝには紙面が最早無いので精しく理由を述べ得ないが、我國は、金解禁の爲めの通貨收縮は、今までだけで大體十分で、此上更に之を繼續する必要なく、又繼續させてはならぬのではないかと思つてゐる。近頃英國は、英蘭銀行を中心として全國有力銀行が協働して産業促進會社（Bankers' Industrial Development Co. Ltd.）を設けた。私も豫て之と似た計畫を我國に於て提唱してゐたのであるが、何か斯樣の方法で、此破壞せられたる事業界の信用を回復することが、財界難打開策として、又失業對策として、最も急要且つ有効であると信ずる。或は斯くて通貨の收縮をやめたら、金本位制維持に困難を來すが如きことはないかと心配する者もあらうが、其折には其折に處する手段がある。其等に就ては、重ねて機會があらば詳說するであらう。（昭和五、五、八）

産業道路を復活せしめよ

報知新聞　廣田四郎

日本の物價を國際的水準まで引戻して來ない限り、この不景氣の根本的治療は出來ないとすると、日本財界の前途は誠に心細いものであるが、國際經濟戰場裡に立つて居る以上、金本位制維持のためには何としても受けなければならぬ影響である。五十八議會においては金解禁の善後處置について盛んに論難され、政府はあくまで緊縮政策を以て突張り、野黨は不景氣挽回策として積極政策を提唱し、失業問題の解決を迫つた、しかも双方ともに相當の眞理を含んで居るから、國民は冷靜に判斷して財界の歸向を察し、當然起り來るところの諸問題の解決につとめねばならぬ。

思ふにこの不景氣は今後數年間永續するものと覺悟しなければならぬ、その間多少景氣の消長はありとするも日本の物價と英米の物價の相接近するまでは不景氣は癒らぬものと

見ねばならぬ、試みに今年三月の日、英、米物價指數を見るに、歐洲大戰前を基準として日本は一五五、八なるに、英は一二七・一、米は一二八、九である、この三者のサヤ寄せは果して何時であらうか、低金利時代を現はして居る英、米の財界を眺めては、日本の物價が更に低落し國際貸借が改善せられ景氣の立直るのは蓋し容易ではないと想像されるのである。

政府は金解禁とともに國際貸借の改善のため有ゆる施設を行つて居る。しかもそれは昭和三年十二月、時の田中內閣に對して經濟審議會の爲せる答申案に基いて着々進めて居る、五十八議會に提案せる關稅改正も、輸出補償制度も、皆これ經濟審議會の決議に則りたるもので、最近鐵道省に新設せる觀光局の如きも全く同會答申案の第七項によるのであるが、金の流出に伴ふ通貨の收縮、これに伴ふ物價の低落、低落による輸出の增進、貿易の伸暢、國際貸借の改善といふ具合に定石通りに行けば、日本國民も濱口首相も苦勞はしないが、何分大正六年以來の反動は豫想以上の不景氣を招來したのであるから、人心は漸次不安に導かれて來たのである、反對黨には恰もよし特別議會が開催されたから一齊攻擊と變つた次第である、しかし事實不景氣は深刻である。

故に今や官民は一致して金貨制度の維持、金本位の擁護に盡すためには、依然緊縮政策に則つて國際貸借の改善を行ひ經濟國難を打破しなければならぬ、唯だこの間失業問題の對策については臨機の處置を講じて救濟緩和するのは政府の責任であると信ずる、然らば如何にしてこの不景氣を打開し、失業問題を解決せんとするか、私は信ずる、この重大問題を處理せんとするには如何にしても產業の振興を計らねばならぬ、しかもこの不景氣に際會して新產業の勃興などは容易に出來るものでない、政府は機を見て失業救濟の積極政策に移らねばならぬ時期が來るに違ひない、その時期は何時か、新事業に伴ふ通貨の膨脹が、低落の途にある物價を上向せしめざるの時ならざる可からず、然らずんば國際貸借の改善は期す可からざるものである。濱口首相は議會において緊縮政策は主義ではない政策であると言明してゐる、政府は正にその機を狙はねばならぬ。

然らば假りにその時期來るとして政府は如何なる方策を取るべきか、私は敢て云ふ、產業道路の復活である、安達內相をして云はしむれば產業道路は政略道路であると一言の許に排斥するけれども冷靜にこれを觀察する時は內相があまりに政略に囚はれて居るものではないかと思はれる、成る程產業道路は田中內閣が昭和三年に計畫決定して四年度の追加豫算に計上せるものであるから、蓋しこれ政略の上から作つたものであると斷ずればそれまでであるけれども、仔細にこれを研究したならば、產業上よりは申すに及ばず、國防の上より、更に外客誘致の上より見て、最も時を得たるものではあるまいか、況んやこの產業道路なるものが、若槻內閣當時に作れる自動車道路案なるものに端を發するといふに至

つては民政黨內閣と因緣淺からざるものではないか。

聞くところによると田中內閣は昭和三年度において產業開發を目標として全國の府縣道路六千里の內千二百里を指定して產業道路となし十年計畫にて之が完成を期し、その開設には府縣をして之に當らしめ國庫はその工費の三分一を補助する旨を決定通知したのである、故に三年度中に之に着手せるもの、東京、大阪、京都、福岡、新潟等三十二府縣に亘り、一ヶ年の經費調額三千七百萬圓に上つたのである、而してこれが補助として昭和四年度の追加豫算に取敢ず二百萬圓を計上したるに昨年濱口內閣となり實行豫算の編成に當つて之れを削除してしまつた、爲めに各府縣の事業は全部中止の止むなきに立至つて居るのである、政府としては勿論緊縮政策實施のため地方起債抑止の意味をも含んで居たのである、さりとは遺憾千萬ではあるまいか、即ち經濟審議會の第七項において觀光客の誘致を目的として名勝の保存、ホテルの新設及びこれに伴ふ諸種の設備を完成せしめよとあるによつて見ても、產業道路は自動車道路となり、一石二鳥の効果を收むべきものなることに思ひ到れば、產業道路の復活は最も時宜に適應したるものであると信ずる。

唯だ國際貸借の改善と最も關係ある物價を國際的水準にまで引戻すには未だ餘程の時機がある、しかもその時機が近ければ近い程財界の影響は重大、不景氣は深刻である、即ち現在の日本物價が英、米の物價の水準まで近づくには、尙ほ一割八分の下落を要する。昨年七月濱口內閣成立當時より現在まで下落せるもの既に一割六厘なるに、更に一割八分の激落を來さんか、財界の前途眞に憂慮すべきものがある、而かも國際貸借の改善を期するためには止むを得ないかも知らぬ、それには急激なる低落は禁物で、或る程度の緩和劑は是非とも必要である、濱口內閣の取るべき途は、このデリケートな政策を最も巧妙に行ふことによつて萬事が解決されるのである（昭和五年五月五日記）

現內閣の不景氣對策を評す

大阪每日新聞　下田將美

一

慘澹たる經濟不振と各種の產業不安に脅かされつゝある際に開かれた特別議會が、經濟問題を中心に論戰が取交はされたことは當然のことであるが、私達のやうな嚴正中立の立場にあるものから、政府並に野黨が、いかに此不景氣を觀、いかに此不景氣の對策を樹てんとしつゝあるかを觀ると、いろ〲な意味

で興味の深いものがあつた。現內閣の不景氣對策を批評する前に、私はまづ總論的に今日の不景氣そのもの、彼等の解釋を檢討して見たいと思ふ。

今日の不景氣に對して政府の責任を問ふたものとしては政友會の三土氏や、同志會の武藤氏が代表的なものと見て差支へないであらう。これに對して井上藏相なり、濱口首相なりは政府としての立場を說明してをるが、双方の細かい論點については餘りにくだ／＼しいからこゝには述べない。すべてを要約して結論的に云へば、要するに野黨側は今日の不景氣は世界的の產業不振その他對外關係の惡化による所もあるには相違ないが、主なる原因は政府が無準備に功を急いで金解禁を早まつて斷行して了つたこと、並びに緊縮政策一點張りで、國民に消費の節約を强調し、購買力の大減退を來さしめた點にあると云ふのである。これに對しては政府側の答へる所は、今日の不景氣が金解禁の影響によつて生れたものであることは否定すべきではない。しかし乍ら此深刻な不景氣をすべて解禁によつて招來されたものとするのは誤解である。米國の株式市場の恐慌以來、同國の不景氣が著しく增大して來たこと、棉花、小麥、砂糖その他世界主要農產物が價格の低落を來して世界的に產業不振が深刻になつて來たこと、銀塊の未曾有の大暴落による對支貿易の減退、ゴム相場低落による南洋貿易の不振、更にインド綿布關稅の引上による綿業界への大打擊等の對外事情の惡化が、さらでだに解禁後當然豫期さるゝ產業不振の上に輪をかけて不景氣を深刻ならしめたのによるのであると云ふのである。即ち政府も野黨も今日の不景氣のよつて來る原因については別に根本的に違つた項目をあげてをるわけでも何でもない。たゞ野黨はその原因なり責任なりを金解禁そのものと、解禁對策の不備とに重きを置き、政府は寧ろ不可抗的な對外事情の惡化に、深刻化の原因を歸さうとするものに他ならぬのである。

政府の云ふ所と野黨の攻擊する所と何れがより正しい見方なのであらうか、政治的の策略を度外視して、正しく冷靜に判斷すれば、此不景氣のよつて來る所は誰れにでもはつきりとわかる筈である。成程解禁前と解禁後とでは對外事情は餘りにも激しい不幸な轉變を來したことは事實である。解禁前に於ては米國の景氣はかほどに激しく下火にならうとは思へなかつた。解禁氣構へで爲替が續騰してゆくにも拘らず生絲の値は少しも下らず、賣行きが旺盛であつたのなどは正に惠まれた對外狀態と云つてよかつた。それが一朝にして逆轉した。銀塊の暴落にしても誰れか解禁前に豫想して居らう。インド綿布關稅にしても同樣であり、世界農產物の低落にしても同樣である。それ故解禁後に世界的に產業不振がこれ程早く實現しようとは誰れも豫期しなかつたことであつて、此意味からは今日の不景氣の一因が世界的影響による所の少くないのは正しい解釋である。けれどもわが國の不景氣を根本的に見れば何と云つても金解禁の結果であることは爭はれない。何れが正しと云

へば、申すまでもなく解禁の影響の方が大なりと云はねばならない。

井上藏相は何故に解禁が不景氣の原因であると云ふことを敢然と議論せぬのであらう。私の言つた對外事情の悪化にのみ重きを置いて、解禁の影響によるとすることを故らに避けやうとする政府の態度を寧ろ不可思議にも滑稽にも思ふものである。否、卑怯千萬なことだとさへ信ずるのである。

濱口首相や井上藏相が解禁準備時代に頻りに唱導したやうに、解禁は財界の根本的立直しである。不自然なるインフレーションの時代から正しい道に歸ることである。物價の低落は當然であり、わが經濟は完全に國際化して、正しい基準の下に優勝劣敗の批判を受けねばならぬ時代に入つたのである。これ正に立直しであつて今まで誤つて高い水準にあつたわが産業界は金輸出禁止の堰堤の取のぞかれると共に正しい水準にまで復歸するのである。その水位平行作用の行はれる過程にあつて、弱小の企業が押流され、仆れるのは當然のことである。不景氣が深刻になるのも當然である。私は今日の不景氣は當然來るべきものが來たまでゝあると考へる。解禁を認める以上は當然覺悟すべきことが現はれたにすぎないと信ずるものである。

とまれすでに解禁は行はれたのである。今更解禁は尙早であつたなどゝ云つても、それは言葉通り死兒の齡を算ふるに等しい。尙早であつたかなかつたか誰かこれを批評することを得やう。解禁後の今日こそ眼前の不景氣に惱まされて解禁そのものを呪ふ氣にもならう。しかし若し今日猶解禁をしなかつたならわが國の國際的信用は果してどうなつてゐるか。明春の外債借替などは果してどうなつてゐる。爲替はいかになり、わが産業の基礎はいかになつてゐるか。解禁は尙早であつたと誰れが良心を以て斷言し得やうぞ。

解禁後當然來るべき不景氣が來たことを呪ふのは愚である。何を云つた所でそれは最早問題ではない。問題はこれに對する政策如何である。政友會は不景氣を挽回するために再びインフレーションの時代にかへせとほのめかしてゐる。以ての外のことである。私は斷然かやうな間違つた人爲的景氣挽回策に反對する。しからば現內閣は果して正しい道を辿つてをるか。私はこれにも又否と答へざるを得ない。井上藏相が敢然として今日の不景氣を解禁の當然の歸結なりとして、どこまでもデフレーションの政策を徹底させ得ない所に大きな弱點がひそむ。臨時議會に現はれた諸政策を見ても、今日まで實現した不景氣の對策を見ても、すでにその缺陷は隨所に現はれてゐる。私は以下政府政策の批判に移つて見たい。

二

不景氣を挽回するの道はいかにしたらばよいのか。アメリカの景氣が良くなればいゝと夢のやうなことを云つて居る人もある。まさかそれ程夢のやうなことを云はずとも、要するに各方面に他力本願を心に描いて居る人は澤山ある。景氣は決して他力本願だけにたよつてゐては來ない。結局自力によつて立ち、

民力を充實させること、國際貸借の根本的改善を計ること以外にはない筈である。かうした意味から特別議會に現はれた政府の不景氣打開策なるものを見る時、そこにいかなるものが現はれてゐたゞらうか。國際貸借の改善と云ふ方面から云へば曰く輸出補償法であり、關稅法の改正による一部關稅の引下げであり、更に所謂國產品愛用の奬勵であり、貿易外受取勘定の增加を目標とした外客誘致のための特別機關、卽ち觀光局の設置である。以上の他に不景氣の對策としての目立つたものは產業合理化を促進させるための特別機關の設置と、肥料配給の改善案があつた。

私はこれらの一つ一つについて詳しい論評をしようとは思はない。何故ならばそれらは何れも今日の不景氣の根本的對策から云つて餘りに微力なものであるからである。輸出補償法の如きは外國が試みたことを模倣したにすぎないのであつて、もと〳〵小規模のものである。新市場の開拓の名は美くしい。けれどもすでに開拓しうべきものは自力によつて我貿易業者がかなりの苦心を以て進むべき所まで進んでゐる。政府の補償をあてにして新市場に進まうとするものなどにどれ程の期待がかけられやうか。結局は怪しげにして弱小なるものに、つまらない補助を與へ、貿易の振興には大した利益もないと云ふことにならなければ幸である。關稅の引下は悅ぶべきことである。けれどもこれとても私達が最初に期待したものとは餘りにへだゝりの多い微弱きはまるものである。これに大きな期待のかけ得られぬのは申すまでもない。觀光局の設置による外人客の誘致、これは決してわるいことではない。風光の明媚なるわが國が、もしも外客誘致に成功して今日に數倍する外國人の國內消費がかち得らるゝものとするならば、これ程結構なことはない。フランスを羨み、イタリー、スヰスを羨むよりも、まづ實行の步を進むるのが第一であることは私達も同感である。成功を祈つて置きたいものゝ一つである。

國產品愛用の奬勵、これについては私は云ひたいことを澤山持つてゐる。しかしこゝには餘りに多くを云ふを止めて置かう。要するに國產品愛用の聲は極めて美くしい。政府はこれによつて一面に於ては輸入を防壓し、一面に於ては國內產業を振興せしめやうと云ふのであらうけれども、消費の經濟上の原則は簡單に云へば安くて良いものを買ふと云ふこと以外にはない。高くとも、粗惡なりとも國產品を愛用せよと云つてもそれは頭から無理な註文である。國產品愛用の奬勵は、まづ國產品の品質改善と價格の低廉とを前提としなければならない。今日のわが產業界は果して此前提に適合してゐると云ひ得るであらうか。これについては次節に詳論して見たいと思ふ。

最後に政府は農業のために肥料配給の改善案を以てしてゐる。此案位矛盾したものはない。需要者である農家と、利害の反する供給者たる肥料業者との間に、產業組合を介在せしめて配給の合理化を行はんとするのである。農村なり肥料業者なりの實情を多少なり

とも知り、更に産業組合の實質を心得たものにとつては此案の可能性がどこまであるか問はずして明らかなものがあるであらう。農村にとつては更にもつと大きな問題が澤山横はつてゐる。その方を閑却してかやうな彌縫策でどこまで彌縫的に辻褄を合せやうとするのか。これは問題にはならない。

三

以上の諸政策はその効果については大なる期待は持ち得ないにしても、政策そのものに就ては私達は敢て非難を加へやうとは思はないものである。もしも現政府の不景氣對策がかやうなものに止まるのならば、それは生ぬるく不徹底であると云ふ非難だけですむものかも知れない。けれど一度び眼を轉じて現に政府が主力を注ぎつゝある他の方策を顧る時そこには私達が、不景氣の根本對策として到底許すことの出來ない、大なる矛盾と錯誤の進行してをることを指摘せざるを得ない。私が主として論じたいのは實に此點である。

再び繰返して云ふまでもないが景氣を挽回せしめるの道は民力を充實せしめ、國際貸借を改善して國富の増大を計るより他に根本策はない。しかしてこれを實現するための方策は生産原價の眞劒なる遞減によつて國際經濟戰に勝つことであり、一方國内的には消費者、大衆の負擔を出來るだけ輕くして民力の涵養を計ることでなければならない。前項にのべた輸出補償案にもせよ、國産愛用にもせよ、生産費の大遞減運動が伴はぬならば、全く無意味なものとなるのである。しかるに現に産業界に行はれてをる對不景氣策は果してこの方針が採用されてをるだらうか。否、寧ろその逆な手段がとられてをると云はねばならぬのである。これでは對不景氣策は根本的に間違つてゐると云ふ他はなく、眞に光明ある景氣恢復などは期せらるべくもない。

濱口首相は貴族院に於る藤村男の質問に對して

『金解禁後における新經濟政策は、廣い意味の産業合理化と國産愛用とである』と述べた。

就中、政府が所謂不景氣對策としての新經濟政策の主眼とする所は産業合理化そのものであることは産業合理局の新設に見ても、その他政府が事ある毎に、合理化、合理化と唱へるのを見ても明白である。

正しい産業の合理化については私達は勿論異存のありやうはない。けれども現にわが國の産業界に行はれつゝあるものは果して正しいものと云ふことが出來やうか、私は今更らしく合理化論をこゝで書き記さうとは思はないが、一言にして云へば今日産業合理化の名によつて行はれつゝあるものは、これを經營の内容より云へば、獨逸のカーテル運動に以て非なる企業家の消費壓迫の共同行爲であり、勞働者の壓迫による利潤擁護である。これを具體的に云へば擧世滔々として生産制限の流行であり、共同販賣の企てゞあり、勞銀の引下げであり、人員の淘汰である。

昨年末以來今日までにいかに多くの産業が洩れなく生産制限を行つておることか。紡績生糸、晒粉、セメント、製紙、麻糸、絹紡、

石炭、過燐酸、その他算へ來れば主要產業の大部分は限產を行つておいて、中には限產率は五割以上に達してをるものもある。かゝる限產の結果どうなるかと云へば一方に於ては失業者の增加を來し、一面に於ては價格の低下を阻止して消費者への負擔輕減をはゞむことになるのみである。今日の限產は決して生產費の低下を來すものではなく、企業家はたゞこれによつて價格の維持を計り、企業利潤の擁護を計らうとするものに他ならない。故に產業合理化が正しく導かれるためには、合理化はどこまでも、一階級、一產業、一企業の利益擁護のために行はるべきものではなくして、どこまでも全產業、全階級、全社會の幸福と一致するものであらねばならぬといふ原則の下に、嚴重なる指導と監視の必要があるのである。しかしながら現政府が主唱する合理化は果してかゝる大方針に出でゝおるであらうか。今日までの經過に見れば不幸にしてそれとは正反對のことのみである。私達は、わが國の合理化はまづ資本の合理から入らねばならぬと信じてゐる。水のまじつた資本、切すてねばならぬ資本、過大なる資本に對する配當。すべてかくの如きものを第一に整理して、合理的ならしめねば駄目であると信ずる。しかるに政府はこの點について何等の方針をも指導をしてはおらない。そしてたゞ企業家の利潤擁護による消費者と勞働者の壓迫を默つて見ておる形である。あきたらぬことの極みである。

ひとり產業界の指導方針が間違つてをるばかりではない。寧ろ今日の不況打開策として根本策である生產費遞減と逆行した價格の釣上げに助力する樣な方策さへとられてゐる。金解禁を斷行して財界の立直しを行ひ、デフレーションの苦痛を敢然として切開いてゆくべき筈である責任ある政府が、早くも弱腰になつて自分主義の破綻を現はすやうな醜さを見せてゐる。所謂財界救濟案の殆んどすべてがそれである。由來わが產業界は苦痛に面接すればすぐに政府の保護補助のみにたよらんとする惡癖を有してゐる。生糸の暴落によつて當業者は限產や強制共保を行つた上に、更に原價安定補償法の發動を要望した。さうして政府はたわいもなくこれを聞き入れて補償法の發動を見た。政府政策の破綻の第一歩である。更に各方面に救濟の手はのびた。進んでは折角關稅の一部分の改正による引下を行つた政府が今度は逆に關稅の引上を行はふとさへしてゐる。たとへば硫安關稅引上の如きがそれである。英獨硫安の安價輸入がダンピングでありや否や はすでに大なる疑問である。しかるに政府は弱少なる硫安生產者保護のために關稅の引上をなさうとさへ考へてゐるやうになつたのである。さらでだに生產物の價格低落に惱んで疲弊をきはめてをる農村はどこまで犧牲にされやうとするのだ。肥料配給の改善もないものだと言ひたくなるではないか。

以上のやうな政策がいづれも一部の企業家の苦痛を緩和させる爲に一般消費者並に勞働階級を苦しめることになるのは申すまでもない。景氣挽回の根本的基礎たる民力の涵養と

は全く逆行してゐることである。ひとり國內的にかやうな矛盾が出來るばかりでは無しに國際的に見れば、かゝる政策は何れも自ら招いて國際經濟戰裡の敗者たる地位を求めるものに等しい。景氣挽回のもう一つの根本的基礎たる國際貸借の改善までは到底求められやうはない。外人の觀光客吸收にすら夢中になつてをるやうな時に、肝腎の輸出振興のために最大の缺陷が平氣で敢行されてをるなどは矛盾もまた甚しいと評すべきである。申すまでもなく現代の國際經濟市場は露骨なる生產費遞減の競爭市場である。他の外國は何れも專心に生產費の低下に努力しておる時に、日本の生產界がたゞ利潤擁護のために汲々として價格の維持に執心しつゝあれば、勝負は誰れが見ても明白である。解禁後の平等な國際經濟戰に、競爭國は一步一步、生產費遞減を武器として少からず商品を壓迫するのは火を見るよりも明らかである。

現に生絲の大勢は明白にこれを說明してゐるではないか。生產制限や共保や、或は政府の補償法による保護によつてある程度までは市價維持は試みられ得たかも知れない。もつと低落すべき價格が一時阻止されたことは事實であらう。しかしかくして人爲的に價格が維持されゝばされるだけ輸出は不利にならざるを得ない。現に米國に於て生絲の輸入狀態を見れば三月中にはわが生絲は前月より一萬一千俵の輸入減となり、四月中には更に三月よりは四千五百俵の減少となつて來てゐる。しかるに同じ三月中に支那並びに歐洲品は千五百俵の輸入增加となり、四月中には更に三月より三千俵からの增加を示してゐる。つまり日本の生絲が人爲的に市場に市價維持につとめつゝある間に、銀塊安を利した支那絲や、新進の歐洲絲の米國進出を促進したとこの結果だけになつてしまつてゐるのである。生絲賣行きの不況を米國の景氣挫折にのみ歸するのは間違ひである。不況な米國に歐支の生絲は賣行きを增加させつゝあるのである。罪はわれにあつて彼にあるのではない。責むべきはわが人爲的の價格維持策そのものである。これはひとり生絲ばかりに云はれることではない。すべての生產界に對して同一の原則の下に働らく現象である。もしもわが產業界が單に目さきの利潤擁護にのみ偏して眞劍に生產費遞減に努力するのでなければ、國際貸借の改善の如きは一場の夢と化する他はないであらう。

四

要するに今日の不景氣の對策としての產業界が進んで行きつゝある道はどの點から見ても、消費者の購買力を促進させ、生產費の引下げによる國際貸借の改善への道とは逆行するものであると評せねばならない。あらゆる意味に於て消費を減退させ、生產費を遞減させずして生產そのものが榮えやうと考へるのが根本的の誤りである。現代の產業は工場組織と機械生產による大量生產を基調としてゐる。大量生產の相手は大衆である。しかるにこの大衆の負擔を大ならしめ、大衆である勞働者の勞銀を減じ、更に失業者を激增させて購買力を奪ひ、かくして生產が盛んにならう

と考へるのは余りにも虫がよすぎることである。一方に於ては、かくして利潤の擁護をはかり、生産費を引下げずに價格の維持につとめて、それで外國との競爭に打勝ちうると思ふのならば之又虫のいゝ考への極致である。生産費の根本的引下と、消費者、大衆の負擔輕減による力の充實、これなくして眞の景氣挽回を望むのは百年河淸を待つの患に等しい。

金解禁を斷行した政府としては、解禁後に當然到來した不景氣に對して潔く、すべての非難をうけるがいゝ。立直しの過程に於て當然來るべきものが來たゞけのことであつて、今更これに對して面をそむけるのは卑怯千萬なことである。私達は濱口内閣が不景氣内閣だと云つて一部から恨まれたとて、それは何等濱口内閣の恥づべきことではないと信ずる。たゞかゝる非難によつて弱腰となり、目前の不景氣によつてかもさるゝ産業不安の前におびえ果て、その結果一部の金融業者や資本家階級の利益擁護のために、大衆と勞働者と、更に廣い意味での消費者の負擔を犠牲にし、猶すゝんでは國際貸借の改善の道をあやまり、更生の難途にあるわが財界を自殺的行爲に弄らせるならば、それこそ解禁を斷行した政府としては國民の前に愧死すべきであると考へる。不幸にして現在政府が進みつゝある所は、千萬人と雖も吾れ往かんの態度を以て敢然としてデフレーションの徹底的遂行をなし得ざる所に弱味があり意氣地なさがあり、根本政策の破綻がひそむと見る他はない。『正しく強く』とは政治道德ばかりではない、今日に於て最も必要なる經濟上のスローガンであらねばならぬ。

濱口内閣と不景氣及び失業問題

東京朝日新聞　牧野輝智

不景氣が如何にも深刻である。失業者が餘りに多過ぎる。政府が此の不景氣に對し如何なる對策を講じ、失業續出に對し如何なる緩和策を採らんとするかは國民多數の注目を怠らざる所である。今日の不景氣問題失業問題が單なる經濟問題でなく、社會問題としても政治問題としても、極めて重大である點から考ふると、國民多數が政府に對し是が緩和策を要望するは無理もないことであるけれども、實は此の問題の解決を政府に望むは寧ろ無理な注文である。今日の不景氣は經濟界の行詰り、更に大きくいふと世界經濟界の行詰がかうじたものである。或人は金解禁が今日の不景氣の重大原因だといふが、それは金解禁の影響を過大視したものである。政府が金解禁をしなかつたにしても今日の狀態に近い不景氣が實現したに相違ない。といふのは今日の不景氣の最大原因は國際的のもので此の

國際的不況は我國が金解禁をしたと否とに拘らず、實現し我國に影響したに相違ないからである。

今日我國の貿易は激減してゐるが、世界各國とも貿易は激減してゐる。昨年十一月金解禁聲明以來、我國の物價が激落したといふけれど、米國の昨秋來の物價激落は我國などよりか遙に甚しい。各國の物價が激落した場合に我國のみ依然高物價を維持してゐたらどうであるか。それこそ一層憂ふ可きものではあるまいか。米國が不景氣であるから生絲が賣れない。銀塊が暴落したから對支貿易が惡い。銀塊暴落や印度の關稅引上が影響して紡績業の成績は非常に惡い。是等は今年の財界不況の重大原因であるが、是等の障害を除去することは政府の手では出來ない。たゞ問題は財政の緊縮、消費の節約である。國內的原因として是等が今日の不景氣を增大せしめてゐることは確に事實だが、然らば財政の緊縮消費の節約そのものが惡いかといへば、政友會中の一部の人を除く外は今日の場合根本方針として緊縮節約其のものに反對を表するものは稀だと思ふ。

斯く考へて見ると今日の不景氣を打開するために政府の特別の努力を望むことは望むものが無理ではないかといふことにもなる。政府が下手に人爲的の景氣回復策を講じたならば其の結果は寧ろ却つて恐る可きものがある。貴族院邊りの經濟に無理解な連中は不景氣打開決議案を出すなどと騷いだが、一國の景氣を貴族院の決議などで回復せしむることが出來たら經濟界をリードすることは案外安いけれど、經濟界のことはさうは行かない。それが爲に一時的衝動的の刺戟を與ふることは出來ては社會經濟の實質に及ぼす影響は却つて恐る可きものがある。それは丁度病弱の人にアルコールを與へて元氣をつけるやうなもので一時的の元氣をつけることは出來ても其の反動に恐る可きものがあるのと同樣である。だから今日不景氣救濟などと稱して下手に手を出すことは禁物である。此際政府としては一時的の景氣刺戟によつて歡心を買ふが如きことを考へず、堅實なる意味の景氣恢復策、財界繁榮策を考ふることが必要である。減稅を行ふて經濟力の恢復を策するも一つの方法である。しかし不景氣の打開を主として政府の力に便りて實現せしめんとするは望む方が無理である。不景氣打開の根本は國民の努力である。國民自身の努力にて財界を建直し堅實なる繁榮を期することが肝要である。其の具體案の第一は事業會社の整理である。今は事業會社の株式は暴落してゐる。株式取引所に上揭される株式といへば有力會社の株式に限られてゐるがそれが大部分は拂込額面を割つてゐる。それには色々の原因があるけれど、其の最大原因は其內容が不良であるからである。從來種々の手段によりて糊塗されてゐた不良狀態が暴露したからである。ところが今日のやうに株價が暴落すると減配には好都合である。減資をなすことも困難ではない。郵船會社などに八分の配當を五分に減じて却つて好評を博してゐる。東京電燈會社に對しては一部の大株主が八分配當維持の運動

を起して世間の物笑となつてゐる。我が經濟界の病根は不良會社の內容整理が出來ず、資本を喰ひながら相當の配當をつゞけてゐたことであるが、今日の不景氣今の株價暴落は其の整理を促進するに相當の效果があるのである。今日の場合政府の下手な救濟よりか會社自身の整理こそ經濟界の眞の回復に多大なる效果あるものである。禍を轉じて福となすといふのは此の種の遣り方を指すのだと思ふ。

斯の如くに景氣回復の爲めに政府が下手な手を出すことは考へ物だと思ふが、しかし今日の失業狀態に對して何としても是を傍觀する譯には行かぬ。勿論不景氣と失業との間には非常に密接な關係がある。不景氣の爲めに失業者が多い。景氣がよくなれば失業狀態は大に緩和される。だから失業狀態を緩和するには景氣の回復を計ることが根本問題だといふことになるけれども、前にも陳べた通り不景氣には相當深刻な理由がある。其の原因中國際的なものは國際的に改善されるの日を待たなければ、是が惡影響を除去することは不可能だ。國內的のものは事業界の整理といふが如き困難な問題が解決せなければ財界の東天紅を期し得べきではない。だから吾人に今急に景氣の回復といふことを望み難いことだと考へてゐる。少くともこの兩三年は不景氣のつゞくものと覺悟をきめてかゝることが肝要だと考へてゐる。しかしながらそれまで失業者を見殺しにする譯には行かぬ。內務省社會局の失業統計では昨年末の失業者が三十五萬人となつてゐるけれど、是はあてにはならぬ。土木建築業者などに云はせると土木建築關係者だけで、今日では三十萬位の失業者があるといつてゐる。兎に角、今日のやうに失業者の多いのは我國では始めてである。財政家や實業家などは、物資の集積を富となし、是のみを重視する嫌があるが、實は物資に勝りて尊重す可きものは勞働力である。物資を浪費するは固より愼む可きことだが、勞働力を休止せしむることは豐饒なる耕地をねかして荒すよりか更に憂ふ可きことである。

であるから不景氣だから致方ないなどといつて、失業問題を自然の解結に委るは許し難いとである。政府としても此の問題に對しては積極的に努力するの責任があると思ふ。ところが此の點に就て政府の努力は甚だ物足りないのである。政府にして眞に之に努力するの誠意があるならば、特別議會にも何等かの對策を出す可きであつた。特別議會に於て政府の提案せる追加豫算案が雜然たる小問題の羅列であつて失業問題の對策に何等觸れてゐないことは恐らく何人も遺憾とする所であらう。然らば吾人が失業對策として政府に望む所は何であるか。無論之には根本的の對策と當面的應急的の對策とあるが、今日問題となつてゐるのは當面の失業對策である。餓死せんとする多數の失業者を如何に處置せんとするかの問題である。此の當面的對策として吾人は政府の事業緊縮に就て其の形式を變更し、新に國庫の負擔を増加しない範圍に於て繼續事業の遂行を繰上ぐる如きも一策であると思ふ。政府の建築事業土木事業にして目下工事中のものが澤山ある。是等の殆ど全部は經費不足の爲に工事の進捗を手控へてゐる。一例を帝國議事堂の新築工事に見るに此の完成年限は十七ケ年である。しかして各年度に分割して與へられたる經費は甚だ不十分であるため、一ケ年中の大部分は工事を中止し、年度替り後の新經費の支出を待つてゐるのであ

る。斯樣な遣り方が非常に不經濟であることは、議事堂の工事にて休止中鐵骨の錆止めだけで年額三十萬圓を要するといはれることでも明瞭である。現在政府の建築工事土木工事の遣り口はこういふ風であるが、今は多數の失業者あり工賃も下落し、又原料市價も激落してゐるのを利用して、工事の進捗を圖つたならばどうかと思ふ。是は經費の總額を增加するのではない。道路港灣などは工事を中途半端にして置いては何の役にも立たぬ。建築工事としても同樣である。總べて是等の工事には經濟速度がある。餘りに工事を急ぐことも不經濟だが、此三、四年で出來るものを十七ケ年もかけてやるやうな方法は非常に不經濟である。特に勞働が過剩し物資が暴落してゐる場合に其の工事を中止するなどは甚しい不經濟である。是を適當に繰り上げて勞働者に仕事を與ふることは、國民の勞働能力を有効に使用するのであつて國民經濟上極めて有意義であるは勿論、國家の財政として總額に於て負擔を增すのではなく却つて減少せしむることになるのである。尤も是が實行方法に就ては議會の協贊を要するといふが如き手がいるであらう。しかしその內容が機宜を得てゐるものとなれば手續は寧ろ枝葉の問題である。たゞ政府が失業問題に就て何等對策なく特別議會の好機會を逸したことは遺憾とす可きである。

失業對策には金が必要である。全く金を使はないで失業問題に盡さうとも其の効果は期し難い。如何に消極內閣でも失業對策が適當の金を使ふに何の遠慮がいらう。是は緊縮の大方針にも矛盾するのではない。さういへば其の金は何處から出るかと聞くものがあるであらうが、吾人は政府に公債を發行してまで失業救濟をなせとはいはぬ。然しながら失業對策として既着手事業の進行を計る爲に減債基金の繰入れを一時減額又は中止する如きは今日の場合考ふ可きことである。政府では獨逸の賠償金を之も全部減債基金に繰入れることにしたけれど、之などは寧ろ失業救濟資金に充當す可きであつたと思ふ。公債の整理も必要だが、總べての重大施設を公債整理の犧牲となす如きは甚だよろしくない。現政府の施設を金融資本に媚びるものと非難するの聲は可なり高い。吾人は是等の非難者の淺薄なる攻擊に輕々に同意するものではないけれど、若し其の非難に傾聽す可き部分ありとすれば、それは餘りに公債政策を重大視し過ぎることである。人間あつて後の資本である。失職し餓死せんとする多數の國民を見殺しにして國債の償還を急ぐの必要がどこにあるか。景氣を人爲的に造出せんとするを避けよといふのは其の結果が堅實なる經濟的回復を防止するの恐があるからである。失業對策のために其の政策の一部を變更せよといふのは、勞働力の保護は資本の保護よりも寧ろ急務であり、人の問題は物の問題より更に重要であるからである。此の意味に於て不景氣對策と失業對策は必ずしも常に相關聯せしめて考ふ可きではない。當面の失業問題は眞の財界回復を待つ程悠長の問題ではない。勿論財界の繁榮と離れて失業問題を完全に解決することは不可能であるけれど、少くとも之を緩和することは不可能ではない。しかして之が爲めには相當の出費をなすことが必要である。濱口內閣は此の點に於て餘りに無策である。是等が民心を離反せしめ內閣の生命を取るやうにならぬとも限らない。

マルクス＝エンゲルス全集 第九卷

剰餘價値學說史

IIの一

第十五回配本

五月下旬

第十五回配本を『剰餘價値學說史第二卷第一部』とする。既に本學說史の第一卷、第三卷を讀了した我々には、改めてここに價値學說史に關して今更云々の贅言を要しない。ただかの『資本論』三卷と共に、マルクス主義經濟學の心臟であり、並びに經典である事を强調すれば足りると思ふ。第二卷は原著に於て二部に分輯され、第一部は、剰餘價値と利潤、地代の各項に就て明快なる理論と說明が展開されてゐる。第二部は、地代、資本の蓄積と恐慌、等に就て縷々說述されてゐる。第二部は目下飜譯進行中、讀者の机上に送らるるのも遠くはあるまいと思ふ。譯者は少壯氣鋭の新進大家を煩らはした。最近の快譯。マルクスを語り、價値說を論ずるものの必ず讀破すべき絕對無二の好書である。

次回配本豫告 第十九卷（往復書翰集（三））約六百頁

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二番

第一回配本
第一卷 **小說集**

第二回配本
第五卷 **隨筆集**

國木田獨歩全集

一册壹圓五拾錢
每卷約五百頁

永久の先驅者獨歩の生命と風格を再吟味せよ

總內容

第一—三卷（小說）（一）星、忘れえぬ人々、源をぢ、たき火、おとづれ、野菊、詩想、まぼろし、死、鹿狩、河霧、わかれ、郊外、小春、置土產、武藏野、歸去來、牛肉と馬鈴薯、巡查、少年の悲哀、曾の悲み、鎌倉夫人、酒中日記、指環の罰、園遊會、神の子（二）運命論者、艦隊從軍、日の出、非凡なる凡人、惡魔、馬上の友、第三者、正直者、女難、一家內の珍聞、雪宛の刃、富岡先生、春の鳥、湯ケ原より、夫婦、岡本の手紙、あの時分、號外、入鄉記、波の音、戀を戀する人、泣き笑ひ、疲勞、都の友へB生より、窮死、暴風、都の友へSより、節操、渚邊、遺言、初孫、二老人、驟雨、親と子、空知川の岸（三）竹の木戶、二少女、帽子、別天地、初戀、湯ケ原ゆき、眩の侮辱、山の力　**翻譯及飜案**　絲くづ（モウパッサン）、非凡人（ツルゲーネフ）、怠惰屋の弟子入り、決鬪家、語らぬ戀（物語）、騙術の妙、大飯食ひ、支那因果物語、黑衣仙、舟の少女、三騙術、石清虛、姉と妹

第四卷（詩歌小品）**詩**　獨歩吟、頭巾二つ、（その他）**小品**　海の樂、想出るまゝ、火ふき竹、夜の赤坂、沙漠の雨、彼、落日に對す、鎌倉の裏山、新らしき年來れ、曾、驟雨、無窮の生命、死戀の日記、孫立の悲慘、わが過去、趣味について、病榻雜話、靑桐、憐れなる兒、吾が土曜日の夜、我が過去、潔の半生、天地の祕密、靑年少壯の時代、信仰と肉情、唯皮相のみ、信仰、愛弟通信

第五—六卷（隨筆）（五）欺かざるの記（前篇）（六）欺かざるの記（後篇）

第七卷（傳記雜纂）**傳記**　フランクリンの少壯時代、兩ケート、リンコルン、吉田松陰文、横井小南文、尾崎紅葉、陶庵侯に就て　**序跋**　「獨歩吟」序、予の作物と人氣、「濤聲」序　**雜纂**　友愛、吾が海軍水兵の歌、軍艦の種類、女子と飜譯のこと、人物研究、余が日記の過去現在、（その他）

第八卷（病牀錄・書簡）病牀錄、書簡、著作目錄、年譜

發行所　東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二

見よ!! 絢爛たる特異に輝く大文學!!

谷崎潤一郎全集

第一回配本中　戲曲(二)

大谷崎の藝術は民族の名において誇るべきである！その雄渾にして纖細、そこに描かれた特異の境地、人間愛慾の裸像。怪奇美！——一世を風靡惱殺したタニザキニズムの燦然たる大藝術は、今本全集によつて全大衆に君臨す！果然、全國の大都市から、農村から中込は殺到した。これぞ氏の藝術が世界的價値を有ち、又全大衆のものであることを證左するものだ。我社が全讀者階級に敢て本全集の支持を俟つ所以もこゝに存する！

谷崎潤一郎全集 總目錄

第一卷　長篇小説(一)　奠　女人神聖　鮫人　神と人との間

第二卷　長篇小説(二)　痴人の愛　黒白　彷徨　嘆きの門

第三卷　長篇小説(三)　鬼の面　蓼喰ふ蟲　卍

第四卷　中篇小説(一)　捨てられるまで　饒太郎　神童　異端者の悲しみ　呪はれた戯曲

第五卷　中篇小説(二)　惡魔　續惡魔　お艶殺し　お才と巳之介　或る少年の怯れ　AとBの話　赤い屋根　白晝鬼語　ハッサン・カンの妖術　金と銀　友田と松永の話

第六卷　中篇小説及飜譯　ボードレール散文詩抄　タゴールの詩　グリーブ家のバアバラの話　カストロの尼

第七卷　短篇小説(一)　刺青　麒麟　少年　幇間　秘密　颱風　華　病蓐の幻想　人魚の嘆き　魔術師

第八卷　短篇小説(二)　玄奘三藏　人面疽　富美子の足　詩人のわかれ　魚の李太白　兄弟　二人の稚兒　三人法師　小さな王國　母を戀ふる記　不幸な母の話　西湖の月　あくび　恐怖　憎念　青い花　他日　私　途上　或る罪の動機　前科者　續羅洞先生

第九卷　短篇小説及映畫臺本　秋風　The affair two watches

第十卷　戲曲(一)　靑塚氏の話　或る調書の一節　蛇性の淫　誕生　無明と愛染　象　雛祭の夜　信西　十五夜物語　月の囁き　恐怖時代　お國と五平　法成寺物語　或る男

第十一卷　戲曲(二)　の半日　蘇東坡　腕角力　金を借りに來た男　愛すればこそ　戀を知る頃　話　愛なき人々　白狐の湯　彼女の夫　本牧夜話　マンドリンを弾く男

第十二卷　感想隨筆　男　白日夢　春の海邊　永遠の偶像　日記　紀行　評論　その他十數篇

壹册貳圓・全十二卷・書留送料二十四錢

東京芝愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

山と氷斧

浦松佐美太郎

夕陽を背に受けて黒々と聳え立つ、岩の痩尾根の上を、羚羊が四五匹、岩瘤から岩瘤へと、身輕に飛んで行く樣は、アルペンの最も美しいものゝ一つだと思ふ。此の羚羊には、隨分方々の山で出會つた。首をかしげて、暫く眺めてゐるが、胡散臭いなと思ふと、岩を蹴つてどんどん飛んで行つてしまふ。それが人間には到底登れない樣な、嶮しい崖の上の事なのだから、ただ呆れるより仕方がない。一度あの樣に、思ふ樣山が登れたらと、羚羊を見た度に思はせられる。スイスでは、山の達者な者を、羚羊と綽名してゐる。

アルペンで、獵師が一番に狙つてゐるのは、此の羚羊である。獲物を追つて、谷深く入つてゆく獵師は、どうしても氷河を越えなければならない。釘を打つた靴でも、滑るといふよりも、渡る事の出來ない氷の上に、何時か彼等は、手斧で足場を刻む事を覺えたのだ。十九世紀の初頭から、アルペンに入り出した英國人の記錄を、年代を追つて見てゆけば、此の手斧が、山登りの盛になると共に、氷を打ち碎くに都合のいゝ樣な形に、段々變つてゆくのがよく解る。此の手斧が、今のピツケルとなる迄には、村の鍛冶屋は幾度、山の獵師と議論し、その頭を鐵床の上で傾げた事だらう。考へれば、一本のピツケルにも、興趣深い歴史が流れてゐる。

山の道具の中で、ピツケル程形のいゝものはない。何一つ加へても、何一つ缺いでも具合の悪い程あつさりしてゐる。穂先へ走る鋭い直線、刃を作る三角の線、そして此の兩者を連ぐ氣持のいゝ曲線、頭から石突へと狹まる樣に流れてゐる柄の圓味。幾ら見てゐても飽きない程の、味のよさを持つてゐる。アルペンの谷深く、百年もの年月を掛けて、作り上げられたピツケルは、山の道具として、もう完成されてゐるのではあるまいか。

何の飾もなければ、氣取つた所もない道具だけに、使へば使ふ程味が出て來て、持つ人に、限りない愛着を抱かせる。年老いた村の山案内を訪れゝば、壁に掛けられた、黒光りのするピツケルが、彼が一言

も語らないでも、もう訪れた者に、山の數々の話を、話し掛けてゐるではないか。

山の氣持を、人に傳へやうとすれば、言葉のもどかしさを感じるばかりだ。併し、此のピッケルとならば、過ぎ去つた幾つかの、激しかつた山の日の思ひ出を、靜かに語ることも出來やう。穗先の擦り減つた跡にも、柄のさゝくれにも、それからそれへと思ひ出が、縷々と連がつてゆかう。所在無さに、柄を握つて輕く振れば、もう氷が碎けて、微塵に飛び散つてゆく音が、冴え冴えと耳に響いて來る。

×

村の牧場に立てば、青白い氷河が、もう直ぐ其處に顏を出してゐる。そんな山奥の鍛冶屋で、親爺が弟子を相手に、とんてんかんと鐵床の上で鍛え上げたピッケルを、私は欲しいものと思つてゐた。町で作られたものは、何々工場謹製でも、山に入つてはそぐふまい。山で使ふものは、山のものゝ方が味がある。光に照らせば、氷河の色も、穗先に浮び出る樣に覺えるだけでも嬉しい。

私は今、願ひ通りの山家の鍛冶屋が、鍛えて呉れたピッケルを、大事に二本持つてゐる。此の二本のピッケルに結び付く、私の山の思ひ出を、心に浮ぶまゝに書き記して見やう。

×

谷に夕暮れが、落ちて來る頃だつた。土産物を賣る家の店先に、灯が明るくなり出す村の道を、登つて行つた。ファウルホルンへ登る道を少し外れると、丘の上にシェンクの家がある。私が始めて、アルペンに入つた年の夏、シェンクに賴んで作つて貰つたピッケルが、其の日に出來上るのだつた。

粗木造りの鍛冶屋の仕事場は、もう薄暗かつた。硝子窓に額を付けて覗くと、眞暗な仕事場の中には、爐の火だけが、赤々と燃え立つてゐた。戸を敲いて見たが返事もない。誰もゐないらしい。今度は母屋の方へ廻つて、ベルを鳴らす。戸の內の返事を聞かうと、耳を澄してゐると、風の樣に、雪崩の音が、谷を走つて行つた。谷の折れ目折れ目にこだまする餘韻が、雷の樣に、谷一杯に轟いてゐる。顏を上げると、谷を隔てた眞正面に、フイーシャーホルンの氷の斷崖が、最後の夕陽を浴びて、燃える樣に赤い。雪崩が、又その斷崖を、音高く走り落ちてゆく。

夕飯時で忙しかつたのだらう。二度目、三度目のベルで、やつとシェンクが出て來た。病んで鶴の樣に細くなつた體を、杖に支へつゝ、私のピッケルを持つて來て呉れた。槌を打てない程に、病に犯されてゐたけれども、アルペンの谷々に、名匠として謳はれた彼は、息子に槌を持たせながらも、自分の仕事場から打ち出されるピッケルには、その魂を通はせてゐたのだ。手で振つて見ながら、中々いゝ出來榮えでせうと、嬉しさうに私に渡した。

×

始めてアルペンに入る私は、荷厄介にならない樣にと、小ぶりな業物を作つて貰つたのだ。嬉しくて飛ぶ樣にして歸つたその晩、私は宿

の灯の下で、長い間憧れてゐたアルペンの、之から始まらうとする山登りに、胸を躍らせながら、鐵の匂ひも、木の香りも未だ新しいピッケルを、飽かず眺めてゐた。

　そのピッケルも、今は黒く光る迄に、使ひ込まれてゐる。併しシエンクは、その冬に、惜まれながら死んでしまつた。仕事場の鐵床の上で、今も息子が槌を振つてはゐるが、やくざで物にならない。

　面白いもので、晩年のシエンクの作は、體の樣に細かつた。松方が、村の山の道具を賣る店で、シエンクの作を見付けて、こんな所へ捨てゝ置くのは勿體ないと買取つたの等は、鋭過ぎる迄に細かつた。日本にも、シエンクのピッケルは數多く來てゐる。今は此の名匠の何よりの形見である。

　其の他に、グリンデルワルトのベントも、ツワイリユッチネンのエルクも、テッシユのウヰーリッシユも、皆夫々に聞えた名人である。ザースにも、シヤモニにも、アルペンの谷々に名を知られたピッケル作りがある。氷河のほとりで、夫々に腕を競つてゐるのだ。

　テッシユのウヰーリッシユに就ては、面白い話がある。

　オーバーランドの谷が、明くさつぱりしてゐる樣に、シエンクやベントのピッケルはすつきりしてゐる。それに引き代へて、ワリスの谷がのしかゝる樣に暗い爲か、ウヰーリッシユの作は、如何にもづつしりしてゐる。

　夏遲く、ウヰーリッシユの作が欲しくて、松方と二人テッシユの村を訪れた。切立つた樣に聳えてゐる高い崖の下に、小さな家がごちやごちやと固つた貧しいテッシユの村。その村の、何の事はない、家一軒毎にうねくねした路を辿つて、やつと鍛冶屋さんの家を見付けた。呼んで見たが、返事もない。仕事場はと、のぞいて見たが、羽目板がすつかり透いてゐて、霰でも雪でも勝手にお入りと、云はんばかりの小屋の中に、鐵床がぽつねんとしてゐた。山羊を追つてゐた近所の女の人が、大抵村の酒場にゐるこつたらうと、敎へて呉れた。

　酒場で、ウヰーリッシユはゐるかと尋ねると、奧から、よれよれの、粗い手織の服を着た、小柄な親爺がいゝ機嫌で出て來た。白木造りの何のかざり氣もない酒場の卓子の上で、紙にピッケルの圖を引いて、寸法を書き入れて、こんなのが欲しいが、作つて呉れるかと聞くと、うんよろしいと云ふ。出來上つたら送つて呉れるかと聞く。うんよろしいと云ふ。代金は後でもいゝかと尋ねると、うんよろしいと云ふ。大丈夫送つて呉れるかと念を押すと、あゝ大丈夫だと云ふ。さつぱり大丈夫らしくもない。それでも送り先を書き付けて渡したら、大丈夫大丈夫と云ひながら、固い大きな手を差し出した。

　恐らく氣でも向かなければ、仕事場へは足が進まないのだらう。だから、酒の氣の切れた頃には、ピッケルの圖面も註文の事も、何處かへ忘れられてしまつてゐたに違ひない。秋が過ぎて、雪がちらつく樣になつても、到頭ウヰーリッシユのピッケルは、姿を現はさなかつた。こんな譯で、欲しい奴を一本、手に入れ損つてしまつた。

その代りとして、長さは十三吋、厚さは四分の三吋といふ可成大ぶりなのを、ベントに鍛えさせた。持ち扱ひには、殊に岩登りの激しい山には、小さな方がいゝ事もあるが、肝心の氷の上では、大きく重い方が役に立つ。發止と打つた時、氷がぴしりと割れて、三日月形に抉り取れる様なのは、胸の透く程いゝ。

氷の斜面を攀ぢる時は、雪崩を避けて、大抵夜の明け切らないうちに出掛ける。白々とした夜明けの光に、氷の斜面は灰色に冷い。二撃三撃、打ち下されるピツケルに、三日月形に抉られた氷の割目は、次第に大きくぽつかりと口を開けてゆく。やがて、片足を掛けるに十分な、足場が刻み出される。ピツケルを揮ひながら、かうした足場を、百も二百も刻んでゆく氷の登攀は、山の忘れられない味の一つである。

氷河で圍まれたアルペンで、ピツケルが、山へ登る者の忘れられない道具であるといふのは、かうした大事な役目があるからだ。だから、足場を踏み外して滑り落ちても、ピツケルをしつかり握つて離さない者は、山へ登る者としての立派な資格の一つを、既に持つてゐるのだと云はれてゐる。

こんなに、氷の上では大切なピツケルも、岩を攀ぢる時には、邪魔で仕方のない時が多い。併し、アルペンの名案内クヌーベルが、グレポンの東側の岩壁を攀ぢ登つた時の様に、ピツケルが大事な役目を果した場合も、あるにはあるのだが。

私がエミールと相談して、ダンブランシュの「四匹の驢馬の尾根」と云はれる、有名な岩の尾根を登る計畫を立てた時だつた。スキーでは全スイスの選手權を持つてゐるし、若い割には山も相當こなしてゐるルビイといふ山案内から、何處かへ一度一緒に連れて行つて吳れと、賴まれてゐたので、私達の仲間へ加へることにした。

山の小屋へ發つ朝、ルビイは、未だ一度も使つたことのない様な新しいピツケルを、小脇に抱へて出て來た。「ほう珍らしい」と早速手に取つて眺めてゐたエミールが、「何だ子供の玩具見たいだ」とひやかした。「あの尾根は岩が難しいと聞いたから、わざ〳〵小さいのを買つて來たのだ」と正直に白狀すると、「心掛けが惡い」と頭から叱られてゐた。それから數日後、頂上から下つて來る途中、足場のひどく惡い一枚岩の所があつた。エミールが先に下りて、續いて私が下つてゆくと、ひゆうと風を切つて、私達の頭の上を飛んだ物があつた。ルビイが、腰に差してゐたピツケルが、岩に引掛つて飛んだのだ。岩角に二度程、からんからんとぶつかつたと思ふと、そのまゝ風車の様に、くるくる廻りながら、遙かの谷の方へけし飛んでしまつた。

尾根を下り終つてしまふ迄、苦り切つて一言も云はなかつたエミールが、「お前のピツケルは、あの邊の谷に落ちてるだらう。取りにゆくか」と聞いた。買つたばかりのピツケルだ。ルビイが、取りに行きたさうな顏をすると、「およし、ありや神樣の見せしめだらうから」と散散な目だつた。丸腰で山を下りて來たルビイは、村に近い道傍の湧き

水で、汚れたピッケルを洗つてゐる二人の腕で、すつかり憔れ切つてゐた。

×

山で一番恐いものは、と聞かれたら、速座に私は、雷と答へるだらう。雷では苦い經驗を、いやといふ程嘗めさせられてゐる。山で雷に襲はれた時には、一番大事なピッケルが、一番危いのだから仕方がない。雷が來たなと思ふ間もなく、ピッケルの頭が、ジジジジと唸り出す。手に握つてゐるものだけに、餘計に氣持が悪い。岩の凹みにか、雪の中にか、ピッケルを隠せる場合はいゝが、それもならない場合は、もうどうにでもなれといふ、幾分やけの氣持で雷の暴れるのを見てゐる、つひ其處らあたりの、尾根の上でバリンとやると、今度は愈々自分の番かなと思はせられる。一つが落ちてからその次が落ちる迄の、何分かの間の靜かさは、全くいやなものだ。考へてゐる事は、今度は何處へ落ちるのか、といふ其の事ばかりだ。

メジイユの頂上で、ひどく雷にいぢめられてから後暫くの間は、山の上で　風が粉雪をさらさらと飛ばす音を聞いても、亦ピッケルが唸り出したのではあるまいかと膽を冷やした。それ以來、山では雷が恐いものゝ筆頭だ。

×

日本でも此の頃は、女の人が大分山へ行く様になつた。併し、山のこなし方が、如何にも板についてると見える人は、未だ未だ少い。アルペンのあちこちの氷河の上で、岩の上で、山小屋の中で、出合つた女の人達の中には、私達の仲間の言葉で云へば、山ずれのした人が澤山にあつた。數多く山に登る事、それが何よりも必要な事なのだらう。

女の人は押並べて、氷や雪よりも岩に強い。荒つ削りの尾根の岩を、輕く輕く攀ぢてゆく所なぞ、岩間に咲くシュタイブレッヘの風情がある。山から小屋へ、ピッケルを小脇にして雪の上を下つてゆく姿なぞ、心憎いものがある。

夏の初、英佛海峡を渡る、スイス急行の連絡船に乘れば、必ず一人や二人の、ピッケルとルックサックを持つた、女の人に出合ふであらう。女とピッケルと、何年か前迄は、全く似つかはしくないものゝ組合せの一つであつたらうに、今では一足飛び越えて、時の流れの先きをゆく、心意氣さへ現はしてゐる。

×

メンヒのノレンと云へば、クラシカルな氷の登攀として、アルペンの中でも有名なものゝ一つだ。氷の斜面は、立つてゐても、顔の前に近々と迫る位に急だ。小屋を出てから暫く岩をゆくと、直ぐ氷になる。麓のクライネシヤデックから仰ぐと、厚い雪氷が、頂上から肩へ掛けて、今にもずり落ちさうな形で、載つてゐるのが見える。餘程條件のいゝ時でも、少くとも四百は、氷の上に足場を刻まなければなるまい。

エミールが「ノレンピッケル」だと云つて、其の朝持つて來たものは、恐しく大きなものだつた。柄は兩手で握れる位の極く短いものだが、穂先は長さ一尺重さは一貫目を越えてゐたらう。それでゐて切尖は、針の樣に鋭く、研ぎすまされてゐた。

朝の六時頃ノレンの氷の上に立つた時、此の大きなピッケルは、素晴しい切れ味を見せ始めた。來る夏も來る夏も融ける事なく、固く凍りついてゐるあの氷の上に、足場を切るには、普通のピッケルではどうしても、何遍も打ち込まなければならないものを、二度か三度打ち下せば、もう片足を掛けるに十分な、足場が抉り出されてゐた。びしりびしり、息もつかずに氷を打ち割つてゆく、エミールの腕も冴えてゐた。

その翌日、麓の停車場の前で、望遠鏡で私達の登るのを眺めてゐたといふ、獨逸の登山家に出會つた時、どうしてあんなに早く、あの氷の上を登れたのかと不思議がつてゐた。いくらツアイスの何十倍かの望遠鏡でも、私達の持つて行つたピッケル迄は、見えなかつたものと見える。

その夏の終りに、もう一度、此の「ノレンピッケル」を思ふ樣振つて見度くて、アルペン第一の氷の登攀と云はれる、ブレンバを目差した。シヤモニの谷からジヤンの峠へ登つてゆく途中、怪しかつた天氣は、吹雪になつてしまつた。峠の向うは、伊太利亞の谷も、せめてと思つたブレンバの氷河も、霧に隱れて見えもしなかつた。峠を又もと來た道へ引返す時、エミールが「あゝピッケルが重い」と愚痴つてゐた。

それつ切り「ノレンピッケル」は振ふ機會もなくしてしまつた。今思ひ出してもブレンバは、惜しくて仕方がない。

×

夜のしらじら明けに、私達はタールの氷河を、ブライトホルンへと登つてゐた。一時間程前に、小屋を出た人達の足跡が、雪の上に殘つてゐた。朝の一時間と云へば、雪の狀態がすつかり違つてゐる筈だ。そんな解り切つた事が、思ひ付かなかつた程、ザミも私ものんびりし過ぎてゐた。ほんとならば、繩をぴんと張つて歩くべき氷河の上を、すつかり環にして、手許へたぐり込んだまゝ、暢氣に前の人の足跡を拾つて歩いてゐた。

今迄自分の目の前に歩いてゐたザミが、急にすぽりと雪の中に消えてしまつた。手首に掛けてゐた繩が、ぐんと引き摺られた。落ちたな。ピッケルを雪の中へ力一杯突き差して、前へ引き摺られさうな體を、やつと食止める。雪の上に、黑い穴が一つぽかりと開いてゐる。氷河の割れ目に、落ちてしまつたのだ。

不注意にも、氷河の上を歩くのに、環にした繩を手首に通して、ポケットに手を突込んで歩いてゐたので、繩がぐんと引張られた時、大急ぎで手を拔かうとしたのだが、最後の一巻きは、しつかり手首に、食ひ込んでしまつた。右の手は、ピッケルで體を支へてゐるので、ど

うごく事も出來ない。右の手は、見る見るうちに、血の氣を失つてしまつた。

「ザミ」雪の上の穴に向つて呶鳴つて見た。微に返事が聞える。「大丈夫か」と押つ被せて聞く。「今登つてゆきます」と嬉しい返事だ。

氷河の壁に、ピッケルを打ち込む音が、穴の中から響いて來る。私の左の手は、眞白になつてしまつた。歯を食ひしばつても、涙が出て來る程痛い。自分のものとは思へない、手の色を見つめながら、私は、段々上へ近づいて來るピッケルの音を、今か今かと待つてゐた。

×

秋の初め、山を下りてグリンデルワルトの谷へ、歸つて來る途中であつた。小屋の跡片付けをするので、遲くなつたエミールを殘して、秋の日を浴びた、靜かな山を眺めながら、一人で先にゆつくり下りて來た。氷河を目の下に見る、崖に刻まれた山路は西日を受けてひつそりとしてゐる。放ち飼ひにしてある羊の群が、別に人に驚きもせず、寢そべつたまゝで見送つてゐる。崖鼻を廻つて、タンネの森の中へ、路が下つてゐるところで、私はエミールを待つことにした。烟草をふかしながら、動くともなく流れてゆく、白い雲を眺めてゐると、下の森の中から三人の家族連れが登つて來た。立ち止まつて私に、茶店迄の道程を尋ねた。話し振りで直ぐアメリカ人と解る。未だ可成あると知つて、その連中も私の脇に腰を下してしまつた。

問ふがまゝに、あたりの山の話を、ひとつひとつ教へてやつた。鳥打帽子を無雜作にかぶつた親父と、元氣さうな娘と母親と、如何にも仲のよささうな一家族だつた。今迄に見て來たスイスの名勝、三人で夫々の品定めをして聞かして吳れた。そして結局スイスでは、山が一番いゝと感心してゐた。自分も若かつたら山に登るのにと、フィーシャーを仰ぎながら、誰に云ふとなくつぶやいてゐた。そして思ひ出した樣に、此の間新聞で見たけれども、ウェッターホルンに登つたといふ、何とか難しい名前の日本人は私かと尋ねるので、さうだと答へると、又ひとしきりその時の話をさせられた。

ルックサックの上に、もたせかけてあつたピッケルを、手に取つて見てゐたが、出來たら讓つて吳れないかと、飛んでもない事を云ひ出した。殘念だが私にも大事なものだから、今は上げられない。若しも是非にといふなら、遺言狀の中へ書いて置いて上げやうと答へた。そりや駄目だ。自分の方がずつと年が上なのだからと笑つて別れた。

エミールと二人で、森の中を下りながらも私はつまらない冗談が、氣になつて仕方がなかつた。山と死と、今迄に考へもしなかつた樣な事が、心を捉へてしまつた。山を了へて谷を下る時が、私には一番樂しい時だのに、その日は、すつかり沈んでしまつた。

それでも翌る朝、陽の光が、躍る樣に室の中に流れ込んで來た時は、もうそんな事は、けろりと忘れてしまつて、その次の新しい山への事ばかりで、心は一杯だつたのだが。

×

此の次の山を終へたら、此の夏はもうおしまひにしやう。さう思ひながらも、當分はアルペンにも來られまいと考へると、そしてお天氣が無暗にいゝと、山を去り兼ねて、又次の山を計畫してしまつた。何時か夏が秋になつて、雪が山から谷へと、少しづゝ低くなつて來た。冷い秋の雨が、一晩中降つた次の朝、私の宿の女中達が、大騒ぎして廊下を驅つてゐる。大急ぎで飛び出して見ると、ほんとに大變だ。私の宿の窓の上に、軒の上に、燕が一杯だ。恐らく谷中の燕が集つて來たのだらう。急しさうに、體をあつちこつちへ動かして、話し合つてゐる。その內に用意が出來たのだらう。十羽程がばつと飛び立つと、それに連れて後から後から、雨上りの靑空へ羽搏きして行つた。高く高く、やがて山の上の空まで、舞ひ上つてしまつた。眞黑に固つたかと思ふと、又ばらばらに散らばりながら、暫くそのあたりの空を廻つてゐたが、やがて南を差して、眞白な雪の尾根の向うに消えてしまつた。アルペンを越えて、南の國へ日の光を求めてゆくのだ。思ひ出した樣に、眞白になつた山を見返して、自分もあはたゞしく荷造りを始めた。

山で友達になつた村の誰彼が、停車場迄見送つて呉れた。當分は此の人達とも會へないなんて氣持は、さつぱり起らず、たゞ愉快に話しながら別れてしまつた。

山を下りてから今一度、ベルンの町で、本線に乗換へなければならない。薄暗い燈に照らされたプラットフォームに立つて、汽車の着くのを待つてゐる間に、私の目は、杖に突いてゐる、ピッケルの上に落ちて行つた。きらりと光る、よく磨かれたピッケルを見てゐるうちに、急に山が戀しくなつてしまつた。たつた今朝、山から出て來たばかりなのだが、日本に歸れば此の次は、何時アルペンに來られる事か、さう思ふと、又無性に山へ取つて返したくなつてしまつた。

山へ入ると、自分でも可笑しな程、氣持が動かされ易くなるのは、大きな自然と、ぢかに向き合つてばかりゐる爲かも知れない。それとも、岩に氷に、激しく意力を始終使ひ盡してゐる爲かも知れない。何れにしても、山にゐる間は、子供の樣に素直に、自然の動きに感じ、新しい驚きに目を瞠つてゐるのだ。併し谷を出て、里へ歸つて來ればもう駄目なのだから情ない。山の思ひ出を、書き綴らうと思つても、記憶は未だ、昨日の樣に生き生きとしてゐながら、素直に言葉の上には出て來ない。

新興國の地的展望

佐藤弘

(一)

獨逸側のいはゆる
──多くの犬は一匹の兎を殺した── Viele Hunde sind des Hasen Tod ──ところの歐洲戰爭、
また聯合國側のいはゆる

◇

惡口の擴大、にくまれ口の延長、かげ口のつき合。
今かりに、
伊太利人に對して、汝、マカロニーよ── Du Makaroni!
ハンガリー人に對して、汝、蕃椒よ── Du Pfeffer!
ポーランド人に對して、汝、豚よ── Du Schwein!
獨逸人に對して、汝、野蠻人よ── Toi Boche!
フランス人に對して、汝、土百姓よ── Toi Jacque Bonhomme!
と云つたら、相手は色を變へて怒るだらう。
言葉の闘争は、先づ民族の闘争となつて現はれ、逆にまた、民族の闘争は、言語の闘争を釀成し、かくて兩者は、原因結果をなしつゝ、或は國家的憎惡となり、或は宗教的軋轢となつて、發展してゆくであらう。事實、大戰前の歐洲には、言語、民族、宗教のはげしい闘争か、到るところに演ぜられ、特に中歐から東歐にかけては著しいものがあつた。が、それは、やがて大戰の一の源因ともなり、また戰後には民族主義を具體化せしめ、民族單位の新興國を生ぜしめたのである。

これからみれば、これらの闘争は、闘争自らの緩和劑として新興國の出現を促したものであるとみることが出來る。

いま、新興國の地的展望を物語るにあたつて、これを前置きとしたが、さて新興國は如何なるものであらうか。

——蒔いた種は刈らればならぬ——Wie die Saat, so die Ernte——ところの世界戰爭は、その終結と共に、威儀を正して、次の宣告を下した。

退却せよ、ザーの帝國ロシヤ。

分裂せよ、ハプスブルグのドナウ王國。

そしてロシヤの退却のあとに、五つの新興國があらはれ、墺地利、洪利の瓦解のなかに、四つの新興國が顏を出した。

が、然し、それはどうして出現したのであらうか。云ふまでもなく、それは民族自決——即ち「領土問題、主權問題、經濟並に政治問題などの一切の處理は、これに直接關係ある人民が當ることを基礎とし、……他の人民の利益を基礎とせざること」を原則とするウイルソンの「救世主義」によつたことは明らかであるが、果して、その主義は遺憾なく實現されたか。また申分のない獨立國の出現をみたか。

成程、それは多くの新興國を生んだが、それは必ずしも申分のない獨立國ではなかつた。それは「フランスが將來の歐羅巴外交に於て、多くの臣的關係を結ばんと欲した」ところの附屬國の形成にすぎず、またそれは「英國が自らの經濟的勢力範圍を擴張せんことを望んだ」ところの弱小國の建設にすぎなかつた。即ち新興獨立の國家は、新興非獨立の國家であり、「依存の國家」であつた。またそれは、二或はそれ以上の强國の間にあつて、蹴球的役目と緩球的機能とをはたすものか、或は、列强へ愛嬌をふりまくものか、その何れかの國家であつた。即ちフィンランド、エストニヤ、ラトヴイヤ、リツアニヤ、ポーランドの五つの東歐諸國は、前者にぞくし、チエコ・スロヴアキア、ユーゴ・スラヴイヤ、オーストリヤ、洪牙利の四つの中歐諸國は、後者にぞくしてゐるのであつて、けたたましい文化の警笛が、かくも鳴りひゞく二十世紀の今日に於て、これらの國々が、歐洲の天地に、よくその獨立の體面を維持してゐる所以のものは、實に叙述の二つの職能にあるのである。

こゝに於て——

「人格」の二字にかくれて解決された東京市電の大罷業。「正義人道」の幟旗のもとに起されたケマール・パシヤ、ダヌンチオ、コルフアンチのクーデター。そして「世界平和」の美名にもとに幕をとぢたロンドン軍縮會議——と同じ意味に於て、「民族自決」の美名のもとに於て建設されたところの新興國——

新興國｛汝はフットボールであり、
時代の愛嬌もの——

と云ふことが出來るのである。

然らば、新興國に、かくの如き說明をなげた地的展望は、果して、蹴球の動きを如何に指摘し、愛嬌者を如何に解剖するだらうか。

（二）

先づ、我々は、これをポーランドに於て檢討しよう。

古代より今日に至るまで、分裂と消滅と再興の歴史を繰返して來た國はどこか、と問はるれば、何人もポーランドを指摘するに躊躇しないだらう。そして、また大戰後、歐洲外交上の鬼門となつた國は、と聞かるれば、誰人もポーランドをあげるに反對しないだらう。

試みに地圖を繙いて、しばしこれを凝視せよ。やがて首府ワルシヤウにユダヤ人の悲慘な巣窟を思ひ出し、南都レンベルヒに歐洲激戰の跡をたづね、工業市ロッヅに美しい織物をみるとき、ポーランドの輪廓は判然とあらはれ、ポーランドは北歐の平野に於て、何等自然的障害境界をもつてゐないことに氣付くであらう。そして二度該國の生命とするヴイスツラの流れを辿るとき、ポーランドは耕地、牧場、森林、荒地に掩はれてゐる純粹な農業國であることに氣付くであらう。然り、この自然的防禦物のないこと、農業を生命とすることとは、ポーランドの著しい特長であつて、これを措いてほかに、顯著な該國の地的特長はなく、ポーランドが紀元十世紀から今日に至るまで四分五裂の歴史を繰返して來た所以のものは、實に、この二つの地的要因によつてゐるのである。

果して然らば、この二要素と該國の國家的存在との間に如何なる關係があるだらうか。果して地的展望は、これを如何に取扱ふだらう。

◇

しばし想をポーランドの自然にめぐらさしめよ。しかるときポーランドの自然的位置は、東方ロシヤに對し、また西方ドイツに對して、何等自然的防禦物を有せず、只廣漠たる平野の中央に位して居り、これがために、ひとたび難を隣接國と構ふるとき、容易に侵略され蹂躙される懸念があることに想達さるるだらう。然り、この自然的缺陷のある爲めに、ポーランドは長い間嘆息をつゞけて來たのであつて、ポーランドの興亡史は、國家構成の一要素たる土地の歴史であるとみることが出來る。然しこの土地の缺陷が、假令、あつたとしても、國家構成の第二要素たる人民が强固に結束して居れば、自然的缺點は問題とするには足らない所である。が、主要民族たるポール人は、僅かに千九百萬人（全人口の六九%）にしてその他ルテーネン人（一四%）、ユダヤ人（八%）、白ロシヤ人（四%）、ドイツ人（四%）、リツアニヤ人、ハンガリヤ人などの多くの「少數民族」が、自領內に包含されてゐるので、ポーランドはこれが民族的統一をかぎ、剩へ言語、宗教、教育に關しても調和をかいでゐる——

即ちポール人は、元來ロシヤと同一種のスラブ民族であるが、宗教は同一でなく、ロシヤ人がギリシヤ教を奉じてゐるに對して、ポール人はローマ・カソリック教を信じ、一方、これに對してドイツ人は新教を奉じてゐるので、ポール人は全く宗教的に分離化された島を形成して居り、その上、文化の上からみても、東スラブの文化に對して、ポール人は西スラブの文化を代表してゐる。曾てルブスが「鬪爭手段としての宗教」と題して、ポーランドには全く宗教的調和は許され

ないと斷じたことがあつた位である。この宗教及び民族の混合、不統一は、一方、自然物の缺陥と相俟つて、ポーランドの存立を困難ならしめてゐるものである。これポーランドが、強い不利な地的束縛性のもとに立つてゐるところである。

その上、國は農業國で、農森業に從事するものが全體の六五%を占め、これに對して鑛工業從事者一四%、商業交通從事者六%で、近代物質文明の基礎たる植民地生産物はこれを有せず、從つて貿易も工業も振はず、國は疥せ、哀れな無知な農民とユダヤの民とは、首都たると田舍たるとを問はず、全國にあふれ、その間に點散して惡群の一簇を以て任ずる地方の地主も、アリストクラチックな假面を冠つて、貧困になげいてゐる有様である。

叙述してこゝに至れば、ポーランドの國家的存立の基礎はどこにあるだらうか。何物による再興だらうか。

肥壤の土地か
あらず
民族及び宗教的團體か
あらず
調和ある共和の政體か
あらず

……………

ガリシヤの森はため息をつき、ヴイスワラの清流は濁り、首府ワルシヤウの空は曇つてゐる。

◇

が、果して然らば、その存立の基調は全く皆無か。否、我々はそれを列強がポーランドに與へた「緩衝」に求めることが出來る。即ちポーランドの存立は、一に以て列強の緩衝政策に寄負してゐるのであつて、ロシヤとドイツとの二強國の間に設置された緩衝帶に基因してゐるのである。

元來、この緩衝國は、空間的分離思想の擴大によるもので、山、沙漠、海などの自然的障害物をもつてゐない殷漠たる平野に設立された人爲的境界帶に由來してゐるもので、それは自然的發生によつたものもあれば、或はまた條約上の合意によつて生じたものもある。が、何れにしても、その發生は安全政策の思想に基因し、その本質は靜的存在帶そのものであり、その機能は隣接國の壓力を調節するところにある。かかる意味に於ける緩衝地帶或は緩衝國は、遠く古代から今日まで存在し、とくに近東からバルカン、中歐、東歐にかけては枚擧に遑なき有様であつて、大戰後に建てられたフインランド、エストニヤ、ラトヴイヤ、リツアニヤ、ポーランドの現代的緩衝連鎖は、戰前からの和蘭、白耳義、ルクセンブルグ、スイスの古典的緩衝連鎖と平行して、佛獨露の三強國を分離し、以てこれが摩擦面の緩和をはかつてゐる。

が、前者の所謂「東方緩衝帶」の中にあつては、ポーランドが最も

强い分離・融和・反撥の機能を發揮すべき地位に置かれてあるので、實にポーランドは他の成員と共に、東歐のオープンな天地に於て、緩衝政策を、より高き存在に引きあぐるシェーマの力を與へられ、より高き使命の意識を以て、安全政策の典型をつくるべく運命づけられたのである。

しかしながら、ポーランドはその使命をわきまへず、内にあつては「緩衝」維持に必要以上な外資をもつて積極政策を行ひ、外にあつては極盛時代に於ける舊領土の再獲得を目的とするポーランド回收運動(Polnische Irredentabewegung)を起し、ダンチッヒ及び東プロシアの併合慾にかられ、或はポーランド行廊の擴大を希望し、或はウイルナの歸屬問題、上シレジヤ、テッシエン、オラワ、スピッツなどの領土分割問題、又はワイクセル河の境界問題などに於て、尚不滿を抱き、より多き領土慾を出して居り、剩へ、軍國主義の鼓吹に汲々としてゐることなどは、全く緩衝の使命をもつてゐるポーランドのとるべき態度ではないのであつて、かくすることによつて、該國は知らず知らずの間に他の軌道を走り、次の時代にはやがて强國へ併合さるべき運命となるのである。現にかかる宿命に到達すべく準備をして居る觀がないでもない。

ポーランドよ。歴史を繙け。そしてクリミヤ戰爭の結果が何を清算したかを檢せよ。そして伯林會議が、英國の緩衝政策の活動によつて、當時の强國トルコと侵略的ロシヤとの間に、バルカン半島に於て、ルーマニヤ、ブルガリヤ、セルビヤの緩衝國の連鎖を設けた事理を知るならば、ポーランドは一日も早く大望を抱くことをやめ、自らに附與された生命保證である緩衝政策への道を講じ、以て千年の壽を期待すべきであらう。かくすることによつて、そこに、ポーランドは自らの地的全體系への調和を見出し、その調和の上に於てのみ、未來の力を發見することが出來るであらう。

一七七二年と一七九三年との二回に亙つて普墺露の三國から蹴られたポーランドと云ふフットボールが、一七九五年、第三回の三國蹴球戰によつて全く空氣をぬかして歐洲列强の蹴球場裡から姿を消したことは、あまりにも有名であるが、その同じフットボールが、今や、一大修理のもとに再び姿をあらはし、東歐の平原に於て、今を盛りと獨露から蹴られてゐる。しかも——

米國の資本とフランスの外交とが、空氣入れの役目をなしつゝ。

隣接國家の緩衝物としての「ポーランド」

フランスのバザーレン國としての「ポーレン」

現代的な摩擦面の尖端に立つ「ポールスカ」

その他に何がある。

Nichts.——

(三)

かくの如く「東方緩衝帶」の代表者としてポーランドを觀察したが、

さて他の成員や如何。

フインランド、エストニヤ、ラトヴイヤ、リツアニヤは、これまた緩衝政策の所産であつて、何れも「新興獨立」の旗もとに踊りつゝ、ロシヤの西方進出を喰ひとめ、東西歐洲の政治經濟のノードを形成し、よく緩衝の職能をはたしてゐる。

そしてこれらの國々は、多くの隣接國をもつか、或は人口の多い大國に接してゐるので、今、假りに各の壓力比——隣接國全體の人口數の和を、該當國の人口數で除した商を云ふ——をみるならば、緩衝的國家が、如何に高い人口上の壓力比を持つてゐるかがわかる。

		壓力比(1914年)	壓力比(1929年)
新興國及中國	エストニヤ	——	132,1(ロシヤを隣接するため)
	ラトヴイヤ	——	74,3(同上)
	リツアニヤ	——	45,8
	フインランド	——	44,1
	スイス	50,9	33,0(墺地利瓦解のため減少)
	墺地利 洪牙利	5,7	21,6
	チエコスロヴアキヤ	——	18,3
	ベルギー	14,8	14,1
	オランダ	11,7	9,4(ドイツの人口減のため)
	ポーランド	——	8,2
強國	日本	7,5	7,0(支那、ロシヤに接するため)
	フランス	3,3	3,4
	ドイツ	3,8	1,8(墺地利瓦解のため減少)
	伊太利	2,7	1,5(同上)
	米國	0,2	0,2
	英國	0	0

右の壓力比は、隣接國から繼續的に蒙る該當國の人口上の「危險率」と見做すことが出來るのであつて、高比を示してゐる緩衝國は、それ丈け多くの危險を感じてゐることになる。戰前に於ては、スイスが最高比を示してゐたが、戰後はエストニヤ、ラトヴイヤのロシヤに接する國が、トツプを切つてゐる。強國の列にあつては、日本が、人口上の大國ロシヤと支那とに接してゐるがために、最高の「人口壓力」をかんじ、ドイツの如きは、ドナウ王國の分裂のため、その數は戰前より減少してゐる。勿論、これらの數は、單なる人口上の壓力で、絕對的な「危險」を意味してるものでないことは、爰に喋々を要しないところである。

が、とにかく、バルト諸國の新興國が、かかる最高比を以て、しかも國全體の人口が、一東京市の人口にも及ばない百萬か、二百萬をかぞへて以て、闘爭のはげしい歐洲の競爭場裏に恬然として、生活をつゞけ、よく赤化のロシヤを喰ひとめてゐるのは、全く列國の緩衝政策の生命保證によるものでなくては何であらうか。

四　牛は牛連れ—— Gleich und gleich gesellt sich gern のごとく、

つの新興國がよくバルト海の沿岸に喜んで集つてゐることを思ふとき、そしてまた何れも貧弱な資源をもつて哀れな生活をつゞけてゐることを想像するとき、我々は、茶目氣の多い國際聯盟、否、あまりにも、ひどい道化ぶりを示した「戰後の時代」と云ふ人格者が、何物であるかを考へざるを得ないのである。

(四)

更に、第二段の新興國の地的展望にうつらう。で、その前に、こゝに簡單な史的觀察を記述して置く必要がある。

一言にして云へばオーストリヤ國の四分五裂の歴史である――

中世に於て、領土擴張のために、征服により或は結婚政策によつて廣大な領土を得たハプスブルグ家の勢力は、實に隆々たるものであつて、山地國スイスを獨立せしめた後も、依然として歐洲に君臨し、特に十六世紀は、ボヘミヤ、ハンガリヤ、北伊太利をおさめてその絶頂に達し、かくて十八世紀、伊太利半島を領して以てフレデリック大王のプロシヤにビスマルクの出現するに及んでから後は、段々傾き始め、とくに一八六六年の普墺戰爭の大敗によつて、ドイツから逐はれ、又伊太利半島からも退却してしまつた。が、この悲運に會しながらも、十九世紀から二十世紀にかけては尚一流國家の名聲を持續したのであつたが、ついに世界戰爭は、中世以來の大國に、果然、四分五裂の破滅を與へたのである。

この瓦解――史家は云ふ――それは民族問題が主因であつて、寄木細工の國土を基礎とするところに無理があり、「君主の家權を立國の基礎とする中世國家が、國民的統一に基く近世國家に進展する過程に於ては、オーストリヤの沒落は當然の運命である」と。即ち史家は民族問題を瓦解の核心としてゐるが、我々は尚、民族問題の依つて來る所以を追及しなければならない。地的展望のなかに。

中歐の地勢――

中歐は、山系、山脈、高地の複錯した所で。アルプスはもとより、ベーメンの森、エルツ、ズーデテン、カルパーテンなどが、一大弧を畫いて聳立し、これを破つて流るゝドナウ河は、オーストリヤ山間地、ボヘミヤ盆地、ハンガリヤ平野などを作り、以てよく不統一な地形を展開してゐる。この土地構造こそが、民族問題を引きおこした第一の原因であつて、中世に行はれた民族大移動が、この破れた土地の中に入つて、錯綜したる多くの民族的單位をつくつたのである。即ち破れた自然的單位は、破れた民族分布と相俟つて、こゝに各種の民族群をつくりあげたのであつて、これらの民族群は時の經過するにつれて、人口の激增(特にスラブの)と共に全く異なつた民族意識團體となり、これが、やがて民族問題を引きおこすに至つたのである。

これからみれば、民族問題も地的制約に從つてゐるので、不統一な地形が作り上げた多くの異種的民族群の上に、大翼をひろげたオーストリアが、二十世紀の今日、四分五裂の悲運に會したことは、決して

偶然なことではなく、深く地的展望の裡に存してゐるのである。それは實に避け難い運命であつて、この運命に從つて出現したのが、チエコ・スロヴアキヤ、ユーゴスラヴイヤ、ハンガリヤ、オーストリヤの國であつて、これらは、オーストリヤを除いては、何れも獨立をもつて自國の體面を持してゆくだけの富源をもつて居り、從つて東歐の新興非獨立國とは趣を異にして、所謂中歐の新興獨立國となつてゐる。

◇

先づ、その代表者として新興機運の鬱勃たるチエコスロヴアキヤについて觀察しよう。

マサリツク大統領の英雄的精神によつて新興したチエコ・スロヴアキヤは、面積一四萬方キロで朝鮮より遙かに小さく、人口も僅かに千四百萬人であるが、然し富源にとんでゐることは周知にぞくするところである。これを輸出入にみれば、一九二七年の輸出は、二百億クローン、輸入は百八十億クローンにして總計三百八十億クローン（約二十億圓）にして我國の同年の四十一億六千萬圓に比れば、約半分にすぎぬが、毎年一億圓に近い輸出超過を示して居り、その上、年々歳入は歳出より多くして順調に發達し、失業狀態も漸次、好良に向ひつゝある。歐洲の「中國」の列に於ては惠まれた國である。たゞ、內陸國であるため、海港を有しないが、これもオーデル河、エルベ河の自由航行によつてステツチン及びハンブルグの埠頭の使用が許され、その上、陸路及び航空の交通が發達してゐるので、貿易上の障害は比較的少ない。

かく富んだチエコ・スロヴアキヤは、然しながら、こゝに幾多の缺陷をもつてゐる。即ちそれは自國內に多くの「少數民族」をふくみ、以て民族的統一をかいでゐることである。主要民族のチエク人及びスロヴアク人は全人口の僅かに六四・七％を占めて居り、この外に獨逸人二三・二％、マジヤール人五・八％、ルテーネン人三・七％、ユダヤ人一・五％、ポール人〇・八％、その他〇・三％の民族群が各地に居住し、以て民族的軋轢をさかんに演じてゐる。故にボヘミヤ地方とスロヴアキヤ地方とは、文化の程度をことにし、前者は工業地で文化が進み、後者は農業地でおくれて居り、ために兩地の間には融和がみられず、又獨逸人の內政干渉とマジヤール人の反抗的態度とは、屢々チエコ・スロヴアキヤ國の政局を難所に引き込み、その上、言語の不統一は、また該國の民族問題の癌となつてゐる。この言語と民族の不統一とが、チエコ・スロヴアキヤ國の今日の主要な問題であつて、これが統一を得ると否とは、以て將來の禍根に關係を及ぼすものである。そこで該國は、內にあつては「愛嬌」を以て少數民族の保護と融和とをはかり、外に向つては、一方には親獨政策、他方には親佛政策をとり、八方美人的に大國と小國へ愛嬌をふりまいてゐる。

この現象は、ひとり、チエコスロヴアキヤのみならず、ユーゴ・スラヴイヤ及びハンガリヤに於ても見らるゝところであつて、複族國である前者は、民族統一と外交問題（アドリア海問題、アルバニヤ問

題)とのため、また單族國である後者は、經濟問題と少數民族問題とのために、何れも內外に向つてさかんに愛嬌をふりまいてゐる。これみな地的環境——破れた中歐の土地、破れたスラブ・ゲルマンの民族、破れた力の然らしむるところである。

(五)

破れた力の然らしむるところである。

「蹴球」としてポーランドをスケッチし、「愛嬌者」としてチエコ・スロヴアキヤを描出したが、さて、これらの新興國は、どこへ行くべきであらうか。

歴史を檢するとき、我々は封建による國家、宗教による國家、ナポレオンの如く個人の野心による國家、さては今日の民族單位による國家など色々な國家をみることが出來る。しかも、その變化の狀態を詳視すれば、國家は一の生きてる有機體と見做さるべく、我々が理性によつて動く樣に、國家も亦理性的規律に從つて行動し、有機的に且つ衝動的にその意思的本能に從つて活動する自然物——即ち感性的理性的實體であると見ることが出來る。これからみれば、今日、地球上に、あらゆる民族による多樣性な形式をもつ國家が、存在し、活動してゐるのは、當然のことであつて、敢て異とするに足らず、事實、現に色々な國家が存在してゐる。

見よ。サンスウシーの森に共和の政體を歌ふ獨逸を。
見よ。モスコウの彼方に共產の政治を喜ぶロシヤを。
見よ。ローマの古城にファシストの專制を迎へる伊太利を。
見よ。シドニイの美しい港に聯邦政治を愛でる濠洲を。
そして見よ。五十餘の聖流に皇統の連綿を歌ふ日本を。
E・T・C・
E・T・C・

これからみれば、東歐の新興國の出現も、また中歐の新興國の再興も、當然のことであつて、それは異種民族群と緩衝機能をもつて生れた國家生命體の一つの動き、一つの變化であるとみることが出來る。然り、あらゆる國家は、人口、土地、資本、科學、文藝、工業などの一切をふくんで常に活動し、不斷に變化してゐる生活體である。が、その國家に生命力を與へるものは何んであるか。自然か。人か。神か。否。それはその個體そのものではなく、自然と人間との對立から生れ出る相互作用の力そのものである。この作用によつて新興國、否、あらゆる國家が生れ、この二元の作用のもとに於て、それは呼吸し、活動してゐる。そして、自然力か、人力か、その一元の增減は、そこに均衡を失つて、現象形態に何等かの變化を與へるもので、新興國の行衛は、一に以て、この力に懸つてゐるのである。

かくして新興國の地的展望は、新興國の地的力の展望のなかにあるのである。——一九三〇・五・六——

野獸派畫家

里見勝藏

A　印象派より野獸派まで

十九世紀後期佛國繪畫の大復興期はモネ、ピサロ、シスレ、ギヨーマン、ドガ、セザンヌ、ルノアル、ゴーギヤン、ヴン・ゴーグ……等の印象派畫家によつて、最後の光榮を全うした。中にもセザンヌ、ゴーギヤン、ヴン・ゴーグの三人を特別なる後期印象派と名稱して、印象派よりその功蹟を區分した。

印象派の繪畫は、かつて人々が理想とした所の、視覺に映ずるまゝの自然を畫布の上に再現と說明に成功したにかゝらはず、それは平凡な自然主義に過ぎなくて、又幾分無自覺な、傳統的な繪畫であつた。故に後期印象派の畫家は初めて、自然と繪畫は相異る別個の世界であつて、繪畫は自然より離れて、獨立した繪畫獨自の世界にして、畫家の感情と思想の表現物であり、畫家の生活と繪畫は離る可からざるものとなつた。

セザンヌは凡そ十年間巴里に來て、研究所とルーブル美術館に通つて研學した。サロンへは每年作品を送つたが、陳列は拒絕された。かつて只一度、只一點のみ、彼の友人が審査委員になつた時、その推選によつて陳列する事が出來た。老年、彼の故鄕エックス市の美術館へ彼の傑作三十點の寄贈を申し出たが、美術館長はそれを拒絕した。

セザンヌの技術は、一美術學生よりも拙劣だと批評された。しかし彼の稚拙は彼の繪畫をより思想的に、個性的に、表現的にならしめた偉大なる原因である。

ゴーギヤンは三十五才にして、兩替屋の店員を辭して、專心繪畫に從事した。一八九一年、四十三才の時、巴里の僞世文明を嫌惡して、妻子を殘して南洋タヒチ島に逃れて、土人女と共に原始生活をしつゝ島の風景、女、生活等を原始的な色彩を以つて、單純に、何人も恐れぬ狂暴な製作をして、つひに島に於て五十才で死んだ。

ヴン・ゴーグは沈鬱なオランダ人で、數回職業を變更したが、三十才の頃より畫家となつた。強烈な太陽を求めて、南フランスのアル、に住ひ、眞夏の太陽の下に、帽子も被らず、一日に六七枚も描いた。原色に原色を配して、筆觸は尖げ尖げした麥穗の如く、極度に緊張した畫面を作つた。表現の爲には何物の犧牲をもかへり見ず、健康をも賭して、つひに顚狂して自殺した。三十八才の長からぬ生涯の中、製作したのは僅かに十年に過ぎないが、何人の長い生涯に於ける製作にも勝る六百の傑作を殘した。

この三人の畫家より以後、野獸派の畫家とほとんど同時に一人の全く特別な超人があつた。

アンリ・ルツソは巴里市城壁稅關の一屬吏であつた。多くの繪畫好事家の如く、彼は正則な繪畫修業をせず、短い暇と土曜日曜を樂しんで描いた一人である。



石竹を銜へる女　ヴン・ゴーグ

彼の純粹さは、彼の愚直さは最高のもので、通俗な社會人として嘲笑され盡して、生涯誠に幸ひはめぐされなかつたにかゝわらず、畫家としては何等の傳統にも拘束なく、あらゆる衝害を自由に超越して、小供の如く單純に、純潔に生活し、仕事した。彼は極度の貧しさに、何ものをも持たなかつたが、只、只人間の最も貴重な純情のみを所持した。

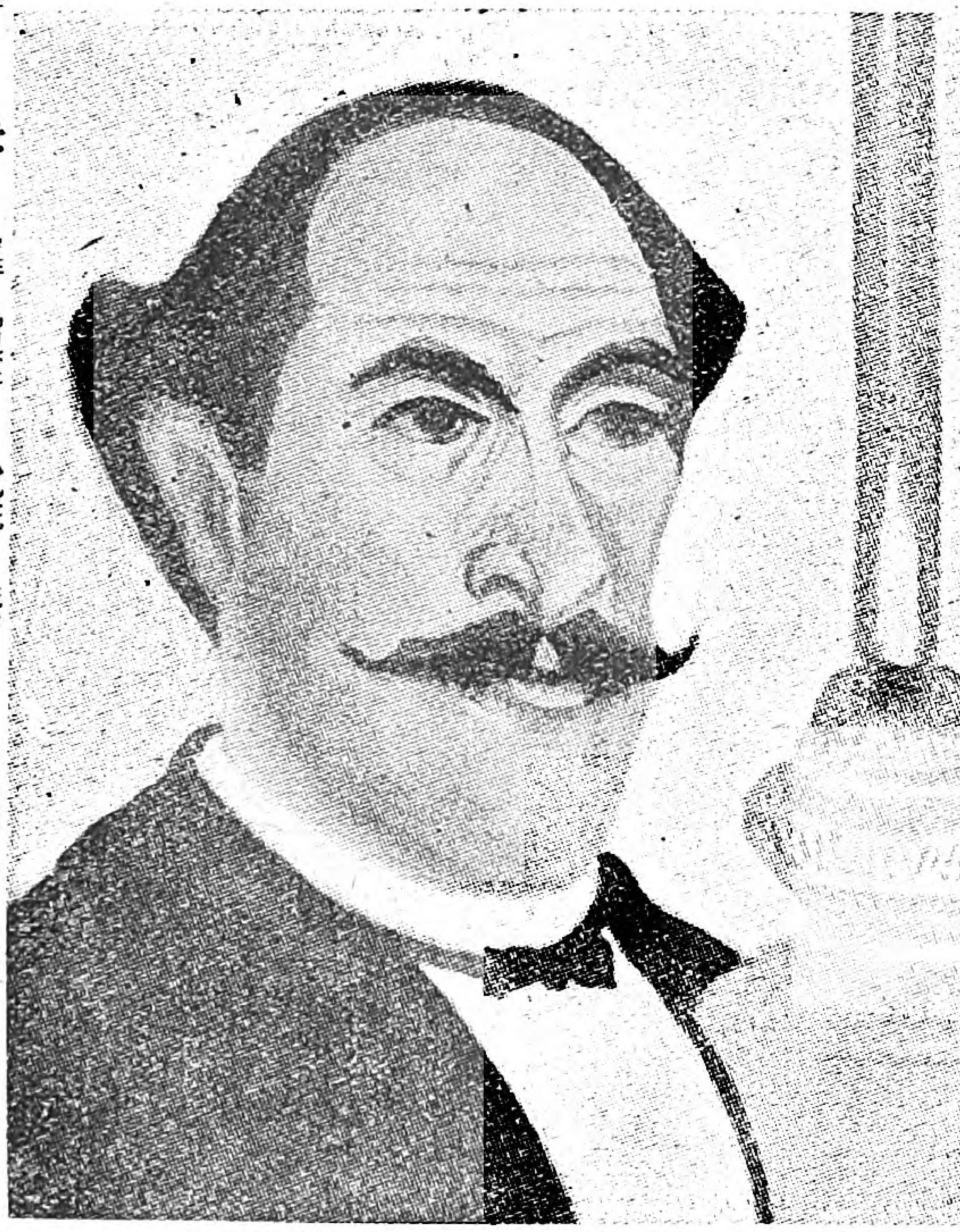
この四人の先覺者、革命畫家は、彼等の生涯の中は、甚だ報ひられなかつたが、今は世界各都市の美術館に所藏されて、すばらしい光榮を負つてゐる。

かつて繪畫は師匠、流派の傳習によつて、數人又は數代の畫家を要して完成されたが、印象派、特に後期印象派に至つて、畫家は一代一人の性格を所持して、繪畫は思想的になり、個性的となつた。

この四人の畫家の各々の長所は、セザンヌの無技巧。ゴーギヤンの虚無的な思想。ヴン・ゴークの熱情。ルッソの純情。而して相共通するものは、常に形骸の描寫に落ち入り易く、皮層の絢爛と虚僞の爭闘に原因する技巧を捨てゝ、畫家の感情と思想の表現、内容の充實に傾倒した事である。

特に、アンリ・ルッソの持つた純情こそは、過去、現在無數の英雄的大藝術家の才能と理智と野心と努力によつて成功した大藝術の何れにも彌や増して稀れに、清く、高く、美しく、深く、誠に有難い「貧者の寶」であつた。

この「貧者の寶」の發見より偉大な革命はかつて繪畫史上にも、思想史上にも無かつた。かくて二十世紀の改元と共に、佛蘭西繪畫史は最も人間的な、繪畫の個人自由主義時代となる。



自畫像　アンリ・ルッソ

B　野獸派とその名稱

政治、科學、藝術……あらゆる歴史に於て世が一人の英雄や天才の勝利と光榮を承認する時には、すでに來るべき時代の征服者は發芽しつゝある。

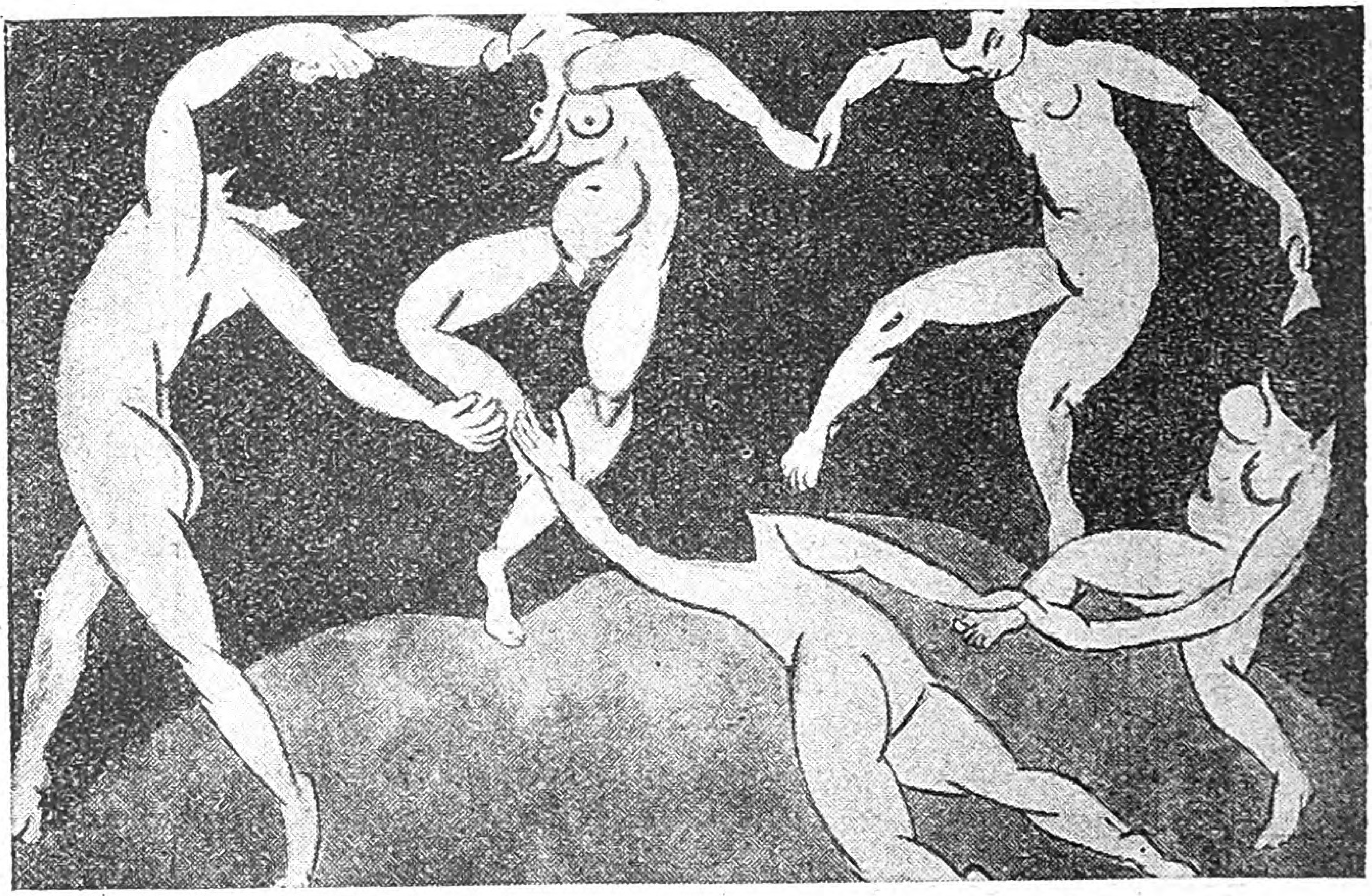
二十世紀の初頭、すでに前世期の功勞者達の光榮に背馳して、強度の自我を所有し、あらゆる自己以外のものを拒否し、破壞して自由な本能によつて生活し、僞りなき感情の直接なる表現の爲にはあらゆる衝突を超越する誠に果敢な畫家の一群があつた。

彼等は斷乎としてアカデミズムに反抗し、繪畫の因習傳統を破壞し、繪畫の法則も、科學や數學の立證も單なる、無意味な論理に過ぎなかつた。印象派の折角の太陽光線の發見も、その描寫の成功も一つの自然主義にして、繪畫は自然の模倣や再現ではなく、人間の生活感情の表現であり、純粋な繪畫の世

界の創作であらねばならなかつた。

——藝術に於て欠くべからざる二つのものは本能と表現である——とヴラマンクは高叫した。第一に人間である事が必要なのだ。而して本能によつて純粋に生活し、天分によつてよく表現するのだ。畫家としては敎習も、繪畫の傳統も無價値なのだ。智識が本能を殺し、研究は形式と技巧を作るのだ。むしろ無教育な素朴なアンリ・ルッソの感情が、ヴン・ゴークの純粋な熱情が、發溂とした自然の感情と一致するのだ。

一九〇四年の秋のサロンに於て、マチス、ドラン、ヴラマンク、フリエツ、ルオ、ブラツク、ヴン・ドンゲン……等の單純化された樣式に、原始的な、爆發する樣



踊り　マチス

な色彩を以つて野性的な、生々しい感情が危險な程強暴に、大膽に表現された。觀衆はこの無作法を嘲笑し、愚劣とし、異端者と輕蔑し、抗撃した。批評家ルイ・ボークセルはこの新興の畫家の群を——野獣派——と冠稱した。（これが野獣派なる言葉の濫觴だと云はれてゐる）もとより嘲弄と賞讃は相ひ半ばして。

C　野獣派畫家

a　マチス

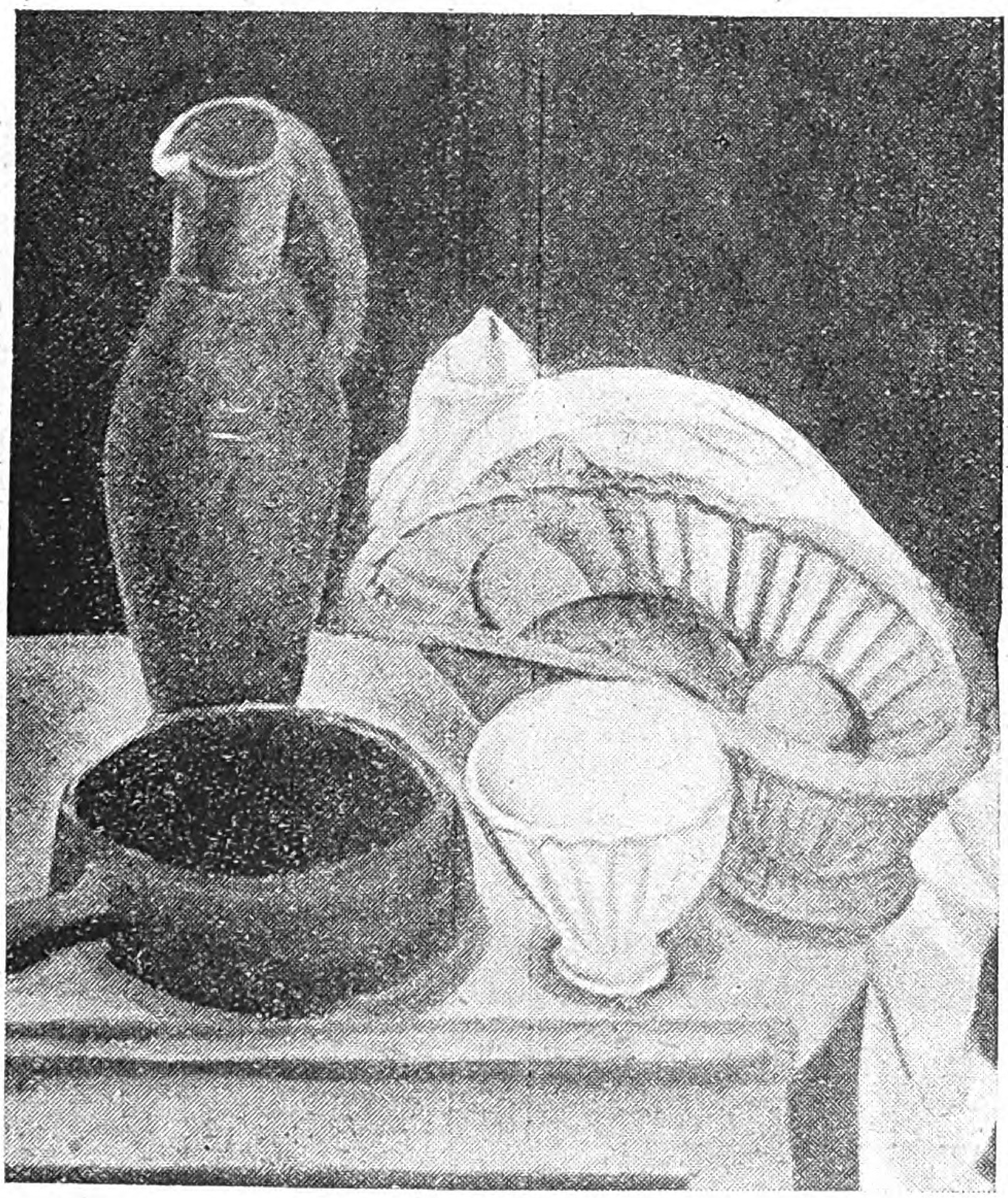
マチス（Henri Matisse）は佛國北縣カトウ市に於て、一八六九年十二月三十日に生れた。巴里の美術學校に入り、ギユスタヴ・モロー（モローは非常にロマンチツクな畫を描いたが、彼の繪畫に關する智識はあらゆる藝術をよく了解した。而して多くのよき子弟——デヴリエール、フランドラン、カモアン、ゲラン、マルケ、マチス、ルオ……を養成した。）の師導を受け一開發される所多かつた。

二十七才の頃、國民美術家協會展覧會に初めて出品した頃の作品は、多彩な自然主義であつた。一九〇〇年頃より野獸派の研究に入り、一九〇四年、彼三十五才の秋のサロンに於ては野獸派の首領と目された。五年、六年、七年には、實に野性的な、健康な、太い、單純な線を以つて、全く自由に歪形して、最も簡素な、必然的な形態に、はげしい原色と柔かい中間色を適度の對映に賦した。追求は極まるだけ簡潔に實在力と生命の表現に至從した。野獸王マチス、マチスの生涯の中でも最も純然たる野獸時代を成した。

代表作としては「自畫像」「マルゲリット孃の肖像」「畫家の妻」「讀書」「化粧」「ロダリスク」「スペインの女」「スペインの舞姫」「踊」……。

一九一一年、歐州諸國を漫遊し、モロッコに二年滯在して、多くの異國情緒のモロッコを描いた。効果は以前の如く鈍重ではなくなつたが、色彩は華麗で、筆致は輕快になつた。

一四年頃より黑色を愛用して、人々は「マチスの黑時代」と呼んだ。黑と綠。黑と紫。黑と黃。黑と青……一八年頃まで。主要なる作品は「畫家の妻」「金魚」「三姉妹」「ピアノ」……。



静物　ドラン

一九一七、八年頃より今日まで、南佛蘭西の明快な「風景」「女」「裸體」と「着衣」……を赤白黃の調色を以つて、いよいよ感覺的に表現したが、自然主義に歸へつた。

この三期の製作を見て、「黑時代」は畫家の技術的興味を持ち、最も人間的興味を共感するのは野獸時代のマチスである。最近の作品は色情狂の感覺とも思はれる、異状に鋭敏な感覺を持つてゐる。

今日彼はなほ六十二才で、非常に旺盛な精力を持ちタヒチ島に旅行

しつゝあると聞く。その所產が期待される。

b ドラン

ドラン(André Derain)は一八八〇年六月十日、巴里より汽車にて一時間程離れた、セイヌ河畔の小村シャトウに生れた。適齡前に、巴里シャトウ間の汽車の轉覆が期會して、その頃同じくシャトウに來て住つた、半畫家半遊人のヴラマンクと知己になつた。それ以來、ドランとヴラマンクは離る可からざる交友になり、畫家としての傾向も進展も併行した。

二人は朝夕セイヌ河畔に畫架を立て、灣曲する河や、水邊の家を描いた。オーヴルに共同生活して、研究所を開いたり、ヴラマンクの小說「寢台から寢台へ」をドランが插畫したのもこの頃かと思はれる。



風景　ヴラマンク

一九〇〇年、マチスを知り、野獸派は强固な勢力を得た。

——大なる確信を抱いて、私達の研究をつゞけた……おゝ樂しかつた時代よ。色彩を學び直ほすのみならず、表現方法にも……(ドラン)

最初、フリエッ、ブラック、デュフイ、ヴラマンク、ドランはヴン・ゴーグに啓發暗示を受けて、原色の點描を以つて混沌とした風景を描いた「色彩の交響樂時代」である。

——當時の私達の懸念した、凡て人が目で見るものとは異つたものを描かうとした意欲はたしかに理由があつた。當時は寫實術の時代であつた。それは私

達を刺戟し、寫眞乾板に似た凡ての繪畫に對して私達は反抗の一對照であつた——色彩は爆發し、印象派の光線から解放され、現實を超越して變形し得ると云ふ自由な考へは全く素晴らしい清新なものであつたが、同時に重大な事であつた——(ドラン)。

一九〇八年よりセザンヌとキュビズムの感化を受けて、畫面は構成的になり、色彩は原色の爆發より、調和の深みと味ひに傾倒した。形は單純な直線的となり「カダツケ風景」「マルチツグの松林」(一九一三年二科會陳列)「庭に面せる靜物」「靜物」(沛畫)「地球儀」その他「肖像」……の傑作がある。

四年間の歐州大戰に、ヴラマンクと共に輕輜重自働車隊に從軍して、一九一八年より巴里に住つた。

元來ドランは悧發多感な非常に趣味ある畫家で、古大家、友人や無名作家の作品の持つ「良さ」の了解に鋭敏で、黑土人の彫刻、ヴン・ゴーグ、セザンヌ、ルノアル、コロ、ピカソ……等を研究して、すべて自己の滋養とした。

——今日私はすでに色彩の配合について考へない。唯精神のみが畫布の上に、殆んど何も置かれてない時でさへも、作品に魂を與へるに相異ない……(ドラン)。

素朴な、美しい茶褐色の色彩を以つて、嚴整な實在觀と、豐富な「味」の表現に成功して、全くドランは光輝に滿ちてゐる。

c　ヴラマンク

マチス、ルオ……等の野獸畫家も、かつては美術學校の「家畜」の訓練を受けたが、ヴラマンク許しは生粹の野蠻人であつた。彼は一八七六年四月四日、フランドル人を父、巴里女を母として巴里に生れて、幼少の頃より父に從つてシャトウに移り住つた。

彼の小學校時代は——馭し難い子供、惡い生徒、無規律、憤怒し易き、反抗的な、豪放な……子供であつた。彼の三年間の軍隊生活に於て、上官は彼を「アナキスト」と呼んだ。彼の父は彼がスープに入れる鹽さへ得う儲けない事を懸念して、彼をシャトウ町の音樂手にして、町役場の無賃舍宅は最上の安定生活であると思つた。ドランが彼を巴里の畫壇に紹介して以來、彼の畫は彼の父がかつて思ひがけたかつた價値さへ持つた。

この獨習者の爲には、ヴン・ゴーグが無二の相談相手で、又自然はよき、自由なる指導者であつた。彼の最初の作品發表は一九〇四年の獨立展覽會に於て「曳き舟」「白帆」「運送船」「セーヌの岸邊」で、それ以來マチス、スリエツを知つた。

——屢々僧侶が信仰を妨げ、科學が本能を殺すが如く、美術館は人の個性を毒する——私は畫因の實際が如何であらうともかゝわらない。私は好きな樣に、好きな方法で描く——

——もしも造物者が造つた容貌が見難くて、不規律が私を悲しませ

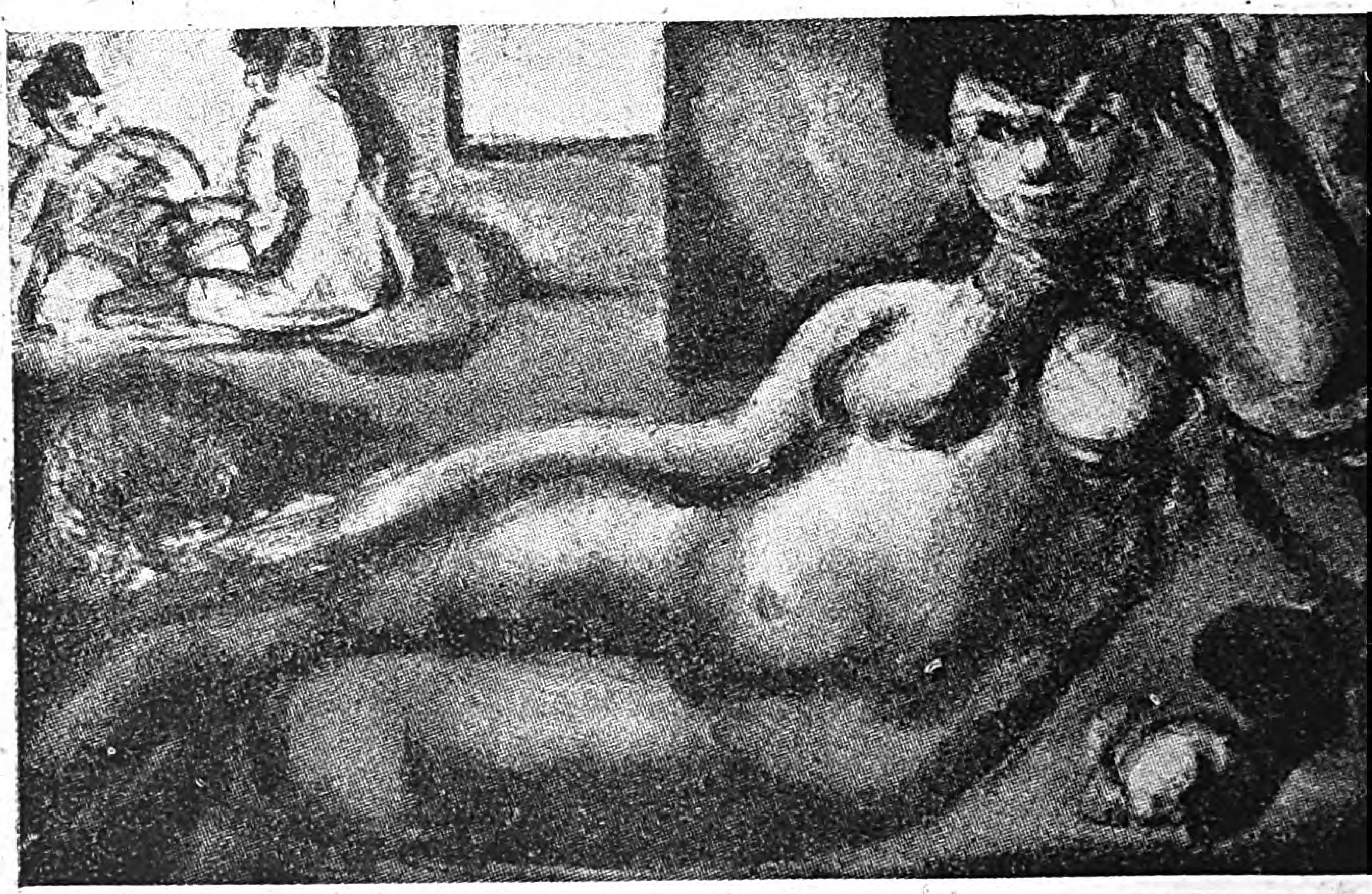
ても、私は決して美容院へ行つてネ、ロンやマックス氏の横顏を造らせはしない——ヴラマンク。

彼が本能と極度の主觀によつて傍若無人に描く所は、實に野獸の激情の瞬間的表現であり、所謂繪畫の技法や傳統を超越してゐる。黄赤青白緑……太い線や點描、小刀を以つて平塗り又鉛管より直接畫布の上に顏料をなすりつゝ、一氣に直截に仕上げる。

戰爭後、彼の畫風は黑と鳶に藍色の素朴な對調を以つて、すさまじい勢力で「風景」に「靜物」に、まれには「肖像」に寫實を以て自己を完成し、現代第一の寫實主義畫家となつた。

ｄ　ル　オ

ルオ（George Rouault）はブルタニユ人を父と巴里女を母として、



女　ルオ

一八七一年五月二十七日巴里に於て生れた。幼時はステンドグラスの職工として貧しく暮らした。巴里美術學校に入り、マチスと同じく、モローの教室にて師導された。その頃は師モローの忠實な弟子として「サムソン」を羅馬賞の選拔に出品し「博士達と耶蘇」を佛蘭西美術家展覽會に出品してシユナヴル賞を受けた。伊太利の旅行より歸へつて、一九〇三年第一回秋のサロンの出品畫は果然、露だにも師の感化影響を殘さない。新しい、强暴なルオ自身の姿を以つて、寄席、道化、賣春婦を描いた。それ以來今日まで彼は同じ畫因を水彩で、又油繪具で描きつゞけてゐる。

——裸女——ローズ色の豐饒な肉體は、醜爛した赤、陰慘な青を以つて肉つけして、黑い、太い線は輪廓に沿て或ひは背景に溶け込み、ある時は肉體の内部に入つて、肉つけを助長しつ

つ、形態は無慘に歪められて痙攣する生に横溢した肉體を表現する。青と緑の背景の一部は、橙色の對色を以つて單調を破壊する。

——曲馬の娘——は顔を白と赤に粉飾して、短い舞踊服を以つて豐滿な、美しい肉體の一部を被つてゐる。今足に爪立つて、他の片足は垂直に上げて、觀衆の面前を魅力的に跳躍する。

——道化——毆ぐられる彼奴。鯱鉾立ちが彼の生活で、彼は世人と同一の心臓を所持しない。滑稽な生きた屍の樣である。

多くのルオの愛好家はルオが崇高なる人生を描くとて賞讃し、野獣主とも、隱棲者とも云ふ。

しかし私はルオを好かない。藝術の爲の藝術は嫌やだ。曲馬の道化や賣春婦や罪人やキリスト等の彼の畫因は、全然彼の趣味だ。興味だ。概念だ。遊技だ。彼の生活ではない。彼は道化や賣春婦や罪人を玩弄する。彼こそ人生の道化で、賣春婦で、許す可からざる罪人だ。

D 野獣精神

なほ誕生當初の野獣派畫家としてフリエツ、ブラツク、ヴン・ドンゲン、デユフイ等も今は現代巴里の動かすべからざる元老大家となつた。その照會は大凡マチス、ドラン、ヴラマンクの經路に類似する故にこゝには省略する。

いづれの國、いづれの時代に於て、極めて少數だが、創作的な、革命的な天才畫家は、熾烈な、おさへ難き本能と熱情を所持して、純粹な人間の表現をした——ミケランゼロ、チントレツト、ランブランド、ゴヤ、クールベ、ドラクロア、セザンヌ、ヴンゴーグ、アンリ・ルツソ……それを野獣的精神と云ふ事が出來る。

而して今世期の初頭に、人間赤裸の生活感情を表現する果敢な畫家達の自覺が偶然にも一致して、展覧會に落ち合ひ、名譽あるその一つの名稱のもとに總括されたが、彼等はもとより結社を成さなかつた。決して協定の約束も、共通の法則も、統一された學理も持たず、又敢て聯合の運動さへしなかつた。虎は深林の棲家に棲む、狼は彼の穴に寢むるのは正に自然と必然で、何等の不可思議もない。彼等の生活はかくも自由に、仕事は實に勝手放第であつた。あだかも無定見の如く漠然としたるに似てゐるが、誠に人間的な、絶對の自由主義であつた。

一九〇八年、ピカソ、ブラツク、レジエー、メツツアン、ジエール……等の立體派の勃興以來、時代と思想の推移に從つて未來派、新古典主義、ダヾイズム、超現實主義……等等無數の近代精神を持つ主義と主張が起つたが、すべて野獣派の徹底した自由主義の母體に胚胎したものである。

なほ野獣派の精神は今世期を通じて、未來に含まれるあらゆる前衞的な新興藝術の主調となるであらう。

それ等の最も勝れた、興味ある畫家としてユトリヨ、スゴンザツ

ク、デュフレヌ、キスリング、フォーコニエ、グロメール、パスキン、スーチヌ等を擧げる事が出來るが、こゝにはモディリアニとシヤガルを紹介する。特にシヤガルは今日巴里の最も尖端を超躍する最も代表的な畫家である。

○モディリアニ

モディリアニ（Amedes Modigliani）は一八八五年伊太利に生れた猶太系の伊太利人である。彼は最初、彫刻家たらんと志望して、二十才に巴里へ出たが、何が機會したのか、畫家となつた。而して薄幸と病魔におそはれて、一九二〇年三十五才で早く世を去つた。

いづれの野獣派畫家とも同様に、彼の誠に魅力ある豐麗な作品も世の蒙昧な、不純な、誤つた風習や觀念を持つ所謂——畫に教養のある人——にとつては無秩序、過激、野卑、醜惡に餘り、先覺者や天才やの本能や性格や思想が強ければ強い程、純粹であればある程偉大な犠牲を強ひられ、不幸な生涯を餘儀なくされる。

モディリアニも彼が最も輕蔑する所の金錢によつて、しばしば常に屈辱された。次の二三の挿話はヴラマンクがモディリアニについて回想したものである。

一畫商がモディリアニの家に來て、彼の素畫の一束をなるべく安價に求める爲の長談議が彼を憤怒させた。彼は丹念にクロツキを集め、重ねて、一角に錐を以つて穴を明け、紐を通して、便所の壁につり懸けた。



女の首　モディリアニ



室内　シヤガル

ある日、アメリカ女の肖像をクロッキして、彼女は彼に署名を希望した金錢づくが彼を憤怒させて、彼は女の顔を描いた紙片を横にして、全面に署名して、なほ「貸室あり」と大書した。

ある冬の朝、ロトンド（キヤツフエ）の横町のラスバイユ街の、ある家の屋根裏の彼の隱棲家の窓より、閲兵式を閲覽する大將軍の樣に豪膽に、高慢に彼は街に居並ぶ自動車の整列を見下してゐた。氷の樣な北風が皮膚を咬んだ。彼は私を見つけて、來て、如何にも無用物のやうに——この上衣は私に大き過ぎて、君には丁度いゝだらう。買はないか……と彼は簡單に私に云つた。

彼は何とデリカな愛情をこめて、寢臺に横臥する愛人の裸體の、あらゆる部分を接吻で被い、うづめる樣に、毛布の上のあらゆる部分を描きうづめた。親愛なる杏子色の彈力ある、實に魅力的な肉塊。彼の描く肖像は彼の愛人と友人と近所の小供である。彼の肖像は決して化粧したり、着飾つたり、又剛慢な態度ではない。心も顏も、衣服も實に純朴な、清素な、僞はらざる平常のまゝの人間である。棗形の小さな眼、細い長い鼻、小さなバラ色の唇はつゝしまやかである。美しさ、ふくやかさ、親愛さは正に近代のチシアンの肖像である。

f　シヤガル

シヤガル（Marc Chagall）は一八九〇年ロシヤ、ポテブスクの小

問物屋に生れた猶太人である。極めて貧しい、慘憺な環境中に成人した。一九一〇年、彼が二十才の時巴里に出た。その頃巴里の潑溂たる畫家達はキユビズムの運動に參加した。多感なシヤガルも、それを試みたが、それには止まらず、彼自身の本能のまゝに、猶太人の紙に特種な性格――故郷を追はれて號哭と祈禱、あこがれの樂土、迷信と憂鬱、厭世と嘲笑、高慢と慘酷、惡鬼と神秘……この謎をあらゆる自然と繪畫を超越した非常な手段を以つて自由に表現した。一四年、戰爭開始して故鄕に歸へり、露西亞の新政府と意見相入れず、戰爭終結して二二年再び巴里に來て安住した。

――室内――青衣の男が卓によつて食事する。彼の旺盛な食欲は背景の黄色と電光の如く走る赤色。最初青い魚を食つて、飲酒の希望の傍に彼の純白の頭は飛躍して、酒瓶は彼の口の方向に顫動する。而して彼は雛鳥を食ふであらう。それはすでに傍に用意されてゐる。卓は白と綠の變化、美しい赤黄綠の交響樂。

――茶を飲む兵士――卓上には大きなサモヴル、それは黑と白。青い制服の兵士はサモヴルと對座して、流出管の下に茶碗を置いて、茶を汲さうとする手をさし出してゐる。彼の腦裏には茶を飲む以外に一つの燃ゆる希望がある。それは帽子が飛散した彼の裸頭に見る事が出來る。卓上にはすでに先客は女と共にサモヴルの煮立つ音樂につれて舞踊する……。背景の窓を通して外面は月光と彗星の青い反映、花の木、家の燈火、更け行く夜の靜かさ……

――家畜商人――月明の夜、月を背にして家畜商人の一隊。一隊の馬車は黄、二つの車も黄、それを引く一頭の白馬は牝馬。なぜならば彼女の透明な腹部には姙娠せる兒馬を見る。赤衣の車人も車上の青年も、小牛を舁いだ女も後方をふりかへりつゝ、月を見るのであらう。前景の二人の首だけの農夫の立ち話しは、車上の賣らるべき小牛に關してであらう。

彼の色彩は世に一つの異常に鋭き感覺を以つて、ロシヤの夜話、猶太の傳説、猶太の奇妙な生活、祈禱する猶太人、誕生日、室内、裸女、無産者、愚人、酩酊者、祭、假裝行列、踊、音樂、淫蕩、頽退……あらゆる繪畫と自然と人類の最も過激な境堺さへも乘り超えて、無制限に奔放である。豐麗、殺氣、狂想、爆發……黒綠赤――紫綠白――黄黑赤――ローズ赤茶――紫黑赤――北極光の明滅……

共産黨員の身の上調べ

淺野豐

この調査は司法省思想方面の主管者である司法書記官池田克氏に依て爲されたものである。三・一五事件及四・一六事件關係者に就て、年齢、健康狀態、教育程度、出身校、成績、家族關係、婚姻關係、生活程度、家業、職業、思想推移の過程等の各項目に亘つて調査されたもので、調査人員は三・一五事件關係者四百七十一名、四・一六事件關係者百八十四名の多數に及んでゐる。元よりこの調査に共產黨事件關係者の全部に渉つて居ないが調査人員六百五十五名と云ふ數字は決して少いものでなく、今後全部に亘つて調査が行はれるとしても此の比率の上に甚しい相違は出て來ないであらう。兎に角この調査の對象となつた事件關係者は我國共產主義運動の最尖銳分子であるからその地位から云つても調査の價値がある。この調査の結果は何が彼等を共產主義運動者たらしめたかと云ふ原因論的觀察を爲すに必要な參考資料となると同時に、社會政策及社會立法の最も貴重なる參考資料となるものであると云ふことが出來る。尙調査の數字はすべて池田書記官の手に成るものであるが、註其他はすべて筆者の責任であることを一言斷つて置く。

一、年齢（檢擧當時）

年齢	三・一五事件	四・一六事件
一七歳	三人	二人
一八歳	二人	一人
一九歳	七人	四人
二〇歳	二二人	八人
二一歳	三四人	八人
二二歳	三四人	一六人
二三歳	四二人	二五人
二四歳	四二人	二三人
二五歳	四八人	二四人
二六歳	六〇人	一五人
二七歳	四〇人	一六人
二八歳	三七人	一一人
二九歳	二三人	一一人
三〇歳	二三人	四人
三一歳	八人	六人
三二歳	一〇人	一人
三三歳	八人	三人
三四歳	五人	一人
三五歳	七人	二人
三六歳	三人	―
三七歳	六人	二人
三八歳	三人	―
三九歳	一人	一人
四〇歳	一人	―
四一歳	―	―
四二歳	一人	―
四八歳	一人	一人
合計	四七一人	一八四人

右の如く年齢の幅は、三・一五事件でも、また四・一六事件でも、十七から四十八歳までである。而して平均年齢は三・一五事件は二

十六歳弱、四・一六事件は更に少しく若く二十五歳弱となつてゐる。

尙これを二十歳以下を少年、二十一歳以上三十歳以下を青年、三十一歳以上を壯年及び高年者と區別して調査して見ると

イ、三・一五事件關係者

少年	三四名	七・四％
青年	三八三名	八一・三％
壯年及高年者	五四名	一一・三％

ロ、四・一六事件關係者

少年	一五名	七・八％
青年	一五二名	八二・七％
壯年及高年者	一七名	九・五％

兩事件とも青年が八割以上を占め、壯年及び高年者が前者は一割一分、後者は一割にも滿たないと云ふことは注目に値する。而して過去に於ける、我が國の共産黨事件關係者の平均年齡を調査して見ると、曉民共産黨（黨組織大正十年八月、檢擧同年十二月、被告人八名）は二十五歳强、第一次日本共産黨（黨組織大正十一年十二月、檢擧大正十二年六月被告人三十名）は二十九歳强、名古屋共産黨（黨組織大正十二年五月、檢擧同年七月）被告人十二名）は二十六歳强、群馬青年共産黨（黨組織大正十二年七月、檢擧同年十月、被告人十三名）は二十六歳、長野共産黨（黨組織大正十二年一月、檢擧大正十三年二月、被告人十九名）は二十五歳强、旭川共産黨（黨組織昭和二年八月、檢擧同年十二月、被告人十一名）は二十一歳と云ふことになつてゐる。これに依つて見ても、如何に青年が多數を占めて居るかが窺はれるであらう。

またこれを一般犯罪者と比較して見るならば

大正十五年・昭和元年度第一審刑法犯有罪犯人

少年（二〇歳未滿）	三、二六五人	三・一％
青年（三〇歳未滿）	三四、一一三人	三二・七％
壯年（四〇歳未滿）	三二、七〇九人	三一・四％
高年（五〇歳未滿）	二一、〇八〇人	二〇・二％
老年（五〇歳以上）	一三、一九九人	一二・六％
合計	一〇四、三六六人	

であつて、壯年及び高年者を合する時は五割一分六厘、即ち總數の半數以上を占めてゐるのに、青年は三割二分强に過ぎず、これを共産黨關係者中青年が八割以上を占め、壯年及び高年者が僅に一割内外であるのと比較したならば共産運動の素生因が青年にあると云ふことが判明するであらう。

（註）この調査に依つて、我が國に於ける共産主義運動の構成員の最大多數が青年に依つて占められてゐる事實と、三十一歳以上の者と二十歳以下の者とが極めて少數である事實が判明した。これは何故であるかと云ふならば、青年の多いのは共産黨の指導精神乃至は行動が理論的であり、戰鬪的であり、そして非傳統的であつて能く青年性に浸透傾動し易い爲ではあるまいか。また三十一歳以上、即ち壯年及び高年者の少いのは、この年配になると家族を有ち生活上の責任も生じて來るからで、要するに生活環境の制約が然らしむるものと觀られる。また少年の少いのは共産主義運動は理論の伴ふ運動であり、知識の集積に相當の年月を要する爲であると觀られてゐる。

二、健康狀態

健康狀態の調査は健康者、虚弱者、疾患ある者の三つに分つて行はれてゐる。

イ、三・一五事件關係者

健康者	二八五名	六〇・五%
虚弱者	七五名	一八・〇%
疾患ある者	一一一名	二一・五%
合計	四七一名	

ロ、四・一六事件關係者

健康者	一四一名	七六・六%
虚弱者	九名	四・九%
疾患ある者	三四名	一八・五%
合計	一八四名	

更に疾患ある者を病氣別に分けて見ると

	(三・一五事件)	(四・一六事件)
肺結核	一九名	六名
肺尖カタル	一五名	五名
肋膜炎	九名	三名
神經衰弱	八名	二名
心臟病	七名	三名
花柳病	五名	四名
脚氣	一〇名	一名
蓄膿症	三名	三名
胃腸病	二二名	四名
其他	一三名	三名
合計	一一一名	三四名

(註) 從來過激なる思想犯罪者には不健康者、即ち疾患ある者殊に肺病患者が多いと云ふことが定評になつてゐたが、この調査に依ると事件關係者の六割乃至七割以上の者が健康者であり、また病氣別に見ても肺病患者が飛はなれて多いとは云はれないことを事實に於て明かにしてゐる。而してこの事實は、我國に於ける社會主義運動の成長の程度を間接的に物語つてゐるものとも考へられる。更に看過すべからざる點は事件關係者の七割弱が獨身者であるにも拘はらず花柳病患者が極めて少數なることである。尙この調査は四・一六事件の方は入所直後に於て爲されたものであり、三・一五事件の方は刑務所に拘禁せられ約一年を經過して後行はれたものであるとのことであるから、四・一六事件關係者に比して三・一五事件關係者の健康者の率が低いのは多少拘禁生活に伴ふ生活上の變化乃至は精神上の不安が身體に影響してゐるものと觀るべきである。兎に角、不健康が思想犯罪の重要なる原因だと云ふことは今回の事件に於ては何等意味をなさないことである。

なほ知識階級(專門學校程度以上の教育を受けた者)勞働者農民階級と二大別して調査した健康狀態は

イ、知識階級に屬する者

	三・一五事件		四・一六事件	
健康者	五五名	四二・〇%	三〇名	六六・六%
虚弱者	三七名	二八・〇%	四名	九・〇%
疾患ある者	四〇名	三〇・〇%	一一名	二四・四%
合計	一三二名		四五名	

ロ、勞働者農民に屬する者

	三・一五事件		四・一六事件	
健康者	二三〇名	六八・〇%	一一一名	七九・八%
虚弱者	三八名	一一・〇%	五名	三・四%
疾患ある者	七一名	二一・〇%	二三名	一六・八%
合計	三三九名		一三九名	

であつて、知識階級に疾患ある者が多く、勞働者農民に健康者の多いことが一目瞭然である。

三、教育程度

(イ) 三・一五事件

普通教育を受けたる者	二五八名	五五％
中等教育を受けたる者	八一名	一七％
高等教育を受けたる者	一三二名	二八％
合計	四七一名	

（ロ）四・一六事件

普通教育を受けたる者	八一名	
中等教育を受けたる者	五八名	
高等教育を受けたる者	四五名	二五％
合計	一八四名	

これと比較する便宜のために一般犯罪人の教育程度調査表を左に掲記する

大正十五年昭和元年度第一審刑法犯有罪犯人

高等教育を受けたる者	一六五人	〇・二％
中等教育を受けたる者	一、五二四人	一・四％
普通教育を受けたる者	六一、二二六人	九八・四％
無教育者	四一、二〇三人	
合計	一〇四、一〇八人	

（註）一般犯罪に於ては高等教育を受けたる者が僅に〇・二％に過ぎない。然るに共產黨事件關係者に於ては二八％乃至二五％が高等教育を受けた者であることは看過し得ざる事實である。

四、出身校別

この調査は知識階級、即ち專門學校以上出身者に就て調査を行つたものである。

イ　三・一五事件

東京帝大	三二名	
京都帝大	二四名	
九州帝大	四名	
東北帝大	一名	
北海帝大	二名	
商科大學	一名	
岡山醫大	一名	
五高	五名	
六高	八名	
七高	一名	
福岡高校	一名	
佐賀高校	一名	
弘前高校	一名	
桐生高工	一名	
東京外語	二名	
大阪外語	三名	
陸軍士官	一名	
以上官公立學校計	八九名	六七・四
早大	八名	
慶大	一名	
明大	五名	
日大	八名	
同大	四名	
中央大	四名	
法政大	一名	
東洋大	二名	
立命大	一名	
早高	一名	
明高	二名	
大阪商專	一名	
九州商專	一名	
東京女大	四名	
以上私立學校計	四三名	三二・六％

ロ　四・一六事件

東京帝大	八名
京都帝大	三名
九州帝大	二名
東北帝大	一名
北海帝大	二名
二高	一名
五高	一名
福岡高校	一名
水戸高校	一名
佐賀高校	一名
弘前高校	一名

山形高校	一名	
千葉醫大專	一名	
金澤醫大專	一名	
東京外語	一名	
神戸高商	一名	
以上官公立學校計	二七名	六〇％
早大	一名	
明大	一名	
日大	一名	
同大	一名	
法政大	二名	
早高	一名	
九州商專	一名	
早專	一名	
大谷大學	一名	
日大豫科	一名	
同大豫科	一名	
同大專門	一名	
關大豫科	一名	
關大專門	一名	
上智大學	一名	
明大專門	二名	
以上私立學校計	一八名	四〇％

(註) 從來社會主義運動が私立學校に多いと云はれて來たが、この調査では六割以上が官學出身の者であることが判明した。

五、學業成績

この調査に際しては知識階級、即ち專門學校以上の出身者を除いた。これは曲りなりにも專門學校以上に進む者は相當成績の良いものでなければ困難だからである。從つてこの調査は、中等學校以下の者に就て行つたものである。而して八〇點以上を優、七〇點以上を良、六〇點以上を可、六〇點以下を不可となした。

イ、三・一五事件(三三九名の中調査不能八七名を除く)

優	一一三名	四四・八％
良	八二名	三二・五％
可	四五名	一七・九％
不可	一二名	四・八％
合計	二五二名	

ロ、四・一六事件(一三九名の中調査不能一五名を除く)

優	六一名	四九・二％
良	四二名	三三・九％
可	一六名	一二・九％
不可	五名	四・〇％
合計	一二四名	

(註) この學業成績の調査に依て、普通以上の成績であつた者が八割内外を占めてゐる事實を知ることが出來る。而して成績の不可なる者の數が僅に四分に過ぎないと云ふことは吾々に何を敎へるであらうか。成績は良くても家庭が貧困のために高等敎育を受けるべく上級の學校へ進むことが出來ない。これが思想惡化の深淵へ靑年を突き落す一つの原因となつてゐないであらうか。文部省編纂に係る「全國育英事業概況」に依れば、昭和二年度全國小學校の卒業生は一、七五三、八四三人であつた。そのうち成績優秀と折紙を附けられた者が二七五、〇三一人あつたが、中等學校への進學者は二三七、〇一九人で、殘餘の三八、〇一二人は折角優れたる頭腦の持主でありながら上級の學校へ進學し得なかつた。而もその不進學の事由を見れば、貧困に依る者一二、三四人、事故に依る者二五六九八人となつてゐる。更に事故に依る者の內譯を見れば父兄及び本人に向學心なき者八、七三七人、就學に不便なる者二、三一三人、本人の勞働を必要とする者一八、八七一人、其他七七一人と云ふことになつてゐる。これに依つて見ても事故の大

部分が家庭の貧困が直接間接に原因してゐることを物語つてゐる。故に成績優秀にして不進學の者の九八％までは、家庭の貧困のために上級の學校へ進めなかつたものであると云ふことが出來る。而も無産優秀子弟の不進學率は生活難の深刻化と共に增大して行くことは明かなる事實であると共に、これらの優秀子弟が時として社會主義的過激な運動に傾いて行く危險性が無いと云ふことを誰が云ひ得るであらう。

六、家族關係

この調査は三・一五事件四七一名中調査不能の者一三名、同じく四・一六事件一八四名中調査不能の者五名を除いて行つた數字である。

一、種類別

イ、三・一五事件

實父母なる者	三九九名	八七・一％
養父母なる者	二五名	五・五％
繼父母なる者	三四名	七・四％

ロ、四・一六事件

實父母なる者	一五三名	八五・〇％
養父母なる者	七名	四・〇％
繼父母なる者	一九名	一一・〇％

二、存否別

イ、三・一五事件

兩親共に現存する者	二四五名	五五・〇％
父を缺く者	一〇五名	二三・〇％
母を缺く者	五四名	一一・〇％
兩親共に缺く者	五四名	一一・〇％

ロ　四・一六事件

兩親共に現存する者	九七名	五四・〇％
父を缺く者	四九名	二九・〇％
母を缺く者	一六名	九・〇％
兩親共に缺く者	一四名	八・〇％

（註）家庭的に惠まれぬ者が危險思想に走り易いなどといふ先入主的觀念は全然覆へされてゐる。

七、婚姻關係

配偶者ある者（内縁關係を含む）

三・一五事件	一四五名	三〇％
四・一六事件	三八名	二一％

獨身者

三・一五事件	三二九名	七〇％
四・一六事件	一四五名	七九％

（註）これに依て見ると兩事件とも七割以上の多數が獨身者に依て占められてゐることが判る。

八、生活程度

この調査は事件關係者の家庭から見たものである。

イ　三・一五事件

貧困なる者	三四一名	七二・八％
普通なる者	九一名	一九・三％
富裕なる者	三九名	八・三％

ロ　四・一六事件

貧困なる者	七四名	四〇・三％
普通なる者	九〇名	四八・九％
富裕なる者	二〇名	一〇・八％

（註）この調査に依て貧困なる家庭に育つた者、卽ち勞働者農民出身の者が可なり多いことが判る、三・一五事件に於ては七割二分强、四・一六事件に於ては四割强が貧困なる家庭に育つた者であることを證據立てゝゐる。斯も多數の勞働者農民出身者が何故に共産主義運動に走つたかと云ふことは、今更こゝに說明の必要はない。本人自身の悲慘なる生活の體驗、生活不安の體驗、家業の沒落に因る體驗、貧農として

の體驗等、其の生活環境より得たる體驗が如何に其の基礎的原因事情となつてゐるかといふことは看過し得ない事實である。またこれと同時に富裕なる家庭に育つた者が兩事件を通じて一割內外あることも注目すべきことである。

九、家業

この調査は事件關係者の父兄の職業を調査したものである。而して三・一五事件に於ては七七名、四・一六事件に於ては一六名共に不詳者として除いてある。

イ 三・一五事件

農業	二一一名	二八・二%
水産業	七名	一・八%
鑛山業	一名	〇・二%
工業	七八名	一九・八%
商業	四三名	一〇・九%
交通業	一二名	三・〇%
公務及自由業	五三名	一三・五%
其の他有職業	二三名	五・八%
無職	六六名	一六・八%

ロ 四・一六事件

農業	六〇名	三五・六%
工業	二七名	一六・〇%
商業	三五名	二〇・八%
交通業	一名	〇・七%
公務及自由業	一六名	九・六%
家事使用人	一名	〇・七%
其の他有職業	一〇名	五・九%
無職	一八名	一〇・七%

(註) 勞働者農民階級及び獨立小商人の子弟が壓倒的多數を占めてゐる。

而して前掲優秀なる成績を以て小學校を卒業して上級學校へ進むことの出來なかつた者の父兄の職業を調査して見ると矢張農業が過半數以上を占めてゐることは注目すべきである。參考までに左に掲げる。

優秀不進學子弟の家業別調査

農業	二〇、三六一名	五三・五%
商業	五、五四〇名	一四・六%
工業	三、四九一名	九・二%
水産業	一、六六五名	四・四%
公務及自由業	一、二〇六名	三・二%
交通業	七〇六名	一・八%
家事使用人	八六九名	二・二%
鑛山業	四七一名	一・三%
其の他有職業	二、五五二名	六・七%
無職	一、一三二名	三・〇%

一〇、職業

前掲の家業に對比して玆には事件關係者の職業を掲記する。

イ 三・一五事件

農業	二三名	四・九%
鑛山業	一名	〇・二%
工業	一三三名	二八・二%
商業	一六名	三・四%
交通業	一七名	三・七%
公務及自由業	一一七名	二四・八%
其の他有職業	一三名	二・八%
無職	一五一名	三二・一%

ロ 四・一六事件

農業	二三名	一二・八%
工業	二五名	一四・〇%
商業	四名	二・二%
交通業	六名	三・四%
公務及自由業	三三名	一七・三%
其の他有職業	八名	四・五%
無職	八五名	四五・八%

(註) 無職の多いのは黨の機關に參畫する執行委員とか云ふものが全部含ませてゐるのと年齡關係から背つけるが、家業に於

ては農業が壓倒的多數を占めてゐたものが、職業では工業が多數を占めてゐる　これは吾々に何を物語るものであるかと云ふならば、農村の生活が如何に疲弊してゐるかと云ふことと、工場勞働者の生活が如何に苦しいかと云ふことを明示してゐるものであると云ひ得るであらう。

二、思想推移の課程と條件

共産黨事件關係者が如何なる過程を辿つて共産主義を信奉するに至つたか。その過程に於て如何なる事情が原因條件となつてゐるかを究めることは、原因論的な觀察を爲すに最も重要な事柄であると同時に、その結果は多くの青少年が如何なる過程を經て共産主義運動に身を投ずるに至つたかといふことを知るに便宜である。また思想善導策を立てる上に於て重要なるものと信じてこの調査を紹介することにした。

調査は知識階級と勞働者農民とに區別して行はれてゐる。これは兩者の間に各々相違した特質を認めるからである。

まづ知識階級に屬する者の思想推移的過程と條件とを上げて見ると。

一、時代思潮の影響
二、社會問題に對する關心
三、社會組織の矛盾不合理に關する意識
四、社會科學文献の閲讀研究

以上四つの條件が共通的基礎的條件となつてゐるものの如くである。

若い知識階級出身者が共産主義を信奉するに至つた過程を辿つて見ると、時代思潮の影響の下に社會問題に興味と關心とを持ち、無産者の生活があらゆる壓迫を受け殊に失業者などが悲慘なる生活をなしてゐることなどを見聞しこれに對して同情の念を懷く。而してそのやうな不合理な社會の現象は何故に起つたのかとの疑問を抱いて社會科學の研究に入る。斯くて共産主義の知識を集積してこれを信奉するやうになる。これが一般的の過程である。然し此の共通的な基礎的條件の外に事件關係者個々の特殊の原因事情が加はつてゐることは勿論である。而もこれは一人一事情に限らず、數個の事情が相錯綜してゐる場合が少くないのである。

これを三・一五事件關係者中知識階級に屬する百三十二名に就て調査した個々の原因事情を摘錄して見ると

家庭の貧窮に因るもの	一〇名
不健全なる環境に因る叛逆心	二名
家庭の嚴格なる手を離れ自由なる下宿生活	一名
家業の沒落	三名
資本家に對する不滿反感	四名
社會の罪惡に對する憎惡の念	一名
保守主義に對する反感	一名
宗教に對する不滿反感	九名
學校の退學處分	八名
官憲の勞働者に對する態度の目擊に因る刺戟	三名
ロシヤ革命	三名
京大學生事件	五名
××虐殺事件	一名
足尾銅山の鑛毒事件	一名
大山郁夫教授の退職事件	二名
デモクラシー運動	二名
普選法の通過	一名

騷擾事件　一名
學校當局の學生取締の態度　二名
無產階級の悲慘なる生活の實情視察　一六名
無產者への同情　三名
社會運動の經驗　二七名
政社組合の組織加入　一八名
思想團體の組織加入　七二名
學生社會科學研究會の組織加入　七三名
先輩知友の指導感化　三一名

と云ふことになつてゐる。また四・一六事件關係者中の知識階級に屬する四十三名に就て調査した結果は

無產者への同情　五名
家業の沒落　二名
資本家に對する不滿反感　二名
京大學生事件　一名
演說會又は講演會を傍聽して　三名
敎育方針に對する反感　一名
小作爭議　一名
好奇心　三名
總選擧の刺戟　一名
文藝趣味　三名
デモクラシー運動　一名
大山郁夫教授退職事件　二名
先輩知友の指導感化　六名
社會科學の研究　二五名

等が數へられてゐる。

更に勞働農民出身の關係者を調査した結果は

一、生活環境より得たる體驗
二、勞働、農民、水平社等の實際運動の經驗
三、合法非合法の宣傳文書及び煽動的文書の閱讀
四、先輩知友の指導感化

の四項が、その共通的な基礎的條件となつてゐる。勞働者農民階級がどんな悲慘なる生活をしてゐるかは今更茲に說明の要はないが、生活環境の體驗に基いて自己の生活の不安定なることや、失業の脅威を痛切に感ずると共に資本家地主の權勢に反感を抱くやうになる。而して勞働運動又は農民運動の實際運動の經驗に依て、資本家地主階級と勞働者農民階級との利害が全く相反する事實を知ると共に、組合の幹部又は社會主義運動家の指導感化を受けて階級意識に目覺め、合法非合法の過激なる宣傳煽動文書に接して自已の從來抱いて居つた疑問が痛快に解決されてるかの如くに感じて、遂に共產主義に共鳴するやうになる。而して右の共通的基礎的條件の外に事件關係者個々の特殊なる原因事情があることは知識階級に於けると同樣である。

三・一五事件關係者中勞働者農民出身の三百三十九名に就て調査したる特殊の原因事情は左の如くである

資本家に對する不滿反感　五二名
社會組織の矛盾不合理に關する意識　四五名
失業　一六名
政社又は組合に關與　一五七名
宗教に對する不滿及反感　五名
思想團體に干與　一二名
勞働爭議又は小作爭議の影響　一〇名
演說會講演を傍聽して　七名
父兄先輩の無理解に對する反感　三名
家庭の不圓滿、肺患　一名
厭世觀　五名
ロシヤ文學よりの影響　三名
××虐殺事件　一名
龜戶事件　二名

第一次共產黨事件　一名
入露して共產主義研究　九名
廢兵への同情　一名
書籍店員としての經驗　一名
記者生活中政界の裏面を知り政黨富豪に對する反感　一名
社會科學プロ文藝の讀書　一名
戀愛　一名

尙四・一六事件關係者百三十九名に就て調査したる結果は左の如くである。

社會組織の矛盾不合理に關する意識　六名
社會問題に對する興味　二一名
社會科學プロ文藝の讀書　五五名
學校の退學處分　四名
ロシヤ文學の影響　四名
宗教に對する不滿反感　二名
官憲の不法處置に對する反感　二名
同僚の解雇　二名
教育方針に對する反感　二名
失業　一七名
選擧運動の醜惡なる事實に對する反感　一名
賃銀の低廉に對する不滿　一名
資本家地主に對する反感　一〇名
徒弟奉公中親方の虐遇　一名
ロシヤ革命　一名
父兄の無理解　三名
演說會講演會を傍聽して　一三名
文藝趣味　五名
沖人夫の步合制度の不滿　一名
無政府主義の感化　一名
財界大恐慌　一名
書籍店としての經驗　二名
好奇心　一名
母の死　一名
家業の沒落　二名
小學校教員の感化　一名
教員奉職中退職處分　一名

（註）以上の諸點を觀察して綜合するに知識階級はより多く思想的方面から共產主義を信奉するやうになり、勞働者農民階級は現實的な經濟的方面から入つて行くものと見ることが出來る。更にこの調査の結果に依て看過する事の出來ない點は、事件關係者をして共產主義者たらしめた原因條件はその殆ど全部が社會的の原因條件であつて個人的原因條件は極めて少いことである。これに依て見ても今回の共產黨事件を病的現象だなどとするのは早計である。勿論多少の個人的要素が含まれてゐないことはないが、それは極めて枝葉の問題であつて何と云つても現實の社會經濟生活を基礎として生起したものであると云ふことは動かすことの出來ない現前の事實なのである。今回の共產黨事件は甚だ多分に社會的要素を含んでゐることを見逃してはならない。「私が大學の學生であつた大正二年乃至六年頃と今日とを比較すると人を共產主義者たらしめる社會的條件が殆ど根本的に差違がある。今日社會的矛盾の深くなつたこと、勞働農民が相應階級鬪爭の經驗を積んだこと、大衆團體が存在してゐること、共產主義とそれ以外の思想系統がハッキリしてゐること等、等　今日の若い人々をしてに共產主義に赴かしめると考へる」これは今回の共產黨事件に連座した最高幹部の一人の私記である。故に若し眞にこれが對策を講ずると云ふなればこれらの社會的條件を無くすることが急務中の急務である。而して果敢に社會政策を行つて、平穩裡にも合法的に、社會は進化するものであることを示し、それに期待を持たせることが急務ではあるまいか。（終り）

鐘紡王國論

檜　六郎

一　『王國』を俯瞰す

公稱資本金六千萬圓、拂込金額二千八百五十九萬五千七百三十七圓、配當年三割五分、聞いたゞけでもこの不景氣がケシ飛んでしまふやうな鐘紡王國、いまはやりの言葉で云へば鐘紡コンツエルンも、四月五日ひとたび四割減給案を發表し、多年誇り顏に天下に宣傳してきた『家族主義』『溫情主義』を自ら弊履の如く棄て去るや、三萬五千人の從業員諸君は蹶起する、『輿論』は諤々とする、分裂に浮身をやつす各無産黨も、對鐘紡共同鬪爭委員會を組織する、鐘紡株は止め度なく慘落する、『愛の泉が混々として流れて居ります』（昭和五年一月二十日定時株主總會議事速記錄）と前社長武藤山治君がいみじくも豪談した各工場には愛の泉の代りに生々しい人間の赤い血が亂鬪の巷からほとばしつた。鐘紡王國なる『理想鄉』は一瞬にして『地獄』に化した。

しかし、鐘紡王國は、はたして『理想鄉』であつたらうか。

順序として、まづ、私は、讀者諸君を鐘紡王國に案内する義務を負はされる。

が、私は、知恩院の小坊主がお上りさんに說明するやうに、『鶯張りの廊下何百間！』といつに諷な一種の『藝術的』形式で諸君を案内する能力、根氣および紙數を遺憾ながら持つて居らぬ。從つて、勢ひ私は、ともすると砂をかむやうな糞面白くもない數字を提供しなければならないかもしれぬ。

鐘紡王國は、主力軍たる鐘淵紡績株式會社を中心に、右翼に上海製造絹絲株式會社、左翼に南米拓殖會社、他に遊軍として昭和産業株式會社を抱擁し、數においてこそ微々たるものではあるが、地理的には、島國日本を離れて遠く支那および南米にまで戰線を擴大してる。もしそれ、鐘紡王國より吞吐される綿絲、綿布、絹絲、絹布等あらゆる商品の行衞を追跡するならば、恐らくわれ〳〵は五大洲を遍歷しなくては濟むまい。われ〳〵日本のプロレタリアは申すに及ばず、支那、印度、南洋の大衆、さらに世界紡績業のメツカたるマンチエス

ターの紡績勞働者ですら鐘紡マークのメリヤスを一着に及んでゐるといふ。ホッテントット人も或は鐘紡王國の隱れたる『顧客』であるかもしれぬ。

A 主力鐘紡の陣營

所在地	錘數（リング）	撚絲錘數	織機臺數	職工數 男	職工數 女
東京本店	一三、〇二四	三四、六三〇	七六〇	七三〇	二、三三一
兵庫支店	一〇四、一五三	二五、〇八〇	一、五二四	七五〇	二、二五〇
住道支店	一〇、七五三	—	—	一〇八	三一五
中島支店	一八、八〇〇	—	—	一五〇	七〇〇
洲本支店	八二、五六四	二一、〇〇〇	一、五八四	六〇二	二、〇二八
高砂支店	四四、六四〇	三三、〇八〇	—	四〇〇	一、一〇〇
三池支店	三一、一〇四	—	—	二八三	九〇六
久留米支店	一六、六四〇	三三、二〇〇	—	一八六	五五八
熊本支店	一三、二八八	—	三〇〇	一四〇	三三〇
中津支店	一〇、七五三	—	四一八	一四九	三六五
博多支店	一三、四一六	—	四一〇	一九八	四三一
岡山工場	一四、五三八	—	一、〇〇三	三三一	六〇六
備前工場	四九、〇八四	一六、二八〇	—	二四八	八二一
西大寺工場	三二、五〇四	—	六六二	三三七	五九六
和歌山支店	一一、五三〇	—	—	九五	三三四
大阪支店	六四、八三六	—	一、九二三	五五〇	一、六五〇
松坂支店	一五、九七二	—	—	一〇三	三九一
合計	六三五、五七六	九三、二六〇	八、五八四		

その他絹絲布および製絲工場として

所在地	錘數（リング）	撚絲錘數	織機臺數	職工數 男	職工數 女
京都支店（ミュール）	二八、一四八（四、六三〇）	八、一三〇	—	九八八	二、四四三
上京工場	七、五〇〇	—	—	不明	不明
下京工場	九、〇〇〇	四、八四四	—	二五五	六一四
岡山絹絲工場	一四、〇九二	六、五三八	—	三二八	八八七
新町支店	一六、三〇四	—	—	五三三	一、八七七
淀川支店（綿絲布漂白、染色、捺染、加工仕上）				一、〇一三	四一三
甲府製絲工場	—	—	—	—	—
彦根製絲工場	二六〇			六四	四三一
山科絹布工場	—	一三、九四四	一、〇〇九	三七五	一、五五五

かくて職工總數は男八、六七八人女二三、八八〇人（職工數不明の工場を除く）に達してゐる。

＊紡績工場統計は大日本紡績聯合會發行『昭和四年下半期綿絲紡績事情參考書』その他の工場および全工場職工數統計は昭和五年版『紡織要覽』による。以下同じ。

B、上海製造絹糸の陣營

所在地	錘數（リング）	撚絲錘數	織機臺數	職工數 男	職工數 女
上海 公大紗廠第一工場	四三、一五二	四、八四〇	一、一八四	七三〇	二、三〇〇
上海 公大紗廠第二工場	四二、四一六	一〇、一三〇	七四〇	八〇〇	三、三〇〇
青島工場	五七、九三六	六、一六〇	九八二	三、二〇〇	二六〇
合計	一四三、五〇四	二一、一三〇	二、九〇六	四、七三〇	五、九六〇

C、昭和產業

昭和四年初め九州大隅地方に千七百町歩の畑地を購入し、桑苗植

え、蠶飼育の準備中であるが、『王國』の計畫によれば、昭和六年度には所屬生糸工場使用原料の半分をこれによつて供給し、爾後年度において使用原料全部を供給し得るといふ。

D、南米拓殖會社

昭和三年十一月ブラジル、パラオ州に百三萬町歩の『コンセツション』を獲得、綿花、珈琲栽培および牧畜を兼ねる計畫中。

二　『王國』の發展過程

以上によつて、われ〳〵は、一應鐘紡王國の物質的基礎を俯瞰したものとする。が、俯瞰はひつきやう俯瞰に過ぎぬ。われ〳〵は、どうしても『王國』の心臓にまで喰ひ入らねばならぬ。

鐘紡王國は、いかなる生長・發展をなし、いづこへ行かんとしてゐるか。

鐘紡王國は、大三井王國から派生した一王國である。すなはち鐘紡王國の前身たる東京綿商社は、明治十九年十一月、三井呉服店を中心とする綿糸・綿花および木綿問屋の聯合事業で、創立當初の資本は僅か十萬圓であつたが、同二十年五月百萬圓に増資され、東京府隅田村鐘ケ淵に紡績工場を設けたが、これが現在の鐘紡東京本店である。三井コンツエルンは、同二十六年三井工業部といふコンツエルン所屬の各製造會社の統制機關を設け、朝吹英二氏を主班とし、三井各部から、當時まさに系統的發展を開始せんとしてゐた日本資本主義の前衛分子たるべき有爲の青年を拔擢した。日本紡績資本家中の双璧と稱される故和田豐治氏および武藤山治氏は、共に慶應義塾の出身で同時にアメリカに苦學し、しかも同時に三井の銀行部から拾はれて、このとき紡績界の人となつた『有爲の青年』である。和田氏は鐘紡本店支配人に、武藤氏は兵庫支店長に任命された。當時武藤氏の月給は三十七圓五十錢であつたから、今日三百萬圓を手にせる武藤氏自身もうたゝ感慨に堪へぬものがあらう。

しかし、鐘紡が三井直系であつた期間は、比較的短期間であつた。三井王國の最高顧問として日本と三井の『國政』を一緒くたに料理した井上馨侯は、間もなく、三井王國に忠告して鐘紡持株の大部分を手離させた。今日鐘紡總株數百二十萬株のうち、直接三井合名會社の有する株は六萬四千百九十六株（昭和四年六月現在）に過ぎぬ。井上侯はいかなる意圖によつてかゝることをなしたか不明であるが、萬事拔けめなき三井王國としてたしかに千慮の一失であつたらう。が、われわれは、もちろん、三井王國のために死兒の齢を數へるほどの余裕をもたぬ。（もつとも今日三井王國は内外綿花會社を通して綿花を、三井鑛業部を通して石炭を鐘紡王國に供給して切つても切れぬ關係にある。）

鐘紡は、三井王國の外廓に立ちながらも異常なる生長・發展をとけた。量的にみても、

年次	公稱資本金	備考
明治二十年五月	一、〇〇〇	創立
同二十六年二月	一、五〇〇	增資
同二十七年二月	二、五〇〇	增資
同三十二年九月		上海紡績合併
同　四十年一月	一一、六〇六	增資
同　　年十月	一四、〇〇六	日本絹綿紡織合併
同四十四年三月	一五、九二七	絹絲紡績合併
大正二年十二月	一七、四二七	朝日紡績合併
同　十年五月	一七、四二七	若尾製絲、國華製絲買收
同　十一年一月	一七、九二七	日本絹布合併
同　十二年三月	一八、一二七	南勢紡績合併
同　十三年一月	六〇、〇〇〇	(現在に至る)

かくて、鐘紡は、名實共に『王國』にまで發展した。その間、鐘紡コンツエルンの一翼たる

(一)、上海絹糸には、株式として千四百五十一萬九千圓を所有し他に運轉資金として千百六十二萬圓を融通して、合計約二千六百萬圓を投資

(二)、昭和蠶業には約二百三萬圓を投資

(三)、南米拓植には故田中大將の諒解の下に約五十二萬圓を投資

してゐる。しかして、鐘紡王國は、いかなる利潤を得てきたかといふに、最近十年間に利益累計一億六千七百六十二萬圓、そのうち社外分配一億千七百五萬四千圓、社內保留五千五十六萬六千圓の巨額に達し大正七年から大震災の十二年までは驚くなかれ七割配當、大正十三年以來今日まで三割八分たいし三割五分の高配當を維持してゐる。ひとり紡績界のみならず、日本資本主義的經濟中最高利潤を占めてゐるものである。もつとも(一)(二)(三)の三社に對する投資からは、上海絹糸の前期一割の配當以外多少の貸付利子を得た位で、『王國』の飽くなき利潤慾を滿足し得ない狀態にあるが、武藤前社長自らの言明によれば、上海絹糸の前期利益は非常に多額に上り三分の二を保留し配當(五十萬圓)は僅かに殘りの三分の一を以てまかなつたといふ(前揭總會議事錄)から、鐘紡王國の少くとも支那における海外投資は、家族主義、溫情主義の假面を必要としないだけに、極端なる粗惡勞働條件によつて、今後一層の利潤を期待し得るわけである。從つて資本家として見透しの達者な武藤氏は『鐘紡が內地の紡績工場の擴張を手控えて支那へ向つて投資を進めて行つたといふ方針は、時に誤れるかの觀がありましたけれども、私は達觀して考へて見ますれば、最も正しい有利た道を進みつゝあるものだと、かう實は信じて居るやうな次第であります。只今支那に持つて居りまする紡績の錘數は約十三萬錘、日本は五十九萬錘、支那の方はまだ四分の一であります。しかし將來支那の方の紡績工場が、日本と同じ位に擴張されるときは決して遠くないのみならず、より多くの投資をするといふ時代が、今後十年、二十年先には必ずくるであらうと實は考へて居るやうな次第であります』(昭和四年一月二十三日株主總會議事速記錄)と、『偉大なる抱負』の一端を語つたものである。これによつてみると、賢明なる武藤氏は、日本に

おける紡績勞働者に對する搾取率の增大が一應の限界に達したことを、當時すでに洞察してゐたものと考へられる。すなはち、日本における鐘紡王國の發展は、從來の生産方法、勞働條件、生産品種を以てしては當然行詰まらざるを得ぬことを見拔いて、無限の勞働力と、資本主義的發達速度に應じて無限に增大される可能性のあるらしく思惟される支那市場に方向轉換を開始したのである。鐘紡王國としては、消費國としての支那のみでなく、勞働力供給國としての支那を絕對的に必要とするのである。イギリス紡績資本家が、沒落に瀕しつゝあるマンチエスターの牙城を防禦するために、日本紡績資本家の侵入に對してインド市場を綿糸布關稅引上その他あらゆる帝國主義的方法――帝國主義戰爭の一萠芽たるべき――によつて死守せんと焦慮しつゝあると同樣に、日本紡績資本家は、後進國支那紡績業の發展が彼等をして第二のマンチエスターたらしめる危險性を察知し、支那無産大衆の勞働力により、支那無産大衆を顧客とするところの日本資本による紡績業を、今後の發展の不可缺的條件としなければならなかつた。鐵鋼業と異り『平和的産業』と稱される紡績業は、自由主義を基調としたマンチエスター時代はいざ知らず、帝國主義時代にまで高度發展をした世界資本主義經濟の現段階においては、特に東洋市場においては、諸帝國主義國家對立激化の重大なる素因を包藏してゐるものと云はねばなるまい。いはんや、今回の『減給』爭議により、形式上の溫情主義すらも『善良・溫順』たる未組織紡績勞働者の手によつて白日の下に粉碎された鐘紡王國にとつては、右の『方向轉換』を百パーセント有利に成功させるために、必然に、支那無産大衆に對する資本攻勢を益々尖銳化せざるを得ない立場にあり、それだけにまた、日支間の對立はもちろん前記諸帝國主義國家對立の危機も强化されざるを得ないはずである。

三　武藤獨裁下の『王國』

¥3,000,000.‥‥武藤社長慰勞金

¥80…拾五箇年勤續者タル余ガ現在ノ月給

∴共一箇年分ハ¥80×12＝960圓ナリ今假リニ余ガ神武天皇御卽位ト同時ニ就職シ初任給¥80ヲ得テ今日ニ至ルト假定シ共俸給總額ヲ見ルニ

¥960×2590＝2,486,400圓ニシテ社長ノ慰勞金ヨリ少ナキコト

¥3,000,000－2,486,400＝513,600圓ナリ故ニ若シ余ヲシテ社長ノ慰勞金ト同額ノ收入ヲ得ントスレバ猶

¥518,600÷¥960＝535年‥ノ長命ヲ要ス而シテ之ヲ我ガ紀元年代ニスレバ

2590＋535＝3125年トナル

諸君以テ如何トナス！

この『怪文書』を天下に撒布した鐘紡王國の下級サラリーマン某氏は、近世稀にみる實用（？）數學の泰斗であるらしい。武藤山治氏は、鐘紡社長の椅子を去るにあたつて、正確に云へば本年一月二十日午前十時から同十一時半までの一時間半の株主總會で、八十圓のサラリーマン君が三千百二十五年前（日本歷史家諸君よ、諸君は神武天皇

御即位前五百三十五年の日本歷史を御存知あるまい！）から『サラリーマン』であり、且つ彼は同年數だけハンガー・ストライキをつゞけて漸く獲得し得べき三百萬圓を、アッサリ受取つたのである。しかも、鐘紡株主の武藤前社長に對する感謝は、三百萬圓を以てしても到底評價され得ないものである！　同總會席上、某株主は感激に滿ちながら演說した。

『武藤前社長に慰勞金を贈呈する額といふものは、ほとんど私共は本社の財產の半ばを割いて贈呈してもなほこれを過分なりとは信じられない』

『本社の財產』の全部を贈呈すると云つたたらば、さらに一層『美談』であつたかも知れない。

が、私は、正直にこの三百萬圓を羨しい限りとは思ふが、あくまで三百萬圓の『合法性』を信じてゐるものである。少くとも、『非合法性』と見られる田中大將の三百萬圓よりは、はるかに合法的であると云はねばならぬ。

株式會社とは、株主によつて構成される營利團體である。株主の株式會社に對する關心は、もつぱら、この營利團體を經營・管理する重役の手腕、詮じつめれば自己所有株式拂込額に對する配當（現在のみならず將來に亘つての）の多少である。日本一高配當の鐘紡を、數十年間ひとりで切り廻した武藤氏慰勞のために、本社財產の半ばを割いても過分とは信ぜられぬと云つた某株主君の言も、あながち阿諛とは言されまい。けだし、鐘紡の如く大きな額の利潤を、自己の血と汗とを以て築きあげた延人員數十萬の鐘紡從業員の存在の如きは、株主諸君にとつて、考課狀面に記載された從業員に關する貸借對照表（後揭）以外に、考慮の餘地・注意の必要なきものである。問題の中心は、當然に、鐘紡經營者が、これら『蟲けら』をいかに働かせ——合理的に、效果的に、『爭議』の如き『不祥事』がなく平和的に——いかに金の遣り繰りをつけ、いかに有利に原料を買付けいかに製品を有利に賣抜けいかなる利潤を捻出し、いかなる配當をなし、いかに鐘紡株價を吊上げろかにたければならぬ。

從つて、鐘紡王國經營者にとつては、株主團の希望・意欲と正確に照應して、彼等の最大關心事は、株主を百パーセント滿足させるための、『蟲けら』の管理、指導、金融方法、原料購入方法、製品販賣方法、利潤增大、株價釣上、重役報酬增大、の以外にあり得ないわけである。

ここに株主團と經營者の相互依存關係がある。

鐘紡の武藤か、武藤の鐘紡かといふ對句の本質は、鐘紡經營者團（重役）が完全なる武藤獨裁下にあり、且つ武藤專制政治による鐘紡經營が株主團の期待以上に成功して『今日の大』をなし、株主團もまた武藤氏に永年一切の王國支配權を賦與してきたこと、換言すれば、經營者團と株主團の相互依存關係が、武藤山治氏個人に體化されてきたことにあるのである。

國民同志會首領としての武藤山治氏は、いかにひいきめにみても、

成功とは云はれないが、鐘紡王國支配者としての彼は、驚くべき努力の天才であつた。彼は、法律上、鐘紡會社重役團から互選された一箇の社長に過ぎなかつたが、武藤社長の下に重役會の一員たる光榮を有したいかなる重役といへども、その實、その光榮はあくまで名目的で、彼等はそれぞれ一箇の高級社員に過ぎなかつたのである。副社長から武藤氏に代つて社長に昇格した長尾良吉氏、淀川工場長から昨年七月重役に昇進し、さらに本年一月副社長に榮轉て鐘紡王國に一波紋を投じた津田信吾氏また常務山口八左右、橋爪捨三郎兩氏、取締役藤正純、名取和作、中村肅、多和田督太郎、城戸季吉の諸氏等いづれもそうそうたる『實業家』ではあるが、武藤氏から見れば單なる高級社員である。このうち王國の元老と自他共に許す長尾、山口、橋爪の三氏の如きも、昨年武藤氏の引退が新聞紙上に傳へられ、株主團が一齊に留任運動を開始した際、誰れ一人として直接武藤社長に面會して留任を勸告するどころか引退の實否さへ確かめ得るものはなかつたといふエピソードさへ傳はつてゐる。

武藤氏は、かくて、數十年間獨裁君主として鐘紡王國に臨み、右には株主團の無限の信用を委託され、左には群小重役を絶對的統制下に置き、他方、數萬の從業員に對しては、その獨特の家族主義と溫情主義とを以て最も文化的な搾取方法をつゞけ、鐘紡王國には一名の組合員も一箇の爭議もなきことを天下の資本家階級に證明して、彼等の羨望を一身に負ひ、功なり名遂げ、余生を國民政治教育に捧げるといふ名目で、『王國』から去つてしまつたのである。かゝるときに、突如、新社長の手によつて驚くべき四割減給の鐵槌が、從業員の頭上に見舞ひ、天下の鐘紡王國の正體が白日の下に暴露されたのである。

四　暴露された『王國』の正體

私は、本小篇において、鐘紡爭議を精細に分析・究明する余裕をもたぬ。しかしながら、今回の鐘紡爭議を契機として考察を進めない以上、到底僞瞞に充ちた鐘紡王國の本質を讀者諸君の前に明かにすることを得ぬ。

今回の『減給』が、資本家的觀點に立つものでない以上、何人もこれに反對なのは、自明の理である。多くの論者は、すでに、『減給』の不當なる理由をほとんどあますところなく明かにしてゐる。（資本家的觀點に立つものも往々にして鐘紡の遣り口を攻撃するが、これは、もとより『輿論』に媚るものか、あるひは鐘紡の一日先きの『英斷』による勞働者の蹶起により自らの賃銀引下計畫が一時的そごを來したためかのいづれかである。）例へば、本誌前號『鐘紡の減給問題』において山川均氏が正當に喝破されてゐるやうに、

一、『戰時手當』は賃銀以外の何ものでもない以上、『その名目が戰時手當であらうとも割増手當であらうとも、勞働者にとつては、これらの手當を加算したものによつて、初めて最低生活賃銀が出來上つてゐるのであつて、本給と名づける部分から控除せられると手當と名づけ

る部分から控除せられるとを問はず、均しく賃銀の減額であり、均しく生活標準の低下であり、均しく生活そのものの切り詰めなのである。』

二、『彼らは（紡績資本家）不景氣の深刻化と內地需要の減退、帝國主義的關税戰爭による海外市場の閉塞などから豫想せられる事業の不振と利潤とを、百三十萬の勞働者（纖維工業勞働者）の生命の緊縮によつて埋め合せようとする。云ふまでもなく株主には三割五分の配當を保證し、そして勞働に對する攻擊の殊勳者には、三百萬圓の慰勞金を呈上するために。』

三、『けれども纖維工業百三十萬の勞働者の賃銀が一般的に低下したならば、その影響は、すべての產業部門に波及する。……かように鐘紡の減給實行は全勞働者の賃銀に對する一齊攻擊の合圖と見ることもできる。』

かゝる重大なる意義を有する減給を實行した鐘紡王國は、まさに資本攻勢のチャンピオンである。昨年の官吏減俸案に率先反對した武藤氏は、社長を辭任することによつて『第三者』として鐘紡減俸の已むべからざる理由を、新聞に雜誌に宣傳する準備を整へた。彼は云ふ『假りに會社が來る七月の總會において減配するとせば、株主は昨年十二月二十五日より減配を受けるのであつて、從業員側は四月十日より減給されるのであるから、事實においては株主の方が先んじて配當を減らされることになるのである。

『私は現內閣成立以來、その十大政策の一たる多年一割五分も下つてゐる金の値をもとに引上げて解禁することは、產業界における建直しを非常に困難ならしむるから、無益のことを生ずるものと大反對をしたのは全くこの點にあるので、鐘紡の如き會社の從業員すら、たとへ一部でも騷ぐやうになつたのに見ても明かである。』（五月一日號『實業之日本』傍點は筆者）

英國流紳士の典型と稱される武藤山治氏さへ、惡德辯護士も三舍を避ける底の詭辯を弄して恬然たるものがあるではないか。

なぜに彼は、いさぎよく、多年世人を僞瞞してきた家族主義、溫情主義の假面をかなぐりすてて、正眞正銘の近代的資本家の一人であることを公然と名乘らないのか。

彼の家族主義、溫情主義の結晶と自稱自讚する諸種の福利施設とは、いかなるものであるか。昭和五年一月現在の勞課狀によれば、

使用人病傷老衰退職恩給資金	六、九四一千圓
職工幸福增進資金	九、三三五
職工救濟資金	二八六
職工衞生資金	一七七
從業員子弟教育貸費資金	六五三
教育貸費資金	四四三
職工休養院及療養所建設費預り金	六四
故朝吹氏記念職工療養特別基金	一〇五
故中上川氏記念獎勵資金	一六九

われ〳〵はこの表を一覽するとき、福利（？）施設資金が他會社に見られざる巨額に達してゐることをたしかに認める。しかし、これからの資金は、そも〳〵何人が創造したのであるか。武藤氏の『溫情』からでも『生産』されたとでもいふのか。いはんや、これらの諸資金は、いづれも『お預けの菓子』『畫かれたる餅』であるにおいておやである。三萬五千の從業員諸君は、この『畫かれたる餅』に當然の執着と未練を有すればこそ、今日まで武藤氏の家族主義論を本質的に知覺しながらも、一つの自衞組織さへもち得なかつたのである。――福利施設を有せざる事業會社には多くの從業員自身による組合、戰鬪的勞働組合さへをも有し得たにかゝはらず。

しかし、審判の日はついに來た。三萬五千人の從業員は、溫情主義、家族主義の何たるかを、自己の目で見、自己の耳で聞き、自己の肉體でハッキリ感覺した。『爭議』は、鐘紡王國の巧妙なる切り崩し策動（福利資金を以て職工の減收を補つてやるとか）恒例の反動團體の跳梁、ダラ幹の裏切的行爲、官憲の壓迫、從業員の爭議未經驗等々によつて、表面的には多くの場合失敗の已むなきに至つたが、武藤獨裁君主が數十年間確固たる地盤の上に築き上げたつもりの家族主義溫情の樓閣――その實砂上の樓閣であつた――は一夜にして崩壞した。鐘紡勞働者、いな全紡績勞働者、いないな全日本の勞働者は、金解禁―産業合理化による日本經濟再建を目的とする新なる資本攻勢に對して組織的分子は大同團結へ、未組織分子は組織化へと巨大なる一歩を踏みしめた。

鐘紡王國の創造者・主權者たりし武藤山治氏は、同時に鐘紡王國を崩壞せしむる選ばれたる人であつた。彼もまた悲しき姿のドンキホーテであつた。ここにも、われ〳〵は、美事なる、事物の辨證法的發展の一典型を發見する。

鐘紡王國は果していづこへ行かんとする？

行くべき道はたゞひとつあるのみ。内にあつては、家族主義、溫情主義の假面を自らかなぐり棄てて近代資本と勞働の關係に還元すること――階級鬪爭の激化――外にあつては、支那プロレタリアートとの對立激化、支那、印度を舞臺とする他帝國主義國家との對立尖鋭化があるのみである。（五・六記）

Onoto the Pen

オノトを語る

オノトを持つてビジネスの戰線に立てば筆力の敏滑に於て勝ち、文字の優美と尖端的新味に於て優る。渠等はオノトを重用して常勝のペンと云つてゐる。

× × × × ×

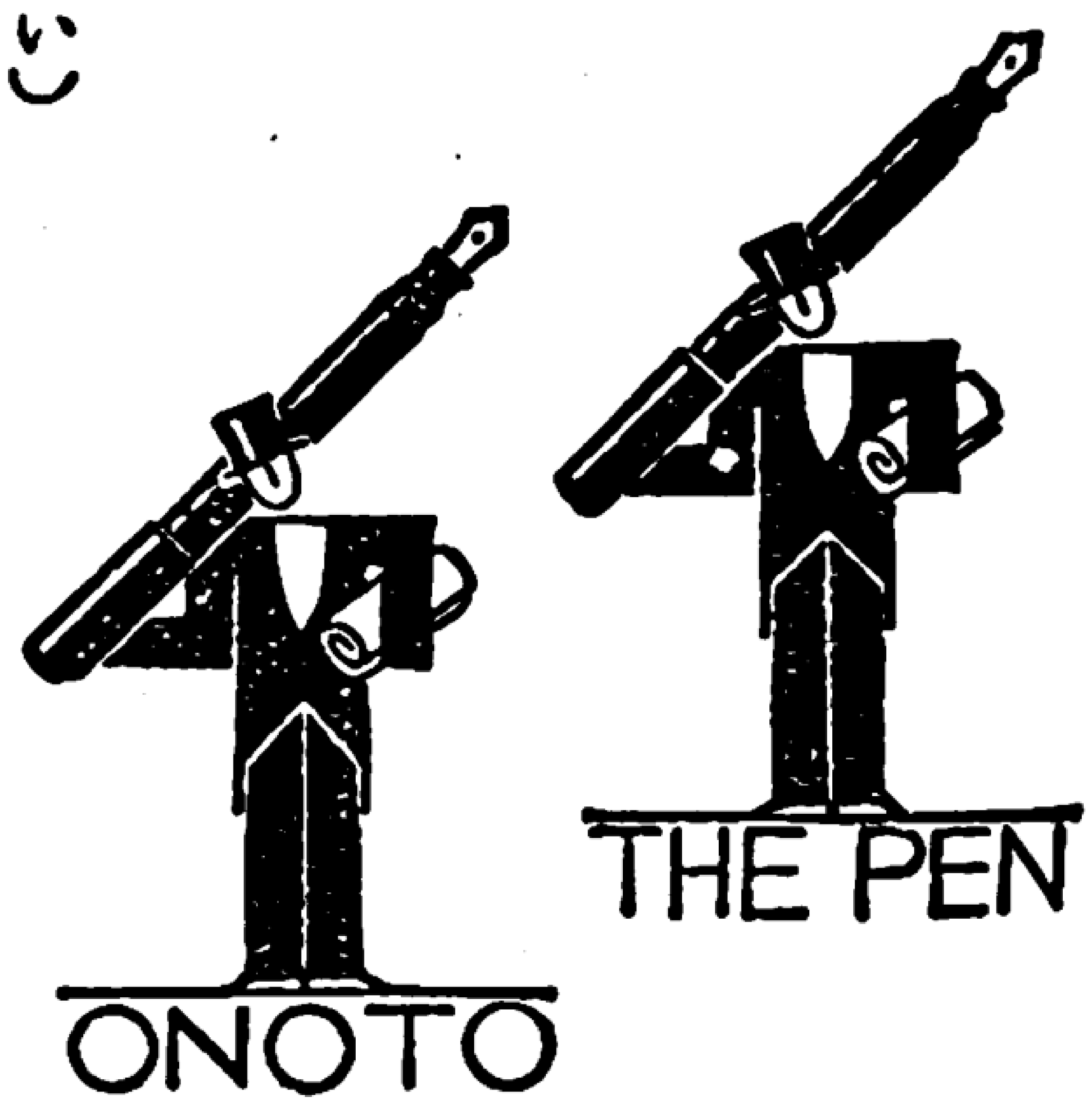
使へば使ふ程書きよくなる

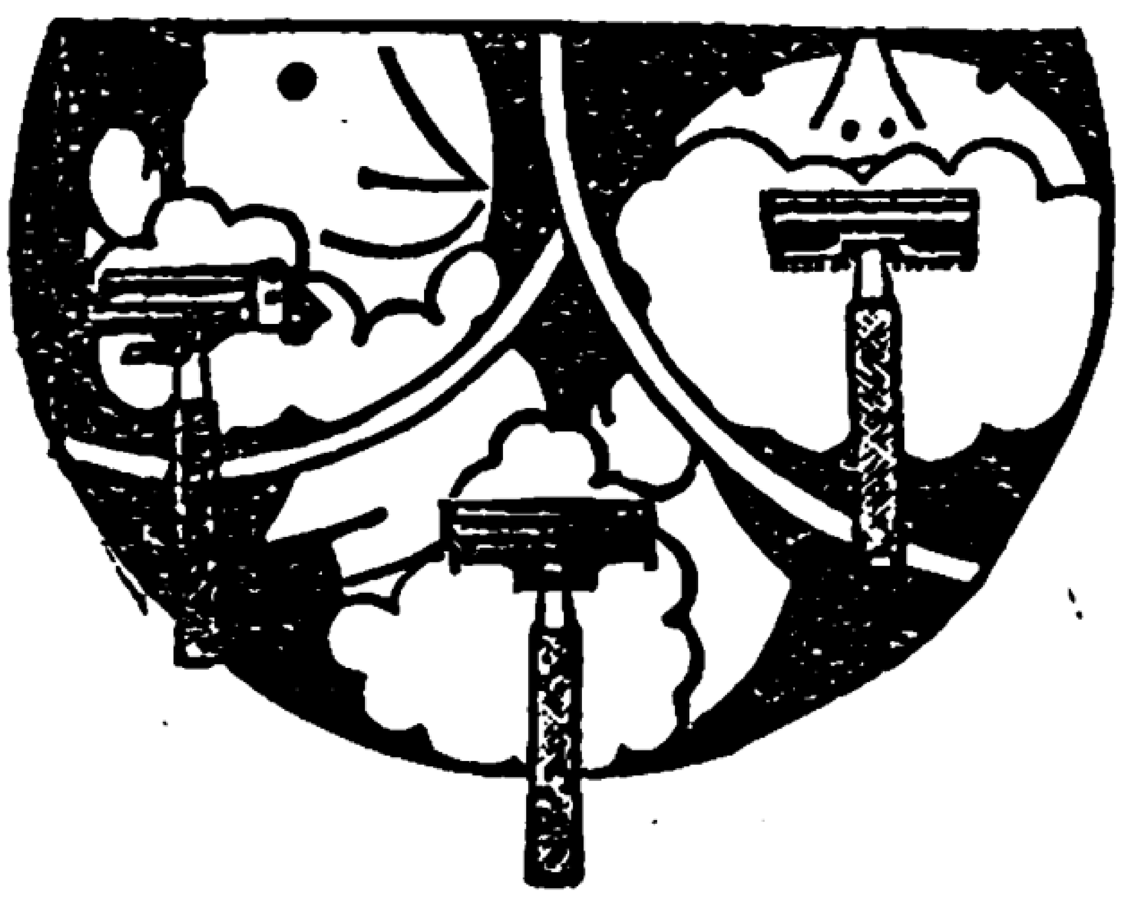
オノト萬年筆　七圓五十錢以上

アテナ萬年筆　三圓五十錢以上

（萬年筆にはアテナインキを御使用下さい）

送料各十八錢（カタログ進呈）





三人の所感

一人はバレーの研ぎの簡單な歡び。
一人はバレーの剃りの平易に驚き。
一人は仕上の鮮やか美しさに滿足した。
三人が三人共夫れ々々バレーの三大特長に百パーセントの感嘆！

× × × ×

剃刀で研器を使れ一枚の刄が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

B型　一三・五〇以上各種

C型　一・二〇　一・七〇　三・三〇　四・八〇

替刄利用ナイフ（刄一枚付）・八〇　送料各・一八

販賣所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等

取次所

（カタログ進呈）

¥1.20

"VALET"
Auto-Strop
Safety Razor

東京日本橋通

大阪　神戸　京都　名古屋

丸善株式會社

横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・芝三田・早稻田・丸ビル

新刊批評

改造社版『社會科學大辭典』

大森義太郎

一國の文化の發達の程度はその國における辭書の進步によつて測られるといふ。辭書がはたして文化の正確な測定者であるかどうかは疑はしいけれど、いはゆる文化の進んだ諸國ではいろいろな種類のよき辭書の刊行されてゐることは事實である。おそらくこれはその國の社會生活が複雜になり、多岐に涉り、ために一々について深く究めることは普通の人々にとつては全く困難になるところから來るであらう。そこで辭書によつて手つ取りばやく、簡單にそれらについて知識をもたらうとする生活の要求に出たものであらう。わが國の社會もまたその程度の複雜と多岐とを示してきたことは論じるまでもない。よき辭書の刊行は切實に要求されてゐる。

その辭書にも、もとより、多くの種類がある。が、なかでも社會科學の辭書が必要なのではなからうか。社會科學の對象たる、社會生活が最も複雜であるといふ意味においても、のみならず今日人々の關心の中心であるといふ意味においても。

しかも遂に今まで我々は社會科學に關するよい辭書を手にすることができなかつた。それゆゑ、こゝに『社會科學大辭典』を與へられたとき、我々のこれに對する期待は大きかつた。

私は、まづ、面白い項目の數多くに興味を惹かれた。『西園寺公望』と共に『堺利彦』がある。『安部磯雄』があり、『大杉榮』がある。古く『赤旗事件』、『大逆事件』があるかと思へば、新しい『福本イズム』がある。そして例へば『大逆事件』を讀むと（頁六八五）、それはこの事件について誰れより正確に詳しく知つてゐられる堺利彦氏が親しく筆を執つてをられる。もちろん辭書といふ性質上敍述は極く簡單であるが、しかしこの大事件の全貌をのこりなく我々に示してくれる。のみならず堺氏の筆のゆゑにこの簡略な記述は讀物としても手頃なものである。こゝに見られたやうに、この辭書がわが國の社會的の重要な人名また事項を豐富に集め、大體において妥當な筆者を得てゐることは、第一の特色である。我々は當然に日本のことについて最も多く知る必要を感じるのであるが、これについて正確な簡單な知識を得ることは非常に困難である。ある意味では外國の人名や事項に關する場合よりも困難である。されぱといつて、もちろん外國の辭書等に依ることもできない。この點で『社會科學大辭典』はこれから先き

どのくらゐ多くの便益を我々に與へてくれるかわからないであらう。

これは別としても『社會科學大辭典』には、これを同種の外國の諸辭典と比較しても、優れた點が多々あるやうに見える。支那に關する豐富なその內容である。支那は我々ばかりでなく、全世界の注意の的である。が、およそ支那に關する簡明な知識を求めるくらゐ困難なことはない。それをこの辭書は、『支那革命史』、『支那思潮』、『支那の財產制度』、『支那の工業』、『支那の商業』、『支那の農業』、『支那における資本主義の發達』等の一般的なものから、『黃埔軍官學校』、『中山大學』、『五卅事件』等の細かいもの、さらには『蔣介石』、『孫文』、『胡漢民』、『譚平山』等の人名まで、實に多くの項目を載せてゐる。そして例へば最も多くの執筆をしてゐる鈴江言一氏の記述など正確であり、要を得て、おそらく他に比肩するものがないであらうと思ふ。(序に云へば、支那のせめて人名の場合でも支那讀みを添へて置いてもらひたかつた。)

しかし、支那とか朝鮮とか、この辭典が當然に優越をもつべき筈の、東洋に關することばかりではない。その他においてもこの辭典は外國の類似の辭書に勝つてゐる。サウエート・ロシアに關してもさうである。煩を避けて項目の例を擧げないが、サウエート・ロシア自身において刊行されてゐる辭書を除けば、まづ最も豐富でありまた正確でもあるものとして推すことができる。これと關聯するが、コミユニズムに關しては、外國の一般に刊行されてゐる辭書――辭書ばかりでない――ではほとんど取り扱はれないか、扱はれても極めて僅かである。しかるにこの『社會科學大辭典』はこれに充分に紙數を與へて公平に扱つてゐる。假りにコミユニズムのいゝ惡いは別としても、それは否定しえざる客觀的な存在である。人々はこれに對していろいろな理由から知識を求めるであらうが、その際この辭典は充分用に堪へると思ふ。

また無產者運動に關するものを擧げることができる。外國の辭書では、例へばコーンラドの辭書にしても、この方面は貧弱である。しかし、社會科學の辭典とすれば、今日社會現象の最も決定的なものたる階級鬪爭、無產者運動の現象の種々なる說明を與へることは當然である。その意味で私はこれに多くの項目を與へたこの辭典の編輯法を正しいと思ふ。

しかし以上のすべての點よりも强調さるべきはこの辭典が新しいといふことである。近刊のセリグマンの社會科學辭典と比較する機はまだ得ないが、そしてサウエートの諸辭書を見てゐないが、その他のいかなる辭書よりもこれは新しい。そこでまた最新の事實、現代人に關する項目を充分多く含んでゐる。『ターナーモンド產業會議』、『太平洋諸會議』、等々それから『マクドナルド』、『ヒルフアデイング』、『スターリン』、『ヴワルガ』等々といふやうに。

さて、私はもう少し項目の內容に入つて

見よう。今私はマルクスの『剩餘價値學說史』を飜譯してゐるところから、地代の說明がどうあるかと思つて探して見た。

七一六頁に『地代及び地代學說』がある。署名筆者は東大の舞出長五郎教授である。說明は一頁半、五段にわたつてゐる。說明の內容を檢しよう。まづ地代の定義的な說明がある。次に地代論の簡單な歷史があつてから、リカアドウの差額地代論の構造が詳しく述べられる。リカアドウの地代論が土地の肥沃度を主として問題にしたに對して土地の位置を問題にしたものとしてフオン・テューネンの名が擧げられる。進んでケアリ、バステイヤの反對論が紹介される。さらに、地代の觀念を廣く適用するもの、從つて地代を必ずしも土地にのみ限らざるものと主張するヘルマン、シエフレ、マンゴルト、マアシヤルの理論が說明される。こゝで記述は差額地代論から絕對地代論に移つて、まづロドベルトウスが說かれる。そのロドベルトウスの批評から、最後にマルクスの地代論が、辭書の記述の程度としては實に詳しく紹介されて終る。しかも、これらの說明は正確である。

いま比較のために、社會科學一般のではなくて、經濟學專門の辭書たるパルグレイヴの『經濟學辭書』をとらう。その第三卷二八二頁以下に『地代』に關するいくつかの項目が見出される。これを讀むと、まづ地代の基礎、地代が生産費のうちに入らぬといふことの說明がある。これは全くリカアドウの理論の紹介である。これから廣い意味の地代（レント）といふ言葉によつて示される種々なるものゝ說明があつて、二八七頁以下に狹い意味の地代（土地から生じる）の解說がある。そして、これは、地代を一の『獨占價格』と考へるアダム・スミスの地代論から始まつてゐる。ついで地租の問題が觸れられる。次に、アダム・スミスの地代論がその後繼者によつていかなる點で發展また是正されたかゞ明かにされる。そしてこゝでは地代論の歷史が簡單に明かにされ、ふたゝびリカアドウの地代論が觸れられる。併せて、この理論に對する反對論等がかなり詳しく述べられて敍述は終る。

この說明は例へばリカアドウの地代論の敍述においても『社會科學大辭典』のそれの簡明なるに及ばない。夫は別としても右の敍述の構成から判斷されても讀者は『社會科學大辭典』の說明が專門の『經濟學辭書』のそれに遙かに勝ることを了解されるであらう。殊に後者は絕對地代に全然觸れないといふ、マルクスの理論を全く紹介しないといふ根本的な缺陷をもつてゐる。おそらく『經濟學辭書』の筆者はマルクスの理論をもつて顧みるに價しないと考へたのであらう。しかし、その學問上の立場からマルクスの理論を認めないとしても、辭書といふ性質から公平に載せるべきである。少くもその方が一般讀者にとつて便利である。いはんやマルクスの理論が全く正しいにおいておや。

もちろんこれは一斑である。しかし、『社會科學大辭典』の內容の全斑が非常にすぐれたものであることを察せしめるには足りるであらう。私は『社會科學大辭典』が我々の期待に背かない、よいものであることをこゝで讀者に告げることができる。

いふまでもなく、これは大規模の社會科學辭書として最初の試みであるから、詳しく見れば多くの缺點をもつであらう。私といへども項目の選び方において、各項目に當てられた紙數の、その項目の重要さに相應する、割り振りにおいて、さらには項目の個々の點において非難すべきものを見出さぬわけではない。しかしかゝるものにおいて完全を期することは不可能である。私はそれらの缺點をあげることよりも、ともあれよい辭書を我々がもち得たことを喜びとする。

たゞ最後に、もう少し廉くしてもらひたいものである。辭書は、いろいろな効用と共に、啓蒙的な機能をもつものである。サウエート・ロシアで百科辭書、文藝辭書、經濟學辭書が續々として刊行されてゐることは、ひとつにはさういふところから來るであらう。これとは性質を異にするとしても、この『社會科學大辭典』も、廉價版を出すなりして、ひろく一般の人々の手に渡るやうにされることを、私は切望してやまない。(東京芝愛宕下町・改造社發行・特價十二圓)

高橋龜吉氏著

日本財閥の解剖

小島精一

この書物は近來稀有な傑作だ。

これは勿論なみ〳〵ならぬ勞作であるばかりでなく、實に美事な傑作だと思ふ。

たゞ勞作といふだけならば、此程度のものも、日本の學界でさへないことはない。(だが、なんと、力のこもつた駄作乃至愚作の多いことよ!)

處が、題目の選擇において、又その資料の蒐集技術において、更にその整理振りにおいて、高橋氏の此の書物程美事な効果をおさめてゐるものは、少くも日本の經濟學界では稀有だらう。

私自身かうした方面の研究には、かなり興味を持つてゐるから、それだけ、此の書物の美事な成功には頭がさがらざるをえないのだ。

もし、これが英語にでも翻譯されたとしたならばきつと世界的の評價をかち得ることができると思ふ。

實際、こんな貴重な知識を、これ程明快に、これ程、詳密に、しかも、これ程正確に提供してくれる書物は世界的にも決して多くはないと思ふ。

これも私自身外國の金融資本網を調べてみてかうした資料の實に貧弱なことをつく〴〵痛感してゐる際なので、一層、この書のありがたさがはつきり分るのだ。

ともかく、こんな有益な書物は世界のど

こをさがしたつて、さらに、めつかるものぢやない。

處で、肝腎の內容だが、それは題名の通り、三井、三菱、住友、安田を始めとして、わが大財閥の一々に就て、くも手の支配網を解剖し、その資本的な大きさ、その擴がり、その闘爭力の強さ、弱さ、その統制の仕組み、その中心的指導人物等々‥‥を說明したものだ。

これによつて始めて、わが産業界の資本的連鎖の實質の姿を、はつきりと理解することができる。

吾々は、これ迄にも、三井とか三菱とかが、いかに偉大な全面的支配網を持つかを、おぼろげには推察してゐたのだが、この書物によつて、始めて、そのはつきりした知識に到達できたのだ。

そして、この明確な知識こそ、今後の産業研究者の誰れにとつても、なによりも先づ必要なものだらう。

最後に、この書の主な部分は、最近まで中央公論に連載されてゐたものだといふことを附記しておかう。

それで大抵の人には、見當がつくだらうと思ふが、たゞ、本書に採錄の際、その少からぬ部分が修正され、增補され、又數十頁に亘る綜觀的な新しい一章が、書き加へられてゐる。

著者のエネルギッシュな努力には敬服せざるをえない。(東京市麹町區丸の內・丸ビル・中央公論社發行・定價貳圓五十錢)

新刊紹介

◇**藝術社會學** フリーチエ著・昇曙夢譯・ロシアの文學史家、批評家として、殊にマルクス主義文藝の理論家として世界的に名ある著者が晚年の大著の譯述で、プロレタリア藝術論の論戰潑剌たる現下の日本新興讀書子に必讀を薦める。上質紙を用ゐて插圖多數入。(東京牛込矢來町新潮社・價一圓五十錢)

◇**質屋及典當舖之研究** 藤戶計太著。(京城府南山町一ノ一三大東學會・特價二圓)

◇**金が書く** アプトン・シンクレーア著・富田正文譯・アメリカ現代の資本主義文學と其文筆市場の內幕を暴露した著者の體驗的小說。(東京牛込矢來町新潮社・價一圓四十錢)

◇**變な笑ひ顏で** 丸木砂土著・本誌に出た「女は匂ひなり」「三越藝術」「完全なる夫婦」等モダンでエロテイックで多彩な趣味と多方面的硏究を盛つた三十數篇の讀物を集めた中央公論社の中間物選集の一。(東京麴町丸ノ內丸ビル中央公論社・定價八十錢)

◇**古今集選釋** 佐々木信綱著・さきに萬葉集選釋及び新古今集選釋の兩著に好評高かつたが今本著出でて三大歌集の選釋が成つた譯で其の道の人に喜び迎へられるであらう。(東京神田錦町一明治學院・定價二圓)

◇**日本現代詩選** 明治以來の殆んど全詩人の作を選收した現代詩講座の特裝本。(東京神田今川小路一の四金星堂・價一圓七十錢)

◇**風の如く** 澀田勝著詩集。(東京神田錦町一ノ一八瀨尾書店・定價七十錢)

◇**豌豆になつた女** 杉浦伊作詩集。(埼玉縣浦和岸町二九八四銀沙社・價普通裝九十錢)

◇**十一人第一歌集** 「詩歌」同人十一人の歌集。(東京市外大久保二八白日社・價五十錢)

◇**赤い貧窟と血の旗** 井東憲著・スパイの首以下六篇の小說集。(東京京橋區築地三丁二築地ビル・世界の動き社・定價一圓)

◆現代社會を把握する唯一の武器!!

社會科學大辭典

駸々乎としてやむなき社會の進化は、日本に於ても社會科學の勃興・擴大・發展を必然ならしめた。社會科學は、從來個々の分野に於いて相互の間に何等の聯關なく發達し來りしすべての諸科學を一個の體系のもとに統一することを要求する。社會科學の名のもとに統一された諸科學は、かくして始めて生ける社會に適應せる新らしき學問となり得る。

かゝる廣汎なる範圍を包含する社會科學の全面に亙つて之を理解することの必要は、現代の日本人に課せられたる一の重大なる義務である。而かも現在の日本は、かゝる理解への指針たるべき一の社會科學辭典すらをも有しない。これ日本學界に於ける一の大なる恥辱であつた。

社會思想社同人及び改造社は、長年の間、かゝる社會科學辭典の編輯及び出版を企圖してゐた

が、約三箇年の不休の努力によつて、**我が社會科學界各方面の學者・實際家多數の熱心なる協力**をも得、茲に日本に於ける最初の社會科學大辭典の完成を成就し、廣く江湖に問ふべきに到つた。

本辭典の**包含する項目は二千有五百**、社會問題・社會思想及び社會運動を中心として經濟學、社會學、政治學、法律學、哲學、史學、教育學、文學、自然科學、內外社會科學者人名、內外社會運動家人名、內外政治家人名等を網羅して、一として餘す所なく、宛然社會科學の大百科辭典を築成して居る。而して解説は平易にして簡潔、知識は正確にして高遠、検索は最も簡便にして、價格は低廉であるから、「辭書」としての要件は十分に充たされてゐると信ずる。我等は、本辭典を以て、日本に於ける最良最善の社會科學辭典たるを誇り得、而かも此の誇を永く持續し得ると竊かに自信し、日本の學界及び社會運動の發展に貢献すること最も多く且つ深きを期待するものである。

特色

□社會諸科學に關する知識は、その大小に拘らず、**一切の項目を悉く網羅す**。――されば、本辭典一卷を備ふれば、實に凡百の社會諸科學の書に匹敵す。

□記述の方法は、**平明にして懇切**であるから、頗る理解し易く、その上、記事の取扱は、精確嚴正であるから、何人も安んじて信頼し得。

□各項目には、一々、**英・獨・佛等の原語を添へ**、必要に應じて希臘、羅甸の原語をも引用して、淵源を剔抉し、底理を剖析す。

□各項目毎に內外の**參考書目を擧示し**、讀者の便益に備ふ。

□各項目は互に**連絡**を圖り、**引照**を示してあるから、如何なる事項も掌を翫す如く、容易に、正確に、廣く、深くその知識を收得し得。

□各項目は、それ〴〵**專門學者**又は**實際熟掌者**之に當り、且つ**責任**を明かにして署名す。

□編輯は**斬新**にして**學術的**。

□校正は**嚴正無比**。

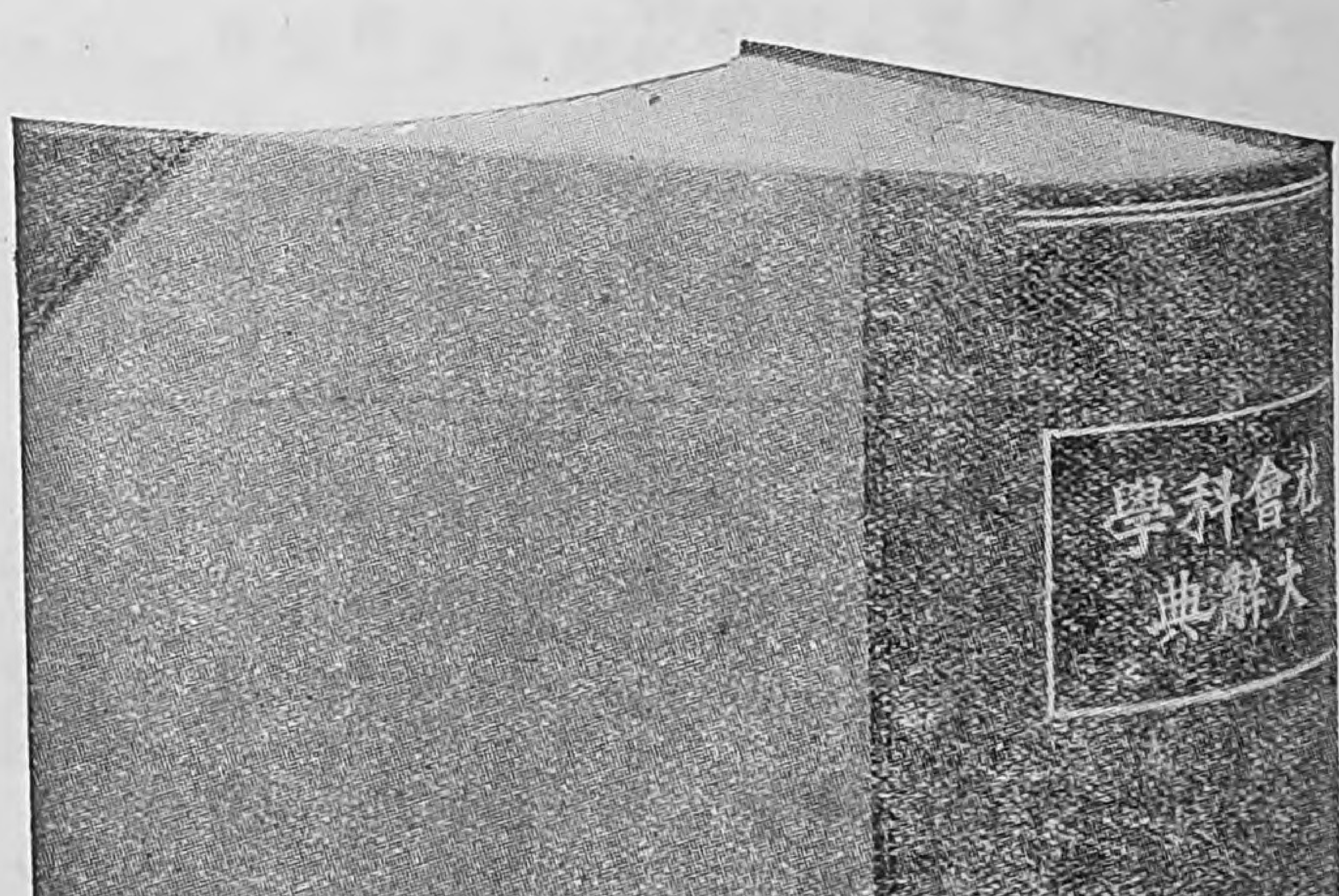
□辭典の生命たる『**索引**』は、親切周到を極め、實際使用上の便益を圖る。

□製本及び用紙は堅牢・强靱にして、絕對に破損の憂なく、**印刷は頗る鮮明。『辭典』界切つての良書籍。**

現代生活の總索引を大衆の手へ！

特價提供＝絶好の機會

(裝幀見本)



全一册

◆定價拾五圓

◆特價拾貳圓

實物
四六倍判總一千四百二十餘頁
縱八寸八分、橫六寸三分
背革。角革。金文字入函入

社會科學大辭典執筆擔當者（ＡＢＣ順）

九州帝國大學助教授　淺野正一氏
社會民衆黨々首　安部磯雄氏
日本大衆黨々首　麻生久氏
史料編纂官　藤井甚太郎氏
福岡誠一氏
文部省囑託　權田保之助氏
大原研究所員　後藤貞治氏
後藤信夫氏
東京帝國大學教授　法學博士　穗積重遠氏
長谷川萬次郎氏
東北帝國大學助教授　服部英太郎氏
大阪高等學校教授　本田喜代治氏
平井鎮夫氏
九州帝國大學講師　波多野鼎氏
同志社大學教授　林要氏
榛村專一氏
早坂四郎氏
法政大學講師　細野三千雄氏
理學博士　石原純氏
東北帝國大學教授　石田文治郎氏
市村今朝藏氏
史料編纂官　井野邊茂雄氏
日本農民組合中央委員　稻村隆一氏

九州帝國大學教授　今中次麿氏
石濱知行氏
滿鐵南京駐在員　伊藤武雄氏
東京帝國大學助教授　城戸幡太郎氏
東北帝國大學教授　栗生武夫氏
東京帝國大學教授　神川彦松氏
小宮義孝氏
法政大學教授　小島精一氏
東京帝國大學教授　河合榮治郎氏
中央大學教授　川原次吉郎氏
內務書記官　川西實三氏
內務書記官　木村清司氏
法政大學教授　木村龜二氏
法政大學教授經濟學博士　木村增太郎氏
九州帝國大學教授　菊池勇夫氏
中央大學講師　風早八十二氏
鬼頭仁三郎氏
內務書記官　熊谷憲一氏
大原研究所員　櫛田民藏氏
立教大學教授　河西太一郎氏
日本大衆黨書記長　河野密氏
東北帝國大學教授　河村又介氏
嘉治隆一氏

法政大學教授　岸本誠一郎氏
勞農黨中央委員　小岩井淨氏
京都帝國大學教授　森口繁治氏
法學博士　米田實氏
東京帝國大學教授　舞出長五郎氏
大原研究所員　森戸辰男氏
東京帝國大學教授　法學博士　美濃部達吉氏
東京帝國大學助教授　宮澤俊義氏
法政大學教授　三木清氏
東京帝國大學講師　松平齊光氏
關西學院教授　松澤兼人氏
松本重治氏
東京帝國大學教授　法學博士　牧野英一氏
村島歸之氏
丸岡重堯氏
京城帝國大學助教授　三宅鹿之助氏
早稻田大學講師　茗荷房吉氏
三輪壽壯氏
益田豐彦氏
支那問題研究所長　長野朗氏
法政大學教授　錦織理一郎氏
東北帝國大學教授　中川善之助氏
日本大學教授　楢崎煇氏

東京帝國大學助教授　野間海造氏
新居格氏
東京帝國大學助教授　岡義武氏
東京帝國大學講師　岡部彌太郎氏
農學博士　小野武夫氏
東北帝國大學教授　小野谷操三氏
東京帝國大學教授　小野清一郎氏
東京帝國大學教授　大内兵衛氏
大森義太郎氏
九州帝國大學教授　大澤章氏
東京帝國大學教授　蠟山政道氏
大原研究所員　笠信太郎氏
日本農民組合中央委員長　杉山元治郎氏
東京帝國大學助教授　杉村章三郎氏
三枝博音氏
鈴江言一氏
東北帝國大學教授　鈴木義男氏
東京帝國大學教授　法學博士　末弘嚴太郎氏
下出隼吉氏
東京商科大學教授　孫田秀春氏
住谷穆氏
住谷悅治氏
堺利彦氏
向坂逸郎氏
同志社大學教授　宗道太氏
澤田清兵衛氏

東北帝國大學助教授　新明正道氏
莊原達氏
佐々弘雄氏
佐藤六郎氏
關西學院教授　阪本勝氏
中央大學教授　瀧川政次郎氏
醫學博士　暉峻義等氏
土田杏村氏
東京帝國大學教授　高柳賢三氏
東北帝國大學教授　高柳眞三氏
東京帝國大學教授　高木八尺氏
高橋龜吉氏
法政大學教授　高橋一太郎氏
大原研究所長　法學博士　高野岩三郎氏
田中九一氏
理化學研究所員　田口泖三郎氏
田所輝明氏
法政大學教授　平貞藏氏
東井金平氏
法政大學教授　谷川徹三氏
法政大學教授　友岡久雄氏
東京帝國大學教授　法學博士　上野道輔氏
日本大衆黨委員　上條愛一氏
東京帝國大學教授　我妻榮氏
東京帝國大學教授　矢内原忠雄氏
東京帝國大學助教授　矢部貞治氏

山川均氏
山川菊榮氏
法政大學教授　山村喬氏
山口正吾氏
山口辰六郎氏
中央大學講師　山中篤太郎氏
中央大學教授　八木澤善次氏
東京帝國大學講師　法學博士　吉野作造氏
東京帝國大學助教授　横田喜三郎氏
横川次郎氏

編輯　社會思想社

〔編輯委員〕（ABC順）

後藤信夫
九州帝國大學講師　波多野鼎
同志社大學教授　林要
石濱知行
嘉治隆一
東北帝國大學教授　河村又介
故　丸岡重堯
東京帝國大學教授　蠟山政道
佐々弘雄
莊原達
法政大學教授　平貞藏

社會科學大辭典項目の一例

キ

ギールケ　キエンタール會議　歸化　機械
議會　機械打毀　機會均等主義　機械工業
議會主義　機械論　企業　饑饉　技術　義
人同盟　季節勞働　ギゾー　貴族政治　北畠
親房　木戸孝允　キッド　歸納法　規範　機
密費　救世軍　キューバ　救貧制度　救貧法
窮乏説　教育統計　協業　恐慌及び恐慌學説
共濟組合　共産インタナショナル　共産主
義　共産主義同盟　共産黨事件　共産黨宣言
行政及び行政學　行政執行法　强制勞役場
競爭　京大學生事件　協調會　京都　協同
組合運動　共同社會　共同戰線　曉民會　强
力説　共和國　ギョオーム　漁業法　極限
極東共和國　切支丹　ギリシヤ　キリスト教
教義史　基督教史　基督教社會主義　キリス
ト教勞働組合インタナショナル・ギルド　ギ
ルド社會主義　金及び銀　緊急勅令　金玉均
キング(W)　キング(G)　キングスレイ
金權政治　銀行　禁酒運動　近世政治學説
近世政治史　金屬學説　近東問題　金融　金
融資本　金輸出解禁

コ

講　行爲の宣傳　公營　黄禍　公課　航海
條例　考課狀　交換　鑛業　工業　工業金融
公共組合　工業史　工業政策　公共團體
工業動員　鑛業法　後見　合股　黄興　考古
學　廣告　公債　耕作權　鄕士　洪秀全　工
場委員會　工場衞生　工場手工業　工場制度
工場占領　工場法　黄色インタナショナル
黄色組合　公序良俗　工人會(工會)　降神
術　興信所　紅槍會　講壇社會主義　耕地整
理　向忠發　交通史　交通政策　行動心理學
幸德傳次郎　鴻池　購買組合　購買力　購
買力平價説　鑛夫勞役扶助規則　神戸　衡平
運動　衡平法　合法的運動(非合法的運動)
黄埔軍官學校　合目的性　合理性　康有爲
高利　鴻臚館　ゴーク綱領　コーヘン　コー
ル　コール(G、D、H)　ゴールキイ　胡漢民
小切手　國際裁判　國際行政　國際政治
國際貸借　國際聯盟　國際勞働機關　國際勞
働者同勞働組合同盟　國際勞働者救援會　國
際聯盟　國際勞働立法　黒色組合インタナシ
ヨナル　黒人同盟　國勢調査　國防問題　國
民革命運動史　國民經濟　國民主義運動　穀
物　穀物條例　國有財産　國立銀行　吳敬恒
小作制度　小作調停法　小作立法　小作料
誤差の法則　五卅事件　五四運動　孤兒手
當　個人主義　古神道　戸數割　ゴスプラン
ゴスリング　個性　悟性　五大銀行　古代
經濟史　古代政治學説　古代政治史　古代哲
學　古代法制　ゴダン　國家學説　國家社會
主義　國家主義　國家の進化　國家聯合　國
庫債券　コッシウスコ　コッスート　ゴッセ
ンの法則　ゴッドヰン　固定資本及び流動資
本　五人組　コブデン　コベット　コペルニ
クス　込米　護民官　コミンテルン　ゴム
小麥　米　米騒動　米相場　雇傭契約　コラ
ン　ゴルテル　コルベール　コローヌス　コ
ロレンコ　コロンタイ　コロンブス　婚姻
コンシデラン　コンジヤック　コンツエルン
コント　コンドルセー　ゴンパース　コン
ペー〃・モーレル　コンモンズ　コンモン・
ロー　コンラード

シ

示威運動　シー・ジー・ティー　シー・ジー・

セ

ハ

ロ

名なる此數の系統に隷屬するまでには至らない。新聞の商品化については前揭（三）の條件に責任がある。八十年前ルーター通信社が初めて電報局と電信とを利用して通信事業（「通信」項參照）に於て成功を收めたやうに、今日の新聞紙も、機械的方法による通信網の利用をその獨占の主なる條件とする。それが大資本によつてのみ可能のことだからである。新聞社の組織は、初めは家內工業的で、從つて新聞紙の貨質もそれ〴〵手工品的特性をもつたものであつたが、今日は機械工業化に伴つて、新聞紙も機械製品に必然の共通的性質をもつに至つた。新聞社の組織も大體共通であるが、「大阪朝日」をその一例として擧げれば、總務局（文書課、計算部、出版部、航空部、社會事業團）、編輯局（記事審査部、整理部、聯絡部、校閱部、通信部、外報部、支那部、經濟部、社會部、調査部、運動部）、營業局印刷局。（長谷川萬次郎）

新聞紙法 新聞紙定期刊行物又は其臨時附屬的刊行物に適用せらるる法律である。現行新聞紙法は本法を適用する新聞紙の範圍を「一定ノ題號ヲ用ヒ時期ヲ定メ又ハ六箇月以內ノ期間ニ於テ時期ヲ定メズシテ發行スル著作物及定期以外ニ本著作ト同一題號ヲ用ヒテ臨時發行スル著作物」と定義して居る。題號を用ひて定期的に刊行さるるもののすべてに適用されるわけであるが、中につき時事に關する事項を掲載するものと然らざるものとを分ち前者にありては保證金を納めしめ、司法處分としての命令又は刑事訴訟費用にあてることが出來ることになつて居る。新聞紙法は發行人編輯人印刷人を届出でしめ、責任を負はしめ、本法の此等條項に違反したるときは夫々發行人又は編輯人、或は印刷人をも加へて處罰することとして居る。新聞紙法は掲載事項の範圍に付正誤辯駁の道を開き、掲載事項を制限して、（一）公判に附する以前に於て豫審の內容其他檢事の差止めたる被告事件に關する事項、傍聽禁止の訴訟の辯論、（二）官公署又は法令を以て組織したる議會に於て公にせざる文書又は公開せざる會議の議事、請願書又は訴願書にして公にせられざるもの等を許可を受けずして掲載すること、及（三）犯罪の煽動曲庇、犯罪人刑事被告人の賞恤、救護又は刑事被告人の陷害にわたる事項、（四）安寧秩序を紊し又は風俗を害する事項、（五）陸海軍大臣外務大臣が軍事外交に關する事項に付制限又は禁止したる事項（六）皇室の尊嚴を冒瀆し、政體を變改し朝憲を紊亂せむとする事項、而して之に違反する者は夫々罰金又は禁錮の刑を以て制裁する。又內務大臣が安寧秩序紊亂又は風俗壞亂の事項を掲載する新聞紙の發賣頒布禁止を命令し得る權限及差押命令の權限は解釋上の疑義多き前記の禁止處罰條項と共に不當に言論の自由を壓迫阻礙するものとして非難が高い。保證金制度亦然り。抑も新聞紙法は明治二年の出版條例に端を發し明治六年の新聞紙條目を經て同八年の新聞紙條例により稍や現行法に近きものとなり、明治十六年の條例は取締を更に嚴にし內務卿の認定により發行禁止又は停止をなし、記載事項の犯罪につき、持主、社主、編輯人及印刷者譯者を等しく共犯を以て論じ言論壓迫の具に供されたが明治二十年の條例、三十年の改正を經て明治四十二年現行法の制定を見たのである。此間其改正の必要が屢說さるるに拘らず、猶未だその實現を見ない。現行法が憲法制定議會開會前の言論抑壓時代の面影を多分に殘して居ることは一々指摘する迄もない。（三輪壽壯）

シンボル (Symbol. Symbole) 象徵と譯す。ギリシア語の σύμβολον から出てゐる。これは壞れた一つの物の半分づつを合せてもとの形を再認するための標識の謂ひであつたが、後には標札、印章、徽章、番號等一般に標識の意味に用ゐられた。現今では一物が他物に對比的に關聯する時前者を後者のシンボルであるといふ風に使用してゐるやうである。これにも二つの場合があつて、具體的な原物を極端に變形したところの他の具體的な何物かを以て前者のシンボルとしたり（例へば花などを國家や紋章にする場合）、抽象的な、知覺し得ざる事物を具體的なものに象徵化したり（例へば言語を以て觀念を代表せしめる場合）する。從つて現實に對する非現實の意味でシンボルが用ゐられることもある。位牌は死者のシンボルである。また非現實に對する現實の意味でシンボルが用ゐられることもある。試に畫いた正方形や立方體は既に幾何學上のそれではないが假りにさうであると考へるのである。この場合前者は後者のシンボルである。そこで人の物の考へ方などに就ても、その人が具體的の心像や類比を多く用ゐる時、さういふ思惟樣式もシンボリック（象徵的）であると言ふ。これは抽象的概念を主として用ゐるところの論理的思惟に對する名である。なほこのシンボルなる語はカトリック教理史上に特別の意味と重要性とを以つて表はれて來るのであるが、その方の特殊な意味に就いてはここでは說く餘白がない。（本田喜代治）

人民投票 (Referendum) レフェレンダムは本來「報告せらるべきこと」の意味から出で、代表議會を經ずに人民をして直接に政務を決定せしめる制度のことをかう呼ぶやうになつた。Plebiscite, Plebiszit, plebiscito も殆ど同樣の意味に用ゐられるが、これは元、ローマのプレブ卽ち平民の會議で議決せられた法律のことで、フランスでは政體を變革するとき人民の一般投票に附して之れを決し、やはり之れを plebiscite と稱したために、學者の中には、レフェレンダムとプレビスシットを區別し、前者は普通に認められた正常の場合の投票、後者は非常の政變の場合のものであると定義するものもある。人民の直接參政は古代には寧ろ一般に行はれてゐたことであつた。ギリシア、ローマは勿論、スラヴ民族にも南アフリカにもその制度があつた。殊にゲルマン民族では最も既に行はれてゐた。スウイスの州には今尙全州の成年男子が一ケ所に集合して政務を決してゐるものがある。而して中世以來大きな民族國家の

保安總司令として「討赤」の軍を進め天津を回復し、吳佩孚と聯合して、四月北京より國民軍を追ひ、秋北京に入つた。一九二七年、國民革命軍長江に出で直隷軍閥完全に共地盤を失ふに及んで大元帥となり、北方全部に君臨した。然し此の歳の夏、漢口政府の北伐軍と戰つて河南に大敗して以來、馮玉祥、閻錫山の壓迫日に加はり、形勢甚だ險悪化しつつあつた所へ、津浦線に沿ふて北上する國民革命軍が濟南を經て天津に迫り始めた結果、一九二八年五月軍隊の關外退出を開始し、彼れは六月三日奉天に向つた。だが翌日將に城内に入らんとする時列車内に裝置された爆彈の爲め重傷を負ひ廿一日死亡、歳五十五。彼れは封建軍閥の最後の歴史を飾つた戰國大名の一人であつて、一生の過程を歴するにその型通りに進めて居る。隨つて、一武人としては未曾有の廣大な地域を支配して居たに拘らず、戰爭と住民の掠奪、虐殺以外何等の事蹟を留めて居ない。彼れが近年の戰爭に幾度か危急に陥りつつも、常に東三省の地盤を保持し、次の發展に進出し得たのは、まさしく彼の地位と、滿蒙に特殊の利害を有する日本政府との關係に因るものである。彼れは國民軍との戰ひに、列國の同情を博する爲め「討赤」を標榜し、又北伐軍との戰ひに於て一切の民衆運動を抑壓し「反帝國主義」に對するに國家主義を以て「和平穩健」の誠意を示し、或は勞農大使館の搜索を敢行し、或は國民黨員、共產黨員のおびただしい虐殺を行つたりしたが、然し結局に於いて、列國の同情と援助とを目指す敵ナシヨナル・ブルジヨアジーに奪はれ、封建殘留物の必然的末路を自ら代表しつつ沒落し行つたのである。(鈴江言一)

朝鮮銀行 (Bank of Chosen)〔創立〕 朝鮮銀行は明治四十二年十月韓國銀行として創立されたもので、韓國銀行は當時韓國内で兌換券發行を行ひつつあつた第一銀行の支店を繼承したものであつた。朝鮮銀行と呼ばれるに至つたのは明治四十三年十月日韓合併の結果韓國がわが國の一部となり朝鮮と呼ばれるに至つた後で、四十四年三月二十九日、朝鮮銀行法の制定發布とともに改稱せられたものである。韓國銀行設立の理由はこうである。韓國における貨幣整理が漸く完成し、その縱貫鐵道も成り、ここに殖產興業を獎勵し益すその發展を圖ろうとしてゐたに際して、金融機關の有力なるものは依然支店銀行のみであつたから、まづ第一に有力なる中央銀行の設立が必要であつた。また一方中央銀行の役目を從來第一銀行に委任した事情が漸く滿足し難きものとなつてきたからであつた。〔特性〕 かくて韓國銀行はあたかも内地における日本銀行の地位にあるがゆえに、その銀行法も大體において日本銀行條例及び國庫金取扱規定に準據してゐる。(一)營業科目は大體日銀のそれと同じで、(二)韓國政府より一定期間六分の利子補給を得る、(三)保證準備發行制限額二千萬圓、その他は發行券と同額の金貨地金、銀貨地金、及び日銀兌換券等を準備する必要がある。右のうち保證準備發行制限額は朝鮮銀行と改稱された際に三千圓に擴張され、更に大正七年三月五千萬圓に擴張された。〔活動〕 資本金一千萬圓をもつて開業した當行は歐洲大戰勃發前まではその活動は微々として振はなかつた。大正三年末の貸出總額三千萬圓に至らぬのに、大正八年末には四億三百萬圓に上つた。預金も大正三年末と大正八年とでは約十倍の飛躍をして一億八千九百萬圓に達してゐる。從つて資本金をも六年二月二千萬圓に增額し更に七年九月一躍四千萬圓に、九年二月又々倍額八千萬圓に增大した。支店出張所もまた内地、滿鮮、及び海外に設置された。しかし乍らこの盛況は反動期に入つて忽ち逆轉した。それは當行膨脹時代の活動が、主として内地及び滿洲におけるものであり、その特銀の職務を踏みはづしてゐたことは宛も普銀同樣であり、從つて預金の減少に逢ふと同時に他方における滯貨とで、その信用は固定してゐたからである。そこで反動期に入つてからは主としてコールマネーその他の當座凌ぎ政策をもつて乘切らんとしたのであるが、遂に破綻を暴露し、再度の整理の後、十四年八月に至つて缺損補塡のため資本金を四千萬圓に減資するに至つた。(笠信太郎)

朝鮮史 朝鮮の歴史の出發點は實に今より四千年前の昔の松花江上流地方である。ここに檀君が生れ原始的農業共產體の首長となり(古紀參照)爾來征服國として北より南へと進み、今の大同江流域に達した。これを檀君朝鮮と云ふ。今の朝鮮民族の成立はそれより約二千年後のことである。古代の濊人、韓人、貊人が和合して三國人となり一轉して新羅人となり再轉して高麗人となつたのである。初は古代諸國に於けると同様に疆土觀念頗る稀薄で古紀によると檀君の疆土は大白山から大同江へ、更に大同江より九月山(黃海道)へ延長して居る。斯くして漸次南方へと古朝鮮の文化の花が咲いたのである。その後箕子の後孫と自稱する大同江畔の濊人の王國は史上に表はれた最初の征服國である。その周圍の國々を從へて玆に朝鮮と云ふ名が遠く支那迄に知られ、當時支那人は理想國と考へたのである。周室の衰微に乘じて一時は遼西に迄手を延ばし春秋以來の紛亂によつて東に渡る支那人をも容れて、國力旺盛となつた。これを箕子朝鮮と云ふ。所が戰國時代に至り燕と戰つて大に敗れ更に半島内に退縮し幾何もなく衞滿の手に歸する、これを衞滿朝鮮と云ふ。而して七八十年間勢力を振つたのであるが遂に漢のために滅されて漢が玆に四郡を置いた。それは鴨綠江以北より漢江以南に至つたが朝鮮人の反動のために間もなくなくなり僅かに平壤を中心とする樂浪だけが殘つて漢族の根據となつた。衞滿より樂浪迄約五百年間漢族が勢力を有したが漢江以南には馬韓、辰韓、弁韓の三韓に分れ居り松花江南には扶餘が長春の平野を占領して富國强兵であつた。これより出た高句麗の美川王は樂浪を滅して古朝鮮の地を回復しかくして高句麗より分れて南下した百濟とその東方にあつた新羅と三國併立したが高句麗最も大きく百濟、新羅は漢江以南を兩分して居た。所が

組織的革命運動を企てた最初の團體であつて、デセムブリスト (Decembrist) とも呼ばれ、十二月黨と譯稱する。十八世紀のロシアは奴隷制度の上に建てられたアジア的封建國家であつたが、種々の機會にフランス革命以後の西歐自由思想が反響して來たため、一部の知識的分子の間には反抗的機運が醸成せられつゝあつた。そのうち、比較的上流階級、貴族の子弟、青年士官等の一團が一八二五年十二月十四日、ニコラス一世即位式の當日ペテルブルグの街上で叛亂を惹起したのが彼等である。彼等の中には西歐の留學歸りが少くなく、故國の虐政に鋭い批判のメスを下し始め、先づ一八一五年にはアルサマス文學結社、一八一六年には政治結社の濫觴「救世同盟」が生れて、自由主義運動の中心をなしたが、後者は一八一七年冬「福祉同盟」(別名、「公安同盟」)と改稱し、秘密に諸制度の改革を企て、穩健なる態度を以て研究と宣傳とに從事した。故にプーシキンの如きは彼等を北方の清教徒と讃へた。時の皇帝アレキサンドル一世(一八〇一—二五年)は最初は開明的政策を採つたが、神聖同盟加入(一八一五年)の影響によつて漸次彈壓を加へ、一八二一年には同盟を解散の止むなきに立ち到らしめた。その間に三つの新結社が生れた。南部同盟はツーリチンを本據とし、ペステル大佐が中心人物であり、一八二三年「統一スラヴ同盟」を合せて勢力を増し、今一つの「北部同盟」とも聯絡を保つた。之は一八二二年に出來たもので、一八二〇年にセメノフスキー聯隊に於て叛逆を企だててアレキサンドルに抑斷追放せられた士官が多く概して穩和であつた。即ち概して南部には民主共和論者が多かつたのに反して北部には立憲君主論者が多かつた。一八二三年に至り南北の聯絡は完全に成り、アレキサンドルの歿後、其長弟コンスタンテインを差置いて次弟ニコラスが即位した當時、元老院前の廣場で蹶起したが、四門の大砲と軍馬とに蹂躙せられ、ルイレーフ、カホフスキイ、ベスツゼフ、リユーミン等は捕へられ、他の多くの仲間も殺されてニエヴ河の氷を染めるか、又は捕へられた。何、約二週間役所[illegible]して立つた南部同盟も鎮壓せられ、ペステル、セルゲー、ムラヴイエフ、アポストルはペテルブルグに護送せられ、これら五人の人々が南北の代表として絞刑に處せられ、十七人が二十年間強制勞働となり、外に容疑者五百人、その中半數が訊問を受けて、大部分重刑に處せられた。彼等の思想は革命的愛國主義であり、少數の力によつて理想社會を實現せんとしたのは失敗であつた。然し確固不拔と考へられてゐたツアーリズムに向ひ、首都の中央に於て白晝公然叛逆を試みたこと、最後の目的を達する手段として革命が不可避であることを主張したことなどにより、ロシア革命運動の先驅者として今尙ほ異常の尊敬を集めてゐる。**參考書** 嘉治隆一、近代ロシア社會史研究。(嘉治隆一)

デカルト (Descartes, René. Cartesius, Renatus, 1596—1650) 佛蘭西の大哲學者、近世哲學の祖と稱せられる。トウレーヌ州ラ・ヘイに生る。デカルト家はこの地の名門で、ルネはその第三子であつた。蒲柳の質で、八歲にしてアンリ四世の設立した貴族學校に入學、一六一二年卒業。この學校は彼を滿足させるものを敎へず、ただ數學だけが眞の學問であるように思はれた、と彼は云つてゐる。翌年彼は當時の貴族の習慣に從つて武官たるべく巴里に學び、傍ら數學を修め、一七年士官となつて從軍した。一九年、從軍中に學術研究法について大發見をなし、二三年巴里に歸る。人々の來訪を避けて二九年和蘭に移り、研究に耽つた。かくて公にした主なる著書には、「方法論」(Discours de la méthode, 1687)、「省察」(Meditationes, 1641)、「哲學原理」(Principia philosophiae, 1644) がある。その他「情念論」(Les passions de l'âme)、「規則論」(Regulae ad directionem ingenii) 等をも著した。四九年瑞典の女王クリスティネの師傅となる。彼はまた、解析幾何學の發見者としても有名である。その全集は三百年紀念に Adam と Tannery によつて出版されたものが最も完備してゐる。デカルトは數學をもつて一切の認識の模範と考へ、それの方法に從つて研究することを哲學の目的とした。彼の哲學は幾何學の一般化であると云はれる。數學的認識が疑ひ得ざる確實性を有するのは、直觀と演繹とによる。然るに演繹とは若干の眞理を前提としてそれから必然的に他の眞理を導くことである。從つて究極的な眞理は直接的認識であつて、そのもの自身他のものによつて誘導されてはならぬ。デカルトは凡てを疑ひ、疑ふことのみが疑ふべからずと從つて、「我思惟す、故に我在り」cogito ergo sum なる直接的認識をその中心思想とした。かくて「我」の如く明晰判明なる觀念は實在すると見て、心と物との二つの實體をたて、前者は思惟を、後者は延長をその屬性とし、兩者は性質全く異るが故に各獨立に作用すると考へた。**參考書** Hamelin, Le système de Descartes. Hoffmann, René Descartes. (三木清)

出商業 出商業とは一國の商人が外國に出向いて本國を經由せずに、外國に於て取引をする商業であつて、即ち出先商業を意味する。例へば、我商人がジャバで買つた砂糖を日本へ持歸ることなしに直接印度へ賣るとか、乃至はジャバ內地に於て賣買するが如きがそれである。その實質は貿易に違ひないが自國の貿易數字には載らず、貿易外收入として國際貸借の上に現はれてゐる。出商業は英國の如き資本主義先進國に於ては夙に行はれてきたが、我國に於て出商業が經濟的に稍や重要な位置を占めるに至つたのはやうやく歐洲戰爭の頃からである。商工省調査によると昭和二年度に於ける出商業の取引總額は、七億四千二百萬圓に達し、其中同一國內に於ける取引が三億六千七百萬圓、外國間取引が三億七千四百萬圓で略々伯仲してゐる。商工省はこの收益率を一分五厘と見て一千百十萬圓の利益と見てゐる。而して取引額の內譯は棉花の一億三千萬圓を筆頭に砂糖の一億二千萬圓之に次ぎ、綿絲の一億八百萬圓、ガン

銃ある兵を除いては官兵と土匪との差違は朝野の差にすぎなく、土匪と軍隊とは相互の利害關係から妥協する場合も多い。土匪本來の目標は鄉紳、官憲に抗して富を掠め貧に分つにあつたが中には純然たる泥棒的のものあり、時には政治的旗幟を揭ぐることがある。又支那の內亂の場合には必ず何れの時代にも土匪の關係しないものはなく、近くは民國革命當時の三合會、哥老會の如く、又最近では共產黨が紅槍會を利用せる如きは其一例として見られる。參考書 中國秘密社會史（上海商務印書館發行）。（後藤貞治）

富籤（Lottery. Lotterie. Loterie）富籤は「富突」とも稱せられ、「賴母子」或は「無盡」の變形したものである。其起源は明確でないが、江戶時代の初期には既に行はれ、文化、文政時代には最盛期に達した。富籤は抽籤の方法による變質的賭博の一種で、恐らく最初は、信用なく、無資本なるものが「賴母子」の如き口數金額の制限や繼續的掛金の義務なく、簡單容易に所要の資本を調達する方法として發達したものであらう。最も普通に行はれた方法は先づ催主に於て數千枚の籤札（富札と云はれる）を作り、一々番號を附し、札屋なるものがあつて之を取扱ひ手數料を取つて發賣する。一枚の價格は少額で何枚にても買入れるを得、又札屋にて一枚を分割して賣る事もある。日を定めて抽籤し、抽籤方法は大なる箱に札數と同數の小木札に番號を記入せるものを入れ、箱を廻轉して之を混和し、側面の小孔から錐を以て木札を突き差し豫め定められた當籤番號に當れば、豫定の金額を交附するものである。併しそれは忽ち一般人の射倖心を刺戟して非常に流行し始めたので幕府は之を法令を以て禁止し、後は例へば京都の仁和寺江戶の護國寺の富籤の如く、專ら寺社の維持、營築、改築等を目的とするものに限つて許された。明治政府も富籤は一般に禁止してゐるが、富籤類似のものが密かに行はれてゐるのは勿論、勸業債劵や馬券の如き公認の富籤類似のものすら行はれてゐる。富籤類似の、多數の人々が一定少額の金品を據出し抽籤によつて一度に巨額の金品の獲得を爭ふ遊戲乃至賭博は西洋でも早くから行はれ、物品の富籤が先づ起り後に貨幣の富籤が起つて忽ち前者を凌駕したと云はれる。金錢の富籤はイタリーに先づ起り、就中一五三〇年フロレンスの國家によつて企てられたのが最初である。それから之は中世伊太利及びオランダの都市に於て商業獎勵の爲に行はれたと云ふ。其後十九世紀に至る迄旺に流行したが、一八二六年イギリス先づ禁止し、一八三〇年ベルギー之に倣ひ、フランスも一八三二年之を禁止し現在でも文明諸國では一般に法律上禁止されてゐる。（友岡久雄）

土民一揆 「土一揆」の項を見よ。

トムスキー（Tomski, Michail 1880— ）一九一九年以來引續きロシア共產黨中央委員、全露勞働組合中央評議會議長。純粹の典型的ロシア勞働者でその生涯は恰もロシア革命の縮圖たる感がある。即ち一八八〇年ペトログラード（今日のレニングラード）に生れ小學校卒業後十三歲にして紙函製造工場の徒弟となり、更に石版印刷所金屬工場等を轉々した。一九〇五年レヴアルに移つて勞働の傍ら革命運動に關係し漸次運動上の主要人物となり、同年勞働者代表サヴエートに選出されたが翌年一月檢擧追放され二箇月にして脫走。同年八月ペトログラードに歸りアルタモノフの假名で工場に勞働し一方組合の設立と社會運動とに努力す。一九〇七年代表としてロンドン大會に出席、歸國後檢擧されて一年間要塞監獄に入る。其後モスコウで活動したが一九〇九年十二月「ラボーチ・ズナアミア」紙の地下印刷所發見事件に連座して一年間拘禁の後五箇年の强制勞働を宣せられ、刑期を終つて更に終身追放としてキレンスクに送らる。三月革命後ペトログラードに歸りボルシェヴイキーの七月政變に大いに活躍。後金屬勞働組合機關紙「メタリスト」を主宰。モスコウ・サヴエート議長となり、一九一八年勞働組合第四回全露會議で中央評議會幹部となり、その機關紙を主宰し、勞働組合モスコウ市評議會議長を兼ぬ。一九一九年全露中央執行委員會トルキスタン管理委員長となり、一九二二年再び勞働組合指導部に入り、第五回大會にて全露勞働組合評議會議長に選ばれて今日に及ぶ。（益田豐彥）

ドメスデー・ブック（Domesday Book）ドメスデーブックは、少くなくも第十二世紀以來ウキリアム征服王の命によつてなされたイギリス土地の大調査の記錄である。日本では譯されて土地調査簿といはれてゐる。王の命令は一〇八五年より八六年の冬にかけてグロースターの集會に於いて發布されたのである。王の任命による委員（Legati）は各州に派遣せられ、彼等は質問表を持つて行き、それに對して各州の陪審官（Jury）から確答をなさしめたのである。委員は各州に集會（Moot）を開催した。この集會へは州の各百人組（Hundred）又は各小邑（Wapentake）の代表として一人の陪審官が出席し、村落からは村落代表者が出席した。そしてそこでその地方に於ける調査を行ひ、その結果を王に報告した。それがドメスデー・ブックでウインチエスターの王庫に藏せられた。一七八三年このドメスデー・ブックは二冊となつて印刷發行され、第三冊は索引として一八一一年に發行され、第四冊は一八一六年に發行された。このドメスデー・ブックは、イギリス古代の經濟史研究の貴重なる資料をなしてゐる。このブックには農業、物價、地代等のことが記されてゐる。このブックをなさしめたウキリアムの意圖は單なる科學的調査の目的ではなく、彼は金を欲しさに、即ち稅徵收の目的のもとに行はれたのである。ケンブリッジの古代法教授マイトランド（F. W. Maitland）は、ドメスデー・ブックは金の本であり稅表である Domesday book is a gold book, a tax book）と言つてゐる。參考書 Bland, Brown, Tawney, English Economic History, Select Documents, Meredith, Outlines of the Economic History of England.（石濱知行）

ヨ

洋學の渡來 歐人が始めて我國に渡來したのは一五四三年（天文十二年）である。爾來外船主に葡萄牙船が年々來航した。一五四七年薩摩人了西は葡船に乘つてマラツカに至り耶蘇會の僧ザヴイエルに會ひ、その勸めに從つて印度に赴きサン・パウロの學林に入學した。彼は國人として正則に外國語を修めたものの最初である。一五四九年ザヴイエルは了西を伴つて鹿兒島に來て、そこでその助を借りて基督教問答及び基督傳を和譯し、ローマ字を以てこれを綴つて宣教に用ひた。これ洋書飜譯の初めである。その後宣教師の渡來相次ぎ各地に學校を設けたので、彼等に就いて葡語又は羅語を學ぶものは大いに增加した。一五九〇年ヴリニアニが渡來の時印度から印刷機械と職工を伴つて來た。かくて出版されたものは多く宗教書類である。當時輸入された西洋文化には醫學と油繪があつたが、而には基督教の研究であつたから切支丹の禁制と共に一時洋學への機運は挫かれた。併しこの禁制にも拘らず和蘭との通商のみはは許されたため、和蘭の外科醫又は甲比丹を通じて蘭學は輸入されたものである。洋學の進入の兆候は貞享の改曆に既に現はれ、更に新井白石の地理書に見えてゐたが、その自由な發展を遂げるにいたつたのは將軍吉宗の洋書解禁後である。當時における洋學の關係者には中根玄圭、西川如見、青木昆陽があつた。昆陽は本來幕府の書物方であつて吉宗に建言して蘭學の理解に盡力するところが大であつた。昆陽の後に蘭學の系統を確立したものは前野良澤と杉田玄白の二人である。良澤は昆陽について蘭語を學び兼ねて蘭方の外科を修得せんとし、明和八年同好の杉田玄白と共に「ターフル・アナトミア」の飜譯に從事した。四年の後に完成したのが「解體新書」であつて、此れは蘭學の堅城を開いてその黄金時代を準備したもの、その功績は獨り醫學界に限るべきでなかつた。此等は純粹の學者の事業であるが、この他なほ平賀源内、司馬江漢の如き文學者、畫家も亦大いに洋學の優秀なる所以を明かにして、間接的に洋學のために貢献したものと謂はねばならぬ。洋學の黄金時代を飾る人々は、大槻玄澤、小石元俊、江馬蘭齋、宇田川玄隨、同榛齋、稻村三伯、藤林普山、大槻玄幹、山村昌永、橋本宗吉、伊能忠敬がある。シーボルトの渡來は一八二〇年であつて、彼が來つて長崎に留まるや乞ふて門に入るもの多く歐人直傳の一派として蘭學に新しい系統を形造るにいたつた。彼と同時代に出た蘭學者としては坪井信道、箕作阮甫がゐる。德川の後期に至つて不測の事件によつて蘭學者の難に遭ふもの生じ、更に野心のある蘭學者澁川六藏の建言によつて蘭學者の取締が嚴重に行はれるやうになつたが、これも蘭學の占めて來た重要な地位を覆へすには至らなかつた。江川英龍、佐藤信淵、飯沼慾齋、緒方洪庵等は新學の權威として幕末の學界に燦然たる光輝を放つたものである。維新以後に於ては蘭學に代つて佛英獨の新學が再び湧然と渡來してきたが、その基礎は夙くから築かれてゐたと謂はねばならぬ。**參考書** 土屋元作、新學の先驅。（新明正道）

養子 (Child Adoption. Annahme an Kindesstatt. Adoption) 養子は即ち「養はれて嫡出子たる身分を與へられた子」であるが、養子制度と云へば「養子をすること」即ち「養子緣組」である。前掲原語は寧ろ其方の意味である。養子制度は我國の如き家族制度の國柄に於てこそ必要なれ、今日の西洋諸國に於ては其存在理由は既に消滅した、と云はれ來つた。所が近來孤兒私生子救濟策としての養子の價値が認められ、從來法律上養子制度を認めなかつた英國が一九二七年一月一日から養子法を施行し、又革命後養子制度を虛僞なりとして廢止したサツエート聯國が偶然同日から其制度を復活したのは注目すべき現象である。養子緣組は養親たるべき者と養子たるべき者との合意によつて行はれるのが原則だが、養子となるべき者が十五年未滿である場合には、其父母が代つて養子緣組の合意をする。而して其合意は戶籍吏に對する屆出によつて表示される。養親は成年者即ち滿二十年以上でなくてはならず、尊屬又は年長者を養子となし得ない。跡取りの男子のある者は男子を養子となし得ないが、女子を養子とするについては制限がない。夫婦者は共同にのみ養子緣組をなし得る。即ち夫の子だが妻の子ではないと云ふ樣な關係を生ぜしめ得ない。又夫婦者が養子になるのを「夫婦養子」と云ふ。養子となると同時に養親の娘と結婚する「婿養子緣組」と云ふのもある。跡取りの男子がある場合でも婿養子は貰ふことが出來るが家督相續權は實男子の方にある。養親子關係を止めることを「離緣」と云ふ。俗に夫婦別れを離緣と云ふが、法律は「離婚」と「離緣」とを使ひ分ける。離緣には相談づくで戶籍吏に屆出る「協議離緣」と訴訟による「裁判離緣」とがあるが養子が戶主になつた後は離緣することが出來ぬ。尙皇室には御養子と云ふことはない。それは特に血統を尊ばれるからであつて、最も純粹な家族制度から云ふと、養子制度は却つて否認され得る。支那朝鮮では「異姓不養」と云ふことが今でもやかましく云はれて居る（民法第八三七條乃至第八七六條・皇室典範第四二條參照）。**參考書** 和田于一、親子法。穗積重遠、親族法大意。（穗積重遠）

傭人扶助令 傭人扶助令は政府の雇傭する職工、鑛夫その他の傭人が業務上負傷し又は疾病に罹り又は死亡したる場合に扶助金を支給することを規定する法規である。大正七年十一月二十一日勅令として發布されたもの大正十五年工場法關係法規の改正實施に伴ひ同年七月一日より改正施行さるるに至つた。**〔扶助の種類〕**（一）療養料（官費治療を受けない者に支給す）－實費支給。（二）休業扶助料－百八十日以內百分の六十、百八十日を超えたるとき百分の四十。（三）傷害扶助料－（イ）終身自用を辨ずることの能はざる者（賃金五百四十日分以上七百日分以下）。（ロ）終身勞務

本辭典に對する諸家の推讃(一部)

日本的·世界的·現代的·歴史的·學術的·實際的

長谷川　如是閑

我國に、有るべくして無かつたものは、社會科學に關する網羅的の大辭典である。今日までの唯一のものとして、經濟雜誌社の「日本社會事彙」があり、それは今も古典的の値打は持つてゐるが、その時代のものとしても、もとく現代的の項目を重視してゐなかつたものであり、且つ世界的でなく、特に日本的であることを却つて特色としたものであつた等の點で、とにかく特殊的のものたることを期し、決して網羅的のものたることを期したのではなかつたが、何づれにしても最早アウト·オブ·デートたることは拒まれない。

この辭典は、されば我國に於ける此の種の辭典の最初のものである。重點を日本に置きつゝ世界的であり、現代的のそれと歴史的のそれと、學術的のそれと實際的のそれと、さういふ均衡に於ても、編輯者の大なる注意が窺はれる。なほこれは外國の辭典に於ても普通の狀態だが、社會科學に關する辭典の多くは、『所謂オルソドックス』的のものは、極端に社會主義的事項を無視し、社會主義的のものは極端にオルソドックス的事項を無視するといふ傾向があり、その方が或は專門的に詳悉を得るとも考へられるが、これも完全な辭典としては均衡を得るに越したことはない。此の辭典は、その點に於ても相當努力したものであると見うけられる。このことは編輯者がマルクス主義の研究團體たる社會思想社であるだけに一層の努力であつたらう。殊に學問、黨閥の爭ひの猛烈な現狀に於てこれだけ廣汎な執筆者の得られたことも、最初の試みとしてこれだけのものが完成されたことも、すべて適當な編輯者を持ち得たことの證據である。今後も、編輯者諸君は、この努力をつゞけると同時に、嚴正な批評はそれを尊重して益この完璧に磨きをかけ、標準的の大辭典として動かぬものとすることを諸君の責任と感じて居られるといふことであるから、われくは安心して本書を推薦することが出來るわけである。

座右不可缺の書

慶應義塾大學教授　小　泉　信　三

總項目一覽と校正刷の多くの部分を見て判ずるに、改造社の社會科學辭書は坐右不可缺の書である。日本で社會科學の研究に從事する者は特殊の困難に逢着する。日本人として日本の事は無論知らなければならぬ。併し我邦の社會科學は、今のところ未だ西洋學問取次の段階を脫却してゐるとはいはれないから、殆ど同じ程度に西洋の學問や事情を知らなければならぬ。又最近殊に帝國主義の研究が勃興したから、支那、印度、廣く東洋一般の事情を知らなければならぬ。社會科學の發達と共に一部の著作家は盛んに哲學的用語を錯にするから、其意味も心得てゐなければならぬ。外國語並に外國語の略語を頻用することも亦た近時の一流行であるから、それにも通じてゐなければならぬ。此等の要求を一々滿たすといふことは實に容易な事ではない。社會科學辭書としては、前後九册から成る獨逸の國家科學辭典第四版、最近十五册の第一册を出したセリグマン敎授監修に係る亞米利加の社會科學百科全書を擧げなければなるまい。それは何れも記念碑的大編纂物であつて、其內容の詳しさ深さ(亞米利加物の方は未知數であるが)に就ては世に定評のあるもので

あるが、而かも此等の大辭書も、到底上述の如き多方面の必要には應ずることが出來ぬ。況や各項目の記事が詳し過ぎ長過ぎるといふ或意味での缺點があり、加ふるに外國語で書かれてゐるといふ不便がある。此等の諸點を考へて見ると、改造社の此辭書は、其規模の大小其他では比較出來ぬとしても、或場合には之に代り、或場合には之を補ふのみならず、多數の日本讀書人に取つて必要なる多くの項目を有する點に於ては、實に之に優るものだとも謂つて好い。改造社の刊行物中確かに此辭書は最も永續的價値を有するものゝ一であるといふことを斷定して憚らぬ。

歴史的一大事業である

上野帝國圖書館長　松　本　喜　一

吾々は浩瀚難澁な專門家の著書に依つて社會學の一斑に通ずる事は容易な事ではない、又多忙な現代人には到底企て及ばない。併し我々は社會科學の知識を缺如する時、此の澎湃たる時代の潮流から取り殘される事を知つてゐる。此のヂレンマを解決する所の實用的社會科學辭典の出現を熱望する情極めて切なるものがあつたに拘らず其の實現は前途遼遠と思ひ諦められてゐた。此の時に當り改造社の社會科學大辭典の刊行は此の未開の曠野に向つて鍬を起した歴史的一大事業と言へる。其の內容を一瞥して直に氣付く事は社會科學の分類が系統的である事、語彙が徹底的に充實してゐる事、取材が廣汎で說明が親切・平易・詳密・的確を極めてゐる事等で全く遺漏のないものである。之れ編者の長年月の努力が此の一卷に結晶したものに外ならぬ。精神文化の進運に貢獻する事を一瞬も忘れない改造社の今回の驚異的美擧は必ず江湖の非常な歡迎を受ける事を信じてやまない。

知的水準の一大飛躍の中に

經濟學博士　阿　部　賢　一

有ゆる社會現象は一つの泉から流出する。一つの原理を把握するもののみ多樣の社會現象を解する。そして身邊の――そしてそれは取りも直さず世界の――大小社會事件について一應の知識を持つことと、其れを發生せしめ促進するところの原理を見拔くことは、民衆が自から生くる途だ。それで大衆の知的向上は、沈滯と硬直に死せんとする我國社會の更生にとつて緊急事。社會科學大辭典の內容――適當する筆者と盡さざるなき項目と剴切にして統一ある方法――を密に點檢して廣く全國の民衆に推薦し得る事を確めたのである。

辭典時代の尖端に立つ大出版

千　葉　龜　雄

これが、意識生活と、知識全般の『索引』だと思はれるほどにも、社會科學が、現代知識のアルファであり、オメガであるとして見られて來た。早い話が、社會科學の一角に觸れることなく、社會科學の一片の知識すらなくては、一枚の新聞紙すら今日では理解されないのだ。社會科學は、知識の王座から下つて、普通常識にすらもなつた。

が、しかし、多岐で複雜な社會科學の全面を知ることは、一生かゝつても解らない。まして多忙な現代人には。そこで『辭典』がある。恐らく知識の整理者として、統制者として、專王の威力を發揮すべき、これからの唯一の存在は辭典であらう、辭典時代が來る。

『社會科學大辭典』は、辭典時代の尖端に立ち、時代人の待望を正確にヒットした。それ以上に內容がある。廣汎な材料が無限に、しかし申し分なく網羅され、海內第一流の學徒が、尖鋭な學識をそこに傾けてゐる。そして最新の學說で舊知識が訂正されてゐる。立派な現代知識の『索引の索引』だ。學的價値においてもすぐれた成績だ。が、同時に辭書が單に引用用として書架に飾られず、日常の讀本として要求されて來つゝある時代において、『社會科學大辭典』は、もう單なる學的辭典であるのみに止まらず、必然な大衆讀み物としての價値を占めてもよいであらう。

特價〆切六月二十日限

『社會科學大辭典』に包含する諸項目は、實に二千有五百に達し、その範圍は、社會問題、社會思想及び社會運動を中心として、經濟學、社會學、政治學、法律學、哲學、史學、教育學、文學、自然科學、內外社會科學者人名、內外社會運動家人名、內外政治家人名等に亘る。全冊四六倍判總一千四百卄餘頁、六號活字三段ベタ組。實に四百字原稿紙にて九千枚を算し、通常の單行本に見立てれば、優に二十冊の大量となる。しかし、分量の尨大は、必らずしも內容の價値を決定しない。本辭典が他と比肩を許さゞるは、各項の執筆者が、夫々專門の學者か然らずば實際に執掌せる人であつて、而かも悉くその方面の權威ばかりを網羅せる點である。之に加へて、編輯は、我が社會思想界にて最も公正の立場に立てるの士の合議編輯であつて、辭典の編輯として最も理想的である。價格の低廉も亦本辭典の一大特色と稱し得る。我等は、本辭典を凌駕する社會科學辭典が、何人の手によるとも、向ふ三十年間は絕對に企て得られないことを信ずる。

◇特價豫約規定◇

□**體裁** 全壹冊四六倍判、背革、角革、兩面クロース、函入製本堅牢優雅、總六號活字、頁數一千四百二十餘頁。

□**頒布方法** 豫約者のみ特價を以て頒つ、締切期日までに最寄書店又は本社へ御申込下さい、締切以後は定價に復す。

□**刊行期日** 昭和五年五月十日刊行。

□**定價** 金拾五圓

□**特價** 金**拾貳圓**

□**拂込方法** 一回拂＝御申込と同時に金拾貳圓拂込。二回拂＝昭和五年五月及六月中に金六圓宛二回拂込。但し途中解約者には返金せず。

□**配本** 一回拂の方には昭和五年五月十日より配本。二回拂の方には二回目の拂込と同時に配本。

□**送料** 會費の外に送本料を申受けます。東京市內金十二錢。內地五十四錢。鮮、滿、臺、樺八十五錢。外國實費。

□**特價期間** 昭和五年六月二十日限。

發行所 東京芝區愛宕下町四丁目 **改造社**（振替東京八四〇二）

東京のイーストサイド

貴司山治



1 隅田川に金屏風が流れる時

イーストエンドが倫敦の貧民窟の名だつたのは一と昔も二た昔も前だ。今ではこの言葉は、二つの階級の對陣地たる近代資本主義都市におけるプロレタリア階級のあまねく城塞の名だ。

そして倫敦の貧民窟が東側にある如く、伯林の勞働街も北と東の方向、即ちNO區だ。

これに一致して東京の工場地帶がやはり東にある。いはゆる江東街。

去年の五月一日、伯林の勞働者はかれらのイーストサイドより溢れ出て、ブルジョアジーの大都市「伯林」を攻撃した。警官隊は飛行機、探照燈、機關銃、タンク、武裝自動車、等を持ち出してこれを防ぎ、全市は五日間に亘り、文字通りの、、、と化した。

光りは東方より、さうだ、(削除)。

血と鐵と、力と轟音の中より、イーストサイドより、(削除)文化が生れなければならない。今その要素は地底の火となつて(削除)抑へつけられてゐる。そして火は、ぢりぢりと、(削除)はぐくまれつゝある。今はさういふ時代だ。

一歩、江東方面へ足をふみ入れゝばそこには必ずそういふ空氣の、ぷんとくるものがある。

日本のプロレタリアートが、重要な記録をのこした一九三〇年のメーデーから二三日目、私は一行四人でわが東京のイーストサイドにこういふ空氣を嗅いで廻るべく「視察」に出かけた(頗る香氣である。)

一行の内の一人はもう二た月近く東京のゴミを吸ひにきてゐる小林多喜二だ。かれはすり切れたうす汚い洋服を着て、何を入れてゐるの

か恐らくそれが旅先きのかれの全財産であらうところの一個の小さな風呂敷を片手にぶら下げてゐる。

今一人は元の評議會の執行委員長N君だ。といへば名前はわかつてろだらうが、わざと匿名にしとく。かれは二年の獄中生活から出て來て今、東京へ來たり、大阪にゐたりして「評議會勞働運動史」を書いてゐる。

もう一人は關東金屬の若い勞働者U君だ。U君の細君はやはり舊評議會の幹部で今獄中にゐるK君の妹だ。「戰旗」などでよく渡政のおツ母さんと一緒に寫眞にうつつてゐる可愛い女の子はU君の子だ。

この三人と、私は吾妻橋から出る一錢蒸汽に乘つて隅田川を遡つてゐた。

「江東といへば本所深川を指すと思はれてるやうですけれど、ほんとうは大島、吾嬬、龜戸、砂町の四地方のことなんですがね。」

とおとなしいU君が私に說明する。

出發點の吾妻橋から少し遡つたところに架橋工事が始つて、今脚柱が出來つゝある。

隅田川にかゝるいろ〱な橋の、それ〲について、モダン美とか復興美とかをたゝえる近代人はふえて來たが、そうなるまでの之等架橋工事中、一番暗黑な、一番困難な、脚柱作業中の勞働者の惱みを知るや君。

橋の基礎となる脚柱作業は、川底の岩石層まで土をほり下げるのだ。水の中何十丈の深さに堀り下げた地底、いや川の底ではいふなかれ人が働いてゐる。

この作業賃銀一日金九圓也。東京市で一番高い勞働賃銀の故に、失業時代のこの架橋工事は江東の勞働者なら誰れ知らぬ者はない。今は五圓に下つたが、それでもまだ日本一の勞賃だ。

だのにこの川底作業に働こうといふ勞働者はそう多くない。何十丈の川底へ、リフトでつるし下ろされ、だん〱暗くなつて、あふむけど天日遠く、人聲も聞えない底の底で、しかも胸まで浸る泥濘の中で働くのだ。人間とは思へない。メタンガスにやられてばた〱とたふれる。代りがいる。若い者でなければやれない。で賃銀が一時九圓にまでせり上つたのだが、これこそ本當の人柱だらう。

一錢蒸汽は鐘ケ淵まで遡る。鐘紡の工場は、紡績資本主義時代の日本の産業の死活を制するだけのものはあつて堂々たるものだ。この川岸の工場中で一番光つてゐる。赤煉瓦の建物の裏庭に貯水タンクがあり、その傍の藤の棚の下で交替休みの女工たちが二三十人遊んでゐる。

隅田工場だ。

四割賃下げの會社の挑戰に對して、遂に立ち上りえなかつたこの隅田工場には四千人の女工がゐる。一千人の男工がゐる。かれらはみんな腰ぬけか？

「紡績の資本家はストライキは防げたけれどこの隅田工場は勿論、その全國工場に亘つて、もう完全に溫情主義の防寨を失つてしまひました。あの子たちが階級的に百パーセントに目ざめてくるのもうすぐです。」

こういつてU君は、にごれた川波の日に光る河岸の藤の棚の下で遊んでゐる娘たちの方を眺めてゐる。

「そういへば、隅田工場では、あの女工たちが食堂かどこかに飾つてあつた武藤山治描くところの金屏風をずたずたに破つて川へほうりこんだといふぢやありませんか。あの藤の棚の下あたりからほうりこんだのですかな？」

「そうです。それです。何十年の間、女工たちの最も神聖な偶像であつた「武藤社長」が今度のことでもう完全に葬られたんです。金の屏風も中は反古です！」

U君はこういつて赤煉瓦の屋根を見渡した。

「大阪の淀川工場でも、職工たちが武藤の寫眞の大額面を破つて川へなげこんだぜ！」

N君が横からいふ。

「成程、不平不滿は鐘紡三萬五千の男女工の間に地中の火となつて燃えてゐるんだな、(削除)。鐘紡にその津浪の起る時は(削除)狹心症にか〻る時だ……。」

「ともかくも隅田川に金屏風の流れる時世は來たわけだ。溫情主義の終焉だ！」

「おうい！」

私が手をあげると、藤の棚の下にゐた二三人の女工が、默つて笑ひながら、手をあげた。

「どうだい、この物のひゞきに應ずるが如き有樣は……おれを組織者にしてみろ、あの娘つ子どもを一ぺんに物にしてやる。」

「よし、おれもやつてみろ」

と小林多喜二は私と並んで一錢蒸汽の舷から片手をあげた。

「おうい」

女工たちは今度は應答する代りに三四人、肩をくつつけあつて、きやつきやつと笑つた。——まさか一錢蒸汽からこうして自分たちによびかけるこの小さな男が「蟹工船」の作者とはかの女達は夢にも知らなからう。小林多喜二！　かの女達若き勞働大衆のために、爾の文學をより更に大衆化せよ！

2　ルーデサックと南葛魂

東京合同は闘士の養成所だつた。武田信玄の下にゐると、佐竹何とかつていふ臆病者でも敵陣で討死する程の勇士となつたやうに、ひよろりとした勞働者が、一旦合同へ送られてきて一二年もまれると一流の前衛となる。

三・一五と四・一六の犠牲者中に、一番おびたゞしいのは東京合同の

出身者だ。名に知らるゝ龜戸事件以前、既に南葛勞働者には、一種のいふべからざる優れた氣質があつた。かれらが一旦組織の時代に入るや、南葛勞働組合には、南葛魂ともいふべきものが生れた。南葛勞働組合を東京合同にまで育て上げたのは渡邊政之輔だ。決して渡政一人の力がすぐれてゐたのではないが、かれには人を教育する勞働者的魅力があつた。それが南葛魂だ。

(削除)、東京の戰鬪的勞働者は南葛魂の中から生れるといつて差支なからう。

産兒制限が一世を風びするや、ルーデサックの製造工場が江東に出現した。花巻ゴム工場のストライキ――といへばそんなに古くないから知つてゐる人が多いだらう。

このルーデサック工場のストライキが忘れられないのは組合の闘士であるSといふ十七歳の一少年工が、(削除)から屍體となつて、、された事件にかゝはる。

評議會は、勞働者葬を以てS君を葬つた。激亢したストライキ勞働者は葬列を示威行列にしてしまつた。旗々々々、その中をねつて行く×××、×××××!

さすがにS君を(削除)死なせた、、は、この葬列に存分の、、を加へえなかつたとみえる。

葬列は三つの、、、を縱斷して墓地に至る。

折柄夏。(削除)隊伍をとゝのへ、分列したり、密集したり、(削除)葬列と併行して走る。しかし少しも葬列には手を出さない。

次の、、へはいる地點では、又その管内の巡査が何百人といつて出動してゐる。そして葬列に前後して部隊を作り、時々「うわうッ!」とかん聲をあげて二列縱隊で、葬列をかけぬける。かと思ふと、行手に密集する。それでゐて葬列がそこまで到達した時にはかれらは忽ち一小隊づつに分列行進。

そして、葬列が(削除)墓地に到着すると、どうしたといふのだらう。そこには墓地の中いつぱいに(削除)で埋つてゐる。埋葬の、、かといへばそんなことはない。ちつとも手を出さない。

初めは三つの(削除)だと思つてゐたのが、それは葬列に對する(削除)はどうやらなかつたらしい。未だによくわからぬが、S君の葬式を(削除)やつたらしい。(削除)。

でこのルーデサックの少年職工の當日の喪主としてこうした中でともかくも無事S君の埋葬をとりすませたのが評議會執行委員長のN君だ。N君は生えぬきの勞働者で一流の旋盤工だ。理論的な頭腦は渡政などに及ばなかつたが、とても人情家だ。

葬式のすんだあとでN君は渡政から「あのSの親は七十だ。長男を漸く一人前にした所でこんなことになり、おれに殺されたやうなものだと怨んでゐるだらう。」といふのをきゝ、渡政を引つ張つて、Sの父親のところへ慰めに出かけた。

涙をためて愚痴をこぼすか、怨みの一と言でもいふかと思へばSの

父親は瞼は重かつたがにこ〱して二人を迎へ、

「ご苦勞樣でした。今に又こいつが大きくなりますからね。こいつにゝをやらせて下さいよ、政どん。」

と、傍に他愛もなく眠つてゐる十ばかりの次ぎの男の子を顋でしやくつてみせた。

「それが眉まで白い老人ですよ。若い者ばかりかと思つたらどうして南葛の勞働者には七十の老人にでもそういふ所があるんです。あれが南葛魂ですな」

N君は、玉の井の方へ行く途々、こういつて私に語つた。

3　龜戸と玉の井

淺草を、イーストサイドの、生理的排せつ口とすれば、龜戸と玉の井は(削除)。

だからこの近邊には、イーストサイドの最も暗たんとした荒頽した空氣がある。

龜戸天神の境内には藤が咲いてゐた。

「こゝか……こゝか!」

と何がこゝなのか、小林多喜二はひよこ〱と、東京の子供と一緒になつて太鼓橋の上にあがつた。それを又二人も三人も中學生が安物のパーレットで寫眞にとつてゐる。

樂隊を鳴らせてゐる飴屋がある。痔の藥を賣つてゐる香具師がある。狐を一匹鐵格子の箱に入れて、おみくじを賣つてゐる老人がゐる。海ほゝづきを賣る老婆。

そしてこゝにうよ〱してゐる群衆の顏はどれもこれもみんな疲れて、黄ばんでゐる。

私達は天神裏へぬけた。おかしなところへ出たな、とやゝこしい露次へはいつて行くと、私娼窟だ。私は東京の私娼窟は始めてみるので、珍しく折柄夕ぐれ、すり硝子戸の卵形にすりのこした中からお多福の面みたいに、眼と眉と鼻さきだけ出してのぞいてゐる女の、とても美くしいのに正直におどろいておく。

あんまり美くしい女がゐたので、土間へはいつて顏を近づけ、

「よう!」

といつて笑つてやると、こつちが氣はづかしくなる位向ふではにやツと笑つてみせて、うなづきながら、眼で信號する。

「いゝぞウ、君」

と出てきて私がいふと、小林は「そうか!」と活氣づいて、ちよこちよこと先き走り、自分でいゝ女をみつけてのぞきにはいり、何か問答してゐる。もしこの文章をよむ「淑女」がありましたら申上げる。わが小林多喜二はこういふ場合實に無邪氣ないゝ男なのであります。そして、小麥色の肌きよらかなプロレタリアの「娘ッ子」にならそつと教えてやる。「不在地主」の作者は、獨身だ!!

亀戸に比べると玉の井は本格的に陰惨である。しかし女はこつちの方が更に煽情的な美しさを持つてゐるやうだ。まるで舞台へ出るやうなひき眉、濃紅、こつてりと白粉をぬつて、これらが藤森成吉作「光と闇」に出てくる「闇」の女とは一寸受けとれぬ。

ある一軒の家から、窓にかゝつた声で「ちよつと、ちよつとひいさん！」と忽ち私をよぶ女があるのでおどろいた。いつやら平林初之輔氏を「ひいさん」云々とからかつてひどく叱られたことがあつたようだが、玉の井までくると、ヤミからボーに貴司山治を「ひいさん」とよぶ奴がゐる。よせやい。

「断髪々々、君、きたまへ。」

又しても小林多喜二を引き合ひに出すが何しろ同行者なのだから仕方がない。「改造」にこんな風に書かれるとは知らずうつかり同行した小林も不運だと思つてあきらめろ。その小林多喜二がこういつて私を引つ張つて、とある一軒の土間へはいる。成程断髪の女がひかえてゐる。二人はいつてきたのはひやかしであること明瞭なので、女は知らん顔をしてうつむいてゐる。何をしてゐるのかと、のぞくと、着物の上からエプロンをつけてゐるのだ。

エプロンをつけてしまふと、とても可愛い女になつた。眼が大きく眉が細くて、私はこれによく似た貴族院議員×××××氏の令嬢を知つてゐる。

「君君、君は断髪だね。」

小林は私をおしのけ、女に近づいて、こんなばかなことをいふのである。まるで断髪のない国から来たやうだ。それでもエプロン嬢は、この有名なる「工場細胞」の作者と視線を合はすと、おのづから白い歯をみせた。何と悲しい職業的な笑ひ方だ。

こうして我々一行は、一日中歩き廻つた疲労からすつかり元気を恢復して玉の井を去つた。――その時、亀戸や玉の井がイーストサイドの深刻なる(削除)たるのみでなく、この失業時代における焦躁と不安からくる労働者の神経の疲弊をいやす施療所の役割をも果たしてゐるのではないかしら？　と思つた。

4　餓死同盟

いつやら、東京の自由労働者の失業群が「餓死同盟」と称して市役所の大玄関に坐りこんだ事件から、失業防止委員会といふインチキなものが生れた。

ここへ本所深川の貧民窟研究で賀川豊彦などゝりもずつと先輩の、、何とか氏が出て来て

「ええ、自由労働者の失業者は人力を以て解決することは不可能であります。天候がこれを解決します。坂本公園、富川町一帯にかけて無宿のルンペンが何百人、或は何千人、路上にねてゐますが、これが寒くなつて雪でも降つてごらんなさい。一人もゐなくなります。即ち雪が失業者の問題を解決するのであります。」

嘗が解決する――何といふ非人道なことをいふ奴だ！　當時の勞働者にはまだ人道主義的臭味があつたから、之には皆怒つた。

所が、年々歳々失業者はふえる一方だ。それだのに、震災後の復興が完成して、本所深川の市區が改まり、富川町も昔とはみ違へる位道巾がひろくなると、露營のルンペンは凡そ姿を消してしまつた。

玉の井から富川町へ廻つてくると、「一人金二十五錢」と張り出した高岡屋の軒下に、七人ばかり失業者がおとなしく、目白おしにしやがんで廣い道路に面したまゝ、うんちしてるやうな恰好でもう寢に就いてゐたが、それ以外にはみあたらなかつた。

道路が廣くきれいになると、軒下に寢るのがどうも工合が惡いらしい。雪に追はれたかれらは、こゝでは又道路に追はれたのだ。

失業者の巣、坂本公園にもあまりまだ野宿者はゐない。年々にふえながら、かれらは一體どこへ姿を消すのだらうか？　その癖夏になるとこの公園のみならず江東方面の小公園は一體に失業者の寢床となるのだが……。

自由勞働者は失業の前衞である。かれら位失業と同棲してゐるものはない。内務省の統計によつただけでも、自由勞働者の失業者は東京に常時一萬二千ゐるといふ。本當はもつとゐるに違ひない。この一萬二千人は、百パーセントの失業者なのだ。完全なる「無收入」なのだ。

市役所の玄關に坐りこまなくても、現代の餓死同盟は次第にその同盟員をふやしてゐるのだ。極端なる飢餓はかれらに階級意識を與へる前に救ひがたきルンペン性を與へた。

三日間水ばかりのんでゐるルンペンプロレタリアートはもう珍しくも何ともない。そしてこういふ生活に馴れると、富川町界隈をしらみのやうにうろついて五人、七人集團的に日だまりに眠り、そこである種の巫山戯た行爲を樂しみ、トバクをやる。水ばかりのんでゐてトバクをやるといふのもオカしな話だが、必ずしも現金を賭けない。

時たま仕事のあつた仲間に、もしトバクで貸しがあると、その時わけ前をとるのである。でなくても仲間の一人が一日收入があると（一日たいてい一圓四十錢。目下自由勞働では一圓六十錢が最高）それに仲間がみんなたかつて、三日位食ふ。その間はだれも働こうとしない。

トバクの方法だが可なり單純なもので、（削除）しつぺ等。勿論花札など弄ぶやうな紳士方の餘裕はない。

5　鮒か金魚か

夜に入つて一行は深川大工町の同潤會アパートに住んでゐる關東自由勞働者組合のT君を訪ねた。

T君のお父さんが入口に頑張つて、我々を刑事隊と間違へる。近頃洋服を着て中折帽でもかぶつて勞働者を訪ねると、必ず一應は特高と間違へられる。（削除）。今は特高時代だ。いや治安維持法時代だ。

「失敬々々、又來たな、と思つたんだが、わしア、(削除)、間違へちやつた！　ハ、、、」

T君は元アナーキストの自由勞働者で關東自由勞働組合の左翼移行に努力した人である。

「もう十日ばかりあぶれてゐます。いやもうこの頃はまるで仕事がありません。」

T君と我々の話は、三月六日の世界失業者示威運動に日本の失業者の立ち上れなかつたことから失業者の組織といふ話題になる。

「今迄自由勞働者組合の缺點は、失業者と、職場を持つてゐる人々とをごつちやに包含してゐたところにあります。自由勞働者の失業者は、やはり工場の失業者と合一して組織し、失業者だけの恒常的團體を作らなければ嘘です。失業者大會に集れ！　なんていつたつてそこからは組織的なものは生れない。失業者は失業者の組合へ！　さうすれば少くとも我々の間には一萬二千の(削除)。どんな困難な運動でもやれるぢやありませんか。メーデーのトップを切ることもできるぢやありませんか。この組合は自主的にやるべきでなく、やはりもつと高い闘爭の方へ結びつくように、左翼が指導的に組織すべきです。」

T君の方からと我々の方からと、いひあつた話がざつとこんなものである。

「我々のやうに六七年來職場に離れたことのない自由勞働者――ルンペン性のない勞働者でもこの頃は月の內二十日働けば大きい方で半分仕事のあるのはまだいゝ方です。顏付を持たないものは――市などが顏付を廢止するなんていふのは口實だけであれは仕事の性質上、決して廢止しうるものでありません――毎日々々午前六時十五分前に、早いのは夜のあけない內からそれ〴〵市の勞働紹介所につめかけるんです。そして紹介所の戸があくや否や、殺氣立つて、少い仕事を、多すぎる勞働者が爭奪するのです。あぶれたものは、そのまゝかへるといふこともせず、不意に何か仕事を持つてくる先きがあるかもしれないといふのでそれこそ大阪でいふ鮟鱇――文字通り、藻の間で口をあいてエサを待つてゐるそのサカナのやうに、客を待つてゐるんです。しかしエサのかゝる日は滅多にありません。しよんぼりと、夕方家へかへつてくると、子供たちがきくのです。

「ちやん、けふは鮒か？　金魚か？」

――鮒は水ばかりのんでゐる。金魚は麩を食ふ。麩の食へるだけの收入でもあつたのか？　それとも丸あぶれで水しかのめないのか？と、子供がその父にきくのです。

實際、子供たちは、麩を食ふことでも、贅澤だと思つてゐるんですよ。冗談ぢやありません。麩です！　金魚の食ふ麩を、子供たちに食はせるのです。子供は麩を待つてゐるのです。半生を自由勞働をやつてゐる私の友達にもう五十近い人があつて子供が五人ばかりある。近頃仕事がなくて食へないので、上の娘を一人か二人、よそへやつたら助かるぢやないかとすゝめたところ、食へなくとも子供は可愛いから

人にやりたくないっと泣いて決心しかね、その後長い間みえませんでしたが、こないだ會つたので「どうした?」ときいてやると、

「わしも二十年目に始めて鶏と同じ物を食つてゐる。」

といふ答です。きいてみると、子供を人にくれるのをよして、やつぱり親子水入らずに暮らすことにきめ、今迄の麥七米三の飯をさへよして、米屋へ行つて、精米機でついた米を篩にかけた時、糠の中へおちる米のくず、あの小米つて奴、あれを買つて來て、うどん粉とねり合せ、團子にして蒸して食つてゐるといふのです。その團子さへ食つてれば、親子別れをしなくても足りるといふ打明け話なのです。」

之れはT君の話である。

これだけみれば東京のイーストサイドはまるで死に近い衰弱におち入つてゐるが如くである。

だが私たちの訪ねたわずかに二三日前、又その以前の一二ヶ月前、多くの工場勞働者がどのやうなことをやつたか?

不幸にして、それをこゝに書く自由がないやうである。そして私たちは唯イーストサイドの一番底の澱みにちよつとふれたゞけにすぎなかつたらしい。(五月四日)

新刊紹介

◇**日稼哀話**　吉田英雄著・木賃宿に或は野天に日傭勞働生活の間に於て大半を書いたといふ體驗のにじんだ日稼勞働者の研究で失業問題に關心をもつ人の一讀を薦める。(東京麴町區下六番町一〇平凡社・價二圓八十錢)

◇**若きソヴエートと戀と放浪**　和田軌一郎著・著者のソヴエート滯在中の追憶スケッチ、どの篇も戀と哀愁に彩どられて懷しく讀まれる。(東京市外代々幡町幡谷九一一世界の動き社・定價一圓二十錢)

◇**表皮は動く**　北村兼子著・歐米を廻つて來てあらゆる問題に對し廣く觀察批判した感想集。(發行所平凡社・價一圓五十錢)

◇**所得税の話**　勝正憲著・大藏參與官の現職にある著者の所得税を素人に分るやう解說した懇切な書だ。(東京市京橋區第一相互館千倉書房・一圓六十錢)

◇**コンナのが**　沼田利平詩集。(東京市神田區末廣町三〇　弘榮社・價一弗五十仙)

◇**忍冬**　米倉久子、小田觀螢歌集・潮音同人の夫妻の歌集。(東京府下瀧野川町田端二八三潮音社・價一圓八十錢)

◇**赤旗の下に**　カ・トレーネフ作・茂森唯士、田村亥佐雄共譯・尖銳で新鮮なソウエートの五募物の劇。(東京小石川區小日向臺町一ノ五一黎明社・價七十錢)

◇**勞働問題研究**　北原安衛著・前社會局書記官で勞働法研究家であつた著者の遺文集。(內務省社會局內北岡壽逸・非賣品)

航空振興論

安達堅造

一　備へよ來るべき空軍縮小問題に

現代の問題は、外に海軍々縮、內に陸軍の縮小、戰爭に倦み疲れたる歐米人が、不戰條約に熱することは無理の無い事で、又人道上何人も平和を冀ひ戰禍を避けたいのは當然で、特に現在世界的財政不況の襲來は、局外から不生產的と輕く見られて居る軍事費が、軍備の縮小に依りて節約せられると謂ふことは、時好に投じて居るのである。

然るに何事ぞ！軍縮會議上に於ける空氣はそはくして居つて、眼色を變へて軍艦頓數の步合末節に掛引されて居る。恰も机上壇上で戰爭をして居る樣に受け取られ、結局長いものに卷かれ、隱忍讓步切齒扼腕、是れでは平和は看板、一片の外交辭令、御互に腹の索り合ひ、奧齒に物が挾まり、綿に針が包まれた感ありであるが、先づ國際會議は此樣なもの、列强の腹は判つたと大きく肯き、緊褌一番來るべきものに對し備へるのが賢明である。吾人は細かな理窟を省略して、眞の軍備制限を論ずるならば、同時に軍備の總計に對し考慮せねばなるまいと思ふ。卽ち陸、海、空の三項を一括して同時に均勢的に議せねばなるまい。就中將來戰の沙を左右する空軍を後にする事は良い。

空軍は、近々廿數年間に隔世的の進步をしたので、其進步の度は、一に國民航空智識の深淺に比例するのである。歐米人は大戰の苦き體驗に依り痛切に航空の軍事的價値を認め且又之を平時に於ける經濟上に利用することを辨へて居る。然るに邦人は體驗の無い事と、日常生活に直接關係に無い爲か航空問題を他處事に考へて居る。航空の話をすると未知數であるから專門家に任すと云ひ、其專門家の智識が又誠に怪しいものもあるのに加へ愈々經費の問題になると、旣知の事項に厚く、航空に對し斧鉞を加へるのは朝飯前の事である。飛行機に乘らないかと云ふと、力の無い返事をする。何だか嘆息して居る樣である。此調子だから我航空の事は議論の多い割合に、設備の壯大なる割合に、其實質が之に伴はない感があり、少しく此問題を解するものに天狗が多く各々自己保持の爲め、貧乏國であるにも拘らず、同一施設が重疊して、各牙城を守り毫も、此搖籃時代にある重要事項に、上下

協同一致の跡の認むべきものが見當り兼ねる。此說は少しく過激に亘る嫌がある樣であるが、仔細に觀察して見れば、敢て筆者が陽氣の關係で筆を曲げたのでない事は判明するであらう。又秘密にしないでもよい事が內所であり世界的に進步の急激な斯業に、古くさい事を大切に秘密にして居る樣な愚も必ずしも演ぜられて居らないこともなからう。斯業を牛耳るものに無理解なものがありはしないか。其器にあらずして厚顏にも、算盤の生活の爲め斯業に割込んで、得々として航空を談ずるものも無いとは云へまい。自然之を歐米斯界のものに比べると、話にならない。此不合理な均衡が利害で保たれて居る。其間は斯業は決して發達すべきものであるまい。

自己の了解して居るものに對しては、偉人先見の明ある智者で無い限り、諒解を與へるのであつて、海軍々備にしても、日淸日露兩役に於て其偉功を國民は確認して居るから、海軍々費の巨額に對して容易に協贊が與へられ、世界的海軍國となつた結果、列强が我を恐れ、勝手に彼等の間で都合の良い比率を定めて外に强要するに到つたと見る事も一つの見方であらう。然るに航空に關しては、何人も其以來戰に於ける重責を認めて居るが、いざ之を幾許の比を以て、他の艦船に又陸軍の他兵種に對し加味するかと云ふ段になると、航空關係者の主張は常に破られるのではなからうか。其結果、艦船對航空、他兵科對航空は、將來戰に於ける適當なる比率は果して保たれて居るであらうか。又經費の都合上航空部內に於て、各種任務の飛行機の比率も、經費の多くを要する。遠距離偵察機、攻擊機、爆擊機、雷擊機等は、偵察機や、戰鬪機との運用上の必要の比率を保つて居らない樣なことがありはしないか。是れ以上は專門に入り過ぎるから省略するが、概括的常識として國民は此邊迄は考へねばなるまい。

列强は何れも航空軍備充實の爲め目標を定めて居るが、概ね兩三年中には完成をする。此時機こそ、海軍艦船の比率を定めるのと同樣、比率問題に對して强要を受けるのであるが、此擧の決定標準が現有飛行機數に依ると云ふことになれば、列强と我國との現有飛行機數が餘り懸け離れて居ると共に、質に於ても亦考慮を要するものが多からうと思ふ。此比率の强要を受ける場合現狀なれば、國民は海軍軍縮以上の驚異と失望とを來すこと火を見るより明なりと云ひ得るのである。

昨年の國際聯盟軍縮準備委員會第六回會議の器材制限問題中、空軍器材に關しては、軍隊並軍隊的組織團體に現用中の飛行機及飛行船に對し機（隻）數、及總馬力の最大限を以て制限する決議があり、有事の際直に軍用に供し得る可能性ありと何人も認めて居る民間航空の制限は、現在世界中で民間航空の最も發達して居る北米合衆國並に獨逸は、日佛等を前に廻して、民間航空が實際上軍事的價値を生ずる迄は之を軍用と認むる能はざるものと猛烈に反對した爲め、民間航空制限に關しては、終に討議を延期するに決したのである。併し此問題は時間の問題で何れ議決せらるべきものであらう。

是に於て吾人は考へざるべからず、現在の軍事航空の擴張と、民間

航空の大發展が、帝國刻下の急務である。最早や議論の時期は過ぎたのである。擴張である斷行である。今にして國民が航空に覺めざるに於ては、永年の平和保持の爲めの長計を誤るのである。好戰とか主戰論とかの爲めではない。萬一戰爭の場合は勿論平時に於ても、空軍均勢に依りて、外國の侵犯の動機を與へないのである。之が爲め以下、世界航空の現勢に關して、航空常識の梗概を述べ、讀者の輿論喚起に資せんとするのである。

二　航空の軍事的價値

歷史は繰返へされる。海牙平和會議の當時平和論者は、人道の福祉之より增進すべしと謳歌した。歐洲大戰など夢想もしなかつたのである。事實は理想を裏切つた。國際間の紛爭が、仲裁讓步等の平和的解決をすることが出來ない場合には勢ひ武力に依らねばならない。痩せても枯れても、國として存立する上には、國是の貫徹、歷史の保持の爲めには、戰はねばならない。武力を用ふるのは末である。若し夫れ相當の武力を持つて居るならば容易に、他國から手出しをされることがないのである。又文明に伴うて、野蠻な戰爭などは起し得ない筈だが、兎角文明は感情を伴ひ易く、交通通信機關の發達は國際間の交涉を繁くし、利害關係を增加するから、自然紛爭が多くなり、國交斷絶の場合には、利益相關するものが關り易いから、參戰國の範圍が廣くなり、科學の進步は所謂化學戰が行はれて慘禍は蓋し往昔の比ではない。

是に於て、戰局を速に結ぶことに勉めねばならない。立ち遲れない樣に、機先を制し、一擧に全力を擧げて敵に餘裕を與へない樣にせねばならん。長相撲は、假令最後に戰に勝つたとしても、國は疲弊をして亡ぶる樣なことになる。將來の戰費は莫大であり、賠償は、他國の干涉等があつて思ふやうに取れないものと思はねばならぬ。

航空機の出現は、此開戰初頭に於ける活躍に最も巧に利用されねばならない。空軍を補助兵種等と手緩い考へを持つてはならん。航空機の利用が、戰略戰術に一大變革を與へたと共に、其進步が長足で、其能力は歐洲大戰當時に比し數倍に向上したことに、歐洲大戰當時の樣な、空軍の使用をして居つては大なる過失である。

彼我水上の艦船、地上の軍隊の相見えざるに先ち、空軍の適當なる使用に依り、戰局の大部を經過せねばならない。攻勢に於ても、亦防勢に於ても。

空軍の用法には未決の問題が多々あるであらうが、要は積極的使用で、陷つてはならない最も戒めねばならない事は、戰略偵察を行ひ次で水に、地上の軍隊の作戰を指導すると云ふ學究的月並的の考へである。此事は制空權を獲得した後の事で、宣戰初頭に於ては、戰局を左右し得る丈けの航空機を用ゐて、深く敵國又は豫想する戰場の內部に侵入し、地上の要點、就中敵の飛行場、運輸交通の衝、政治經濟機關、艦船の集中する港灣等を爆擊し、敵の航空機を求めて之を攻擊々

略し、以上を反復して制空權を獲得し、敵の士氣上に脅威を與へ、敵國民をして戰爭を思ひ止らしむるのにあるのである。若し航空兵力が不充分であつたならば、巨艦艨艟も、陸軍大兵團も、之を用ふる餘地がない許りか、後備役から國民兵役を動員しても徒に慘禍を增す許りである、是に於てか、將來の作戰を豫想して、他兵種、艦船の比率を適當に按配せねばならん。所要に滿たざる航空兵力の保持使用は、何等の意味をなさんのである許りか危險である。

又空軍の損害は相當に大きいものと思はねばならんから、第二線、第三線の豫備を充分保有せねばならん。啻に航空機のみに止まらす、人員に於ても亦充分の豫備を持たねばならん。

航空機（飛行機飛行船氣球等の總稱で此所では主として飛行機に就きて述べる）の能力は、グラーフツエツペリーンに關しては周知のことであるが、現在飛行機の世界記錄は次の通りである。

無着陸航續距離	七、六六三粁
無着陸航續時間	六五時二五分
最大時速	四四八粁一七
最大上昇限度	一二、七三九米

實用と記錄とは固より同一視してはならないが逐次記錄に近づきつゝあり、又軍用機は武裝の關係上著しく性能が惡いが、其概數を擧げれば次の通りである。

（括孤内は十年前）

機種	時速（粁）	最大上昇（米）	航續時間
偵察	二八〇（一五〇）	八、〇〇〇（六〇〇〇）	五、（四）
戰鬪	三二〇（二〇〇）	一〇、〇〇〇（七〇〇〇）	四、（二、五）
重爆擊	二三〇（一五〇）	七、五〇〇（五〇〇〇）	一〇、（五、〇）

此數字は時々刻々進んで行くのであるが、現在遠距離と大量を運搬し得る目的で超大型飛行機が續出しつゝあり其重なるものを擧げると次の通りである。

英國　ブラツク・ノンアイリス　千九百五十馬力　搭載量四噸六、時速二〇〇粁　航續時間八時十五分。

伊國　カプロニーca90型、六千馬力、搭載量十五噸、時速二〇〇粁、航續距離三五〇〇粁。

獨國　ユンケルスG32型、二千四百馬力、搭載量十一噸、時速二二三粁、航續距離四〇〇〇粁。

瑞西　ドルニエーDOX飛行艇、六千三百馬力、搭載量十五噸、時速二〇〇粁、航續距離一〇〇〇粁。

米國　ゼネラルデベロツプメント會社クリスマス飛行機、八千馬力、搭載量二十五噸、二百六人乘、航續距離一二八〇粁（本年十一月竣工豫定）

右の内で航續距離の最も長いエンケルスG32型は、北京＝大阪往復、仙臺＝沿海洲尼港往復（共に三七〇〇粁）、東京—浦鹽—イルクツク（三八八〇粁）、東京—アルシアン群島ダツチハーバー（三七〇〇粁）、桑

屏東―新嘉坡間等何れも途中無着陸で飛行し得るのである。

是等の飛行機は、滯空時間が長いから、都市上空の防禦には好適で武裝も亦充分で、平時には、輸送用として用ゐられるのである。

此の如き飛行機の航續時間の延長は、國防に大關係があり從來の國防計畫を根本から覆すものである。日本海や、東海や、日本布哇間が問題にならない。即ち日本は周圍の國の航空機に對し全然暴露開放されたのであると云ひ得るのであるから、帝國民は一段の覺醒が必要である。

卅七八年戰役當時に飛行機があつたならば、敵線の後方深く入り込んだ橘川、沖兩氏の苦心も救はれ、乃木將軍の旅順包圍も一週間も費さずに成功し、佐渡丸常陸丸の慘事もなく、波羅的艦隊や浦鹽艦隊に對する東郷元帥、上村大將の焦慮も著しく緩和せられたであらふ。是れを思へば將來戰に於て航空兵力の多寡と其能力の高低は、眞に勝敗の數に關するものと謂ひ得るのである。

之を要するに、敵情を偵察する偵察機、此偵察を掩護し又敵航空機を攻擊する戰鬪機、敵の地上に對する攻擊をする爆擊機雷擊機の完全なる比率と必要數の充足は、國防の第一の要求で、其制限は軍の死活に關すると知るべきである。

飛行船は、グラーフツェッペリーンの實際證據立てたる如く、航續力の大なる點に於て海上遠く敵情の偵察に出る爲めには必要であるが飛行機の攻擊を受けた場合の結果に關しては、大戰中期以後の失敗に鑑みれば、一考を要する點がないでもあるまい。

飛行機は空中に停止する事が出來ないから靜止して其地域を監視することは氣球に讓らねばなるまい。

以上は主として、航空機本位で述べたのであるが、之に附帶する諸施設、器材の補充、航空工藝の點に就きては、專門的には、可なり爲すべき所が多いので、人員の養成は所謂精兵主義で行かねばなるまい。

三　非軍事航空振興の要

航空機の軍事以外の用途に關しては第一に航空輸送を擧げねばなるまい。現在はスピード時代である。時之れ金なりである。此意味に於て、採算不良なる事を承知で列國は、此最新高速交通機關に大なる力を注いで居る。昨年十月末、世界に於ける定期航空路の延長を私的に調査した結果を擧げれば次の通である（航數）。

歐洲北部	二四五、七九五粁
北米	四七、六三七
中米	一一、一六二
南米	二四、六七六
亞細亞	一八、四三四
南阿	一五、四七四
濠洲	一一、六一二

日本　東京―大連。東京―新潟。大阪―松山　二、八九五
合計　三七七、六九一

主要なる國の鐵道と定期航空路の延長とを比べて見ると次の通りである。（航道を除く）

	鐵道（粁）	定期航空（粁）	百粁乘客數 鐵道	百粁乘客數 航空
獨逸	五三〇三九	三三一七〇	三四二五	三〇九
佛國	四四四一六	八二八三	一四七八	二三七
英本國	三二六二九	二七八一	四二二一	六六六
伊國	一五六九四	三八八五	六五三	二五一
米國	三九九〇七四	四七六三七	四六五	一一一
露國	七四一七六	六一七七	三五四	一一四
日本（鐵道一九二六年 航空一九二七年）	七九九三	二八九五	九二〇	―

我定期航空の內容は今尙建設時代であつて二八九五粁の內には、乘客貨物の輸送量の少い東京―新潟四八〇、大阪―松山三九〇を含んで居る。早晩有力なるものとなり得ることを信ずるのであるが、現在に於ては、極めて貧弱である。

定期航空路の現狀は益々盛になりつゝあつて、世界中の主要なる都市特に商工都市は悉く航空網中にあり。

航空輸送の經營は、獨逸が最も經濟的合理的である。飛行場は各都市が土地を提供して航空港會社が地均や格納庫や照明等の一切の設備を負擔し政府は之に對し概ね銀行利子程度の補助金を與へ、航空輸送會社は格納庫等の損料を航空港會社に支拂ひ自らは飛行直接に必要の器材と人員の最小限を有して居り、其人員の內で事務に關する人員と、飛行に關する人員との比は一對三である。我航空輸送業者の內容は知らないが、外國の此種會社の人員は、兎角事業直接の關係者よりは、事務に携はる人員の方が多く、給料も事務に關するものが、比較的多くを受けて居るが、獨逸は反對である。政府は幹線に對し、使用飛行機の優劣と、飛行粁數に對し補助金を與へ、州や市町村は、兩區間の境界迄の距離に依り、粁數に應じて補助金を出して居る。航空に關する地方の意向が、著しく積極であり、飛行場を設置して、定期航空の立寄方を航空會社に要求し、擧國航空に對する犧牲を甘受し、其利用に勉めて居るのである。

吾人が滯獨中、數多の獨逸人に對して、何故獨逸人は、航空に熱狂するかと質問し且つ、軍事航空を制限せられたから、其代償として航空輸送を盛にし、有事の際は之を軍事化するのではないかと問ふと、彼等は異口同音ニヒトと答へる。獨人は國の財的復興の爲めには、商工業は國內で同士打をしたのではいけない。外國の金を取らねばならん、卽ち貿易の振興を圖らねばならん、是が爲めには、最高速交通機關を利用するに在るので、今獨人は外人が好戰國民と見た所で、制限せられた軍備では戰は出來ないのである。又財的に第一出來ないではないか。此意味に於て、航空交通の振興は急務である。何れの國でも

未着手の貨物専用飛行機の急行便の獨逸に於て行はれて居ることは此事を例證して居るものと見得るのである。

航空輸送の目的を取違へて居る一部人士には此點を能く諒解して貰ひたいのである。

赤露も亦獨逸に習うて居り其航空の振興振りは大したものである。左に赤露民間航空の五ヶ年擴張計畫なるものを掲げて參考に資せんとするのである。

	一九二八年	一九三三年
航空路の延長	一一四二七粁	三三四二八
飛行距離	二五八四二四一粁	一九五八三九一九
飛行回數	一四八七回	八四五〇
旅客	八〇四八人	三九一五四
貨物	一〇二〇二〇瓩	一二二一五七〇
郵便	一〇八八〇一瓩	一〇三五四〇〇

此計畫は着々實行せられ、我と最も關係深き東洋方面では、伯林—莫斯科線は昨年イルクツク迄延長せられ北方ヤク—ツクに達し更に近くチタ=ハバロフスク=尼港=オホツク=カムチヤツカ=白令海から北海方面に出づべく、一方アラスカ航空會社と協定中のアルシアン群島經由北米線も時の問題が殘され居り、昨年國士號を以て瀬踏みが濟んで居る。本年一月十五日からは右の一部である、ハバロフスク=尼港=北樺太アレキサンドルブスク=我油田所在の北樺太のオハ間は飛行を開始して居る。

ハバロフスク=尼港間　四時半
尼港=オハ間　一時十五分

我オハの油田に働いて居る勞働者はサハリンスクニフエナンニツク號飛行機を製作する爲既に三月迄に參萬留の金を積んで居る。其意氣の旺なる事驚くべきものがある。帝國民は餘り呑氣ではないか。

支那の航空に關しては、昨年米支協約が出來たが、豹變常なき前例に鑑み暫く冷靜に注視するの要がある。

グッドエヤツエツペリーン會社の米亞飛行船交通は、ロサンゼルス=布哇=比律賓=上海=横濱=布哇=ロサンゼルスの巡航路であるが兩三年先の事であると思ふ。

以上を徐ろに考へて見ると、我四圍は列國の定期航空で圍まれてしまふので、單なる杞憂ではない。帝國々民は是でも航空振興の爲め立たないのであるか。日常生活に直面しないからと呑氣に構へて居られやうか。

前述の如く航空輸送は第一經濟と密接の關係があると共に、其軍事的價値は莫大のもので、正に軍事豫備航空となるのである。即ち、平時航空に關する施設は戰時直に役立つので、急速に設備せられ能はない事が平時から出來るので、飛行場の建設、工場の施設、人員の養成、航空工業の擴張等數へ來らば十指では足りないのである。從て其發達の促進は、自由でなければならん。其に對する政府の補助方法は

能率本位の經濟的のものでなければならん。由來我國の受補助特殊會社の經濟内容が動もすれば放漫に陷り易く、緊張を缺き補助が高價で能力が補助の趣旨に伴はないものも見受けられて居る。航空輸送會社の如き創立草分時代では左樣な事は萬々あり得ないが、經營の良否は兩三年後には明瞭になると思ふ。官民協力良き經營をなし得る如く指導後援する事は緊要である。

四　空軍獨立か現狀か

列强の現況を見ると大部分は空軍が獨立して居る即ち左の通りである。

英國　最も早く空軍を獨立せしめたもので一九一八年二月に獨立した。

佛國　幾多の曲折波瀾重疊の上終に一九二八年十月に獨立した。

伊國　獨裁首相自ら頭首として一九二五年八月に獨立した。

露國　革命終るや一九二二年八月に獨立した。

米國　一九二六年七月半獨立の形式を採つた。

陸海軍商工省に航空次官を置いたが、大將級を充て國防航空會議で大統領が統制して居るから殆ど獨立と同樣である。

作戰上航空兵の使用は陸海軍同一ではない。併し陸海軍に對立すべきものでなく、空は陸上水上一帶のものであつて、軍事行動上、艦隊に附隨して海戰に使用するのは、陸軍航空とは異なるが、航空を宣戰布告前後に於て有力に使用する爲めには命令は一途に出づべきもので、器材の整備、人員大部の流通は統制される事が便利でもあれば、經濟的でもある。枝葉の論議もあらうが、其等の主眼點に重點を置きて、民間航空も併せ統一さるべきものである。尚專門的に議論をすれば、非常な長篇の一大論文となるから本篇には其要點だけを摘記するに止める。何人が考へても判る事で、財的に行詰つて居る我國では大抵な所で互讓して、勢力爭ひ等は國家の大事から見れば兒戲に類する事であるから此際思ひ切つて空軍を獨立させるべきである。此聲は今や民間から起らねばならないので、判らぬからとて有耶無耶にすべきものでない。判らない事に、宜しく研究すべきであつて、現代の議政壇上に叫ぶ勇士が、航空を論ずる事の出來ない樣では、國運の伸展は圖れないのである。此點は、時代に伴ふ國民能力の進歩に關するものであるから過言叱責は甘受する。

五　結論

一九三〇乃至一九三三年に列國の航空が充實される時である。飛行機の常備數に就きて概數を比較して見ると次の通りである。

		一九二八年	一九三〇―三一年
英	七三中隊	一、五〇〇機	二、一〇〇機
佛	一四七中隊	四、二〇〇機	六、〇〇〇機
伊	一〇〇中隊	一、六〇〇機	三、二〇〇機

露	一〇四中隊	一、二〇〇機	三、〇〇〇機
米	一〇六中隊	二、〇〇〇機	二、八〇〇機
日		五〇〇機	?

軍事豫備航空たる民間飛行機の一九二八年に於ける概數は次の通りである。

英(本國)	三五四(一九二七年)
佛	八六〇(一九二七年)
伊	一〇〇〇(一九二九年)
露	二〇〇(一九二八年)
米	四二二五(一九二九年)
日	一一六(大部分古品)

此統計を見て讀者は何と考へるか、若し夫れ飛行機の質と、製造能力と、操縦と訓練等の詳細を述べたならば、唯々啞然たるものがあるのである。吾人は我航空當局を責むるものでは決してない。相當一部の事情を了解して居るが、要は豫算で縛られて居るのである。即ち豫算の範圍で遣り繰りをせねばならない事情に對し萬腔の同情を表する。吾人の望む所は、航空に對する巨頭の經綸である。抱負である。豫算を扱ふものゝ金庫番で算盤方でなく、金と算盤の運用を、經綸に伴ふ如く考慮する事と、議政壇上に立つ人々の航空に對する理解と、國民の輿論の喚起を欲するのである。夫れ當事者に到りては、道樂息子たる勿れ。一意專心自己の任務に忠實であれ。感情的なる勿れ。協調と努力を怠らざると共に大孤立より脫線する勿れと冀ふのである。本篇の執筆、非才劣筆以て人心にショックを與ふるに足らずと雖、時代の尖端を進む航空問題に對し鄙見を述べて大方の覺醒を促さんとし敢て忌憚を省みざる次第である。

嗚呼來るべき空軍縮小問題、今にして國民の覺むるなくんば國家の前途を如何せんである。徒に悲觀するを止め、丹田に力を入れて以て正々堂々萬國の双向ふ所に躋進せんことを浪人の漫語果して、君國に餞し得るや否。昭和五年四月八日稿

訂正及び取消

昭和二年十二月號の本誌に掲載せられた拙稿「日本の眞珠」中、(一)第六頁上段「最後に御木本氏が此訴訟に敗ける迄」云々と書いたが、實に敗訴ではなく特許の有效期限が過ぎたのだと聞くから、之を訂正する。(二)全第十二頁下段御木本氏の眞圓眞珠形成法が他氏の方法と牴觸してゐるといつた議論は、政府の特許局が不牴觸と認めて、正式に許可した以上、法律上明に別物である。從つて今更私議を挾むことは無意味であらうから、右の議論を取消す。從つて又、引續き第十二頁上段にある前記方法が實行可能か不可能かの批評はもはや其必要無きばかりでなく、御木本氏並に右方法の表彰に關係せられた帝國發明協會役員數氏に迷惑をかけると思ふから、右批評も亦併せて取消すことゝする。

昭和五年五月三日　川村多實二

嘘と眞實

——新進作家總批評——

武田麟太郎

新しい模様。染め替えが流行する。ジヤアナリズムは彼自身の目的のためにこれを利用する。新しい名前がおし出される。——しかし、これは大した問題ではないのだ。

問題は誰が最も藝術を——文學を愛してゐるか。誰が最も眞實についてよく語り得るものであるか。誰が歴史上の文化の眞の繼承者であるか。——ここにある。

1

新しい名前のラレツとその解説はすでに常識になるまで、屢々行はれてゐる。誰は技巧にすぐれ、彼は混沌のうちに迫力を持つ——云々と繰りかへされた。

だから、ぼくは少しちがつた話し方をする必要がある。

共通した原則のないことを、何ら強引されるもののないこと、自由な製作者であることを、多種多様の世界觀と色彩を持つてゐることを、——それらをつねづね誇らしげに語つた新しい文學者の幾人かは、しかし、プロレタリア文學に反對であり、プロレタリアの敵であることを人々に知らせるために、團結して見せた。新興藝術派クラブ。

これらの結合をマジメに、彼らの藝術的觀點からのみ、理解してはならぬ。これはジヤアナリズム線上の運動であらうとすることが第一の目的であるからだ。彼らの藝術を與へようとする對象を、プロレタリア文學がすつかりサラッて行きさうに見えた。彼らはさうなると困るのだ。新しい藝術を製作するだけの技術を持ちあはせてない彼らは、ウロタへざるを得ぬ。そして眞實ウロタへた。幸なことには、日本の社會的な條件は一時、彼らに力を借してくれさうだ。反動の精

神が意識的に確立され、組織されつつある。そこで、彼らは、このスキに乘じた。誰でもいい。きみも來い。プロレタリア文學に反對なのは誰でもいい。みんな味方だ。俺たちは反動の文學を作らうと、無氣力なものを書かうと、それで食へたらさへいいのだ。——團結は力であることはプロレタリアの方でも云つてゐる。だから、何でもかんでも、先づ團結だ！

から云つても決して「新興藝術派」の諸君は怒つてはならぬ。諸君の團體の顔觸れを考へて見ればよい。これが本當の叫びなのですよ。諸君の團體のうちに、藝術を愛さうとよき意志だけは持つてゐる人々（しかし如何することが眞に藝術を愛する途であるかを理解しない人々）の數人をぼくは認める。そして、それらの數人は、この鳴物入りの「運動」（藝術の運動ではありません）に參加してゐることを顧み、苦笑を禁じ得ないでゐることも知つてゐる。

讀者よ。作家を（このブルヂョア治下の作家を）ひたすらに藝術をのみ追ひ求める神聖なものと考へることを先づやめなければならぬ。すでにコトワザに云つてゐる。「金が書く！」と。

だから、新興藝術派なるものの運動は最初から、眞の文學運動ではない。ジヤアナリズム上の運動であるとすれば、彼らが藝術を愛すると口に云ひつつ、眞實には藝術をそんなに愛してないことが分る。藝術知らずの藝術派は一九三〇年のカリケチユアだ。

彼らは藝術をケガス。どのやうにしてケガスか。彼らが誇らげに云ふやうに「多種多樣なる」形に於いて、眞實を求める氣力がないことにのみ共通しながら。

2

では、どのやうに嘘をついてゐるか。それらはこの派に屬することを高言してゐる作家たちのものを讀めば分るのであるが——讀むのを莫迦らしいとする人々のために、簡單に記せば——。

「あなたがたが數字と公式よりはもつとくつろいで眞理を識りたいんでしたら、どんなむづかしい思想でも噛んで含める樣に繪入りでわかり易く解說してくれる、幼稚園の先生じみた藝術家もゐるんですし、あなたがたが理不盡な階級の壓迫から人生を暗くしておいでなら、それに反抗の方途を敎へるポスタアじみた藝術もあるんです。云はばそんなものをば選り取り次第なんですが、私は少しばかりの木戸錢で、王さまでも乞食でも、資本家でも勞働者でも、男でも女でも、年寄でも子供でも、ちよいとの間現實生活の忍苦から、樂しい幻想の世界へと解放して、せちがらい浮世の裏側へ、失はれた樂園を描いてみたいんです」

この引用は、新興藝術派の「雄々しき鬪士」（岡田三郎の言葉）龍膽寺雄の「街のナンセンス」と云ふ本の「藝術を街頭へ」なる序文からとつたものだ。

ぼくは正直者なので、から云ふ文章をパラドキシカルなものとは思

はない。「雄々しき闘士」が何のために闘つてゐるかがよく分るではないか。自慰的幻想の萬才である。階級闘爭なんか口にするやつは死刑にして了へ！

そして彼の文學はこの口約束を忠實に實行する。所謂モダアニズムの小説である。何がモダアンであるものか。女のことをマダムと云つたり、そのマダムが黒の着物をきて酒場（バア）に來てヤタラに西洋煙草をのみ、カクテルと云ふものをあほつたり、何とか云ふ名前の自動車に乗つたり、性慾を起したりするのが「ハイカラ」だと考へてゐる、月給八十圓で百二十圓の洋服をこしらへるのに得意な會社員みたいな、古くさい文章をかく。ぼくはこの素人文藝にムシヅか走るのであるが、新興藝術派の先驅で親方に當るやうな人もムシヅか走ると云つた。この親方なんかはまだ藝術を愛しようとし、眞實を語らうとし、そして彼の時代には彼のものの見方で、そのことができたのだ。だが同じやうなモノサシしか持ち得ない「雄々しき」藝術派の新しい闘士たちは、現在の現實にはそのモノサシはすでに陳腐なのである。そこで「魔術」でもつてゴマカシさるよりしかたがない。

古いモノサシで、しかしマジメに眞實をさぐらうとし、しかしこの發展に發展をかさねた資本主義の現實にはどうもうまく行かないので、ゴマカスよりはと、小さく一個の點だけに丹念になつてゐる作家に堀辰雄があげられるだらう。うちあけると、ぼくにはまだ堀辰雄の小説が充分解ボーできないのであるが、少くとも、以上のことと次の附け加へはできるだらう。たしかに、彼は一點に凝固する。そいつは動かない。動く世界と人間のうちのある部分を固定化させて、彼はコツコツと計算する。だから方法としてはマチガツてゐるが、時に抽象には成功することがある。

彼と共に新興藝術派クラブに屬してゐると報じられてゐる、自分に（どんな自分であるかは分析しずに）忠實すぎて軌道を持たぬ小林秀雄や、文字と文章の内的關係の美學のみを探らうとしてゐるらしい永井龍男なんかのマジメ派は恐らく同じクラブの他の不眞面目派にとつて、ちよつと苦手な存在だらう。味方と思へるものから輕べつされたり、内實を見すかされてゐるのはどうも嫌なことだから。

それから、所謂藝術派の先驅たちにも分らないと云はれてゐる久野豐彦の文學。（彼のダグラシズムは有名であるが、まだダグラシズム文學は製作しないらしい。）――一例。「虎に化ける」

新潮五月號所載の合評會記事によると――

中村。（武羅夫）久野氏の「虎に化ける」と云ふのは、どうもよく分らない。（中略）出來がいゝのか、悪いのか分らない。（中略）笑へない、可笑しいのだか何だか分らないから。

岡田。（三郎）僕にも分らんね。

淺原。（六朗）あの人の聯想は、兎に角、獨得だね。

中村。さう云ふ所に特異性はあるけれども、餘り一人だけの特異性で、多少の共通性がないと困る。

淺原。誰も分らないでせう。後略。

――合評會の速記と云ふものはデタラメなのが多いが、恐らくはここに引用した人たちは校閲されただらうと思ふ。だから、これらの人たちが「分らん」と云つてゐるのは信じてもよいだらう。分らんでもよろしい。どんな文學でもよろしい。「マルキシズムを敵として藝術(ブルジョア藝術の意味でせう)擁護の運動(!)に參加しつつある闘士」(これも岡田三郎の言葉――文學時代四月號)である限り、久野豐彦は存在の理由を持つ。ぼくは久野豐彦もかつて進歩的な文學者であつた時代を知つてゐる。その當時、彼はまだ進歩性を持つてゐた小ブルジョア性の線に沿つて固定したアカデミックな文學を破壞しようとしたことがあつたのだ。だが、徒らに狂奔し、怒號することによつてであつたので(小ブルジョア性の故にである)ついにそれは無効に終り、今、彼は新しく現實のゴマカシ手――同じ合評會の記錄「淺原。あれはやはり魔術だね。」が報ずるやうに、魔術師として登場した。――藝術家を手品師と同列に置くことに、所謂藝術擁護派がダマつてゐるのは實におかしい。

　楢崎勤は如何。――ぼくは人々か――所謂藝術派の人々が最大の讃辭を送るのを變だと思つてゐる。彼はそのお世辭のためにトテツもなく脫線することがある。たとへば、「上廚の風」にしろ「ズロオスを穿忘れたお孃さん」にしろ、これらは新しい文學としては云ふまでもなく、彼としても横道だ。彼は異常なセンチメントを持つてゐるが、彼はまだそれを充分こなし得ずにあつかひかねてゐる。「明日へ游ぐ」とか「十七歳の感情」とかはその例だ。だから、ぼくは藝術派の人たちが彼を甘やかすことは、彼らの文學の損だと考へるのである。だが、「文學」がいくら損をしても、と云ふ意見ならばしかたがない。

　佐左木俊郎と楢崎勤とは同じ會社にゐるので、よく一しよに論じられる。彼もれいのクラブへ、如何云ふわけか知らないが、入つてゐる。これも不思議だ。ぼくは彼にクラブ員としてよりも新しい農民小說家を見出してゐる。農村と都會とを對立させることによつて、農民と勞働者とを分離させる悪い常識の殘りを持つてゐるやうだが、こいつをなくすることが問題なのだ。ぼくは彼がさうなりつつ、その筆を整理して行くことを望む。

　しかし、整理と云ふやつは中々ムツカシイ。へたに、へんなもので整理すると阿部知二流の文學ができあがる。(ついでだが、ぼくにもちがつた方面からではあるが整理癖がある。こいつも阿部のもどちみちインテリ趣味におやぢを持つてゐるもので、これをこそ整理して了はなければならん)阿部は何にでも同情と理解のあるやうな表情をする。しかし、究極に於て、その同情や理解は淺薄なものである。彼は小ブルジョア生活をオツオヅと理想化する。丸善や外國化粧品製造株式會社のカタログを見て、いかにも、それらを日常使用してゐるかの如き小ブル的虛榮にみちた、人物や行動のみなぎらし方をする。徹し

てたいのである。「日獨對抗競技」でも「白い壮官」でも「戀とアフリカ」でもさうだ。――現在、眞實を見るためには致命的なインテリゲンチヤ的態度に安易に坐りこんでゐるがためだらう。

井伏鱒二は奇怪な存在として殘る。彼は悲しいのである。悲しいはなしを悲しげに語り得る技術を持つてゐる。しかし、何が悲しいのかと考へ出すと、井伏もくだらんことを悲しがつてゐることに氣がつく。彼と中村正常とはこれも一しよに列べられるのが慣例である。彼も悲しい表情を持つてゐる。しかし、井伏ほど、ひたむきでない。だから、ゴマカシも早いかはり、ゴマカシの術も餘り深くない。――ぼくは彼の珍妙な會話が省電の中で、へんにモダンな、不良大學豫科生と不良女學生らしいのとによつて、まねられて使用されてゐるのをきいたことがある。あのへんの會話としては見ぐるしくはなかつた。その存在がすでに見ぐるしかつたからではあらうが。

ぼくは疲れた。もうよさう。悪口を云ひすぎたやうだが、ぼくはきみたちの「好きな」藝術のためにはさうせざるを得なかつたのだ。お互ひにもつと藝術を理解しませう。それがいやなら、藝術派なんて潛稱するのはやめたまへ。きみたちについてゐる有象無象を新興非藝術派クラブへ再組織した方がいい。

3

讀者諸君は同じ新進作家でもプロレタリア派の方へぼくが味方するであらうことを、最初から知つてゐただらう。その通り。ぼくは彼らをこそ、本當の新興藝術派の名で呼ぶのである。その名に値するからだ。彼らはゴマカシ手ではない。「現實生活の忍苦から」自慰的幻想の世界へつれて行く手品師ではない。あほうらしい女のことばかりも考へてゐない。解釋の論理を見つけ得ないので、ナンセンスなことを云ふ赤ん坊でもない。きれいな庭園で籐椅子に腰をかけて、ムツカシイ西洋の本を讀んでゐる男をえらいとも思はん。

しかし、彼らは現實の中へとびこむ。どこに眞實があるかを探らうとする。浮世の忍苦をそれと認めて、そこから本當に解放されるやうな途を考へる。動いてゐる世界に對しては動く眼を以て、廣い社會に對しては廣い眼を以て、見る。人間と人間との交渉の論理を知つてゐる。すじ道通つたことを云ふ。寄生蟲みたいな生活を卑しめるだけの良心を持つてゐる。

プロレタリア文學と云ふものはプロレタリアの眼による文學なのだ。プロレタリアと云ふやつは、單にブルジョアに對立するだけのものぢやない。そいつを覆ひつくす――自分をもなくして了ひつつ――存在なのだ。對立する階級の一方でありながら、階級と云ふ歴史の汚辱をなくしようとするやつなのだ。だから、プロレタリア文學と云ふやつは、ブルジョア文學に對立だけしてゐるやうな、そんなケチくさいものではない。どちらも藝術だ、一つ對抗しようと云ふのではなく

て、お前んとこは嘘だ、藝術ぢやない、俺の方が本當の藝術だと主張するのである。

しかし、その文學はまだ若い。甘やかしてはならぬ。不滿や缺點はどんどん指摘さるべきである。公然とやられていいのである。さて、プロレタリア派の新進作家にはどんな連中がゐるか。

ぼくは勞農藝術家聯盟——通俗に云へば、文藝戰線派の人々をプロレタリア派と考へてゐないことを、最初に云つておきたい。何故さうかはもうクドクド云ふまでもなからう。だから、あの派から新進作家が、岩藤雪夫を除いて（だが、こいつは仲々大物なのだ）出ないのをちつとも不思議とは考へぬ。今時の青年で、堺や山川のあとにくつついて行くやつがないのと同じ理由だ。文藝戰線には老大家が多いが新進がゐないのである。頭のいい連中は日本プロレタリア作家同盟に來るだらうし、惡い連中は所謂、藝術派へ入れて貰つてやつと存在するだらうからである。しかし、岩藤は問題だ。彼の力は大きい。彼はガムシヤラだからだ。いい意味で露骨だからだ。そのくせ彼のたたみかけ、投げつけの間にヒヨツクリ、しみじみした感情を出す。これが牽引する。——だが、その描寫の無政府的なのは、やはり、彼の所屬する團體の政治的意見を忠實にバクロしてゐる。自然發生的なのだ。何を以て統一するかについて、彼自身は、彼の團體の社會民主々義が用をなさぬことを知つてゐる。だから、いつも、その點をアイマイに殘して了ふ。——ぼくはこの作家が新しい意見のもとに立ち直る日を切望してやまないのだ。きみの讀者はきみにさう云ふ。

岩藤が勞働者出身であることを、彼の「いゝ意味で露骨」な行文で現してゐると同じく、徳永直も橋本英吉もそんな特徴を持つてゐる。彼らはアケスケとして居り、時には無慈悲であり、ザンコクでさへある。これらの生の感情は尊いものだ。新しい階級の人間の素地をここに見ることができるからである。徳永は貴司山治と共通してゐるやうに見えるが、貴司のやうに大衆に媚びない。兩者とも大衆を熟知してはゐるが、その仕方にはやはり差異があるのだ。徳永は大衆の中から、貴司はその外から。ぼくは徳永のこの態度は相當深いものだが、狹いのではないかと恐れてゐる。彼はこの後、如何やうに發展するかはかなり疑問である。それに反して貴司は自分を——自分の態度を漸次に征服して行く途を歩いてゐるやうに見えるのである。彼は廣いからだ。

橋本はもつと素地のまゝであれ。彼はへんにインテリくさいところをねらつたりする。興味の置きどころをはづすのだ。彼が最近舞臺を國際的に求めだしたのは、これは傾向としてはいゝのだが、ぼくは、もつと日本の勞働者と直接にしろ間接にしろ切實な關係を持つてゐなければならぬ、と考へる。突然、ドイツやメキシコに飛ばれると、資本主義は世界のあらゆる國々を自分の顏に似せて作り、萬國の勞働者は同じ運命にあるとは云へ、ちよつと、讀者の興味から遠のくのである。ぼくは外國を背景にした小說は充分考慮の上、製作されるやうに

しなければならぬ、との意見を持つ。

この不滿は中本たか子にも通用する。（中本は作家同盟に未だ屈してゐないやうだが）彼女の精力と野心と勇氣は類のないものだ。しかし、その文學は未だ智識階級のものでありすぎる。硬いのだ。彼女の過去の文學的習練からサッパリと別れねばならない。

窪川いね子は女性の筆を持ちながら、しかも、中本と同じやうに女性のゐない文章をかく。どちらにも、女性の色彩をかんじ得ない。窪川の平板な描寫はもつと高まつたものとなる必要がある。彼女はもつと、プロレタリアの「女性」味を前面に押し出していゝやうだ。性的な臭さがある方がいゝ。生き生きとしなければウソだ。

人間を仔細に描き、浮きあがらせる作家は中野重治だ。彼の人間にはみな親しさを持つことができる。人間の臭ひを持つ。彼は個をかなりその背景と共に描き得る。しかし、つねに背景として止つてゐる「春さきの風」や「砂糖の話」や「停車場」など。彼には立體的な、集團的な手法がかけ、その代り、いけないものを持つてゐる。何故、彼は封建時代の名人みたいなやり方をするのだらう。最近に、名人なんて言葉は存在してゐない。しかし、彼の筆致は至つてこまかいのである。必要なことを選擇しないのである。些末にこだはる。時々、ぼくは彼の文學に貴族趣味をかんじてビックリする。

中野に抒情詩が多すぎるとすれば、鹿地亘には少なすぎると、云へるだらう。「動員線」は彼として野心的な作品であつたが、まだぼくは具象化が足りないと思ふ。もつと各モメントに於てその描かれてあること自身からの力がもりあがつて來なければならぬ。彼は自分の氣持で、それをおつかぶせて了ふ。どんどん彼が書いて行くことを望む。

藤澤桓夫が病氣の治療のために、活躍を阻害され、長沖一が軍隊につれられて行つてゐるのはぼくらにとつて大きな損害である。藤澤は實に敏感にプロレタリアの美を吸收した。もちろん、橋本に於て見たやうな、外の興味に視點を外す缺點は注意されねばならぬだらう。「ローザになれなかつた女」に現れたやうに。彼自身も云ふやうに、彼の最大缺點は身體の弱いことである。強い彼が、もつと現實に直接にとびこむ日を想ふことは、ぼくを勇氣づける。早く丈夫になれ。

長沖は偉大な未製品である。彼の「夜」や「敵」「母子一景」で見られたやうなリアリズムの深さはぼくたちに、大きな未來を約束する。

同樣に小林多喜二もぼくはすごい未製品だと考へてゐる。小林はどんどん新しい形式を攝取しつつ、努力的な作品をしあげる點に大きさがある。描かれてある事實の故にあんなにまで喧傳された「一九二八・三・一五」と「工場細胞」とをくらべて見給へ。彼は彼の雜然たる達筆から、こんなにまで早く自己を制御する方法を知つた。個と集團とが彼にあつて、矛盾なく、浮彫り的に描かれやうと方向してゐる。彼の未來は恐しい。

立野信之は軍隊小説の書き手として知られてゐるが、そして、彼の

今までの傑作はその中にあるが、ぼくは最近の質素な文章と構成に注意してゐる「情報」なぞぼくのきいた限りの批評はいけなかつたが、ぼくはあれは面白いものと考へてゐる。作品はまだ觀念的なところもあつたが、あれの中にある芽はいいものだ。彼が、表現形式にどんなに苦心してゐるかゞ、よく觀はれるのである。

4

以上、大體ではあるが、そしてぼくはムツカシイことが云へんので、實に通俗的ではあるが、今日のジヤーナリズムが新進作家と呼んでゐる人たちを檢討した。そして、その目的の大半は、最初にかいたやうに、眞實の文學者であるか、と云ふことであつた。五月八日朝。

新刊紹介

◇**ケルンの鐘**　小島勗著・ケルンの鐘以下五篇の戯曲小說集・文藝戰線叢書第七篇。（東京神田九段下ビル文藝戰線社・五十錢）

◇**貞操の洗濯場**　島洋之助著・脱衣のまゝの世界を覗いて來たのだといふ著者の歐米獵奇日記。（東京神田三崎町赤爐閣・價一圓六十錢）

◇**農民文藝三講**　犬田卯著・農民文藝の意義方向等の解說。（東京府下杉並町成宗一一三全國農民藝術聯盟出版部・價五十錢）

◇**實話唐人お吉**　村松春水著・唐人お吉流行（？）の先驅者なる著者の眞摯なお吉の史實研究。（東京麴町下六番町平凡社・定價二圓）

◇**日本永代藏評釋**　佐藤鶴吉著・西鶴の傑作日本永代藏の周到にして懇切なる註解批評書で國語研究者の爲の好著。（東京神田錦町一明治書院・定價二圓六十錢）

◇**眞宗大綱**　島地大等著・眞宗槪說、正信偈講讃、歎異鈔講讃、阿彌陀經講讃の四篇集。（發行所同前明治書院・價三圓五十錢）

◇**親分子分浪人編**　白柳秀湖著・親分子分三部篇の終篇で、本篇に於ても著者に約三分の二增補改訂をなし關ケ原役後の浪人廢藩置縣後の浪人に分ちて社會變動と浪人の發生及び役割等を經とした生きた國史として讀んで面白い。（東京京橋第一相互館千倉書房・價一圓五十錢）

◇**詩集カチ**　內野健兒著。（東京市外野方町新井四三〇宣言社・定價一圓）

◇**農民の經濟學**　鑓田研一。（東京府下杉並町成宗一一三全國農民藝術聯盟出版部・價廿錢）

福田德三氏逝く

福田博士の思ひ出

河上肇

私が始めて博士に會つたのは、私が大學を卒業して間もない頃であつた。多分それは明治三十五年か三十六年かであつたらう。博士の方は海外留學から歸朝されて間もなき頃であつた。私は『國家學會雜誌』の編輯委員として、始めて博士を訪問した。當時博士の寓居は本郷の千駄木であつたかと思ふ。通された應接間には西洋人の肖像を描いた大きな油繪があつた。後になつて思ひ出したことだが、それは多分ブレンタノーの肖像であつたであらう。やがて出て來られた博士に來意を語ると、『俺にはお前の言ふことが能く聞えぬぞ』とでも言つた調子で、大きな聲で聞き返へされるので、初對面の私は聊か面喰つた。博士が耳を病んでゐられると云ふことは、當時私の全く豫期しなかつたところなので。博士は直ちに寄稿を承諾され、論題は『トマス・ダキノの經濟學說』とすると云ふことであつた。私はこれにも面喰つた。私にはトマス・ダキノとは誰のことだか分からなかつた。私はそれをトマス・アッキーナスとおぼえてゐたのだから。

やがて博士から來た論文は頗る長篇のものであつた。私が今でもハッキリ覺えてゐることは、論文中に歐文が非常に達者な筆勢で頗る多く引用されてゐたことだ。外國語の素養に乏しい私は、印刷の校正の折に非常に弱つた。おそらく當時の『國家學會雜誌』を調べて見たなら、歐文に澤山の誤植があることだらうと思ふ。

かくて私が博士から受けた最初の印象は、甚だ威嚇的であつた。その後、社會政策學會の例會などで屢々一緒になつたことがあるが、私

は他の人々の言ふことにはさう驚きもしなかつたが、博士の話の中には屢々私の心得てゐないことが出るので、私は心ひそかに恐れを抱いた。當時博士はまだ學位も有つてゐず、それに高等商業學校（今の商科大學の前身）の教授であつたのだが、私は私が習つた大學の博士たちよりも、福田氏の方が偉いなと思つてゐた。

その後暫くの間、私は博士の書かれるものによつて啓蒙されもしたし、且つ絶えず刺戟を受けた。その點において私は少からず學恩を受けてゐるわけだ。

今日博士の訃を齎らし來た新聞記者諸君の質問されるがまゝに『社會問題研究』を調べて見ると、私は大正八年一月にあれを創刊してゐるが、それから間もなく私は博士から攻撃されてゐる。私は『社會問題研究』の第四冊としてマルクスの『賃勞働と資本』とを譯出したが、その際私がその譯文の底本としてカウツキー版を採用しなかつたのは、私が學問研究に名を藉りて社會主義の宣傳をするのだといふこと、これが博士の攻擊文の趣旨であつたかと思ふ。それより以後幾回か博士と論爭を交へた。今振り返つて見ると、それは丁度私がマルクス主義に向つて進み出した頃から始まつたもののやうに思はれる。



福田博士

吾々は幾度か論爭を重ねたが、それは私的の交際には少しも影響しなかつた。元來私はよく他人の惡口を言ふが、その際私はその人に對する惡意を混えてゐないつもりだ。私は自分の作物でも片端から葬り去つて來た人間だ。自分自身の書いたものでも、間違つてゐたと思へば、殘酷に之を葬り去つて來た私のことだから、他人のものなら尙のこと遠無慮に批評したものだ。しかし自分が無遠慮にやる代りには、他人が私の作物に向つて無遠慮なことをしたからとて、ちよつとは癪にさはるが、さう深く根に持つたことはない。他人の惡口を言つても同じことだ。そのために先方がさう怒つてゐようとは豫想しないのだ。おそらく博士もさういふ流儀であつたらうかと思ふ。博士がツガン・バラノウスキーを引用して資本主義の行詰りを否認されたのを、私が口ぎたなく批評したことがあるが、丁度その頃、博士は支那からの歸途、京都大學に寄つて講演をされた。博士が河上の批評に答へるのだと云ふので、學生は興味をもつて會場に押し掛け、私もまた傍聽に出掛けた

が、その時でも、相會ふと、『ヤア〱』といふ挨拶をして直ぐに雜談に移つたと思ふ。講演が始まつた後、さて博士が何を云ふかと待ち構へてゐると、博士は開口一番、今日は河上の批評に答ふべきところだが、河上をやつつけるには七ッ道具が要る、今は旅行からの歸途でその七ッ道具を持ち合はしてゐないから、河上への答辯は他日に讓る、といふ意味のことを述べて、滿場を笑はせた。

私が『資本論』の翻譯に着手すると、博士は高畠氏の肩を持たれて、私の譯文をケナされた。それで私はムキになつて、それを反駁した。今日調べて見ると、それは昭和二年十二月の『社會問題研究』に載つてゐるが、それが博士と論爭した最後のものと思ふ。

翌昭和三年（今日新聞記者には昨年と言つたが、それは私の記憶違ひで、一昨年の昭和三年であつた）——昭和三年の秋であつたか、博士は改造社の『經濟學全集』の講演會のために京都へ來られた。その折私は久しぶりに博士をその旅館柊屋に訪問した。博士はその折疊の上に横になつてゐられたが、私が山本社長と共に坐敷にはいるや、いきなり起き上がつて手をさし延べられた。今ではそれが博士と握手した最後の機會となつた。

今歳正月居を東京に移して以來、私は博士に會ふ機會を遂に有ちえなかつた。新聞紙で病重きよしを知つた折、直ちに見舞の電報を病院あてに出したが、その時は直ぐに返電が來て「厚意有りがたう、危篤にあらず」としてあつた。追々快方に向つてゐられるのかと思つてゐるうちに、今日思ひ掛げもなく訃を傳へられた。

博士は自分「僕はブルジョア學者だが」と私には言つてゐられた。そのブルジョア學者としては、今日まで日本にあつては最も有能な最も博識な學者であつた。そして恐らく博士は永く斯かるものとして殘られるであらう。何故なれば、ブルジョア經濟學は既にその進歩を否認されてをり、社會の情勢が到底博士以上のブルジョア經濟學者の成長を不可能にしてゐるから。（博士逝去の日の夜二時過ぎ認む）

償ひ難き損失

小泉信三

福田博士の長逝は、我國の經濟學に取つて實に償ひ難き損失である、我國の經濟學は最近十數年の間に確に著しく進歩した。固より此進歩は種々樣々の原因に依て促されたものであつて、之を一二特定の人の力に歸すべきでないことは勿論であるが、併し若し此間にあつて、經

濟學の發達に最も貢献したる一人は誰れかと問はれたならば、何人も福田徳三の名を以て答へるに躊躇せぬであらう。これは博士の教を受けた者許りでなく、公平なる何人にも異存なき所であると思ふ。然らば、博士の經濟學に對する貢献は何の點にあつたのであるか。思ふにそれは必しも博士の學殖の點のみではない。博士の博學は定評があつた。博士の學問は專門の經濟學から前後左右に擴がり延びて、法律學、政治學、社會學、哲學等の領域に及び、近年に至つては、五十の年を越えてから、既に能くする五六個國語の外に、新に希臘語の學習に着手を着けられた。斯の如きは固より常人の企て及ばざる所であるが、併し乍ら學者が考察の對象を限り、專門の範圍を狭くして特殊の研究に沒頭するならば、個々の領域に於ける博士の業績は一々皆な追隨を許さぬもの許りであつたとは言はれまい。たゞ獨り博士の學問の開拓者、先進者として後進を刺戟し奨勵するその特殊の才能と非凡の性格とに至つては遂に比類を見出し得ぬ所であつた。此點で我國の經濟學はたしかに福田博士に導かれて來たと謂つて差支ない。決して博士の思想や學説が一々多數學者の賛成同意を贏ち得たといふのではない否な反對に、博士の述作は屡々攻撃批評の的となり、時には集矢蝟毛の如き觀を呈したこともあつたけれども、それにも拘らず經濟學は博士に依て導かれて來たと言つて好い。それは經濟學の大概の領域は博士に依て開拓せられ、大概の大問題は博士に依て提起されたか、然らざるも博士に依て重大化されて來たからである。經濟史がさうである。經濟理論がさうである。經濟思想史がさうである。社會政策、マルクシズム、株式會社研究がさうである。さうして博士をして斯く學問の開拓者たり、問題の提出者たらしめたものは何であつたかといふに、その想像力批判力の非凡であつたことも勿論であるが、私は第一に博士の學問に對する熱情を擧げたい。博士は何かの機會に熱中能力(Begeisterungsfähigkeit)といふべきものに就いては餘り他に劣らぬつもりだと書いて居られた事がある。博士は實によく熱中し心醉した。博士が師事せられたブレンタノ教授は姑らく別として、博士が少くとも或時期に心醉した學者思想家を數へれば忽ち十指に餘るであらう。スミス、マルサス、リカアドオ、ミル、シユモラア、ビユヒヤアは其中に居る。無論マルクスは居る。後れてクナツプ、シユタインがある。最近には再び遡つて、アリストオトルが熱中の對象となつた。事物の愛は智を生ずといふが、博士の理解力批評力は、學者學問に對する此熱中から生れたといつて好い。さうして此熱情は博士の演説文章にその獨特の精彩を帶びさせた。それが爲めに、同じ事を他人が說くと何でもない、博士が說くと如何にも重大の問題らしく思はれて、人に特別の注意を促さねば已まぬといふやうな事も隨分あつた。博士の業績の重要なる一部分を占めたものは、西洋學説の紹介であつた。淺薄にして陰險なる批評家の中には、或は單に博士の稀本を指摘することに依つて其功業を傷け得たりとする者もあつた。何ぞ知らん、博士の此方面に於ける業績は、單に某々學者の所論を紹介し得たりといふことを以て盡き

るのではない。其眞價は熱情ある紹介に依て幾多の泰西學説を移し來つて眞實の我國學問の財産たらしめたことにある。而して此事は、博士の殆ど獨り能くする所であつたのである。博士の學問に對する熱情は他人に傳染しなければ已まなかつた。博士の往く處到る處に翕然として好學の士が集まり、學者を尊敬し學問を尊敬する氣風は欝然と して興つた。さうして此氣風は著しく經濟學の氣品を高めた。此一事丈けでも吾々は博士に感謝しなければならぬと思ふ。而して後進生に取つては、福田博士ほど張り合のある先輩はない。多少とも特色ある研究が發表されたのを見れば、その人の既知と未知とを問はず、私書か論文かの中で必ず之を紹介推賞する。著書を贈呈すれば慇懃鄭重を極めた禮狀を以て酬ひられる。其評言は多くは嚴に失せずして寛に失し、時としては過褒に陷ることもなくはなかつたが、併しこれが爲めに新進學者の勇氣が鼓舞せられたことはどれ程であつたことか。福田博士の奬勵に依て、始めて學問を以て身を立てる決心を堅めた學者は、思ふに餘程の多數に上ることであらう。

博士自身の著述の其の重なるものは、多く未完成の儘に殘された。これは見様に由て遺憾といへば遺憾であるが、博士にあつては、左程惜しむにも惜むにも當らぬことであると私は思ふ。極言すれば、博士は正に斯の如き幾多の未完成著述を殘す爲めに生れて來られた人だともいふ事が出來る。一處に停止して既得のものを整理して、纒め上げるといふやうな無趣味な陰氣な仕事は、思ふに博士の性分には合はなかつたのではなからうか。不幸にして長命されなかつたが、縱令假すに更に幾年の壽を以てするとしても、博士は日々其の新なる感受性を以て、愈々更に新なる未知のものに向つてたゞ前進し前進して、遂に衰老の身に到るを覺えずして終られたであらう。さうしてそれが我經濟學に取つて何よりの刺戟となつたであらう。私が博士の死を以て償ひ難き損失とするのは第一には此故を以てゞある。著述の完成未完成の如きは必しも深く問ふことを要せぬ。博士に依て養成せられた多數の後進學者は、必ず夫々博士に依て播かれたものを刈り取るであらう。

今日は匆々の事で博士生涯の事業を論評する遑はない。而して又それは、吾々の如き直接博士の教を受けた者よりも、年を隔てた次の時代の人の當るべき任務であらう。たゞ今宛かも手許に慶應入院後の博士から最後に寄せられた書簡があるから、それを左に載せて此の追悼の文を終ることにしたい。書簡は慶應義塾圖書館が其の新刊の洋書目錄を贈呈したのに對する謝禮狀である。文中筆者其他に對する賞讃の言もあるので些か氣がさす所もあるが、私が右段に述べ來つた博士の性格、其の學問に對する熱情は、此にもよく現れて居るから、敢て其儘を掲記する。

慶大書館ニテ
小泉學兄

慶大病院いの十號病室
一月十七日朝　福田徳三

拜啓此度は新刷圖書館目錄御恩送難有御禮申上候顧れば第一回の目

錄の時より第二回の目錄を經て此度の大目錄に到る實に隔世の感あり、而して〇〇の目錄すでに古く、××の目錄は極めてみすぼらしき著者別のものに過ぎず我邦に於ける洋書目錄の最大最新なるものが學兄の下に於て完成せられ候事慶祝此上なき事に御座候、これに付けても田中一貞君と東野利彦君とを追懷するを禁じ得ず候
さるにても義塾が此の大事業を成就し其經費を甘諾しまた助手諸氏が獻身的に働かられたる樣想像に餘あり一面美しき協力の結實として我々の意を强するに足り申候（中略）
分類は田中君時代のものを其儘引つがれ候樣拜見仕候存外無理少く出來上り居る樣に存候誤植などの見當らざるは嬉しき限りに御座候

General Remarks

Line 2　determined by はむしろ
　adopted in　の意味なるべく
Lines 5—1 from bottom　の處は意味は通り候へ共少々ヤヤコシク一寸分り憎く拜讀いたし候
仝 p. 2
Line 3　from top
without offering the least obstacles etc.
　一寸分り兼ねました
Line 4　from bottom
　that kept increasing
　went (?)
全體を通じて意味は十分通じますけれども何だか少しゴツ〳〵に拜見いたしました
本文は病間ゆつくり拜見心付候點は又申上度いと存じて居ります
先は御禮迄申上度如此に御座います　拜具
病氣は巴里以來の宿痾を平井さんに（巴里でも御厄介になりました）根本的に直して頂く爲めで大したことではありません必ず〳〵御見まい下さらぬ樣願上舛

圖書目錄を贈呈されて直ぐ其內容を批評した禮狀を書くといふやうな事は容易い事のやうで實は中々出來るものではない。而してそれが當事者にどれ程の喜びを與へるかは、自ら其人になつて見なければ分らない事である。私は早速當務の館員諸君に代つて厚く奬勵と注意とを謝した。さうしてそれが博士に最後に呈した書簡となつてしまつたのである。

筆を擱き、謹んで舊師福田博士の冥福を祈る。

（昭和五年五月十一日午前三時）

近詠

窪田空穂

不景氣久し

飯米の賣れ高減りに減るを聞け怒れる聲の市に起らぬ

食ひて後の事なりといひて借家人屋賃拂はぬものの多しと

饑ゑのため妻子殺すものの續けども人苦しきか怒くをせぬ

吉江喬松君の三女を悲しむ

相寄りて悲しむものも大方は子を死なしける親ならむかも

花のうちに埋もれむとする小き顔ひと目見る目に染み入りにけり

我が住める目白臺春めく

雨後の緑に濡るる冬の空槻の細枝の目に止め難し

櫻さく

櫻花白く咲きたれど目白臺春の曇り寒く雀も鳴かぬ

小庭春深し

古枝の木瓜の蕾のふくらみて開きなむとする閒きくれなゐ

水鉢に生き残りたる一つ金魚光春となりて色朱を増しぬ

落羽めくものを咬えし一つ雀草青き庭を跳ひ立たむとす

春の空晴れて光れり一つ雀聲高鳴けど近くには見えず

身邊に凶事つづく

あり得べき事のありしに過ぎざりと心押ふれど押へはかぬる

相繼ぎて悲しきさまを人は見す心痛めど顏そむけ難し

わが心衰へにけり事あれば踏みごたへなくよろめかむとす

童馬山房雜歌

齋藤茂吉

この日ごろ

朝々に味噌汁にして食ふ蕨は奥山より採りこし蕨にあらず

墨田川のほとりに行くといらだたしく電車罷業の街にいで來し

ともしびに翅ふるはして居たりける草かげろふはいづこに行かむ

巡業の組に入りつつ上海にすまうとる出羽ヶ嶽をおもひ出でつも

金曜の午後のいとまに南より北にむかひてゆく雲は疾し

けふの朝買ひし蕨は淺山より採りきて賣りたるものならむ

五月一日一萬人あまりの行列はここの十字にしばしば斷えぬ

赤き旗もてる勞働者と警官と先列に追付かんとして大股に驅歩す

百貨店の夜の地下室に鯉飼へり紅き鯉ひとつみづに衰ふ

山かげの湖のおとはくらやみの至れるところにふたたび聞こゆ

昭和三年八月出羽三山に詣づ

わが父も母もなかりし頃よりぞ湯殿のやまに湯は湧きたまふ

をさなくてここに來りしこともへばわれの命も年ふりにけり

うつせみの願をもてば息づきて山の谿底に下りきたりける

昭和三年八月最上平野を過ぐ

ひんがしの藏王を越ゆる疾きかぜはきのふもけふも斷ゆることなし

海上の老人

千家元麿

夕暮の海の美しさ
太陽は雲に隱れ、
夕風は朗らかな大空から吹き落ちて
波は勢よく湧き返つてゐる
帆を張つた小舟が遠近に走つてゐる
今海上は凡てが混亂した美と精力に包れてゐる
その中に一艘の小舟は特に自分の眼を惹いた
その堅實な小舟にば白シヤツ一枚の老人が一人乘つて

よく膨れた帆の下で、靜かに氣樂に辨當を使つてゐた
その老人の姿が自分の心を惹いた
老人の日に燒けた顏や腕は赫々として精力に充ちてゐる
永年海で鍛へられた愉快な健康さと
その奮鬪的な生涯の終りの圓熟した老年の
幸福を深く味つてゐるやうだ
その平和な氣樂な姿は
湧き返る波の間に
貴い幻のやうに眺められた
まるで眼に見えないものが
その小舟を愉快に走らせてゐるやうに
涼しい夕の朗らかな空氣の中を
老人は飛ぶ樣に速く自由に走り去つた

最近發見の東亞に於ける古人類

松村瞭

古人類存在の證憑は、我々人類の本源地、古さ、起源等を推論する上に、重大なる意義を有つものである。由來人類の本源地問題に就ては、議論紛々として、何れの假說も其の根柢に至つては薄弱にして、今日の處では確たる學說はないのである。從來唱道されたものとしては、北極說、熱帶地域說、原野高原說等とりどりで、何れも之を說くには、尤もらしい理由を附けてゐるが、假に熱帶說にしろ、高原說にしろ、其の條件に叶ふ地方は、唯一ヶ所と言ふべきものでないから、それが世界の何處であるかと云ふ問題になると、意見の一致を見ることが困難になり、中央亞細亞方面と考へる學者、ジァヴァ及其の以西を假想する人、阿非利加の北部地帶と說く者、さては阿非利加の熱帶地と見る學者など樣々である。

此等諸說の內、中央亞細亞說を持する學者は尠くなく、就中米國の學者に見る所で、中部亞細亞の大高原中或は其のあたりに、人類の起源を求めようとするのであつて、マシュー博士の人類退散の中心を、中央亞細亞に置かうとする說の如きは、其の代表的のものであつて、氏は此の地方は現今でこそ不毛な而かも人口稀薄な所であるが、恐くは吾人の記錄する何ものよりも、より古い文明の殘物がある。此の地方の周圍には、最も古くから記錄されてゐる文明を有する地方が隣接してゐる。卽ち西方にはカルディア小亞細亞、エジプトがあり、南方には印度があり、東方には支那があると說いてゐるのであるが、成程此等の諸地方は歷史的には極めて古いには相違ないが、人類の出現に對しては、其の間實に遠大な隔りがあつて、到底比較にならぬのであるから、之を以て直ちに人類の本源地と關聯せしむることは甚だ困難である。

米國の有名な古生物學者オスボーン博士の如きも、夙に前述せると同樣な考を有する人であるが、最近に於ては益々之を强固にしたことは近年發表の論文なり著書なりで、能く之を窺ふことが出來る。一體人類の進化は、何處の土地と雖、自然的食物の豐富で之を得るのに何等の努力をも要せぬ所では、拘束されて反つて退化的になる。故に此の見地よりするならば、最初の人類は、森林生活のもので なかつたら

うといふのは、天與の果實が四季に於て豐富にみのる熱帶及び亞熱帶地方に於ては、人類の努力が假に個人的にせよ、人種的にせよ、休止してしまうからである。此の現象は今日の原始的人類で森林生活を營むものに就て見れば、能く之を證明することが出來る。例へば南米の森林地帶に生活する土人の如きは、原野に棲息するものに比べると、其の發達に於て劣る所がある。それで人類に於ける早熟な智力と早い文明とは、どうしても食物の供給に乏しい原野地方に撫育されるもので、且つ個人的努力と智能との力に俟たなければ發達は不可能である。されば此の原則から推して、第三紀には亞細亞の低地は比較的に良く森林を以て蔽はれ、且つ水利の便もあつたし、從つて食物の供給も比較的に充分であつたらう。すると此の有利な生活狀態は、人類に取つてゞはなく、寧ろ類人猿並に樹上生活者に取つてゞある。それで類人猿が森林低地に豪奢を極める時に、曙人は比較的乾燥した高地に於ける活氣に滿ちた大氣中に發展したであらう。

此の考を以て蒙古方面を觀るならば、同地が太古恐らくは森林地方であつたことは、此處から發見される化石動物が、能く之を證明してゐる。よしや森林地帶はあつたにせよ、それは一部分に過ぎず、主として原野であつて氣分を浮き立たせるやうな氣候であり、又食物を獲得するには、強健なる身體に俟つ努力を要すべき困難な狀態にあつたらう。之を要するに蒙古の高地は、其の生活狀態が、明かに最初の人類の發達に對しては、理想的であつた。從つて吾人に亞細亞の此の方面に人類の遙かなる祖先を發見すべく期待しつゝあるのであると說いて、中央亞細亞或は其のあたりに人類の本源地を求めようとするのであつた。そして近年ニューヨークの國立博物館が、數回に亙り、アンドリュース博士指揮の下に、蒙古方面に大探檢を試みてゐるのも、畢竟するに前述した假說に出發するものと見るべきものであらう。

所でオスボーン氏の此の考を裏書するやうな事實の一端でも、從來發見されてゐたかと言ふに、不幸にして之を證明するものはなかつたのである。歐羅巴に於ては人も知る如く、各地に古人類生存の證跡があり、且つ人類其のもの即ち遺骸までも、可なり發見されてゐて、內には其の形態が發見地層の古いのと相俟つて、極めて原始的のものさへも發見されてゐるのであるが、亞細亞方面に於ては、エニセイ河上流地方に於て、豫ての探究者サヴェンコフ氏の遺業が、ソスノヴスキー及びメルハルト兩氏等に依つて繼承された結果、其の流域に於て數ケ所に舊石器が發見され、イルクーツク方面では先年ペトリー教授に依つて、舊石器時代後期に屬する典型的遺跡の發掘を見、又オビー河上流地方に於ては、コピトフ氏の調査で、舊石器を包含する地層が發見された位で、辛じて亞細亞にも古人類生存の跡あることを證するに過ぎぬ程度であつた。從つて人類の遺骸などの發見に至つては、絕えて之を見なかつたのである。

然るに近年になつて、東亞の數ケ所に古人類の生存を確證する極めて重要な發見があつたのである。其の一つは戈壁である。一九二五年

既述の米國博物館の探検隊に加はつた考古學者ネルソン氏は、戈壁の諸地方に於て石器類を多量に採集した。採集品の一部は同氏が探検よりの歸途、東京に立寄つた際、氏の厚意に依り自分は親しく之を見せて貰ふの機會を得たが、內には土器を伴ふものもあつたから、古代人類の遺物としては、左程に古いとは言へないが、オロクノール發見のものゝ內には、西部歐羅巴の例でいふならば、ムスチエ期文化のものに類似するものがあり、尙降つてはオーリニアック期或はマグダレナ期文化に相當するものもあるのである。されば戈壁地方に太古人類の棲息してゐたことだけは明白になつたが、斯る時代のものでは、到底人類の本源地を云々するやうなものではない。尤も同氏に依ると、氏個人としては蒙古には原始石器時代に屬することを示すものがあるやうであると說いて、打ち缺けた小石が多量に發見されるのを以て、夫等の多くを人工的のものと見做すといふのである。此等が果して原始石器であつたならば、人類起源說には有力な證據物件とならうが、一體原始石器に就ては、由來歐羅巴に於ても論爭の種となるものであるから、之が斷定には尠からぬ困難があると言はなければならない。それに戈壁地方發見の舊石器時代遺物と稱するものは、後述する鄂爾多斯發見のものゝ如く、其の時代を確證する化石動物の遺骸などと共に、深い地層から發見されるものでないから、時代に就ては疑を挾む餘地がないでもない。

此の戈壁の發見と相並んで、近年更に重要な發見が、鄂爾多斯にあつた。それは一九二三年巴里博物館から派遣されたテアルド・ドゥ・シアルダン師が、天津博物館のリサン師と共に、恰も前述した米國博物館の第三回探検隊の戈壁調査と時を同うして、戈壁の南方、黃河の大彎曲で圍まれる鄂爾多斯の南部高原を探検し、こゝに舊石器時代人類の疑ふ可からざる遺跡を、三ヶ所までも發見したことである。此の遺跡は地層及び伴出動物の種類から推して、其の時代に就ては毫も疑を挾む餘地のないものである。其の一つは甘肅省の北部なる寧夏の東方三〇哩餘に位する水洞溝の谷間で、此處に於ては黃土層に埋沒する多數の爐を發見し、內には諸種の動物例へば野生のロバ、ウシ、ヒツジ、カモシカの一種、ライノセロス、ハイーナ、ダテウ等の遺骨が存し、また石器も豐富であつて、或る一つの爐の如きは、約千延を拾る程にも多量に石器及び石片が發見された。石器は概して粗造のもので、歐羅巴發見のもので言ふならば、ムスチエ期及びオーリニアック期に屬する利器に類似するものである。

第二の遺跡は鄂爾多斯の東南隅に存する Shara-osso-gol の沿岸であつて、石器は諸動物の骨片と共に發見される。動物の種類は前揭のと略相似たものである。此處の遺跡は前述のものに比較すると、頗る深い地層中に存するけれども、さりとて其時代までが一層古いものとは考へられない。尤も兩者の石器は多少其のスタイルが異つてゐる所から推すと、或は二つの文化、二つの人種に基く結果かも知れないと考へられるのである。

第三の遺跡は陝西省の北部で、上述の Sjara-osso-gol の南方約五五哩にある楡林府地方に於ける油房頭附近である。石器は黄土基底の砂礫層に散亂するのであつて、何れも石英岩製である。そして遺物の散布區域は廣大であつて、此處から西南方約一二五哩にある甘肅省の涇陽府附近の黄土基底の同じ砂礫層からは、リサン師が既に一九二〇年來上述せる石器と同種のものを採集してゐたのである。此の砂礫層の人工品は、實に支那に於ては、黄土の出來つゝある間のみならず、其の最初から、そして恐くはそれよりも更に古い時代から、舊石器時代人類が棲息してゐたことを語るものである。

テアルド・ドゥ・シァルダン及びリサン兩師の鄂爾多斯に於ける此の發見は、實に亞細亞古人類の研究にとつて貴重な貢獻である。而かも此の發見は戈壁の場合とは違つて、深い地層中から化石動物の遺骨と共に發見されてゐるのであるから、其の確實さは充分に保證されるのである。然し此の大發見は決して一朝一夕の仕事ではなく、リサン師の十年間に亙る苦心の探檢が生んだ賜物であつて、師の浩瀚なる著書「黄河流域の十年」は、其の間の消息を能く傳へるものである。そして其の採集品は師の管理に屬する天津なる北疆博物院に、秩序よく整理陳列されてゐて、研究家の參觀に供してゐる。

戈壁及び鄂爾多斯發見の石器は、之を西部歐羅巴發見のもので言ふならば、ムスチエ期のに類似するものであるから、先づ舊石器時代中頃と見るべきであるが、石器は一種の文化を示すものであるから、文化の類似するもの必ずしも、人種までも相類似するとは限るものでない。すると亞細亞に於て發見されたムスチエ期の石器を使用した人類は、歐洲に於ける同期の人類と、同じタイプであつたかどうかは疑問とせねばならない。此の問題を解決し、併せて亞細亞に於ける舊石器時代人類の存在の上に、いやが上にも確證を與へるものは、どうしても人類其のものゝ發見に越したことはないので、吾人は常に人類の遺骸の發見を望んでゐたのである。然るに最近恰も此の希望に副ふやうな大なる發見を傳へるに至つたのである。

其の一つは上述した鄂爾多斯の第二の遺跡たる Sjara-osso-gol の舊石器時代の堆積層中に發見されたものである。最初は何等氣附く所なかつたのであるが、一九二七年に至り、其の採集品を點檢してゐると計らずもカモシカ其の他の骨片中に、能く化石した人類の上顎門齒が一個混じつて現はれて來たのである。發見者リサン及びテアルド・ドゥ・シァルダン兩師に依ると、此の齒牙が太古のものに屬するか否かは、絶對には確かでない。と言ふのは、Sjara-osso-gol の現在の段丘基底の砂礫を多少混ずるプライストシン・サンドに於て採集されたものであるからと言ふのである。然し其の齒の化石程度とライノセロスやザウなどの化石動物の骨片と共に發見されてゐる事實とから推測して、最新世時代のものであることは可なりに確實であり、また其の發見の場所は、舊石器時代の利器や、其の當時の殘物が發掘された地點から、僅かに五〇〇米を隔つる而かも同じレヴェルにあると言ふので

ある。發見者の委囑を受けて、之が形態學的研究を試みた北京協和醫學校のブラック博士に依ると、此の齒牙は形もよく完ひ而かも完全に保存されてゐたもので、上顎の第二永久門齒で、齒冠も摩耗されて居らず、之を歐羅巴人の例から推すならば、七八歳位の小兒ならんといふ。尚氏は之を支那發見の沙鍋屯其の他の古人類の同じ發達程度のもの及び現代の支那少年其他ラ・キナ發見のムスチエ期小兒の齒牙と比較を試みたのであるが、其の形態が所謂シャヴル形を呈することを知り、尚此の發見の齒が頗る古いものであることに就ては、其の齒の色合と黑い縱條で模樣づけられてゐる點とが、同じ堆積層中から發見された疑ふ可からざる最新世の哺乳類の多くの齒牙に見る此の種の特徴と類似してゐて、現時の地層から發見されるものに比較すると、著しいコントラストを示してゐることを指摘し、且又化石と化石ならざるものとは、其の鑛物化の程度が異ると言つて、之が比重をば支那に於ける古今の人類のと比較を試み、此の齒が最も重いことを證明し、之を以て、Sjara-osso-gol の最新世動物の遺骨の共存せることゝ相俟つて、亞細亞に於ける舊石器時代人類の遺骸の一部として彼等の生存を確證する有力な資料であると說いた。そして之を呼ぶに發見地名を取つて、鄂爾多斯齒牙と名けた。

此の發見は僅かに一個の齒牙に過ぎないが、古人類の生存を證據立てる上からは無限の價値を有するもので、吾人の希望に副うた貴重な事實である。

之を別にして更に近年重要な發見があつた。それは北平の西南方三七哩、京漢線琉璃河よりの支線の終點で、石灰岩の石切場と炭坑とを以て有名な房山縣周口店に於ける化石動物の堆積に富んだ洞窟から、之も同じく人類の齒牙其他を發見したことである。此の洞窟は抑も一九二一年北平の鑛山顧問瑞典人アンダーソン博士の發見に係り、爾後同國のズダンスキー博士に依つて、發掘が試みられたのである。其の後發掘品が瑞典ウプサラのヴイマン教授の實驗室に送られて整理中、ズダンスキー博士が、其の內に人類の齒牙二個を發見したのである。之に就ては既に一九二六年の秋、瑞典皇太子殿下が、我國を訪問されての歸途、北平に立寄られた時、殿下を歡迎すべく催された同地に於ける各種學會の聯合會の席上に於て、アンダーソン博士が報告したのであるが、其の後ズダンスキー氏は、之が研究の結果をば、豫報として一九二七年發表したのである。それに依ると問題の齒牙の內一個は、右上顎の多分第三大臼齒と思はれるもので、比較的に摩耗しないもの、殘る一個は多分左下顎の小臼齒で、僅かに齒冠のみが保存されるものである。其の形態其の他から推測して人類と名ける外、呼びようのない種屬のものであると說いた。此の貴重な發見物の埋沒してゐた洞窟の化石動物をば、最初アンダーソン氏は、恐くは鮮新世後期のものと推定した爲めか、一時は第三紀人類說が唱へられたけれども、其の後の研究では最新世前期——グラボー博士の呼ぶポリシン——のものであると言はれるに至つたのである。

斯る重要なる發見があつたので、一九二七年中華民國中央地質調査所は、北京協和醫學校解剖部と協力し、ロックフェラー獎學資金の下に、周口店の遺跡をば完全に且つ系統的に發掘すべく計畫し、各種の專門學者から成る調査隊が組織されて、發掘が試みられたのであるが、將に同年の發掘を打ち切らんとする三日前の十月十六日に、一行中の古生物學者ボーリン博士に依つて、前回ズダンスキー博士發掘の際、第一層と名けた而かも其の際二個の齒牙を見出したと同じ地點から、またも一個の齒牙が發見されたのである。

此の齒牙は其の後ブラック博士に依つて研究せられ、其の結果は一九二八年發表されたが、發見の齒といふのは左下顎の永久大臼齒で、多分第一と思はれるものであると云ふ。氏は之を現代北部支那人の小兒及び類人猿の一種たる若い黑猩々(チンパンジー)と比較し、詳細に亙る計測並にレントゲン實驗を試みた結果、人類の性質を具備するものとし、前掲のズダンスキー氏の研究した二個の齒と、同じタイプのものとするを、否定することは出來まいと說いてゐる。そして前述したやうに此の遺跡を以て最新世初期とするからには、ジァヴァ發見の猿人、英國發見のピルトダウン人類及び獨國發見のハイデルベルグ人類などと、同時代に屬するものと見て差支ないとし、新發見の此の人類をば、人類科中の新屬と見做し、之に *Sinanthropus* なる新しい屬名が與へられたのである。自分は一昨年北平に赴いた際、協和醫學校に博士を訪うたが、恰も此の齒牙を携帶して、歐米行脚の旅に出た後で之を實見することを得なかつたが、最初の發見に係るものは、北平の中央地質調査所に陳列されてゐるので、所長翁博士の厚意に基いて、親しく之を見ることが出來た。尚自分は此の貴重なる齒牙を出した周口店の洞窟を見學すべく計畫したのであるが、其の當時同地方は土匪の出沒が甚だしい爲めに、內外人から其の行を中止すべく勸告されたので、止むなく思ひ留まつた譯であつた。

自分は周口店の此の發見を以て、東亞に於て初めて知られた古人類として、太く興味を以て見てゐるのみならず、近年稀れに見る世界的大發見と稱してゐるのであるが、歐洲には古人類の齒牙一本出たきり、他には之に伴ふ遺骸の何物をも發見せないやうな例もないではないが、周口店は洞窟であり、而かもそれが可なり廣大でもあり、その上內に堆積されてゐる化石動物の遺骸は無數である。周口店が此のやうな狀態の洞窟であつて見れば、人類の遺骸とても、唯に數個の齒牙のみに止まらず、骨骼の他の部分も埋沒してゐさうに思はれたので、尚將來の大發掘に大なる望を掛けてゐたのであるが、果たせるかな一九二八年の發掘に於て、支那の若い地質學者楊鍾健、裴文中及びボーリン諸氏の努力に依り、またも人類の遺骸を發見したのである。それは壯年者及び小兒の下顎骨、齒牙、頭頂骨の一部等である。

從來は齒牙のみの發見に止まつてゐた此の洞窟から、斯も發見物を漸次に增加して來たことは、研究上大に幸福とする次第であるが、ブラック氏の豫報する限りに於ては、前年發見のシナントロプスと同種

屬で、其の齒牙といひ、顎隆起の缺如といひ、愈々原始的の形態を具備してゐることを、記載と挿入の寫眞とに依つて知ることが出來る。昨春自分はジァヴァに赴く時、ブラック氏も亦太平洋學術會議に出席すべく、神戸から同船し、會議に此の發見を公表すべく用意した前掲の遺骸のカストを携帶して居つたので、一日船中で見せて貰つたことがある。そしてジアヴアに於ても此の發表は喝采を博したのである。

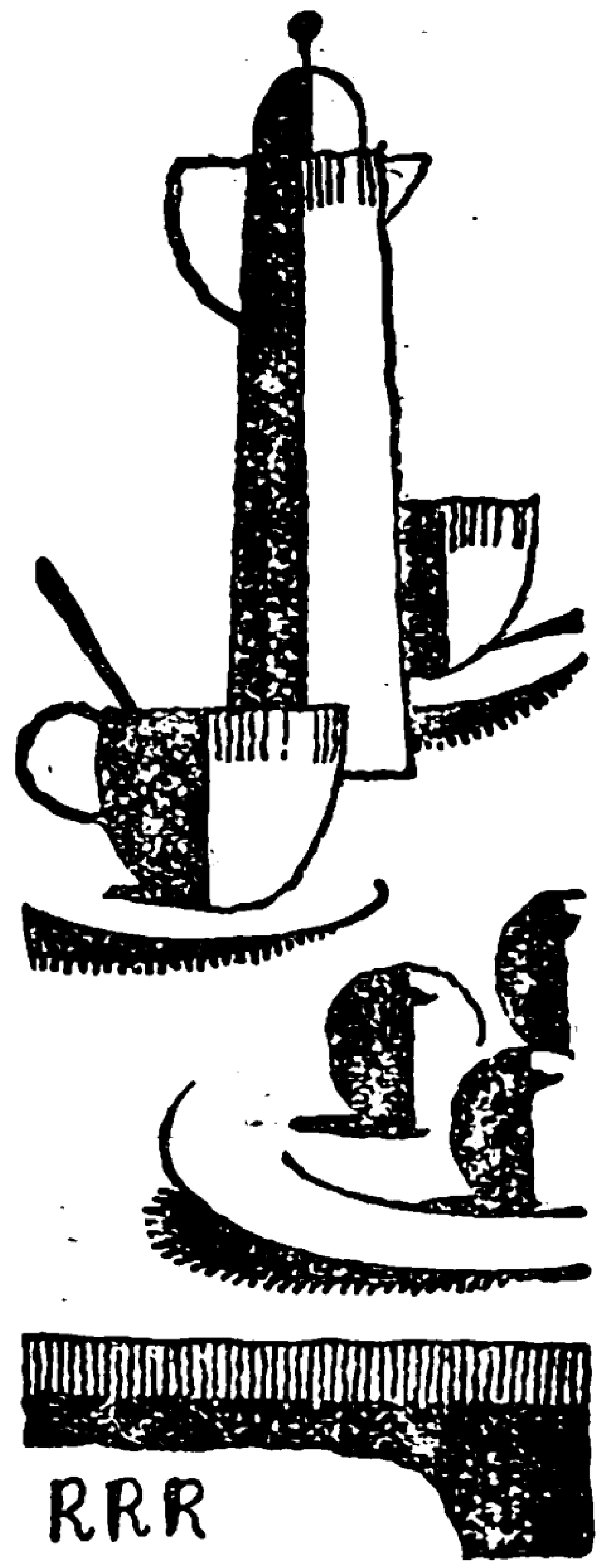
斯くして周口店發見の古人類は、漸次學界の視線を集中して來たのであるが、昨年暮の雜誌ネーチャーや支那新聞は、更に昨年引續いて貴重な發見を爲したことを報じてゐるのである。數日前受取つたブラック氏の之に關する研究の略報に依ると、昨年十二月二日に發掘調査擔當の裴文中氏の手によつて、人類の頭蓋骨一個と多數の齒牙とが發見されたのである。ブラック氏は之を妙齢の婦人のものであるらしいと説いたのであるが、挿入の數葉の寫眞によると、或種の化石人類には特徴である眼窠上に恰も家の廂に翳ざした廂の如くに隆起する眉弓が著しく發達し、頭蓋が低平なるを知る等、慥に原始的形態を備へたものであることは、前年發見の下顎骨や齒牙の特徴と能く關聯する所で、之と同時に同一種屬に屬することも明かである。ブラック氏は之を以てジァヴァ發見の猿人より進歩したタイプといひ、之と同時に歐羅巴で有名なネアンデルタール人類以前のものとしてゐるが、婦人でありながら、前述の如く眉弓の甚だしく發達してゐることは、ネアンデルタール人類よりも、更に古型を具備してゐることを首肯し得るのである。目下頭骨の附屬物を剝離しつゝある狀態であるから、其の他の特徴に就ては詳報する段に進んでゐない。

周口店の洞窟は、夥しく化石動物を出し、北平の中央地質調査所の一室には、之が積藏され、今や楊博士等に依つて熱心に整理研究されつゝあるが、同博士に從へば、一九二七年以來三回の大發掘によつて得たる採集品は、實に千五百箱の大量に達する由で、其の發掘面積も可なり廣大であつたに拘はらず、ブラック博士は一個の加工品も發見せざるのみならず、火を使用した形跡も認め得なかつたと説いてゐるが、此は器具を使用し、また發火方法を理解するまでに達してゐなかつた生物であつたといふことを、暗示する爲めのものであるか、其の邊は意味深長であるが、假令火も器具も使用するものであつたからとて、若しも此の洞窟が住居でないとするならば、文化期を語るやうな遺物は存在しないのが、寧ろ當然であらうから、此の問題は諸種の研究が進むにつれて、自然氷解されることゝ信ずる。

上述する所が、最近東亞に發見された貴重な新しい事實である。一片の石器の發見も、人類の生存を語る貴い證據には相違ないが、然には人類其のものゝ發見を望んでゐたのであるが、最近に至り支那の一部に於て二ケ所までも、其の發見を見るに至つたことは、近來にない一大快事であると共に、學界への大なる貢獻といふべきである。而かも周口店の洞窟は、既述したやうに、最初は鮮新世後期のものと考へられてゐたのであるが、其の後の研究は、最新世前期と改められ、最

近テアルド・ドゥ・シァルダン及び楊鍾健兩氏の發表する所に基くと、周口店の發掘に係る五十餘種の化石哺乳類等を、支那の他地方發見のフォーナと比較して、其の新古を識別した結果、層位學的研究と相俟つて、古生物學的に、最新世中期よりは古く、恐くは北支那の最新世前期のフォーナに相當すると說かれるやうになつたけれども、有名な地質學者グラボー博士の如きは、最新世前期でも、極く其の最初と見、また或る報告によるとテアルド・ドゥ・シァルダン師の如きは、之に四五十萬年の古さを充てがつてゐる位であるから、多少の無理はあるが、之を西部歐羅巴の例に當て篏めて見るならば、至つて其の例に乏しい程の古さを有つたもので、或は將來世界に於て、最古を以て爭ふやうなものかも知れないのである。

曩きに叙述した人類中央亞細亞起源說なるものは、從來確たる事實に立脚した假說ではなかつたのであるが、東亞方面に斯くも貴重な古人類生存の確證を得るやうになつて來ては、此の說も餘程強味を有つて來たと言つてよからう。今此の說との關係は別として、周口店の發見古人類は、ブラック博士の豫報する如く、プレネアンデルタール型式のものとすれば、ネアンデルタール人類とジァヴァの猿人との間に存するギァップを埋めるものとなるかも知れないし、或は全く別系統の位置を占めるものとなるかも知れず、或は精細な研究の結果、歐洲のネアンデルタール型の人類と同種とならぬとも限らないが、何れにしても今日までの豫報と寫眞との示す限りに於ては、假令時代に狂を生じようとも——或は狂ひ方によつては、反つて興味ある問題となる——周口店の此の古人類は、大に意義ある貴重の發見で、而かも場所が東亞であるだけに、問題は更に興味を深からしめ、人類進化史の上に重大なる役割を務めるものである。



レヴュウ時代

高橋邦太郎

レヴユウ！　レヴユウ!!　レヴユウ!!!

最近のレヴユウの流行は何といふ熾なものであらう。いつの間にか、レヴユウは日本の演藝に牢固たる地歩を獲得してしまつた。よし、それが、眞のレヴユウからは余程の距離のあるものにせよ。

又、このレヴユウがそれ自體としての存在を見事にかち得たばかりでなく、その進出によつて、演藝の他の分野にまでも、尠からざる影響を與へたことは否むべからざる事實である。

震災後の劇壇にとつて、新興演劇の出現が、ともかく、劃紀的なものと云ひ得るならば、演藝全汎に於けるレヴユウの進出、乃至レヴユウ的演出法の侵入は、これまた、劃紀的な現象と云はなければならない。

では、レヴユウとは、一體、何であるか。これについては今日迄、何人も正確な定義を下したものは無いやうである。或は、僕が淺學な爲に知らないのかも知れないが。――そして、日本に於いて今日稱されてゐるレヴユウは、また、日本特有の外延を有してゐるやうに思はれる。宛も、カフエといふ言葉に於ける如くに――

どうやら、日本に於けるレヴユウは、カフエと等しく、西洋のそれとは、相異つた進化過程を見せてゐる、と斷言しても大した誤差は無いらしい。

本來、レヴユウの原語はフランス語の revue である。從つて、正しくはルヴユウと讀まなくてはならない。だが、本家本元のフランスは――といふと少しレヴユウが下火になつてゐる。

かの有名なフオリイ・ベルヂエエルと、キヤジノ・ド・パリとムウラン・ルウヂユ等をもつて世界に誇つてゐた巴里は十九世紀の末葉から二十世紀の最初の十數年迄で、確に世界のレヴユウ界の尖端を切つてゐた。そして世界大戰の初期まで。

だから、その時代に、世界漫遊――何とこの語の古き事よ。「赤毛布」と共に既に、既に黴が生えてしまつたけれど、日本文明史には、何の憚るところなく記錄を要求していゝ語であるが――この世界漫遊する程の紳士は、テエムズ河の水を見ては、この水東都日本橋下に通

ずべきを思ひ、伯林の月に遊子の孤影を傷ましめ、花の巴里府に於ては、前記のミユヂック・ホオルに、輕羅を纒へる裸女の亂舞を目にし、ボルドオ、シヤンパアニユの芳醇なる古酒を汲んでは、徹宵の酒、夜光の杯、これ眞に歡吹海と、いつたやうな一種異樣な歡樂境に沈湎し、やがて、細腰輕し笑、といふことになるのだつた。

だから、明治三十年代迄の日本人の手になる佛京滯在記といふものを見ると、大歌劇座とか佛蘭西座の觀劇と並んで、レヴユウ見物の條があるのが常だつた。そして、時とすると、噫々、この淫靡なること眞に驚くに堪へたり。豈、唾棄せざるべけんや。千八百七十一年普佛の役起るや、皇帝ナポレオン三世セダンに敗績し、勝に乘じたる獨軍は長驅巴里府を圍み、遂に城下の盟を爲さしめたるも故無きに非ず——と、不思議な愛國的感情を勃發させたりするのだつた。

恐らくこれらの人々は、東洋の君子國から、突然、巴里に於いて爛然たる文物に接し、既に相當ドギモを拔かれた後で、進歩した演出法による、光とメロデイと豐艶な肉體の凱歌とを百パアセントに發揮したレヴユウの舞臺に接するのだから、成程、これではかのカイゼルをして黃禍論を唱へしめたのも、いかにも當然だつたと思はれるやうな殺伐なビリケン面の相恰を他愛なく崩して、それらの士はいかにニヤニヤと笑ひ興じたことであつたらう。

偖、かゝる時代に巴里で演ぜられてゐたレヴユウの出し物はどんなものだつたであらうか。古い「ル・テアトル」とか「コメデア・イリユストレ」を繙けば直ぐ分る通り、當時のレヴユウは、それほどテンポの早くない、今日程エロを發揮したものではない。——勿論、股は存分に上げて、下から見上げる好色なオペラ・グラスの十字火には供へたが——

この時分の出し物を、寫眞以外のもので見ようと思へば、昔、一しきり大流行だつた映畫「チゴマ」とか「血染のハンカチ」とかの中に現はれる舞踊とか、アパッシユ・ダンスを見たり、最近の映畫ではカトリイヌ・エスラン主演のゾラの「ナナ」中のカンカン踊を見るべきである。◦就中「血染のハンケチ」中のダンスは小山内先生も推奬してゐられた程の名手が特に出演したものである。

さりながら、世界のレヴユウ界に君臨してゐたフランスも、世界大戰中から、次第にその王位を決定的にアメリカに讓らなくてはならなくなつた。

自國に獨自の藝術を有したいアメリカは、己の絶大な資力を恃んで、この藝術を移植して一層大規模なものに仕上げたと共に、他のもう一つの絶對的條件によつて、壓倒的のレヴユウの王位を占有してしまつたのである。

然らば、この絶對的條件とは何であるか。即ちこれこそジヤズ音樂でなければならない。

これこそ、アメリカが、文學に於いてエドガ・アラン・ポオを有し、シヤウッド・アンダスンを有し、オ・ヘンリイを有し、ルイス・メ

ソケンを有する事よりも、寧、世界に向つて誇り得るものでなければならない。

このジャズ音樂を有することこそ、revue をしてレヴユウと英語讀みに讀ませるやうになつた所以なのである。

進歩した多種多様な照明法と、陸離背景を極めた肉體的訓練と、無作法な迄に驅使するジャズ音樂と、驚嘆すべき程精緻な舞臺機構をその絶對要素とするレヴユウが、弗の國アメリカに於いて、完全に、十分に眞價を發揮し得る事は、餘りにも明らかな事である。かくして、レヴユウは、愈々翼を得て、いかなる複雑なる場面轉換もいかなるテンポも、意の儘に取り得るやうになつた。

從つて、この資力的並びに機構的變化からして、從來のレヴユウの概念も多少異つて來てゐる。では、從前のレヴユウと、今日のレヴユウとの相違點はといふと、レヴユウが、追々と、益々單なるスペクタクル――視覺と聽覺を樂ませる物となつて來た事である。

試みに、最近日本で封切された映畫「リオ・リタ」のレヴユウ場面をとつてみても、いかにも大袈裟な舞臺へ、豐麗な肢體を有する裸女を並べて、艶冶な音樂につれて、目も綾な亂踏亂舞させるに過ぎないではないか。

由來、レヴユウはその發生に於いて、多少の文明批評的な一面を有してゐた。換言すれば、いさゝかたりとも智的な諷へがあつた。最近の出來事――政治的な事でも、風俗的なことでも――が、一種のバアレスクされ、洗練された歌詞なり、按舞なりによつて諧謔され、これが脚光を浴びて、所謂、樂屋落の興味をねらふのだつた。topical ballet だつた。

或はこれはフランス特有の好諧謔的なエスプリ・ゴオロワの現れかも知れないが――

しかし、これがアメリカへ入ると、少し趣が變つて來る。topical はトピカルでも諧謔的な所は影を潛めてしまひ、どつちかといふと壯大な舞臺裝置と、登場人物の多數と、急激な場面の變化とを見せて、強烈な刺激を觀客に與へる事の方が重視されるやうになつてゐる。

トオキイ出現の副産物として、アメリカのレヴユウ映畫が頻りに輸入上映されるので屢々アメリカのレヴユウを映畫によつて見る機會を得るが「ブロオドエイ・メロデイ」「ハリウッド・レヴユウ」「踊る人世」「ハニイ」「アメリカ娘に榮光あれ」「シンギング・フウル」「ストリイト・ガアル」「レヴユウ結婚」「グレエト・ガッボ」等々のレヴユウ場面を見ると殊更この感を強くする。そして、また、アメリカの興行師の眞意もそこにあるので、世界に冠たるジグフエルト・レヴユウ一座が、いかに至れり盡せりの方法によつて優秀な女優を選定し、これを養成するかに至ると、その組織的なこと、日本帝國の徴兵制度を思はせるものがある。

隨つて、肉體美の、脚の show がどうしても主となつて來るのが當然である。然るにフランスのはそれに比較すると、寧ろ、小味な所が

を狙つてゐるので、到底ブロオドウエイの大衆に受け入れられないのが當り前である。

その證據に、フランスのルヴユウ作家のリツプだの、ジヤン・グラニエだのゝ臺本を見ると、その中の數多い唄の歌詞の多くは、時事的な事件の諷刺で、場面場面にチヨツピリわさびをきかせたところがあつて、見る人が見れば、快心の笑を洩らす事が出來るのである。

このやうに、レヴユウの王座は、漸次にアメリカに移り、その巨大な資本により特殊な發達は遂げたが、しかし、古い傳統と歴史とを有するフランスは、物質的要素に於いてこそアメリカに讓れ、ジヤズ音樂も逸早く取入れて、質的にアメリカに劣るまいと努力してゐる。また、事實に於いて、質的にはまだまだどうして立派な人材を有してゐる。

たとへば、日本にも名の知られてゐる人々を擧げると萬年新造のミスタンゲツトとか、映畫「レヴユウの巴里つ子」に出演したモオリス・シユヴアリエとかは、今日なほ、アメリカが壓し得ない、いはゞフランス・レヴユウ界の精華なのである。

さうかと思ふと、アメリカから反對に天才を輸入して自國の藝能中のものとしてゐるのもある。セント・ルイス生れの黒んぼジヨセフイン・ベエカアの如き即ちこれである。ベエカアは映畫「モン・パリ」や「ジヤズ・パリ」に出演したから、既にお馴染であらう。

小唄の「モン・パリ」であるとか「ヴアレンシア」であるとか、乃至「キイ・ハヴ・ノオ・バナナ・トウデイ」であるとかは、すべて如上の人人によつて、始めて歌はれたものなのである。

さて――これ迄述べて來たところによつてフランスとアメリカのレヴユウの相違點はハツキリしたことと思ふが、何故、僕がかなりの行數を費してこの事を書いたか、といふとレヴユウの本質とは何ぞやといふ事を、具體的な事柄から、讀む人々に自づと分つて貰ひたかつたからである。

それならば、目下大流行のレヴユウは？

實をいふと日本のレヴユウはまだまだ搖籃時代なのであらう。やつと生れたばかりであるから、何とも云ひやうがないといふのが最も正直な見方である。

現象的に云へば寶塚の少女歌劇團による「モン・パリ」が上演されたのがもう二年も前の話で、その後、松竹樂劇部が大阪と東京とに設けられ、河合ダンスが次第に立派なものとなり、羽田少女ダンスといふのも組織され、遂には、川端康成氏の「淺草紅團」で有名な、レヴユウ專門の常設館「カジノ・フオリイ」さへ淺草に出來、東京朝日新聞社の隣の、近く竣工する日本劇場では、本格のレヴユウを實演する爲に、まづ、學校を起し、フランス人の教師を招いてしきりに生徒を養成してゐる。さうかと思ふと、映畫で名を得た上山草人氏が歸つて來れば早速、今迄に彼が出演して好評を博した映畫の優秀場面を斷片的に綴り合はせてレヴユウと銘を打ち、こゝのところ二三の例外

はあるにしても映畫館は途中にレヴユウを挾まなければ客を呼べないやうな有様となつてゐる。

試みに、毎木曜日の各新聞の夕刊をひろげてみると、新鮮なインクの匂が鼻を撲つと共に、黒々とした映畫の廣告が網膜を痛烈に刺戟する。その中に一際大きく曰く「復興の東京」曰く「花のをどり」曰く「東京をどり」等々の本格的レヴユウから、丸一小仙の太神樂レヴユウとか、小唄レヴユウとかの、かなり特殊なattractionに至るまでレヴユウといふ名稱のもとに廣告されてゐる。もしそれ、一度、足を淺草六區に運ぶならば、安來節レヴユウであるとか、何々レヴユウであるとか、實物を見ないうちは、到底、いかなるものであるか想像もし難いものさへある。しかし、これまたレヴユウと稱すれば、實はヴオドヰルであつても、それは既にレヴユウであつて、何人もかう呼ぶ事を禁ずる權利はない。從つて、レヴユウは正しく演藝界を席捲してゐる。實に今日は、誰が何といはうとレヴユウ時代である。レヴユウでなければ夜の明けない時代である。

しかし、これは單に外形的なレヴユウ流行の時代に過ぎないのであつて、事實に於いてはレヴユウ無政府狀態であると僕は斷言して憚らない。

水族館の二階で、靴下を穿かない、可憐な少女が一心に歌ひ且つ踊る。活動館で映畫の間に專屬の踊り子が歌ひ且つ踊る。これは確かにレヴユウ――の如きものである。曾つて淺草公園に大流行を來し、名テナア藤原義江を生んだ所謂大歌劇が、今日から見れば、やはり、チヤチな疑似オペラであつた如くに――

況んや、寸劇や、ヴオドヰルや、手品や、曲藝等の、テンポが早くて、目先の變つたものをレヴユウと銘打つのは、いかにも、根性が見え透いてゐて不愉快である。

しかしながら、各種演藝にレヴユウの要素を採り入れることは、勿論、非常に必要である。レヴユウ的演出こそは、演藝各種に急速に採り入れざるべからざるものである。

既に歌舞伎劇に於いてもこのレヴユウ的演出は採用せられて、かなりの成功を見てゐる。一年程以前に歌舞伎座に於いて上演せられた「十三歳の頼朝」の如きも、即ちその一例である。又、最近では帝劇が松竹へ身賣りしやうとする去年十二月の最後の公演「西遊記」の如き、その限りなき面白さは守田勘彌氏をはじめ、俳優諸氏の演技もさることながら、主として演出をレヴユウ式にしたのによると僕は考へる。そして、先々もこのレヴユウ式演出の採り入れを勧めたいものと思つてゐる。

以上で、概略、レヴユウといふものはいかなるものであるか、日本の今のレヴユウはいかなるものであるか、今は一見レヴユウ時代の如く見えてゐるが、實はレヴユウの無政府狀態である事を述べたてた。そして、それと共に、各種演藝に於けるレヴユウ的要素の採り入れを主張した。

しかし、僕は現狀をかう論じたからとて、日本に本當のレヴュウが發達しない等と決して考へてゐない。否、それどころか、相當な資力と努力とによつて、かなり立派なものを作り出せると深く信じてゐる。現に、全然西洋引寫しといはれても仕方がないやうな一二のものには立派なものがあつたのからでも豫想がつく。だが、それ迄には長い年月がかゝるだらう事は豫想出來る。事實、今の日本には、踊り子、歌ひ手、脚本作家、演出家、裝置者、作曲家……擧げ來れば、レヴュウに缺くべからざるものは殆ど、物の見事に缺けてゐる。

これでは本當にも、うそにも、レヴュウらしいレヴュウの生れやうがないではないか。

何よりもまづ、よき踊り子、歌ひ手、脚本作者、演出者、裝置者、作曲家等の養成が肝要なのである。これが先決問題である。何事もそれからなのである。

現代人の生活は、日毎益々血みどろになつてゆく。この生活苦を慰安するものは多々あるが、軽い、朗らかな演藝こそは、この要求を端的に滿して呉れるものである。

そこで、疲れた頭を更に疲らせるやうなものでない、スピイードの速い、明快な、しかも、刺激的なレヴュウは、正しくあらゆる娯樂の最尖端をゆくに相違ない。今、レヴュウは映畫と共に全世界の演藝界をリイドしてゐるが、これは單に資本主義諸國のみの現象でなくて、サエート聯邦でもレヴュウはかなり人々に喜ばれてゐるのである。その中で最も代表的なものにボルショイ・テアトルの「赤いひなげし」がある。

かくの如く、レヴュウが熱病の如く世界を蓋ふてゆく時、僕は日本の疑似レヴュウ時代が一日も早く去つて、本當のレヴュウ時代が來る事を祈つてゐる。――五月八日、東海道線上り三等特急車中にて――

文藝時評

横光利一

私達が何の成心もなく物を書いたり饒舌つたり批評をしたりしてゐるときにも、よく考へるとそれはどこかの階級に屬してゐる人間が物を書いたり饒舌つたり批評をしたりしてゐるのだと、三木清氏は四月の文藝春秋に於て云はれてゐる。このことは別に新しい言葉ではないが常に物を書いたり批評をしたりしなければならぬ文學者にとつては、誰も彼ももう一度考へ直してみるべき言葉である。私たちは物を書くときいかなる階級に屬してゐるべきであらうか。作家や批評家の階級とはどんな考へ方があらうとも生活を批評しなければならぬと云ふ階級である。生活を批評すると云ふことそのことは自身の生活を批評しようと他人の生活を批評しようと、批評することの立場に於て變りのない限り批評する最後の刹那に於ては絶えず私たちは批評家でなければならぬ。もし私たちがそのやうにも批評家であるべきことを必要とする階級なら、私たちは自身の批評をより正しく客觀的にするためのみでさへ、出來得る限り生活の階級から脱け出なければならない。即ち作家批評家の階級とは、階級から脱け出るべき必要のある階級であると云はねばならない。

われわれはたとへば生活の階級に於てブルジョアに屬してゐるときに於てさへ、批評の對象としてのそのブルジョアを否定することが出來るであらう。しかし、それ故に彼は彼自身の中に批評家として生じてゐる新しい階級即ち批評階級を否定したことにはならぬのである。三木清氏は云はれる。「我々は批評家に向つても彼がまさに彼の藝術的感情そのものをも社會的に批評することを要求せざるを得ないのである。それによつて彼の感情は初めて客觀的になることが出來る。」私たちはわれわれの感情を客觀的にするために私たちの藝術的感情そのものをいかに社會的に批評しようとも、已れが批評家であると云ふ此の批評階級から脱出することは出來ない。階級を批評する階級、それが作家批評家の階級であるなら、批評階級とはいかに社會的に批評しようとも最も特權を持つ權力階級である筈だ。さうして、われわ

れのいかなるものの感情と雖もそれが特權階級の感情である以上、已れの感情は先づ何よりも否定されるべきことに於て最も社會的意義を持つのである。そのときに於て、私たちは初めて、階級から脱け出ることが出來たのである。

私たちは我々の感情をつねに否定して後批評活動に入らねばならない。谷川徹三氏は云はれる「藝術品の藝術品としての意味、價値を知るにはわれわれは先づ心を開いて享受せねばならない。」

此の言葉は直ちに作家にも適用する。私たちは人間の生活を描かうとする場合、先づ心を開いて人間の生活を享受しなければならない。此の享受しなければならぬと云ふこと、此の享受こそわれわれは既に我我の感情を否定してゐると云ふ心の狀態なのである。此の自身の感情の否定なくして享受はない。此の享受の場合に於て更に三木淸氏は批評をすすめて次のやうに云はれてゐる。

「藝術に關する問題の決定に際して、あらゆる場合に、享受の感情が先立たねばならぬと云ふことを固より否定しようとは考へない。(中略)しかしながら我々の問題は一層進んだところに横たはつてゐる。第一に我々は感情がつねに「誰か」の感情であることに注意しなければならない。(中略)だからまた我々は批評家に向つても彼が彼の藝術的感情そのものを社會的に批評することを要求せざるを得ないのである。それによつて彼の感情は初めて客觀的になることが出來る。」

しかし彼が、彼の藝術的感情そのものを社會的に批評したればこそ、彼は藝術の問題の決定に際して享受の感情を先立てたのではないであらうか。即ち彼は彼自身の感情を否定してこその享受である以上、最早や彼の感情は享受の場合に於てすでに充分に客觀的なものになり得たのである。此の場合に於ける彼には最早や階級性は存在しない筈である。

しかしながら、彼が其處に出した超階級の立場から批評活動に移動しなければならぬとき、直ちに彼には再び階級性が生じ出すのだ。そこでは批評をなさねばならぬものがいかなるものであらうとも彼は何らかの階級に屬してゐなければならぬ。それと同時に彼は彼がいかなる階級に屬してゐるかを批評しながら、享受すべき新しき社會的對象物に向つても同樣に批評をすすめなければならぬ。其ときに於ける彼の批評の素質は小林秀雄氏の三木淸氏の批評に對して云はれたやうに、

「作家が己れの感情を自ら批評すると云ふことと己れの感情を社會的に批評すると云ふ事と、現實に於て何處が違ふか。」(此の小林氏の言葉は近頃の藝術派の理論に用ひられた言葉としては非常に功績のある言葉であり、長く記念すべき言葉の一つだと私は思ふ。)

しかし、小林氏の云はれたやうによしたとへ己れの感情を自ら批評することと社會的に批評することとどこも違はないとしたところで、私たちも同樣に己れから批評せらるべき何等かの階級を持つてゐるといふことに變りのない以上は、私たちもわれわれ自身に批評せられながらまた他のものに對しても批評しなければならない。だが、私たち

の疑問は、何故にわれわれは自身の階級性をそのやうにも批判しながら、享受すべき社會的對象物に對して批判をすすめなければならぬかと云ふことだ。

三木清氏は云はれる。「批評家と雖も自己の心理的なものを自己の物質的なものにまで關係させてみることが必要である。自己批評はあらゆる批評の前提である、といふことは單に道徳的な教訓のみではないのである。そこに藝術的批評は社會批評に結びつく。」

私たちの批評がさうしてもしも社會的批評に結びついたとしてみよう。が、しかし、その結びついたときと雖もまたわれわれはわれわれ個人の批評情熱から脱け出ることは出來ない。即ちわれわれの批評はいかに自身の感情を客觀的なものたらしめようとも、その批評の終結に於ては谷川徹三氏の云はるゝごとく飽くまで觀念論的にならざるを得ないのである。これは唯物史觀そのものと雖も同樣な理由によつて觀念論を脱出することは出來ない。われわれは自己の感情をいかに否定しようとも自己を滅ぼさざる限り自己を捨てたことではない。すでにそのやうにして私たちが自己を滅ぼすことの出來ざる限り、文學と雖も生活と同樣に飽くまで自己を、個人を、人間を中心にせずしては成立しない。ここから、それが人間學としての文學のあらゆる方向に向つて擴がらねばならぬ根本理論が發展する。しかし、此の古々しい平凡なことが今は全く文學の世界に於ては忘れられて了つてゐるのである。さうして文學の世界に於ては、ただいつも眞つ先に進んで來るものは社會と階級に變化した。此の變化を批評家は歴史と云ふ。

三木清氏は歴史について云はれる。「根本的にいへば、藝術に於ても批評をする者は究極は歴史である。歴史はそれ自身つねに批評的である。歴史の必然的な運動の過程は過去の諸藝術を批評して來た。そして現在に於てはプロレタリアートが歴史に於ける批判的な階級として現はれてゐる。この新興の階級の理論のみが現在に於て眞に批判的な理論である。それ故にマルクス主義の文學理論は谷川徹三氏の想像されるやうに、單に文學の歴史的解釋であつてそこに批評論がないのではなく、却つて反對に、それのみが今日の意味で文學批評論であり得るのである。」

此のやうにわれわれに歴史の批評の絶大な威力と、社會と階級とマルクス主義との關係を教へられ、且つ同時に個人の批評の無力さを教へられた三木清氏は、それたらいつたいいかなる思想階級の個人であらうか、と云ふことに此の場合われわれが頭を働かせることは、決してわれわれの意地悪いことではなく、却つて反對にそれは個人と社會と批評との關連を一層明瞭ならしめることに於て役立つであらう。何ぜなら、今は私たちは三木清氏のこれらの言葉の正しいか正しからざるかを云ふのではなく、人間、個人を中心とした文學及び思想がどれほど社會にとつて重要な役割を果してゐるかを物語らなければならない機會であるからだ。

しかし、私はここで三木氏の言葉を中心にして、その言葉とは凡そ

反對な、人間及び個人を中心とした文學思想がどれほど社會にとつて重大であるかと云ふことを明瞭に説明するためには、これまた凡そ三木氏とは反對な思想家であるところの土田杏村氏の言葉から始める必要を感じる。此の土田杏村氏、——自身をもつて三木淸氏よりもなほ一層マルクス主義者だと自任せられ公言せられる土田杏村氏は、三木淸氏を批評せられて理想五月號に於て次のやうに云はれてゐる。

「三木氏の理想は終始人間學の上に立ち、人間本位である。だから氏は云はれた。唯物史觀は一個の獨立した特色ある人間學の上に立つ世界觀であると。然るにマルクスはこの人間を世界觀の源泉とすることに反對して、人間を社會的發展の産物と考へたのだ。」(人間學的唯物論と其批判)

此の土田氏の言葉のままだとすると、三木氏はここではわれわれ藝術派の中心思想である人間學を中心としての、即ち文學活動の源泉は社會よりも先づ人間個人を中心としての精神活動が新しい世界觀を造らねばならぬとなす思想と同様であるかのやうだ。さうして、われわれは此の場合に於ける三木氏の言葉を正しいとなさねばならぬ以上、しばらくわれわれはここから三木氏を攻撃せられる土田氏に向つて注意を廻轉しなければならない。

土田氏は云はれる。「三木氏の哲學は、何處までもフオイエルバツハの如くに人間學であつて、唯物論ではなく、人間を社會的發展の産物として考へるものでないことは、前述の如くである。然らば三木氏はどうした理論からこのアントロポロギイ(人間學)を飽くまで固守しつゝ、なほそれにマルクス主義の扮裝を與へようとしたのであるか。(中略)我々の取る標準はもはや「社會」であつて「人間」ではない。」

この場合に於ける土田氏の言葉を、私たちはよく吟味すべき必要がある。何ぜなら、我々の取る標準はもはや「社會」であつて「人間」ではないと云ふ土田杏村氏それ自身、すでに人間を離れて成立するものではないからだ。さうして氏は直ちにそれに氣附かれて云はれてゐる。「勿論人間を離れての社會は成立するを得ないから、社會を人間の立場から論ずることは不當でなく、社會論は結局一個のアントロポロギイ(人間學)でないかといふ反駁は成り立つであらう。但し我々は理論を斯く飽くまでも人間の上に留めるものと、社會の上に留めるものとの間に、理論としての現實形態を區別しなければならない。そして、人間基準の論と社會基準の論とは、何れが果して正しく我々の現實社會の構造に應ずるものであるかを、我々は最後に問題としなければならない。」と。

しかし、私たちはここで土田氏のやうにたとへ社會を人間の立場から論じることと、社會を社會の立場から論じることとの間に、理論としての現實形態を區別したとしても、それはどちらの理論がより人間の實際へ應ずるものであるかと云ふ方法論の理論的な區別をしたことになるだけで、所詮はどちらも人間學であると云ふことに於ては變りはない。何ぜなら、社會と人間とを區別する理論がいかに「我々の現

實社會の構造に應じた、優れた社會論」だとしても、實はそれはその理論を感じなければならぬ人間の構造に應じて優れてゐるだけであるからだ。それにも拘らず、マルキシズム文學者及び批評家は、ここを起點としてあたかも彼等自身が「人間」ではなくして社會ででもあるかのやうに、われわれ「人間」に向つて「社會」から鬪爭する。われわれのうちで、彼らの「社會」から矢を發せられた度毎に、それではわれわれ人間は實は「人間」ではなくして「社會」であらうかと迷ひ掛けたものも幾人も見られた筈だ。

しかし、いかにわれわれの頭の中に社會ばかりが滿ち充ちてゐようとも、鬪爭する二つの立場の根源そのもの、それが鬪爭であると感ずるもの、それはわれわれ自身であるにちがひない限り、われわれとは、他の何物でもない個人であり人間であるより以外ではないのである。しかし、それなら、私たちの頭の中でそのやうにも鬪ふ社會と人間とは、個人と云ふものの頭の中でどこでどのやうに違つてゐるのであらうか。われわれはただ「人間」と云ふものをいまだ曾て想像したことがないだけである。われわれの想像した人間は人間の中の「誰れか」であり、その「誰れ」かを誰れも彼ものわれわれ人間が共通に人間だとして考へたことがない以上、われわれの想像した人間もそれは明らかに人間そのものではなく個人であり、個人の中にも男と女の二種の區別があつてみれば、それをさへも同時にわれわれは一つの人間として想像出來得たためしも絶對にはない、と云ふこの不思議な人間的事實が事實であるなら、人間とはとにかく一人のことではなく個人全體のことでなければならない。しかし、それなら社會とは、社會と雖も個人の集合、個人全體でなければならぬことが原則であるとしてみれば、人間と社會とは現實に於てどこが違ふのであらうか。もしそれが違ふと云ふものがあれば、それは違ふと云ふものの頭の中で、人間の背後に自然の風景をひつつけたかひつつけないかと云ふことに於て違ふだけだ。しかし、自然の風景とは、一體それは何んであらうか。われわれは人間を考へるときに於ても社會を考へるときに於ても、自然の風景なしにはこれまた同樣に考へることが出來ないのである。

土田氏は云はれる、

「エンゲルスは云ふ、(自然はすべての哲學と沒交渉に存在する。自然は我々人間が發育するところの基礎であつて、人間それ自身が自然の產物なのである)と——この立場の何處に我々は一體人間學の片影を求むべきであるか。(中略)エンゲルスは遠慮會釋もなく土足をもつて三木氏の人間學を蹂躪するであらう。それがマルキシズムの唯物論なるものの本體なのだ。」と。

しかし、それがマルキシズム唯物論の本體であるかどうかは暫く問はず、ただいかにエンゲルスの云ふ「人間それ自身が自然の產物」であつたとしても、われわれが人間であり、人間あるが故の自然を自然と感ずる以上、依然としてわれわれ人間にとつては社會も自然も人間の社會であり、人間の自然であるにちがひないのだ。もしそれがさう

でなくしてわれわれが人間なき自然を考へ得られるとすれば、それは考へ得られるべきことではないが故に、無を意味する。無とは何か、それは自然ではないと云ふことに他ならない。自然ではない人間の有り得るマルキシズムと云ふものは、私たちは知らない。即ち、これを云ひ換へると、われわれ人間にとつては、人間を中心とせざる絶對的存在といふものはなく、マルキシズムは無論のこと自然も社會もその他萬般の思想もないと云ふことである。この觀念論とも思はれるべき考へ方は人間は人間から永久不變に逃亡することが出來ないと云ふことに於ていついかなる世紀を通じても正しいにちがひないのだ。これを獨斷だと云ふものはあるであらうか。

もしこれを獨斷だと云ふ人々に對しては私は私の尊敬するフイドラーの言葉を借りておかう。「これら獨斷的精神が犯す所の凡ての錯誤に如何に鋭き言言をもつて敵對する人々でも、今彼らが觀念論的または唯物論的の考へ方の何れに從ふにせよ、絶對的存在といふ有名無實の概念に對する餘地を己が世界觀の體系中に許してゐる限りは、かかる攻撃の何らの權利をも有たないのである。」

さて私は以上のやうに長長と三木氏のために土田氏のマルキシズム理論を吟味した理由は、前にも述べたやうに實は三木氏のためではなくして「人間學」のためである。何ぜならば、われわれ藝術に從ふもののいかなるものと雖も、文學とはそれが「人間學」であるとなすことに誰しも文學理論の共同の根幹をおいてすすんで來たにちがひないが故である。フオイエルバツハは云ふ。「眞理は唯物論でも觀念論でもなく、生理學でも心理學でもない。眞理はただ人間學である」と、此の言葉は正しい。文學は絶えずいかなる所いかなる時代に於ても眞理と共に進まねばならない。人間學と共に進まねばならない。然るに三木清氏は文學に於ける批評論になると、恰もそれが土田氏の場合に於けるがごとく「社會」と「人間」とを別個の異つた物體のごとく區別して論じられるのを發見する。よしたとへ三木氏の場合に於てはそれが人間學を立場としての區別であるとは云へ、しかし、それはわれわれ人間が死すまで人間であると云ふことに於ての人間基本であるだけで、飽くまで人間そのものを中心とした藝術派の藝術理論に對しては、土田氏の場合に於けるがやうに常に社會を人間より以上に高く空中に置かれてゐるのが習癖である。此の習癖を持たれることは、それはその習癖を持たざるものへの矯正であるときに於てのみ正しくなるであらう。しかしながら、われわれ藝術派の作家及び批評家の藝術理論は社會に對する考察を怠つての藝術理論ではない。それは文學としての人間學があまりに社會に對する考察を幾世紀にも渡つてし續けて來たが故の理論であり、從つてそれ故にこそ藝術は人間を放れて存在せず人間自らが社會を造ると云ふ、此の一つにして全部を表はす人間學を、凡そ人世無上の學として來たが故の結果に他ならない。さうしてそれは間違つてゐるのであらうか。今たは一つの新しい流行がマルキシズムとなつて社會の上に流れてゐると云ふことも、文學にとつ

ては所詮はそれも人間學中の風景でしかないのである。どれほどマルキシズムが社會のために人間の概念を沈澱させ、社會そのものを一切の基本にし變へたとは云へ、此の現實に人間が存在してゐると云ふことは今も昔も變りはない。人間が存在してゐると云ふことに變りのない限り、社會が人間より重大なものにならうと人間が社會より優れたものにならうと、それがわれわれ人間から認識機能を掠奪したと云ふことにはならないのである。もしわれわれがわれわれから認識機能を掠奪されない限り、その認識機能によつてわれわれが人間と社會とを嚴密に區別することは、絶對に不可能なことである。此のわれわれ人間にとつて絶對に不可能なことをせよと命じられる三木清及び土田杏村の兩氏のわれわれにとつて尊敬すべき所は、それは不可能なことを可能にせよと命じられる所にあるばかりでなく、兩氏らそれ自ら不可能なことを可能にしようと努力せられるところにあり、さうして同時にさうせられる方法を示された以上は、或ひはそれはさうなり得られるのではないかと、ふとわれわれに思はしめられる所にあるのである。

土田杏村氏は云はれる。

「我々は三木氏から「社會」について、まだ何事も聞いたことがない。そして彼の論が、何よりも先きに「社會」を取つてその立場より人間を、勞働を、商品を、説明したといふ場合を見たことがない。(中略)彼は精神科學の對象を「歴史的社會的存在」だなどゝいつてゐるが、その「社會」の如何なるものであるかは何處にも説明せられてゐない。」

此の三木氏への非難の言葉は三木氏の文學批評論へも適用出來るものである。しかし、「社會」と「人間」との區別に關する説明に於ては、三木氏を難じられる土田杏村氏と雖も此の非難の言葉を殆どそのまゝの狀態で受けられなければならぬのは、禮節を重じられたことではない。土田氏は人間と社會について僅にリヤザノフの言葉を引いて云はれてゐる。

「人間の本質は、決して抽象的な或るものでなく、別々個人に屬する或るものでもない。人間自身が一つの集合物であり、一定した社會關係の總和である。(中略)我々は人間といふ觀念における、社會的側面を强調せねばならない。」

これがマルクス主義の人間と社會との區別であると土田氏が云はれ、さうして土田氏自身の基本的區別とされる本文そのものであるが、しかし、これで人間と社會との本質的な區別が分るであらうか。勿論これは分らぬことに於て正しいのだ。人間にとつて、人間のいかなるものであるかゞ分り、社會のいかなるものであるかゞ明瞭になつたとすれば、われわれのあらゆる學は停止するのだ。われわれ人間に認識機能が生じて以來凡そ幾萬年の間、不斷に世紀から世紀へと進展して休息することを知らなかつた人間の智識が、どうして休息することなく高まつたかを考へるならば、そこからわれわれはわれわれの智識が人間と社會についていかにその本質を探らうと絶えず希望した結

果であるかが分るのである。人間學の歴史に從へば、われわれの祖先は「人間」を知るために、人間そのものから人間を考へた。しかし、彼らは彼ら自身が人間であつたが故に、人間については彼らの分つたこと以外には分ることが出來なかつた。さうして彼らは次に社會から人間を考へた。しかし、彼らはあくまでも人間であつたが故に、人間から放れた社會を考へることが出來なかつた。かうして、われわれ人間はいまだに人間を完全に知ることが出來ないばかりではなく、社會をさへも完全に知ることが出來ないのだ。この眞實を名づけて藏原惟人氏は「不可知論だ」として攻撃されたことがある。しかし、それが不可知論であらうとマルキシズムであらうと、われわれにとつていまだ人間社會の實體が完全に分らないと云ふ現象が眞實である以上、それ故にこそなほわれわれはわれわれにとつて分らざるものゝその根源の人間へ、社會へ、それらの本質の何物であるかをなほ一層明瞭にするがために、われわれの智識を絶えず展轉し續けてゐなければならぬのである。その方法を、即ちいかにすれば人間が、人間であるわれわれの前へ、人間と社會とを明瞭にすることができるであらうかと努力する方法の一つを、われわれは文學と云ふのである。それ故文學はあくまで人間を基本とした方法論である。さうしてそれは決してマルキシズムそのものではない。「マルクス主義イデオロギーはプロレタリア藝術の束縛となる」と云はれる谷川徹三氏の意見もここにおいて正しくなる。われわれはわれわれの文學的方法論としてマルキシズムの理論を借用することは勝手である。何故なら、マルキシズムはわれわれに社會の何物であるかを明瞭にしようとすることに於ては、それが一つの方法論としては確に有用たものであるからだ。いや寧ろ反對にわれわれは充分にこれから學ばなければならない。しかし、文學のイデオロギイとはそれはマルキシズムそのものゝイデオロギーではない。文學のイデオロギーとは人間にとつて不可知なものをより明瞭に文學がすると同時に、それが人間にとつて眞理であることをわれわれに示さうとする意志である。だが、マルキシズムのイデオロギーとは、マルキシズムが己れのイデオロギーのみを眞理としてわれわれにそのことにおいてのみ闘爭を強ひる意志である。それ故にこそ、そのイデオロギーそのまゝに藏原惟人氏は朝日に於て云はれてゐる「眞理主義の文學とはマルキシズム文學以外にはない。」と。

　マルキシズム文學以外に眞理主義の文學がないと云ふことは、凡そ眞理をそのやうにも偏狹にすることがマルキシズム文學だと云ふことになるだけで、實は眞理は人間を基本としたあらゆる行動であると云ふことを云つたことにはならぬのである。眞理は人間を放れて存在しない。人間のすることごとのいかなることと雖もそれが惡であらうと善であらうとに拘らず、それは眞理だ。文學とは、これら人間のありとあらゆる眞理を科學そのものと等しい嚴密さを以つて、また時には科學以上の科學である人間學の基本として整理し、そのイデオロギーをして文學そのもののイデオロギーから發せしめることに於て正し

さを持つのである。さうしてそれは何故の正しさであらうか。此の一見無目的に見える文學の冷然たる科學性は、いかなる科學とても持たねばならぬ隱れたるかの大眞理に向つての、悠々たる探檢にその目的を持つのである。此のメカニズムの職能が正しくないと云ふことが出來るであらうか、このメカニズムの目的が無目的だと攻擊することが出來るであらうか。それはたとへばあまりに大目的であるが故に目的には見えぬと彼らが告白するときに於てのみ、彼らが擧動を正當であると赦さねばならぬ此の文學。――此の文學にとつてはそれ故にマルキシズムさへも彼らと同樣にまさに文學から批判せられるべきあるものとして鍾愛せられねばならない。それは文學が彼らから絶えず批判せられるべきものではなく、彼らが絶えず文學から批判せらるべき素材であるからだ。

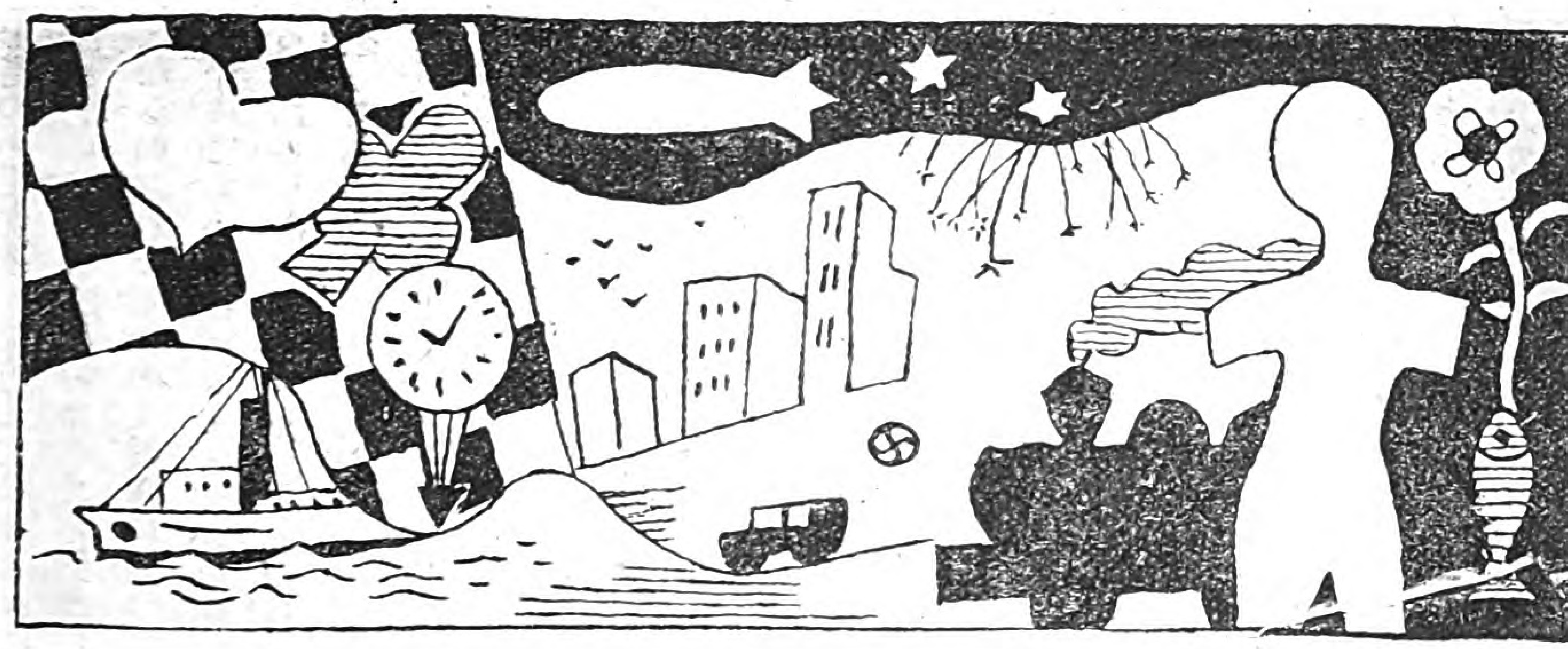
三木清氏は云はれる、「藝術に於ても批評をするものは究極は歷史である。歷史はそれ自身つねに批評的である。」と。

その全篇を貫いて最も正しく力強く輝いた此の言葉は、しかし、より一層科學として正しくあるためには、「その歷史を批評するそのものこそは文學である。」と云はれなければならない。何ぜなら、歷史を批評することの出來得るものは、文學をおいては他にはないが故である。しかるに、三木氏は云はれる。

「歷史の必然的な運動の過程は過去の諸藝術を批評して來た。そして、現在に於てはプロレタリアートが歷史に於ける批判的な階級として現れてゐる。此の新興の階級の理論のみが現在に於て眞に批判的な理論である。」と。

しかし、その眞に批判的な理論を持つ新興階級をさへ、文學は文學自らの抱懷する大目的の前にあつては、恰もそれが些々たる小目的であるかのごとく冷然と批判しつつ進まなければならない。それは眞理主義としての文學が人間の運命と共に永久に持たねばならぬ光榮ある宿命である。

以上はあまりに大きく從つて最早や古めかしい文學の問題であることに私は氣附いてゐる。しかし、青野季吉氏のやうに藝術派に文學理論が一つもないと云はれねばならぬほど、それほどもマルキシズム文學者から人間學としての文學理論を忘れられてゐる今日としては、それならいまだ昔から殘されたまま何らの解決も與へられたことのない人間學としての此の古めかしい文學理論に對して、何らかの處置をとらざる限りマルキシズム文學理論も役には立たぬと云はれても仕方のない理由として、一應その黴を拂つて季節の光線にあててみる必要を感じる。何ぜなら、勿論充分に此の文學本來の持つ人間學としての平凡な理論を破らざる限り、マルキシズムのあらゆる文學論には理論はないと云はれても仕方がないが故である。同時に藝術派に於ける若々しい一團の藝術家達も、此の文學としての忘れられた傳家の寶刀に對しては同樣に何らかの新しい解釋を與へない限り、新しい文學理論は成立する筈がないのである。私はここではただ一人の作家として我々の祖先が傳へた文學の方則を單純に取り出して來たまでで、眞理主義の文學がいかに新しく發展すべきであるかと云ふことに關しては、これからまだ色々の作家批評家から教へられねばならぬと思つてゐる。



ロンドン一九二九年

中條百合子

手提鞄の右肩に赤白圓形飛行會社のレベルが貼られた。「航空ユニオン。27」廻轉するプロペラーの速力を視覺に印象させるやうな配列法で細かい赤白、赤白、赤白。巴里。ロンドン。リオン。マルセーユ。レベルは射的屋の風車に似て居る。

四時間前鞄は巴里の飛行會社で白エナメルの計量機の上にあつた。今其はロンドンの只中にある。ホテルの古風なセセッション式壁紙の根つこに置いてある。

少しばかりの着物の束を押しつけてオリーブ色の手帳、大日本帝國外國旅券n.o.084601が入つて居た。あつちこつちで引くり返され端がさゝくれ始めた第七頁には携帶人の寫眞、第十五頁に英國旅券掛の紫スタンプが七志六片の皇帝ジョーヂの横顏の上に押してあつた。そして書いてある。三週間以内ノ英國滯留ヲ許可ス、と。

手に赤い厚紙切符を握り日本女は乘合自動車に乘つて居た。乘合自動車は二階だ。黄、赤、黑の英國式色調だ。辻々でヘルメットをかぶつた六呎の巡査の合圖に從つて止る。或場所では長く待つ。「待つて見て居よう」世界的に有名な大英國の標語に從つて日本女は自動車の窓からロンドン市を眺め渡した。

ロンドンは六月の太陽の下に都市計畫など大都市の街筋をひろげて居る。公園のまはりにはいろんな拱門があつた。公園の濃く茂つた木と青草が並木道がはりだ。ボンド街やリヂエント街で飾窓

の大硝子に磨かれた前に續けさまに止つたり動いたりする乘合自動車の姿を映した。步道を往來する女達の英國式踵をも反映させた。イギリスの女靴はイギリス女の踵がいやに細長いやうに尖んがつて長い。それから時々飾窓硝子板の世界的近代商業の輝きの隅に純然たるイギリス風な或るものが現れた。それは頭に小さい王冠をのせた黄金の獅子と一匹の馬とが左右から一つの楯にしがみついて居る紋章だ。その紋章はバッキンガム宮殿の門扉の上にあつた。リヂエント街一〇〇番の洋服裁縫店の飾窓にある。或馬具屋の窓の上に、リプトン紅茶の小箱の上にある。「皇帝御用指定商」リプトンはセイロン島の土人に茶を摘へさせながらヨーロッパヨット界の親玉になつて居る。

八月のロンドンの空氣は乾燥してる。毛織物を食ふ虫はこの空氣中では湧かないのださうだ。だが乾いた空氣はざらついた。そして喉の奥を引つかいた。さういふ空氣を押し破つて下町から山の手に、山の手から下町へ陸續進む乘合自動車の運轉手はどれも若い。壯年だ。白つぽい上被を着て、プリンスオヴウエルスもさうであるやうに、一寸赫みがゝつた横顔で高いところへ坐つて居る。タクシー運轉手も同様白い上被を着て居るが……だが何故此那爺ばかりなのだらう。窓から見て居るとロンドン市は總てのタクシーは舊式に總ての運轉手は年寄に、と決議したやうだ。八月の風邪を恐れるやうに幌をしめた箱馬車型のタクシーが炎天の下へやつて來る。乘合自動車と並んで停る。上被のだぶついた胸へ番號札を下げた運轉手はどこやら若い瞳が涙にうるみかけた爺だ。又來る止る。爺だ。爺の運轉手は元氣な乘合自動車の巨大な圖體に向つて彼のエンヂン付馬車を並べ、謙らず勞働市上の陶汰見本を現出して居る。而し彼等自身はこれに對して懐疑的でない。

泰然として進化を信じ、嫌ではないやうな群集を突切り、日本女は或角で乘合自動車を降りた。小さい飲食店に入つた。

色とりどりにふんだんな野菜だ。

白レースを額の前につけ黒絹靴下できりつとした給仕女だ。

そしてタイル張の床の上でさういふ給仕女も卓子に向つて坐つて居る客達も一種特殊な技術で巧に各自の階級の限度を調節してやつて居る。

——何を上りますか？

給仕女の階級は自然であつて自然でない。

——冷肉とサラドを貰ひませうか。

それはミセス、X X の地階だ。が生ではない。——

から云ふ話しつぷりそつくりな中流住宅がロンドン市到るところで目についた。難しいことはない。三片拂つて乘合自動車に乘る。そしてさつき日本女がやつて居たやうに窓へ顔を押つつけて過ぎ行く街筋を見て居ると、やがて諸君の目前に現れるだらう。窓を五つばかり持つ小じんまりした二階建の正面だ。四五軒から八九軒並んだ。が、各々

三尺の入口扉が獨立についてる。第一軒の入口に白い柱列でもあればそれは三坪ほどの前栽に向つて全建物が終るまで連つて居るであらう。そして小砂利か煉瓦でたゝんだ小徑が往來を區切る垣根までつけられてる。垣根は低い。前栽の金魚草・蜀葵・ゼラニウム・絲・赤毛絲刺繍みたいな花壇とその奧の窓々に白いレースカーテンを垣間見させる程度に開放的だ。然し眞鍮握の入口扉と窓枠は往來に向つて獨特の靜まりかたをして居て——つまり紹介狀なしに人は入れぬ「英國の家庭」を示威して居るのだ。ソヴエートロシアの「住居」の觀念とこれはまるで違ふものだ。又ル・コルビユジエの「家」の觀念とも違ふ。イギリスの多くの尊敬すべきMR・AND・MRSにとつては或種の日本人のやうに家卽國家細胞としての家庭で、彼等はどんないゝ事も惡い事もその中で考へたりやつたりして居るのだが、たゞその遣り方が支那人のやうに叫喚的でも日本人のやうに神經的でもなく——さうだ！　この話し振り通りの要領なのだ。互に他人に聞かす分量と自分の內へ仕舞つておく分量との區別を知り其を常に間違へない技術的訓練でやつて居るのだ。

小指にはまつた指環が暑い日光に光つて引込んだ。日本女の前にレモンを添へたドーヴア鰈のフライが置かれた。

ドーヴア鰈のフライは、頭から食つても尻尾から食つても、靴を脫いで食はない限り英國の德義には觸れぬ。魚は新鮮だ。胃は空らだ。片身がきれいにとれると美しい骨格が現れた。が、黃色鮮やかなレモンの皮に向つて展けた魚族の骨の眞中に、日本女は小さい小さい飛行機の機影が映つてるのを認めた。ドーヴア海峽の海の水は霧の上空から瞰下すと、紫がゝつた灰色だつた。海の面に每日飛行機の影がとぶ。影は水を透す。水の中を泳ぐ魚の體の上にも映る。フオークをひかへて、日本女は暫く近代魚類體中の飛行機をロンドンに於て生新に感覺し、それから其を引つくりかへし愛情を感じつゝ皆食つて仕舞つた。

×　×　×

穿鑿機の激しい音響は鼓膜を痺らし、暑い空氣を白い炎のやうに震はした。

ホワイト・チヤペル通の右側は掘じくり返し積み上げた凝混土道路工事の斬壕だ。乘合自動車、貨物自動車、荷馬車。互に待ち合はせ強烈な爆音中で時間の感覺を失ひ乍らのろのろ進行した。

橫丁にずらりと露店が出て居る。バナナ。駄菓子。古着。ボタン紐。道路工事に面する大通のペーヴメントには塵埃、古新聞の反古、紙片、煙草の吸殼等が散つて居る。子供を片腕にかゝへ袋を下げた神さんが行く。白粉と紅との下から皮膚の垢を浮出させた十八ばかりの可憐に粗末な造花、安女店員がいそぎ足で通る。手のついたブリキ罐をぶら下げ格子木綿の服を着た男の子供が、格子木綿の女の子の服を着た弟の手を引つぱつて行つた。子供はどつちも帽子なしだ。ボヤボヤ

した彼等の薄赫い髮の毛を八月の土曜日の太陽が梳き透した。コーセット店の飾窓が埃をかぶつてる。山の手では見られない古風な紐じめ大コーセットが桃色だ。

氣がぼつとする穿鑿機の爆音の裡へ。或はその中から。通行人は歩道へぎつしりだ。ひどい襤褸服に鳥打帽や古山高を後へづらしてかぶり、カラーなしの男たちがあつちに二三人、こつちに一塊り、立つてぼんやり働く人間の群の方を眺めて居る。英國の登錄されたる失業者總數凡そ百二十六萬人弱。

選擧の時勞働黨は民衆に約束した。「勞働黨は直に而して實際的に失業問題に處すべき無條件誓約を與へる。」數年間に亙つての失業救濟事業案が出た。幼年者補助養老扶助年限が繰下げられた。然し同時に統計は示して居る。勞働黨治下の失業保險掛員は七月一杯だけで保守黨時代より更に多く、五千人の失業者に對して補助を拒んだと。イギリス勞働組合保險聯盟は「本氣で職業を求めて居ぬ」と云ふ微妙な心理的理由によつて失業保護を拒絕する權利をもつて居るのだ。同じ勞働組合の協定によつて鐵道從業員、木綿羊毛織工及炭坑夫は國家の工業を援けるべく數パーセントの賃金切下げを決定された。從業員の賃金を2 1/2パーセント切下げて居るうちに、鐵道事務員組合書記エー・チー・ワークデン氏のところでは年俸二百五十ポンドが年俸千ポンドに上昇しつゝある。

——大通からコムマアシャル街へ入ると人通りも減つた。穿鑿機の音響は遠く息苦しい空氣の彼方にある。暫く行く。右側に古風な軒燈が一つ。軒燈には黑字で「トインビー・ホール」。トインビー・ホールはオックスフォード及ケムブリッヂ大學卒業生によつて經營される知らぬ者なき英國セットルメント事業の本山だ。暗い圓天井の壁門の内側に一枚貧兒夏期學校へ寄附募集のビラが貼られて居る。ビラは古い。破れて居る。門を拔けると内庭がある。蔦の青々からんだ塀と建物が靜かに内庭を圍んで居た。「貧民法律相談所」矢のしるしが建物の裏を示して居る。

内庭にも受付にも人が居ない。受付の横から狹い廊下が彼方へ通つて居て、箒を持つた働き女の姿が見えた。日本女はその働き女を呼び止めた。長方形の白封筒を渡した。暫くすると別なやゝ知的表情ある女がその奧の暗い方から出て來た。日本女と話して引込んだ。今度はその女自身が白封筒を手にもつて戻つて來た。

——今日は土曜日でもう誰も居ないからおめにかける事が出來ません。月曜日にいらして下さい。

——土曜日の午後は休みなのですか？

——さうです。すつかり休みます。

成程！ 銀行會社の休日にはセットルメント事業も休日だといふことは知らなかつた。内庭に立つて古色蒼然たる蔦を眺めて居たらこれも歷史的な金網入りの窓の奧に眞白いテーブル掛が見えた。そこで新聞を讀みつゝ午後の茶を飲んで居るところの一紳士の横顏が見えた。

──休みの土曜の午後か。ロンドンの困窮せる人は既にこの習慣を知つて居るのだらう。だから勤めの休みな土曜日の午後はトインビー・ホールへ來ず、いつか別な日に勤めを休むか早びけかにして來るんだらう。然し、その日でモスクヷを見て來た日本女はロンドン人のやうに忍耐強くないのだ。

門を出ると往來に面した掲示板に、九月二十三日開始の成人教育プログラムが貼り出されて居た。經濟。文學。歴史。英語。佛語。獨語。劇。雄辯術。美術音樂。民族舞踊。應急救護法。一科目料金五志。こゝでは經濟といふ字が中世風のゴシック書體で書いてあつた。

下半身にはズボンがある。上半身は裸のところへ直に襤褸外套を引つかけた十四五の少年が角に立つてる。並んで山高を頭にのせた中爺が居た。中爺は帽子を脱いでその中を見ながら片手でごし〳〵頭を掻いた。帽子を又頭へのせた。ペッ！　地面へ唾した。その時半裸の少年はのろ〳〵歩き出して傍の半分壞れた板がこひの横へ入つた。崩れた煉瓦がごた〳〵かためてある。その中へ入つて往來からは彼の姿が見えなくなつた。

通行人の六割はそこへ吸ひ込まれる。ホワイトチヤペル通へ出た角の六片店だ。二つの角に向つて開く四つの扉は頻繁な人の出入りにつれて、大通りから穿鑿機の音響をピンの山の上、砂糖菓子の丘へ煽りつけた。匙、ナイフ、紅茶こし。化粧品類。手帳鉛筆その他文房具。及裝身具。その表紙では赤い寢室で拳銃をもつた男と寢衣姿の女が組打ちして居るやうな小說本に至るまですべて彼等がそこから稼ぎ出した指の先程な三片銀貨一枚で或は二枚で買へるのだ。

雜踏に揉まれる店内の空氣はヨーロッパ腋臭にかゝつてる。眼鏡部から動かぬヴイクトリア時代の女帽がある。頸飾賣場で白ブラウズをつけた若い娘が熱心に買物を掌にかけて見較べて居る。彼女は日曜日のために恐らく飲まなかつた茶の幾杯かを一筋のビーズにしようとして居るのだ。地下の賣場へ降りる階段二段目に二三人のちびが陣どつてかたまつて居た。一人が手の中へ何か握つてる。頭を突き合はせてそれを覗いて居たが大人が通りかゝると中心の一人は素速くその手を拳固にして背中にまはしてしまつた。この町で大人は子供の樂しみのために顧慮する時間を持つて居ない。土曜日だ。ロンドン市中で一足賣の人絹靴下が數でこなされる土曜日だ。

× × ×

山の手の公園ケンシントン・ガーデンの鐵柵にはいろんな門がついて居た。門にはそれ〴〵名がついて居る。プリンス・オブ・ウエールス門。クウヰーン門。そして或門の前では巡査が立つて居る。夏で「ロンドンは田舍つぺえのロンドンになつた」ので公園の鐵柵は遙かへ中

た。縄を張つて步道の交通を止め、職人が鐵柵のあつちこつちにつかまつてペンキを塗つてる。

　鐵柵の奥に散步道があつた。左右が花壇だ。草は溢れる緑だ。樹も緑だ。緑の草原は自然の起伏をもつて丘となり原となり、英國のオリーヴ色がゝつた緑の深い樹蔭をそこゝに持つて居る。自家用自動車専用道路が公園を貫いて走つた。その道の上、アルバートホールの海老茶色大釜みたいな建物の屋根を見渡すところに、大理石のヴヰクトリア・アルバート記念塔が立つて居た。ヴヰクトリア女皇とその夫との生涯は公園の記念塔に於て極めて美的感覺に缺如した植民地擬人群像に集約されてしまつて居る。

　然しこれはみんな公園の往來に近い側のことだ。

　公園の奥には栗鼠が居た。そこの樅、樫は大木だ。栗鼠はロンドンでも野獸らしい敏捷さで尻尾で釣合をとりとり頭を逆さまにして樅の大木の垂直線を駆け下りた。枝から枝へ飛び移つてキキキと叫んだ。一人の紳士がステッキを腰の後へかつて梢を見上げ、舌を鳴らし乍ら南京豆をのせた掌をさし出した。栗鼠は野生な注意深さを失つて居ない。キキと叫び、南京豆を見下し、尻尾をピク、ピク、動かして居る。樅の葉が散つた。その音が聽える。

　ベンチは散步道に沿つて並んでた。緑色に塗つた貸し椅子は居心地よい草原のいたるところにあつた。若い母親が草原へ布をひろげ裸體にした赤坊を遊ばして居る。母親自身も靴をぬぎ、草の上へ、赤坊の横へころがつた。傍の貸し椅子には乾いた外套がかゝつて居る。

　カーキ色の上衣を着た番人が公園を步きまはつた。椅子は一日二片だ。

　山の手公園にその他あるものは芝草。パイプ。犬。――人は英國のかういふ公園の中にあつて英國の焙肉を思ひ出さずには居られないだらう。英國の公園は彼等の民族的愛好物ローストビーフと同じやうに單純で、自然だ――自然であるやうにつくられてる。巴里で公園は人と衣裳の背景として出來て居る。そこの並木路でも。噴水でも。大理石階段でも。適度に人がそこに動いて美しさを増す。人がそこに動かない時、嘗てそこに動いた人の思ひ出が動いて居る。だから、秋の落葉に埋れて涸れた噴水盤を眺めたつて彼等はつい人を思ひ出し、いろんな詩を書きそれがマンネリズムに陷してしまつた程度に景物は人事的だ。

　英國人は公園に北方民族の氣質をよく現して居る。英國人は世界の大商人、政治家になり紳士といふものにもなつたが彼等は殺した牛を丸焼きにして食つた味と弓矢を背負つて山野を步きまはつた心持を血とともに失はない。イギリス人は公園をそこでは自然對人間の割合が 100: 30 の比率であることを心がけて居る。人間の裡にあつては、例へばスノーデンがヘーグでは 100パーセントの英國人で英國の利害を主張して居る時、それを支持するロンドン中流男女は、自然的公園の樹蔭をスコッチテリアをつれパイプとともに散策しつゝ彼等の沈着

な商魂を放牧した。スコツチテリアの鼻面は四角だ。手をのばして背中に臆病な挨拶を與へようとするとスコツチテリアの剛毛は自尊心の如く無用の愛撫に向つて毛端立つた。

山の手のエハガキ店頭の滑稽は大體犬と猫とが獨占して居る。——

彈機のいゝ黒塗の乳母車に白衣の保姆をつれた若夫人が草原の上の小卓子に向つて脚を組んで居る。そこはケンシントン・ガーデンの奥の野天喫茶店だ。黄赤縞。或は藍と黄の縞。大きな日除傘は英國公園の樹々の間にあつて稍エキゾテイックな派手さを部分的に描出した。片手のキッド手套はぬがぬまゝ洋杖の頭について、茶碗を口元に運んで居る老紳士もある。あたりの草原に雀と鳩が居た。卓子に向つて坐つてる人々は緩くり茶を飲み乍ら氣が向くと皿の上からパン片や菓子の粉をとりそれ等の鳩や雀に投げてやつてる。幼兒がよち〱母の投げた毬を追つかけて雀どもを追ひ立てた。雀は囀る。低く翔び去る。燕尾服に白前掛の給仕が盆を捧げて傍を過ぎ乍ら笑つて腰をかゞめ、毬を今度は卓子について居る母親の足許の方へころがしてやつた。

草原は低い鐵柵で圍まれて居る。

鐵柵に片脚ひつかけ、平行棒を跨ぎ損つたやうな恰好で一人の醉つぱらひがふらついて居た。垢の光澤だけが見える服だ。カラーは無い。鳥打帽をかぶつてる。鐵柵から華やかな喫茶店の日除傘まではただ數歩の距離だ。四十がらみの一見紛ふかたなきその失業醉つぱらひは鐵柵の上でふら〱し乍ら滿足した人々の群を眺めて居た。永いこと眺めた。それから帽子を手に持ちやつこら鐵柵をこつちへ越した。そして直ぐ卓子の傍の草原へ來て仰向にころがつた。

赭黒い顏のついた襤褸だ。

雀は卓子のまはりでこぼれた菓子の粉を啄みピョンピョンとんで臥て居る醉つぱらひの髮の毛のそばまで漁つた。午後の茶を飲んで居る連中は知らずに居られないのだ。そこへ來て一人の穢い醉つぱらひがころがつたことを。だが誰もそつちは見なかつた。誰一人見ない。それがこの社會の行儀なのだ。たゞ反對側の草の上へ菓子のかけらを撒き其へ雀が群がりよると微笑した。

醉つぱらひは草の上へひつくる返つて居た。矢張り永い間さうやつて居た。軈て交る〱膝をついて立ち上りふらつき乍ら鐵柵へ戻つた。然しそこを彼方へは出きれぬ。片手をあげて鳥打帽をくいと額の上へかぶりなほした。滿足した人々はいゝ裝をして靜かに草の上で茶を飲んでる。醉つぱらひは歩き出した。給仕が盆をかついで通る道の上を——卓子と卓子と、日除傘と日除傘との間の道を默つてふらつき乍ら歩き出した。人々は自然な要求で醉つぱらひの方を見た。が風體を見ると彼等は云ひ合はせたやうに一目で眼を逸した。品のいゝ話聲。茶碗の音。笑聲さへするそれは不思議な無人境だ。醉つぱらひは黒い存在と自身の重壓に苦しみ乍ら動いて行つた。

行手のプテイング・グリーン（球遊びリンク）で英國家庭の見本が午後を樂しんで居る。二人の息子をつれた夫婦と元氣な老母づれの青年は輕く打杖を振り乍ら小さい球を草の間の穴へ打ちこんだ。

セント・ジエームス公園にも、グリーン公園の草原にも彼等の階のまはりの草の上へ烟草の吸殼を散らし乍ら殆ど一日そこで日に當つて居る失業者が澤山あつた。或者は眠つた。草へ腹ん這ひに突伏して眠つた。減つた靴の裏へロンドンの八月の草が戰いだ。グリーン公園の横通ではロスチヤイルドが數十萬ポンドの費用で邸宅修繕をしてゐた。その起重機の音は公園の樹蔭までは響かぬ。――

× × ×

書店の飾窓裏の新聞雜誌賣場。一八六九年創立の「グラフキツク」一九〇七册目の「スケツチ」其他。吊したり積んだり斜かひに立てたりした刊行物の洪水の奥にダブルカラーの男が胸から上だけ出して立つてる。男の手にある小型雪搔きのやうな道具が小錢をのせて引込み、新聞と釣錢をのせて再び現れ、活溌に印刷物の上を往復した。印刷術の進歩と六片ロマンスに對する欲求の膨脹が賣子と買ひての距離を遠くした。伸びる手の長さでは間に合はなくなつたんでこんな道具が出來た始末だ。

日本女はそこで或朝「デイリー・ヘラルド」を買はうとした。賣切れた。翌朝又出かけた。又無い。賣子は代りに「タイムス」を小型雪搔きの上へのせ突出した。

見事た紙に二十四頁刷つてタイムスは四片だ。これも稀にはいゝ。何故ならTHEといふ定冠詞とTIMESといふ名詞の間に獅子と馬の皇帝紋章が楯をひろげる第一面の下は全部個人廣告欄だ。外國人は時々それを見ることにより、少くともローヤルアカデミー會員の描いた肖像畫展覽會に於けると等しく英國のあらゆる位階勳等を學ぶことが出來る。包紙としてもなかなか丈夫で役に立つた。然し日本女は「デイリー・ヘラルド」を欲しいと思ふ。

ホテルの玄關は石張りだ。そこへ若い女が膝をつき石鹸をつけたブラツシュと雜巾を手にもつて床洗ひをして居る。鉀番の爺に日本女は明日の朝から「デイリー・ヘラルド」を配達して呉れと云つた。するとその金ボタンの大入道は小さな日本女を見下しつゝ、云つた。

――それは勞働黨新聞です、お孃さん。

――知つてる。それが欲しいんです。

――デイリー・ヘラルドを？

――然り。

――かしこまりました。

翌朝室の戸をあけたら、靴の上にきちんとのつかつて居るのはデイリー・メイルだ。

――貴方デイリー・メイルをよこしたのね。玄關へ行つて日本女は

云つた。

――あれならいらない。デイリー・ヘラルドよこして下さい。……

きつと、ね？

――かしこまりました。お嬢さん！

次の朝は――もう何にもよこさない。

ラムゼー・マクドナルドの髭の大さはこの頃一種の目立ちかたをして來た。政權を執つては左であり得ず、又そのやうな「分らず屋」でもないことを英國の資本主義と保守とに向つて事實上表明しつゝある勞働黨が、山の手では今猶斯の如く左翼であり得るのだ！

× × ×

皇室廐には細かい砂を撒いた廣場と蔦のからんだ幾棟かの建物がある。シルクハットをかぶつた男と訪問服の女連がぞろぞろそこを歩いて居た。皇帝ヂョーヂの愛馬はアスファルトで爪を傷めぬやうにゴムの蹄鐵をつけられてる。それを覗かうとした一行に向つてよく手入れされた動物は悠くり尻の穴をひろげ樂しげに排泄作用を行つた。

「トロカデーロ」の喫茶室は晝でも人工の間接照明だ。眉毛を描いたピエロが赤絹の飾帶を横へたらしてロマンスを唄つてゐる。種々なサンドウヰッチ、菓子、果物サラドの全行程をリプトン紅茶とともに流し込んでる丈夫な群集にピエロが描いた細い眉をあげ乍ら顫音でロマンスを唄つてる。

だが、彼女の皮膚はきつと冷つこいのだ。それは若々しい彼女自身がしなやかな一つの樂器でもあるやうにあゝやつて立つてヴァイオリンを顎の下へ當てがつてる工合でわかる。弓を運ぶむき出しの右腕の表情でわかる。彼女は近代女性の感覺で、ロンドン有數な喫茶室の第一ヴァイオリン彈といふ自分の職業を理解して居るのだ。

この時百貨店スワンの五階で、マニキン學校卒業の一人の美しいマニキンが着換の爲急いで昇降機へ入らうとした。咄嗟に彼女はあたりまへの女になり、我知らず氣を急き乍ら足許には注意する、大して若くもない、大して樂な暮しもしてない女の後つきを人生の眞實な一瞬に向つて落して行つた。

これ等はどれもチャーリング・クロスから遠くないところにある情景だつた。チャーリング・クロスは古本屋通だ。交通機關が立てる塵は古本屋の店頭で大英百科字典の堆積の上へ落ちた。よりどり一册六片の古本の切れた綴目の間へ落ちた。

古本屋の向ひ側に一軒衞生藥品販賣店があつた。飾窓にいろいろゴム製品と封された藥品が並べられてゐる。黒の麥藁帽をかぶり

紺の組服が肩胛骨の上で萎へた中年女がその店へ入つて行き、白い上被を着た男に小さい紙片を渡した。それは彼女が週間新聞『勞働者生活』の隅から切り拔いて來たものだ。「勞働者生活」は一片だ。鎌と鎚の組合せマークと「全世界の勞働者よ、團結せよ！」と云ふ文句とが每號刷つてあつた。

衞生藥具販賣店の男は青や藍色のパンフレットを五冊大きな封筒に入れその女に渡した。女は去り、濡れたコンクリート床へさつきの紙切がとんではりついた。「産兒制限。無代進呈。女性への忠言。産兒制限、効用並に害惡。良人と妻の便覽。妻の知識。以上五冊の有益なる醫學書を最も有効にして無害なる産兒制限具の圖解カタログとともに無代進呈す。チャーリング・クロス九五番。衞生藥具販賣店」

「勞働者生活」講讀者はその死亡廣告に現れる平均年齡六十九才といふタイムスの讀者のやうに家庭醫といふものは持つてないのだ。だからこれは衞生藥具店の商賣法として合理的な性質を帶びた一つの儲け方なのだ。が、それ等のパンフレット第三冊にある哀切な笑へぬ笑ひ、近代の貧乏について果して何人の英國諷刺家がその同感をよせて居るであらうか。「衞生的貧者の友」と名づけられるゴム製品がある。それは強靭な厚いゴムによつて製され、特殊な裝置によつて其一つを伸せばワッシャブル・シースとなつて夫の爲、卷きちゞめればペッサリとなつて妻の爲「斯くて數年間使用に堪ゆ。資力に限りある者にとつては最も適當、實用的なるものたり。」

× × ×

日本女は再びトインビー・ホールの受付へ白封筒とともに現れた。そして水色の服を着た受付の若い娘の後について育兒相談室、職業相談室其他を見て廻つた。月曜日だ。が、主事は留守だ。相談をもつて來る筈の人々も留守だ――どの室にも誰も來て居ない。がらんとした室の奧に卓子があり、その前で鼻眼鏡をかけたレディが一人で何か記入して居る。九月になれば講義の始る狹い講堂では埃をかぶつた床几が夜明け前のカフェーだ。窓からさし込む八月の午後の光が灰色の壁の上に逆に立つた床几の脚の影を黑く映して居る。何とも云へず四邊は靜かだ。

別棟に眞中が磨滅した石の階段がついて居る。階段は危つかしく暗い。そこを登る時はすつと涼しくなつた。左手に木の低い戸が半分開いて年とつた女の聲がした。内部も天井が低く鉛色に陰氣で暗かつた。黑く穢れた裸の卓子と床几が並んで粗末な白い茶碗がそこゝに出て居る。暗い奧に前垂をかけた働き婆さんが二人だけ居て天井に聲を反響させ乍ら喋つて居たのだ。トインビー・ホールへ來る「彼等」は二片の茶をこの中で飲ませて貰ふことが出來たのだ。

――これは改良する餘地がありますね。すると水色服の娘は直ぐ快活に答へた。

――けれど無いよりは此でもましなんです。

中庭は隣接した高い赤煉瓦の建物の裏を見上げた。鐵のバルコンと無數の洗濯ものがそこにある。靑々と蔦の絡んだ建物は云はゞ主家だ。民衆教育の開拓者トインビーが十九世紀にこゝを建てゝ以來の細い廊下がその内部をぐる〳〵蜒つて居る。窓は鉛條入りの嵌めきり硝子で當時から鎖されたまんまだ。教會內陣めいたその廊下の壁にいくつも寫眞が懸けてある。案內の娘はそれを指し乍ら滿足氣に說明するであらう。

——これが一九三〇年にとられたものです、それからこれが昨年の。眞中に坐つてらつしやるのが今の監督です。

それから

——あら！　こゝに日本の女の方も居ますよ！　確にそれは日本婦人だつた。日本女子大學卒業生型の日本女性代表だ。——が、大體これ等の寫眞は可怪しい。一枚の成人教育課程終了者群の寫眞も無い。紳士淑女の寫眞だけだ。足の下には敷かぬ絨氈を前景に擴げ、背後の蔦とともに奇麗に並んだトインビー・ホール居住人——數ケ月の社會事業見習期間を終つた「社會事業家」が監督を中央に記念撮影して居るのだ。

樫の腰羽目をもつた天井の高い室がある。トインビーの等身大肖像畫が壁にかゝり大きなロンドン市紋章が樫の濃い腰羽目に向つて極めて英國風にエナメルの紅と金を輝やかせつゝ欄間にかゝつて居る。タイムス。デイリー・メイル。デイリー・ミラア。新聞の散つた小卓子がゴシック窓の前にあつて——あゝ。こゝから土曜日の午後一紳士が茶を飲んで居るのが見えたんだ。絨氈が敷いてあるから足音がしたかつた。今誰も居ないが軈てこゝで茶を飲むであらう人間の爲に純白の布をかけた卓子の上に八人分の仕度がしてあつた。匙やナイフは銀色に光つた。菓子や砂糖や牛乳や。豐富にして淸潔だ。

——こゝで働いて居る方たちの食堂です。（オックスフォードやケムブリッヂ大學には月千五百圓つかふ學生だつてある。）娘は隅の卓子へ連れて行つてアルバムをひろげ日本女の署名を求めた。

往來に面した掲示板に今日は成人教育プログラムともう一つの紙が貼られて居る。伯爵××が下賜された土地、（ロンドン市中央より略一時間）小住宅とともに十五年年賦で分讓する。希望者は事務所へ、照會せよ。

ホワイトチヤペル通の交叉點を過ると、街の相貌が段々違つて來た。家並が低くなつた。木造二階家がよろめき乍ら立つて居る。往來はひろがり、タクシーなんか一臺も通らない。犬も居ない。木もない。そして人も少い。太陽だけが頭のてつぺんから眉毛の拔けたやうな街を照りつけて居る。先の見とほしばかり利く一種の臭ひのする白晝の街を乘合自動車が時々空虛から脫走するやうに走つた。

此那街に向つて「民衆宮」の白ペンキ塗鐵の大門扉は堂々と鎖さ

れて居る。土曜日の夜七時からある一志六片のダンスとテニスに關する告示が鐵柵の上のビラに出してある。こゝはロンドン市が誇りとする、そしてあらゆる案内書に名の出て居る「民衆の宮」なのだ。何か民衆の爲の實際的な設備がなくてはならぬ筈だ。

傍の潛門を入ると左側に二つ並んでテニスコートがあつた。硬球だ。黄色い運動服を着た女學生と白ズボン、白シャツの青年が愉快さうにテニスをやつて居る。門外の告示に書いてあつた。テニスコート使用料一時間二志。電話。東一七一五番、又は事務所に照會せよ。

その邊には誰も居ぬ。温室のやうな硝子張の天井が彼方に見えた。喫茶室とあるので日本女はその中へ入つて行つた。澤山の空の籐椅子の上に日光がある。高い硝子天井の下や棕梠の鉢植のまはりを雀が二羽飛び廻つて居た。茶番の年とつた女が居るだけだ。日本女は英領オーストラリア產小鳥の剝製を眺め乍ら宏大な空氣の中で三片のパン菓子を食つた。さうしたら雀がその粉を啄まうとして卓子のまはりをとび始めた。

携帶品あづけ所と洗面所は清潔だ。民衆にとつて殘念なことにはその心持いゝ水洗便所を利用するために通つて來る暇が彼等にないといふことだ。

いくら坐つて居ても日本女は英國人の愛するお伽噺の女主人公美しきシンデレラではなかつた。既に過去何十年間かこの宮殿に無い圖書室。科學、藝術、工業の知識普及の爲のクルジョーク(組)。モスクヷではあらゆるけちな勞働者クラブにさへ滿ち溢れる其等のものを、唯一つの手ばたきで此處に組織化する魔力は持たぬ。民衆宮とは日本よりの社會局役人をして垂涎せしむる石造建築と最初建造資金を寄附したミス・××の良心的滿足に向つて捧げられて居る名前だ。

門の方へ出て來ると、黒い水着を丸めて手に持つた少年が番人に六片はらつて入つて來た。水浴だ。黄色い運動服の女學生の姿は、一時間二志分だけネット裏で美しい。

人通りない鐵柵に沿つた暑いがらんとした通りをアイスクリーム屋が通る。手押車にブリキ罐だ。

――JOES ICE! JOES! 三片!

古本屋みたいな窓の中はぎつしりの本だ。貴君の運命を自身で判斷しなさい。手相占の本もある。ボール紙札が紐でつる下つてる。

諸君ノ圖書館ヲ利用セヨ。

古本屋は東端でイギリス的風だ。震へた字だ。

屋根にトタン板を並べた鑄鐵工作所から黒い汚水と馬糞が一緒くたに流れ出して歩道の凹みにたまつてる。

内部は何があるのか解らぬ古コンクリート塀がある。

から〱した夏の太陽ばかりがこれ等歪んで小さい人間のいろんな試みの上に高くて、路幅は廣くて、眞直な行手は空つぽだ。人々はこ

こで何を食ひ着るのか。そんな種類の店が到つて少い。
この裏から東端唯一の大公園ヴイクトリア公園が擴つて居るのだ
公園には樹があつた。
樹は青い。樹の下にベンチがあつた。兩肱の間へ頭を挾んでベンチへさゝつて痩て居る男がある。
パイプのない口をぼんやりつぼめて、爺が地べたを見てる。
日向では婆さん連が並んで、默つて、ロンドンの紫外線少い夏を吸ひ込まうとして居る。日向だと空氣中に何だか匂ひがした。
圓い池があつた。遠淺で下は砂だ。子供等が膝の上まで水に浸つて遊んでる。
山の手の公園ケンシントン・ガアデンにもからいふ池があつた。午後その池の面は子供等が游べる帆走船の玩具で十八世紀のロンドン・ドツクのやうだつた。ヨツトの白い帆は母親達の色彩多い裝を一層引立てた。
ヴイクトリア公園の池で顏つぺたのこけた顏色わるい子供達は玩具がないから脚で水をバジヤ〳〵蹴つたり、木切れで仲間に水をはねかしたりした。笑はず遊んだ。大人みたいな樣子の女の兒の白い下着の裾が水に濡れた。垢じんでるところを濡れたんで尻の上まで鼠色に隈がひろがつた。水の中へ立つたまんま、十ばかりの男の子がずつと自分より背の高い子を顎の下から突上げた。突かれた方のは、やつと立つてる位のちびの頭の毛を摑んで水へ突込みさうにしてはギヤア〳〵云はせて居たんだ。池の岸に赤セルロイドの石鹼箱のふたが轉がつて居た。
池を眺めて並木道が通つてる。木の根つこの瘤に腰かけて半ズボンの男の子が靴下を穿きかけてる。前に兩方の紐でくゝりつけた靴が放り出してある。
傍でもう一寸年の小さいのがやつぱり同じ作業をやつて居るのに低い嗄れたどす聲で何か云つて居る。
——何だつて？ 擲るぞ。
同じ低いどす聲で云つて顏を動かさず靴下を引つぱり上げてる。
木の箱へ何かの鐵箍で苦面したやうな輪が四つくつついて居る。細紐が一本地面にのたくつて居る。それで引つ張るやうに、木の箱の中へ赤ん坊が入つて居た。額に横皺の出た萎びた赤ん坊が入れてあつた。赤ん坊もそれより大きい子供達もこゝではロシアのバラライカを逆に立てたやうな顏付をして居た。逆三角は人間の顏ではない。だから見る者の心臟にその形が刺さつた。耳の横や食ひ足りない思ひをして居る大きな口のまはりに特に濃く、そして顏全體に異樣にねつとり粘りついて居る蒼黒さは東端の貧の厚みから滲み出すものだ。子供等自身はそれについて知らぬ。富裕なるロンドン市が世界に誇る英國の暮し向よき中流層を擴大させつゝ東端には一時的ならぬ貧を二代三代と累ねさせて居るうちに、この逆三角の顏を持ち七才で既に早老的隈取りをした異樣な小人間が釀し出されて來たのだ。
並木道のまんなかを一人の男の子が小便しながら歩いて來る。

子供の生活に興味を示して居るやうな大人は此邊に一人も居なかつた。小さい稼がぬ人間と稼いでも稼いでも碌な飯の食へない人間と稼ぎたくても稼ぐに道のない人間とがあるだけだ。

ヴヰクトリア公園を二分する道路の彼方側に鐵門があつて、そつちに草原がひろがつて居た。い、い、おふくろのを仕立直したスカートをつけたお下髮の女の子その他草原で遊んでる。草原は禿げちよろけだ。短い草が生えところどころ地面が出て居る。賃貸し椅子は無い。人間に伴れられて驅けつゝ首輪を鳴らす犬は居ない。

公園の外を一條の堀割が流れて居る。橋の欄干に肱をかけて男が二人何處かでテームズ河に流れ入るその水の上を眺めてる。鐵屑をのせた荷舟が一艘引船で堀割を溯つて行くところだ。舟を牽いて居るのは馬だ。一人の男が穢れた背廣で馬の横、コンクリートの上を歩いて行つた。

再び二階建の家。家。家の裂目から氣違ひのやうに凸凹した小屋が飛び出て居た。家。家。赤煉瓦の家。東端も此處いらは上の部だ。駄菓子屋が片菓子を賣つて居る。極く安物の雜貨屋が木綿靴下やピンやセルフリツヂの繪葉書部にあるのとは種屬の違ふ二片ヱハガキを並べた。例へばこんなヱハガキだ。

街角。赤襟卷の夕刊賣子がカラーなしの鳥打帽につらさへて云つてる。

——片足りねえよ!

——うむ……無えんだ。

——持つてるつて云つてやしねえ。だが俺にや片不足におつつけて手前あ胡桃食つてやがる。ペツ!

白手袋の巡査がびつくりして振向く夕刊賣子の腹にビラが下つてる。「又々大膽不敵なる強盜現る!!!」こんなのもある。列になつて失業者が立つて居る。「失業者相談掛」札の下つた机の前だ。ひしやげた山高帽の失業者がだぶだぶズボンに片手を突込んだなりその机に肱をついて

——ねえ、旦那。あつしやもうこれで一年以上お情金で食つて來たんだがその方の扶給つて奴は無えもんかね?

かういふヱハガキを賣るビショップ町ではキャベジ一つ一片だ。二三片で茶色に乾いた燻製魚が一匹食へる。調子つぱづれなラッパの音がした。穢れくさつた白黒縞の喫館の奥だ。看板に「火酒」。贓物屋の店先で女子供が押し合つた。

ピカデリー廣場行の乘合自動車は鐵屑でつまつたやうな黒いロンドンを一方から走つて來てビショップ町の出入口から心配げな顏つきをした僕の男女をしやくひ上げた。そして再び場末のごたごた中に突進した。

デパアトメントストアだ。家具大賣出し! 十八ケ月月賦!

「キリストは生きて居る！」教會だ。

「質」。

「古着」。

高い建物と建物との隙間に引込んで煤けきつた大鐵骨が見えた。黒い、日のさゝぬ鐵骨と鐵骨の間に白いものを着た子供が動いて居た。工場裏に似たそれは皇后兒童病院だつた。

チラリと水が鋼鐵色に光つた。堀割だ。高架鐵道陸橋は四階の窓と窓とを貫通した。

タクシーがちらほら走つた。

おや、洒落た警笛が鳴るぢやないか。成程乘合自動車はやつとロンドン市自用車疾走區域に入つたのだ。

汽船會社が始まつた。又汽船會社がある。何とかドック會社がある。船舶保險株式會社がある。再び汽船會社だ。

その建物全體がそのまんま金庫みたいな外觀をもつて居た。窓に金色の柵に王冠をかぶつた獅子と馬とが前脚をかけた例の皇帝紋章が打つてある。「大英寶石商會」だ。

續いて堅牢な石の外壁に沿つて走り乘合自動車は非常な雜踏の眞只中に止る。そこは都會の三角洲だ。こゝでは妙に身丈の縮少したやうに見えるロンドン人が山高帽の波を打たせて右往左往やつて居る。一つの騎馬像が人間波浪から突立つて見えた。英蘭銀行の八本の大圓柱がこの三角洲の上で堂々と廂をかぶりつゝ、翼を擴げて居るのだ。

貧乏人町東端の方からやつて來るところには一本の圓柱もない。見上げる石壁が平つたく横に續いてるだけだ。が、山の手から來ると人はあらゆる地上地下の交通機關とともに必ずこの英蘭銀行三角洲につき當つた。八本の大圓柱の上の破風にはANNO—ELIZABETHAE—R—VIII—CONDITUM—ANNO—VICTORIAE—R—VII—RESTAURATUM。即ち英國の旺盛な植民地擴張時代を示す符牒のやうなラテン語が刻んである。廣い石段を上下する人間は氣ぜわしい往復の爪先で廣場の鳩を追ひ散した。廣場は硝子張だ。——下が地下電車の停車場なのだ。「一九一四——一九一九年大戰に於て彼等の皇帝並帝國に奉仕せる將校、下士及ロンドン市民の不朽なる名譽の爲に」記念碑が立てられて居る。今日は休戰記念日ぢやない。事務的なロンドン人は邪魔つけさうにその銀行前に突立つ記念碑をよけて急ぎ歩いた。枯れた花輪が根のところにあつた。いくつもの花束の花立はひつくる返つて白い鳩の糞だらけだ。そして三角洲の

突端、騎馬のウエリントン公爵像は背後に英蘭銀行を、右手に株式取引所の厖大な建物を護り、巡査部長のやうに雑踏を上から睥睨して居る。

山の手の此處は終點だ。英國のあらゆる國家的、個人的美德、老獪、權謀が此煤けた八本の大柱列內部で週給六十四志以下三四十志の男女行員達のペンにより簡單明瞭なる「借」「貸」に歸納されつゝある。背後に「東端」がひろがり始めて居ようとも英蘭銀行の正面は廣大だ。兩手を擴げるやうに都會植民地の前に大柱列を並べ、人はそこまで出てしまふと西から來て再び西へ寄せ返す人波と、二つの巨大な磁石巖――株式取引所と銀行とのまはりで揉み合ひ塵を捲き上げつゝ流れる人渦とを見るだけなのだ。

ヨーロッパの買占人、紐育ウオールストリートでは、アスファルトとギヤソリンくさい空氣の中で著名なる經濟學者ベブソン氏を不安ならしめつゝ未曾有の借出と買占が行はれて居る。

ベルファストでは英國勞働組合が大會開催中だ。議長ベン・テイレットがした演說にはかういふ一節があつた。

「國際經濟統制の權衡の大部分はアメリカ合衆國に移動した。戰時中アメリカが集積した債務はこの移動の一原因にすぎぬ。アメリカの莫大なる天然資源、素晴らしい國內消費、不斷に展開しつゝある繁榮。これ等も亦考慮に入れなければならない。西歐の資本家は利潤く返還資金を待望して居る。英國が此等を供給しなければならぬ。其故勞働組合運動は經濟單位としての英國國家組織の爲される提案に密接な關心をもつて從はなければならぬ。」

ソラ、巡査が手を擧げたぞ。

今のうちだ。突切れ!

が、日本の新聞までその寫眞をのせるパレスタインの「歎きの壁」とは一體何だ? 何故英國は、大英博物館傍に本部をもつジオニストの爲に軍隊を動かし、ジオニストに武器を與へ、何故アラビア人は殺されたのか?

ANNO――ELIZABETHAE――

ANNO――VICTORIAE――

ロスチヤイルドを親方にして民族國家をパレスタインに建設しようとする猶太「ジオニスト運動と英國の根本政策とは一致した。」パレスタインに英國軍用飛行機駐屯所を持つことは近東及印度に對していゝ押へだ。ルッテンベルグ協約で英國はヨルダン水力電氣利權を得た。死海協約で凡そ八十億ボンドの鹽を英國は死海から儲けるであらう。パレスタインで農業をして居た先住アラビア人は多く土地を奪はれた。ジオニスト政策は猶太人勞働者を勞働貴族にした。「パレスタイ

ン勞働組合は資本家と爭ふ爲ではない。」アラビア人勞働者の組合加入、組合組織は禁止され、鐵道從業員組合だけが解放されて居る。そしてパレスタインの勞働賃金は

	不熟練	熟練
	志.片.	志.片.
猶太人	……4/2—5/2…………	6/3—8/4
アラブ人	……1/3—2/1…………	3/1

交通機關の血壓上昇がやゝ緩和された。フリート町だ。新聞社町だ。ジョンソン博士が麥酒を飲み乍ら片手に長煙筒を持つてる麥酒盃を出す料理屋がフリート町にある。その半木造の家で昔ジョンソン自身が現代の新聞社街を支配する資本家を知らずに醉つぱらつた。そして氣焔を吐いた。

ハイド公園に近いピカデリー通りで貴族の邸宅は年々倶樂部や自動車陳列店と變形しつゝあつた。そして、バッキンガム宮殿の鐵柵に沿つて今もカーキ色服に白ベルトの衞兵が靴の底をコンクリートに叩きつけつゝ自働人形的巡邏を續けて居るであらう。擔つた銃の筒口が聖ジェームス公園の緑を青く照りかへして右！　左！　右！　左！

オックスフオード廣場で、勤歸りを待伏せる春婦が　飾　窓　の硝子面に自分の顏を、内部に商品を眺めつゝぶらつき、續いて三十分もするとロンドン市中、あらゆる地下電車ステーションの昇降機とエスカレーターは黒い人間の粒々を密集させて運轉する巨大な印刷機だ。乘合自動車。郊外列車。夕刊。パイプ。散歩。それから家庭へ！　家庭へ！　下宿へ。下宿へ！英蘭銀行を中軸とする商業地帶は午後五時以後一時に暗く貧血して夜毎の假死状態に入るのだ。

が、諸君！

ロンドンの勤勞者諸君！　諸君はロンドン地下を朝夕急行地下電車に積み込まれて疾走しつゝ、頭の上にどんなロンドン市地圖が展開して居るか果して知つて居るか？　大都會の植民地東端から英蘭銀行に到る黒き長き路。それから新聞街、問屋町、西、バッキンガムに到るまでの活潑な廣い路。そのどこに諸君の町があるか。知つて居るか？　地表のロンドン市がいるのは勞力だけだ。地下電車はだから諸君等を真空管のやうに吸ひ込んでは市の中へ、真空管のやうに吸ひ込んでは、滓として市の外へ捨てつゝある。たゞ手に持つパイプをたゝき落されぬだけの平安で、諸君はさながらロンドンを所有して居るかの如く平安なのだ。

或日、東　端から逆三角の顏を持つ老いたる若き時代が隊伍をなして繰り出して來なければならぬ。そしてロンドン市はいかに彼等の上に組み立てられて居るか。知らなければならぬ。

或日、東　端から逆三角の顏を持つ老いたる若き時代が隊伍をなして繰り出して來たければ、ならぬ。そして、山の手人は食慾を失ひ、ロンドンが踏んまへて居る者の顏面へオーデコロンをぬつた顏面を擦

りつけさせられなければならぬ。

× × ×

幅びろい雨がロンドンに降つた。夏の終りだ。ペーヴメントを濡し薄い女靴下をびつしよりにして降る雨は、自動車が幌の上にしぶきを立てつゝ孤獨に走る公園の兩側で夏の緑をずつぷり溶かした。驟雨が上る。翌日は蒸し暑い　殘　暑　だ。樹がロンドンぢゆうで黄葉した。

空は灰色だ。雨上りのテームズ河に潮がさし、汽船が黒、赤、白。低い黒煙とともに流れる。架橋工事の板圍から空へ突出た起重機の鐵の腕が遠く聳えるウエストミンスタア寺院の塔の前で曲つてる。河岸でも葉は黄色かつた。トラックのタイアに黄葉が散つてくつついて走つた。

× × ×

PELL—MELLは古風な英國の球ころがし遊びの名だ。

古來英國人は實によく球で遊んで來た民族だ。潮流の加減で冬でも霜ぶくれにならぬ草原と地震なきゆるやかな丘の斜面が彼等のところにある。遊牧時代の或日、さういふ丘の斜面を一つ圓つこい石が轉り落ちたのだらう。羊の皮を下腹に巻きつけたMR・ジョンブルの祖先が野蠻なる青春の歡喜に滿ちて其を追つかけ、拾ひ、又丘の彼方へ叫び乍ら投げかへした。木の枝で打ち飛ばした。木の枝の切端は專門家が其について數頁の説明を費すであらう現在のゴルフの打杖に迄進化した。球を小さくして青羅紗の上へ轉して見る。大きい鬪い奴をふつ飛ばして一つの跳躍する球が人間集團を如何に制約するか、金を賭けて見物する。洒落たチョッキで見事な馬に騎つて球のかつ飛しつこをする。——いろんな道具でいろんな工合に球をころがして遊んでるうちに英國人に地球までがあしらひ切れるつまりは一つの大きな球ではないかと云ふ風に感じられた時代もあつたのではなからうか。

ロンドンのPELL・MELLは有名なクラブ通りだ。各々のクラブは會員共通の利害を意味する有形無形の現代的球を中心に、外國人がその會員として推擧されると其を一種の名譽に感じる程度の結晶をなして居るのだ。王室自動車俱樂部といふのがペル・メル通にあつた。自動車に關係ある人なら誰でも會員になれるのださうだ。ぢやあビーン製作工場の從業者や、オースチン製作場に働いてるものは掌の皮まで自動車油にしみついて隨分直接關係の者なんだが——どうだらう？　一つ會員にしちや貰へまいか。夜會服で英國のプディングを食つて居る王室自動車俱樂部の連中はびつくりしてその仲間をそつと喫煙室の隅へ引つぱつて行き、舌を出させて覗き込むだらう。それから醫學的忠告を與へるに違ひない。——君、氣を鎭め給へ。冷えないやうに今のうち家へ歸つてヒマシ油飲んで床へ入ることだね。……

× × ×

ロンドンの全人口が毎土曜ゴルフをやりに出かけるのではない。證據に、斯う云ふ文句がある。「おい、あの紳士は、フランス語、イタリー語にゴルフ語喋くるぜ」。

× × ×

ジェネヴァに於ける國際聯盟の都市衛生顧問は、世界に於て最も衛生施設の行屆いた都會としてロンドンをあげるだらう。巡回看護の制度はロンドンで最初に制定されたと。ロンドンで病院と云へば殆ど無料病院の同義語ではないか、と。確にイギリス人は公共慈善事業への應分の寄附は、犬一匹飼へば七志六片の税を拂はなければならないと同樣定期支出の一部と認める傳統をもつて來たのだ。然し本來の性質上その英國に於てさへ慈善心の發動には如何に技巧的な絶間ない刺戟が必要かと云ふ例をレッツ出版の事務用出納簿が明かに示した。そこで彼等は五十餘頁に亘る類別商店會案内の後でいきなり痛切た活字の叫びに捉へられるだらう。

――助けよ!!

――一杯やる前に遺言に署名せよ。(サミュエル ジョンソン) 貴君の遺言中に當院への遺贈を記入されんことを。

――何處にあるか。

何をして居るか。

何を必要として居るか。

助を求めて!!!火花を飛ばしてるのは病院、孤兒院ばかりではない。宗教團體、養老院、盲唖院。皆居が保護者となつて居る馬の休養所まで等しく「熱心に」「火急に」寄附を求めて居るのだ。

ミス・エラリン・メイシーは社會組織の隙から發するこのエンタープライズを事務家的才能で把握し婦人雜誌に寫眞の載る成功者となつた。慈善的催しを組織する專門職業婦人がロンドンに數人ある。彼女もその一人だ。美しい耳飾を垂らし、白い齒の上で英語語彙中の或部分――慈悲とか同情とか社會的意義とか云ふ言葉を転しつゝ、着々自身の紙幣に重みを加へて居る。

滿ち足れる人々から一志でも多い寄附を得る爲には彼等を極めて快く樂しませなければいけない。演劇園遊會。三つの藝術(文學、音樂、美術)の舞踏會。――そこにミス・メイシーの頭腦がいる。婦人水着の新型がニューボンド通に現れるより遲くも早くもない時に游泳祝祭を。そして、貧しき母の爲の産院寄附金募集には上流貴婦人連が各自家重代の銀器を持ち出して華々しい展覽會を開催するといふグロテスクな皮肉に充備させられてはいけない。英國人は「與へ而して取る」といふ人生根本原則が顚覆しない限り、あらゆる人生の美、醜に面して恒に沈着なのだ。

八月某日。デイリー・ミラアに面白い記事がある。ロンドン市の「拙

りつけさせられなければならぬ。

× × ×

幅びろい雨がロンドンに降つた。夏の終りだ。ペーヴメントを濡し薄い女靴下をびつしよりにして降る雨は、自動車が幌の上にしぶきを立てつゝ孤獨に走る公園の兩側で夏の緑をずつぷり溶かした。驟雨が上る。翌日は蒸し暑い殘暑だ。樹がロンドンぢゆうで黄葉した。

空は灰色だ。雨上りのテームズ河に潮がさし、汽船が黒、赤、白。低い黒煙とともに流れる。架橋工事の板圍から空へ突出た起重機の鐵の腕が遠く聳えるウエストミンスタア寺院の塔の前で曲つてる。河岸でも葉は黄色かつた。トラックのタイアに黄葉が散つてくつついて走つた。

× × ×

ＰＥＬＬ－ＭＥＬＬは古風な英國の球ころがし遊びの名だ。

古來英國人は實によく球で遊んで來た民族だ。潮流の加減で冬でも霜ぶくれにならぬ草原と地震なきゆるやかな丘の斜面が彼等のところにある。遊牧時代の或日、さういふ丘の斜面を一つ圓つこい石が轉り落ちたのだらう。羊の皮を下腹に巻きつけたＭＲ・ジョンブルの祖先が野蠻なる青春の驚喜に滿ちて其を追つかけ、拾ひ、又丘の彼方へ叫び作ら投げかへした。木の枝で打ち飛ばした。木の枝の切端は専門家が其について敢頁の説明を與へるであらう現在のゴルフの打杖に進化した。球を小さくして青羅紗の上へ轉して見る。大きい圓い奴をふつ飛ばして一つの跳躍する球が人間集團を如何に制約するか、金を賭けて見物する。洒落たチョッキで見事な馬に騎つて球のかつ飛しつこをする。――いろんな道具でいろんな工合に球をころがして遊んでるうちに英國人に地球までがあしらひ切れるつまりは一つの大きな球ではないかと云ふ風に感じられた時代もあつたのではなからうか。

ロンドンのＰＥＬＬ・ＭＥＬＬは有名なクラブ通りだ。各々のクラブは會員共通の利害を意味する有形無形の現代的球を中心に、外國人がその會員として推擧されると其を一種の名譽に感じる程度の結晶をなして居るのだ。王室自動車倶樂部といふのがペル・メル通にあつた。自動車に關係ある人なら誰でも會員になれるのださうだ。ぢやあビーン製作工場の勞働者や、オースチン製作場に働いてるものは、掌の皮まで自動車油にしみついて隨分直接關係の者なんだが――どうだらう？ 一つ會員にしちや貰へまいか。夜會服で英國のプディングを食つて居る王室自動車倶樂部の連中はびつくりしてその仲間をそつと喫煙室の隅へ引つぱつて行き、舌を出させて覗き込むだらう。それから階級的忠告を與へるに違ひない。――君、氣を鎭め給へ。冷えないやうに今のうち家へ歸つてヒマシ油飮んで床へ入ることつたね。……

× × ×

時に例へば某學校長のやうな訪問客さへあるのだ。校長先生の意見によると英國を英國たらしめたのは何よりも英國の紳士氣質だ。故に努めてイートン。オツクスフオード。ケンブリツヂ等の教育振を視察して行きたいと思ふがどうでありませう。客間の壁にはマルクスと並んで夥しい正統學派、心理學派經濟學者の寫眞が懸け連ねられてる。日曜日の午後は半洋服で過す英國人らしく哄笑しつゝM氏は說明するだらう。

――今更そんなものいくら見たつて仕樣がありやしませんよ。今日では英國人自身が紳士なんて言葉は便所にしか役に立つてないつて云つてる位だもの。……あゝ云ふ處はね、小さいうちからお前達は特別な人間だぞと思ひ込まして特殊な支配者を養成したところなんだ。

そして、極めて純粹な英國式解釋で、一般大英國人の社會奉仕の觀念に就き、商魂に就き、强固な社會的訓練及公平な勝負の價値について古物的な東方からの客を啓蒙するのだ。

或夕方、日本女がその客間に坐つてる。彼女はロンドン裏通りに於て他人である自分を感じる。即ち、英國人の公平な勝負といふ標語もボートレースやボローの競技場埒外では、アフガニスタンやパレスタインまで出ると怪しいもんだといふ懷疑を公然抱いてるのだ。彼女は坐つてる。M氏は

――此間も、あの有名な醬油の××の息子がやつて來てねえ。これは興味ある話題だ。

――種々話してつたが、若い者は相當いろいろ苦しんでるんだな。彼が云ふにや自分なんか決して人の思ふやうな贅澤な暮しなんかして居ないんだ。それでて上手く行かない。何とか考へは無いかと云ふんだ。だから僕が云つてやつたんだが、本氣で何とかする氣だつたら先づ自分が素つ裸になつて見せないぢやあ駄目だ。組合を認めて、代表を出させて、年に一遍正直な決算報告書を見せるんだ。普通の金利七八分の配當を得ようとするのは合理的なんだから勞働者だつて其が惡いとは云へやしない。其以上取らうとするから喧しいんで、此できかなけりやあ勞働者の方が惡い。總て、與へ、而して取るんだ。――どうだね一つ試つて見たらつて云ふとね、先生其那こと受けつけるやうな相手ぢやないんですつて云ふ譯さ。受けつけるも受けつけないにも遣つて見ないで分りやしないぢやありませんか！ねえ。

合理的だと云ふことゝ或人間にとつて其だと好都合だと云ふ事とは二つの別な事だ。日本女はさう思ふんだ。がM氏は自身見て疑はぬ。訓練ある英國勞働組合は殆ど全線に亘つて資本家國家の斯の如き要求を合理的と認め、現に賃銀値下げに協調して居るではないか。この合理化を非合理化だと叫んで居るのは、英國人の商魂といふ特殊性を沒却した第三インターナショナルの指令のまゝに誤つた戰法を繰返しつゝ

ある小數運動者ばかりではないかと。

――君と私とは心理狀態が異ふ。だから互に歩み合つて協調しようと云ふのがイギリス流さ。ところが君と私とは心理狀態が違ふ。だから獨裁がいるつてのが彼等の考へかたゞから、妙さ！妙な考へかたをするといふ點に於てはイタリーのファッシズムとロシアプロレタリア獨裁がＭ氏にとつて全く相等しきものなのだ。

「英國人の着實な商魂が實際に於てどれ丈の働きをして居るかと云ふことは炭坑夫安寧協會の仕事を見ても分る。炭坑主が一噸について一片だけ出して獨立な大きいビジネスをやつてるんだ。」

然し、その同じ着實な商魂が考へ出した英國炭坑に於ける合理化と云ふことは、二年前（一九二七年）に比べると十六パーセント減の勞働人員によつて前年より千三百萬噸增大した採掘量を持ち、勞働者の賃金は一交代九志六片から九志一片1/2に落ちて死傷率が高くなつたといふ事を意味するのだ。

ペンネン通十三番地。勞働大學の露台の上に大きな「賣家」の廣告が張り出されて居た。内部は空屋同然だ。前垂をかけた掃除女が一人廊下を歩いてる。階下の戸を開けつ放した室で年とつた四角い顏の男が時々來て殘務整理をやつた。

――御承知のやうな現狀で坑夫組合はこの學校で三十人前後教育する爲に年三四千ポンドを負擔するに堪へなくなつたのです。昨今の形勢では折角其等の人々を教育しても却つて逆な利益の爲に利用されることになつてしまふので、殘念乍ら斷然閉鎖に決心しました。

西日が表戸の眞鍮板と賣家の廣告の上に照つて居る。眞鍮板の「勞働大學」といふ字がキラ〳〵往來に向つて光つた。

× × ×

日曜日だ。店は鎖まつてる。閑靜な通りを乘合自動車が展望を樂しみつゝ硝子を輝やかせつゝ數少なく走つてる。

聖ピータア寺院の石甃で穢れた鳩の群が餌をひろつて居た。子供づれの男女が立つて紙の中からパン屑を撒いてやつて居る。日曜以外の日此處の大石段は常に大勢の何時になつたら其處をどくのか分らないやうな連中で占領されて居た。或者は石段にかけ、ひろげた膝に肱を突かつて頭を手の中へ埋め込んでた。すつかり膝の下まで磨り切つたところでごろりと長く横になつてる者もある。大石段は目的ない人間のいろんな姿態で一杯に重くされ、丹念に暇にあかして薄い紙と厚い紙とが離れ〴〵になる迄踏み躙られた煙草の吸口などが落ちて居た。ボソ〳〵水氣なしでパンをかじつた。鳩が飛んで來てこぼれを探し、無いので後から來た別な鳩の背中にのり大きく翼をバタ〳〵やつ

た。

　今日は日曜で大石段はすつかりからりとして居る。聖ピータア寺院の内部で說教があつた。パイプオルガンが時々鳴つた。會衆は樫の腰架から立つたり坐つたりしてアーメンと云つた。子供が自分の退屈を紛らす爲、脫いだ帽子を體の前に行儀よく持つて立ち乍ら下を向いて、出來る丈踵を動かさず靴の爪先をそろ〳〵重ねる藝當を試みて居る。眼鏡で鼻柱を抓んだ僧侶が說教壇に登つた。

　――宗教とはいかなる禁制をも意味しない。たゞ諸君と及諸君の光榮ある子孫の一生の爲の秩序、原則としての宗教あるのみである。

　少年團大會出席の爲ロンドンへ出て來た大男の團長が、實用的なことは靴と等しい說教の間にそろりそろりと裸の膝頭で腰架の間を拔け聖壇正面がすつかり見える大柱の下へ立つた。

　出口のやつと一人づゝ通れる欄の左右に僧が立つて口をあけた喜捨袋を突きつけた。

　ハイドパアクの騎馬道では艶やかな馬と人とが午前の樹の下を動いて居た。お下髮の少女だ。山高帽と黑い乘馬服の長い裾との間に現代英國女性の容貌がはつきりはまつてる。數騎の男も混つて、跑を打たせたり馬上からかゞんで柵越しに散步道の知人と握手したり自由に且つ調和を保つて動いて居る。日曜の教會禮拜時間後から午餐までハイドパークのこの騎馬道と其に沿ふ散步道は上流の社交場だ。怪俄をするなら上流の人だけがする唯一の處なのだ。騎馬巡査が二人其邊を行つたり來たりして居る。――

　一時近くなると騎馬道の上にも人影が疎になる。柔かい砂が樹の下に遠く彼方まで續いて見通せた。二人の騎馬巡査は二三回其邊を巡ると人氣ない騎馬道を氣持よささうに鞍の上で尻をおどらせ乍ら駈け去つた。もう警固のいる人間なんぞは來ないんだ。ハイドパアクの或方此方の門から子供連の夫婦――亭主は乳車を押し妻は一人の子の手を引いて居ると云ふやうな世帶じみた一團がぞろ〳〵入つて來る。警官音樂隊が音樂堂の中で軍樂を奏し始めた。斜の縫目の一寸ずつたやうな絹服を着て非常に陽氣な若い女づれ。花壇を一々眺め乍ら步く指の太い婆さんと息子伴れ。――日曜日の午後ハイドパアクはハイドパークの附近に住み乍ら一週に一遍だけそこを散步出來る連中――事務員。料理女。種々な家庭雇人の洪水だ。

　小徑も草原も人だ。人だ。

　自然と人間の割合がこんなに逆になる日曜日彼等の主人達はハイドパークへなんか姿は現さぬ。週末休に自用車をとばしてどつか田舍の倶樂部か、別莊か、公園か、とにかく彼の週給額を半額となし得るだけ遠くロンドンから飛び去るのだ。

　赤羅紗服地の見本みたいに念の入つた恰好をした英國の兵士達が、劍がはりの杖を小脇に挾み乍ら人通の繁いハイドパアク・コオナアで

横目を使つた。そこでは乘合自動車を降りると其足で眞直「婦人用」と札の下つた公園の鐵柵中へ行く女も大勢ある。

半本しか脚のない胴を据ゑた乞食がせつせとペーヴメントへ色チョークで鼻の脇の眞黒な婦人肖像、風景等を描いて居た。「有難う！」「有難う！」石の上に書いてある。英國で乞食は聲を出して慈悲を強請することは許されぬ。與へられる親切に對して感謝を表すだけが許されるのだ。「有難う！！　若し私の仕事が貴君の一片に價するならば！」

洗ひざらしでも子供に着せる日曜着がある者がヴイクトリア公園に出て來て遊んで居た。入つたばかりの樹の下に路傍演說者が何人も札を下げた臺を持ち出し、思想陳列をやつてる。

基督顯示協會

國際社會主義

諸君！　諸君は大戰によつて何を得たか？　利益を得たのは誰であつたか？　大體聲が足りない。隅つこに引込んで樹の枝の下から肺活量の足りない聲が休日の勞働者の疎らなかたまりの上に散つた。人氣があるのは

自由思想家

臺を圍んでびつしり帽子のあるのや無いのが聽いてる。喋つてる山羊鬚は瘦せて若いが底艶のあるやうな頰つぺたに一種のにや〳〵笑ひを浮べ、ゆつくり喋りつゝ聽衆を見渡した。――例へばだね、月夜の晩人の居ない公園の小道で青年が一人の若い迚も堪らない女に出くわしたとすると、どうだね。我々にしろ當然どうも或感覺を感じざるを得ない。（聽衆が笑ふ）ところでその感覺は肩から羽根を生やしたキューピットの仕業だと云ふ。本當かね？　とんだ嘘八百だ！　青年は「男」で女が可愛い「女」だからぢやないか。生物學の仕業だ。弓の玩具なんぞふり廻してまだ一人前の男にもなつてないキューピットの果して知つたことか？　聽衆はパイプを口からとつて、地面へ唾をはいて、笑つてる。

踏れた草原で女達が眞上から日に照らされ乍ら足を投げ出して居た。子供が焙れた胡麻粒みたいにその間を跳ねてる。路傍演說なんぞ聽く女は殆ど無かつた。

池では貸ボートが浮いてる。一人や二人でのつて居るのは極く少い。五六人づゝで、水の上を動いて低い橋かげを潜る時なんか歡聲をあげて居る。

ハイドパークの池は廣く、遠い河のやうだつた。汀を靄が戰いだ。水禽が人々の慰みのためキラ〳〵水玉をころがして羽搏をしたり嘴で泥から餌をあさつたりして居る。

ヴヰクトリア公園で池は狹い。一寸行くとボートに島みたいなものにぶつかつたり、橋桁にすいつく。それでも、市大會社の腰高椅子

卸問屋の地下室から來たらしい若者達はコンクリートではない水をパヂヤ〱掻きわけ、空氣と日光を感じて日曜を笑つてる。

乳母車。それを押す男女。子供。車輪付椅子。並木道は一杯だ。或女は日曜のエナメル靴を穿いたりして居るのだがこの行列は見えない何かを一緒に後へ引つぱつて、練り歩いて居る。日曜が年に五十二度あるといふ暦だけでこの付ものは消えないのだ。日曜だつてヴヰクトリア公園の子供の顔は逆三角で、二つでも大きい子が小さい方の子の世話をやき〱並木道を練つて行く。こゝでは子澤山だ。山の手の公園で五人も子を連れた夫婦はなか〱見つからない。この並木道の上では子供がひとりでに分裂して又子供を拵へでもするやうに子が多くて、親は二人で、それが最後か或は後三人の最初か分らぬ。最近の子を乳母車にのせて押して行く。

ダリアばかり咲いた花壇の横で若いものがテニスをやつて居る。六つばかりの男の子が網にしがみついて見て居る。飽きず見て居る。二人下の子をつれて先へ歩いて居た親たちが道の角で立ち止つて此方を見た。

――ジョーン！

網目へ兩手の指を二本引かけて身をおつつけたまゝ子供には呼聲が聞えもしない。山高をかぶつた父親が小戻りして來た。

――ジョン！

ぎゆつと子供の手首を引つぱつて網からはがした。彼の背廣の襟の折りかへしが糸になつて居た。

午後のテームズ河を小蒸汽が遡りつゝあつた。小蒸汽はキユー植物園で一日暮したが歸るに自用車は持たぬロンドン人を甲板に並べた椅子に滿載して居る。白い手套をはめさせられた女の子が椅子の上で日曜着の膝に落ちた煤煙をふき拂つた。河上は風がある。ウエストミンスタア橋に近づくと、河の水からやつと這ひ上つたばかりの猫が一匹コンクリートの河岸の出張りの上で盛に上を見乍ら鳴き立てゝ居た。河岸まで遠いが猫がずぶ濡れなことや鳴けるだけの力で鳴き立てて居る事は進行中の小蒸汽の上から分る。甲板にある多くの顔がそつちを見た。一二間傍へよつた河岸の欄干に體をもたせて半ズボンの少年がその溺れそこなつた猫を見下して居る。猫のやつとしがみついて居るところから河岸の上までは高くて垂直だつた。

ピカデリー廣場でイルミネーションがちらつく時刻だ。郊外からロンドン市中へ向ふ街道といふ街道の上を自動車があらゆる速力を並べて疾走した。そして月曜日の夕刊新聞は左の報告と記事とをのせるだらう。週末の自動車事故××件。死傷〇〇人。先週より〇％増。

「娛樂ドライヴは果して殺人罪を構成せざるや。」

ロンドンで自動車運轉許可は郵便局へ五志拂ひ込めば貰へる。だが運轉すべき自動車そのものはハロッヅで賣つてる玩具でも五志よ

りは高い。

近代倫敦ボーイの或者は生涯到來することなき自動車購入の時節を空しく待つたりしないで、例へばこの土曜日の夕方だ。山の手をぶらぶら歩きして居た十六才のジョンソンは不圖或門の前に止つた一臺のオウバアンを認めた。二人乗用の新型で、何だか短いスカートから出て居る娘の膝つこみたいな車だ。素通り出來ないやうな型の車を道端に乗りすてたミスター・ウヰリアムズの不幸でジョンソンはそのオウバアンに乗つかつた。駛つた。大いに冒險心と快適な娛樂心とを滿足させ夜更けてから元の門近くまで戻つて來たところで腕を捕まへられた。が、オウバアン一臺を盗む意志はないのだし、事實盗んだのではないし、ジョンソンは既に何十人かの先輩の例に倣つて——一寸娛樂ドライヴに借りたんです。と肩を上げたり下げたりするだけだ。

この新型ヴアガボンドは既に幾多の英國紳士を膽汁過多に陥れた。明瞭な悪意が無いと云ふこと丶、而も所有權被侵擾者が神經消耗をやつた揚句時には五日も費る自動車修繕代を支辨しなければならぬと云ふところに娛樂ドライヴの現代漫畫性がある。

× × ×

「賃金は低下されなければならぬ。」ボールドウヰン。
「然り。だが仲裁裁判によつて。」マクドナルド。
飢餓審判と戰へ！
賃金値下げに抗してストライキせよ！
少數派運動者大會が爭議へ指導する。
新年から我等の日刊新聞を。其を持たないうち我等は共産黨ぢやない。
先づ裁判を！
獨逸勞働者は「赤旗」の爲に何をしたか。

コヴエント・ガアデンはロンドン野菜市場だ。花野菜、蕪、胡瓜の山から發散する巨大な青くさ丶に向つて一つの硝子窓が展いて居る。窓の内に赤布で飾られたレニンの寫眞がある。反帝國主義戰爭のパンフレツトが並べてある。粗末な古い木の床の左右は本棚だ。トルストイ、トウルゲニエフ、チエホフ、ゴルキー、リベデインスキー、グラトコフ。其等の英譯が各國の經濟論文集や、ミル・アダム・スミスとともに立て丶ある。此處は本屋でもあるのだ。正面の勘定臺に男が二人、一人は立つたま丶何か讀んでる。黑い細いリボンを白襯衣の胸に垂した女が大きな紙の上で計算して居る。勘定臺の後横から狭い木梯子の一部が見えた。そつちは、だがまるで暗い。外からの光線で、見えるのは數段の梯子と横の穢い壁面だけだ。鳥打をかぶつた青年がドヾと驅け下りて來て、勘定臺から切拔帳みたいなものをとり又上つて行つた。

店の内部に居るのは六七人だ。互に背を向け合つて靜かに本を探してる。小さい男の子の手を引いて體格のい丶四十がらみの勞働者が入つ

て來た。彼は週刊新聞「勞働者生活」を三ケ月分豫約した。

その勞働者が立つてる定期刊行物見本卓子は幾分土曜日夕方のハイドパークに於ける言論市場を髣髴させた。勞働組合の機關紙、炭坑組合新聞等が黨の刊行物とともに賣られてる。

×　　×　　×

トラフアルガア廣場のトーマス・クック本店横から二台の大型遊覽自動車が午後七時の薄暮を衝いて動き出した。

トーマス・クック會社名前入りの制帽をかぶつた肥つちよの案内人が坐席から立ち上つて「こゝがオックスフオード通。只今通りすぎつつあるのはロンドンの最も洒落たレストランの一つ、フラスカテイであります。フラスカテイ！」叫んで居る時にロンドンが夜になつた。

遊覽自動車はそれから東へ東へとつて肉市場スミス市場のアーク燈に照らされた白い鐵骨アーケードの下を徐行した。古代ロンドンの城門の一つを潜つた。

一本の街路樹もない、暗い狹い街が現れた。瓦斯燈が陰氣に灯の氣無い低い窓々を照し出してる穢い步道を、そこの壁と同じやうな色の裝をした人間がぞろ〳〵步いてる。闇を劈いて時々ぱつと明るい通があつた。戶のない階段口が煙出し穴みたいに壁へ開いて居る。

寢床。　六片。

木賃宿だ。

案内人は立ち上らず坐席から首だけ伸して大きくない聲で說明した。——こゝいらが皆有名な東端の一階家です。

再び暗い街。暗い街。暗い建物の裂け目から一層黑い夜が鋭い刃のやうに見える横丁の前をトーマスクックの東端巡覽自動車は脇をほつそり引伸すやうにして辷り過ぎた。

市營勞働者住宅は七階だ。が空間利用法によつて七階までの鐵階子は道路に面した空中へまる出しだ。レインコートを着た男が一人三階目の露台を通つて四階目へ登りつゝある。彼の姿は何處かの扉へ入つて仕舞はぬ限り天邊へ登り切るまで下の往來から小さく鐵階子の上に見えた。

「民衆宮」で彼等は蓋したベッシユタインのグランドピアノを見るだらう。英國史上あらゆる女皇の不器量な大理石像を見るだらう。止つた遊覽自動車のまはりは顏面と聲だけ夜から見分けのつく大小の子供達で鈴なりだ。

——片おくれよ、小父さん！

——お金！　お金おくれ！

外套の前をきつちり合はせ肩をいからすやうにして子供達をかき分け乍ら男達は急いで腕を支へ伴の女を先に自動車へつれ込んだ。運轉手が卷煙草を子供達に分けてやつてる。

ポプラア通りだ。電氣仕掛の大十字架だ。ペニーフヰールドの支那

町は夜九時のロンドン・ドックを通り抜けると同じ速力で。

テームズ河底のトンネルは白タイル張で煌々たる電燈に照し出された。大型遊覽自動車のエンヂンの音響はトンネルぢゆうの空氣を揺ぶつた。塵埃を捲き上げて穹窿形の天井から下つてる大電燈の光を黄色くした。鳥打帽の若い勞働者が女の腕を執つてその長いトンネル内を歩いて居る。男も黑い裝だ。女も若いが黑い裝だ。全光景はマズレールに彫らせ度き大都會の强烈版畫的美しさだ。

說明しない種々な動機から東端を廻つて來た、何處の誰だか判らぬ。人々が三時間目に再びトラフアルガア廣場で散らばつた時、ロンドン市の上へ月がのぼつた。

ロンドン市は片眼をつぶり、片眼を開けて數百年來夜ぢう起きて居た。月は片眼のロンドンでデイリー・メイル社の電氣廣告の頂上を步いてる。

十一時過、ピカデリー廣場やチヤーリング・クロス附近から一齊に英國國歌の吹奏が起つた。

――神よ・我等の光榮ある王を護れ。――タクシーが熱して駛り出した。何處への宣戰布告だ？――芝居が閉場たのだ。舞臺衣裳に働かす活潑な想像力はパイプの煙脂の中にさへ持ち合はさぬロンドンの一流から四流までの劇場で、幕が下り、幕が上り、舞臺から夜會服の男女俳優が同じやうに夜會服の男女觀客に向つて上目を使ひつゝ腰を曲げ、亮々たる國歌が吹奏されたのだ。

ライオン喫茶部では大理石切嵌模樣の壁が自棄にぶつかる大太鼓やヴアイオリンの金切聲を歪め皺くちやにして酸素缺乏の大群集の頭上へばら撒きつゝあつた。昨夜此處でマカロニを食べた二人連の春婦が同じ赤い着物と同じ連れで今夜は馬鈴薯の揚げたのをナイフで挿つて食べて居た。食べながら遠いところの何處へ向つて腰をひねり、嬌笑した。失ふべきものを持たぬロンドン人が月の下の街や陋巷の奧にゐた。

ホワイトチヤペル通で獨逸賠償問題に關する共產黨の路傍演說が終つた。「ミスタア・フイリツプ・スノウデンは勝つた。然し英國とドイツの勞働者は敗北したんだ。」月はかう云ふ言葉を聽き、愈々片眼のロンドン市の上へ高くのぼつて、トラフアルガア廣場の立ち上つたところはまだ人間によつて見られたことない四頭の獅子とドーヴア海峽の海の面を照らした。

モスクワ。　一九三〇年三月

現代日本文學全集

第四十三回（四十二篇）

六月中旬配本豫定

鈴木三重吉集
森田草平集

漱石門の逸足——新浪漫派の雙璧——明治大正の文壇史に最も特異の地歩を占むる鈴木三重吉森田草平二氏の最大最高の傑作の悉くを網羅したる尨然たる大册。この一卷こそ、正にわが新情緒主義新理想主義文學の總決算報告書である。

內容

鈴木三重吉集

千鳥　山彦　おみつさん　烏物語　黑髮　烏　女　瓦　民子　羊　櫛　穴　大伯母　（長篇）桑の實　八の馬鹿　小猫

森田草平集

（長篇）煤煙　初戀　（長篇）自敍傳　袈裟御前

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



訓令工事

岩藤雪夫

一

みぞれになつた。
玄海灘からきた濃霧で暮れた港もミルク色にかすんだ。
石炭をたかない艦のデッキは冷たい。
職工たちは砲塔や扉の陰に油だらけの顔をうづめて風に狂ふみぞれをさけた。工場へ歸る通ひ船を待つてゐるのだ。
浪頭は艦側に碎けては喚めいた。
時どき風がなだれて濃霧とみぞれを吹きはらうと、佐世保の街の灯がかすかに見えかくれした。
職工のどろんとした目はその灯に吸ひつけられた。
その灯の向ふには妻と子供と小便くさい炬燵が待つてゐる――
艦は軸に投げられた錨を中心にしてキリキリと風下に廻つた。
『ウーッ寒い、通ひ船は未だ來ないかい？』

水洟をすする聲がした。

五人づつ位とぐろを卷いてゐる職工たちは脊伸びをしては工場の方の濃霧をすかした。

エンヂンの響きさへしなかつた。

『早く來ねえかなあ、畜生！　火もねえ所に十時間も働かしあがつて、凍えちまわあ！』

『その上、御町內に出張修理でも歩合はなしと來てやがる！　年額五千萬圓の工場が聞いてあきれらあ……』

吉野はズボンのポケットの中で兩手をごしごし擦り合せた。腋の下で空辨當がからからと鳴つた。

『よせ、泣き言をいふない、』主砲の下でこごんでゐた濱田伍長が紫色の唇を慄はせた『給料日になれあ、その泣き言をみんな忘れちまやがる癖に……』

艦の晝間勤務水兵たちがカツタアに分乘して陸に歸つてから三十分以上も經つ。

『ケツ、五時半ぢやあねえか、工場にゐれあ今頃は工廠列車でつッ走つてらあ……』

皆、水洟をすすりながら脊伸びをしたり小手をかざしたりして陸を眺めた。

風と波の音ばかりが激しかつた。

と、濃霧をつん裂いて呶鳴り聲が流れた。

――おーい、△△の連中……まだゐるかァ――

百メートルほど離れた巡洋戰艦○○からだつた。

――おーい……ゐるぞォ――

見習職工の大山が赤くこごえた兩手をラッパにして牝牛のやうに應えた。

それをあざ嗤ふやうにみぞれはデッキをけし飛んだ。指はかじかんで伸びなくなつた。水洟はこすつてもこすつてもダラシなく流れた。舌を動かすものもゐない。

寒さにちぢこまつてゐる皆の耳にはチ・チ・チと打合ふみぞれの音と自分の動悸だけが明つきり聞えた。

『あーあ、すまじきものは宮仕へと、松王丸も洒落たことをほざきやがつた、年末まであと八日この調子か……せつたく海軍工廠なんか工場中の地獄だ……』

膽つ玉の太とさうな調子のない男が唸つてゐた。

後のものは顎を胸に落としてしけこんでゐた。

間をおいて、他の僚艦からも――おーい――と呼ぶ聲がした、もう誰も答へなかつた。

一分を一時間の長さで彼等は待ち續けた。

汽笛がかすかに聞えた。

『來たぞ……』

『やつと來やがつた、畜生！』

道具袋を肩にして皆腰を持ち上げた。

工廠の防波岸壁と思はれる見當からエンヂンの音が近づいて來た。

やがて煙突が濃霧の中に現はれた。赤帯の上に白字の二の煙突が工廠の通ひ船だ。

通ひ船は速力をゆるめて戰艦△△の横腹にはりついた。

『やーい、早く乘つて呉れ！　是から〇〇へも廻らにあならんよつて……』

と通ひ船のデッキで船長が叫んだ。

職工たちは我先にタラップを馳け降りて乘り移つた。

小さい通ひ船に移るとみぞれは風にあふられて見やがれとばかりに又吹きつけた。職工たちは急いで船室に飛び込んだ。二十人ばかりの人間に船はゆらゆらと搖れた。

『靜かにしてくれ！　運轉がしにくいで……』

と船長は又が鳴つた。

船室の幕は風にはたはたと鳴つた。

最後にカーキー服の男が四人デッキを走つて艦の梯子を降りて來た。二人は造兵部員の大尉であつた。他のは吉野たちの砲熕部の松野技手と他の工場の技手だつた。

『御免！　御免！　うう寒い……』

松野技手が眞先に通ひ船に飛んだ。

デッキの職工たちはサッと道を開いた。

松野技手は船室の幕をたぐつた、中は一杯だつた。

『チエッ！　一杯か、空いた所はないか、寒くてかなはんで！』

松野技手は目を光らして呟いた。

『もう一杯です、十四人も入つてるんです……』

と組長の山内が答へた。

『何ッ！　一杯だ、お互に寒いんだ、這入れ、這入れ……』と一人の大尉が松野技手の後から押した。『さあ松野君這入れ、這入れんちうことがあつか……』

四人は、子供が「押シクラ權兵」をするやうにぐんぐん割り込んだ。油だらけの顔がぶつかり虫歯のつばきや耳垂の膿の匂ひがいつぱいむれつた。濡れた仕事着がびつちやりとくつ着いた。靴がぶつかつた。

『大尉殿！　あんまし押さんと下さいな…』

と山内が呟いた。

『痛い！　押すな押すな……』
と職工同志は叱り合つた。
『そらそら、詰めろ！』
大尉は面白さうに押した。
疲れた職工たちが倒れかかつて船は一としきりゆれた。
すると、片隅から癇癪持ちらしい聲が揚つた。
『えゝい！　のいた、のいた。俺ア出るツ！』
先刻「すまじきものは宮仕へ……」と唸つた水雷工場の赤つ毛の男だつた。
『後から來て無理押ししやがる、寒いなあ、誰だつて同じだ。デツキに立つてる奴もゐるんだ……勝手に這入りあがれ……』
道具袋を擔いだ彼は職工を押し別けて船室を出た。
四人はポカンとしてゐた。
外のデツキには六七人の職工がみぞれに濡れてゐた。
あたりはもう暗くなりかけた。
『生意氣な、砲熕工場の松野奴！　ピイピイ抜手の癖に……』
と彼はデツキに出て風に呶鳴りつけた。
デツキの職工たちが同意して表情だけのにが笑ひをした。
運轉臺の船長は舵輪を一廻しして綱を引いた。

ボーツーボーツ……
汽笛が波を爬つて鳴つた。
船室の後ろでクランクがスツトンスツトン廻り出した。
通ひ船は靜かにローリングをしながら進み出した。
と、造兵大尉の一人が船室の幕を開けて出てきた。
『今の職工は何處にゐる……』大尉はデツキの職工を睨みつけて太い聲を放した。『さつき呶鳴つた奴はどいつだ……』
職工たちは顏を伏せて船つ腹を流れる浪の泡を凝つと見つめて答へなかつた。
エンヂンの響きに浪の音がごぼごぼと絡み合つた。
松野抜手を毒づいた水雷工場の赤つ毛は何か言はうとしてすつと顏を上げた。
『うん、こ奴だな、こら！』と大尉はすかさず力んだ。『この毛唐人……お前だらう……』
『さうです……』
と彼は答へた。
『うん……』
頑丈な體の大尉はにんまり笑つて彼の仕事着の袖を掴んだ。
『來い！　このびしよぬれナツパ奴、少し話がある……何處の工場だ

……――

大尉は彼の袖を引ずるやうにして船室に入つた。彼はよろよろとついていつた。

彼の顏には、人間がバツの惡い時にする造り笑ひが浮んでゐた。

船室の職工たちは、二人、一人づつ逃げるやうにしてデツキへ出て來た。

十九人がみぞれの渦巻くデツキに立つた。

彼等の目と耳は五人のゐる船室に集つた。

手はデツキの欄干を固く掴つた。欄干の下を白泡がとんだ。

波の音とエンヂンの響きに混つて、叫び聲と唸り聲とが高く低く聞えた。

上官、……敬意、……貴樣等職工達……馬鹿野郎……の言葉が切れぎれにした。

運轉臺の船長は鳥渡、ふり省つて丸窓から覗いたが默つてゐた。

そして靴が床を蹴る音もした。ガタンと道具袋が落ちる音がして通ひ船がくらついた。

○○に着くと十人ばかりの職工が乘り込んだが、船室のけはしい樣子に驚いて艫の方へ一塊りに集つてしまつた。

吹鳴り聲と唸り聲は通ひ船が工廠の防波岸壁に着くまで續いた。

他の職工たちは、「見まい、聞くまい、……」といふやうな顏をして大急ぎに岸壁に飛び移つた。そして工場の浴場に走つた。

通ひ船の船室には五人が殘つた。眞先に松野技手ともう一人の技手と二人の大尉が出てきた。

最後に例の職工が蒼ざめた顏に目ばかりぎよろつかせて現れた。

「徽章を見せえ……」

と大尉は彼の圓い肩を鷲掴みにした。

「水雷工場、仕上工、四十五番、郡司幸平、」

彼はむつつりとほき出すやうに言つた。

「よし、行け……」

郡司は、跛をひきながら防波岸壁をゆつくりと歩いていつた。道具袋とふさふさした赤毛が肩の上で搖れてゐた。

工廠に通ふ職工を正門まで運ぶ工廠列車はもう動いてゐなかつた。

郡司は、風呂にも入らなかつた。仕事着のままで工廠列車のみぞれにぬかつた線路みちを跛をひいて歩いた。

體の蹴られた節々が痛んだ。彼は鳩尾に力を入れては押し上げる口惜しさを堪へた。

2

朝の岸壁には艦へゆく職工が群り、マシン油の匂と潮の香がむんむん立こめてゐた。

郡司の元氣な顔も吉野のちんちくりんも交つてゐた。

工廠の五十工場の汽笛が一齊に鳴る頃通ひ船が八方に走つた。

濱田、吉野、大山、郡司たち二十人は何時もの通り戰艦△△へいつた。

艦には若い平服の海軍少將艦長と當直將校が並列して待つてゐた。

職工たちは當直將校に、工場名、仕事別番號、姓名、を報告しなければならなかつた。

艦長がそれを傍の黒板に書きこんだ。

報告が終ると各自の作業場、砲塔、中甲板、吃水線以下の魚雷發射管室へと散つた。

吉野と湊と見習の大山は濱田伍長に連れられて十六吋主砲の附屬部修理に第一番砲塔へ這入つた。總鐵製の艦は冷え切つて鼻の穴さへ寒かつた。

砲塔係りの兵曹も水兵も未だきてゐなかつた。

『少し、これあ暖まらにあならん。』と濱田伍長は言つた。『彈庫へ下りて休まう……』

そして彼は先に立つて砲室のタラップを下りた。

さういふ「油賣り」はみつかれば忽ち半期五錢昇給の邪魔になるのだが一寸止められない勢當だつた。

彈庫は艦のどん底であつた。四方が鐵壁で空氣の流通を止めてあるので砲塔内より暖かかつた。

然し、火氣を禁じてある室だけに鐵錆びとペンキと油の臭さみが胸を悪くするほど罩めてゐて、ちつと暖かいのは床のリノリユームだけだつた。

水雷工の八人も來て休んでゐた。郡司もゐた。

『おい、昨日はひどい奴にあつたな』と吉野が訊ねた。『俺達あどうすることもできなかつたんだよ、どこか痛まないかい……』

『ふふう』と顔の半分で嗤つて郡司は答へなかつた。

四人は、床にアグラをかいて懐手をした。

座つてゐると尻の方だけが暖まつて、背中や肩が鐵の冷氣を吸つて鳥肌が生えた。

吉野と湊は、何故今度の第二艦隊はこんなに修理を急いで職工をいぢめるのだらうかと訊ね合つた。

『それはな、今年の夏からアメリカの巡洋艦が小笠原あたりへ來て、時折、海底測量をやらかすからさ……警備かたがた來年の一月に對抗大演習があるんだよ……』

と濱田が言つた。

二十分ほど休んで又ナマコ型の砲塔に上つた。
兵曹は來てゐなかつた。
湊は身體をすぼめて砲身を傳ひ十二呎ばかり鐵柱や壁をぬけて砲身の下に降つた。水壓パイプの取外し作業だつた。彼は脊なかから尻までの長さに油じみた木綿屑を敷いて體を横たへた。
横手に赤いローソクを燃やした。
堅く締つたボールドはナツドの角に鏨を當てて打たなければゆるまなかつた。が縦横にパイプやリングが走つてゐるのでハンマアを振る空間がなかつた。湊は肘から先だけを少しづつ動かして鏨の頭を叩いた。
大きな腕の蔭が鐵鋲の並んだ砲塔の壁にうごめいた。
コーンコーンといふ打撃音があちらこちらから聞えた。そしてそれは、蜘蛛の巣のやうに張り廻らしてある水壓パイプにぶつかつて反響した。
木綿屑に寢てゐても體はしんしんと冷えて來る、右手にできるだけの力を働かして熱を起こし全身を暖めなければならない
彼は懸命にハンマアを振つた。時どき見當が狂つて、ハンマアは左の親指を叩いた。
すると皮膚が裂けて血が滲じんだ。血を見ると自分の頓馬さを氣附いて初めて身體が熱くなつた。
そして夢中に働き出した。
砲塔の外で話聲がした。
――チケ、テツテケテ――寒いね――
――寒いね、今夜は當直かい――
松野技手の咽だ。艦隊が來春一月十日頃抜錨しなければならないので、朝から監督にきてゐるらしい。
――いいや、久し振りに君と飲まふか――
野口兵曹の聲だつた。
二人は話しながら艦尾砲塔の方へいつた。
湊は野口兵曹を思ふと臍の當りが冷たくなる感じを覺えた。
去年の秋この第×艦隊が船體修理に入港した時のことだつた。或夜、××××一行三十六人に混つて湊は××買ひにでかけた。
佐世保は昔から海軍でもつてゐた街だつたから、艦隊が入港すると街中が賑はつた。
一行三十六人、湊を加へて三十七人は街の中央のさる××町をうろついた。何處も海軍の客で滿員だつた。やつと女が四人ゐて二人だけ少し暇だといふ家にぶつかつた。一行はそこで遊ぶことになつた。
二人の女は二階で寢てゐた。三十七人は×××二階へ上つた。

一同が揃つて歸つたのは午前二時だつた。
然し、湊は××××××××××が翌日死んだといふ話を聞いた。それは××××××××××××心臟痲痺を起したのだつた。
一行の中で一番助平なのが×××××だつた。湊はあの翌翌日の××××けちな葬式を思ふ度に××が思ひ出されてならなかつた。
『やい、湊、何を考へてやがんだ、ハンマアの音に力がねえぞ、』と遠くから濱田が聲をかけた。『暗いからつて妙なこと考へんなよ……』
『チエッ！　伍長！』と彼は唸つた。
『松野抜手が早く來すぎるよ……柄でもねえ……』
『無理もねえさ、工場にゐれあ、係長に頭を壓さへられるから艦へ來て威張るのさ……』
濱田伍長はマシン油だらけの學生帽をアミダにして水壓裝塡彈子を修理してゐた。
そこへ野口兵曹と二人の水兵がきた。
『よう、諸君、少し休み給へ、』と野口は叫んだ。『そんなにしたつて、疲れてヘマをやられては我々が困る、體を休めて早く上手に仕上げて呉れ給へ！』
得たりかしこしと四人は作業を止めて木綿屑で油の手を拭いた。そして三人と四人で圓く輪を作つて休んだ。
『兵曹殿、ホマレを一本！』
と吉野は頭をかいた。
『うん……』
『すいませんなあ……』
『ひつ、今始まつたことぢやあなし』
兵曹は作業の煙管服のポケットからホマレを出して四人の前に置いた。
濱田が同僚四人にホマレを一本づつ廻した。
『ここへ來てる二十人にせびられるんで、ホマレも毎日、五箱位きえてしまう……』
と兵曹は笑つた。
『野口さん、ホマレもホマレだがもう十五日から一週間になるで、ほめられついでに何か御馳走せんなんかなあ。』と濱田は言つた。『正月の十五日に錨を抜き又當分會はれんでのう……』
『會はれんなんて、嬶みたよなこと言ひよる、さうな、何がええか、罐詰めか堅パンか……』
『何んでもええ、食へるものなら……』
『さうや、さうや』
と濱田はうなづいた。

『よつしや、晝食の時に、やらうわ……それから歸りの土産と……』

『頼みまつせ……』

『オーライ、ネヴマン……その代り、よく修理してくれや、大演習に成績が惡いと、昇給に關係するでな……』

兵曹と水兵が次の砲塔に立去ると、四人は又、水洟をたらして冷たい作業にかかつた。

各砲塔係の兵曹は晝飯時に二十人の職工に鑵詰めと堅パンを分配した。

其夕刻、四人は通ひ船を上がるとそつと砲熕部仕上工場の隅により集つた。

『それ明りが見えんやうにローソクを立てろ……』

と濱田伍長は囁いて道具袋を開けた。

見習の大山が作業用の赤ローソクをともした。

四人はローソクの焔を圍んだ。

濱田が牛鑵を一個づつと、堅パンを五枚づつ配つた。

『堅パンは家づとぢや……牛鑵は食つちまへ……アルコールは此處だ……』

濱田の腕が道具袋から一升瓶を掴み出した。艦で兵曹に貰つた、藥用メチルアルコールだつた。

『さ、のんだのんだ、』と伍長は自分からラッパ呑みをして次つぎに吉野、淺、大山と廻した。

四人は鑢の尻で鑵を破り、手づかみで牛肉を食ひ始めた。

『うふ！　鑢の粉が入りやがつた……』

大山は臼齒をがりつかせながらも呑み下した。

交る替る咽笛を鳴らしてメチルアルコールを飲み、牛をつまんだ。

『な、みんな、これだから艦行きは辛いが役徳があるんぢや、工廠費×××のこぼれぢや、』と伍長は猪首を振つた『兵曹奴、砲塔をよく仕上げて貰ひたいばかりに呉れるが、なあに、こちとらは普通にやつてればええんぢやよ……』

『他の連中何うしたかな』

『家に歸つて食ふとるだらう……』

『しかし、伍長さん、山内組長にでもめつかつたら減給やな！』

『何を言ひよるかい組長ぢやてのんべだわ、一日氷室みたよな所で働いて、これ位のこと何んぢやな、儂たちばかりかどの艦へいつても、みな、この傳ぢや、水雷艇と潜水艦は貰えへんが……』

と濱田は昨日のみぞれに通ひ船のデッキに立ん坊をしたのが原因して又痔が痛みだしたとこぼした。

『だが、痔と酒はこれお別ぢやけん……』
と湊が言譯をした。
吉野も艦行作業をしてから家に歸りさへすると膝小僧のお椀骨が熱つぽく疼むと言つた。
『それ、それ、それは炎症を起したのぢや』と濱田は叫んだ。『冬の艦修理には誰でも起すのぢや、仕やうむないことぢや……』
『かなはんな、正月まで、火もない鐵の中で稼ぐとは……』
と湊が牛肉を含んで言つた。
『若いものが何たらぢや、俺は見習から十五年間、それで叩かれて來たんぢや、』と濱田は續けた。『我慢せい……二十年で恩給ぢやからのう……』
『二十年で恩給……』と大山が考へこんだ。
『辛棒するかな』と吉野はヤケにアルコールを叩つた。
湊は、『辛い！辛い』と言ひながら、腹の中では、『艦に行けば、怠けてばかりゐて正味六時間位しか働かない』のを考へて、『冷たさ位はしかたない、牛鍋やアルコールの役徳がある』と自分を慰めた。
四人は一時間近く飲んだり食つたりして體の油も洗はずに工場を出た。

『艦行きか、御苦勞！』
と門衞は控室から股倉火鉢をして呶鳴つた。
『寒いこつてすな……』
と濱田伍長は大聲で笑つた。
外は海の風が流れてゐた。
四人はメチルアルコールにふらふらして工廠列車の線路に添つて歩いた。
見習の大山は苦しさうに胸をぐーぐーさせた。
『こんな調子で一月十日まで艦隊修理が片づいたらめつけもんだ』
と湊はへらへらと笑つた。
『さうさ、正月は三日間休みだし、二十八日からは公休だし……大演習は日延べだい……』
二人は肩を撲りあつて喜んだ。

3

みぞれが止むと天草風が吹いた。
東西二里、南北一里半の港中が凸凹に暴風だ。
西の烏帽子岳は雪を着た。
冷えた艦は緩くもまれて、海になれない修理職工たちを酔はせた。

若い職工は一時間をきぐらゐにデッキに出て潮風に醉をさました。ひどく醉つたものは欄干によつて、黄色い唾をペッペッと吐いた。

『こら、怠け者奴！ 後七日だぞ今年は……』と技手はそれを見つけると仇のやうに怒つた。『公休を差引けば、仕事は四日間きりないんだ……』

叱られた職工は又よたよたと氷のやうな仕事場に歸つた。

艦橋の隅では五人の兵曹と松野技手がコークスストーブを取卷いて話してゐた。

『あんた方が職工を甘やかせるから困る……僕は毎日、係長に修理豫定表をつきつけられて小言を食ふんだ……』

『せえけれど、砲塔の器具の善悪は、僕等の昇給に關係するんで遂、頼んぢまふのだよ、それが人情さ。』

兵曹の一人が謝つてゐた。

『あんたもさうだらうが、こつちも人情がほしいよ。僕だつて昇給に關係する。年に十錢だからね。』

と松野技手は力んだ。

彼も一日七八時間も冷えた戰鬪艦で日給の歩合もなしに憎まれ口を叩いて歩くのは嫌だつた。しかもみぞれが降つて温度が下つてからはずつと修理作業が捗どらなかつた。

彼と山内組長は毎日係長に叱られた。

その飛ばちりが伍長にぶつかつた。伍長でもあふりつけたければ若しこのまゝ作業行程が後れて一月に入つて夜業命令でも下されやうものなら身體がたまらないと思つた。

だから彼は、少し手を空けてゐるものを見つけさへすれば呶鳴り散らした。

『君、さう叱るなよ、仕事をぞんざいにされるから』

と兵曹の一人がなじつた。

『僕だつて誰にも惡く思はれ度くはないんだ……あんた方が砲塔の中へお上手を言ひに行くからいけない……』

と松野技手が言ひ出して議論が始つたのだ。

『勝手にしやがれ、青瓢簞奴！』と終りに三番砲塔の兵曹が呶つた。

『俺たちだつて何も××で海軍にゐるんぢあねえや、××××××××××、××や×××の頭くらべと階位のとりつくらだ。××××××××我々が偉らくなるんぢあねえや、このかつぽれ！

『まあそんなもんだ』と他の兵曹もストーブから腰を上げた。『これからは、職工を大事にしねえからな……いいか……』

五人の兵曹は肩をふつて出て行つた。

氣の弱い松野技手は額を抑へて沈んだ。

ポトン――ポトン、
天井を貫く水壓パイプの割目から水が落ちた。
仰向にねて作業してゐる首ねつ子に絶えまなく落ちた。それはまるで太い針のやうに痛く皮膚と腦みそを刺した。
湊は水の落ちる音に合はせて鏨の頭を叩いてゐた。
赤ローソクは腕を振る度にゆらめいた。ゆらめくと鏨の頭が見えなくなつた。
首を流れた水は段だん背なかに傳はり仕事着を通して、下に敷いた木綿屑を濡らした。息をする度に身體がぞーッと寒くなつた。いくら力を入れてハンマアを振つても身體は暖かくならなかつた。
右手の先だけが少し熱かつた。
他の砲塔で打つハンマアの音が心臓にこんがらかり濡れた背なかに響いた。
彼は時々休んではほつと兩手に息を吹いた。
濱田伍長と大山も砲身の下に寢て濡れながらネヂを緊めてゐた。
吉野だけがしやがんで、裝塡部の眞鍮器具の油拭きをしてゐた。
松野技手らしい靴音は十五分ぐらゐの間をおいて砲塔の外を通つた。通ると必ず窓をのぞいた。
『急げ、急げ、捗どらなけれあ、殘業だ。』
と三度に一度は叫んだ。
午前十時を艦橋の大時計が打つたので、皆が休憩をとらうとした。
すると、松野技手は、
一、二、三、四、の砲塔を馳けぬけて呶鳴りつけた。
『いかん、いかん、今日から、十時も三時も休憩なしだ……大演習に後れりあ大變だ……』
バットを一服吸ひかけた濱田伍長はびつくりして技手の方を睨んでゐた。
『チエッ！ 仕樣がねえ、』と彼は莨の火をもみ消して呟いた『みんな、大演習に後れると言はれちや齒が立たない、やつちよくれ……』
三人は又濡れた木綿屑の上に寢そべつてハンマアをとつた。
風は櫓式マストに裂かれて叫んでゐた。
湊の身體はこのまゝ鐵になつて終ふんではないかと思はれるほど冷えた。胸と臍の周りだけが少し暖かだつた。耳だけがほてつてゐた。
吉野も膝の皿が痛むらしく靜く撫でてゐたが、そつと立つて砲身の前面の盾の蔭に歩いて行つた。
『どうしたい、吉野』

と湊が訊いた。

『いいや、××をしたいが、デッキへ出ると寒いから、ここでやるんだ……』

『やれ、やれ、慾だ、××××の歳費だ！』

と濱田はスパアナの手を止めて言つた。

吉野は斜に走る水壓パイプに下つ腹を當ててやり出した。寢不足の赤い××は白い湯氣を揚げて、シュッシュッと下の方に流れて行つた。下は誰もゐない換裝室だ。

四人は聲を揃へてふくみ笑ひをした。その聲は大きく砲塔の天井に響いた。

松野技手の自暴クソの叫びが艫の方で聞えた。

正午の休みに腰を伸ばして立ち上ると、みんなナッパの裾がこちんと凍りかけてゐた。

『生きながら氷だよ、ストーブ位ほしいやべら棒な……』

『山から掘つた石炭は軍艦ばかり動かすのが能ぢやねえや……』

『おお寒い、たまらん』

大山は唇を紫色にして慄えてゐた。

『松野の奴、一日でも働いて見やがれ……』

湊が頬べたを擦りながら砲塔を出た。

『大山、辨當を持つて來い、みんな』と濱田伍長は言つた。『彈庫へ降りよう……』

三人が降りると大山は四人分の辨當箱をかゝへて走つて來た。

『堪らねえ、生命の方が大切だ、冷えて心臟がつらいや、明日から俺あ休むよ、伍長！』

と湊は彈庫のリノリュームにぞんざいに倒れた。

『よせろ、よせろ……』と伍長はむきになつた『儂が技手に叱られるで……』

他の砲塔の連中や、水雷工の郡司たちがぽつぽつ蒼い顏をして集つて來た。

作業を終つたので氣がゆるんで、みんなの齒の根がカッカッ鳴つた。

リノリュームの床に四つん這に掌を押しつけて、「おお暖けえ、おお暖けえ」と喜ぶのもゐた。

皆が凍つた辨當箱を開けかかつた時、一人の水兵がタラップの上から兩腕をさし出して小さな聲で呼んだ。

「濱田さん、濱田さん、これ、さ、早く」

木綿屑に包んだ圓いものだつた。

『や、又ですか。』と濱田は両手を差しのべてお辞儀した。『有難い、ほんとに……』

水兵は「頼むよ……」と首を下げていつた。

『大山、砲塔へいつて、ローソクを四五本と十八吋鑢を二三本持つてこいよ……な……』

大山は俺ばかり使やがるといふやうに膨れて砲塔へでかけた。

大山がローソクと鑢を運んで來ると伍長は又命じた。

『タラップの入口を締めとけ……士官や技手公が來るといけねえから……』

濱田は四本のローソクに火をともして、床に立てた。焔の両端に金物を置いて三本の鑢を渡した。そして木綿屑から取出した大罐詰を四個、割つて鑢の上にのせた。

『さ、みんな、兵曹の御馳走だ、暖かいうちに食へよ』

濡れたローソクはヂーッと鳴つて罐詰を煮た。

皆暗い室のローソクを圍んで辨當箱を開いた。澤山の人間の影が四方の鐵壁に大きくうごめいた。

それは丁度、原始人の食事の集りのやうだつた。

凍えた飯は散彈のやうにざらざらして歯にしみた。飲み下すと食道から胃まで冷え渡つた。

しかし、皆は暖まつた牛罐をお菜に嬉し相に食べた。

『ハハア、兵曹、一寸感心だね』

『チョツ、ハハの三年目と……』

少し暖まると皆元氣になつた。

食事が終ると莨だ。

ごろごろ横になつて莨をふかした。

大山や吉野たちは煙硝の匂のする綿布を隅の砲彈の上から引張り出してくるまつた。

『もう起きるのはいやだなあ……』

と二人は笑つた。

時間が來ると、職工たちはそろそろ上つて行つた。

最後に大山と吉野だけになつた。

『大山、吉野も早く、ローソクや鑢を持つて來いよ、こんな暗い所にゐると××××きたくなるからな……』

濱田は冗談を殘して砲塔へ歸つた。

砲塔の入口で淺が何か考へてゐた。

『どうした淺？』

『うん、實はね、うんこだ……』

『馬鹿！　便所へ行けばいいぢやないか……』

『寒くていやだ……』

『さうか』と伍長は鼻でくすんと嗤つた。『ではそこらへしろ……』

『よし來た！』

湊は砲塔の中へ入つて、ズボンを脱ぐと木綿屑を撫げた。そして前かゞみに力んだ。

黒いねばつたのが丸く出た。用を達すとそつと木綿屑で包んで、砲塔窓からぽいと海に投げた。

彼は笑つてそこら中に唾を吐いた。

零時四十分の汽笛が工廠から響き渡ると又彼等は作業にかかつた。

濡れた木綿屑の寢床は隅々がばりばり凍つてゐた。湊はそれをゴム靴で踏み碎いて横になつた。

ハンマアの音やスパナアの軋みや鑢の音が方々の作業場から聞えて來た。

パイプを洩る水は絶え間なく落ちてゐた。

職工たちの身體が再び冷えはじめた。

午後一時の通ひ船で、係長が各部の組長を連れて、修理行程の下検査にきた。

係長が艦橋のストーヴで身體を暖めてゐる間に、松野抜手が「係長の見廻りだぞ」と各砲塔から艦底の魚雷場まで觸れて歩いた。

暫らくして、松野抜手の案内で係長や組長が見廻つて來た。抜手は各番砲塔の入口に立つて一いち作業行程に説明を加へた。

現役將校の係長は鬚つ面に不滿足さうな皺を浮べた。

『このまゝでは、とても間に合ひさうもない、人員を増加するか、殘業するかせにあ……』

『ええ、然し員數は一杯です、』と抜手は顎をさすつた。『殘業をしたらと思ふんですが、職工はいやがるだらうし、殘業歩合を拂ふ割に作業は進みませんから……』

『殘業をしたがらん……殘業を……』と係長は唸つた。『生意氣を言はせてはいかん、帝國軍艦の修理ではないか、戰場のつもりで働かせろ！』

係長はデッキを蹴つとばすやうにして艦底へ降りて行つた。

『おい、殘業だとよ、人殺しい――』

湊が半ば眞面目に叫んだ。

『俺あ、二十八日までで田舍へ歸るんだ、あほ臭さい……』

吉野がスパナアで裝塡眞鍮をきんきん××つけた。

『こけ、×が利かなくならあ……』

伍長はむつつりと膨れた。

係長は一と廻りしての歸り際に松野技手に命令した。

『明日から九時まで殘業をせよ……ええか……』

『はつ……』

技手は軍隊式に擧手した。彼のまごついた目が艦のタラップを降りる係長をうらめしげに見送つた。

4

次の日から係長と組長は午前だけ各艦を廻つて歩いた。

職工たちは十時と三時の休憩時間さへ與へられないで凍てた身體をぼい立てられた。

技手達は夕刻までで歸つた。

艦の當直兵曹や水兵は夕食後にきつとアルコールと肴をふるまつた。

それは第一自分等も飲みたいのだが、職工たちによく修理して貰ひたいためだ。

だから殘業する割合に作業は進まなかつたし歸りの連中は皆、赤い顏をしてゐた。

『この不景氣に九時まで四時間の殘業とは有難い……』

と工場にゐる職工は年末に儲ける連中を羨ましがつた。

『どつこい、お言葉が違ひませうと、入れ替りたいや、』と修理職工はにがり切つた。『十四時間も氷の中で働くんだぞ歩合なしで、イロハ骨牌ぢやないけれど聞いて極樂見て地獄さ……』

そして風邪ひきが多くなつた。

晦日を六日前にひかえた土曜日の夕刻だつた。

三方、山に面した海に、二十數隻の軍艦の信號燈がゆらめいてゐた。

ジヤツクナイフみたいな天草風をつん裂いて通ひ船が來た。十數人の人間が乘つてゐた。

見習が砲塔や魚雷室に凍えてゐる職工たちに工場から支給される夕食辨當を持つて來たのだ。それは角い木箱につめられた燒米のやうな飯だつた。

『飯が來た……』

と△△のデッキで見習が叫んだ。

――おーい――

――おーい――

と方々で聲がした。

艦橋から二人の水兵が走つて、各作業場を馳けた。そして叫んだ。

『ほい、諸君、皆、兵曹室へ集り給へ、御馳走だ……又今夜も……』

唇と頰を紫色にしたのや、ナッパの脊をバリバリに凍らした職工たちが砲塔や艦底から穴居人のやうに身體をこごめてぞろぞろ出てきた。跛をひいてゐるのもゐた。

『やい、辨當、辨當……』

彼等は鼻にからまつた聲で呶鳴りながらデッキの見習から箱辨當を受けとると、中甲板の兵曹室に集つた。

兵曹室はストーヴにむれ、五個の十燭電燈が白ペンキ塗りの天井に耀いてゐた。長い長方形の食卓にはアルミニュームの食器が螺鐵のやうに並んで、湯氣が立つてゐた。

水兵の夕食の殘りの牛肉と野菜と鰯だつた。

『さあ、諸君、ちつと腰かけて有りつたけやつつけて吳れんか……』

と一人の兵曹が榮養のいい赭ら顏で笑ひかけた。

職工たちはペコペコして食卓にすがりついた。

身體が暖まると冷えた時風呂に入つたやうにみな背筋をぶるんと慄はせた。

箱辨の飯は凍つてゐた。

兵曹が分けてくれた暖かいものと一緒に噛み合はせると齒の根がしんしんと痛んだ。それでも、胴慄ひをしいしいみんな食ひ平らげた。

指のかぢかんだ職工は赤ん坊のやうに箸を棒握りにして掻つこんだ。二十人餘りの舌と唇の音は小波を開くやうだつた。

宿直の兵曹や水兵は嬉しさうにそれを見てゐた。

『諸君、足りなきあ未だあるよ、パンも……』

と兵曹は一人の水兵に顎で命じた。

水兵は室外に走ると間もなく、食パンを持つて來て、一同に配けた。

『へえ、大きに……』

『すんまへん……』

身體中が胃であるやうに皆は食べた。

次に煙草、ホマレが一本づつ各自の前に置かれた。

一人の兵曹は言つた。

『我々帝國海軍の兵士は、諸君と等しく、陛下の赤子である、來る一月上旬に行はるる耐寒大演習は、我々軍人が、一旦緩急あるに應するの場合の決死的練習なのである、願はくば諸君、我々の忠君愛國の實を充分に果さしめる爲に、誠心、帝國軍艦△△の修理を一日も早く完ふされん事を希望いたします……』

その話に答へるやうに胸元でかすれる咳が方々でした。

伍長等はかしこまつて頭を下げた。

平職工や見習達はきよろきよろした。隅の椅子にゐた水雷工那須司

は、空のアルミ食器を食ひつくやうに睨んでゐた。

『なあ、諸君、勘むぜ……』と他の兵曹は小さく囁いた。『それに明日は、日曜日で係長も組長も來ないだらうし、技手も午前中だけの勤務だから、酒を御馳走しよう……な……』

左利きは笑ひたい目尻を引締めた。

濱田は額を叩いて頭を下げた。

翌日、日曜日は係長も組長も艦に來なかつた。

△△の係になつてゐる松野技手は九時頃出勤して、三番の通ひ船で艦へきた。

そして一時間ほど監督して歸つた。

どの艦にも二人の當直兵曹と水兵がゐるだけであつた。

『日曜當直なんて、因果なものさ……』

と兵曹たちは艦橋で愚痴つてゐた。

『他のものは街で酒と女にありついてゐるのに……』

晝の休みには、港に散らばつた僚艦から自暴糞半分の軍艦マーチや、流行歌が響いた。

食事を終へた職工たちは相變らず彈庫に降りてゐた。或者はチークの床に寢そべり、又は砲彈の被ひにくるまつて感覺のなくなつた身體を暖めてゐた。

その頃、△△の係の山内組長が來て兵曹たちと話してゐた。

『酒とまではゆかんが、アルコールを職工諸君に飲んで貰はふと思ふ、』と兵曹は組長の眼色をうかゞひながら申し出た。『飲んで貰うて一とふん張りしてもらはにや駄目だ……○○でも今日飲ませるちう話だ。』

『アルコールで我々を釣るんだな、ははあ……』と酒ずきの組長は胡桃みたいな鼻をすぼめた。『しかしええ、作業さへ捗ればのう……』

『さう、僕らも一緒に飲まふと思ふ……今日は當直××も居らんし………』

『それあ、ええ、日曜に艦へ來て儲けた。』

と組長は自棄でも起してゐる人間のやうに喜んだ。

水兵や見習職工の手で彈庫へ十本のアルコールと牛罐が運ばれた。

密閉した彈庫で「景氣つけ」の酒盛りが初められた。

『うん、みんな、酒は兵曹が惠んで呉れたんぢやが、許可したのは儂ぢやからのう』と山内組長は少し醉ひがくるとくどくどと言つた。『皆ようやつて呉れよ、この修理が安上りゆけば年末は儂は工手になれるでな……』

組長は二十年ばかり勤めて、漸く二圓二十錢の日給をとつてゐた。
唇をひん曲げては、職工たちに頼むのを、兵曹や伍長が盗み見ては笑つた。

兵曹も時どき「早く早く修理できるやうに」と職工達に頼んだ。

職工たちは默りこくつて牛肉をつまみ、アルコールを飲んだ。

と、午後一時の汽笛がかすかに聞えた。

そして暫らくすると、海面を這つて鐵板を打つ癇高い音や、スチームハンマアの響が流れてきた。工廠の五十工場からはじき出される一萬人餘りの職工の作業のひびきであつた。

氣づいた職工たちはそろそろとタラップを昇つていつた。

『組長殿！』と一人の伍長が肩を叩いた。『もう作業時間です。……』

『何……作業時間だ、』山内は時計を出してパチンと蓋を開いた。『お、お、一時十分だ……さ、みんな、掛つてくれ、腹も太つたたらうから……』

職工は立ち上つた。

『チエツ、組長、自分一人で飲みやがつて……』

タラツプの途中で蹟づいてゐる者もゐた。

アルコールを注ぎこんだ身體は午前中よりは樂であつた。

しかし砲塔や、艦底の魚雷室に下つて一時間も經たない間に、身體の出張つた所から段々に冷えていつた。

彈庫にはべろべろに醉つた六人が眠つてゐた。山内組長と、石橋、北川、武井、杉本、並川、の職工たちであつた。

三十分餘りして、艦隊を巡檢中の特務中尉に發見された。

六人はすぐ巡警船に移されて、工場に戻された。係長の訊問があつて、守衛本部に廻された。

午后四時半に二つの掲示があつた。

> **處　罰**
>
> 工務規則、第××條、×項ニ依リ、左記職工ヲ處罰ス。
>
> 砲熕部組長　山内清吾
>
> 右、一ヶ月間ノ組長待遇ヲ停止シ、日給二十錢ヲ減給ス。
>
> 職工　石橋虎雄
> 　　　北川三太
> 　　　武井勝
> 　　　杉本常一
> 　　　並川喜代二
>
> 右五名、日給十五錢ヲ減給ス。
>
> 佐世保海軍工廠長
> 海軍少將　岡村毆太郎

日給、二十錢の昇給は三年、十五錢の昇給は二年半かかるのが普通だつた。

> ○○及ビ△△ノ修理ハ、十二月二十九日ヨリ一月五日マデ無休作業ヲ續行ス。
> 修理部

5

二十八日が年末の仕事終ひだつた。

○○と△△の修理以外の職工たちは、油を賣りうり元氣に働いた。そして他の艦は滿艦飾をほどこして、萬國旗の音を港中にはためかした。

△△の職工は交尾期を外づされた牝犬のやうにこぢれて、誰も彼も眞面目に働かなかつた。暇さへあると赤ローソクの焔で冷えた掌を暖めてゐた。

二十九日からは缺勤者が殖えた。

一月一日、二日、三日と段々に增した。

風邪にかかつたものや、膝蓋炎や、過勞したものは全部來なかつた。

一月六日の仕事の初出日にも、○○と△△、修理の職工は半分ほどの出勤員數だつた。その日一年に一度だけ午前八時に出勤する係長は○○と△△の艦の出勤簿に見て、初怒りをした。

○○と△△の責任を負つてゐる組長が呼び出された。

『君等がずるけてゐるからだ。初出の今日の出勤率を見給へ！どうするつもりだ。』と係長は卓子を叩いて唸つた。『若しも旗艦△△の修理が一月十日までに終らなかつたら、第二艦隊はあの榮ある耐寒大演習に後れることになるぞ、これは訓令工事ではないか、殊に丸田君、君は山内の後を驅けて、後れただけを取りかへさねばならぬ責任があるぞ……すぐ補充職工を後から送るから、』

二人の組長は何んにも言はずに艦へ戾つた。

『軍艦の主砲や魚雷發射管のやうな精密機械を、赤ローソク二三本の先でさせるんだから、早くできないのも無理はありませんよ。××××の歲費を何處に使つてるのか譯が判りませんね。』と○○の組長は通ひ船の中でこぼした。『寒いのに職工にはストーヴもたかせないし、私は、少し暖まりが足りないなと思ふやうな日は歸つて一晚中、腰が痛みますよ……』

丸田は『補充が來たらどんな方法を用ひても期日に間に合はす』と力んだ。

△△には、一番砲塔と、二番砲塔に二人づゝ、三番は一人、四番は三人だつた。

魚雷の郡司は休んでゐなかつた。新しく來た補充かそれを助けた。

『寒うばかりあつて、勝手がわからん……』

寒いのと慣れないのとで補充職工はすぐ文句を言ひ出した

丸田組長は調節器のやうに飛び歩いて監督した。

砲身の下や二番砲塔の中は、水壓パイプから洩れた水が細く筋を引いて凍つてゐた。換裝室の床も一面にうすい氷が張つた。いくら澤山木綿屑を敷いても臀や脊中が痛んだ。そして冷えた。

『頑張れ／＼力一杯に働きあ、身體はすぐ熱くなる、氷も溶ける…………』

と松野技手は呶鳴つた。

身體を暖めやうとして力の限りハンマアを振つたり、鑪を押したりするが、身體が暖まる前に手の指が縮んで、物が摑めなくなつた。

掌を暖めるために赤ローソクに手をかざすと水洟が流れた。水洟もこごえた指で千斷つて捨てると、三十分もして床に凍りついた。

一番砲塔は膝蓋炎の湊と大山が缺勤して、吉野と濱田だけで、あとは中村と横ぶとりの藤井で補充作業を急いでゐた。

然し、濱田と吉野は疲れて仕事がのろかつた。藤井と中村は慣れないので捗らなかつた

どの作業場も同じやうな有様だつた。

業を煮やした松野技手は組長を使ひにやつて掛長を呼んだ。

正午少し廻つてから掛長はきた。

そして停時間まで歸らなかつた。

掛長がきても職工たちの過勞と病氣がなほるといふ譯には行かない。掛長は、どの職工を見ても蒼く、目のくぼんだ顏とのろまな腕つきをしてゐるのに驚いた。

水壓パイプの洩れ水に凍つた床と、その床に寢てバリバリのナツパのまま海老いろの手で作業をしてゐるのにも仰天した。

『これあいかん、何とかせにあいかん。』

と彼は呟つた。『松野君も丸田君も、かういふ事は少しも報告せんぢやないか……缺勤者のでけるのも無理はない……職工の方が當然だ………』

掛長は何かしきりに思案して工廠へ歸つた。

組長は掛長の不氣嫌さに弱腰を叩かれたやうに覺えて伍長を叩りつけた。

『君、もつと、砲塔同志で競爭させるやうにして作業を進行させにあ、駄目だ！』

濱田伍長は自分の受持ち砲塔の職工に呶鳴つた。

『さ、みんな、長い事はない、仕事の終るまでだ、他の砲塔に負けるな、負ければ職工の腕の名折れだぞ……君たちの成績にもかかはるんだ……』

どの伍長もそれに三言と違つたことを言はなかつた。

藤井、中村、吉野は「一昨日來い！」といふ顏附でゐた。

職工の殆ど全部が返事もせずにさういふ態度をとつた。

伍長と組長が慌てた。次に技手の松野が狼狽した。係長にそれが傳へられた。

そして又、夕刻工廠事務室前に掲示が出た。

告示

直接、國防艦船建造ノ事業ニ從事スル工廠職工諸君ハ、常ニ報國盡忠ノ念ヲ忘ルベカラズ。

ハンマァノ一撃チモ敵ニ加ヘル砲彈ノ一撃ニ等シキ事ヲ考ヘ、一身事業ノタメニ倒ルルトモ戰線ニ於テ敵彈ニ倒レ傷キタル名譽ノ戰死ニ等シキ事ヲ忘レズ、常ニ國防事業ニ倒ルルノ覺悟ヲモッテ兵器製作ノ任務ニ從事スベシ。

砲熕工場係長

海軍少佐　久本　哲

それを讀むと、艦船修理の職工でなくても××だした。

『なんでえ、××を××と同じに考へてやがる……』

『××は×××だ。俺達あ物を作つてる方ぢやねえか、なめてやがる……』

『××は頭の先から足の下まで××のものを着てゐるんだ。俺たちあ、日給ボッキリで食つてるんだ、馬鹿にしやがつて……』

二人叫び、四人集り、ぶつぶつ言ひ出した。

『ようし、畜生！　もうどんなに、艦の仕事がいそがしくなつたつて、沖へは行かねえから、碌な日給もよこさねえくせに……』

次の日から、前の日の補充職工が休み出した。

代りの新規が補充を命ぜられた。それの大半も亦次の日から缺勤した。

一週間以内は無届で缺勤できるし、日給も半額支給されるので、みんなが申合せたやうな態度をとつた。

組長や技手は、補充職工の顏さへ見ると砲塔にがん首をつつ込んで頼んだ。

『何とかするからやつて吳れ！　上からの命令だ、俺だつて好きで君たちをいぢめるんではなし』

『休みますよ、一日でこんなに身體の芯まで冷えちやあ、五年も生命

が縮まらあ、それでなくつても四六時中鐵の中で暮してゐるんだ……』

十人の内四人までは口答へした。

『さうか、休みやがれ、……と遂に組長たちも怒りだした。『みんな休みやがれ、掛長に報告してやるだけだ……』

とうとう、職工たちも組長や技手が反目してしまつた。

幾日もたたない雪の夜だつた。

九時の殘業を終つて職工たちがデツキの物蔭に縮まつて通ひ船を待つてゐた。

或る一組は砲塔の傍に輪を作つて三本の赤ローソクを立ててかぢかんだ手を焔にかざしてゐた。十四時間もぶつ通しに力を入れた指は筋がつつて中々のびない。彼らの横には道具袋が塹壕のやうに積んであつた。

誰も、精魂を使ひはたしたもの丶黒ずんだ目蓋をして鬚も伸び放題だつた。天草風がその鬚を海草のやうに亂した。

間もなく通ひ船が一隻の團平船を引いて走つてきた。

黒マントの士官と、松野技手が雜役夫を從へて乘つてゐた。

通ひ船が△△に横附けになると松野技手は雜役夫に命じて纜綱をタラツプに繋はせた。

待ちかまへてゐた水兵と職工たちが大股で船にのり移つた。

『みんな、上着をとれつ、機械の運搬だ！』

と松野技手は叫んだ。

『機械の運搬？』と濱田伍長が鸚鵡返しに叫んだ。『もう殘業ををへた歸り際なんですよ……』

『生意氣いふな…工廠の命令だ！俺だつてこの寒いのに出張だ……』

——へつ、この寒いのに？

と誰かゞへらず口を叩いた。

『誰だ、文句をいふのは……』突然通ひ船の船室から掛長が現れた。

『やれ、やれ、ダンペ船のあの箱だ……』

吉野は又かと思つた。

それは戰闘艦の最も秘密とする精密機械らしく取外づしも修繕も取附けも、技手と掛長と選ばれた組長だけがした。そして運搬にはいつも箱詰だつた。しかもそれは職工の肩を痛めるだけのひどい重みをもつてゐた。

「工廠の命令」を親の言ひつけのやうに教へ込まれてきた職工たちは、即座に作業服やナツパを脱いでダンペ船に移つた。

五尺四方の大箱には十文字にロープがかけてあつた。職工たちはそ

のゆるみに二本の丸太棒を十字に通した。そして片棒に五人づつが擔つた。

呼吸を合はせて、腰を切つた。丸太棒がしなつた。箱の底はダンベ船の面板から一寸ほども離れなかつた。

歩き憎かつた。肩の骨がごりごり鳴つた。

波に揺れる船の上で、皆、よたよたと小刻みに歩んだ。

――よいしよッ！　よいしよつ！――

『落すな、落すな、二千圓の品物だ……』と係長は喚いた。『落して足を怪我しても知らんぞ……』

十四時間の勞働の後の酷ごい働きであつた。

こごえた指には力が入らなかつた。霜燒けのきた足の裏は力を入れる度に痛んだ。軍手も破れた。

然し流石に、ダンベ船からタラップの下まで運ぶと一同の胸や額には汗が滲んだ。そして冷えるとすぐ乾いて、顔中がザラザラと鹽をふいた。身體は餘計に冷えた。腰は石になつたやうに痛んだ。

『さあもう一と息だ。タラップを昇れば終ひだ……』

と松野技手は通ひ船から自分が擔ひでもゐるやうに力んだ。

又一同は、

――よいしよ！　よいしよッ！――

とタラップを昇りはじめた。

と、一人が突然肩棒をはづして唸つた。

『糞くらやがれ！　一日働いた後でこんな仕事ができるかい……』

横ぶとりの藤井だつた。

一人にはづされた片棒はガクンと傾いて、片方の職工たちは危ふく海へころげこみさうになつた。

『俺は動悸がくるしいんだ』

と藤井は叫んだ。

『氣をつけやがれ！　畜生！』

『この半端人足奴！』

とみんなが呶鳴つた。

藤井はタラップをよちよち昇ると砲塔の鐵壁に沿つて何處かへ姿をかくした。

『こら、こら！』

と後から掛長が怒つた。

『藤井の奴！　ふて腐りやがつて！』

と松野技手もその紅い頰を染めた。

すると、又二人ばかりが肩をはづした。

丸太棒がタラップと平行に傾いた。

そして箱の重みが擔つた人間をずるずる逆戻りさせた。
『擔げるかい、こんなものを……』
と二人の一人は艦のデッキへ昇つて叫んだ。
掛長と抜手はもう一つのタラップを馳つてデッキへ上つた。
二人――吉野と郡司――は鼻面をそらせて立つてゐた。
『こら、覺えて置け二人とも……』と抜手は睨んだ。『藤井！ 藤井はどうした。奴、かくれたな……』
松野は覺えのある換裝室へ走つた。
砲塔の裏からタラップを降りて突き當つた室がさうだ。松野は扉を開けて呶鳴つた。
『藤井、藤井！……』
返事がなかつた。
懐中電燈をポケットから出した。
扇形の蒼白い光が室の隅々に闇い隈を造つた。
床にパイプの滴り水が凍つて銀色に見えた。
室の隅に黒い蔭があつた。藤井の横倒れの身體だつた。
『藤井、藤井……』
と松野は靴先で蹴つた。
『藤井、こら、藤井』
藤井は、赤ん坊みたいに四つん這ひになつて醉ひどれのやうに立ち上つた。
目はつぶつてゐた。
『この野郎！ 逃げやがつて……』
と松野抜手は拳骨をとばした。
横鬢をくらつた藤井は膝を折つてぺつたりと斜にくづれた。
『藤井、藤井』
と松野は藤井の土色の顔に懐中電燈の光を浴びせた。
藤井は閉ぢた目の前で何かを求めるやうに手を振つた。彼の凍てたズボンが板のやうに鳴つた。
そして動かなくなつた。松野はこごんで見た。額に掌を當てると鐵のやうにひやりとした。

6

九日の△△の出勤職工は三分の一に減じた。
周章た組長が工場中を頼んで廻つた。
『君、△△へ行つて呉れないか、九、十と二日間だけだ……』
『いやですよ、戦地へ行くやうなもんですからねえ組長！ 畑あつての芋種さ』と職工は答へた。『戦爭に行けば兵隊さんは戦時給がでるん

ですよ……』

『誰か、ねえ君、艦へ行つてくれないか……』

『へえ、親の遺言でしてね、岡ものは岡で働けつて……』

誰一人として機嫌のよい返事をするものはゐなかつた。然し五十工場一萬人の中には上役の命を絶對としてゐる者もゐた。正午までには十三人の職工と二人の見習が軍艦△△へ出張した。

最初から△△に出張してゐるものは、濱田伍長、一ケ月間の待遇停止をくらつた山内組長、吉野、水雷工群司と酒好きの北川、杉本、武井、七人であつた。濱田は要領よく、組長や技手の前だけで身體を動かした。

山内は失敗を取返さうがために我無しやらに稼いだ。

吉野と群司は不死身のやうにへこたれないでゐた。他の三人は兵曹からアルコールを貰ひたいばつかりに勤めた。

正午から掛長も出張した。

『明日一日だ、みつちりやつて見れ！』

と艦の作業場ごとに挨拶して廻つた。

『おいみんな、なあ、△△が滿足に修理できれば、みんなをいい所へ連れて行くぞ、』

と丸田組長はお世辭でなく言ひふらした。

『な、酒か、女か、どつちだ……』

一番砲塔の濱田は表情も更へなかつた。

『組長！　酒でごまかせる間は、人間も樂ですからねえ、』

濱田は冷えた鐵に酒をぶつかけても暖かくならないといふ代りにさう言つた。

群司は魚雷發射管のメートル盤の誤差を正しながら言つた。

『軍艦も人殺しの道具だが、酒も人殺しの水さ……』

何處へ行つても刺のある皮肉が組長の耳にとび込んだ。

彼の姿が消えると下つぱ職工は囁いた。

『てめえが早く工手になりたいもんで空お世辭を撒きあがる、肥料でもあるまいし……』

組長が去ると掛長が現はれた。

『おゝ、君等は實もつてよくやつちよるのう、不眞面目な人間の處分はもうきまつとる、計畫的にやつたらしいから修理の完結次第に處罰する……しかし君等は大丈夫ぢや……』

彼は馬鹿の一つ覺えのやうに作業場で喋つた。

掛長が去ると矢張り職工の囁が聞えた。

『處分はきまつとる……げへえ……』

『畜生！　××××いふ時に××やうに、裝塡個所の螺旋をみんな一

××××××××××××××……」

一から四番までの砲塔で響く、ハンマアの音は、まるで鑄物がぶつかるやうに勢がなかつた。そして十秒に一打ののろまくさい調子だつた。

『計畫的だ、確かに計畫的な怠業だ……』と艦橋の掛長は職工の知りもしない言葉を吐いた。『松野君、腹を据ゑてかからにあ、我々のためにならんぞ……』

『はいッ！　覺悟して居ります、もうかうなれば一人二人から憎まれるより全部に憎まれた方が寢覺めがいいです……』

掛長たちは、三十分おきに監督にまはつて職工をおだてた。

晝飯の休憩時間であつた。

二番砲塔の高田が魚雷部の郡司を探してゐた。

『郡司！　郡司！　何處だ！』

彈庫で細い返事がした。

郡司や吉野や、補充職工たちがリノリユームの床にころがつて、脊や腹を暖めてゐた。

『郡司、少し話がある……』高田は彈庫のタラツプから呼んだ。『ちよつと、換裝室へきて呉れや！』

『おーい』

郡司は牛のやうに立つた。

『郡司、聞いてくれや！』と高田は換裝室の扉をかたく閉ぢてから唇を光らした。

『な、郡司、午前十時に、な、例の茶目の落合の奴が勝手に休憩したんだ。奴あ、今日補充に來たんで、艦で、午前と午後の休憩が强制廢止になつてることを知らなかつたんだ。丁度、そこへ松野がきてさ、喧嘩が初まつたんだ。奴あ「俺たちあ爪の先だつて稼いで伸ばしてるんだ、×××××生命知らずぢあないんだ」つて呶鳴つたもんさ。松野は「軍艦の修理も帝國防禦の一役だ……」つて怒りあがつたんだ。ところがそれで濟んだと思つたら、落合が後で小便しに行つた時に「怠ける！」てんで撲りつけやがつたんだ、いいかい、掛長と二人でだ。しかも、艦橋のストーヴ用デレツキでだ。肩と腰が痛むつて、奴あ晝の定期船で歸つちまつたよ……』

郡司は鼻で聞くやうに穴を膨らましたり、縮めたりした。

『よし、見てろ、昨日は一番砲塔のでぶ藤井が撲られて人事不省にされたし』と床の氷を蹴つて相手の肩を掴んだ。『な、高田、もう今夜から定時間で歸らう、下手をすれあ「××の妨害をなしたる者だ」藤井みたいにさ、俺もずゐぶん我慢して來たさ、それもお袋と親爺がゐる

からさ、何もうかうなれあ、どん詰りだ、定時間だ、皆を口說いちまはふ、まさか定時間で歸るのは××防害になるまいさ、』

『よし、』

二人は彈庫へ降りて、ねそべつてゐる職工を說いた。

補充連中は默つてゐた。

『定時間！』一人がへへら笑つた。『もう、あと二日だから大したこともないさ……さう思ふなら自分だけ歸りあいいさ……』

それを口火に、

『歸らない、』

『俺も殘業する』

とみんな反對した

吉野のちんちくりんだけが參加した。

二人は第一に濱田等の一番砲塔を口說いた。濱田も飲み仲間の言葉を簡單に承知した。第二に二番の高田の仲間を引入れた。

二番砲塔の職工は、落合が死ぬほどの目にあつたのを目撃して昂奮してゐたので即座に承知した。

魚雷工は作業場が離れてゐて時間がなかつたし他を餘り口說くと、掛長の耳になんか洩れてうるさいから二組だけにした。

夕刻、工廠で四時半の汽笛を噴いた。

職工たちは作業場の窓から目を出しては辨當を持つてくる通ひ船を待つた。

その時、一番の濱田伍長と、二番の大坪伍長が艦橋へでかけて『停時間終業」を願つた

『ふん來たな、四番の職工からちやんと報告が來てるぞ……駄目だ！このせつぱつまつた時に、そんな要求をするとは何だ、伍長ともあらうものが……』伍長はストーヴの熱に油ぎつた顏をふりまくつた。『駄目だ！ 絶對に駄目だ！』

『ははあ、デレッキで職工を半殺しにしたり、疲れてへとへとの奴を撲つたりして未だ、殘業をしろつて言ふんですか……』と大坪は頰の皺だけで笑つた。『歸さないたつて歸つて見せますよ……』

『歸つて見給へ、歸れたら……』

傍にゐたなま白い設計工手が嘲つた

艦橋に當る風に混つて通ひ船のエンヂンの音が聞えた。

『おい、來たぞ』

と濱田は大坪を促した。

『よし！』

二人は係長に禮をしてタラツプを降りた。

一番砲塔と、二番砲塔には職工たちが赤ローソクを消して歸り仕度

をしてゐた。

『どうだつたね、』

濱田の姿を見ると、道具袋をがちやつかせて吉野が訊ねた。

『勝手にしろとさ、さ、みんな歸るんだ』

郡司が道具袋を肩にして艦底タラップからむつつりした面を出した。

『どうしたい、濱田さん！』

『勝手にしろとさ……』

『さうかい、みんな、塊まつて歸らう……そこへ通ひ船が來てらあ……』

通ひ船は廢汽をぶーッと吐いて止まつた。

艦の横つ腹に纜綱を結ぶと、

『おーい、辨當だ……』

と見習が通ひ船から叫んだ。

二番砲塔の三人も道具箱や、袋を肩にして疲れた身體を運んだ。

一と塊まりになつた八人は、見習が辨當をデッキに運んでからタラップを降りようとした。

と、タラップの下から『こらッ』と呶鳴る者がゐた。

十人許りの水兵だつた。見知り顏もゐた。

『この非國民奴等』最先に昇つて來たよく鑵詰めを與れた助小兵曹が海軍服の腕をまくり上げた。『こいつ、どうしても歸るといふなら、腕づくだ、』

兵曹が合圖をした。十人の水兵は靴音激しくデッキに馳け上つて、タラップの降り口に並列して終つた。

それは訓練された急速なやり方であつた。

仕事道具の箱や袋を擔いだ上に疲れてゐるので八人はどうすることもできなかつた。

『廻れ右！ 戻つて作業につけ！』

と兵曹は號令した。

『行け、行け、作業をせえ！ 何のために牛鑵を食ひよつた。』

と十人の水兵が壁のやうに八人を押した。

身體の衰へた八人はしどろもどろに押し返された。

郡司と濱田と大坪の目の光が暗がりの中で見交された。

『よし、戻つてやる……』

と吉野が水兵の胸をつきこくつた。

そして自分が道具袋と一緒に尻持をついた。

夕食後の作業場には、掛長、技手、工手、組長等の一團と十人の水兵と兵曹の一隊が懷中電燈をてらして見張つてゐた。

それでもハンマアの音や鑢の音は睡たさうにのろのろと聞えた。時

折り潮さびた兵曹の聲と水兵の囁づきが風にからまつた。

作業は捗らなかつた。

夜、六時頃、〇〇の方で、

——萬歳！——

が三唱された。

『何んだ、何んだ！…』

と水兵たちは騒いだ。

『あれあ、修理が完了したんだ。』

と掛長が聞えよがしに艦橋から叫んだ。

『チエースト、見やがれ、一番後だ、△△は……』

と松野技手も皮肉つた。

一番砲塔の四人と、二番の三人は、夕食後から仕事の速度を少しづつゆるめて、七時頃は全く身體を休めてしまつた。

七人は、裝塡器具や、砲身の下に寢ころんでゐた。床に敷いた木綿屑は鐵屑のやうに凍つて脊中を刺した。

水壓パイプの洩れ水は意氣地のない職工の尻を叩くやうに絶え間なく滴り落ちた。

水兵が怠けてゐる一番砲塔の連中を發見した。

『どうしたんだ、……修理完了か？』

『さうです、檢査を待つてゐるんです……』

と濱田が答へた。

『馬鹿！　ねころんでゐる奴があるか、起立して待て。』

水兵は掛長に「修理完了」を報告した。

掛長と兵曹が來て一番砲塔の十六吋主砲の檢査をした。

四人は掛長がくると仕方なささうに起立した。

『いかん、不完全だ、やりなほしだ……』

と掛長は言つた。

『然し掛長殿、もう私共は疲れて動けないのです、』と濱田は悲し氣に言つた。『後は明日にして下さい……』

『いかん、やれ、さ、殊に裝塡部のリユブリカントが惡い……』

掛長はとまどひながら二番砲塔にも行つた。其處でも三人の職工が器具に腰かけて莨をふかしてゐた。

『なんだ、君らは、足のおそい水雷みたいに、さ、早くやり給へ！』

と掛長はなだめた。

『もう睡むくつて、疲れてしようがないんです。』

『君らは、君らは、××といふことを考へ給へ、後二時間や三時間なんだ……』

掛長は熱心に說きふせようとして喋りだした。

一番の四人も遂に働かうとしなかつた。

水兵がそれを報告した。

掛長は怒つた。そして「よし兵曹こい！」と叫んで艦橋へとつて歸つた。

すぐ掛長と、技手と工手と、組長と兵曹はとんできた。

彼らは手に手にデレッキや、鐵棒など持つて、最先に一番砲塔に亂れこんだ。

「やい、××者、かうしてやるぞ……

五人は寢そべつてゐる四人に打つてかかつた。四人は住家のないものゝやうに逃げた。血しぶきがはねた。

デレッキと鐵棒は砲塔の鐵壁にぶつかつて、ぐわんぐわん喚いた。が、叩きのめされた四人は腕で防いだだけで泣かなかつた。泣く元氣もなくなつてゐた。

二番砲塔の三人も同じやうに撲られた。

監督連は人間を撲つて砲塔に血を流したために少し狂暴になりつゝあつた。

そして曹長は曲つたデレッキを振りまくつて——十日は徹夜だ——と宣告した。

艦底の郡司は靜に魚雷發射管のボルトやハンドルにしがみついてゐた。彼の腕にはイギリス、スパナアと、螺旋廻しが握られてゐた。

打ちのめされた七人は補充職工に助けられて歸つた。

7

十一日午前七時半、出港と決定された。

十日の朝は、掛長以下總動員で補充職工の用意をしてゐた。

艦の缺勤者は△△の、昨夜撲られた七人だけだつた。

郡司は相變らず出勤した。

港はものものしく騷がしかつた

ウヰンチの鎖が鳴つた。

食糧、石炭の積込みに艦の汽艇やカッタアが縱横に港を走り廻つた。

各艦から昇る黑煙が幾本も西に崩れて流された。

旗艦△△の内部は戰場のやうだつた。

士官の指揮する怒號、水兵の走る靴音と叫び、エンヂンの試運轉、ウヰンチの響きなどが無茶苦茶に溢れた。

石炭をたきはじめた艦は暖かくなつた。

床の氷が溶けてボロ靴に冷たく沁みこんだ。

職工たちはもう、寒さに苦しむ必要はなかつた。しかし、年末からの殘業續きの連中は疲れ切つてゐた。そして暖かさがみんなを眠くさせた。

艦底に近い魚雷室の郡司たちの仲間は疲れた上に蒸し暑さに苦しめられた。

それは飢えと寒さを一ぺんに受けるより苦しかつた。

掛長たちは、大童になつて作業をせき立てた。

職工はのろくさと働いた。

疲れた者は居睡りをしてどやしつけられた。補充職工たちは、監督がゐないと態と睡つたやうな風をして仕事を怠けた。

午後二時になつても砲塔修理が終らなかつた。

『畜生！　××人みたいだ。徹夜だと驚かされてゐながら少しも勢を出さん、』と掛長は叫んだ。『松野君、しようがない、徹底的におどさにあならん、睡さうな顔ばかりしてやがる……』

松野技手は中腰になつて砲塔から魚雷室を怒鳴り廻つた。其の聲は艦内の騷がしさに中和して些も職工たちを驚す役をしなかつた。

午後四時になると、砲塔係の水兵が油や器具や木綿屑をどんどん砲塔に運んだ。

『おーい、職工さん早くして呉れよ、明日の朝、嫁入りだ……』

と水兵はからかつた。

職工はミミズのやうに仕事をした。

夕食前に漸やく、魚雷部の試驗が濟み、各砲塔の締附が完了した。

魚雷工は煙突の周りに廻つてねむつた。

『よし、うまいぞ、九時までにでけるわい、』

掛長は、はしやいで檢査をした。

後は、各部の把手の一廻轉から起るギアや、裝塡部や標尺の誤差の訂正だつた。

夕食後にそれが行はれた。

一人づつの工手がセクション・ペーパーを持つて各砲塔の作業を見てゐた。

ボイラアに石炭がくべられて艦の發電タービンが廻轉した。

内部は明るく電氣がともつた。

三番砲塔では、泥醉のため伍長勤務に落された山内が誤差を訂正してゐた。

山内が把手を廻すと、十數個のギアの作用でメートルに合せた通りに砲身が標尺を定めた。裝塡部の裝置が活動した。そして、次席職工の原崎がメートルの角度を報告して揚彈機にスヰッチを入れた。戰車の足のやうなチェンによつて揚彈機が廻轉した。その廻轉度も亦報告

された。

工手が一行程ごとの角度や廻轉數をセクション・ペーパーに記入した。

百回位繰り返した後にその線、圖ができる、そして誤差を訂正するのであつた。

二十數回繰返した頃であつた。

裝塡部の報告をする原崎が急に押默つてしまつた。

『おい！ 原崎！』

と山内が呶鳴つた。

見ると彼は裝塡部の眞鍮把手によりかかつて居睡りをしてゐた。

『こらッ！』

工手が鉛筆の先で彼の頭をつつ突いた。

二三歩よろけて原崎は立ちなほつた。

『あ痛ッ！ どうもねむい、堪らん……』

そして彼は傍の水だらけの床に倒れた。

『こらッ！ 原崎、もう直ぐだぞ、起きろ、』と山内が手を引つ張つた。『そらそら、掛長が來るぞ！』

だが原崎は他愛もなく、眠りこんで終つた。

『しようがない――可哀さうだ、おい、お前代れ、』

と工手は側に立つてゐた見習に命じた。

又誤差訂正が開始された。

メートルを一度づつ廻しては山内が把手を一廻轉した。見習が危ぶなげに角度その他を報告した。

原崎は鼾をかきはじめた。

それはまるで皆の眞面目さ加減を嘲ふやうにがふがふと聞えた。

工手は見向きもせずに熱心にセクションに記入し續けた。

山内は二十錢の減給をとりもどさうとして歯を食ひしばつた。

十分餘り經つてからだつた。

カーキー服の松野技手が後手をして昂然しながら三番砲塔に入つて來た。

『おい、山内、此處には居睡り虫は居ないか、居睡りは、もう今夜こそ承知しない。ど奴もこ奴も人を馬鹿にしやがつて居睡りばつかりだ……』と松野は鼾をかいて眠つてゐる原崎を見た。『うん、やつてるな、六人目だ、こ奴め！』

つと走つて後手の右腕をうんと振り降した。

曲つたデレツキだつた。

デレツキは唸りを立てて原崎の臀に當つた。

彼はうーんと唸つて大きく寢返りを打つた。そして鼾聲を低くめた。

松野は又反對の臂を撲つた。幾度も撲つた。デレッキは曲つたり伸びたりした。

原崎はそれをぢつと數へてゐるやうに思はれた。

――こらッ、くそッ、――こらッと抜手は撲りつゞけた。

誤差を訂正してゐた工手も山内も、抜手の亂暴さに呆れてぽかんとしてゐた。

暫らくして原崎は口を歪めながらスプリングのやうに立ち上つた。

『この怠け者めら！　もう一つやつてやらうか、俺の昇給をおじやんにしやがつて……』

と松野は睨みつけた。

原崎は口をもぐもぐさせた。と、松野抜手はもう一度デレッキを斜に振り上げやうと身構えた。

瞬間、原崎が體當りに逆襲した。

松野は慌ててデレッキを打ち降した、それは原崎の肩で止つた。もう一度振り上げやうとしたがデレッキの先が原崎のナッパに引かかつた。

その時、はじめて工手は我に返つたやうに、

『掛長、掛長』

と呼びながら砲塔をとび出た

二人はとつ組合つて倒れた。

見習が工手の後を追つた。

二人は濡れた床の上をうんうんと云つて轉ろげ廻つてゐた。

掛長が走つて來た。

『この野郎も居睡りか、職工の癖に上役に挑むとは何だ、こら！』

掛長は傍へよつて原崎の首筋を抑へた。

松野は逃げやうともがいた。原崎がかじりついた。掛長が彼を引張つた。

と、ファンネルに唼まつてゐた郡司の仲間の魚雷工が八人、見習の報告によつてかけつけた。

『職工のくせに、職工のくせに……』

と掛長は力んでゐた。

引張り合ひをしてゐる三人を八人の十六の目玉が睨みつけた。

『職工の癖にとはなんだ、てめえ等はなんだ、弱いもの いぢめをしやがつて……』

郡司たちがそこらに散つてゐた ×××××××××××。

掛長は顏色を變へて逃げた。

松野抜手は原崎に壓へつけられて、カーキー服を泥水だらけにして

唸つてゐた。

『小僧つ子の癖に、技手風を吹かしやがつて、片腕でもおつぽしよられないやうに要心しろ！　考へてみろ、三界に家なし奴……』

と原崎が二つ三つ撲りつけた。

郡司がそれを止めた。

放されると松野は血の流れた唇の端をひん曲げたまま横つとびに逃げていつた。彼のカーキー服は泥水に皺くちやになり、鳥打帽は床に取り殘されてゐた。

砲塔修理職工は遂に夜明けの四時まで誤差訂正に徹夜した。

そして後は、煙突の周圍に集つて乞食のやうに、又傷ついた鷲のやうに睡りこけた。

陽の出は六時四十分だつた。

赤い塊りが東の水平線の雲の切れ目に、その端を現はした。

『朝だ！　朝だ！』

目ざとい見習がみんなを起して歩いた。

そして通ひ船が職工を迎へに來た。

△△と〇〇の職工が通ひ船に運ばれて、海の半分も來ない内に、旗艦△△の檣頭に信號旗がはためいた。

陸の方でワーッと喊聲が揚つた。

第×聯合艦隊を見送るために海岸に集つた佐世保の市民だつた。市民は小さい國旗を振つてゐた。

徹夜作業をした職工たちは、鳥渡、目を覺ましてその喊聲の方を眺めやつたが、

『チェッ、出てうせろ！』

と舌打ちをしたきり又睡つて終つた。

通ひ船は居睡り職工をのせて岸壁へ急いだ。

間もなく、七時半になつた。

第×聯合艦隊は「舳艫相銜みて」といふ言葉そのまゝに港中を眞黒にして拔錨した。

8

艦隊が出發して四日目。

濱田、郡司、藤井、原崎等十九人の解雇が發表された。

赤毛の郡司を中心とした十五人が馘首反對の要求書を海軍工廠に提出した。毆られて負傷したものの半數は其の中に混つた。

その中には、

「工場管理を海軍軍人に任せることは、職工を××と同じやうに生命を投げ出してゐるものとして待遇するから、止めていただきたい」

といふ一項目もあつた。

代表者は郡司と原崎とであつた。

然し、二人は、砲熕部掛長と交渉中に守衛長に案内された六人の憲兵につかまつてしまつた。他の十三人もすぐ捕つた。

工廠の東入口には、軍用自動車が五臺と、自動自轉車が三臺あつた。

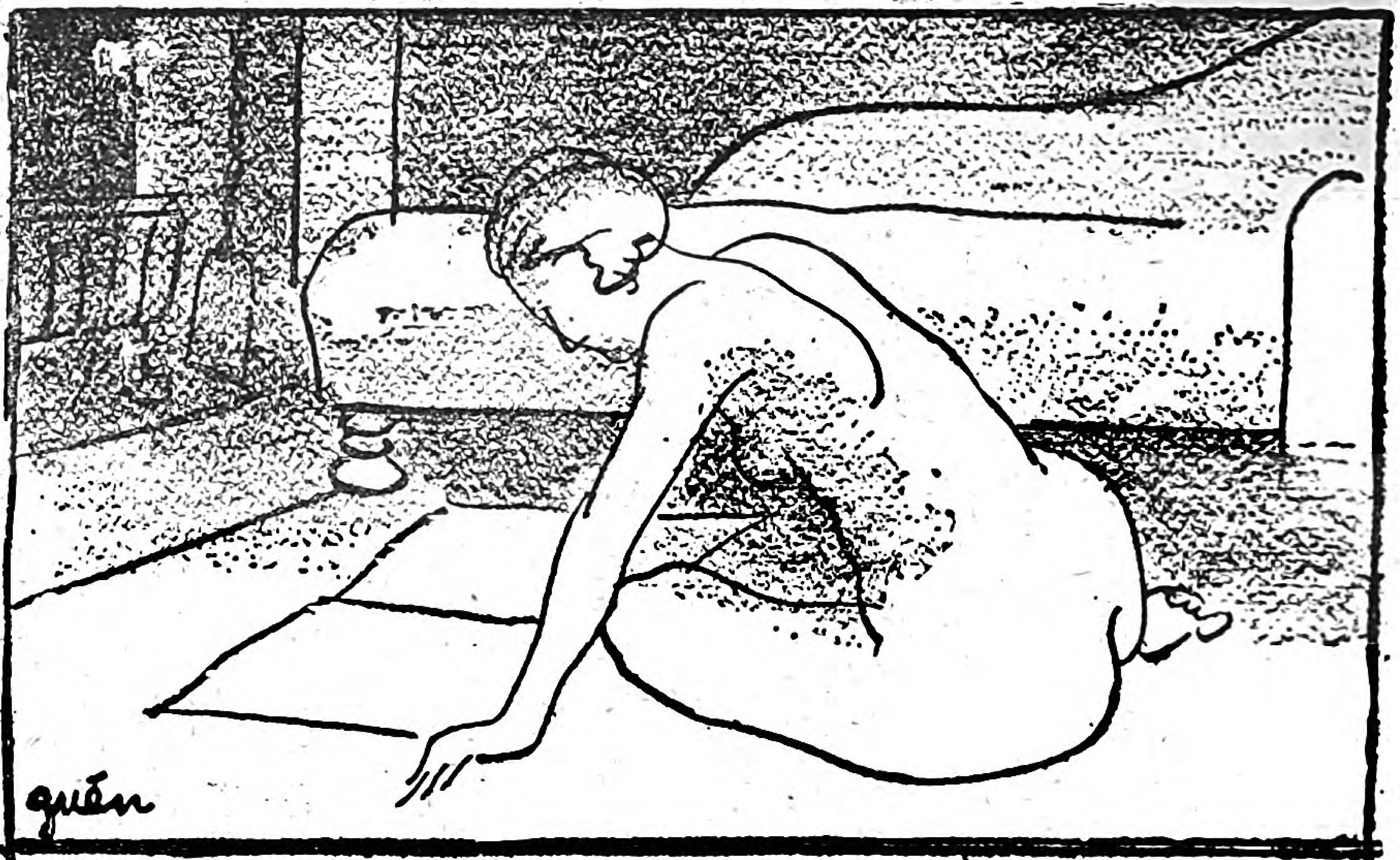
中心人物と見なされた郡司は、赤毛をもろ掴みにされて自動車に引づりこまれた。

十五人は自動車で軍法會議監房に收檻された。

その頃、横須賀沖では耐寒大演習の眞最中だつた。

十五人の裁判は、大演習が濟んで又艦隊が修理に入港する一ヶ月後のことにきまつた。

一九三〇、五、六、



階段を降りる

龍膽寺　雄

一

『おい、もうちよいとこいつを引ッ張つた！　もう二寸ぐらゐ。ン、よし。……鋲まだあるかい、やらうか？』

『あ、危ない！　頭ンとこの硝子。』

『冗、冗談ぢやねえ。……』

ガラガラと天井から硝子のかけらがなだれたので、椿さんは高い足場のてッぺんで崩れた梁を抑へながら、頸をすくめて、――觀念の眼を閉ぢたッて恰好で、やがて、仕事着のはだけた襟へ刄物の樣にキラキラと、大きな硝子のかけらを立てたまんま、なさけない悲鳴を立てるのだ。

『U・U・ちやん！……こ、こいつ、何とかしてくんねえ。……』

『ちよいと待つて！』

僕は引ッ張つて居たさらしのはしをヒラリと空間へ放して、あわてて足場の窓枠から匐ひおりるんだが、これがまた怪しいしろもので、うッかりすると窓枠のまんま鋲か

ら剝がれて、六尺の空間を硝子と一緒に、コンクリートの床へ情死ぐらんはさせかねないので。——

『どうしたんだい、おい！……早くしねえか。』

『だッて、……』

僕は窓の明るみへ足の裏を返してみて、

『踵へとげを刺しちやつて。……』

仕事にかゝる前に僕たちは、錆びた硝子屋根の内側へ陽覆ひを張らなきアならないので、がらくたな鉢臺を幾つも床へ重ねて、その上へ載つて、危なくからだの重心をとりながら、塗の剝げた白い細い梁へ、さらしを鋲でとめて歩いて居たんだが、何しろ、幾年このかた手も入れられずにうッちやらかされて居た温室なので、どこもかしこも骸骨みたいに蝕つて、さらしをとめる鋲の頭にだつて、うッかりは力も入れられないと云ふ風で、どうかすると、海綿みたいに腐つた木屑がボソリとそこから剝がれて、床に碎けると、お尻に鋏をもつた厭やらしい小蟲が、幾つも脂ッぽく背中を光らして、這ひ出したりするのだつた。

『まるで、千一夜の魔法使ひッて格だね。』

時折、椿さんは自分で明るく苦笑するのだ。

『このみぢめな骸骨こさ、瞬く間にエヂプトの宮殿に化かしちやつたり、……天晴れな手際ッてもんぢやないか！』

一體、——不思議なこのV・M・プロダクションの基本撮影所をこゝへ移さうッて主張をしたのは、セット係りの椿さん自身で、その思ひつきには誰も最初手を打つて贊成をしたんだつたが、いよいよ手を入れて、撮影所としての設備にかゝつてみると、みんなですつかりしよげちやつたのだつた。何しろ、釘一本滿足には打てるとこもない有樣なのだ！

軒の片側へ梯子をかけて、何の氣なしそこへ僕がのぼつて行くと、だしぬけにボキリと背骨でも折れる樣な音を立てて、建物全體が無氣味に搖さぶれ、はすに天井を覆うて居た錆びた硝子がそこらぢゆうからなだれて、蕭然と雨の樣に空間へ降つた。——

マネエジヤアの琴平さんの口調を借りると、拔け目なく張られた國際映畫資本網の隙をくゞつて、われわれの藝術を進出させるには、それ自身に阿片の樣な魔力を與へて、裏から裏へと陽の目を見せずに（映畫のことだから陽の目を見ないのはあたりまへだが）浸潤させるほかはないので、云はゞ闇に生まれて闇に消える仕事なんだから、撮影所にしたつてさう大びらな設備なんぞをするわけには行かない。表面はあくまでもメロンの七つ八つさがつて居さうな温室に見せかけて、外側から輕く支柱をしたり、針金を張つたり、——何のことはな

い圍れものにでもさはる様に、腐つた骸骨を骸骨のまんまさゝへる工夫をしたんだつたが、そんなわけで、仕事のたんびに人の識らない苦勞をするのは、セット係りの椿さんやそれを手傳つて居る僕たちだつた。

ともかく、仕事の間に誰かの脚がちよいと針金の一本に引ッかゝつたぐらゐで、二日も潰してやつと仕上げた紙張りのセットが、他愛もなくめちやくちやに壞されちやつたりするのだからかなはない。

『やれやれ。……』

頭から埃を拂つた椿さんが、仰ぎくたびれた頸をグニャリとたらして、バットのはしへマッチを擦りつけた時、硝子の一枚もついて居ない表口のドアが、風にあふられた様に開いて、頭からマントをかぶつた璨子が、いかのお化けみたいな長い素脚をして這入つて來た。

『一人？』

彼女は危なッかしい足場のてッぺんに椿さんを仰ぐと、マントの中から蓮ッ葉に聲をかけたが、中仕切の壁の蔭に床へ脚を投出して、ボオル紙造りの小さな宮殿のドオムへ銀紙を貼りかけて居た僕に氣付くと、猿股一つの僕の太腿を通りすがりにわざと重たく素足で踏みつけて、足の裏にくッついて居た砂ッ埃をグイとなすりつけて行つた。

『痛いなア。……』

あッはッは！

彼女は高笑ひをして、

『いゝ氣持。彈力があつて。……』

と云つた。さうして、椿さんの載つて居る足場の下に立つと、いきなり鉢巻に手をかけて、下から亂暴にそれを搖るがした。さうして、びッくりした椿さんがあわてゝ兩手を彼女の頸へ捲いて、おッかぶさる様に彼女の上へ跳びおりると、

『臆病ね！』

と彼女は彼の口から莨をひッたくつて、自分の口へ啣へたが、男の重みにヨロヨロして、到頭グニャリとコンクリートへ崩れちやつた。

ボタンの合はしてない天鵞絨のマントの前がはだけると、中は白粉の粉ッぽい、、だ。白く膨れた兩の乳房には貝殼の様なコルセットがかぶさり、キラキラと綴い銀紙細工のバンドが、胴から腹から腰から腿へ唐草風に捲きつかつて、パンの様に皮膚がくびれて居る。今日の映畫の女主人公——ハレムのアルジャリス姫の扮裝だ。

『冗談ぢやねえ。墜ッこつたらコンクリートで危我もんだぜ。』

『人形だつたら壞れるし、ね。』

璨子はマントを肩からずらして、椿さんの意匠になる大きなトルコ風の寢椅子へ、乳房を仰向けに凭れた。、、、、綺麗に剃刀があて

られて、白粉のスベスベしたそこ、、、に、丹念に唐草模様が筆で描かれて居る。白狀すると、――これは僕の細工なのだ。

『似合ふぜ。』

椿さんに批評されると、彼女は鼻の孔から小さく煙で笑つて、陽覆ひを透すうらゝかな陽射しを樂む樣に睫毛を閉ぢたが、すぐに髮の中でクルリと顔を廻して僕を見て、

『今日の撮影見てらッしやい。ね？』

『厭やだ。』

『なアぜ？』

『なぜッて、………』

僕はだまつて指に糊をつけては、小さなはりこ、、、のドオムに銀紙を貼つて居た。學校が暇だと、僕は彼女に連れられて不思議なこの撮影所へやつて來ては、氣がむくと椿さんの手傳ひをして、糊だらけになつたりして居るが、撮影の現場はめッたに覗いたことはない。僕は女友だちとも戀人ともつかない、と云つてたゞの保護者でもない年嵩な彼女が、こんな、、、、、、、、、、、、、、、のを見ると、何かなし自分でも乾いた氣持になつたから。

社會の裏を掻くにしたつて、何かほかにしやうもあるぢやないか！

『あんたの年頃の男の子ッて、割合ピユウリタンなのね！』

時折彼女は僕をひやかすのだ。

『第一あんた自身自分の生活を振返つたつて、至極ありふれたことぢやない？ 例へば、、、こと考へたつて。……さうぢやないの？』

『だつて、そりア。……』

『、、、、、、、、、、、、、。あたしたちは隱さない。それツきりよ違ひは。……あんたもやはり平凡に隱しときたい方？』

『でも、、、、、、、、、、、なんて、僕、……』

『買ふ奴はなほ下劣だわ、そんなら。』

彼女と理窟を云ひ合つたつて、僕は勝つためしなんぞつい、、ぞない。一體女の議論て頭に合はない大きなシヤツボみたいなもんで、それをかぶされると誰だつて眼が見えなくなつちまふもんだが、さう云へば、――椿さんも一度彼女の蔭口を叩いたことがある。琛子さんはドウドウ廻しがうまいから、君なんぞまるで舐められちやつてるだらうなアつて。

舐められ通しさ。

椿さんは琛子、、、上へはすにお尻を載せて居た。椿さんのコオルテンの剝げたズボンには、油繪具がガビガビにこびりついて居る。椿さんは本來は繪かきが商賣なのだ。

『あたしの軌出來てて？』

『出來てる。』
『頂戴。……』
彼女は椿さんの仕事着の襟へ頤を埋めて、ものうげにそこへ脚を凭らして居た。眼元から小鼻の邊へかけて乾いた早老な小皺が、荒んだ生活をした三十女の、容色の空虚な凋落を描いて居た。明る過ぎる陽射しさへそこでは何かわびしげだ。
が、キラキラと銀紙で化粧された舞踏靴を小指の先へ引ッかけて貰
ふと、彼女は子供の様に冴え冴えと睫毛をあげた。
『うまく貼つたわね。剝がれないかしら。』
『大丈夫。たゞ履いてるぶんには。……』
彼女は鼻で笑つて、足首を靴の中へ入れると、
『安珍淸姫をやつたかと思ふと、トルロのお姫さまになつたり、……忙がしい商賣ね。』
『今度は女乞食になるッてぢやないか。聽いた？』
『聽いたわ。』
彼女は母屋の方の人聲にちよいと耳を立てて、
『俳優ッて、ブルジョワになつたりプロレタリヤになつたり、そのくせ自分ぢやブルジョワでもプロレタリヤでもないんだけどね。』
『つまり藝術家なんさ！』
『Oh yes!』
さう云つて、だしぬけに彼女は椿さんを床へずらして立上がると、寢椅子をまたいで、――、、、、、銀紙のバンドを、グイと指でしごいて緩るめた。
『何だい？』
『おしッこして來る。』
さうして、脚元へマントを落とすと、ヒヨイヒヨイと床を跳んで、そのまゝ風の音の騒がしい外のユッカ蘭の茂みへ、、姿を消した。

二

顏觸れが揃つて、カメラがカタカタ鳴り出したのは、それから三十分ほどして。
僕は壁仕切のこッちへセットの宮殿を持つて來て、壞れた鉢臺へ腰をかけて、だまつて一人でドオムの銀紙貼りを續けた。
窓硝子の壞れめから、低い郊外街の家並を越して傾斜へ吹上げて來る五月の風が、やゝ強めにまともにぶッかるので、それが絶えず僕の髮を額のところでなぶつた。硝子屋根の下は午近い陽射しで蒸し蒸しと氣溫を指して居るので、僕はルバシユカの剝げた天鵞絨を脫いで、

汗ばんだシャツを快く窓から洩れる風にあてた。

――壁仕切の向うからは、器械の音や落ちつかない人の氣配にまじつて、時折監督のかけ聲がきこえて來た。

『M・君。、、、緩めかたもう一遍練習をして。』

とか、

『璨子さん。そこでうッとりと眼をつぶる！』

だとか、

『カメラ！ こッちの脚蔭にならないか？』

などと。――

俳優と云つても男が二人に女が一人。その男の一人ッてのが實はマネエジヤアの琴平さん自身で、一人で脚本も書けば監督もする。カメラは羽賀さんだが、これも時に琴平さんが自分でクランクを廻すこともあれば、セットの椿さんが代はることもある。さう云へば、いつか僕は琴平さんに、璨子の相役をやらないかッて云はれて、怖氣をふるつたことがあつたつけ。

冗談ぢやない。僕は彼女の變てこなお化粧の手傳ひを時折させられるだけでも、もう眞ッぴらだ。

フヰルムの處理は、風呂場の西洋浴槽に現像液を充たして、さうして、――

璨子にはカメラの前にからだをさらすほかに、もう一つ特別な役目がある。それは、横濱や東京に贅澤なホテル住まひをして居る外人の得意先を、フヰルムの賣込みに訪ねることで、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、なければならないのだつた。どのみち、、、、、、、、、、、、、、、商賣を擴げるんだから、それ相應のトリツクがいるので、例へば三本なり四本なりとまとめてフヰルムの取引をする相手――大抵は似た樣な商賣をしてる曖昧な外人だが、――の御機嫌買ひなども、商略上大事だ。それにはフヰルムの主演者でもあり、横濱の本牧で以前外人相手にさう云つた商賣をして居た璨子なんぞが、一番適任者だ。――

要するに、彼女は自演のフヰルムが新しく一本出來るたんびに、六七人の外人の得意先を次々に訪ねては、そこで彼女のいはゆる『、、、、、』をさせられるのだつた。試寫會に招かれた、、、外人たちは、どうかすると、、、『、、、、』、、、、、、、商品の取引に身を入れると云ふ風だつたから。

そこで、いつとなくこんな名目がついちやつたわけなんだ。

『、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。……』

尤も、これはこのプロダクシヨンの商略ばかりぢやなくつて、璨子

自身にも多少特殊な、、があるらしかつたが。——

『厭やな商賣だなア僕は。……』

時折僕が歎息をすると、彼女は事もなげに云ふのだつた。

『なアぜ？ だつて商賣となりア似た樣なもんよ。人間てどうせ自分のからだを資本にしてるもんなの。頭で喰ふか手で喰ふか脚で喰ふかの違ひだわ。あたしはどうせこれで今まで喰べて來たの。その方があたしには似合ふわよ。』

どのみち、議論となつちや僕はだめだ！

溫室のコンクリートの床には幾つも大きく罅が這入つて、そこから雜草がもやしの樣にヤワヤワと緣をのばして居た。僕はそこへお尻をおろして、カサカサと窓にそよいで居る明るいユツカ蘭の葉越しに、谷の景色を見おろしてみた。

白金の樣な空の陽射し、吹き霞んだ强い南風、——谷を埋めた低い街の家並には、タアルを塗つた亞鉛屋根が二つ三つ、激しく陽を射返して、キラキラしいその反射が水蒸氣を通して、後ろの壁へ僕の心臟の影でも映しさうだつた。

カメラのカタカタ云ふ音は、春のこの明るさの中で妙に淋しい。どこかの八重櫻がこの音と一緒に、淋しくあわたゞしく散つて居る樣な氣がする。

『おい、來たまへ君！ お茶だ。』

壁仕切のたれ幕をかゝげて、ひよッこり顏を出したM・さん（珠子の相役だ）が、だしぬけに聲をかけたので僕はどうやら貼り終へたセットのドオムを膝からおろして、睡いあくびの底から睫毛の涙をこするのだつた。——幕を絞つて中へ這入ると、みんなは思ひ思ひの場所に、壁へ凭つたり脚を投出したり、部屋の溫氣にゆだつたと云ふ恰好で、サンドヰッチを頰張つて居た。抹香くさい煙が朦々と硝子屋根の下に立籠めて居るのは、獅子の頭を形どつたはりこの香爐で、まだ線香の煙が燻つて居るから——。

珠子は銀紙細工のバンドをはづして、骨盤の淺い幅の廣い腰を、そのまんまコンクリートの床へ伏せて、横着に片手で頰杖をついて居た。そんな恰好で幕切れが終つたと云ふ風に。——

『何本ぐらゐ今度は出る豫定？』

サンドヰッチを頰張りながら彼女が顏をあげると、

『さア、……』

と琴平さんは、床にこゞんでタイトルを書いて居る椎さんの肩へ凭れて、

『はッきりしたことはわからんけれど、十四五本かね。』

『支那へもまた出ます？』

『三本は確定してるけれど。……今度は朝鮮へ一本行くよ。京城へ。』

『京城へ？』

『僕の考ぢや、』

と、椿さんが不意に顔をあげて、

『かういつた作品が實際、、、、、、、、一二本はあつていゝと思ふんだけどなア。僕は眞面目に人間の、、生活を主張してるんだけど、そこまで徹底する前に、せめて、、、でも、陽の下へ朗らかに、、を開放してみせたいんだ。、、、、、、、、、こんなものは受感性が過敏になつて、この調子だと今に、世の中ぢゆうが、、ヒステリイになつちまふぜ。……白日のもとへさらしア君、、、、、、、、、、、、當然なことぢやないか。』

『同感だねそりア。』

『だらう？　俺等のグルッペを見たまへ。實際こんな商賣は、盜ッ人よりも惡德に世間からは非難されるかも知んないけど、どうして！　俺等自身の生活はこの通り純潔なんだからなア。』

『一つ女學校で性倫理なんぞをほざいてるしかめ面の校長さんを引ッ張つて來て、この撮影現場を覗かしてみるかい。』

林さんが笑ふと、それに應じて椿さんが、

『俺等同樣猿股一つにしてだね！』

『プロレタリヤの解放も然りだけど、、の開放も刻下の急務だぜ。』

『知らず識らず俺等が急先鋒になつたッてわけか。』

『己惚れの強い奴等が集まつたもんだな。』

と、琴平さんも吹出したが、ふと椿さんの肩の上から瑛子を眺めて、

『瑛子さん、氣持でも惡いんぢやないのかい？』

『あたし？』

彼女は淋しく落して居た睫毛をあげたが、腹の下から手を拔いて、指の先をコンクリートへ擦りつけて、――それから冴え冴えと微笑んだ。

『いゝえ、別に。……』

何かまた、、、、、、やつたんだらう。縞蛇の死骸、、、、、、、、、、、、、、、、『、』、、、、、、、、、、、、、、ゴム管から墨汁をゴボゴボと注込んで、、、、、、、、、、、、、――琴平さんの脚本は自分の趣味なのか、惡く變態であくどい。尤も、彼に云はせるとその方が受けがいゝッて云ふのだが。

『迫眞力が今日は過ぎたかな？』

『いや、よく這入つたよ。』

『なかなか鮮やかだつた、君のアクトも。……』

あッはッはッは！　とM・さんは膝をかゝへて笑つて、
『おほきに、俺等自身が迫眞力を持つてたなんてことになるんぢやないのか？　厭だぜ。』
『自然、ね。』
『參つたな。』
M・さんは頭を掻きながら、何かなし瑑子から僕の方へ眼をそらして、
『かうなると、どうやらU・ちやんの役柄になるんぢやないのかい。え？』
『だめ、この人は。』
瑑子は押ッ覆せて、
『うちの淳子のお相手が、まア丁度ッてとこ。純潔な夢想家よ、あんまりからかはないで。……』
僕は彼女の、の背中からお尻の間へ匐つて行つた小蟻を氣にしながら、だまつて彼等の會話に耳を貸して居た。椿さんのタイトル書きの仕事を眺めてると、贊成の贊の字に言篇かくッついて居る。どのみちしかし筋なんぞどう運ばれたつて、見せどこはきまりきつてるんだから、タイトルなんぞどうでもいゝんで、第一日本文學なんぞアラビヤ文字ほどにもわからない手合ひが相手なんだから世話はない。——

三

琴平さんたちに誘はれて銀座へ廻ると云ふ瑑子と、新宿のプラットフォームで別れると、彼女に云ひつけられた通り僕は、鮭の卵とザボンとを街で買つて、重たい紙包をさげて目白へ歸つた。と、角の教會わきの空地へ荷をおろしてたお豆腐屋さんに、毎度有難うございますと挨拶をされながら、ひよッこり礫利路へ跳びおりた淳子と、危なく僕は鉢合はせをしはぐつた。
『お姉さんは？』
彼女は頭をひと搖すり搖すつておかッぱを邪魔げに後ろへ退けてきいた。
『一緒ぢやなかつたの？』
『琴平さんたちと銀座へ廻つた。……なに？　それ。』
彼女は四角い平皿を大事に兩手に持つて、燒豆腐を一枚それに載せて居る。風邪がまだ本當ぢやないかして、曇硝子の樣な蒼白い血色に脣だけが紅く爛れて居る。
『僕、鮭の卵を買つて來た、新宿で。……』
『あたい持つてッたげる。……そッちの大ッきいの何？』
『ザボン？』

『またザボン？』

――瑛子はしじゆう御飯の代りにザボンを喰べて居るのだ。さう云へば僕だつて、鮭の卵とパンきりで幾日も過ごしたり、淳子は淳子で、餡ごの這入つてるお菓子を預けときア文句はない。腹一杯御飯を喰べたあとでも、栗饅の三つ四つはペロリと平らげて、まだ足りなげな顏をしてたりする。彼女に云はせると、御飯の這入るとことお菓子の這入るとことは、同じ胃袋でも別々なんで、英語を覺えるとこと算術を覺えるとことが別な樣なもんだツて、さう理屈をこねるんだが、僕はもうこの人たちとの議論ぢや兜を脱いぢやふ。姉妹揃つて僕の頭へシヤッポをかぶせちやふんだから。――

着物を着換へる前に、丁度沸き加減だからと云ふので、お風呂へ跳びこむと、あとから淳子も、、、、、、ついて來た

『熱い？』

『丁度。……』

、、、、、、、、、、、、ザブザブとお湯が瀨戸の緣から溢れた。西洋風呂へ、、、這入るんだから無理だ。淳子のおかツぱは姉さんのと同じで髮がこはいので、短く切るとブワッときのこみたいに兩側へ擴がつて、そばへ寄ると頰ぺたを刺してムヅムヅする。

『ここンとここでも脈はかれるわね。』

細い指で僕の頸の根のとこを抑へて彼女が云つた。さう云ふ彼女の頸のとこでも、丁度その邊に細い血管が皮膚を透かしてピクピク脈打つて居る――、、、、、、、、、、、、、、、、、、、彼女は別の方へ僕の指を引ッ張つて行つて、そッちのをつまゝせて、グイと上から抑へた。

『こッちよ。ね？』

、、、、、、、、、、、、、、こなひだからしきりに彼女は氣にしてゐるので、時に右へ寄つたり左へ寄つたり、どうかすると赤く膨れちやつたりしてるのだ。

『痛い？』

『ううん。』

彼女はおごそかな眼をして頸を振るのだ。

『もつとコリコリやつてよ。……』

僕たちは驢馬の話をした。彼女はこの頃姉さんに驢馬の仔を買つてとねだつて居るのだ。大きくしてみんなで庭で乘らうツて云ふので、僕はでも少し反對なのだ。だつて、驢馬に乘ると乘つてる者まで驢馬に見えるに違ひないから。

淳子が乘つたらあの毛の生えた長い耳で、彼女は頰ぺたをひッぱたかれるに違ひない。

『あたい夏、海へ連れてッて裸で乗るの。……』

冗談ぢやない。女の子が裸で驢馬に乘つてる恰好を考へてみろ。お月さまへ蜜柑を放つけた樣なもんぢやないか！

『出てお背中流す？』

『いゝよ僕洗ふから。……』

『いゝわよ、あたい流したげるわよ。』

彼女は僕の脚の間に立ちかけて、ふとはすに顏をこゞめ、瀨戸の底の邊に指を泳がしてタウエルをさがしたが、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

『たアに？ これ。』

と、暗くかぶさつたおかッぱの蔭でおイと僕を見たが、突然爆發する樣な笑ひ聲を立てて湯をはねかへして、桃色の長い脚で瀨戸をまたいで、素捷こく浴槽から逃げた――。

風呂からあがると、思ひがけない瑔子が歸つて居た。

『、、這入つてたの？』

彼女は化粧室のレノリウムへマントを落としたまゝ、衣裳簞笥の楕圓形の姿見へ顏をこごめて何か唇の邊を弄つて居たのをよして、僕たちを振向いた。

『のんきね。お客さまでも見えたらどうするの？』

『お客さま來ない！』

、、、、、、、、、、、、、、、、、淳子が、きッぱりと答へたので、ウンと云ふほど瑔子に、鼻の頭を拇指でねぢられて、、、、、、、、、、、ヨロヨロと彼女は僕の方へよろけた。――年にはスクスクと丈の伸びた彼女は、裸で並んで立つと僕の耳くらゐまである。

――マントを殘して化粧室を出て行つた瑔子が、隙ほどドアを開けて、その間からヒラリと白いものを床へはふつたので、拾ひ上げると義母からの封書だつた。

『義母さんから？』

淳子がわきから纖い指でひッたくッた。

『上手ねこの上は書。……』

『僕のシャツもう汗くさいなア。別のある？』

『洗ッたげるから脱いどくといゝわ。』

さう云つて、彼女は封筒を僕の裸の肩へ載せた。

『お讀みなさい。』

『……。

『いらないの？』

『いらない。』

『親不孝ね、あんた。……』

『あたし開けて、ぢや讀んだげる。い〻？』

『それよか、、、、、、、、、、また風邪を引くよ。くしやみが出るぢやないか。……』

が、彼女は纖い指でピリリと封筒のはしを破いて、中から華奢に疊んだ眞ッ赤な唐紙の便箋を引拔いた。しやれたフランスの香料の匂がする。――琛子と同い年の若い僕の義母は、義理の息子への手紙にいつも戀文の樣な文句を綴つて來るのだ。こんなに自分は愛してるのになぜあなたは懷つてくれないんだらうと云つた工合に。糞喰らへ！僕に對する父さんの感情が今みたいに變つちまつたのは、何よりも義母のせゐぢやないか！

誰が家へなんぞ二度と歸るもンか。僕はこ〻でちやんと幸福で居ますよ！

『およし、そんなの讀むの。』

『U・ちやんてあるわよ。よくて？』

さう云つて、彼女は猿股のお尻を木椅子へ沈めると、便箋を擴げて、最初はふざけた口調で小學生徒の樣に五六行朗讀しかけたが、ふと、だしぬけに默讀に移つた。さうして、だまつて今度は頁を繰つて行つた。

『何だい。だまッちまつちやわかんないぢやないか。』

『ちよいとこれ何て字？』

『どれ？……塒さ。』

『塒ッて？』

『塒ッて鳥の寢床。鳥の巣のことさ。』

變に足首の邊をムヅムヅさせて、小蟻が一匹マントの中から匐ひ上がつて來た。多分晝間溫室からマントへたかつて來たんだらう。僕は髭を痛めない樣に指で蟻をつまんで、化粧簞笥の硝子の上へそッと放してみた。小蟻は硝子の面に脚を滑らしながらロオションや白粉の化粧瓶の間をマゴマゴと歩きはじめた。

『あんたの義母さんてい〻義母さんね。』

なに、なまいきな！

『い〻義母さんだよ。』

『なぜ義母さんとこへあんた歸らないの？ 義母さん厭やなの？』

僕は化粧瓶の間をアチコチと歩き惑つてる小蟻を眺めながら、腹でつぶやいた。

（この蟻はどこへ行く氣なんだらう。今夜はどこへ一體泊るんだらう。）

『さ、見てもいゝわよ。……御覧なさい。』
眞ツ赤な香水くさい便箋を、そツと淳子は僕の肩へ載せた。僕の眼はしかしそれには無關心に、硝子棚の上に小蟻の行方を追つて居た。
（東京のはしからはじへこんなに運ばれて來て、一匹ぼつちでこんなとこへうツちやられたなんて、まさか氣がつかないだらう）。
『讀みなさいツたら！』
また彼女が紙片を押付けたので、僕はそれを取上げて、讀む代りに指が動くだけこまかくそれを引きちぎつて、クシヤクシヤに押し揉んで、吹雪の様にレノリウムへそれを散らしてしまつた。
茶の間の方から璨子の聲がきこえて來た。
『淳ちやん！　いつまでそんなところで何してんの？　御飯よ、早くいらツしやい。……U・ちやんも。』

四

僕は少しばかりこの頃になつてまた、學校に興味を持ちかけて居た。家を出てから暫く、半分ごろつきみたいな社會主義者の友だちんとこへ轉げ込んで、いツぱしわかつた様な理窟をこね合つたり、自由勞働者の仲間入りをして慣れない筋肉勞働をしたりなどして、一時全く僕は學校をうツちやつたツつて形になつて居た。
繼母の父の病院で婦人科の助手をしてゐた水無瀬さんが、本牧で璨子と識り合つて。――さうして、やがて彼女に、一家を持たせたりしたので、そんな機會から僕は彼女を通して彼女たち姉妹と親しくなつた。その後水無瀬さんが思ひがけない急行列車の衝突事件で死んでから、別にこれと云ふ理由もなく、暫く僕たちの關係は途切れて居た。
若い義母を迎へてまるで空氣の變つてしまつた家庭をいとつて、僕が家を飛出したのは、丁度去年の今時分で、このお正月に偶然街で璨子とめぐり會つて、云はれるままに目白の彼女の新居へ身を寄せる様になるまで半歳、僕はうろつき犬の様に巷をさまよつて居たのだつた。
彼女の家庭に落ちついて、學校へまた通ふ様になつてからは、生活にも思想にも少しづつ僕は、家庭の子であるもとの僕自身を取戻しつつあつた。さうして、以前の街の友だちなどとも色々思想上の喰ひ違ひが出來て、時折誘はれる集會なんぞへも、自然脚を遠のける様になつた。僕は僕の現在に段々純粹な魅力を感じはじめて居たのだ。
『うちのソシヤリストがね。』
そんな風に僕を呼び呼びして居た璨子が、この頃では僕を、
『うちの科學者がね。』
と云ふ様になつた。
僕はソシヤリストであるにしても、ともかく科學者でありたかつた

から。—

　夕御飯の後、淳子に頼まれて、僕は鯛の寫生に水繪具を赤く塗つてやつて居た。彼女は昨日一日かゝつて、展覽會に出すのだと云ふ鯛の寫生を描き上げて、——臺所のガス焜爐へかざしてせツかちに濡れたとこを乾かしてるうちに、うツかりお腹の邊を焦がしちやつて、昨夜は二時間もすねくれてべそをかいて居たのだ。お腹ばかりでなく、ついでに頭も尻ツ尾もよく焦がしたらどうだいとひやかしたら、到頭彼女に泣きつかれて、僕は代作をねだられちやつたんだが、どうやら描き上げてみると、彼女のよりかまづくつて、これではどうしたつて鯛ぢやなくつて平目だ。

『U・ちやん下手ね！』

　姉さんとこへ持つて行つて早速惡口だ。

『あたいのがよツぽどうまいわ。』

『なら、あんたお描きなさいな。』

『いゝわよこれだつて。』

　さうして、彼女はつくづくと自分でそれを眺めて、

『生きてる鯛に、でも見える？』

『だつて、生きてる鯛を描いたんぢやないんぢやないの？』

『そりア、……でも鯛には見える？　U・ちやんは平目みたいだつて！』

『ぢや平目ぢやない鯛だつてわきへ斷り書しときアいゝわ。』

『さう、ね。』

あれだ！　描いてやつてかへつてこツちの面目が丸潰れだ。

　淳子は璨子の職業の種類を大體感付いて居る。表向きは蒲田のS・映畫會社の臨時雇ツてことになつてるんだが、そこの映畫のキャストには一遍だつて彼女の名は出たことがないし、第一目白へ訪ねて來る仲間ツてのが、さう云つた大會社の社員らしいのは一人も居なくつて、支配人だの撮影監督だのカメラだのつてものものしく名乘つては居るが、みんなごろつき然として、璨子のこともまるで娼婦あつかひだ。

　尤も、淳子にしてみると、本牧に璨子が居た時分から彼女は一緒だつたし、その前にも岐阜の遊廓に勤めて居たすぐ上の死んだ姉と一緒に居たので、から云つた世界の空氣には慣れツこなのだ。それに、——彼女自身「本牧の女」になるのを理想にしてゐるくらゐだから。——たゞ、それはそれとして不思議なのは、この二人ボッチの姉妹の間には、何かしらあたりまへの肉身の情味とは違ふ、冷たいものが流れて居ることだ。表向きはさうでなくても、いゝ、しんぞこが妙に離れ離れだ。僕はよく腹で考へるのだ。僕は自分で家庭ツてものを嘲笑して家

を飛出して來たが、でも、こんなてんでんばらばらな家庭ツて、家庭の意義があるだらうか？　と。僕でももしかこゝに居なかつたら、この姉妹の間を一體何がつなぐんだらう。

『淳ちやんは姉さん一人きりで淋しかないのかい？』

時折僕は何の氣なし彼女に訊くことがある。するど彼女はけろりとした風で僕に答へるのだ。

『淋しかないわよ。』

人生とはよくしたものだ！　天涯孤獨な人間には淋しさを識らせない。——

彼女は璨子と僕との關係についても、どの程度まで突込んだ見方をしてるだらうか？　夜なんぞ時刻が來て『もうおやすみ、淳子』ツて淳子に云はれると、團欒から不意にのけものにされたのを別に不平がりもせず、素直に僕たちを二階に殘して、台所に隣つた茶の間の四疊半へ、自分の寢床をのべに行くのだ。一體彼女は僕たちを、あたりまへの關係に結んで考へてるのだらうか。それにしては僕たちは表立つた不自然さを持ち過ぎて居やしないだらうか。例へば、——年の點だけを取立てたつて、璨子が云ふ樣に僕は、淳子のお相手が丁度なくらゐなんだから！

『あたし何よりもあんたが好きなのは、』

と、時折璨子は僕に云ふのだ。

『性格の底に何かしらか温かいものがあるからなの。お坊ツちやんお坊ツちやんした。……多分、あんた家庭がよかつたからなのね。あたしたち姉妹にはそれが缺けてるの。あたしたち姉妹はお互ひにその温かさに餓ゑて來たの。あんたが淳子に人氣があるのも多分そのせゐね。しじゆう喧嘩ばかりしてるくせにとてもあんたを慕つてるの。……あたしもさう。自分が冷たいせゐか温かい人が好き。冬なんぞ第一湯たんぽの代りになるぢやないの？』

冗談ぢやない。おしまひが惡いや。

とにかく僕は、淳子に慕はれてるにしろ慕はれてないにしろ、彼女が可愛いゝ。僕がもしか彼女から姉さんを奪つたんだとすれば、僕は僕自身を彼女にくれてやつてもいゝ。

彼女は時折僕の耳に唇をくツつけてさゝやくのだ

『あたし、あんた好きよ！』

璨子が「商賣」の都合で家をあけたりする時には、彼女は公然姉に許されて二階へ夜泊りに來る。廣いベットの上を寢間着一重でアチコチはしやぎ廻つて、夜なかまで僕を寢かせなかつたりするのもそんな時だ。——朝起きてみると僕の頬べたが、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。——

どうやら彼女は姉さんよりも逞しい情熱で、人生をのたくつて行くらしい。この上彼女が年をとるのは、僕には危険なくらゐだ！

五

三四日したとある暮れかた、――僕はフイルムを入れた重たいブリキのケエスを三つ風呂敷に包んでかゝへて、璨子のお伴をして新宿のホテルへあるアメリカ人を取引の用件で訪ねた。ガソリン、エンヂンを本國から取次いで居る丸の内のある商事會社の社員で、横濱に自宅があると云ふのだつたが、「取引」の都合上そこで璨子と落ち合ふことにしたのだつた。――上海の友人に依頼されたと云つてフヰルムを三本引受ける約束をして、とうに手金も貰つて居たので、それを屆けかたがた例の「挨拶」を兼ねてだつた。――

『暫く振りで新宿の夜店でもぶらつかない？』

璨子は琴平さんから速達を受け取ると、職業人らしい淡泊さで、化粧室の姿見の前でクリームなどを溶きながら、僕を誘つた。

『おごるわよ、その代り。』

『フヰルムは何本？』

彼女は眞ッ白い指を三本出してみせた。

『手傳つてよ持つてくの。ね？』

『ン。…………』

『歸りに淺草へでも廻つてみるといゝわ。淳子も連れてつて。おごつたげるから。……』

『お姉さん、、、、、？』

淳子が鏡を覗き込むと。

『えゝ。……あんたも着物を着換へるといゝわ。一緒に行くんだつたら。』

『行くわ一緒に。』

さう云つて、彼女はずるげに僕を振向いて、何か意味ありげな眼つきをするのだ。

『ね？』

僕は氣輕に璨子の請ひをいれた。さうして、それを着た方があんたらしくていゝと彼女に批評される天鵞絨のルバシユカに着換へて、彼女たちのお化粧の仕上がるのを待つた。こましやくれた淳子の、姉さんにも劣らない長い長い念入りなお化粧！　おかッぱへナマいきに鏝をあてたり、絲の樣に眉を描いたり、これが見樣見眞似ツて奴で。

――

小半時間の後、僕たちは山手線の時刻の雜閙の中で、魚の樣に三人吊革へさがつて、周圍の視線を浴びて居た。

階へ降りて、夜店の出かけた街路の雑鬧を縫つて、やがて路次を出ると、間もなくホテルの宏壯な擬石コンクリートの一廓へかゝる。帳場へちよいと顏を出すと、もの慣れた風で璨子は、さッさと先に柔らかいフエルトの草履を、埃ッぽい階段に躡へすのだつた。

灰ッぽいたそがれの街路を見おろした小部屋で、ちよいとの間僕たちは待たされて、それから連れ立つて主人公の居間へ導かれた。冬のまゝの窓掛を厚ぼつたくおろした二階の一室で、僕たちは簡單に品物と紙幣との受け渡しをすました。

僕は皮の紙幣入れを上衣の内ポケットへ突ッ込んで、——淳子の華奢な友禪の肩へ指を載せたまゝ、

(ぢやア?)

と云ふ眼で璨子の顏を見た。

彼女はひと眼で職業の種類がわかる樣な、あくどいけばけばしい粧ひをしてゐた。断髮の捲毛を頰に渦巻かして、睫毛のぐるりには暗くまをぼかし、脣を大きくくッきりと紅でなどつて、頤のきはへ念入に入黒子まで入れた。肩に一輪豆大な百合の花を咲かした、水色と黒の恐しい大柄な友禪の裾を、長目に柔らかく踵へもつらして、幅の廣い腰の邊がキリリと卷いた帶の下で、何か露骨な表情を見せてゐた。

彼女は支那扇を擴げたりすぼめり弄びながら、

『いゝわ、ぢや歸つて。』

と、變に不快な、——職業人らしい眼をしてみせた。

M・M・氏(外人の名だ)はモンゴリヤンの樣に頰骨の張つた、頤の四角い、幾らか醉つてゞも居るのかいい血色の顏をして居た。彼は乳ぐらゐまでしか丈のない璨子を、滿足げな意色の眼でちよつと見おろして、高ぶつた曖昧な會釋を僕にくれると——咖へた葉卷のはしへ、滑らかな手つきでライタアの焰を移して、何か露骨な觀賞的な眼で今度は淳子を眺め、機嫌のいい微笑をちよいと口端に見せた。

僕が、

『ぢや失敬します。』

と、輕く頸をこゞめると、

『ゴメンナシヤイ!』

と、男は突ッ立つたまゝ、ぶつきら棒に、——幾らか侮蔑的に云つて、空間を煙で濁した。

淳子と連れ立つてドアを閉めかけて、何氣なしもう一度部屋へ眼をやつた僕は、大きな男のからだへ凭れる樣に身を寄せて、甘へた眼で(それは僕に對してではなかつた。)僕をそこから見送つて居る璨子と顏を見合はして、ふッと何だか見たことのある夢の場面を思ひ出し

た。——

『さ、お降り。……』

階段を一段降りてそこへ立ちどまつた淳子が、ちよいと僕を見上げて、描き眉の間にわざとらしい小皺を寄せて妙に祕密ッぽく笑つたので、僕は彼女の華奢な肩を邪慳について、さッさと先に彼女を促し立てた。

『淺草へ行く？』

中繼段のとこへ足をとめて、また彼女は僕を振返つた。

『うん。……』

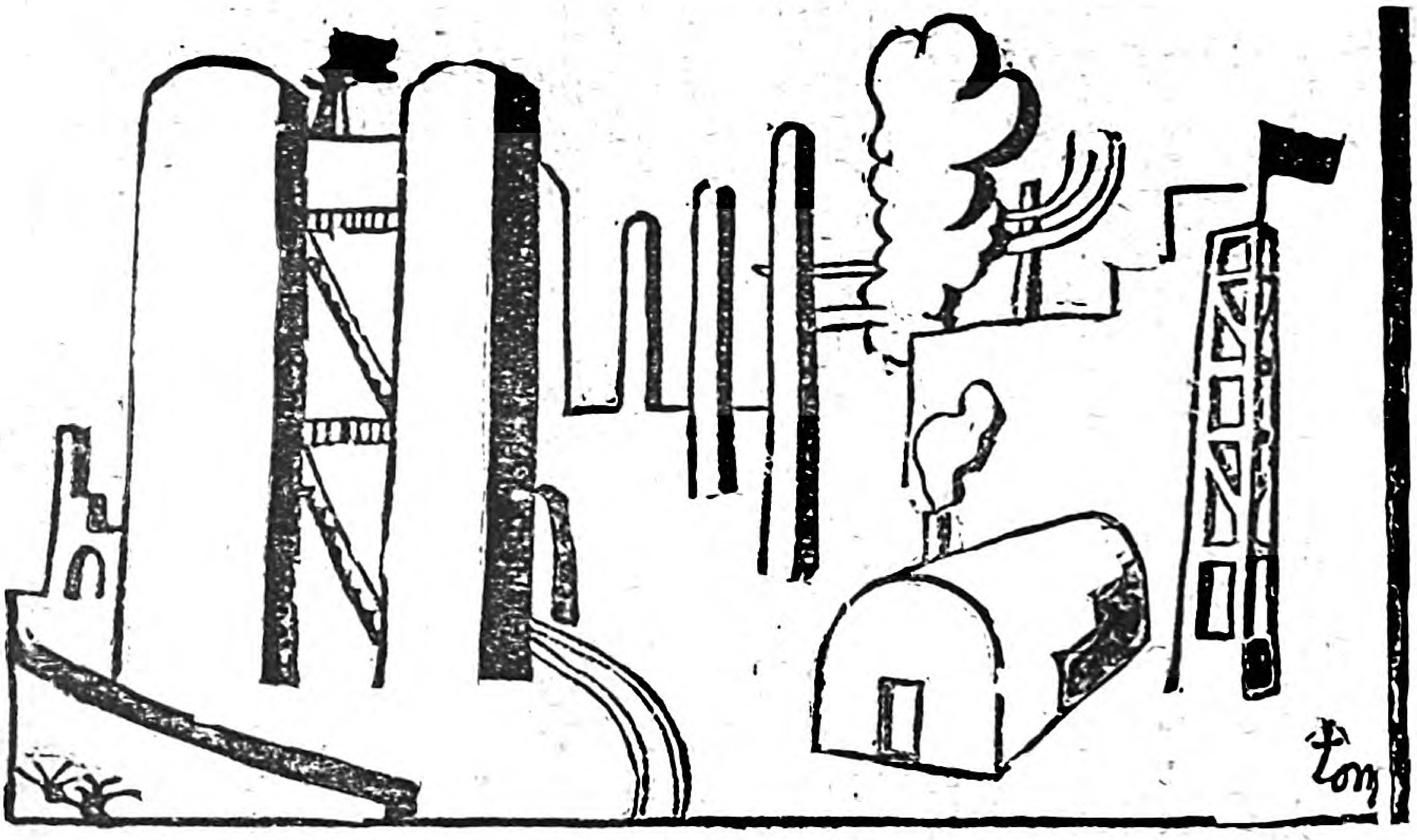
『お姉さん、、、、、、、？』

『うん。』

——彼女の纖い冷たい指が鉢のとこで、妙に粘々と柔らかく僕の指にからんだ。

古びた木の勾欄が艶々と僕たちの前に光つて居た。高い窓から落ちるたそがれの空の光が、變に憂欝に僕たちの上に降りそゝいで居た。ごみッぽい都會の騷音が壁から壁へと反響して、更に洞穴の様な暗い底から湧上がつて、重くるしく空間を充たして居た。僕たちは木の勾欄へ身を凭らしたまゝ、ノロノロした足どりで鍵形の階段を降りて行つた。妙に二人とも離れ離れの氣持で。

路次へ這入つて來たオウトバイが、けたたましい爆音で窓の外を叩いて、忽ち遠くたそがれの街を驅け拔けて行つた。



工場細胞

小林多喜二

20

ビラは深い用意から、女工の手によつて工場に持ち込まれた。夜業準備のために、女工たちの歸へりが遲くなつたとき、「脱衣室」の上衣に一枚々々つッこまれた。十人近くの女工がそのために手早く立ち働いた。

朝、森本が工場の入口で「タイム・レコーダー」を押してゐると、パンパン帽をかぶつた仕上場の職長が、

――大變だぜ！

と云つた。

――大變なビラだ。「ニュース」と同じ系統だ。

――へえ。

――今度は全部配られてるんだ。何處から入るんかな。こゝの工場も小生意氣になつたもんだ。

職長は鶴見あたりの工場から流れて來た「渡り職工」だつた。皆を「田舍職工」に何が分る、と鼻あしらひしてゐた。ストライキになつたら、專務より先きに、こ

の職長を、、、、、、、、、、、、、、、、、してやるんだ、と仕上場では云つてゐた。——「フン、今に見ろ！」森本は心の中でニツと笑つた。

工場の中は、いよく＼朝刊に出た金菱の態度と、ビラの記事でザワついてゐた。一足ふみ入れて、それを感じとると、森本はしめたと思つた。仕事の始まる少し前の時間を、皆は機械のそばに一かたまり、一かたまりに寄つて、ビラのことをしやべつてゐる。

——かうなつたら、これが矢張り第一の問題さ。

森本は集りの輪の外へとんでくるそんな言葉をつかんだ。

製罐部に顔を出すと、トツプ・ラインにゐたお君が、素早く見付けて、こつちへ歩いてきた。何氣ない様子で、

——大丈夫よ。委員會は選擧制にするのが理窟だつて云つてるわ。あんたの方の親爺、あの禿の頑固！　あいつ奴だけが皆からビラをふんだくつて歩いてるのよ。

それだけ云つて、男のやうに走つて行つた。

アナアキストの武林が罐縁曲機に油を差してゐた。ひよいと上眼に見て、

——お前だな。

と云つた。

——何んだ、皆かうやつて興奮してゐるのに、お前だけ工場長にでもなつたやうに、ツウーンとしてるんだな。

森本はギヨツとして、キツ先を外した。

——指導精神が違ひますだ。

——さうか。自分だけは喰はなくてもいゝツて指導精神か。結構だな。

——そ。正にさう。

森本は製罐部で見て置かなければならなかつたのは、肉親關係をお互ひ持つてゐる職工たちの動きだつた。それはお君や、この方の××にも殊更に注意して置いた。然しまだそれは見えてゐなかつた。

たゞ心配なことは、工場全體の動きを早くも見てとつて、工場長が「H・S」全體に利害を持つことだからと、「工場大會」か何かの形で「先手」を打つて來ないか、といふことだつた。——工場内の動きのうちには、ハッキリ分ることだが、自分たちの立場、階級的な氣持からではなくて、矢張り其處には「會社全體の大問題」だといふ興奮のあることを見逃がすことが出來なかつた。乘ぜられ易い機微を、彼はそこに感じた。

鑄物場では車輪の砂型をとつてある側に、三四人立ち固まつてゐた。木型の大工も交つてゐた。すぐ下がつてくる水鼻を何度も何度も

すゝり上げてゐた。

——誰か思ひきつて、グイと先頭に立つものが居なかつたら、かういふものは駄目なんだ。

云つてゐるのは増野だつた。——見習工のとき、彼は溶かした鐵のバケツを持つて、熔爐から砂型に走つて行く途中、足元に置き捨てゝあつた木型につまづいて、顔の半分を燒いた。そのあとがひどくカタを殘してゐた。

——各職場から一人か二人づゝ出るんだな。

森本は彼を「××」の候補者にしてゐた。

鑄物場の職工は、どれも顔にヒッちりをこしらへたり、手に繃帶をしてゐた。砂型に鐵を注ぎ込むとき、水分の急激な發散と、それと一緒に起る鐵の火花で、皆やけどをしてゐた。

鍛冶場の耳の遠い北川爺は森本をみると、

——ビラの通りに何んか起るのか。どうしても、かういふ工合にしなけア駄目なもんかなア、森よ！

と云つた。

——さうだよ。さうなれば爺ちやだつて、安心ッてもんだ。

北川爺は耳が遠いので、彼を見ながら、頭をかしげて、あやふやな笑ひ顏を向けた。

打鋲の山上は、

——やるど！

と云つた。彼は××の一人だつた。

——仕上場はどうだい？

腕を少し動かしても、上膊の筋肉がグル、グルッとこぶになつた。堅い身體を持つてゐた。

——それア何んてたつて本場さ。

——本場はよかつた。出し拔かれるなよ。

と笑つた。

——出し拔かれて見たいもんだ。

熟練工のゐる仕上場は「金菱」のことで、直接にさうこたえるわけではなかつたが、製罐部のやうに直ぐ代りを入れることの出來ない強味をもつてゐたし、何より森本を初め「××」の中心がこゝにあつたので、しつかりしてゐた。

ボールバンに白墨で圓を描いてゐた仲間が森本をちらッと見ると、眼が笑つた。白墨の粉のついた手をナッパの尻にぬぐつて、

——「紙」は？

と、訊いた。

——朝すぐ。先手を打つ必要がある。

旋盤や平鑿盤や穿削機についてゐる仲間が、笑ひをニヤ〳〵含んだ顔でこつちを見てゐた。機械に片足をかけて、「金菱政策」を泡をとばして話してゐた。穿削機には昨日から歯を削つてゐた歯車が据ゑつけられたまゝになつてゐた。

大乗盤の側の空所に、註文の歯車やシャフトや鋲付する煙筒や鐵板が積さつてゐた。仕上つた機械の新鮮な赤ペンキの油ッ臭い匂ひが、プン〳〵鼻にきた。

就業のボーが波形の屋根を巾廣くひゞかせた。職長は二人位しか工場に姿を見せてゐない。事務所に行つてるらしかつた。――皆は何時ものやうに、ボーがなつても、直ぐ機械にかゝる氣がしてゐなかつた。

ベルトがヒタ、ヒタ……と動き出すと、聲高にしやべつてゐた人聲が、底からグン〳〵と迫まるやうに高まつてくる音に溺れて行つた。シャフトにベルトをかけると、突然生物になつたやうに、機械は歯車と歯車を噛み合はせ、シリンダアーで風を切つた。一定の間隔に空罐をのせたコンヴエイヤーが、映畫のフイルムのやうに機械と機械の間を辷つて行つた。ブランク臺で大板のブリキをトロッコから移すたびに、その反射がキラッ、キラッと、天井と壁と機械の横顔を刃物より鋭く射つた。トップ・ラインの女工たちが、髷を揃へたり、數へたりしたから何か歌つてゐる聲が、どうかした機械の轟音のひけ間を聞えた。――天井の鐵梁が機械の力に抗えて、見えない程揺れた。

――あのニュースとかッて奴は×××の××をしてるんだろ、な。

職長が兩手を後にまはしながら、機械の間を歩いてゐた。

――さア。

きかれた職工は無愛想につッぱねた。が、フト、ぎよッとした。――それは××の一人だつた。「H・Sニュース」に漫畫が多かつたりすると、彼はよく糊付けにぺつたり機械へはつたりした。

――後にはキット××××がゐるんだ。どうもさうだ。

――然しあんなものが×××なら、×××ッてものも極く×××のことしか云はないもんだね。

――だから恐ろしいんだよ。

彼は笑つてしまつた。

――だから何んでもないッて云ふのが本當でせうや。

仕事が始まつてから二十分もした。――働いてゐた職工が後から背を小突かれた。

――何ツ處かから廻つてきた。

紙ッ切れをポケットの中にソッと入れられた。いゝことには職長が二人位しかゐないことだつた。

は何が起つたか、と思つた。その「渡り職」の後を一齊に右向けをしたやうに見た。

——おいッ！

大きな手が齋藤の肩をつかんだ。然し振返つた齋藤は落付いてゐた。

——何んですか？

ゆつくり云ひながら、片手は素早くポケットの紙片をもみくしやにして、靴の底で踏みにぢつてゐた。

——あ、あッ、あッ、その紙だ！

職長がせきこんだ。

——紙？

砂地の床は水でしめつてゐた。齋藤は靴の先きで、紙片をいぢりながら、

——どうしたんです？

——どうした？ 太え野郎だ。

然しそれ以上職長にはどうにも出來なかつた。「うらめし」さうに、踏みにぢられた紙片を見ながら、

——この野郎、とう〳〵誤魔化しやがつた！ 畜生め！

と云つた。

> 「工場委員會」の選擧制協議のため時間後一人殘らず食堂へ集合の事。危機は迫つてゐる。團結の力を以つて我等を守らう。

——次へ廻はしてやるんださうだ。變な奴には廻はさないさうだど。

——ホー！ 矢張りな。

同じ時に、それと同じ紙片が「仕上場」にも、「鑄物場」にも、「ボデイ・ライン」にも、「トップ・ライン」にも、「漆塗工場」にも、「釘付工場」にも、「函詰部」にも同じ方法で廻つてゐた。——

職長たちが話しながら、ゾロ〳〵事務所から歸つてきた。機械についてゐた職長がそれを見ると、周章てゝ走つて行つた。彼は工場の隅で立話を初めた。職工たちは仕事をしながら、それを横目でにらんだ。

仕上場の見張りの硝子戸の中から、「グレエン」職長が周章てゝ飛び出してきた。——金剛砥に金物をあてゝゐた齋藤が、その直ぐ横の旋盤についてゐた職工から、何か紙片を受取つて、それをポケットに入れた。それをひよッと見たからだつた。神經が尖がつてゐた。——皆

機械から手を離して見てゐた職工たちは、ざま見やがれ、と思つた。

——グレエンに吊されるのも、もう少しだぞ。

職長は目論見外れから工合惡さうに、肩を振つて歸つて行つた。職工たちの眼はそれを四方から思ふ存分嘲けつた。

——パーカーヤーロー。

ステキ盤でシヤフトに軌道をほつてゐた仲間が、口を掌で圍んで、後から惡戯した。皆がドツと笑つた。職長がくるりと振りかへつて、職場を見廻はした。急に皆が眞面目な顏をして、機械をいぢる眞似をした。我慢が出來なくて、誰か隅の方で、ブウツと吹き出してしまつた。

——いま〱しい奴だ！

硝子戸を亂暴に開けて、中へ入つた。

——自分の首でも氣をつけろ、馬鹿！

晝休みには、森本と重な仲間が四人同じ所に坐つて、もう一度綿密に考へを練つた。

——女の方はどうかな。

——戰術としてもな。ハヽヽヽヽ。

——さうだよ。

お君は餘程離れた向う隅で、仲間に何か一生懸命しやべつてゐるのが見えた。顏全部を自由に、大げさに動かしながら、口一杯でものを云つてゐる。お君がそこにすつかり出てゐた。——森本はその女に自分の氣持をチツトモ云へないことを、フト淋しく思つた。飯が終る頃、お君が食器を持つたまゝ、皆のゐる所を通つた。

——どうだ？

——四分の一位。別に反對の人はないのよ。それでも女は一度も出つけないでせう。

——うん。

——でも、我ん張つてみる。

——頼む。

——森さん、今日は「首」を投げてやつてよ。首になつたら、皆で養つてあげるから。

お君は明るく笑つて、スタンドへ行つた。

——それから「偉い方」はどうかな。

と森本が仲間にきいた。

——事務所ではまだ勿論「工場大會」のことには氣付いてはゐないんだが、對策はやつてるだらう。——給仕が云つてた。自動車で專務がやつてきたつて。工場長が電話で呼んだらしい。ところが、專務は

気もでんぐり返へして、馳け廻つてるんだ。まだ〳〵工場どころでならしいんだ。——こゝは俺達のつけ目さ。

脱衣場は集合場になる「食堂」と隣り合つて、二階になつてゐる。そして降り口は一つしかなかつた。——で、歸るのにはどうしても二階に行つて、食堂を通り、服を着かへて、その階段を又降りて來なければならない。それが偶然にも森本たちにこの上もない有利な條件を與へた。食堂の會合に出なければ、どうしても歸ることが出來ないやうになつてゐた。——普段から職工仲間に信用のある「××」を階段の降り口に立たせて置いて、職工を引きとめた。

不賛成な職工や女工はしばらく下の工場で、機械のそばや隅の方を文句を云ひながら、ブラ〳〵してゐた。歸るにも歸れなかつたのだ。年老つた職工や女房のゐるのが多かつた。女工たちは所々に一かたまりになつて、たゞ立つてゐた。女の方は別な理由はなかつた。何んだか工合わるく、それに生意氣に感じて躊躇してゐるらしかつた。

——ストライキの相談ぢやないんだよ。委員を選擧にして下さい、これだけの事なんだよ。

森本がそれを云つて歩くと、それだけの事なら、もつと穩やかな話し様もあるんでないか、と云つた。

——何處にか穩やかでない處でもあるかな。會社と一喧嘩をするわけでもないし、お願ひなんだ。

女工はお君やお芳に説かれると、五六人が身體を打ツつけ合ふやうに一固りにして、階段を上がつた。

職長たちは事が起ると見ると、事務所の方へひき上げてゐたので、一人も邪魔にならなかつた。

食堂には思ひがけず、三分の二以上もの職工が押しつまつた。然しその殆んどが、「會社存亡の問題」といふ考へから集まつてゐた。それは誤算をすると、飛んでもないことだつた。さうでなかつたら、このフォードの職工がこれだけ集まる筈がなかつた。然しそれをすかさず捉へて、強力な××を使つて、その方向を引き寄せて來なければならなかつた。——

その時、薄暗い工場の中を影が突ツきつて來た。工場の要所々々に立てゝ置いた見張だつた。

——森君、佐伯あいつ等が盛んに何んか材料倉庫で相談してるよ。それも柔道着一枚で！

——佐伯!?

森本の顔がサッと變つた。——暴力で打ツ壞しに來る！ それが森本の頭に來た。彼はそんなことになれてゐたかつた。

――よし、ぢや仕上場の若手にこゝに立つてゝ貰はう。――そして愚図々々しないで始めることだ！

森本は階段を上つた。五百人近くの職工のこもつたどよめきが、足踏みや椅子をぢらす音と一しよになり、重い壓力のやうに押しかぶさつて來た。手筈をきめて置いた激勵の演説がそれを太くつらぬいた。離れてゐると、その一つ一つの言葉が餘韻を引きずるやうに、ハツキリ職工たちをとらへてゐる潮鳴りに似た群集の勢ひが――どよめきが分つた。それによつて、何より會社主義で集つてゐる職工たちを、その演説で引きづり込まなければならないのだ。――彼は嘗つて覺えたことのない血の激しい流れを感じた。これからやつてのけなければならない大きな任務を考へると、彼はガタ〳〵と身體がふるえ出した。グイと後首筋に力を入れ、顎をひいてもとまらなかつた。彼は内心あやふやな恐怖さへ感じてゐた。こんな時に、河田が側にゐてくれたら、たゞゐてだけくれても、彼は押し強くやれるのだが、と思つた。

知つた顔が振り返つて、笑つた。――しつかりやつてくれ、笑顔がさう云つてゐた。

食堂の中はスチイムの熱氣と人いきれで、ムンとむれ返つてゐた。油臭いナツパ服が肩と肩、顔と顔をならべ、腰をかけたり、立つたり――それが或ひは腕を胸に組み、頰杖をし、演説するものをにらんでゐた。彼等はそして自分たちでも知らずに、職場別に一かたまりづゝ固まつてゐた。アナアキストの武林の仲間は、一番後に不貞腐された圖太い恰好で、板壁に倚りかゝつてゐた。

左寄りの女工たちは、皆の視線を受けてゐることを意識して、ぎこちなく水たまりのやうに固まつてゐた。今迄の會社のどんな「集會」にも、女工だけは除外してゐた。女たちは今、その初めてのことゝ、自分たちの引き上げられた地位に興奮してゐた。――

壇には鑄物場の杉野が立つてゐた。「俺は何故顔の半分が鬼になつたか」彼はそのことをしやべつてゐた。身體を振つて、ものを云ふ度に、赤くたゞれた顔がそのまゝ「鬼」になつて、歪んだ。――初め、みんなの中に私語が起つた。

――また、ひでえ顔をしてるもんだな！

時々小さい笑ひ聲が交つた。然しそれ等がグイ〳〵と杉野の熱に抑へられて行つた。

――我々はこれだけの危險を「毎日の仕事」に賭けてゐる。こんな顔になつて、諸君は笑ふだらう。だが、可哀相な僕は顔だけでよかつたと思つてゐる。一日二圓にもならない金で、我々は「命」さへも安々と賭けなければならない。ブリキ罐をいぢつてゐる製罐部の諸君に、私は何人指のない人間がゐるかを知つてゐる。――指の無い人間！

それが製罐工場が日本一だといふことをきいてゐる。で、我々はそんな場合、會社の云ひなりしかどうにも出來ない。何故だ？　我々は我々だけの職工の利益を擁護してくれる機關を持つてゐないからではないか。——

増野はもつと元氣づいて續いた。

——金菱がどうのとか、産業の合理化がどうとか、面倒な理窟は知らない。たゞ我々のうちの半分以上も今首を——首を切られやうとして居り、賃銀は下がり、もつとギユウ、ギユウ働らかされるさうだ。偉い人はもつと〳〵儲けなければならないのださうだ。——

彼はそこで水をのむコップを探がした。

——で……。

水の入つたコップが無かつた。彼はそこで吃つてしまつた。カアツと興奮すると、彼は又同じことを云つた。すると彼は何處までしやべつたか、見當を失つてしまつた。無數の顏が彼の前で、重つて、ゆがんで、揺れた。それが何かを叫んでゐる。彼は仕方がなくなつてしまつた。彼は最後のことだけを怒鳴つた。

——で、工場委員會です。彼奴等の勝手にされてゐた委員會を我々のものにしなければならない。その第一歩として、委員の選擧です。我々は全部結束いたしまして、この目的のために闘爭されんことを、コヒ希ふものであります。——俺、何しやべつたかなア！

お終ひに獨言ともつかない事をくツつけた。それが皆にきこえたので、ドツと笑つた。

——よオツく分つたぞ！

ワザと誰かゞ手をたゝいた。

お君が森本の後に來てゐた。ソツと背を突いた。お君は興奮してゐる時によくある片方の頰だけを眞赤にしてゐた。

——耳……。一寸。

——ん。

——あのね、芳ちやんに出てもらふ事にしたの。

——芳ちやん？

あの「漂泊の孤兒」がかい？　と思つた。何んでもものをズケ〳〵云ふ河田に從ふと、お芳は「漂泊の孤兒」だつた。顏の膚がカサ〳〵と艶がなく、何時でも寒さうな、肩の狹い女だつた。無口であつたが、思慮のあることしか云はなかつた。お君がそばにゐると、日陰になつたやうに、その存在が貧相になつた。

——え、眞面目な人は案外思ひきつたことをするものよ。私でもいいはいゝけれども、私ならそんな事を云ふかも知れない女だつてことが分つてるでせう。だから、さうひどく感動は與へないと思ふの。然

し芳ちゃんなら、へえッ！　つて皆がね。——××効果滿點よ！　無理矢理出さすの。

お君はずるさうに笑つた。しめつた赤い唇が、耳のすぐそばにあつた。

次に誰が出るか、それをみんな待つた。然し人達は意外なものを見た。片隅から出て行つたのは「女」ではないか。皆は急にナリをひそめた。——そして、それがあの「芳ちゃん」であることが分つたとき、抑へられた沈默が、急に跳ねかへつた。ガヤ／＼とやかましくなつた。

——あの女が！！

芳ちゃんは壇の上へ、あやふやな足取りで登ると、仲間の女たちのゐる方へ少し横を向いて、きちんと兩手をさげたまゝ、うつむいて立つた。——顔が蒼白だつた。

——これだけの男の前だぜ。あれで仲々すれッてるんだらう。

横で、ラッカー工場の職工が云つてゐるのを、森本は耳に入れた。

芳ちゃんはそのまゝの恰好で、顔をあげずに云ひ出した。聞きとれないので、皆はしやべることをやめた。耳の後に掌をあてゝ、みんな背延びをした。

——……こゝへ上るのに、どんなに覺悟が要るでせう……私は生意氣かも知れません……でも必死です……誰か矢張り先に立つて生意氣にならなければ、私たちはどうなつて行きますか……。

——あの温しい芳公がな。

一區切れ、一區切れ毎に皆の言葉がはさまつた。

——ねえ、どう？

お君は云つた。

——しつかりしてる。

——私たち皆と仕事をするやうになつてから、自分でも分るほど變つてきたわ。

——……私たちは男からも、會社からも……何時でも特別待遇をうけてきました……

言葉が時々途切れた。

——女がかういふ所に出て、かうやつて話が出來るのは……この工場始まつて以來のことかと思ひます……私たちも一人殘らず一緒になり……お助けして行きたいと思つてゐます。皆さんも、どうぞ……。

芳ちゃんが降りると、ワアーッといふ聲と一緒に、拍手が起つた。それが何時迄も續いた。お君の云つた通り、男工たちに豫想以上の反響を與へた。

——矢張り、少し温し過ぎる。

とお君が云つた。

――芳ちやんにしたら大出來だ。然しよくやつてくれた。聞いてゐると、かう淚が出て來るんだ。

――さうね。

お君は自分の眼をこすつた。

――さ、行つて、賞めてやらないと。

お君は女工たちの方へ走つて行つた。芳ちやんは皆に取り卷かれてゐた。見ると、彼女は堪らえてゐた興奮から、自分でワッ！　と泣き出してしまつてゐた。

――安心出來ないよ。廻つて步くと、こゝに集つてるのは矢張り「會社存亡組」が多いんだ。

仲間の一人が森本に云つた。

――然し一旦かう集つてしまへば、一つの勢ひに捲き込まれて、案外大したことにならないかも知れない。

――然し、俺達も危い機微をつかんで、成功したな。あとはしやり無理、こつちへ引きづることだ。

次に各職場の代表者が一人づつ、壇に上つた。彼等は全部「××」だつた。一人々々が火のやうな言葉を投げつけた。「會社存亡の秋」を名として、全職工を賣らうとしてゐる彼奴等のからくりを、そこで徹底的にさらけ出した。――と、職工たちのなかに、風の當つた叢林のやうな動搖がザワ／＼と起つた。森本はハッとした。然しそれが代る代る立つ容赦のない暴露で、見る／＼別な一つのうねりのやうな動きに押され出した。

電燈がついた。薄暗がりの中に、たゞ灰一色に充滿してゐた職工たちが――その集團が――逞しい肩と肩が、瞬間にクッキリと躍り上つた。誰かゞ、

――そら、電燈がついたぞ！

と云つた。

その意味のない言葉は、然し皆の氣持ちを急にイキ／＼とさせた。

結束はアこの時ぞ。

突然四五人が足踏みをして歌ひ出した。バアーを飲み步いてゐる職工たちは、誰でもその歌位は知つてゐた。それが今少しの無理もなく口をついて出たのだ。皆が一齊にその方を見たので、彼等は少してれたやうに、次の歌が澱んだ。然し、太い揃はない聲が續いた。

卑怯者去らばア去れ。

森本が壇に上つたのは一番後だつた。彼は何も云ふ必要がなかつた。たゞ用意してゐた「決議文」と「要求書」の內容を說明して、皆の承諾を得ればよかつたのだ。これ等のあらゆる細かい處に、河田たちの用意が含まつてゐた。

彼がまだ云ひ終らないうちだつた。激しい云ひ爭ひが下の階段に起つた。——職工たちは一度に腰掛けを蹴つた。一つの勢ひを持つた集團の彼等は、そのまゝ狹い入口に押してゐた。

——邪魔するに入つた奴なら、やツつけッちまへ！

その時、抑へられたやうに、下の爭ひがとまつた。と、見張りの一人が周章てゝ驅け上つてきた。

——佐伯の連中が上がるッて云ふんだ。それで一もみしてるところへ、專務や工場長や職長が來たんだ。どうする？

——よし！

森本はキッパリ云つた。

——專務と工場長だけ上げよう。職長や佐伯の連中は絕對に上げないことだ。

——さうだ。異議なし！

一擧に押し切るか、一擧に押しきられるか、そこへ來てゐる！

工場長が先に立つて、專務が上つてきた。工場長は興奮した唇に力をこめて、キリッとしめてゐた。然し專務の顏には柔和なほゝゑみが浮かんでゐた。職工や代表者たちに丁寧に挨拶した。何時もの溫好な專務だつた。女工と男工の一部が、さすがに動いた。——專務の持つてきた腹を讀んでゐる森本は、先手を打つて出なければならないことを直感した。この動きかけてゐる動き。先手！　これ一つで、この勝負がきまると彼は思つてゐる。專務にたつた一言先きにしやべられることは、この集會をまんまと持つて行かれることを意味してゐた。

——

彼は全職工の前で、ハッキリと、今迄の經過を述べ、一人も殘らない贊成をもつて「工場委員會」の委員選擧制が決議されたことを報告し、「決議文」と「要求書」を提出した。その瞬間、××の先頭で、一齊に拍手がされた。計畫的なことだつた。五百人の拍手が、少し亂れて、それに續いた。森本はハラ〳〵した。然し拍手は天井の低いトタン屋根を、硝子窓をゆるがし、響きかへつた。その餘韻はそれ等の中にゐてたつた一人しか味方を持つてゐない專務の小柄な身體を木ッ葉のやうに頼りなくした。

專務は明かに周章てゝゐた。「要求書」を手にもつた專務は、それを

持つたきゝ自分が今どうすればいゝかを忘れたやうに、あやふやな樣子をした。──實は、彼はこの食堂に入るまで一つの明るい期待を持つてゐたのだつた。自分が今迄長い間職工たちに與へてきた「Yのフォード」としての、過分な溫情はさう安々と崩されるものでない。それを信じてゐた。たとへ、小部分の「忘恩な」煽動者たちに幾分いゝ加減にされてゐても、この自分さへ其處へ姿をあらはせば、職工の全部は「忽ち」自分のもとに雪崩を打つてくるのは分りきつたことだ、と。──然し、それがこんなに慘めになるとは本當だらうか!? そして一齊の拍手! 專務は何よりこの裏切られた自分自身の氣持に打ちのめされてしまつた。それにもつと惡いことには、專務は問題を兩方から受けてゐた。一方には、自分自身の地位について! これは充分に專務を氣弱にさせてゐた。「金融資本家」に完全に牛耳られて、沒落しなければならない「產業資本家」の悲哀が、彼の骨を嚙んでゐた。そればかりか、今年ロシアが蟹工船の漁夫供給問題の復仇として、更にカムチヤツカの優良漁區に侵出してくることは分りきつてゐた。

けれども工場長が口をきつた。──危い、と見てとつたのだ。

──とにかく重大問題で、專務が全部の職工にお話したいことがあるんだから……それは、まづそれとして……。

──おツ! 一寸待つてくれ!

森本の後から、ラッカー工場の××が釘のやうな言葉を投げつけた。

──お、俺だちば、ばかりの力でやつたか、會ば……。それば、それば!

言葉より興奮が咽喉にきた。で、森本が次を取つた。

──そんなわけで……一寸、貴方々の……勝手には……。

彼は專務や工場長に、而も彼等を三尺と離れない前において、いゝのを云ふのは始めてだつた。彼は赤くなつて、何度もドギマギした。普段から、專務の顏さへも碌に見れない隅ッこで、鐵屑のやうに働いてゐる森本だつたのだ。それに顏をつき合はせると、專務は案外な偉嚴を持つてゐた。──だが、さう云はれて、この「鐵屑のやうな」職工に、工場長は言葉をかへせなかつた。

──まづ「確答」だ!

──要求を承諾して貰ふんだ! それからだ!

食堂をうづめてゐる職工のなかから、誰かそれを叫んだ。上長に對して、そんな云ひ方は、この工場としては全くめづらしかつた。かういふ風に一つに集まると、彼は無意識のうちにその力を摑んでゐた。そして彼等は全く別人のやうなことを平氣で云つてのけた。

工場長とそれに森本も同時に眼をみはつた。誰が何時の間に職工をこんな風に育てたのか？

──直ぐこゝでは無理でせう。餘裕を貰はなければなりますまい。

初めて專務は口を開いた。この言葉使ひは「ナッパ服」とゝもに「H・S」の誇りだつたのだ。

──餘裕？　然しこの少しの無理のない決議はこれ以上どうにもならないのですから。

──然し、こつちの……。

森本はくさびを打ち込まなければならない。

──こんな困難な、どんなことになるか分らない時に、その日暮ししか出來ない我々は、せめてこの機關だけを死守しなければならない所へ追ひつめられてゐるわけです。さつきから何人も何人もの職工がこゝの壇へ飛び上つて、この要求が通らなかつたら、全員のストライキに嚙りついても、獲得しなけア駄目だと云つてるのです。我々は勿論ストライキなど望んでるわけではありません……。

ストライキ！「今」この言葉が專務と工場長にこたへない筈がないのだ。カムチヤッカの六千六百萬罐の註文！

──……。

職工たちはなりをひそめた。

森本はもう一つ重要な先手を打たなければならなかつた。

──勿論「金菱」のことでは、專務自身としても色々と一緒に御相談したいこともあることゝ思ひますが……。

專務は急に顏を擧げた。森本は思はずニヤリ！とした。然し彼は無遠慮にその手元へ切り込んだ。

──然しそれがすべて、この要求書が承認され、規約の上にハッキりさうと改正されてからの事にしたら、お互ひに相談が出來ると思はれます。……でなかつたら、私たちの方が全く可哀相です。

──……。

專務はさつきのさつき迄、この「勞働者大會」を自分のために充分利用することを考へてゐた。自分に對する全職工の支持を決議させて、「金菱」が新しく重役を入れることに對して全職工擧つて反對させる。各自が據金して、職工と社員の「上京委員」を編成し、關係筋を歷訪、運動させる。──殊に、今度のことが自分一個人の問題でないことが好都合だつた。その證據には、職工たちでさへ自發的に集會を持つところまで來てゐるではないか。だから、專務は、職長から職工の集會のことを聞いたとき、彼等の周章てゝゐるのとは反對に、かへつてほくそ笑んだのだ。かう意氣が合つて、うまく行くもんでない、と。でなかつたら、專務は直ぐにも警察へ電話をかけるがよかつた。

それをしなかつたではないか。——が、今専務に明かに、職工の自分に對する氣持を飛んでもなく誤算してゐたことに氣付いた。又、こんな形でやつて來られるとは思ひもよらなかつた。誰か後にゐる！　然し「Yのフォード」はかうも脆いものか。勞働者つて不思議なものだ。——してやられたのだ！　そして、もう遲かつた！

——ぢや、二三日中……。

専務は自分でもその惨めな弱々しさに氣付いた。

——二三日中？　然し「金菱」は二三日待つてくれるわけはありません。

——…………。

森本は勝敗を一擧に決してしまはなければならない最後の「詰めの手」をさしてゐるのだ！

——…………。

五百の勞働者の耳は、専務のたつた一つの言葉を待つてゐる。専務の味方をするものも、とんでもない會合に出てしまつたと思ふ職工たちも、こゝへくるともう同じだつた。五百人の勞働者はたつた一つの呼吸しかしてゐなかつた。

——…………。

誰か一番後で、カタッと靴の踵を下した音が聞えた。

——明日の時間後まで……。

波のやうなどよめきが起つたと思つた。次の瞬間には、食堂をうちから跳ね上げるやうな轟音になつて、「萬歲」が叫ばれてゐた。

彼はたゞ、眼に涙を一杯ためて、手をギッシリと胸に握り合せ、彼の方を見つめてゐるお君を、人たちの肩越しにチラリと見たと思つた……。

21

河田がどんなに待つてゐるだらう。あの「二階」で河田は居ても立つても居られないで、待つてゐるだらう。——だが、森本は一體今日のこの素晴しい出來榮えを、どういふ風に、どこから話したらいゝか分らなかつた。お君も同じだつた。

二人は河田に情勢報告をし、専務の返答如何による對策をきめ、すぐ歸つて、仲間の家で開かれる××集會に出なければならなかつた。「二階」に上る前には、必ず二度程家の前を通つて、樣子を見てからにされてゐた。——二人は道の反對側の暗いところを通りながら、二階をみた。電燈はついてゐた。別に人影はなかつた。下の洋品店に、顏見知りのおかみさんが帳場に坐りながら、表を見てゐた。——ひよいと、こつちが分つたらしく、顏が動いたやうだつた。

と、おかみさんは眼の前の煙でも拂ふやうに、手を振つた。それは「駄目々々」といふ合圖らしかつた。

——變だな。

立ち止つてゐることが出來ないので、そのまゝ通り過ぎた。少し行つて、又同じところを戻つた。四圍に注意しなければならなかつた。

——ね、君ちやん、お客さんのふりをして、チリ紙でも買つて來てくれ。

——さうね。變んだ。あすこが分ることなんて絶對にない筈だわ。

お君は小走りに明るい洋品店の中に入つて行つた。森本は少し行つた空地の塀で待つてゐた。——一寸して、お君の店を出てくる姿が見えた。

——どうした？

——大變らしい。

お君は息をきつてゐた。

——おかみさんが聲を出して云へないところを見ると、中に張り込んでるらしいわ。お釣りを寄すとき、私を早く出ろ、早く出ろといふ風に押すのよ。——

惡感が彼の背筋をザアーツ、と走つた。明るかつたら、彼の顔は白ちやけた鈍い土のやうに變つたのを、お君が見たかも知れなかつた。それは專務をとッちめた彼らしくもなかつた。

——フむ、何んだらう。ストライキのことかな。

彼の舌が不覺に粘つた。

——何んにしても、この邊危いわ。

彼等は明るい大通りをよけた。集會のある仲間の家に一寸顔を出した。心配すると思つて、そのことは云はなかつた。二三人來てゐた。皆興奮して、元氣よく燥やいでゐた。——彼は自分の家が氣になつた。そして咽喉がすぐ乾いた。彼は二度も水を飲むために台所へ立つた。

彼は出直してくることにして外へ出た。

——顔色が惡いな。大切な時だから用心してくれ。

仲間が出しなにさう云つた。

お君も一緒だつた。彼は全く何時もの彼らしくなく、何も云はずに、そのまゝ歩いて行つた。

——鈴木さんて變な人。

お君が何か考へてゐたらしく、フトさう云つた。それに何時迄も、默つて歩いてゐるのに堪へられないといふ風だつた。

——あの人變なことを云ふのよ。……お前は河田にも……キッスをさせたんだから、俺にだつていゝだらうツて！　そして酒に醉拂つ

て、眼をすゑてるの。それから、とてもあの人嫌になつた。何か誤解してるらしいの。私に誤解され易いところがあるッて云ふけれどもね。……私ねえ、この仕事をするやうになつてから、もとのやうな無駄なこと、キッパリやめたのよ。第一そんな氣がなくなつたの、不思議よ。それに芳ちやんの想ひこがれてる相手といふのが、河田さんなんですもの。あの人まだ河田さんに云つてないらしいけど……。

彼はハッ！　とした。自分でもをかしい程、ドギまぎした。だが、本當だらうか？　さう云へば、河田が、自分にはどん底の生活をしてゐる可哀相な女がゐる、それが自分のたつた一人の女だ、と話したことがあつた。

——鈴木さんに限らず、男ッて……。

お君がさう云つて、——何時もの癖で、いたづらゝしく、クスッと笑つた。

——あんたゞけはそれでも少ォし別よ……。

——それはね。

森本は自分でも變なハズミから、言葉をすべらした。然し、何んだか、今云はなければ、それがそれッ切りのやうな氣がした。彼は恐ろしく眞面目な、低い聲を出した。

——それはね、君ちやんを本當に……愛してるからさ！

「ま、をかしい！　何云つてるのさ、この男が！」——あの明るい、無遠慮に大きい笑ひ聲が、この我ながら甘ッたるい言葉を吹き飛ばしてしまふだらう。森本は云つてしまつた瞬間、それに氣付いて、カアッと赤くなつた。——が、お君はフイに默つた。二人はそれつきり何も云はないで、撥の惡い氣持のまゝ歩いて行つた。

橋の上へ來たとき、彼が氣付いた。——彼はお君を一寸先きに行つて貰つて、服のポケットを全部調らべた。内ポケットの中から、四つに折つた、折り目がボロ〳〵になつた薄いパンフレットが出た。河田からもらつた、、、なければならないものだつた。彼はそれを充分に細かく幾つにも切つて、河に捨てた。闇の澱んでゐる暗い河の表に、その紙片がクッキリと白く浮かんで、ひら〳〵と落ちて行つた。時間を置いて、何回かにそれを分けた。——さうしてゐるうちに、彼は落着いてくる自分を感じた。

お君は厚いショウ・ウインドウの硝子に身體を寄りかけたまゝ、彼を待つてゐた。彼は矢張り何も云はなかつた。

別れるところへ來て、立ちどまつた時、森本は始めて女の手を握つて云つた。

——元氣を出して、もう一ふんばり、ふんばらう！「Yのフォード」が俺たちの力で、ピタリと止まることもあるんだからな！

お君はうつむいたまゝ、彼の顏を見ないで、——握りかへしてゐた。

森本は家の戸を開けたとき、ハッ！　とした。彼は然し何も見たわけではなかつた。が、それはこんな時に、彼等だけが閃めきのやうに持つ一つの直感だつた。——ガラッと障子が開いた。見なれない背廣が二人そこへ突ッ立つた。——失敗つたと思つた。彼には初めての經驗だつた。——だが、かうなつてしまつた時、彼は不思議に落付きを失つてゐなかつた。

——どなたです？

——フン。

背廣の顏が皮肉にゆがんだ。——

——本署のものだよ。

彼はだまつて上へあがつた。父はまだ歸つてゐないのか、居なかつた。

——まア〳〵、お前!!

母親は顏色をなくして、坐つたきりになつてゐた。待たしてゐた間、この可哀相な母親が背廣にお茶を出したらしく、「南部せんべい」のお盆と湯呑茶碗が二つ竝んでゐた。それを見ると、彼は胸をつかれた。彼は次を云へないでゐる母親に、

——何んでもないんだ。直ぐ歸へるよ。

と云つた。

彼は二人の背廣にポケットといふポケットを全部しらべられた。家の中はすつかり「家宅搜索」をうけて、散らばつてゐた。

土間で靴の紐を結びながら、背のずんぐりした方が、

——こんな所に關係してゐるものがゐようとは思はなかつたよ。

と云つた。

彼はその言葉の中に、當り前でない意味を聞きとつた。彼は河田に云はれたことを守つてゐた。今迄一度だつて、彼等に顏を知られたことがなかつた筈だ。河田でも云つたのだらうか。そんなことは絕對にない。とすれば——。彼は何かあつたんだ、と思つた。

母親は坐つたきりだつた。彼は何か云へば、それッ切り泣けてしまふやうな氣がした。

——行つてくるよ。

彼はそして連れて行かれた……。

初めての臭い留置場は森本を寢らせなかつた。そこは獨房だつた。

彼は澱んだ空氣の中に、背を板壁に寄らせたまゝ坐つてゐた。──色々な考へが、次ぎから、次ぎから頭をかすめて行く。然し不思議に恐怖が來なかつた。たゞ頭だけが冴えてくる一方だつた。

明け方が近かつた。然しまだ明けなかつた。切れ〳〵に、それでもお君のことを夢に見たと思つた。寒かつた。彼は顎を胸に折りこんで、背を圓めた。

コツ、コツ……コツ、コツ、コツ……。

冴えてゐた彼の耳が、何處から來るとも知れないその音を捉へた耳をそばたてると、その時それが途絶えた。彼は息をひそめた。耳がチーンとなつてゐた。もののすべてが凍てついてゐた。

コツ、コツ、コツ……コツ……コツ……。

彼は耳を板壁にあてた。──と、それは隣りからだつた。然し何の音か分らなかつた。彼は反射的に表へ氣を配つた。それから、ソツと拳をあてゝ、低く、こつちから、コツ、コツ、コツと三つほど打ちかへしてみた。──向うの音がとまつた。こんな事をして、だがよかつたらうか、森本はフトぎよつとした。しばらく兩方がだまつた。

コツ、コツ、コツ……。

又向うが打ち出した。が、今度はその打つ場所がちがつてゐた。彼はその方へ寄つて行つた。すると、其處から小さい光の束が洩れてゐた。何處の留置場でもよくあるやうに、前に入れられた何人かによつて、少しづゝ開けられたらしく、そこだけ小さく板がはげて、穴になつてゐた。──いゝことには、そこは表からは奧になつてゐた。彼は思ひきつて、その同じ場所を、コツ、コツ、コツと打つてみた。

低い聲がそこから洩れてきた！

彼はソロ〳〵と身體をずらして穴の丁度、そこへ耳をあてた。

──ダ……。

はつきりしなかつた。何度も耳をあてがへ直した。

──ダレダ……。

「誰だ？」──然し、さういふもの自身が一體誰だらう。彼は口を穴に持つて行つた。

──誰だ？

と、きいた。そして直ぐ耳をあてた。相手はだまつたらしかつた。

が、少オし大きな聲で、
――ダレダ?
と繰りかへした。
アッ！　その聲は河田ではないか！　彼は急に血が騒ぎ出した。表の方へ氣を配つてから、口をあてた。
――河田か?
相手は確かに吃驚したらしかつた。
――ダレダ、
――森！
――モリカ?
相手も分つたのだ。彼は全身の神經を耳に持つて行つた。
――ゲン……
――げん?
――ゲンキカ。
――あ、元氣か。元氣だ。
――………。
何を云つたか、分らなかつた。
――分らない。もう少し大きく！
――コーバ……。
――工場、ん。
――ダイジョウブカ。
――ん、うまく行つた。
――アトハ……。
――後は?
――ドウダ。
――大丈夫だ。
――ヘ………。
――ん?
――ヘコタレルナ。
――ん！
――イッ……。
――何時?
――何時でも。
――イヤ、イッデモ。
――ゲンキで……。
――分つた！
彼は、この不自由に話されてゐるうちにも、何時もの河田を感じた。フウッと胸が熱くなつた。彼はのどをゴクッとならした。

―ダレカ……。

―ん。

―ナカマデ……。

―ん？ 中迄？

彼は一生懸命に耳をあてた。

―イヤ、ナカマ。

―あ、仲間。

―ウ……ラ……。

―う……ら……？

河田の言葉がハッキリしたかつた。が彼はマッ！ と思つた。

―裏切つた？

思はず大きな聲を出した。

―ン。

―本當か？

―ホントウ。

知らないうちに握りしめてゐた彼の掌は、ネトネトと汗ばんでゐた。

―ワカル……。

―ん、分る。

―ハズノナイ……。

―ん？ ん？

―ワカルハズノナイコトマデ……。

―分る筈の……、ん。

―ミンナ……。

―皆。

―ワカッタ。

―……！

―ジケンハ……。

―事件？ ん。

―ジケンハ……。

―ん、分つた。

―××××××！

―矢張り！

―矢張りか、と思つた。彼は胴締めをされたやうな「胸苦しさ」を感じた。

―サイ……。

―ん？

―サイゴマデ……。

——ん。

——ガンバレ。

——分つた！

——アノ……。

その時、彼はギョッとして、身體を跳ね起した。廊下を歩いてくる靴音を聞いたと思つたからだ。

そしてそれは本當に靴音だつた。——何か騒がしい事が、向う端で急に起つたらしかつた。

形式だけの檢束をうけて、留置場の中で特別の待遇をうけて居た鈴木が、この明け方、首を縊つてゐたのを、看守の巡査が發見したのだつた。

＊　＊

次の日、「H・S工場」の勞働者たちは、豫期してゐたやうに「工場委員會」の自主化を獲得した。たとへ、そのなかにはどんな專務の第二段の魂膽が含められてゐるとしても。——然し彼等は、次にくる今度こそは本物の鬪爭にたへるために「足場」を堅固に築いて置かなければならなかつた。森本の後は殘されてゐた。——

初めて二人を結びつけた握手が、別れるためのものだつたことを、お君は思つた。それを考へると、胸が苦しくなつた。——然し彼が歸つてくる迄、自分たちのして置かなければならない仕事をお君は知つてゐた。

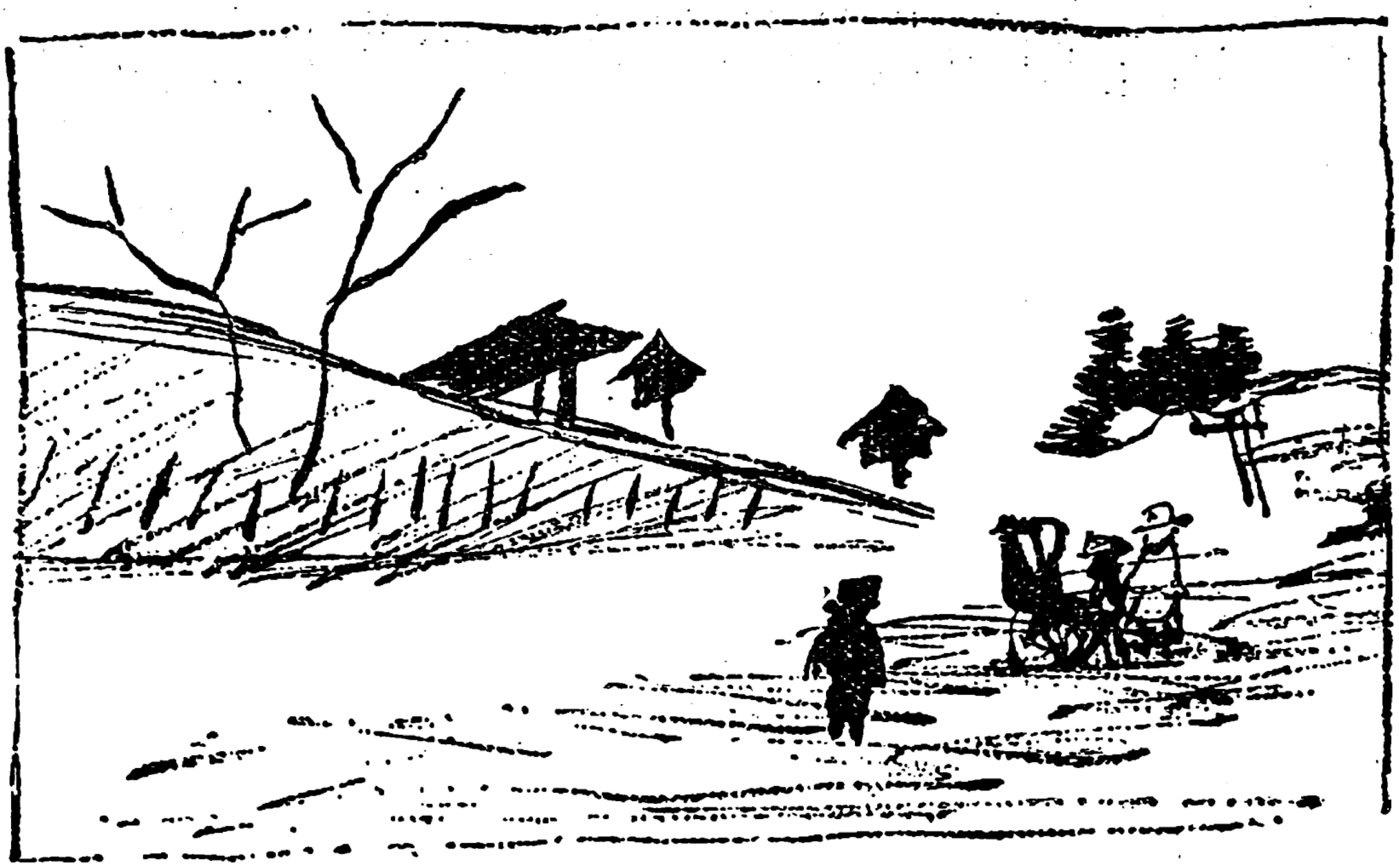
お君は工場の歸り、お芳とそのことを話し合つた。——お芳はそつと眼をぬぐつた。

——泣くんぢやない！　泣いちや駄目！

お君は薄い彼女の肩に手をかけた。お芳は河田のことを考へてゐた。

春が近かつた。——ザラメのやうな雪が、足元でサラッ、サラッとなつた。

（一九三〇・二・二四）



六十の手習ひ

正宗白鳥

アメリカ上陸後間もなく、ロスアンゼルスの市街を、散歩してゐた時、私は、ふと歐洲語教授の看板を見つけた。佛語でも獨語でも何でも、二三週間で一通り話せるやうに教授すると、まことしやかに廣告してあつた。私は心が動いたが、この市には長逗留をする氣がなかつたので、語學など習つてはゐられなかつた。

ところで、ニューヨークに着くと、此處では當分足を留めることになつてゐたので、毎日の課程として、佛蘭西語の稽古でもしようと決心した。歐洲へ渡るのには、佛語の端くれでも嚙つて置いたら多少の便利があるであらうし、ニューヨーク滯在中、朝から晩まで見物して廻る譯ではないから、何か一定した日課を有つてゐる方が、無聊でなくてよからうと考へてゐたのであつた。三十年も前に學校で變則な教授を受けたフランス語は、殆んど全く記憶から消えてゐたので、純粹に新たな言葉を習覺える興味も起つてゐた。

で、ニューヨーク到着の翌日、私はK君に連れられて、ベリツ氏主宰の語學傳習所へ行つて、二十回分の受教券を買つた。ベリツ氏は、歐米各國の大都市に同じ系統の學校

を開いてゐて、その教授振りに特色を放つてゐるのである。

私は、毎朝、西區八十八街の日本宿から、地下鐵道で、三十四街の學校へ通つた。山ノ手から、繁華な下町へ下りて行くのであつた。季節は二月で、寒さは烈しかつたが、初めて見る大都會の光景の珍らしさと、學生時代に若返つたやうな氣持は、私をして毎日の學校を樂しませた。

教師は、すべて佛蘭西人であつたが、日によつて人が變るので、私は、少くも七八人の教師から教へを受けた。老若男女さま〴〵であつたが、どれも貧乏さうだつた。汚い衣服を着て、跛足をひいて來る爺さんもゐたし、ニキビだらけの赭ら顔の、日本の小學校の先生と云つた風の若い女もゐた。ベリッツ式教授法は、絶對に飜譯語の媒介を經ないで、直ちに原語を傳へるのを主義としてゐるので、教室には、ペン、鉛筆、物差鋏など、小さな物品が幾つも備へつけられてゐて、男女鳥獸などを描いた掛圖も幾枚か壁に垂れてゐた。私は、幼年の頃、「糸、犬、錨」などの繪入りの小學讀本によつて、はじめて文字を習覺えたことを思出した。教師は、戸を開けたり、窓を締めたり、私の後へ立つたり、前に立つたりして、その動作を佛語で云現はしなどする。私もその眞似をして復習する。外國にゐればこそ、いゝ年をしてこんな子供じみたことがしてゐられるのだと、たび〳〵可笑しく思つてゐた。

教師は、教室へ入つて來て、椅子に腰をおろすと、まづ、私の差出す受業券を一枚受取つて、ポケットに收める。それから、机上の本を取上げて、"Qu'est ce que c'est?"（これは何ですか）と訊く。"C'est le livre?"（それは本です）と答へる。

上衣だの胴衣だのズボンだのカラアだのネクタイだのといふやうな、服裝に關した幾つもの名前は、手近かな實物教授として、はじめに教へられたが、さういふこま〴〵した服裝の名詞は、着物に興味のない私には覺えられなかつた。「これは何ですか」と、教師が自分の袖口だの、チヨツキだのを抓んで訊くのが煩かつた。

ニキビだらけの女教師は、服裝關係の名詞を、二日も續けて復習させた。女だから、語學教授にでも、服裝のことに興味がつながつてゐるのだなと私は思つた。「あなたは、何を訊いても、le veston と答へる」と云つて、チエッと舌打ちした。

「私は、洋服はこの土地に來て、はじめて着たのですから、衣服に關係した言葉は、英語をも知らない」と、私は英語を用ひて言譯した。

だが、この女教師が、一番キビ〳〵してゐて、教へ方も嚴しかつた。つか〳〵と部屋へ入つて來ると、「ボジユール、ムツシユー」と勢ひよく挨拶するのは、この教師一人であつた。跛足の老人なんかは、

少々發音がまづくつても、「ピアン」〲（結構々々）と褒めてゐた。

この學校の所在地は、大通りから一二丁横に外れてゐた。私は、日課が終ると、大通りへ出て、直ぐそこに聳えてゐるペンシルバニアホテルか、あるひは、大道を隔てて、ホテルと相對してゐるペンシルバニアステーションかへ入つて、一休みするのを例としてゐた。このホテルは宿泊客二千人の收容力を有つてゐて、ニユーヨーク最大の通俗的ホテルとして有名である。他所では見られぬほど人の出入が多い。私は、階上の廻廊か階下のサロンの柔かい椅子に腰を下して、悠然として煙草を吸ひながら、周圍の雜沓を見廻して時を過した。ミスター××と呼んで歩くベルボーイの聲の絶え間がなかつた。そのボーイの聲の外には、人間の聲はハツキリ聞えて來なかつたが、微細ないろいろな物音が一しよになつて、屋内に渦卷いてゐるのが、絶えず私の耳に傳はつた。人間の聲のハツキリ聞えて來ないといふのは、場所柄として、高い聲を出す人のないためであつたが、私に、生きたアメリカ語を聞取る力のないためでもあつた。我々が日本で習つた英米語は、發音振りが武士道的であつた。勿論女の言葉も男の言葉も皆目差別なしに覺えて來たのだ。外國の小説の微妙な言葉の味が分らう筈がない。ロンドンのホテルで、毎朝燕尾服で食事を部屋へ運んで來る若い給仕が、扉を開けると、「グツ、モンニング、サー」と挨拶して、それから、「サンキユー、サー」と、輕く尻上りの調子で云ふのを例としてゐたが、その發音振りは、武士的日本英語調の浸込んでゐる私の耳には、甘つたれていや味に聞かれた。

そのニユーヨークのホテルの近所の床屋へ行くと、そこの親方らしい男が快活に話掛けながら髮を刈つたが、

「お前は英語がうまい。日本人はインテリゼントだとおれは思ふ」

と、お世辭を云つて、「インテリゼントといふ言葉が分るか」と念を押した。

「分る」

數十年英語を學んで來た私も、床屋の親方からこんな質問をされる程度なのだと、私は苦笑した。それはまだいゝが、その脂肪肥りの下衆つぽい男は、

「お前は、ランドリー（洗濯屋）に、奉公してゐるか」と訊ねた。

「ノー」

「ぢや、レストラン（飯屋）に雇はれてゐるか」

「ノー。おれは學問しに來た」

「學問をしに？　感心だ。おれは日本人はインテリゼントだと思ふ。何の學問をするのだ」

「哲學、文學、經濟。その學問をしに、これから歐羅巴へ渡るのだ。

……おれは豐かな學資を持つてゐる」

「さうか。……おれは、君の頭髪を學者らしく奇麗にしてやらう」

さう云つて、彼れは、日本の文明の程度をいろ／＼に訊きながら、私の髪を刈つて髯を剃つて、顏を塗つたり拭いたりして、變な香ひのするもので頭を揉んだ。ところで、仕事が終つて、いざ勘定となると、「四ドル、いくら」と云ふのであつた。私が疑つて訊返すと、紙片に書いて見せた。普通は一ドルなのだが、念入りにあらゆる美容術を試みたのだ。

私は、勘定だけの金を持つてゐなかつたので、押問答の果て、私は、言葉のよく分らない馬を連れて宿へ歸つた。

「あの馬はイタリアンですよ。私は伊太利語ならきつと分りますから、よく話して上げませう」と、宿屋のボーイが云つた。

「いや、何も話す必要はない。拂ふものを拂ふだけのことだから」

それで、私が不足の分を拂ふと、伊太利人は、自分へのチップをせがんだ。

宿のボーイは、「土地馴れない日本人はよくそんな目に會はされる」と笑ひながら、床屋に關する講釋を私に聞かせた。このボーイは、歐洲大戰爭の頃、日本船から脱走して、高い給料で、英國船に雇はれて以來、十幾年の間世界を流浪した男で、さま／＼な經驗を有つてゐた。

「早稻田を出たとか、帝大を出たとか云つてる人が、此處へ來ると、電話一つ掛けられないで、君、代つて話しをして呉れと、私どもに頼むんですからね」と、得意らしい口を利くこともあつたが、しかし變化のある身の上話をしたあとでは、

「日本で私を使つて呉れるところはありますまいか。」と、望郷の思ひを洩らすのを例としてゐた。

「私は、シヽリー島の沖で難船して溺死しかけた時には、母親と一人の姉とに、この世の別れをしたいと思ひましたよ、」彼れは、母や姉から來た手紙は、この頃は肌身離さず持つてゐて、時々寢床の上で讀返してゐると云つてゐた。

「しかし、君も日本へ歸る時には、どつさり金を持つて歸らなき駄目だよ無一文で親兄弟を手頼つちや駄目だ」といふと、

「さうでせうな。來る人／＼が、日本は不景氣だと云ひますからな」と、彼れはしよげてゐた。

床屋の事で私は思出した。……渡米後間もなく、ロスアンゼルスの日本町の床屋へ行つた時に、私の側の椅子には、いやに鼻の高い西洋人が腰掛けてゐたが、職人は、その西洋人の頭にバリカンを當てながら、ふと、大きな聲で、「この野郎、鼻の先に團子をくつつけてやが

る」と云つた。私は、その聲を聞くと、一種のショックを感じた。横目で見ると、その西洋人は馬耳東風で澄ましてゐたが、お客に向つて酷いことを云ふと、私は、その床屋の職人に對して憎惡を覺えたのであつたが、……しかし、米土をあちらこちら旅した後で考へると、床屋の職人が白人の客に對して、そんな惡聲を放つやうな心持になるのはいくらか恕してやつていゝやうに思はれないことはない。

兎に角、團子鼻のあの客のやうに、言葉が分らないために、侮蔑を受けながら超然としてゐられることは、私など、獨逸や伊太利を旅しながら屢々經驗したのであつた。

「いやな奴！……あしこにゐる二人の女は、私たちを支那人かシャム人かと今話合つてるんです」

私達の案内者となつたある日本婦人は、ポンペー行の電車の中で、さう云つて憤慨したが、皆目伊太利語の分らない私などは、傍で何を云つてゐられようとも、知らぬが佛であつた。

敍事が横道へ外れたが、かのペンシルバニアホテルには、五六種の食堂があつて、高價なのも廉價なのも、さまぐ\で、客は自由にどれでも撰ばれた。食事時刻には、何處も立込んでゐたが、地下室の手輕な食事場はことにいつも押合つてゐた。設備の不完全な日本宿に歸つて堅い椅子に倚掛つてゐるよりも、かういふ大ホテルに休息してゐる方が氣持がよかつたが、私は、時としては、このホテルの向ひのペンシルバニア停車場の待合室を、學校歸りの休息所として用ゐることもあつた。この大都會の二大停車場の一つであるのに、ホテルの廣間ほど混雜してゐないのを例としてゐた。身裝の穢るしい勞働者などは、をりをり巡査に追出されてゐたが、私は、晏如として腰を落ちつけてゐられた。乘客の出入りを雲烟過眼視して、佛蘭西語の復習をしたり新聞を買つて讀んだりして時を過した。午餐をも、このステーションの食堂の丈の高いカウンターにちよこなんと乘つて、パンと一皿の料理で、簡單に濟ますこともあつたが、ある日偶然見つけた中央停車場内の蠣料理へも屢々通つた。蠣をあらゆる方面で食べさせるので、こればかりは、我々異邦人の舌でも賞味された。それに價も廉かつた。たゞ、立食で、混合つてゐるので、私のやうな脊の低いものは、押退けられさうで、落着いてゐられなかつた。ペンシルバニア停車場でもさうだが、この中央停車場は、實に巨大であつて、天井が高くつて、見廻してゐると、物質文明の力に威壓されさうであるが、歐洲を見物したあとで考へると、このニューヨークの大停車場も、現代の科學とドルの力とだけによつて出來上つたのではないので、あの圓天井の有つてゐる雅致は、ローマなどに殘つてゐる多くの古代の大寺院の圓天井の藝術味と相呼應してゐるのである。歐洲傳統の妙趣を現代化して

取入れてゐるのである。その傳統とは風馬牛相關しない日本のアメリカ式建築の殺風景なのとは、自から異つてゐる。

私は、三十回ばかり、語學傳習所へ通つた。世界各國の言語教授を標榜してゐるその傳習所には、「日本語」の課目も規則書には出てゐて、教課書も、ガラス戸の本棚に收められてゐたが、修學希望の學生がないためか、實際には教授されてゐなかつた。しかし、私が教へを受けた七八人の教師のうちには、曲りなりに、片假名が書けて、簡單な日本語の使へる青年が一人ゐて、をり／＼得意らしく、「オハヨウゴザイマス」を云つたり、黒板に、片假名で佛蘭西語の發音を書いたりした。この日本臭には私は親しみを覺えないばかりでなく、反感を抱いてゐた。それで、

「わたくし、日本へ行きたいと思ひます」と、覺束ない日本語でこの人が云つた時に、私は、

「行かない方がよろしい。日本は外國人の漫遊に適する國ではない」と、覺束ない英語で答へた。

私は、キビ／＼した、斟酌しない女教師を好んでゐた。稽古に張合ひのある氣がした。しかし、教授方はどうであらうと、私の進歩はのろかつた。記憶力の衰頽、頭腦の硬化が、新しい言語の學修によつて、一層明瞭にされて、老年のみじめさを歎息する時が少くなかつた。新しい世界を見るには、わが頭はあまりに老いてゐる。

ある日、教室を出て階下へ下りようとした時、校長のベリツ氏らしい、日本の内田魯庵氏によく似た顔付の禿頭翁が、私を呼留めて、

「君は怠けずによくやつて來る。大分進歩したであらう」と、親しげに云つた。

「ノー。此處の教授法は甚だいゝのだが、私は外國語を覺えるべくあまりに年を取過ぎてゐるのを悲しんでゐる」と、私は、感慨を洩らした。

「ハヽヽ、君が年を取り過ぎてゐるつて。それはどういふ意味だ。まあそこへ腰を掛けなさい」

彼れは、空いてゐる椅子に私を腰掛けさせて、自分も側の椅子を占めた。そして、間近かにゐた給仕を呼んで、私の日課表を持つて來させた。個人教授を受けてゐる我々學生の教師は一定してゐないので、日々の課程の要目は、表に記錄されて、次ぎから次ぎへ引繼がれてゐるのであつた。校長は眼鏡を出して、その表をざつと見下して、

「これだけ進めば結構だ。悲觀することはない。……私が試驗しよう」と云つて、佛蘭西語でユックリ二三の質問をした。無論私に元氣をつけるための試驗なのだから、私が教室で昨日今日、覺えさゝれてゐる問答の繰返しに過ぎなかつた。「ムッシュー、ベリツは眼鏡を持つ

てゐる。彼れは眼鏡無しには見ることが出來ぬ。汝は眼鏡を要するか」との問ひに對して、「否、私は眼鏡は入らない。眼鏡無しに見ることが出來る」と答へるのが、教室での問答の筋書になつてゐたのだが、私は、この時、「ウイ」と肯定して"Je ne peux pas voir sans lunettes"（眼鏡なしには見ることが出來ぬ）と答へた。そして、相手が怪訝な顔して、「プールコワ？」と聞返す間もなく、私はポケットから眼鏡を出して、「これは老人の用ひる眼鏡である」と英語で説明した。こんな子供のやうに見える小さい男が、そんなに年を取つてゐるのかと疑ふやうに、彼れは私を見下した。

改めて、幾つかの簡單な佛語問答を取りかはして、「なか〳〵發音が正しい。三週間でそれだけ出來れば大進歩だ」と、まことしやかに稱讚した。この校長も商賣上手であつた。

最後の日に、事務所の主任らしい老女の前へ行つて、「私は二三日うちに船に乘つて佛蘭西へ行く。巴里で言葉の稽古をつゞけるつもりだ」と云つて、別れを告げると、老女は、「それは結構だ。……グッドバイ」と云つて私の手を握つた。すると、あたりの若い女事務員が一齊に私の方に目を注いで、元氣よくグッドバイを浴びせかけた。皆んなが、私の巴里行を羨ましがつてゐるのではないかと思ふと、私の心もときめきした。

私達は三月の中頃に、瀟洒たる佛蘭西船に乘つて大西洋を渡つた。乘客の半ばはフランス人で、食堂や甲板や、あるひは音樂室で、生粹のフランス語が頻りに私の耳に觸れた。そして、それ等の會話のはし〴〵がいくらか理解されるのが悦しかつた。一つの新しい國語を知るのは、一つの異なつた新しい世界を知ることであると、その時は、希望をもつてつく〴〵感ぜられた。「折角やりかけたものだから、挫折しないで、もつと稽古を續けよう」と、私は自から勵ました。船中の遊戲のうちで、最も私の心を惹いたのは、ゴルフやピンポンや輪投げや模擬競馬のやうな、若い者の興じてゐる遊戲ではなくつて、老人同士でやつてゐる「フランス双六」であつた。日本の双六に甚だ似通つてゐた。私は毎日側へ椅子を持つて行つて傍觀してゐた。彼等は日本の碁打ちなどと同樣、無駄口を利き〳〵勝負をしてゐたが、屢々私にも仲間入りを勸めた。私は笑つて應じなかつたが、この競技の方法はおのづから分つて來た。ある時、一人の老人は席を他に讓つて双六盤の側を離れて、煙草に火をつけてから、私にも一本取らせて、

「君はいつも熱心に見てゐるが、面白いか」と話しかけた。

「甚だ面白い。單純だからよく分つて面白い」

「ぢや、君もやつたらどうだ」

「私は自分でやるよりも傍觀することによつて、より多くの興味を感

じてゐる」
「そんなことはない。僕は、若い時分から勝負事は何でもやつて來た。しかし、この頃はやれなくなつた。年を取つたせいだ」
そこに、この老人の感慨があるのだらうと察せられたが、言葉の不自由さから、突込んで聞くことは出來なかつた。
船がアーブルに着いて、いよ／＼佛蘭西の領土を通過することになつた。船客のための列車は、粗末で見すぼらしくて、動搖も烈しかつた。しかし、茫漠たる米大陸の風土とは違つて、左右に丘陵が起伏してゐて、早くも若草が萌えてゐて、日本の田舍の初春の光景が思出された。繪のやうな人家の窓から顏を出してゐる女は、車窓から見る遠目では、どれも／＼小說的風情をそなへてゐた。汽車は、モウパッサンに多くの材料を供給したノルマンデイ地方を通つてゐるのである。
巴里近くなつて、最初に目に觸れた物はヱッフヱル塔であつた。ゆるやかに流れてゐる河のシエーヌであることは、おのづから分つた。巴里に着いて最初に身を落付けた所は、ヱーナ街で、シエーヌのほとり、間近くヱッフヱル塔も見える所であつた。其處のホテルは、日本人の定宿であつたが、到着後二三日目に、ふと隣室から洩れて來る音聲に耳を留めてゐると、それは、日本人が佛蘭西語の敎へを受けてゐる聲であつた。
それを知ると、私は早速階下へ下りて、ホテルの番頭に向つて訊ねた。
「僕もフランス語の個人敎授を受けたいのだが、あしこに來てゐる敎師はいゝ敎師なのだらうか」
「あの人はよく日本人に敎へてゐます。ジヤワへ行つてゐた官吏の未亡人です。お望みなら、私が今直ぐにでも御紹介しませう」
「ぢや、紹介して下さい」
私は、隣室の稽古の終るのを待つて、敎師に紹介されたが、敎師は、滿面に微笑を浮べて、私に握手して喜んだ。
「隣室の方は、明日巴里をお立ちになるので、授業も今日が最後なのです。私は學校に勤めてゐますし、二三軒出敎授をしてゐますが、それに差閊えない範圍で、いつでもあなたにお敎へします」
「私も、巴里見物に差閊へない範圍で稽古して頂きたいのです」
そこで、私は時間の打合せをしたり、受業料を訊ねたりした揚句に、私の方から一週に三度敎師の宅へ出掛けることに極めた。敎師は、圖面を書いて、地下鐵道の停留所や、自宅の位置を敎へて呉れた。
「明日あたたのいらつしやる時刻に、女中を、入口に待たせて置きま

すと、教師は歸りがけに云つて、「私どもの家は、古い、お粗末な家なんですよ」と、女らしい言譯をもした。

私は、翌日、約束の時間より少し早目に家を出て、地下鐵道に乘つたが、地理に暗いので、さん〴〵に道を迷つた。やう〳〵、英語の分る女學生の案内で、目差した家へ辿りついて見ると、それは、灰色の汚れた古めかしい建物であつた。出迎への女中はゐなかつたので、入口の側の部屋の戸をノックして訊ねた。

手眞似で教へられた私は、先づ、荒果てた中庭へ出た。二三の樹木はあつたが、長い間手入れもされないらしく薄汚くなつてゐた。半ば壊れた物置小屋には襤褸屑が積まれてゐた。中庭の片隅の薄汚い土間を通ると、階段があつた。私は、足許を用心して、手さぐりで登つた。二階の向つて右の部屋と教へられてゐたが、西洋の二階は日本の三階に當るのであつた。私は、日光も差さず電氣も點いてゐない、危なかしい氣味の惡いやうな廻廊を捜して、この部屋だと思はれる所の戸を叩いた。すると、ノッポの女中が現はれた。私がムニャ〳〵と分らぬ口を利く間もなく、先方はそれと察したらしい目付をして引込んだが、入違ひに女教師がやつて來て「よくいらしつた。さあどうぞこちらへ」と、私の兩手を取らぬばかりにして、汚い廻廊とはちがつた小奇麗な部屋へ通した。

「私は日本人を好む」とか「私は英語が下手だから分りにくいところがあるだらうが、遠慮なく訊直してくれ」とか、「巴里は氣に入つたか」とか、ぺちやくちや喋舌つてから課業をはじめた。

私は一度に二時間ぶつ續けに習ふことに極めた。

この女教師は年齢が四十恰らしく、赭味を帶びた艶々した顔をしてゐた。白粉氣がなく服裝も地味で、いやらしいところがなかつた。ノッポの女中を使つてゐるだけで、外に同居者はなささうだつた。部屋は二つ持つてゐて、入口の方の狹い部屋で、私は教授を受けるのだが、そこには、左右に書物棚があつて、佛蘭西本がギッシリ詰つてゐた。モリエール、ラシーン、コルネーユなどの全集、パスカルの「パンセー」ユーゴーの小說二三、シヤトーブリアンやミユッセの詩集などがあつたが、佛蘭西の教養ある家庭で普通備付けられる書物はこんなものであらうと察せられた。モウパサンやゾラの作品は見當らなかつた。日本人の二三の作品のほかに、日本の人形、團扇などが異國情調を現はしてゐたが、日本がいつまでもかういふもので表象されてゐるのを、私は好まなかつた。ブラッセルの小旅館の客室の小屛風には、櫻の花の下で、武士と藝者の遊んでゐる薄つぺらな繪が描かれてあつた。ロンドンのホテルでは、客間の置時計の臺に、三絃を彈く遊女が寫されてあつた。

私は一週三度の通學を怠らなかつたが、教師がまだ學校から歸つてゐない時には、奥の部屋で待たされた。其處には、瓦斯ストーブがあつた。一人寢のベッドがあつた。テーブルの上には、レターペーパーやインク壺があつた。寢床の側の壁には、彼女の亡夫と覺しき、官吏服を着けた凜々しい男子の肖像が掛つてゐた。

　この女教師の教へ振りは、ニューヨークの學校の先生のそれのやうに、事務的ではなくつて、親切で熱心であつたが、そのかはり、秩序がなくつて、頻りに六ヶしい言葉を教へたがつたりして、初心者にはむしろ不向きなやうに思はれた。私が二時間連續の稽古に倦んで、欠伸を嚙締めたり、風邪心地で咳をしたりすると、教師は女中に命じてお茶を入れさせた。そして、世間話をした。

「あなたはあなたの通つて來たアメリカをどう思ふか」と、宿の番頭をはじめ、二三の佛人の訊いたと同樣の問ひを發した。彼等佛人がいやにアメリカを氣にしてゐることは、私にもよく分つてゐて、「アメリカは、物質的で沒趣味である」と型の如く答へると、彼等は屹度喜ぶのであつた。

「私はアメリカ人は嫌ひです。私は二三人のアメリカ娘にフランス語を教へてゐますが、あの人々は趣味が低いのです」と、教師は云つて「日本人はアメリカ人とはちがつて、非常に美術趣味が發達してゐると思ひます」

「私にはよく分りません。……アメリカがドルの國なら、日本は圓の國、フランスはフランの國だと思ひます」

「しかし、フランスには傑れた美術品が澤山あります。日本にもいゝ繪畫や佛像があるさうぢやありませんか。アメリカには何もないのです」

　佛蘭西人が美術趣味を鼻に掛けてゐることは、巴里到着後、間もなく、私の神經に感應してゐた。ある日、女教師は、春の光の溫かさうに差してゐる窓を開けて、感傷的な口調で、

「以前はこの家のまわりに、いろ〳〵な小鳥が來て鳴いてゐたけれど、この頃は滅多に鳥の聲も聞えなくなつた。美しい花の咲く庭の草木が刈取られて、そこに新らしい殺風景な家が建てられた」と云つて、それをフランス語に飜譯して、紙に書いて、私に教へた。しかし、このあたりの町は閑靜で野趣があつた。

「フランス人は美術的感能が鋭敏であると思はれます」と、私は、女教師の意を迎へて云つて、その例として、モウパッサンが、エッフエル塔を嫌つて、巴里を逃出したことを話すと、

「本當の巴里人は、誰れでもエッフエル塔を嫌つてゐる」と、女教師は、侮蔑を顏にあらはした。そして、ギ・ド・モウパッサンは、この

近くの町に住んでゐて、其處で狂人になつたのだと話したが、それだけのことにも、私は何とも云へぬ興味を覺えたので、窓の方へ目を注いだ。その時、街上から長閑な叫び聲が聞えて來た。

「あの聲は何だか分りますか」と、女教師は私に訊ねた。

「無論分りません。物賣りの聲ですか」

女教師は笑つて、「あれは王黨のプロパガンダです。フランスの政治を、ルイ王家の昔に返へさうと企てゝゐる者もあるのです。さういふ人達は、をり〳〵演說會を開いたり、街上宣傳をしたりしてゐます。大抵は昔の貴族の子孫のやることなのですよ」

「ひどい保守的な政治運動があるんですね」私は巴里ののどかさを想像した。

「巴里には、社會黨でも虛無黨でも、王黨でも、いろ〳〵な主義のものが住んでゐるのです」

さういふ話なら面白いが、ある日、私が稽古机に向つて腰をおろすや否や、女教師はだし拔けに、

「あなたは、日本の grand écrivain (大作家)ださうですね」と云つたので、私は蟲齒の痛みのやうな不快に襲はれた。歐米在住の日本人が、多少でも自分達の肩身をひろくしようとするためか、詰らない政治家や詰らない畫家などを、西洋人の前で大袈裟に吹聽するのを、私はにが〳〵しく思つてゐた。それで、この女教師が、私をグランエクリヴアンとして見るやうになつたと思ふと、私は、こんな子供臭いお稽古に、その日から氣が差してならなかつた。しかも、教師はこの「大作家」にうるさく拘泥して、私にいろ〳〵な問ひを發して、その問答を佛蘭西語に飜譯して、私に覺えさせようとするのだからたまらなかつた。

「グランエクリヴアンは、パンテオンの地下室に葬られてゐる人々や、ルクサンブルの公園などに似顏の像を据ゑられてゐる人々のことを云ふのではありませんか。」と、私が云ふと、

「パンテオンの陰氣な所よりも、ミュツセのやうに風光明媚な土地に葬られた方が詩人らしくてよろしいと思ひます。ミュツセの墓は、此處から數哩隔つた所にあります。我れ死せば、墓の側に楡の木を植ゑよといふ辭世の詩が墓石に刻られてありまして、友人達が植ゑた楡の木も、今は青々と茂つてゐるのです」

女教師はかう云つて、その辭世の詩をすら〳〵と書いて、私に教へた。

私は、日本人を定得意としてゐるエーナ街のホテルの、設備の不完全なのに飽足りなくて、モンパルナスのほとりの閑靜で小綺麗なホテルへ轉居することにして、女教師にもそのことを話すと、

「ホテル住ひよりも、部屋借りをしたらよろしいぢやありませんか。この家の中にも、空室がありますよ。實は私の知人が住んでるのですが、三ヶ月ばかり、ニースの方へ轉地保養に行つてゐますから、その間極く安くお貸してもよろしいんです。部屋を御覽になりませんか」

彼女にかう勸められたので、私は、參考のために、空部屋を見るだけは見ることにした。彼女は、直ちに鍵を出して來て、私の先に立つて、二つばかり階段を登つた。……「何といふ薄汚さだらう」と、米國の完備したアパートを知つてゐる私は、女教師の開けた部屋を一目見るとさう思つた。側へ寄つたら臭氣紛々としてゐさうな色の褪せた寢臺。白つぽく埃を含んだ床の敷物。歪んだ窓框。斑らに煤ぶつた壁。

「ここは大變眺めがよろしい」と、彼女は窓を開けて見せたが、天井裏である高所のこの部屋の眺めのいゝのは當然であつた。

「部屋代は、一ヶ月二百四十フラン（日本の二十餘圓）でいゝんです」

「さうですか。都合でお借りするかも知れません」

私は、あとで可笑しくなつた。所謂「日本の大作家」に周旋するには、あまりに貧弱な貸室ではないか。彼女は、私の榮えない服裝を見て、日本の大作家も、名前ばかりで、物質的には極めて惠まれてゐないと察してゐるのであらうか。あるひは、日本といふ、有るか無きかの小つぽけな國の「グランエクリヴアン」は、花の巴里へ來たなら、せい〳〵このくらゐな部屋に住むのが相應してゐると、眞面に思つてゐるのであらうか。西洋人の日本人に對するお世辭は、底を割つたら、この程度のものなのだらう。

私は、その翌日、豫定のホテルへ轉居した。其處から教師の家までは、餘程の距離があるので、近所の新しい教師につくことにしようかと、迷つたが、それも手續きが面倒だし、かの未亡人に一人の生徒を失はせるのも氣の毒であつたし、やはり、同じ所へ通ふことにした。女教師にそのことを話すと、彼女は非常に喜んで、

「どうか續けて來て下さい。私は日本人が好きです。あなたのやうな方と知合ひになつたことを大變喜んでゐるのです。あなたの發音は質がよろしいから、私も教へ甲斐があるのです。もう二三ヶ月續けていらしつたら、自由に佛蘭西語がお話しになれます」と云つた。しかし「明日から一週間ばかり稽古を休ませて下さい。學校の春休みを利用して、私は、地中海の海岸へ遊びに行くことになりましたから。……私に取つては、一年に一度の樂みなのです」

旅行に出た彼女は、旅先から私に手紙を寄越した。歸つて來ると、早速私に通知して稽古の繼續を促した。

私は定刻をたがへずに行つた。旅行のことを訊ねると、
「オー、地中海の海岸は夢の國である。あの水のほとりに住む人々は、誰れもみな、現實を忘れて、夢を夢見て暮してゐる」と、詩を唄ふやうな目付をして云つた。しかし、私は、世知辛い世の中にそんな所があるものかと、心の中で答へた。
「地中海もいゝでせうが、私は近々伊太利へ行かうと思つてゐます」
「伊太利へは私は三度行つてゐます。また行きたいのですけれど、この頃は、以前とちがつて、旅費が非常に嵩張るやうになつたから、私などは當分出掛ける望みがありません」
彼女は、私の計畫を讀みながら、伊太利の地理書を出して、それを一日の課題として、私に伊太利の名所古蹟の說明をした。
三週間あまり、伊太利に遊んだ私は、巴里に歸ると、また稽古に通つた。暫くして私はまた英吉利の旅に出たが、それを最後に、お稽古通ひはふつつり止めてしまつた。旅先から繪葉書を送つて與れとか、巴里にゐる間は續けて來て與れ、「私は日本人が好きです。あなたのやうな方と知合ひになつたことを喜んでゐます」と、熱心に云はれてゐたのに、私は、一度もたよりをしなかつた。英獨の旅行後、マルセーユ出發まで、一月半も巴里に滯在しながら、教師の宅へは顏を出さなかつた。進步ののろい六十の手習ひに飽いたのである。新しい世界を見極める根氣は缺いでゐた。所謂私の佛蘭西語修業は、他の若い人々の酒場通ひやダンス場通ひと同樣の、旅の憂さ晴らしか、退屈さましに過ぎなかつた。水の泡見たいな修業であつた。
女教師の住所は、地下線で行くなら、Ramelagh といふ停留所で下りて、五分間ばかりで達せられる L' Assamption といふ町の八十一番地である。新たに巴里へ行く日本人で、佛蘭西語を習ひたい方があつたら、其處を訪ねて敎へを乞ひたまへ。なか〳〵親切な教師なのだ。それからそこへ行つたら、私のことを訊ねて見たまへ。「日本のグランエク・リヴアン」でも分るだらうが、それよりも、「御機嫌いかが」と、日常の挨拶言葉をかけると、「Je suis un peu fatigue」（私は少し疲れてゐる）と、答へるのを例とした日本の生徒が來てゐたであらうと訊ねて見るといゝ。
私の心の中では、その言葉は、旅に稍々疲れてゐるといふだけの意味を有つてゐるのではない。私は生存にも疲れてゐる。
「ジュ、スイ、アンプー、ファチゲ」私の一つ覺えの佛蘭西語である。そして、同じ意味を日本語で云ふよりも英語で現はすよりも、いい氣持に思はれるのは、外國語崇拜の日本人氣質の一端を、私も身に具へてゐるためなのであらう。

編輯だより

◇爭議亂發し百萬の失業者巷に滿つ時、三週間に亘る臨時議會は何を決定したか。徒らに軍閥に氣兼ね黨勢擴張に汲々として民衆の要望に背く。民衆の聲を知らざる政治家は遂に亡ぶべし。

◇現内閣は現下の經濟不安と失業問題を解決するために、果して如何なる經綸を有つてゐるか？　十大新聞經濟部長諸氏の忌憚なき論斷はその正體を暴露し、この重大問題の歸趨を明にしてゐる。

◇猪俣氏の論文は金融恐慌以後の日本資本主義の新段階を精密に規定し、美濃部博士は喧しき問題となつてゐる軍部と政府との關係を明確に解釋した。

◇山川氏の論文は前號森戸氏に對する反駁文で問題の論文たるを失はぬ。

◇歐洲に居る中條百合子女史が多角的なロンドン印象記を送つて來た。壹百枚の大篇、新緑六月の絕好讀物。

◇勞資協調の總本山かと見えた鐘紡は突如大動搖を捲起した。『鐘紡王國論』はその正體を完膚なきまでに暴露して餘す所なし。

◇文藝論爭の喧しき時横光氏の文藝時評は注目に値し、松村博士の古人類起原に關する新學說、里見氏の野獸派の畫家等は異色ある顏觸である。大好評の「ドレフュス事件」は大佛氏の骨を削る苦吟のため今月だけ休載。來月號では愈々文豪ゾラが事件に乘り出す。

◇白鳥氏の小說は久方振りにて、岩藤君の「訓令工事」の大作は六月文壇の偉觀で、新人龍膽寺、小林兩君と轡を並べて新鋭無比。

◇本社苦心の編輯に成る「社會科學大辭典」はいよいよ出來した。學問と大衆知識の無盡藏の寶庫であつて、汎ゆる階級の人々が必ず座右に備ふべきものである。これこそは本社の世界に誇るべき偉業である。

◇河上肇氏の不朽の名著「マルクス主義經濟學」が「改造文庫」で出る。價僅に三拾錢。

◇新興文壇の若き作家達の代表作を網羅した「新鋭文學叢書」が出る。新四六判二〇〇頁内外で定價三拾錢。龍膽寺雄、久野豐彥、中村正常、武田麟太郎、藤澤桓夫、立野信之、岩藤雪夫、平林たい子、黑島傳治、中本たか子、林芙美子、岡田禎子、諸氏の顏觸れで、其他續々刊行の豫定。

◇「日本地理大系」の第五回配本は南方情緖豐な「臺灣篇」、初夏に相應しい。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和五年五月十八日　印刷納本
昭和五年六月一日　發行

定價五拾錢（郵税三錢）

編輯兼發行人　東京市芝區愛宕下町四ノ四〇　山本三生
印刷人　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町四ノ四〇　改造社
振替東京　八四〇二
電話芝(43)　一二三一・一二三二・一二三三・一二三四

福田氏を惜む

本誌と淺からざる關係のあつた福田德三氏五月八日午後慶大病院で逝く。まだ學的に成すあるを豫期せられ、そしてその躍々生動の氣質が江戸っ兒に、若き學徒に愛好せられたが、氏の氣魄を以つてしても二竪を克服することは出來なかつた。しかし氏は我國社會思想の展開に一つの大きな役割を遂げた。即ち、大正六七年頃からデモクラシーのために、マルクス學紹介のために、我社會政策を體系づける上に。

然し、經濟學者としてはまだこれからも幾多の貢獻を遂ぐべきものがあつたらふ。本誌には創刊の大正八年から執筆され、常に堂々の論陣を張り論敵河上肇氏と龍虎相搏つの慨があつた。この兩氏の存在は梅、常陸が江東の人氣を沸騰せしめたと同樣で、全國學徒は久しくその雄姿を仰いだのであつた。これから先き、福田氏がどう云ふ傾向に進むであつたらうかについては玆に揣摩するを避ける。而し氏は社會思想に經濟學界に隨分大きな足痕を殘した。氏は私人として尤も愉快な人であつた。談論風發、熱の加はゝると共に鐵拳敢えて辭せず、この方面に於て造話（ざうわ）百態と云つてよい。酒を好み、煙に親しみ、醉へば怪しく踊る。官學にありながらその臭味に染まず、侃々自己の主張に勇敢であつたが、近時漸く學者としての領域に沒頭せんとするの傾きはあつた。再昨年本社の『經濟學全集』のために京、阪、神へ講演の途次、余の仲介により京都柊家にて多年の論敵河上肇氏と握手し、數時間の快談をした。曾つてはバートランド・ラッセルが精鋭の所論を提げて我國に來るや、當局官憲の壓迫甚しかつたが、氏は眉を上げてその態度を難詰したこともある。また藝術を愛好し、芥川龍之介君と輕井澤萬平ホテルに一夕の淸話に耽つたこともあつた。而して相對性原理のアインスタイン博士の來朝するや「經濟學者として原理を攻むるにはその所論を傾聽するの要がある」といつてその講義を一日も缺さず聽講し、そしてア氏と別るるの時、日本藝術を忘れないやうにとて三味線を記念にと送つた。この三味線の行衞についてはいとも奇しき話があるがそれさへ今は話すよすがもない。目に靑葉、五月のすがゝしい天地から爽快君の如きを奪ひ去つたのは惜しい。特に本誌とは情緣の啻ならざるものがあつただけに追惜の情に於て一しほである。（山本）